泡鳴全集

第十八巻

目次

評論と批評

雜纂

公開狀

評論と批評

藝術家の態度

メレジコウスキのトルストイ論を讀んで、その論者に對する評論を書いたが、これは九月の早稻田文學に出して置いた。なほ別に書きたいと思ふことが殘つて居たところへ、直ぐおなじ人の歴史小說『ゼ・フオアランナー』を讀んで、また書きたいことが出來た。僕が得たサジエスションは二つながら詩人藝術などの處世、交際。又は世に對する態度に關することであるから、同じ表題の下に云つて見たいのだが、長くなるので、先づ露國の方から云ひたい。

昔から『先生』と云はれたくないといふことがあるが、僕等は一生『大家』と云はれたくないものである。云はれるのは、まだそれだけの資格があれば、自然にさうなつて來るのだから止むを得ないとしても、自分で大家だと警戒する樣にはなりたくない。人間は弱いものであるから、さうなると、かうしては名を損じる、あゝしては人格を害するといふ樣に、もう、手も足も出せなくなつて、おしまひには自滅をする樣になつてしまう例はいくらもある。だから、僕等は進步の中途にあるといふ考へはいつも持つて居たい。云ひ換へれば、この考の要求する奮勵と客氣（少し語弊はあらうが）と寛容とを失ひたくない。これがあれば、自分の特性から來る缺點は、同時代者のうちで、必らず之を補つて居る者があるといふ見地に達しよう。かうなれば、さう神經を惱ましてやきもきしないでも、自分の

特色を充分に發揮することが出來やうと思ふ。

之を露西亞近代の文學史上で見ると、トルストイとツルゲネフと、またトルストイとドストイエフスキとの關係だが、互ひに一方の缺點を他の長所が見て居る。而も、互に反目し合つたり、また攻擊し合つたりして居る。わが國ではあり勝ちの卑劣な人身攻擊とは違つて、いづれもその立脚地を明かにする言論と創作との自由競爭である。して、いづれも露國文學の驍將となつて居るのだ。この一事を見ても、露國はなか〳〵大きなところがあることが分る。

王陽明は自分の行爲の公明なのを證して、閨中の事も云ふに憚らないと云つたが、トルストイも亦自分で何事も人に隱くす處はないから、自分については勝手に見たり、聽いたりした事を云へと斷言した。その癖、トルストイは公明だと思はれて居るだけ、それだけ自分の秘密を堅く握つて居る人である。渠の小說中の人物レヸンの樣に、渠身づからも骨髓までも自我主義の人である。渠は自分の恥づることまでも人に白狀するのが常だが、第一、この最も恐るべき秘密は自分自身にも白狀しない。ツルゲネフは渠を評して、『渠の大缺點は心靈的自由の缺乏にある』と云つて、この狀態を洞察したのである。トルストイは特に孤獨の人で——これは天才の孤獨性といふよりも、寧ろ社會的、現世的人間界に於ける性癖となつて居るらしい。渠には親類もある、賞讃者もある、觀察者もある、後になつては弟子といふべきものもある。然し、友人と云ふものは更らになかつた。この懸隔性、この小心の情、この友情不能癖、これが年の進むと共に增して行つたのだ。運命はたま〳〵渠に一友を送つた

が、それをもはね付けてしまつた。この友といふのはツルゲネフであつた。

メレジコウスキに據ると、トルストイとツルゲネフとの關係は、露國文學史上、最も不思議な心理的謎の一つである。或神秘な力があつて、この兩者を絶えず相互に引きつけたが、いゝ加減のところまで近づくと、却つて押し隔たしめ、たゞ後になつてまた引き寄せようとした。兩者は互ひに不快を感じて、殆ど堪へ切れない程であつたと同時に、また最も密接な關係があつた。兩者が相互に必要缺くべからざること、他の人々よりは過ぎて居たが、おだやかに相會することが出來なかつた。トルストイを認めて國民的大記者とし、先づ之を歡迎したのはツルゲネフであつて、或時『トルストイの名は歐洲人の聲價を獲得し始めたが、露國に於ては、われらはずツと以前から渠の無比なるを知つて居る』と云つた。トルストイはまた之に對して『自分の愛しない人の說が自分には大事だ、それが多くなればなる程、自分は威丈高になる』と云つた。また、自分でツルゲネフに手紙を送つて『われらが離れて居ると、これは充分奇體に聽えるが、わが心が飛んで君に行くこと、兄弟に行く樣だ。一言で云へば、自分は君を愛する。それは疑ひがない』と。

ところが、或處で會見があつたが、トルストイはモロコ革の長椅子に身を投げ出して、鼻息が荒くなつて居ると、ツルゲネフは短衣の胸をあけて、その手をポケトにつツ込み、絶えずあちらこちらへ歩きまはつて居た。同席者グリゴロヰチが破裂を拒がうとして、トルストイのそばに進んで行つて、『親愛なる友よ、激し給ふな、君の知る通り、渠は君を尊び、君を愛して居る』と云ふと　トルストイ

は鼻の穴を大きくして（かういふ說明は渠の小說に特有な自然人を描く時の筆法である）、『渠に自分を侮辱はさせない。渠は今、わざと見せつけにわが前を行つたり、來たりして、その民政主義の踵を蹴りつけて居る』と答へた。この破裂はつひに一八六一年に起つて、つまらない爭論——或人は之を說明して、ツルゲネフがその庶子の爲めに英國の女敎師を雇つたのを、トルストイが攻擊したのが原因だといつたが——それから事が起つて、やがては兩者の決鬪にならうとした。ツルゲネフは度を失つて、激烈な言葉を吐き、トルストイは不斷に似合はず冷靜に構へて、憤怒を制して居たが、奇體にも、この爭ひは咎むべき前者が正當な後者に勝つわけになつた。それは、直ぐ前者がわれに返り、男らしく又寛大に自分の言葉を取り消したのに、後者は却つて之を卑怯だと見爲したからである。トルストイはフエツト（この人とも友情を持つことが出來なかつたのだ）に手紙を遣つて『自分はこの人を蔑視する』と云つた。これは、無論自分の敵へ傳はるだらうと思つて、やつたのだ。するとツルゲネフが白狀した『感じたところに據ると、渠は自分を嫌ひで、常に自分に訴へて居る所以を了解することが出來ないのだ。自分は前の通り渠を遠ざかつて居る筈であつたが、接近をして見ようとして、これがわれらを決鬪に立ち至らしめようとした。自分は渠を好きでなかつたのに、なぜこの事に前から氣がついて居なかつたか知らない』と。これで、もう、兩者の關係は絕えてしまつたのだと思はれたが、十年後になつて、またトルストイが申し出して、融和しようとすると、ツルゲネフも直ぐよろこんで之を受けた樣子は、止むを得ずかけ隔つて居た友人の情であつた。ツルゲネフの手紙に、

『親愛なるレオ゠コラエヸッチよ、長らく御無沙汰はして居るが、僕は死の床に在りて寐て居るのだ。僕はよくなることは出來ない、それは心配するには及ばぬ。然し、僕が手紙を書いて君に告げたのは、僕が君の同時代者であつて、最後の懇願をするのが嬉しいことだ。わが友よ、文學に歸り給へ。君のこの才能はすべて他のものゝ來たるところから來て居る。嗚呼、どんなにか幸福であらう、若し僕の願ひが君を說明したと信ずることが出來たとすれば。わが友、わが國民的大記者よ、僕の求めを容れ給へ』とある。

トルストイに取りては、この言葉に言外の恐れがあつた、耶蘇教に對する無言の不信が含まれて居たのだ。これは兩者の人物と文藝に對する意見とが違つて居るところから來たのであらう。トルストイの公けの行動は、この瀕死の友人にして叉敵なる人の忠告を容れなかつたのである。全體トルストイは、前にも云つた通り、根柢から自我主義の人で、自分は之に對する公憤――と云へば面白からう――を發して最反對の博愛論を却つて身づから遣つて居るのである。渠の『心靈的自由の缺乏』を指摘したツルゲネフは、その鋭利な眼光を以つて、早くから之を洞見して居たのだ。この靈眼が不思議にも兩者を引きつけて見たり、また遠ざけて見たりしたので、たとへば、相對する二つの眼鏡が、互ひにその影を寫し合つて、無限にその隱密を露顯さすのを恐れる樣であつた。

次ぎに、トルストイとドストイエフスキとの關係も面白い。兩者は絕えて會見したことはなかつたが、前者は長い間後者の知己にならうと思つて居た。然しこの意を實行しようとしなかつたし、また

その時間もなかつた。たゞドストイエフスキの葬式に臨んだ時、『俄かに』これが自分の『最も近く、最も親しく、また最も尊ぶべき友人』だといふことを確かめ、『自分から支柱が取り去られたかの樣であつた。自分は吃驚した・號泣した、またいまだに泣いて居る』と書いた。然し、その弔文中にかういふことが云つてある。『身づから渠に比することは自分に起らなかつた。渠の作はすべて作れば作る程自分には良いと見えた樣であつた。技術は自分に羨望を起さし、知力も亦さうだが、情の作はたゞ愉快をだ』と。これは腹藏した云ひ方であらうか、また公明なのだらうか? 普通の意義で羨望すると は云ふが、決してこの最大敵者に引かれるのではない――『罪と罰』の著者ドストイエフスキの作中には實に情の作はあるが、トルストイから云へばそれ以上はない。だから、こんな賞讃は誇るに足る程のものではないし、また伯が泣いたといふのは正直で疑ひのないことであらうが、それが人をして、わけはないが、何だかぞツとする樣にならしめるのである。

ドストイエフスキ――これはトルストイの心靈生活上内的支柱であつて、渠には『最も近く、至要で又親しき』者――の方で、トルストイをどう云ふ風に思つて居たかといふに、後者の藝術的創作(小說を云ふ)がまだ世に知れて居ない間に、その世界大の要地を占めようとして居るのを指摘し始めたのはドストイエフスキである。渠はトルストイの弱點をも長所をも明かに知つて居た。レ井ンに就てはツルゲネフと同じ樣なことを云つたが、たゞ言葉が違つて居た。なぜレ井ンがあんなに憂鬱で、孤獨で、澁面作つて居る人物であるかといふことを考へて、之に對する意見を發表する權利は自分にあ

ると思つた。『自分はわが下民を見て居るし、知つて居る、隨分多年渠等と生活を共にし、食事を共にし、眠りを共にしたこともある。身づから「犯罪者の數に入れ」られ、渠等と實際の苦役を共にしたこともある』が、レヸンやトルストイの樣な人物を普通民から隔てる懸崖は、人が思ふよりも甚しいので、『君のではない世界に住する程恐ろしいものはない。』『一生の間。毎日、下民と接して居て、友人となり、恩人保護者となつてただけではまだ充分でない。君は渠等實際の內部を知つて居ない。君の智識は幻影であるに過ぎない。』だから、『君は單へに心情の命ずるところを爲なければならない』と云つて、トルストイが財產を棄捨するつもりならさうしろ、普通善の爲めに働くつもりならさうしろ、たゞ他の夢想家が『おれは百姓になるのだ』と語つて、直ちに土事を手にする樣なことはするな。土車はまたほんの類型、一個の形式であると戒めた。

ドストイエフスキの言は、自然主義の立ち場から云つて、決して誤つては居ない。トルストイも自然主義一方の極端に達して居ることは、僕、早稻田文學で云つて置いたが、例の博愛論や、非戰論の樣な虛構僞善の論法に滿足して、行動を爲すに至つてからは、僕等は聽くのも厭なコンヹンションに自分の最終の缺點を蔽ふて、ツルゲネフの所謂心靈的自由を失つてしまつた。僕等から云へば、自我主義は人間の自然だから、閨中の事件と同前、何も恥づることはない――僕の聖人に對するは、古來の見解と違つて居ることを云つて置く――が、トルストイはわざと之を隱し終ろうすことに全力を注いだのである。だから、ツルゲネフが『骨髓まで自我主義の人』と看破したのも、ドストイエフスキが

『君は公明に君の階級限內を承知して居るがいゝ。「下民に結合」しようとする企ては、すべてたゞ樣子振りであつて、下民には無禮、君自身には屈服だ』と云つたのも、歸するところは同じわけになるのだ。トルストイが眞理を發見したとか、永劫に平安を得たとかいふ時は、却つて渠の所謂神と眞理とに遠ざかつて居るのであつて、かの『告白』に於て、自分を憐むべき雛の巢から落ちた樣だと白狀した時にこそ、渠の本音は聽けるのである。

以上は、トルストイを中心として、露國近代の三文豪が互ひに相反目し、而も互ひに相尊重した工合を書いて、藝術家の態度を實例に據つて明かにしたのだが、今一つ伊太利の文藝復興期に於て、レオナードダヰンチを先驅として、ミケランジエロやラフアエルが世に出て來た當時の有樣を云つて見たいのだが、長くなるから後にする。

文學の新傾向

文學によつて、その時代の文明、その國民の狀態、その社會の發達程度が最もよく分るといふことは、僕が說明するまでもなく、テインの英文學史をのぞいただけの人でも知り切つてゐることだ。然しこの言を解釋する人々の態度如何によつては、殆ど無意義であることもないとは限らない。わが國の學者、有識者輩には、隨分そんな無意義な解釋者が多いのだ。東京帝國大學の文科大學長坪井博士

の如きは、その代表者で、文學を琴曲、活花などの遊戯と同一視して、通辯や商館番頭に最も必要な實用的語學を以つて純粹文學よりも大事な物として取り扱つた。これには同大學の學生等の大反對があつたらしかつたが、そんな一局部的事件を僕等は度外視してしまつてもいい。然し諸君にして、若し通辯の巧拙、番頭の商略などを以つて國民性を歷史上によく發揮したためしがあるか、どうだかを考へて見るなら、文學の重大視されない國民と社會とが如何に心細いみじめな狀態であるかが分らうと思ふ。

然しまた文學その物の方面から見ると琴曲、活花などの遊戯と殆ど同じ程度に滿足してゐるものがないでもない。わが國近代の狀態で云へば、尾崎紅葉一派の全盛時代までは殆どそんな程度のが多かつた。つまり、文學が時代と密接な關係を持つてゐなかつたといふ事になる。換言せば、淺薄、輕浮、狹少な文學であつた。大文學は直接にその時代、時代の眞生命に觸れてゐなければならない。そこに國民性の生存競爭的苦鬪と發展とを掌握してゐなければならない。そして時代はずん〳〵變遷進步するのであるから、文學も亦その時代と共に變遷進步するのである。人はよく『歷史は繰り返す』と云ふが、僕等は、世界に於て、實際上、同一事の繰り返されたのを見たことはない。ひよツとすると、形の上の類似はないとも限らないが、その內容は必らず違つてゐる。僕の議論は乃ちこの內容的方面を觀察した結果であることを記憶して貰ひたい。

そこで、先づ古代の文學を調べて見給へ。古代の文學はその範圍が廣漠過ぎて、形ちは一つでも、

八百屋、なんでも屋、無差別、混合の狀態であつた。一國の神話、歷史、政治社會の組織、日常生活、思想上の狀態等、ただありとあらゆる事實を出鱈目に羅列して、一定の口調（詩または詩的散文）に書きあらはせばよかつた。ホメロスの詩篇やわが國の『古事記』を讀んで見れば分らう、其內容は、偏狹無秩序な神話學でもあり、歷史書でもあり、政治的記錄でもあり、社會學でもあり、軍書でもあり、日記でもあり、さうかと思へば、また地理書、宇宙組織論、天地創造の哲學などでもある。その時代の作者乃ち詩人は外界並に傳說と見聞との記錄者に過ぎない。甘く研究して行くと、漸く其國民性をほのめかしてゐるところが長所だ。『イリオス物語』、『平家物語』などはそれである。かういふ時代を野史詩時代と云つて置く。

それが進んで、ダンテやミルトンの作になると、外界を自己の思想や信念中に觀じてしまつて、その主觀からして、萬事を全く間違ひのない物であるかの樣に割り出し、而も別に自己の個性を獨立的に現はすでもない。從來の傳說と歷史、思想と事實などは餘り尊重されない一時的、外面的な物であるから、主觀の信仰の爲めに、都合のいい樣に、勝手氣儘に撰擇取捨され、野史的時代の有形的記錄を脫して、主觀の生命とも思はれるところを發揮する。然しその向ふところはまだ內容的個性ではない。ただ有形的なのを無形的に向はせたに過ぎないから、作中に殘る要素は神、無限、犧牲、神聖戀愛などの外存的抽象觀念である。その特色は宗敎性を抽象する點にある。ダンテの『神喜曲』、ミルトンの『失樂園』などはそれだ。かういふ時代を空想史詩時代とする。

シエキスピヤはミルトンよりも以前だが、その眞價の知られるに至つたのは、獨逸に於けるレシングからゲーテの時代だ。シエキスピヤの認知研究されるに至つた時代、乃ち、シルレンやゲーテの創作時期には作者詩人等は、沙翁の客觀的態度が標準になつて、空想史詩時代の偏狹な主觀を避け、よしんば自己の信仰があり、理想があるにしても、それをむき出しに、露骨に、また信仰個條的に發表することをしないで、實際世間の狀態と內情とに添はし、その主たる世態人情の中に詩人は隱れてそのおもかげだけが見えてゐる。目ざすところは人情の描寫である。わが國では、近松の淨瑠璃などがさうだ。かういふ時代を劇詩時代とする。

以上の三區別はその時代の特長と創作上に最も勢力があつた形式とを見ての說であるから、劇詩時代に空想詩があつたり、空想史詩時代に野史的な詩人が出たりした事實があつても、それはいつの世にも時代後れの作者や、その時代の傾向をこと更らに別形式で行く詩人などはあるものだから、決してかまはない。兎に角、假りに古代から十九世紀の前半までをこの三時代に區別して見ることが出來るとする。

野史詩時代の詩人は書記生の樣なものであつて、全く詩人としての自覺がない。殆どくうたいに自己の周圍の傳說や見聞を書き並べてゐた。ホメロスにはホメロスの特色はある。政治家の希臘學者グラドストンも渠の詩句を二行見れば、名を擧げないでも、直ぐそれと分るとまで云つた。然しそれはマンナリズム、筆癖が分るのであつて、作者の個性までがそこに發揮されてゐるといふのでは決して

ない。ただ記錄的な文句を書くに、如何にも熱烈であつた樣子が讀めるだけだ。空想史詩時代の詩人はそれ相應な自覺があつた。然し狹い主觀的であつて、自己がただ小い造物主――その拵らへた物は皮相的な自己の世界で――そこに現はれた宗敎觀念がたま〳〵一致すればこそ、その時代の人々が多少の興味を持つたに過ぎない。劇詩時代には、詩人的自覺の進步擴張はあつた。然し、その自覺した詩人と洞察される世態人情との間の交涉がただ觀念的に附いてゐただけだ。記錄的でもなく、空想的斷定も下さず、事物の裏へまはつて觀察するのはいいが、その客觀的といふのは、まだ〳〵表面的である。

（これは後から說明する。）

この三時代の特色は或程度を以つて共通してゐるのも事實だ。第一時代にも、その當時の宗敎思想と世態人情とは現はれてゐるが、他の事物も同等の力を以つて現はれてゐるから、少しも重きを爲さない、そしてその全體を支配するものは國民性である。第二時代には、また、國民性も人情も見えないではないが、宗敎的觀念が强勢を有してゐる。第三時代でも、たとへばゲーテの『フアウスト』などには、新らしい宗敎思想の喚發もあるし、また國民性はレシングの國民文學主張以來忘れられてはゐないが、すべて人情描寫に伴はなければならなくなつてゐる。そしてこの各時代の三特長とも、すべて種々な程度に於て普遍性を表するに傾いてゐて、個性を本統に現じ得なかつた。もツとも、劇詩時代には個性を重んずるといふ說が大いに行はれたのであるが、近代文藝の本義から要求する個性など

は夢にも創作中に見えなかつた。僕等は古典的なる一の輕蔑語を以つてこの三時代を總括しようとするのは、三時代とも抽象的な普遍に偏して個性の發現を類性的程度に引きとどめたからである。

田中喜一氏の古典論、普遍を以つて特殊を統一するといふことは、それが無碍に行くものなら立派な說だが、僕が讀賣新聞（十月二十五日）に於て駁擊した通り、無碍には行かないから空想的議論に過ぎなくなつてしまう。第一時代は殆ど統一がない。第二時代は統一が無闇に片寄り過ぎた。第三時代は抽象觀念または部分的心理が玲瓏たるべき特殊にくツついて、その透明を傷つけたのだ。わが國の例を取つて云へば、第一時代には『古事記』や『平家物語』、第二時代には『忠臣藏』や『八犬傳』など（これらは宗教的の代りに、武士道的または教訓的だ）、第三時代には近松の心中劇が當て塡まらう。近松に就て云つて見ると、その描寫した人物は知力や意力の方面を抑へて、情の方ばかりを活躍させてあるから、シエキスピヤのハムレツトが知力の目を塞いで死の恐怖を描かれたと同樣、部分的、乃ち、虛僞誇張的描寫であつて、人間その物が全體として（乃ち、僕の所謂心熱的に）出てゐない。丁度日本畫が、如何に精神を描くとは云へ、あるべき遠近や陰影がないから、正當な意味の人物または事物の活躍が出來ない樣なものだ。田中氏がそんな行き方の繪や文學を古典的と名づけるのは勝手だが、そんなのが特殊を統一する普遍の意味なら、虛僞と誇張とを知らずにそれを實際のものとしてゐるのであつて、十八世紀時代の文藝論をこの二十世紀に何の考へもなく繰り返してゐるわけだ。

近松、シエキスピヤ、ゲーテなどの流派は十九世紀の前半にもあつて、その行き方は羅曼的で、思

想は古典的であつた。わが國の學者や識者等が文學と思つてゐるのは、すべてその時代までの作である。遊戯分子を含んでゐるか、教訓的か、おもちや的か、記録的な物ばかりだ。その態度に自覺の絶無な物は棄てるとしても、自己の小主觀の左右するところとなつたり、漸くその小主觀を破つてそれ相應な小客觀で滿足してゐて、——沙翁の大客觀、ゲーテの主客融合觀などは、その範圍内の多少大なるものに過ぎない、——到底近代人の要求に應ずるだけのつツ込み方を爲し得てゐないものだ。人生を見せると云つても、全部的表象を浮ばせないのは勿論、たゞ部分的、斷片的なのを以つて全部といつはつてゐたものだ。たゞ興味を引いて、面白ければ、それを讀むものも不滿不足がなかつたからである。作者も馬鹿なら、讀者も亦抜けたところがあつた。

そこで、ゴンクル、ゾラ、トルストイなどの『ありのまゝ』主義が出て來た。この第四時代を特に小説時代とする。文明の段々熟して來るに從ひ、その惡弊が隱せなくなり、生存競爭は激甚になり、生活は詩的または半空想的から落ちて來て散文的となつた。散文的生活には餘裕が少くなつたら、娯樂または教訓として讀まれた小説並に詩歌はまどろツこしくなつて、——お坊ちやん、お孃さんの讀み物としても存ずる第二流以下の作物は別として、——直ちに人生その物を表現しようとして來た。その微細な描寫の途中には、國民性、宗教思想、人情なども出てゐようが、さういふものは背景であつて、人生その物を活躍させる様になつたのが、十九世紀の後半から散文的な小説が勢力を占めた所以である。

ゾラのは科學的自然主義とも云はうか、その缺點は材料を科學的に陳列したばかりだ。トルストイのは獸性的自然主義とも云へよう。其の弱所は餘りに冷酷な行き方であつて、人間をも獸性の根本、寧ろ物質的原素にまでも分解すると云はれた。然しいづれも敎訓的や娛樂的といふ樣なうぶな考へは全然脫出して、研究的に忌憚なく、正直に人生の眞相を描寫しようとした。其の結果として、ゾラの小說には、ストーヴの暖みに刺戟されて、情夫情婦の相抱擁するところなどもあるし、トルストイのには、また、女の乳くびをさはれば女はどういふ感じを起すかといふ樣なことまでも書いてある。

かういふ點をばかり捕へて、わが國現代の自然主義反對者連は、他に何事もいゝ點を知らないで、また研究したこともないのに、結論を得たかの樣に得意がつて、歐洲の流行であつた程度の自然主義を――其の後にわが國に發展しようとする僕等の新自然主義をも一括にして――一概に放縱主義、肉慾主義、挑發主義などゝ命名して喜んでゐる。然しさういふ點は決してさういふ目的があつたのではない、描寫の勢ひ上、普通人にさう見られるやうに止むを得ない結果だ。決してそんなところばかりあるのではない。そこまで這入り込む新式な描寫におのづから人生の眞相を誤りなく傳へる力があると信じたからだ。その描寫法が實際に最も正確な物であつたか、どうだかは更らに跡から分ることゝして、兎に角――遊戲分子の多い音樂では、如何に大ワグネルでもその樂劇に於て其分子を脫し得ないで、かの坪內博士一流の舊式文藝觀の忘我的を以つて滿足してゐたが、――文學なる物は、小說時代となつてから、上品らしい琴や茶の湯の遊びと違つて、本氣な物、眞面目な物、必死の事業、眞劍勝

負を價するものであるといふ方向にはじめて向つて來たのだ。

然しトルストイは、晩年に至つて、自己の創作的方面を否認して、馬鹿げた博愛主義や無抵抗說の說教者と變じてしまつたし、ゾラはその根底に橫たはつてゐた、羅曼的な考へが段々本音を出して來て、いづれも共に初手の行き方、態度を窮行することが出來なかつた。その當時の自然主義を追行したのは佛蘭西のモーパサン、那威の劇作者だがイプセン、露西亞のゴリキなどである。諸君は若し一那威人の年若い無邪氣な女房が、一たびその敎育上の無自覺を悟り、自覺を得るまでは、自己の胸に妻たるまた母たる餘裕もないと云つて、夫と子とを置いて家を出て行くその切ない眞情に立ち入ることが出來たら――また露西亞の一靑年が食ふに物なく、パンを盜むに當り、同じ狀態と目的とを有した女に出會ひ、この見ず知らずの男女が、いづれも宿る家がない爲め、一夜をたゞ唆を取る爲めに河岸の船上で抱き合ふといふ樣な痛切な實情を讀破することが出來たら、――如何に自然主義に反對の意見や、習慣を以つてゐても、思ひ半ばに過ぎるだらう。

この散文的な小說時代に於て、而も諸君の忘れてはならないのは、小說が表面から人生の眞相に深入りしようとするに對して、詩歌は裏面から人生の實際を硏究し、ついに詩歌並に小說上の表象派を形造るに至つた由來だ。佛蘭西のユイスマンの如きは初めゾラの純然たる弟子であつたが、中途から裏切りして、表象專門派となつた位だ、そしてイブセンにしろゴリキにしろ、其他、世界に於て近代有名な作家は、小說の方面に於ても、多少表象的色彩を帶びてゐるのだ。

表象派の由來は、先づ佛蘭西に於て、ジェラルドネルワルや、ボドレルから初めなければならない。渠等は一たび狂人になつたり、つひに狂人になつてしまつたものでなければ、殆ど神經衰弱の極に達してゐたものだ。然しそれが却つて一つの新運動が初まるもとゐになつたのは面白いではないか?

表象、乃ち、シンボルを云ひ出したことは古いものだ。プラトンの書、シエリングの哲學、スヰデンボルグの宗教、グーテ、エマソン、カライルの論文等には、それがなか〳〵意味のある樣に見えてゐる。然し渠等の頭腦は古典的で、餘り固かつた。たゞ有形物を以つて無形物を直接に表示することが表象で、その無形物とは、概念または觀念から成り立つた抽象物だ。『表象派の文學運動』を著はしたアサシモンズは、之を『無意識』の表象と稱して、近代的、更らに現代的な有意識のそれと區別した。どう違ふかと云ふに、概念や觀念に依て成立する表象は人間その物に直接でない。人間その物に直接に受け取れるのは、知力または意志、または情緒の一方面だけからでは行けない。

今日も講演をされることになつてゐる福來博士の常に說く人格說の如きも、刺戟する諸神經組織の團體的反應を主とし、意志の有無を重大な要素としないのは、心理上の實際的根據から倫理學上の意志ばかりを抽象的に重大視する傾向を打破する所以である。知力ばかりを要件とする哲學は遠くに否認されたが、意志ばかりを抽象する倫理學も否認される樣になつた。僕等は又情緒ばかりの文學を排斥する。神經と心力とは何でも人間全體として動かなければならない。乃ち、その人の態度、調情、

氣分となるべきだ。それには、心の一部分の發動では困るから、知情意合一の動き方、乃ち、僕の所謂心熱的態度を以つて來なければならない。これは僕一個の新解釋で、まだ後から說明する必要があるが、佛蘭西の表象派はかういふ態度を、自覺してゐたか、ゐなかつたかは跡の問題として、兎に角、かういふ方向を取つてすべての心力のもとゐなる官能の力を開放した。僕の半獸主義で說いた感覺即思想、思想即感覺の行き方、佛教で云へば、小乘と大乘との假定的區別などを打破した行き方に達しようとしたのだ。

直覺といふことがある。カントなどの云ふそれは觀念的、乃ち、たゞ知力一方の直觀を云ふのであつて、その實際はまだ事物の輪廓ばかりを握り得る程度にとゞまつてゐた。然し表象派の思ひづき通りに官能を充分に開放し得た上は、五官の作用が流通無碍となるから、普通心理學上の研究順序はすべて根底からくつ返され、視覺、聽覺、嗅覺、味覺並に觸覺の働きが互ひに相融通せられ、人間全體の力、乃ち、心熱覺(僕は之を一種の別官能乃ち、第六感と見ていゝと云つたことがある)を以て事物の內容をも直觀することが出來る筈だらう。さうなると、佛敎論理に於ける手段的區別なる現量、比量、似現量など云ふ事はくだらないものとなつて、人間の靈性も獸性も區別があつたものではない、乃ち、肉靈合致の自然境が直觀されるのである。人生は所詮迷ひである、寧ろ幻影乃ちイリユジョンである、生命とするところは最も根本的な最も現實的な幻影を攫み得ればいゝのだ。神經が最も鋭敏でなければならないのは乃ち其れが爲めだ。さうなつてこそ、氣分の人、氣分の詩または小說が融通

無碍の發現を爲すのである。

表象派がその實そこまで充分に達してゐたか、どうだかと云ふに決して充分ではなかつたのは事實だ。渠等の思想にはまだ耶蘇教的、從つて佛教にも共通の弊害なる、抽象分子が這入つてゐたからである。然し、兎に角、文學としては、カライルやゲーテなどの觀念的直觀の態度を脫し得て、後者等よりも神經の働きが敏活であつた。こゝに一ついゝ例がある。多能多才のゲーテは、文學の外にも鑛物學や光學などの研究をやつた。それは結構なことゝして、渠の發見したといふ光學上の原理、乃ち虹の七色なる物は、それ〴〵、光と闇との或程度に調和したものであるといふことは、鳥渡考へて見ても、たゞ觀念を以つて觀念的假定をしたのに過ぎない。深い事實の上から研究し得た結果でないから、現今では誰れもそんな空理では滿足してゐない。光と闇、白と黑とを如何に甘く調和しても他の色は出ないのである。佛教が現量と似現量または比量をこと更らに區別して、迷ひを避けようとするのも、歸するところ、現實の生命を離れて同じ乾燥無味に落ちて行くのだ。ところが、繪畫界に於けるマネやモネの印象派になると、現實が非現實から分離するやうな瞬間を知らないと云ふくらゐだから、ゲーテの原理などを幾倍も越えて、色彩なる物を僕等の神經に結びつけ、物體の形は色彩の輪廓に外ならないと見爲すほどになつた。そして、光線が僕等の視覺に消滅した時は、色も形も消滅したのだと主張した。

印象派が表象的思想に反對して起つたと云ふ人があるのは、舊式な觀念的表象主義に反對してゐる

のであつて、兩派ともにその神經の過敏を認められるに至つた傾向は一致してゐる。この點に於て、繪畫界に於ける印象派は文學界に於ける表象派である。殊に表象派になると、神經の無碍に活動するところ、光明を手に觸れ、闇黒を鼻に嗅いで、これらを充分に感得する樣な方針を取つた。渠等には音樂が眼で見え、色彩が耳で聽えた。表面から見ると、ノルダウが指摘した通り、實に病的であらうまた不健全であらう、然しこの病的不健全と見える力が人間の根底、乃ち、神經組織に潜んでゐる。それがたゞ必要なところに現はれて來さへすれば、苟も舊式な抽象的觀念論者でない以上は、それを不健全とは見ないのである。丁度、福來博士の所謂團體的反應が必要に應じて出て來れば人格の健全となり、不必要な出現をすれば、不健全であると同じ考へ方だ。

近代文明の熟爛と腐敗とを充分に感得するには、からいふ表象派的、官能力が最も必要である。諸君にして若し近代的文明の燦爛として實に立派な表面ばかりを驚嘆してゐたのなら、一たび觀察眼を轉じてその裏面を見て見給へ。ぞツとするほど氣味が惡くなるだらう。數千年の歴史は深く人心に熟し爛れて、仁義と道德、良心と義務の念、親子と夫婦の關係などは空想と修養といふ二つの古典的道學者によつて設けられた輪廓が殆ど分らないほど敗れ且腐りて、寧ろ野蠻力のもとゐなる獸性ばかりが生々活動の道を開いてゐる。日本が露國に勝つたも、文明の力ではない、蠻力である、獸性的努力である。廣い意味のデカダン派(字通りに云へば、衰頽派だ)が攻擊されながらも、世界の大勢に最も適應してゐるのは之が爲めだ。この派の一流なる表象派を實際に病的、不健全な點がなかつたとは云

はないが、それがあつても、なほその長所として僕等が繼續して行くべきは、人間の最も健全な獸性的努力——神經組織の全部的燃燒——を忘れなかつたところだ。

ジエラルや、ヸリエなどはさて置き、ボドレルはこの方面を初めてよく發揮したデカダンである。人名辭書を見ても、ユブスタのなどにはないほど、文界以外には餘り知れてゐない人だが、渠はさきに云つた通りの官能交錯の働きによつて、神經過敏な新機軸を詩界に歌ひ出し、裏面的觀察點から事物を見て、——哲學者等のいふインサイト、洞察などはまだ表面的だ、——事物の輪廓を空しくして、直ちにその內容を把握しようとした。之が乃ち世界の文學に影響し、世界の文學を一新する動機となつた。然し渠は身體が虛弱で、過勞の爲めに年中神經衰弱の極に達してゐたので、アブサントといふ强酒や麻の實から製したアシシユといふ嚙み物を常用し、その刺戟力によらなければ頭腦の働きが出來なかつた。ボドレルが醉ひの勢ひで實行したところを、表象派の本尊ともいふべきヹルレンやマラルメは正氣で、眞面目に實行することが出來た。そこに佛蘭西の表象派が確立してから、それが他の創作界にも及んで、ユイスマンやイブセンやゴリキやアンドレフの小說並に劇曲が、普通の表面的自然主義から變つて來たのである。

小說がもう娛樂的でないといふことが分つたのは、歐洲では、バンジヤマンコンスタンといふ人の發見からで、その人の死んだのさへ今から七八十年前のことだ。わが國では漸く二十年ほど前に坪內博士の『小說神髓』といふ書が出て、小說の目的は勸善懲惡的、乃ち、敎訓的ではないといふことが分

つたが、之と同時に却つて小說を、如何に高尙に解釋するつもりにしても、娛樂的な物としてしまつた。わが國に自然主義の運動が初まるまでは、世界の大勢に通じない爲めに雷同をのみこととしたわが國の小說家等の態度は殆どすべて坪內流の娛樂的であつた。それが否定された現代では、坪內博士並にその舊習を追ふ人々は娛樂的を多少高尙さうに云ひ換へたに過ぎない形容詞、『忘我的』といふ語を以つて解釋してゐる。然し現代の自然主義は、文學を初め、音樂その他の藝術に於て、忘我を目的とする樣な物を、正當な見解を以つて、第二流以下に貶してゐるのである。

現代の自然主義的小說は兎に角眞面目になつた、寢ころんで讀むべきものではなくなつた。娛樂的ではなくなつた．忘我的ではなくなつた。然し、わが國ではそれがまだおもにゾラでなければモーパサンぐらゐの程度を追ふてゐるのであつて、一般にはまだ表象主義派的な自然主義分子を含有するまでに深入りしてゐない。詩界では、また、僕を除いては、表象派的なのはあつても、多くはそれが觀念的、乃ち、舊式無自覺な表象派であつて、甘く行くとしても、ユイスマン流の架空式な專門表象派となるものばかりだ。そこで、僕の稱道する新自然主義を鳥渡云つて置く必要がある。僕のこの主義を文學上だけで云へば、歐州の自然主義と表象主義（前者は物的に偏し、後者は非物的に失す）を共通の根底に於て洞察し、前者の平面的な點を破り、後者の觀念的なところを壞し　破壞的主觀を以つて事物を直描直寫すべしと云ふのである。

歐洲流の自然主義には、どうも、客觀といふ語を無闇にありがたがつて、わざ〳〵主觀の自然を矯

める爲め、事物の輪廓にとゞまつて滿足する缺點がある。また、同じく表象派的傾向には、まだ〳〵最後に抽象觀念が邪魔をしてゐて、人間神經全體の力、乃ち、心熱的エネルギを活躍さゝることが出來ない。僕の新自然主義、詳しく云へば、自然主義的表象主義は、この兩者の缺陷を補つて人生その物の全部を無形式に發揮するのだ。現代の自然主義論者のうちでも、島村抱月氏や長谷川天溪氏の如きは、この主義を以つてたゞ藝術問題と見爲し、藝術以外に渡れば本能滿足主義であるかの樣に思つてゐる。僕のはたゞに藝術ばかりを說くのではなく、之を以つて現代の文明に最も適應した人生問題にも見爲してゐる。ところで、新戶部博士の『現代の思想問題』(二六新聞)には、自然主義を平俗な意味の本能主義と見爲し、更らに之を無修養主義としてゐる。渠は抽象的な意志の自由を否定する心理學、またはそれを根據とする具體的倫理學を直ちに莊嚴でない、劣等であると速斷する手あひであらう。かういふ手あひは、文明の皮相を抽象的觀念と形式を以つて徒らに樂觀してゐるから、僕等の自然主義的苦悶と悲痛とをどこまでも實現するのが最も深い修養であることを夢にだも知らないのだ。

無修養呼ばはりは、僕等の主義を一般人の俗解に從つて肉慾主義視するからであらうが、その誤りなることは、既に述べた通りだ。一時支那から流行した『肉蒲團』や『遊仙窟』は、如何にも、いけなかつたらう。たゞ肉慾挑發が目的であつたからだ。ところで、印度の經文のうちで、名を忘れたが、男女の肉情を詳細に分拆した遊仙窟を見た樣なのがある。目と目と觸れた時はどんな感じ、手と手と握り合つた時はどんな氣持ち、口と口、肩と肩などが合つた時はどうといふ樣に、段々と心理的說明が

進んでゐる。それが經文になぞらへて戯作者的に書かれた物とすれば不眞面目なことは勿論だ。然し若しそれが、經文ばかり流行して特に心理學なるものがない時代の一種の研究であつたとすれば、近頃出る眞面目な生殖器說明書と同樣、別に排斥すべきものではなかつたらう。まして僕等の所謂新自然主義の小說並に詩歌が、人生全部の幻影を實現するに當つて、これに似た部分が正當な結果としてあらはれてゐるなら、決して之をとがむべきではなからう。

破壞的主觀――人生全部の幻影實現――かうなると、小說並に劇詩は眞正なる意味に於けるそして新らしいリリク、乃、叙情詩に向ふ。(情といふ字はこゝでは情緒でない、心熱の云ひ換へと見るべし。)十九世紀の後半からの小說時代には、詩歌は小說の爲めに光輝を奪はれ、その存立を殆ど吸收されてゐたが、今後發展すべき新自然主義時代には心理的詩歌(說明は前著『新自然主義』にある)が小說を吸收してしまう。今後の、乃ち、第五の時代を叙情詩時代と呼んでよからう。小說、劇詩、樂劇等、如何なる形になつて現はれても、その內容的傾向は心熱的幻影を實現する叙情詩を本體とするであらう。それも、また、現代文明の散文的な熟爛と腐融とに適應するには、僕等が始めた散文詩的であるだらう。

この第五の新時代にも、その他の時代にあつたと同樣、その時代を代表しない作物も出るだらう。然しそれは第一流の文藝として標榜すべきものでなく、第二流、第三流、さらに下つては四流、五流の手段的文藝に過ぎないのである。僕等はそんなのも存在するを拒まないが、そんな劣等なのが却つ

て普通人の讀み物であらうから、普通人はそれらを標準に文藝の價値を定め易い。自分等が寢ころんで讀んだ物を尊敬しないのは當前なことだ。が、第五の時代を代表するものは寢ころんで讀めるやうな容易なものであつてはならない。

終りに臨んで、僕はかう云ふ文學の傾向、否、文學その物がいよ／＼眞面目な、眞劍勝負的な事業になつて來たことを再言して置く。（四十一年、慶應大學並に曹洞宗大學に於て演說）

文藝取締問題と自然主義

長谷川天溪氏は、今月の太陽に於て、文藝取締の一方法として、氏の持論なる文藝院の設立を再び說いてゐる。その外にもなほいい方法はあらうが、兎に角、それがいい方法の一つであると思ふ。僕もそれには贊成の一人であるが、さういふ問題を引き起す動機となつた自然主義その物を說明する部分に於ては、天溪氏の議論は餘り美辭と反語とが多過ぎるので、たゞ當局者の考へを增長させるに止まりはしなからうかといふ遺憾がある。僕等は當局者に向つてもツと深くまた正しく反省して貰ひたいのだ。

天溪氏は、世人の識無識を問はず、一樣に『自然主義と云へば、獸慾主義と同一物と思惟』するのは、『全く似而非自然派の然らしむる所である』と云つたのはいいとしても、當局者はまだ同主義の眞

正なると似而非なるとを見分ける力がないのだから、氏の論を根據として、渠等の我儘な而もひねくれた表面的、外形的判斷を押し通し、眞正な物をも渠等の手にかけるかも知れない。否、現にその傾きがあるのだ。『女の文』を禁止したのは當然だとしても、ゾラの作を禁じたなどば乃ちその一例だ。ゾラの『巴里』禁止の電報が佛蘭西に達した時、同國人士がわが國人教育の程度を疑つたといふのは實にもツともなことだ。

天溪氏はまた『われ等の主唱する自然主義を實際的生活に應用するならば、……禪僧の如き生活を送らねばならぬ』と云つて、肉慾的また野蠻的でない反證としたが、それも亦一方から當局者の誤解を招く恐れがある。禪僧的（氏の意は傍觀的）生活を實際にやつてゐるものがどうして實世間の實際（それが自然主義の材料）を充分に取り扱ふことが出來ようぞ？　これは氏の區別的藝術觀と僕の實感不離の藝術觀との違ふところから來るのだが、眞正の自然主義小説は、その作中にあるだけの事實をその作者が或狀態を以つて實驗または實感したものでなければならない。さうなれば、文明の表面美をよそほはないと同時に、野蠻の長所（これが大事だ）をも發揮するのだ。さうでなくして出來た物は、その傍觀的なると暗合的なるとを問はず、總て似而非自然主義の部に入ていゝのだ。

たとへば泥棒をしない者、姦通をしない者が泥棒や姦通のことを書くから、實際の事實でないらしいところが見え、何となく拵へた樣な考へをその讀者に起させる。其ぐれ加減から挑發的になるのは定まつて居る。然し實際に泥棒姦通を或形（必らずしも社會的、法律的に成立した形を云ふのではな

い）に於てやつたか、やつてゐるものかそれを書けば、ぐれたところがなく、その事實は自然のまゝに人生と密接に活躍して、挑發的なさかひを越えて、人生の眞相が全體として現はれる。かうなれば萬人が萬人。その場に至ればさうより外はない狀態を暗示または實現する。それが何で社會的罪惡であらう？　若し部分的または低級技巧的――乃ち、似而非自然主義的――であるなら、それが挑發的になる。眞正の自然主義は自己の實感を捕へる。かうして若しそこに姦通小說、泥棒小說が出來たとすれば、その人が直ちに姦通者または泥棒であるのだ。法律と警察と法廷とで擧げることが出來ない證據までをも身づから擧げて、自己を告白若しくは實現するのである。この態度が惡いならその作物を判斷する前に、その作者の人物を審判するがいゝ。若し天下に耻ぢない正當な理由が立つなら、かういふ自然主義者を捕へて入獄させるか、または國外に放逐して見るがよからう。

然し執權者の力では何の理由でも勝手につけることが出來ないでもない。僕等はこの點に於て無力無權である。下らない古びた人權論や自由說を以つて反抗しないつもりだ。たゞ僕等は人生と藝術とに區別を置かず、文明の腐敗と野蠻の生氣とを認め、わが國の現代に適應した自然主義を唱道し又之が創作を發表してゐる。當局者は之を社會主義と同一または類似のものであるかの樣に見爲してゐるさうだ。第一、それが渠等の誤解である。社會主義は無力無權を以つて有力有權者に對抗しようとする空想的運動である。僕等は初めから何事によらず空想的を取らず、且、有力者が無力者を壓倒するのは當然の結果として返り見ない。或新聞紙で、『自然主義の目的を達する能はざる反動より』社會

主義が生じたと云つた、その平俗な自然主義（肉慾主義などを云ふのだらう）とは僕等の自然主義は違ふ。

當局者は、また、僕等が――おもに自然主義者が――毎月一回相集つて會食する龍土會を以つて、虚無主義の團體と見爲してゐるといふ風說がある。これも自然主義中の低級な自然主義には、哲學上の虚無主義に逃げる道がないでもないのを、直ちに政治上の虚無主義と誤解させたものが別にあつたからであらう。社會主義並に虚無主義がわが國人の政治思想に勢力を占めることは到底出來ない。これは、曾ても僕が云つた通り、わが國民性の然らしめるところであるが、その國民性なるものが古代から儒敎、佛敎、並にその變形なる武士道などの抽象的壓迫を忍びながらも、現代までぽつ〳〵發展して來たのが、野蠻主義の特色を發揮して、現代の歐洲的皮相文明に當らうとする――そこにわが國の世界的覺醒がある――その爲めの必要として高級な新自然主義は生れて來たのだ。乃ち、わが國民性がこの主義の洗禮を受けて、世界文明の面目を一新すべき機運が到着したのだ。

この僕等の主義が政治的、社會的、並に形而上の思想に大影響を及ぼすものであるのは事實だが、それは決して當局者の恐れる樣なものではなく、わが國民の新發展に伴ふ主義であるから、寧ろ大いに助長すべきである。然し、殘念なことには、歐洲的皮相文明に目が暗み、それをたゞ在來の儒敎的または佛敎的習俗思想を以つて迎合しようとする世間一般の識者等には、まだそこまで分つてゐない。自然主義に對する誤解、冷笑、恐怖、迫害等はすべてこの不明から來る。それが幸ひにも、新機

運を看破するに機敏な詩人、小説家等が先づ世間の有識者等に先んじて、そこに氣が附いた。苟も文學を以つて時代思想の代表と知るものなら、必らずこの曙光を祝すべき筈だ。之を壓迫妨害しようとするのは、わが國民の新發展と新生命とを壓迫妨害しようとするのである。

以上の根底的事實を承認することが出來たら、自然主義者の創作中に挑發的、風俗壞亂的な個處がよしんばあつたとしても、最も些細な缺點に過ぎない。たとへば、大西鄕が重大な政治問題を議する席で、鳥渡美少年の話をした樣なものだ。まして僕等はそんな缺點をことと更らに擧げるのではなく、數項前に述べた通り、創作に於て、身を以つて切實眞摯な告白若しくは自己實現をしようとするのだ。換言すると、僕等は創作家として、わが國の一般人と有識者、無敎育者と有敎育者、乃ち、わが國民全體を代表して、世界的新發展と之に伴ふ弱點並に罪惡とを正直に描寫し、人生その物の立ち場を明かにするのだ。ただ困るのは、天溪氏も云つた通り、僕等に雷同附隨する雜輩並に末派連である。渠等は僕等の見地に達しないで僕等の態度を眞似るから、同じ材料を取り扱ひながら、單に反逆的や挑發的になつてしまう。このけぢめは間一髮であるから、當局者がたゞ探偵的眼を以つて見たて、新式な文藝家でない限りは、とても區別のつくものではない。それを味噌もくそも一所にされては困る。この點に於いて、僕は天溪氏の文藝院設立の發議を贊成する。無論、氏も當局者にそんな意志があるのを聽き知つてそれに前以つて贊同したのだらうが、それが實際の設立を得た時に、その會員が當局者の意を迎へてゐるやうなものばかり多かつたら、何にもならないのは注意して置く必要が

ある。

當局者の今の狀態は、勝手が分らないので、罪人を探すかの樣に、徒らに臆測的、手さぐり的、暗中摸索的であるらしい。僕等の心配するのは、英國淸敎徒時代に全く演劇を禁制した如き、また露西亞に於て革命といふ字のある書物は、內容の如何に關せず、その出版と輸入とを嚴禁した如き愚に落ちはしまいかといふことだ。いッそ天保時代に於ける水野越前守の斷行を再演する氣ならいざ知らず、さうでない以上は、要するに、十分了解力ある人々の意見を當局者が採用するやうになつてす、べての文藝と自然主義に關するおもな議論の要點だけでも汲み取つて貰ひたいのである。（明治四十一年十一月）

語義の混亂

大木は高ければ高い程風を受け易い樣に、人物は偉くなるほど世間の評判がうるさい樣に、僕等の使用する語も亦、その時の流行につれて、特別に世人の注意とその口とにのぼるのが出來るものだ。その初めは、殆ど無意味または斷片的であつたのが、何かの都合かはずみで以て一部の人々に面白がられる樣になつた語があるとする。それが段段他の人々または社會に廣まつて行くに從つて、何か意味があらはれて來る。また、初めから意味があつたのなら、遊戲的、斷片的、一部的なのから、眞面

目な全稱的なのに進んで行く。そしてそれが具體的な意味から抽象的な意味に變つて行くと、もう、その語が棚の上に祭りあげられたのであつて、實世間の流行または實用をはずれてしまうのだ。

たとへば、『實用』といふ語は所持品や日用道具に當て塡められてゐる間は、最も下等な意味や滑稽の趣きも這入つてゐる代りに、また最も實際的な、內容的な點もある。ところが、それが說明され、分析され、抽象されて、道德などの上に（よしんば、『實踐』などともぢられて）使用されるに至つて、餘り眞面目過ぎる使用となつた爲め、つまり、荷が勝ち過ぎたので、その含んでゐる內容と釣り合ひが取れにくゝなつた意味がその實際の內容と添はなくなつた。更らにそれが頭腦の淺薄狹小な人々ばかりの多い英語敎育界に這入つて、特に實用英語などいふ標準で敎授法や敎科書が出來ると、たださへ淺狹な英語敎師等の頭腦が一層淺狹な範圍でうごめく樣になつて、その知識と實力とが實用といふ小範圍でわざとらしい槪念と抽象とを專らにするから、その實用英語がその實不實用なものになつてゐるのを忘れてゐることになる。現今の英語敎育は殆ど皆それだ。中學を出た學生、更らに進んで高等學校の生徒で、多少英語に熱心だと目ざされるものが、却つて少しでも六ケしい書は讀めず、それかと云つて、會話は『お早う』、『おやすみなさい』的に習つたことだけが出來て、殆ど全く英語その物の活用が出來ないのは、すべてかういふ敎授法から來る缺點である。『活用』といふことを『實用』といふ語で誤まられたのは、實踐道德を說く學者達にもあることだ。

言語の亂用がつひに世人を誤るに至ることは、考へて見ると、非常に恐るべきことだ。要するに、

すべてその發言者の無學と無責任から來る。たとへば一二年前、かの宮崎眞なる誇大妄想狂――のちに瘋狂と診斷されたもの――を萬朝報は『大哲學者』といつた。また、その人が精神病院を逃出すと多くの人々は『大哲學者病院を脱出す』といふ樣な風に云ひ傳へた。

すべて無學と輕卒とから來るのだらう。宮崎なる人の場合で云へば、之を哲學者といふのが、既に間違つてゐる上に、『大』の字をかぶせた。もツとも、『精神病院の』といふ說明があつたから、反語のつもりかは知れなかつたが、眞に反語のつもりなら、それも單に『精神病院の哲學者』といふのが妥當であつたらう。『大』の字だけが不當だ。この事は曾て某雜誌で鳥渡述べたことがあつたが、思ひ出したから再言するのだ。

言語を亂用するといふことは、一般人の狀態としては、全く一洗してしまうことは出來ないが、言論の主たる記者や敎育家等は充分注意をする樣にして貰はなければならない。殊にその注意の必要なのは現代にあつて、現代の人々に密接な關係のある用語だ。然し、それも、生眞面目に正面の語義を追つてる間は容易だが、時と場合によつては、反語、冷語、熱罵の語として發言する事もあるから、僕等の注意は實に複雜となつて來るのだ。

『哲學』とか、『哲學者』とかいふ語は、一般人に密接したこともなく、また密接する事もないから、まだしも大した影響はない。また、『悟り』とか、『解脫』とかいふのは、非常に僕等と密接した時代もあつたが、今では最も抽象的な、最も空理的な語として、神棚へ祭りあげて置くばかりだ。悟るとい

ふことが一刹那の感想であつて、その刹那をはづれゝばもう迷ひである以上、『悟り澄ます人』がありとすれば、それは山寺の解脱僧——生きたミイラだ——でなければ、野狐禪の俗物だ。近頃かういふ語並にその類語が加藤咄堂氏や故綱島梁川氏やによつて、青年活氣の學生間に亂用されてゐるのは、僕等の樣な迷ふもの——乃ち、眞の現代人から見ると、淺薄輕浮・空理空想の無實力的風潮を一時でも惹き起した罪があると思はれる。

またわが國に於て、『自由』といふ語も、人權の自由、信敎の自由、言論の自由、出版の自由など叫んでゐた時は、まだ社會の事情とよく釣り合つて、生き／＼してゐたが、この語は『板垣死すとも自由は死せず』の時代を絶頂として、段々抽象的になつて來て、現代の如く、如何に自由の理は明かでも實力が添はないと何の役にも立たないことが分つた時代には、適切な使用は寧ろ無言の間に行はれてゐるのだ。蘇峰氏が平民主義を棄てゝ帝國主義の記者となつたのも、一面には、この無言の推移を怜悧に早く看破したからだらう。

もつとも、言語の死活と亂用とは別だが、活きた語を殺して使ひ、死んだ語を生きてゐるかの樣に用ゐるのは、矢ツぱし一種の亂用である。『實用的』といふ語を今の英語敎師の樣に考へるのは、生きた語を殺してしまうのだ。解脱論者等が『悟り』『悟入』などいふ語を得意然と用ゐるのは、死んだ語を現代に生かしそこなつてゐるのだ。生きた語が生きたまゝに亂用されてゐる例は、ハイカラなどいふ語であらう。ハイカラなる語並にその趣味に就ては、雜誌趣味で云て置いたから茲では云はない。

少し外國の例を調べて見たが、かの『デカダン』（頽敗的又は頽廢者）なる語は十九世紀の後二十年間亂用されて、多くの人々に迷惑をかけた。この語の正確な意味は、何か惡い、不健全なことを含んでゐた。羅馬帝國の晩年に於ける様な時代　文明の惡癖ばかりで且野蠻の長所もなかつた時代の狀態を意味してゐた。然し、いろんな階級の人がいろんな意味にこの語を使用したので、その人々特有の、乃ち、地方的な、局部的な意を有することになつた。

一八八〇年代には、耽美主義派を冷笑する語で、從つて、彼等を舊式寫實家や保守的批評家等が冷笑する語であつた。この語は、また、文學的社會主義派が英國の貴族並に上流の中等社會を攻擊する爲めに使用された。之に反して、また、米國舊來の新聞紙が同國の極端改良家や急進實業家を攻擊するに使用された。更らに又、スペインがアメリカの侵略を防ぐに失敗した時、スペインに對して使用された。羅馬法皇は新教の合理的傾向に對してこの語を使用した。また、その新教派は法皇の宗教制度に對してこの語を使用した。また、野蠻なトルコ人と文雅なイタリヤ人とに對して一様に使用された。また中世主義家、共和黨員、無神論者、詩人等に對して使用された。

然しかういふ別々な場合の別々な意味はあるにしても、その間に一つの定つた流れ、乃ち、隱れた意味があつたので、つひにはそれを特に標榜する詩人も出來た。佛蘭西では、一八五〇年代に、同國批評家等が羅馬帝國滅亡史からデカダンなる語を引いて來て、之を以つてテオフイルゴチエ、殊にボドレルの行き方を批難した。ゴチヱやボドレルは、他の職業者等が己の形容詞を拒むと同様、頻りに

之を辯護したが、ヹルレンなどの表象派になると、却つて之を名譽の語として、初めにはデカダン派を以つて標榜したのだ。

デカダンなる語義の根柢には『人工』といふことゝ、『敏感』といふことが潜伏してゐたのだ。ヹルレンの英譯者アシュモアヰンゲートも認めた通り、デカダンなる語は最も多く詩人に對して使用された。それはその筈で、文明世界の一般人が、いよ〳〵散文的頽廢を來たして來るから、その狀態に生き殘る詩人はます〳〵頽廢的天才でなければならない。その場その場を甘く逃げればいゝ國民と政黨者流とは、この語を以て呼ばれるのを侮辱の樣に思つて避けたが、詩人はこの狀態に踏みとどまつて、ます〳〵奮鬪しやうといふ氣を起したのは、その持ち前の天職を追行した所以だ。

人工と敏感とがデカダンの本義だとは云ひながら、最も人工的な法皇はデカダンではない。その人工的は抽象觀念的で、官能の敏活と融通力とを缺いてゐる。また最も敏感と云はれたバイロンはデカダンではない。その感覺は觀念的技巧の爲めに驅使されて、敏活融通の方針をあやまつてゐる。デカダン派の內容的技巧は乃ち無碍の發想でなければならない。この發想に達すれば、デカダンなる語に對する病的、疲勞、狂氣、淫逸、害惡、衰頽等の形骸的解釋は返り見るに足りなくなるのだ。

今、一つ、『ファンドシエクル』)Fin—de—ciécle)『世紀末』といふ語だ。これも亦、デカダンやわが國のハイカラ同樣、歐洲人を迷惑させた語だ。佛蘭西の雜誌や書物にこの語が亂用または適用された例を、マクスノルドーが二年間に拔き出したといふのを見ると、隨分面白い。

一王があつて、位を讓り、國を去り、巴里に來つて住居してゐる間に、なほその國の政治に干渉してゐたが、賭博に負けて金錢が入用になつたので、百万フランをその國から送つて貰つて、その代りに、爾來決してその國の政治に口を出さないことになつた。これが世紀末の王さまと名附けられた。

また、一僧正があつて、敎役者侮辱罪で科料金を出さねばならなくなつたので、之を信徒に訴へる演說をして巡り、その度每に好奇心に驅られて集る聽衆に帽をまはしたら、罰金に百倍する金が出來た。そこで世紀末の僧正さまだ。

また、殺人者ブランジニが刑の執行を受けて檢屍される時、秘密探偵部長がその死體の皮膚を切り取り、之を鞣めして煙草入れや名刺入れに作り、これを友人間に分配した。そこで世紀末の官吏だ。

また、一米人があつて、瓦斯製造所で結婚式を擧げ、直ぐ輕氣球に乘つて、ホネムンを空中に登つた。そこで世紀末の結婚だ。

淸國大使館の屬官が自分の名を以つて佛文の書を著はし、淸政府の公債に就いて諸銀行と談判を初め、自分も少なからぬ前金を口錢として受け取つたが、直ぐその著が佛人の著であり、屬官は諸銀行に對して詐欺を行つたことが分つた。すると、世紀末の外交官だ。

公立學校の學僕が其友と散步しながら、詐欺的破產をやつて入獄してゐる父の監獄のそばを通り、それを指さして、『あれは執政者の學校だ』と云つた。すると、世紀末の倅だ。

また、一處女があり、一方が『私は某さんを思つてゐるのだが、親は金持ちの男爵に行けといふの』

と歎息すると、一方が『ぢやア、男爵へ行つて、早く某さんを出入りさせる樣にしたらいゝの、さ』と忠告した。すると、世紀末の令孃だ。

以上の用語例を見ると、殆ど一つ一つには關係がない樣だ。賭博をして政權を賣る王と、自分の罰金を聽衆から徵集する僧正と何の關係があらう？　人皮の鞣めし皮と風船結婚と何の關係があらう？　淸國の詐欺屬官と間男をすゝめる處女と何の關係があらう？　殆ど文字の亂用だ。そして、獨逸人などになると、英米人が『デカダンス』を正直に表面的に衰頽と解してゐる樣に、『世紀末』を單に無作法不合宜と誤解して居る。

然しこの語の本土佛蘭西の用語例を總合して見ると、その本義は習慣と道德との傳說的見解を卑しんだことらしい。傳習敎理が理論上なほ勢力を逞しくしてゐるのを、實際的に打破したといふ意義がある。

この議論は實は、『自然主義』といふことがわが國で亂用されてゐるのを見て、僕等は之が主張者として餘り心よく思はないので、思ひ付いたのだ。僕はこの語が適用または誤用される例に注意して來たが、――そして、どうせ、普通一般の世間では、流行語をもじつて行くのだと、覺悟はして見なければならないが、――或人の招待狀に『自然主義でよろしく』とあつたのは、羽織はかま若しくはフロツクコートで固くるしく來るに及ばない席を豫報して居たのだ。『けふは自然主義で飮まう』などは、無禮講の意味だらう。こんなのは無邪氣な滑稽的用法だ。

某縣某所の小學校で、校長を初め職員がおほ酒呑みで、講堂に酌婦を招き、三絃を彈かせ、高歌亂舞したといふ報道に、『自然主義の小學校』といふのがあつた。これは無規律の意味だらう。こんなのは反語だらう。某川岸を舟で下だつた人が、その川の山腹に男女が相集つてこちらを見てゐるのを見たが、その仲間の少女らの赤い裳裾がちらほら風に靡くのを『飛んだ自然主義だ』と叫んださうだ。これは挑發的の意味で、滑稽を含んだ冷語だらう。待合の天井へ忍び込んだ泥棒が、節穴から下をのぞくと、藝者と客とが、『自然主義の眞ッ最中』とあつたなどの記事は、全く說明をするまでもない誤解的冷語だ。

沙翁劇『得意のまま』の飜譯出版廣告に、『自然主義の大福音、樂天主義の大光明』といふのがあつた。こゝでは自然主義を放縱・無規律、肉慾に耽けることに誤解した結果、淺薄な樂天主義の意に誤用したのだ。

かういふのはすべてまだ許して置いていゝとしても、誰れかゞ自然主義を肉慾主義と云つてから、世人並に新聞記者等は殆ど全くさうだと定めてゐるらしい。わが國人は。英米人の『デカダンス』に於ける、獨逸人の『ファンドシエクル』に於けると同樣、目下の問題をたゞ單純にまた容易に解釋してしまう惡弊がある。渠等は『自然主義』なる流行語の複雜な本義を極めやうとする奮發心に乏しい。然しこの語が曖昧に、無意義に、滑稽的に、反語的に、また冷語的に使用されてゐる間にも、形式の打破舊慣の破壞といふことだけは、おのづからそこに認められてゐるらしい。それだけでも僕等は多少こ

の主義の一面が社會に行はれて行く一端を窺ふことが出來る。然しこの主義の內容に至つては、まだまだ一般に正認されてはゐないのである。その正認さるべき本義は、僕等の間にも二派か三派に分れて解釋が違つてゐるが、それを云ふのはこの文の目的ではないから、たゞ言語の亂用を少し謹しんで貰ひたいと云ふだけに止めて置く。（四十一年十月）

文界私議

英語でムード(mood)佛語でユモル(humour)といふことが、多少思索力ある人士に重大視されて來たのは結構だ。僕は昨年詩の流派を論ずる時、ヹルレンの如き詩人を man of mood といふに當り、用語にこまつて『情調の人』と譯して置いた。つまり、感じ、こころ持ち、氣分、行き方、風、態度、調子などいふ意味の人だ。そして、『新體詩の作法』に於て、かういふのが新詩歌には最も必要なことを示めして置いた。本年になつてから、南山生は、早稻田文學(九月號)に於て、この問題に論及し、一方には遠藤博士の『社會情調と敎育』を批判し、また一方には獨人リブスの美學中にある『調子及び調子感情』を引用した。

南山氏が批判した遠藤氏のは讀まないから知らないが、遠藤氏には別に『言語表情論』(哲學雜誌九月號)があつて、それにも、言語の發音、アクセント、並に言語その物全體としての情調があること

を說いてある。それがリブスの議論と系統上の關係があるか、どうか知らないが、南山氏がリブスを紹介したのを見ると、僕等の云ひたいことを云つてある。『調子は寧ろわれの存在狀態である、言ひ換へればわれわれの在りかた、動きかた、乃至生きかたその物である。……調子に伴ふこの感情を吾人は調子感情と名づける。』乃ち、情調である。南山氏は之を調情と云はなければならないと說明した。藝術的名稱はどうあるにしろ、これが乃ち多少新らしい意味を加へた氣分である。

遠藤氏はこの氣分を單に感情上の問題として取り扱つてゐるが、新らしい意味の這入つた氣分は、南山氏の云つた通り、單に感情分內のことではない。リブスは之を『現存せる心的生活の全般の態度樣式』であると云つたのはもッともだ。人間の心力は知、情、意の各區別的作用を格別に實現することが出來ないと同時に、心力は身體(諸官能)を離れてあるものではない。新心理學者福來博士が意志の有無を重大な要素としないで、刺戟に對する諸神經組織の圖體的反應を以つて人格の存非を論ずるのは、リブスの所謂『心的生活の全般の態度』に相當しよう。それが直ちに僕の所謂『心熱的態度』である。そしてこの態度をなさしめる物、乃ち、神經の反應を引き起す刺戟が外存的でなく、獨存自我に內存する樣になると、人生全體の幻影(それが新藝術の材料)がそこに活現して、自然主義的表象を完うするのだ。

氣分の意味はそこまで達しなければならない。佛蘭西表象派の所謂『官能の開放』も、そこまで來てこそ、初めて全く非觀念的な融通がつくのだ。惜しいことには、表象派が非我を認めたのは、無碍の

氣分を發展することが出來なかつた所以だ。ボドレルでもヱルレンでも、一定の範圍内で觀念的に輪廓を劃してゐる。南山氏が『氣分を尊重するの說（早稻田文學十一月號）を爲すのは贊成だが、まだ非我に對する氣分を認許する間は、心熱的新藝術または人生觀を採用すべき氣分を說くには至つてゐないのだ。人生は所詮迷ひである。否、幻影である。生命とするところは、最も根本的な、最も現實的な幻影を攫み得ればいゝのだ。それには、最も鋭敏な融通力を有する神經的氣分で行かなければならない。このことは慶應大學並に曹洞宗大學の文學會で演說したのがあるから、參照して貰ひたい。

（明治四十一年十一月）

『先驅者』の內容

伊太利の文藝復興期に於て、レオナードダヸンチを先驅として、ミケランジエロやラフアエルが世に出て來た當時の有樣をメレジコウスキの歷史小說に據つて云つて見たい。ミケランジエロは畫家で、彫刻家で、聖ペテロ伽藍の意匠家で、フロレンスの諸城を建築した人で、詩人で、學者で、思索家で、また豫言者であつた。然し、レオナードになると、それよりも尙規模の大きな、多方面の人物で、殆ど超人間の能力範圍に達して居たと云はれるのだが、當時はあまり世に知れずに濟んでしまつたのだ、それは、當時の伊太利が宗敎上の迷信に滿ちて居たので　藝術品はすべて贅澤品と見爲され、た

またま古代ヸナスの女神像などが地中から掘り出される、して、その彫刻の出來が立派であればある程、惡魔の出現だと云つて、十字を切りつゝぶち毀されてしまつた。耶蘇の云つた樣に、世の終りは近づけりと叫んで、キリスマの香烟が取り卷く敎壇に立つたサボナローラは、佛蘭西軍の侵入に對しては、國民に取つて、僧日蓮の如く、偉大な傑僧であつたが、その藝術に對する態度は丸で頑迷不靈の熱狂家に過ぎなかつた。渠はかの有名な――僕等は聽いても身の毛がよだつ――『贅澤品の燒き棄て』を遣つた、その火の中から自分の得意な畫面が最後の輝きを發して居るのを、レオナードは見たこともある。レオナードは、また、自分の作つた巨像を、侵入軍が無殘にもうち毀して居るのを、泰然として見つめて居たこともある。

かういふ時代に住して、レオナードは殆どその鄕土を有して居なかつたのである。最初の恩人たるロムバルデの公爵は敵軍の俘虜となつてしまつた。國民詩人から見れば、こんな漂流生活は冷笑の價があるに過ぎなからうが、レオナードには、注文された仕事が、神聖だといふ考へばかりであるから敵であらうが、味方であらうが、そんな事には頓着しなかつた。今日は包圍された君主の爲めに城壁を建築してやり、明日はまた之を拔き取つた王に賴まれて、之が外堀の計畫を立てゝやる。して、その終生の目的で、而も成就しなかつたのは、空中飛行器の發明であつた。之が既に人間として神の意志に逆らふ企てだと云はれる上に、科學的研究と實驗とをしたり、古墳や山間を發掘したり、果實に毒をさして見たりするので、世間からは全く異端者、魔法使ひと見爲された。おまけに、渠は繪畫の

注文を受けても、三年や四年ではなかなか出來上つたためしが少いので、生活費が缺乏して、自分の弟子からして貰つたことも度々である。渠は、ヸナスの女神像を發掘した時、その顏面から骨格までを一々寸法で計つた程、數學的頭腦を持つては居たが、會計の事はすべて弟子に委して置き、弟子はまた師の心を惱まさぬ樣に、貧に迫つても成るべく之を知らせなかつた。爲めに、一度などは、これまで困つて居るのをなぜ自分に知らせなかつたと、その弟子と云ひ爭つたこともある。

渠の賴りとしたり、また愛して居た弟子のうちにゾロアストロ、ジオヴァニ、セザーといふ三人があつた。セザーは怜悧であるから、師を愛して居ると同時に、またその缺點を批評的に見て居たが、段段師の老い行くに從つて後進者の名が出て來たので、後には節を變じて、ラフアエルの高弟になつてしまつた。ジオヴァニは信念の深い若僧で、師の品性を信ずるところから、異端者ではないことを自づから辯じて居たが、如何にもその人物が大きくつて、疑へば疑へる點も多いので、一度はサボナローラの方へ逃走したこともある。然しまた歸參したが、自分の戀慕したキャサンドラといふ巫女が、サボナローラの徒に燒き棄てられたのと、宗敎の形式上、師を疑ふ念のまだ晴れないのとで、苦悶の結果、首を縊つて死んでしまつた。また、ゾロアストロは熱心な鍛冶屋で、一身を師の空中飛行器の完成に獻げて居たが、或日、師の留守に、師の意に反して、もう、大丈夫と確信して、飛んで見た。之が爲めに、大怪我をして、居ざりになつてしまつた。レオナードが死ぬまで連れて居た弟子は、この居ざりのゾロアストロと、今一人フランセスコといふ靑年がある。この靑年は、十一二の時、レオナ

ードの許に居たのだが。師の都合上。泣くのを無理に。お前はまだ少いから、十年經つてから來いと云つて歸したのをおぼえて居て、二十歳位になつて、再び舊師の門を叩いて來たのだ。この者は身についた財産があつたので。師の後年佛蘭西へ招かれて行く頃までは、大變にその點で盡したらしい。

レオナードは性質も沈着だつたが。その藝術は沈靜と冥想とを主として居た。それで、その精神は、當時の迷信を打破して、新宗教、新思想を懷いて居て、寧ろこの二十世紀の人であつたと云つてもいゝ位だが、その繪畫や彫刻の樣式を見ると、どうしても古代希臘の藝術を思ひ出さすのであつたところが、或日、後進で競爭者たるミケランジエロの作つた石像『ダヸド』を見たが、それが若くつて、瘦せて、裸體で、石投げ道具を執つて居る右の腕には脈管がふくれ上り、その左の手は胸さきにあがつて、石を持つて居た。その眉は引き緊り、目は遠く見張つて、ねらひを付けて居る樣で、低い額の縮れ毛がもう勝利の花冠を得た樣であつた。レオナードは列王記中の記事を思ひ出しながら、自分の競爭者の作品中に、自分に劣らない大才の發揮されて居るのを認めて、而も自分の行き方とはあまり反對であるので、一時は自分の製作力を疑つた程である。是は冥想、彼は活動、是は冷靜、彼は情熱、是は平穩、彼は暴風。相異なつた力に引かれて、レオナードはミケランジエロの作品に新らしい物を心讀したのである。この活躍たる石像! 而もそれが、さきに自分の畫を燒き棄てた熱狂家、サボナローラの燒き殺された場所に立つて居るのだ。レオナードは、サボナローラの爲めに自分の藝術品を失はれ、また自分の擧ぐべき名もそれが爲めに多く妨げられて、老い込んで來た。それに、ミ

ケランジエロ――これは藝術界のサボナローラとまで云はれる傑物――は、もう、その作を贅澤品とも云はれないで、血氣に委せて手早くやるから、その名聲は隆々として擧つて來た。レオナードがこの間の感慨はどうであつたらう？

これより二年前に、サンタマリアの建築石材中に、白い大理石の大塊があつて、誰れがへッぼこな彫刻家がいぢくり回してあつた。大家と云はれる大家は皆之を避けて、もう、何の役にも立たないと思つて居たのを、レオナードは引き受けて、之が寸法を取つて見たり、いろんな考へをめぐらして見たりするが、仕事がはかどらない例の癖で、ぐづ〳〵して居た。すると、別な人――渠よりは二十三歳も若いの――がやつて來て、何の躊躇もなく、非常な速力を以つて、日を夜に繼いで、二年と一ケ月で出來上らしてしまつた。レオナードは自分の作つた土の巨像に六年を費したから、この『ダヸド』の樣な大理石像を作つたら、何年かゝつたらうか、そんなことは考へて見る勇氣もなかつたのである。フロレンス人は、ミケランジエロを彫刻の技に於てはレオナードに比すべき者と宣言して居たがアンジエロ自身も亦遠慮はしないで、そのつもりで居たのだ。ところが、フロレンス共政國の新議事堂の第二壁を畫くに至つて、その第一壁はレオナードが引き受けたのだから、繪畫に於ても亦、アンジエロは競爭者とならうといふ意氣込みが見えて來た。

レオナードは先進でもあり、また老成者でもあるから、決して卑劣な考へはなく、始終好意と尊敬とを以つてこの年の若い敵に對したが、向ふでは、その猛烈な性情からして非常にこちらを嫌つて居

た。ミケランジエロには、レオナードの沈着は輕蔑に見えるので、人の誹謗を容れたり、喧嘩の口實を求めたり、あらゆる手段を盡して敵を倒ふさうとかゝつた。『ダヰド』の出來上つた時など、第一流の畫家、彫刻家等が貴紳の前に招集されて、その据ゑ付け場所の相談を受けたが、レオナードは建築家ギユリアノの發議に贊成すると、ミケランジエロは眞赤になり、レオナードは、嫉妬のゆゑを以つて、その敵の作品を誰れの目にも付かない片隅に置かうとすると罵つた。或場合など、彫刻家と畫家と、どちらが藝術上に高位を占めるかといふ問題が出たので、レオナードは例の奇矯な返答をして、『藝術は、手細工を遠ざかれば遠ざかる程、ます〳〵完全に近くのだ』と語り、繪畫には心の骨折りが多いが、彫刻には身體の骨折りが多いから、畫室は奇麗で、靜かだが、彫刻家の室はかな鎚や鑿の音ばかりで、而も切り屑だらけで穢いと云つた。アンジエロは之を人から聽いて、自分を罵倒したのだと思ひ、非常な返答をした。『このダヸンチ君、飯焚き女の私生兒には、きたない仕事(彫刻)を恥ぢささう。僕、名ある舊家の嫡子は、汗をも泥をも卑しまない』と。

フロレンス人は、この兩敵者の壁畫が、どういふ風に議事堂を飾る樣になるか、始終深く注意をして居た。然し、政治に關係のない競爭は、鹽の這入つて居ない汁の樣なものだからと思つてか、市民はわざと黨派に分れ、ミケランジエロは共和政府の味方で、レオナードはメヂシ侯の加擔者だと見爲した。どちらの黨派でも、誹謗惡口が盛んになつて、例の『ダヰド』の石像に石を投ずるものもあつたので、アンジエロは速斷して、これはレオナードが惡漢を傭つてさせたのだと憤慨した。或日、レオ

ナードはモンナリサジオコンダ——この婦人の肖像を畫いて居たのだ——に向つて、ミケランジエロと相語つて見たい、さうすれば自分の意は通じるので、自分は渠の敵ではないと云ふと、婦人は首を振つて、『とても渠はあなたを解しますまい』と答へた。そんなことはない、『渠はまだ自分の實力を知らないから、自分で恐怖煩悶して、猜疑心を以つて居る。』『渠はわが身と同格であるばかりでない、わが身よりは更らに强力である』と云つたことがある。また、一日、或宮殿の廊下で、ダンテの議論が起つて、レオナードもその仲間に這入つて居た。すると、向ふから、熊の樣によぢ／＼と步いて來る、からだの曲つた、骨節の高い、あたまの大きい、髮の黑い、鬚の不格恰な、衣服の粗末な男があつた。額は廣くツて、耳が飛び出て居るし、鼻の變梃な、而もその目蓋は夜業の爲めに赤く脹れて居た。これは、好んで地下の暗室で、小い圓ランプを額につけて仕事をすると云はれて居る、ミケランジエロであつた。議論仲間がレオナードの意見を促すと、レオナードはこのアンジエロを見て、『承はれば、ボナロチ君は大アリゲリの研究者だ』と答へた。アンジエロは目を擧げて鳥渡まごついた。一體、渠はいつも自分の醜を恥ぢて、ひがみ根性のあつた男だ。ところへ、丈の高いレオナードがほゝゑみながら、上から自分を見下したのを見たので、臆病は乃ち忿怒と變じてしまつた。『君身づから說明しろ、賢者中の最も聰明なる人、ロムバルデに賣られた者よ、書物は君に適當な娛樂だ。泥馬の線を刻むに十六ケ年を費した君だ、して、それを青銅に鑄込まうとする時、その仕事を投げうつて失望した君だ』と。レオナードは返答をしなかつたが、そのおだやかな　殆ど女らしい微笑は、悲しみ

の色を帶びて、弱みを示めして居た。して心中では、暴風よりも偉大な自分の平穩性をミケランジエロは解しますまいと云つた、ジオコンダの言葉に間違ひはないと思つた。

或日のこと、レオナードはサンタマリヤで、有名なマサシオの壁畫を、自分が青年の時にやつたと同じ樣に、研究摸寫して居る少年があつた。着て居るのは、繪の具でよごれた、古い黑服の、洗つてはあるが、粗末な手織りのリンネルであつた。丈のひよろ高い、頸はやさしくつて、白く長いので、娘ツ子の頸の樣で、顏付きは卵成りで、輪廓の正しい、靑白の、多少肉感的美性を帶びて居た。黑い大きな眼は、思想の深みはなくつて、天空の樣に虛無であつた。レオナードがこの靑年を二度目に見た時には、自分の『アンギアリの戰』を一心に研究摸寫して居た。渠はレオナードを見て知つて居たのは確かだが、話をしかける勇氣はなかつたので、先進者の方から聲をかけると、あわてゝ眞赤になり、半ば不遜な、而も小供の樣に無器用な挨拶をして、レオナードを自分の師とも、以太利大家中の最もえらい人とも崇めて居て、ミケランジエロの如きはその靴の紐をも解くに足りないと思ふと白狀した。レオナードはその畫いたものを調べたり、またその後相語つて見たりしたので、將來は必らず大家となる質があると確信した。この少年は、乃ち、ウルビノから來たラフアエルであつた。

ラフアエルは、當時、まだ未熟であつて、人の聲に對する反響の樣に感じの强い、また婦人の樣に影響を受け易いので、ペルギノやレオナードの摸倣をやつて居たのだが、その間にも人に勝れた新らしい情緖があるのを、レオナードは發見した。既に藝術と人生との奧義を推知して居た樣だし、レオ

ナードの場合とは違つて、知らず識らず、何の苦もなく、いろんな困難や失望や疑惑やにうち勝つて居た樣であつた。レオナードが渠に忍耐して自然を研究する必要や、繪畫の法則などを敎へてやると、やさしい眼できよろ〳〵見て、大家の意見はそんなものかと云はぬばかりであつた。一度、ラフアエルは意味深い言葉を語つてレオナードを驚かしたことがある。それはかうだ。『自分の氣が付いたのは、人が繪を畫いて居る間は、考へて居てはいけない、萬事それでよくなるのだ。』これは『藝術の爲めの藝術』主義を云つたのだらう。ラフアエルの全身は恰も理性と感情・愛と科學の完全な調和を證明して居た。これはレオナードが熱心に求めて居ても、その人物がラフアエルの主義に合はないところから、滿足な點に達することが出來なかつたのだ。レオナードは、ミケランジエロの競爭と輕蔑とに對するよりも、このラフアエルに對して、自分一生の事業を疑ひ、藝術の將來を疑ふことが大きかつた。前二者は人物があまり大き過ぎて、ラフアエルの樣にただ『藝術の爲めの藝術』といふ小範圍では滿足が出來なかつたのである。兎に角、老レオナードは二人の競爭者を發見したのだ。

こゝに又一つ面倒が起つたのは、レオナードの父の死である。全體レオナードは庶子ではあれど、父は正式の子と同等に持て爲すつもりであつたが、これが兄弟間の悶着となつて、六年間の訴訟事件が出來した。レオナードの不人望に乘じて、兄弟はその不人望の原因となつて居る魔術、無神論、國事犯、古墳發掘など、世人の云ふがまゝに、渠の名を强ひて傷つけやうとした。それに、また、議事堂の壁畫は失敗となつた。先きに經驗のあつたにも拘らず、この戰爭畫に油繪の具を用ゐて、尤もそ

のやり方は改良してあると信じてだが、仕事の半ばで、早く漆灰に繪の具を固まらせ樣と、火鉢に盛んな火を燃した、その熱で、たゞ表面の下部は乾いたが、上方の假漆や繪の具は乾かなかつた。いろいろ工風はして見たが、壁繪に油繪の具は以前と同じく又不成功であつた。競爭者ミケランジエロの言に據ると、レオナードは失望して、止むを得ず此仕事を放棄したのだ。此畵が渠を苦めたのは、ピザの運河工事や兄弟の訴訟よりも甚しかつたので、それは、フロレンス共和政府の官吏は、渠を責めて、出來もしない仕事を引受け、不當な大金を貪つたのは、詐僞者反逆者であると云ひ出した。レオナードは友人から借金をして、使つた金を全部返却しやうとしたが、政府の方では之をはね付けてしまつた。

渠は快々として樂まず、二日二晩といふもの、自分の室に引籠り、機械學、天文學、光學、解剖學、物理學、水力學などを窺いて見たが、氣を遣ることが出來ない。自分には何物が殘つて居るのだ、自分と死との間に何があるのだ？一生の苦勞はたゞ笑ひ草に過ぎないのか？『愛は知識の娘である』といふ主義は、もう、駄目になつたのか？こんなことを思ふにつれて、心に浮ぶのは、友人マキヤヹリの言葉『人生に最も恐るべき物は、貧乏でも心配でもない、病氣でも悲みでもない、また死その物でもない。精神の疲勞である。』かういふ時に、レオナードの唯一の慰めは、前にも云ひ及ぼしたことのあるモンナリサジオコンダの肖像であつた。この婦人の生きて居た時には、レオナードとの間には精神的戀愛が成り立つて居たので、その肖像が完成期に近づくに從つて、ますますこれが畵であるか、戀人であるか、自分ながら判斷がつかなくなつて來た。ジオコンダには良人があつたので、レオ

ナードは不倫に落ちてはならないと思ひ、暫く遠ぼ退かうと決心して、他へ旅行をすると、婦人も今は肖像に坐る樂みがなければ住地に居る甲斐もないと、良人の轉地を幸ひに、之について行つた。二三ケ月の後、もう歸つただらうと思つて、レオナードが歸宅して見ると、豈計らんやで、ジオコンダが急病で死んだことを知つた。嗚呼、その肖像は永久に未成品であらうか？　不斷かけて置く覆面を擧げると、畫家と亡きモデルとの間に一種の秘密があつたことがあり〱と分る。筆を加へる每に、その顏面は畫家自身に似て來たのであつた。ジオコンダの微笑して居るところは、どうしてもレオナードの口つきに似て居た。之に向ふと、實際が夢の樣で、夢の世界が實際の樣に感ずるのを常としたが、他の仕事に氣を取られて居たので、今、久し振りで之に對して見ると、われながら自分の創作の如何にも生動して居るのに驚いたのであつた。此場合を云へば、丁度、レオナード自身は疲勞して、その精神はこの畫幅に活躍して居る樣であつた。

一五〇六年、レオナードはフロレンス共和國の雇ひを解かれて、二十五年目に再びミラに歸ることが出來たが、前と同じ流浪者で、國もなく、家もなかつた。この際、ゾロアストロは未成の飛行器を飛ばして、爲めに墜下して居ざりとなつたし、また、單調なる政治上の變動や、凱旋門の建築や、天使像の修繕に倦んだので、一五一三年フランセスコ、サライノ、セザー、ゾロアストロ、ジオヷニを從へて、羅馬に行き、法皇レオ第十世の兄弟で、聖教會の旗手を勤めるギュリアノの配下に、畫家兼『錬金術家』となつた。そこで、ヷチカンの宮殿に行つて、下等な法皇に謁するには、一種の滑稽家と

なつて見せなければならない。これはレオナードの爲し得なかつたことであつたから、なか〳〵謁見を賜ふ時期が來なかつたが、そんなことはこれまで種々の苦勞をして來た畫家には何でもなかつた。然し、たゞ一つレオナードを俄かによわらしたのは、愛する弟子ジオヷニのくびり死であつた。それからと云ふものは、不斷の仕事も、讀書も、實驗も、執筆も、すべて興味を失つて來たのだ。法皇はたゞ、貨幣鑄造所完成の樣な、機械的工事を命じたに過ぎない。借金で首がまわらぬのを、弟子のフランセスコがあつて、融通をつけて居た。當時、初めて非常なマラリヤに罹つたことがある。

身體は衰弱して居ながらも、或天氣のいゝ日に、フランセスコをつれて、シスチンチヤペルに行つて、ミケランジエロの壁畫を見た。神が闇黑を分けて光をあらはすのや、人の墮落・救濟など、すべて聖書中の出來事や、麗はしい裸體人物・宇宙四大の精神・神人間の悶着や、知れざる救主の來たるを暗中に待つて居るのや、すべてかういふ大畫幅の面前に立つては、寸法も計れず、判斷も出來ず、老レオナードは自分と自分の作物とが全く無にされたやうな感じがした。自分の作つたものを考へると、亡びかゝつて居るセナコロや、既に亡ぼされた巨像や、『アンギアリの戰』や、その他數限りもない未成品! 自分は一生を着手と希望と用意とに費して、完成したものは一つもないのか? 然し、レオナードは自覺して居た。ミケランジエロには、物は皆混亂と渾沌とであつたが、自分は久遠の調和を見たし、また示めさうとしたのだ。人の心は、早晩、不和から調和に、分裂から統一に、暴風から靜寂に歸する。レオナードの理論に於て全く正當だといふ自覺は、成績に於て無能だといふ自覺を

一層痛切にしたのである。

レオナードはまた青年競爭者ラフアエルのことを考へた。渠はこの青年の壁畫をヷチカンで見て、大製作力は觀念の缺乏の爲めに平らげられ、目と腕との無缺なるは現世の諸侯に阿諛することに由つて消滅しはしないか、と疑つたことがあつたのだ。ラフアエルには、ジユリヤス二世や、レオ第十世や、官吏や銀行家の氣に入る樣に畫いた繪が澤山ある。渠は藝術を阿諛の具となし、强敵を都合よく持て爲しながら、苦もなく成功して、フランシヤの所謂『好運兒』になり澄ましたのだ。カーデナルの姪を娶り、美麗な屋敷を建て、貴顯外賓を引き。名を弟子の代作に貸し、作の完全を求めないで人望を得た。渠の最も不幸なのは、その衰徵の時期になつても、尙えらかつたことである。好運兒は自分並に藝術上の危險を自覺しなかつたのだ。ラフアエルの皮相的調和、不和原素の僞整頓には、ミケランジエロの紹介した渾沌、矛盾、戰亂よりも、更らに大きい危險が胚胎して居たのである。然し、後進の兩畫家とも、レオナードに負ふところが多いのだ。渠等は、實は、レオナードに由つて、陰影の理、解剖の學、配景の法、自然と人間とに關する知識などを知つたのである。然し、渠等はその發達がレオナードを越えて、二人とも今やこの先進者を滅亡さしたのだ。レオナードは靜かに步みながら、目を下に向け、首を垂れ、その顏は痛く悲みて、やつれて呆然として居た。この時から、レオナードは急に年を取つた樣になつた。

ところが、聖アンジエロ橋（この近所にラフアエルの屋敷があつた）に近づいた時、騎馬の行列に道

をゆづらなければならなくなつた。行列の引率者は、誰れかえらい人で、カーヂナルか、或は大使でもあつたらしい、立派に飾つた騎士十六名を從へて居た。ところが、この人物は豪奢を極めた風の青年で、灰色のアラビヤ馬に跨つて居るのを見ると、どうやら見たことのある顏であつたので——直ぐレオナードは思ひ出して、八年前に『ミケランジエロは君の靴の紐をも結ぶに足りない』と云つた、顏の青白い、臆病の、繪の具によごれた黑服を着て居た青年だと分つた。今やラフアエルはレオナード並にミケランジエロの競爭者となつて、『繪畫の神』と呼ばれ、今羅馬法皇のところへ謁見に行く途中であつたが、出づるにはいつも十五名以上の護衛兵をつれて居たのだ。レオナードを見て少し赤面したが、急に大袈裟な禮を以つて、帽子を脫して、首をかゞめた。その弟子共は不思議さうに𢿙衣の老人を見つめた。レオナードがふと氣が付くとラフアエルのそばにセザーが乘つて行くのであつた。レオナードに殘つて居る高弟はセザー一人で、これが自分の跡を追ひ、自分の法式を實行して吳れると賴母しく思つて居たのに、暫く居なくなつたのは、裏切りをしてこの老師を見捨てゝ、ラフアエルの第一弟子となつたのだと分つた。セザーは疑懼するところもなく老師を見たが、レオナードは却つて罪あるものゝ樣に凜を避けて、眼を地に向けたのである。ついて居たフランセスコは、氣の毒になつて師に問ひかける勇氣も出なかつた。

一五一五年、佛王ルイ十二世が死んで、フランシス一世が即位した。この王は伊太利の學者並に藝術家を自分の朝廷に引かうと思つたが、法皇はミケランジエロやラフアエルを手離したくなかつたの

で、レオナードが黄金七百枚の俸給で佛蘭西に行くことゝなつた。二競爭者は既に成功者で、澤山の財產を拵らへては居たが、レオナードは老いてます／＼貧乏であつたのだ。それに、やつとのことで法皇が一つの小い畫を註文したことがあるが、それもなか／＼出來上らないので『この鈍物何物をも成就すまい。甘く着手をするまでに、その結末を硏究して居る』と罵倒した。法皇の一言は當時の藝術界にも勢力のある宣言であつたから、ラフアエル、ミケランジエロ、誇學者ベムボー、滑稽家バラバロなどの前に、レオナードはもう眼中に置かれなくなつて居たのだ。六十四歲で、また漂流して、今度は佛蘭西へ行つたのだが、フランセスコ、ゾロアストロ、その他二名の下僕がついて居た。かのモンナリサジオコンダの肖像は、その時にもそばを離さなかつたのである。別に書き初めた『バプテスマの約翰』の像があつて、これは矢張り今日では有名な畫だが、その顏が進むにつれて段々女の樣になつて行くので、ジオコンダの覆面を取つて比べて見ると、餘程妙ではないか？　兩者はよく似て來たのだ。レオナードが年取るに從つて、その心中には亡き戀人が却つて生き／＼して居たのである。或日、王が畫室へ訪問に來て、無理にジオコンダの覆面を取らした。描寫の法は愚か、婦人の心中の秘密は悉く解決されて居るので、その肖像はやさしくほゝゑんで居るまゝに、まさに畫面をゆるぎ出さうに活躍して居た。女好きの王は之に見惚れてしまつた。

『これは誰れだらう！』

『モンナリサ、フロレンス市民の妻。』

『近頃畫いたのか？』
『十年以前に。』
『今もなほ美はしいのか？』
『王よ、もう亡くなつたのです。』
王は更らにバプテスマの約翰を見て、その微笑がジオコンダのに似て居るので、不思議に思つたが、二つとも買ひ取らうと云ひ出した。レオナードはいづれも未成品だと斷つたが、四千金と獨斷して王は歸つてしまつた。レオナードが感に迫つて、王の膝に倒れかゝつたのを、王は感謝したのだと思ひ違へたのである。獨身の老畫家には、ジオコンダの肖像は弟子でもあり、女房でもあり、生命でもあり、つまり最後の思ひ出であつたのだ。それで、王に賴んで、この二つは死ぬまで自分のそばに置いて貰ふことにした。意外の速力で進歩した約翰は、その進歩につれて、困難にもなり、また進歩の度が遲くなつて來て、よく見ると、それがモンナリサにも、またレオナード自身にも似て居るのに氣が付く樣になつたが、段々手がきかなく、筆が自由にならなくなつたので、フランセスコは師の樣子を見て、生きた精神と死に行く身體との最後の煩悶だと思つた。居ざりのゾロアストロは、また、部屋の片隅に坐わつたまゝ、目をぱちつかせながら、いつも歌ふ
『鷲と鵠とは飛び行けり』
といふ文句を歌つて居た。レオナードに取りては、この片輪が、自分の發明しやうとした空中飛行器

の失敗に對する、生きた非難であつたのだ。レオナードには、もう、死といふ物の外は日記の問題にはならなかつたのである。

レオナードの死んだのは一五一九年で——盛んな時は、鷲や蝙蝠の飛ぶのを見て、人間も空中飛行が出來ると確信して、飛行器の發明を理想として居たが、死の衰弱が襲つて來ては、窓の外を鳩が飛ぶのも氣が付かないで、たゞ何となく自分の上に大きな重い物が落ちて來るのを感じ、自分は之に對して大きな羽根を振はうとしたが、また重い物が落ちる。それで、また之を拂はうとすると、更らに又落ちることが甚しくなる。絶望の結果、大きな聲を擧げて、その場で、重力と羽根、墜落と飛行、上と下とは、永遠の生命から云へば、つまり一つであるといふ事を了得してしまつた。遺骸は聖フロレンチンの寺院に葬られたのだが、墓場の位置はどこであるか、今では知れない程だ。然し、レオナードは近世になつて生き返つて來た。藝術家は必ずしもその在世當時を目的とするものではない。

（明治四十二年一月）

「生」の評

小說を書く人や平常新らしい方面を持つて居る人には云ふ必要もない事であるが其れ以外の人に云ふとして一寸所感を述べてみやう。其れは先づ第一に書き方の上にある、從來の家庭小說の上には何

時も善人は善人、惡人は何處までも惡人と云つた風になつて居るが、田山君の此の作には其の樣な事はない。例へば彼の一番上の娘お米は母に對して孝子らしくやるが其れと共に亦悪い癖もある。此れなどは家庭小說の讀者の滿足しない點である。然し書き方が彼の通りな書き方であるからである。亦銑之助が病人の母に對して勉むべき時にも女房を庇護ふ如きも家庭小說の見方をする人には滿足されない點である。で普通の小說の讀者は斯樣なのを讀んで第一に面白くないとか、此の小說は嫌やな所だと、云ふ事になり易いが、此の考へは善人は何處までも善人、惡人は何處までも惡人と云ふ家庭小說式の考へで、斯樣な考へを懷いて居る人に對しては一應注意する必要もある。

進んで全體を通讀して見て如何にも人生の面影がすら〳〵と拵らへた樣な處がなく現はれて居る處は僕の感服する處である。何處を讀でも人生なる者が其場、其場に非常に能く現れて來る具合が甘く書いて居る。此は一つは田山君が之に對する材料が豐富ですら〳〵と延びて行き讀んでも氣持よく讀めるのだ。此れは島崎君の『春』などゝは餘程違つて居る。『春』を讀むと何となく書き現す點に於て何處を捉まへ、何處を書き現すと云つた風の處があつて面白くないが、「生」を讀むと此の感じは無い。此れは作者が充分知つて居た事實を書いたと云ふ點でらく〳〵と書けたでもあらうが、之れを取扱ふ作者の手際が上手であつたと云ふ事にも歸する。

此れと同時に缺點には人生の面影がすら〳〵と現れては居るが、何處を見ても現れ方が單純すぎる樣な感がする。尤も田山君は平面描寫と云うて居るから、其の意見でやつたかも知れないが、餘り有

り觸れた、餘り平凡な、水で云へば平びつたい處ばかりが現れて居る。此處はもつとひきしめた、結晶した處の方面を現して貰いたかつた、一例を云へば銑之助の細君お梅が懷姙したと氣がつくと用意して置いた襁褓を渡すなど云ふ事は尤もな事實だと思へるが、何處にもある事、誰にも經驗のある事で餘りに平面的、餘りに單純すぎる、何處を見ても斯樣な現し方がある。成程左樣云ふ處も作の行き掛りの上からは面白いが餘り出て來ると作全體として平凡になる。此れは作としては纒まつた缺點である。で此の作が自然主義の作として、亦た作であるが、何故自然主義の作であるか、人生の面影が出て來る、其れと共に單純すぎる描寫が多いので、此の主義から云つてさう進んだ作ではない、自然主義の作としては極く初步の進んだ佳作と見るのだ。自然主義なるものに土臺を置いた作とは云へるが、もつと進んだ書き方をする時代が來なければならぬと思ふ。餘談ではあるが二百三十頁四行めの「他界の神秘が人々の胸の底を衝いた」と云ふ文句には僕と立場の違ふ點が現れて居るが、此處で斯く云ふのは奥床しいが、抽象的である、他界の神秘など云ふ事は藝術と人生、我と非我の區別をたてゝかゝつて云ふ云ひ方であるから寧ろ無い方が善いと思ふ。

二百八十七頁六行目の「夜深く神前の蠟燭は消えて居た。」と云ふ文句には連日の疲勞と心配とで惱んで居たと云ふ句の後に來る語として能く言つてあると思ふ。「生」に就いては先月の末の「讀賣」に出た鶯蕎子の「生」讀後の感の誇張的な處を去れば大體に於て同意見である。（明治四十二年一月）

小說讀者と現代文界の缺陷

現代文界の缺陷はどう云ふところにあるかと云ふ問題を秀才文壇記者が持つて來たを幸ひ、ここに暫く之が思案をして見よう。文界といへば、廣い意味から見ると、その局に當る創作家、評論家ばかりではなく、これらの讀者までも含んでゐるものと見なければならない。そして、讀者の部類を分けて見て最も多かるべきは小說の讀者だらう。その仲間には、料理屋のおかみや、旦那を初めとして、女中、藝者、旦那取り、官吏、會社員、番頭、職人、職工、お三どんまで這入つてゐる。この第一部類には、講談物、敎訓物、滑稽物、さては卑俗な都新聞的小說か、無理に爲めになりさうに仕組みあげた家庭小說などが喜んで讀まれてゐる。小說讀者としては、最も通俗な而も無邪氣なものだ。渠等が喜ぶ通俗小說中で、蘆花氏の『不如歸』ぐらゐが最も勝れてゐるのだらう。『不如歸』なら、多少小理窟を列べたがる讀者の間にも、一般の女學生やぽつと出の男學生ぐらゐまではまだ引つけることが出來よう。かういふ讀者間には、舊式な、野暮くさい短歌や俳句はまだしも讀まれようが、新體詩や評論文などは全く猫に小判だ。

その一段うへの第二部類に屬すべき、多少要求の出來て來た讀者とは、どんな仲間かと考へて見ると、先づ學問に近づき出したと共に都會的空氣を呼吸する、またしたがる男學生並にそれと競爭心の

出た女學生を初めとして、第一部類の作物に飽きが來た會社員や官吏の細君並にその御亭主、道樂氣のある敎育家、學者・法律家・多少見識ある文學好きな商人、わが國の趣味素養が餘り附かないうちに外國へ行き、あちらの社會で小說ばなしを聽かされて歸つた語學者、哲學生・外交官などであらう。上流社會の婦人連にも、こゝまで進んでるのが隨分あるらしい。かういふ人々は、多少新らしい敎訓小說・抽象的で肉附きの薄い理想小說・然らざれば、寫實小說や傳奇小說や餘裕小說までしか認められてゐない。敎訓小說や理想小說は・坪內逍遙氏の『小說神髓』で或程度まで否定されて以來、その純粹なのは殆どないから、外國語のやれるものらは、多くそれを求めて外人の作物に向ふが、其他の小說としては、紅葉、露伴の作を初め、宙外氏や柳浪氏程度の小說の爲めの小說、皮相寫實の天外物、用語と事件ばかりが奇怪な鏡花物、餘裕と茶化しとを同一視した漱石物などまでは認められてゐる。また、何か違つたものが欲しいと云ふところから・中核（なかみ）にかまはず・逍遙氏の所作事本位の樂劇も認められる。そして・評論などは殆ど注意されまいが、新派の短歌俳句は勿論・新體詩も歌俳界の修辭脈を引いた古典的な詩、技巧專門詩、または直情詩、たとへば泣菫、鐵幹・醉茗、花外諸氏の作までは分るものがあるらしい。

第三部類の讀者になると、まことに心細いほど數が少い、その代り・文藝なるものがよく分つて來ただけは賴母しい。第二部類の讀者から第三部類の讀者を橋渡しさせる秋聲・風葉兩氏の作を初め・その他に自然主義的傾向ある作が讀まれるのであるから・その讀者は評論家、創作家並に評論や創作

をやらうと心がけてゐる文藝志望者連を初め、それらの友人、親戚、家族、男女のハイカラ學生、文藝に一隻眼を備へた新式學者、新聞記者、官吏、實業家、並にそれを刺戟する夫人連等を除いては、自分の地位に信用を置かしめようとしたり、何か自分の手柄を見せようとしたりする爲めに、鵜の目鷹の目でわざと嚴格に肉慾的、挑發的記事を發見指摘しようとする宗敎家、敎育家、風俗取締り掛りぐらゐなものだらう。兎に角、渠等に認められるのは、自然主義者またはその傾向ある人々の作で、白鳥、花袋、藤村諸氏の小說が先づその標準であらう。此種の讀者には、生田葵山氏は出來そこないだし、風葉氏は文章がうまいが中核がなし、秋聲氏は中核があつても文章がとゝのひ過ぎて却つて引き立たない樣に思はれてゐる。詩や散文詩に於ては、有明氏のは風葉、秋聲二氏の小說と同格に於て、泡鳴自身のは修辭や美學を逸した內容的デカダン詩として、認められてゐよう。評論の云爲されるのは、この部類の讀者に限る樣だ。

以上三部類の讀者、並にそれに相當する作家等の狀態を考へて見給へ。第一部類は、どの國、どの時代にも多數であるのは、小學敎科書やお伽噺が最も數多く賣れると同樣な理由だが、現代文界の長所や缺點を知るには、第一部類から第二部類を經て、第三部類に進む工合を考へたなら分らう。前者の數に比べて、後者が割合に多くなつただけわが文界は一般に進步したわけだ。雜誌が自然主義の小說で賣れる樣になつたし、新聞紙さへ多少同じ樣な小說を求め初めたのを見ても分らう。然しまだ第一部に近い讀者や作家が多いだけ、現代文界が一般に低級の狀態にあるのだ。

どうしてこの缺陷が直り難いかと云ふに、讀者の頭腦が低いのに乘じて、作家等が奮發努力をしないでその製作物を投與し得られるからだ。無獨創だが、型もしくは內外人の或作を摸倣したら、それでもその作家の作として讀んで貰へる。自分の名を以て代作を發表するなどは、讀者もその作家の獨創までは思ひ至らないで、たゞぼんやりと面白がつてしまうからだ。そんな狀態であるから、新作家が大した作風も定らないのに、ずん〳〵現はれることが出來る。紅葉露伴の出現時代もさうであつたが、文學者の活動時期が短いと歎かれるのは、乃ち、それが爲で、實際の素養と獨創も出來ないうちに、早くえらくなり、またならせる者があるからだ。僕などは、詩に於て認られ出したのは漸く日露戰爭時代、明治三十八九年頃からだが、藤村以前からやり出して、それまでに殆ど十六七年かゝつた。花袋氏は勿論、白鳥氏もその小說に於て認られる迄の苦心と落膽とはやつぱしさうであつたらう。然し、全體に於て、ぽつと出の作家が多いのは文界の一大缺點だ。

ぽつと出の作家にして今や大家となり澄ましてゐるものは少くはない。渠等の苦心して來たのは僅かに文章の上、または考案、プロトの上ばかりだ。渠等の出世工合は、狂言作者に對する作者見習の如く、弄文駄句の爲めに職人的素養をつけて來ただけだ。中には食客や玄關番のにほひがいつまでもくつついてゐるのがある。そして、讀者も亦之を判定してしまうことが出來ない。渠等は、文藝根本の意義に於て無素養、不用意であつた。こんな手合は多く外國語の讀書力がない。多少外國原書を拾ひ讀みするものがあるとしても　外國詩やわが國の新體詩を解する力はなく、また解しようとも思ひ

至らない。渠等が文藝上の理窟を云へば、教訓主義でなければ娯樂主義、娯樂主義でなければ淺薄な理想主義、または舊美學的、形式的な情緒主義を出ない。それさへも餘り分らないものになると、ただ情實と團體の力によつて其場を胡魔化して行くのだ。出初めに新體詩をやつた經歷ある小說家が割合ひに深い根底を持つてゐるのは、外國語の力があると同時に、文藝の本義にも觸れ得たからであらう。且、文界に認められるまでに隨分年限がかゝつたことがその人々をしツかりさせた一原因であらう。シエキスピヤ、イブセン、ダヌンチオ。メテルリンクなどは、詩から劇または小說に這入つたものだが、わが國でも、獨步、花袋、藤村、泡鳴諸氏のことを考へて見たら分らう。

以上はおもに第一部類並に第二部類に屬する缺點だが、第三部類の上級作家、評家、並にその讀者にも決して此缺點を全く脫してゐるとは云へなからう。露伴、逍遙、天外、漱石諸氏の如き、第二流以下の人々は勿論、現代第一流に向ひつゝある作家等にも、獨創の色が曖昧で、用意の仕かたを誤つてゐる點が見えるのもある、情緒主義などは、渠等の作詩時代に既にその缺點が分つてしまつたとしても、その反動があまり皮相な程度の客觀に停止して、描寫の態度と人間としての態度とが餘り懸隔してゐるものがある。これは必らずしも小主觀に歸れといふ意ではない。僕の所謂破壞的主觀の追行力が足りないので、藤村氏にせよ、花袋氏にせよ、まだその描寫の脈搏がもつと太く、强くまたは深くなる餘地を存してゐる。現代人の最深根本の要求なる心熱的態度に進めないのは大缺點だ。或雜誌記者が心熱を單に情熱と思ひ違つてゐるのを僕はどこかで讀んだことがあるが、情熱は單にパッション

のことだが、僕の所謂心熱はパッショネートソート（情化思想）を產出すものだ。花外氏今月の詩に『火盞に血と膏（わが胸をナイフに裂きし）を盛り』とあるは、ただ言葉の上の情熱であつて、思想と眞實とを合致する力がない。つまり、情緒主義や直情主義では駄目なのは勿論、思想的內觀力が不足では駄目だ。そして現代の文界は上下一般を通じて、要するに、その樣な思索力の缺乏が最大缺點である。すべての缺陷はそこから出るのだと云つてもいゝ。そして、第一流に向ふ作家、評家等にも、それに氣がつかないものがありとすれば、さきに擧げた第一部類から來る戲作者脈がなほいまだ殘つてゐる證據にならう。

それから、何かと云ふと、文界の墮落とか、不眞摯とかを叫ぶものがある。然しそれは無責任な手段でなければ、文界に親しみの薄い學者、言論家等が自然主義小說の材料の外形を見て、無責任な論者の手段または空氣焰に雷同してゐるに過ぎない。また、文藝家の行爲に對して飮酒、女色などを罪惡の如く喋々する眞面目な論者があるが、酒色を罪惡に使ふ馬鹿者もあるとしても、酒色も亦努力奮鬪と同樣、自己の發展、生存慾の活動たることもあるのを知らなければならない。また、無解決、無理想の聲が高いと、その內容の如何を知らないで、文藝革新會の諸氏の如く、直ちにそれを習俗的に解し、解決や理想がなければ人生は成り立たないと攻擊するものがある。これも人生その物が既に無解決、無理想な自然であることに思ひ至らないのだ。こんな不了見も亦思索力の乏しいところから來るのだ。自然主義者等は現代に於て比較的に獨創な思索力を有して、而もその態度が眞摯確實な方だ

といつてもいゝ。眞摯確實なのは、其實、思索力が增したのだ。必ずしも哲學の形式を踏めと云ふのではない。必ずしも系統的、論理的たるを要しない。エマソンの如きは無系統、非論理であつたが、十九世紀の大思索家だ。ゴルキイなどは、その小說中に、時々へぼ哲學めいたことを云ふが、それが作中人物に乘り移つて活躍してゐるのは、自己獨特の思索的生命があつたからである。白鳥氏の如きも、ゴルキイと同樣、哲學書などを正式に讀みこなしたことは少なからうが、その人としての思索がしんみりとその作中に現れてゐる。つまり人としての思想と官能との無碍融合が必要だ。さういふ點が、現代の自然主義者にも、ありとしても、まだ〳〵少い。他派の作家、評家等にはなほ更らない。

以上は、實例と相照らして語つたのであるから、如何に一般的な指摘でも、決してあり振れた空氣焰や、無責任な說明ではないと信ずる。

その他、部分的な缺點を擧げると、先づまだ小便くさい作が多いことだ。天外氏の寫實小說や逍遙氏の樂劇も、小便くさい域を何ほども脫してゐない。古くさい材料や表面的な寫實を古いまゝに、表面的なまゝに使つてゐるのは、よく云つても、單純な初戀ぐらゐの程度だ。作家の年齡が進むにつれて、その思索力も進んで行きさへすれば、實際に戀を取り扱つても、老年者の心にも燃える樣な靑春の情を發見することが出來るし、また靑年者の胸中にも老廢慘憺たる生活の勞れを見出すことが出來る。戀と云へば、靑年男女に限り、頹廢は老年にばかりあるかの樣な描寫法は、旣に紅葉時代に盡きてゐる筈だ。且、壯年者が靑年時代の情を妻に對してでなく、他の婦人に向つて新たに引き起すこと

がある。これはダヌンチオの『ジオコンダ』、メテルリンクの『アグラヹンとセリセタ』等に描かれたセカンドラヴ、第二の戀である。花袋氏の『蒲團』並に泡鳴の『耽溺』も、この第二の戀を歌つたもので、かの初戀の如く純潔なところがあつても、それが、世の辛慘を嘗めて來た壯年者だけに、複雜な苦悶や濁想に混じて、强烈な生存慾を發揮してゐるのだ。然し普通の作家や評家は、僕等が注意してやらなければ、そんなことには氣が付かない。頭腦感想の貧弱なもの等が多いのは實に我文界の耻辱だ。

また、現今でも、さきに云つた見習作者的弊風が殘つてゐて、文藝家は自分の職業以外のことを多く知らない、最も手近かな政治や實業のことさへ餘り知らないし、また知らうともしない。まして、宗教や哲學のことに於ておやだ。そんなことを知つたら却つて心が迷つて、筆を取る邪魔になると告白する樣な不憫なものが、立派に小說家と云はれてゐる仲間にもある。

そして、たま〳〵鳥渡目立つ形式的な宗教論や哲理說を讀むと、無上に感心してしまつて、それが自分等の眞正な傾向と矛盾するものであるを悟らない樣な滑稽が多い。故綱島梁川やプラグマチズムの紹介者等に對しても、無神經なるものは何等の注意もしなかつたのは怪むに足らないが、多少神經の敏活なものは直ぐたゞ尤もらしく思つてしまつて、僕等が別途の人生觀や新哲理を提唱または暗示するまでは、殆ど口出しも出來なかつたものが多い。たゞに自分の職業以外に限らず、自分の社會以外のことをも知らない。殊に華族に關する描寫などは、いゝ加減な當て推量が多い。

また、現代文界には立派な滑稽または諷刺の作物がない。靑柳有美氏では、まだ綠雨には及ばない

し、海賀變哲氏では篁村氏までも行つてゐまい。駄洒落や駄法螺的皮肉では、この現代に於て自然主義小說の跡に從ふ資格はない。『火葬場におやぢの〇〇の燒け殘り、悲しくもあり、をかしくもあり』（その〇〇は恐れ入るからこゝに現はざず。山形秋田地方の人に聽き給へ）の如く痛快な作が劇または小說にもあつて欲しい。漱石氏が多少さういふ要求を滿たさうとしてゐるのだが、眞實を遠ざかつて、餘り不眞面目な態度が見えるので却つて滑稽諷刺の力を弱くしてしまう。

それから、最後に今一つ加へたいのは、讀者即作者志望者の弊である、自分が作をしたいと望む間は熱心に人の作も讀んで見るが、自分がそんな氣がなくなると、全く讀むこともしなくなる。して、こんなのは殊に詩歌の讀者に多い。これでは本統に立派な讀者でない。自分は創作や批評に野心がなくつても、なほ且つ始終文藝を味はつてゐるといふ樣な讀者が、東京ばかりではなく、地方にも澤山出て來なければ嘘だ。それから、また、これも思索力の不足から來ることだが、言語を亂用して、心にもないことを發したりする惡弊が多過ぎる。これは然し別に述べよう。（明治四十二年四月）

人生肯定と自然主義三派

上

後藤宙外氏は、新潮に於ける『人生觀上の自然主義』に於て、自然主義の重な內容を作つてゐるもの

として、虛無主義、個人主義、社會主義を擧げた。然しわが國の自然主義運動の要領は個人主義にあるのであつて、その他の二主義をも包んで居たと見るのは、氏の思慮の不足から來てゐるのだ。全體誰れが虛無主義や社會主義を主張もしくは包藏してゐると云ふのだ？　自然主義者のうち、若し虛無主義を包藏してゐるものがありとすれば、正宗白鳥氏だらう。然しそれも、その作品を見ると、そこまで確實に主張してゐるわけではないらしい。社會主義の樣な淺薄なものに至つては、末派の輩を見ても、跡かたもないのだ。

個人主義は、自然主義の運動に於て、最も中心的な思想である。然しそれが外國丸呑みの俗習家等が使つてゐる意味よりも、もツと廣く、深い物である。普通の個人主義は社會主義もしくは國家主義に反對した物に過ぎない。自然主義者等の向つてゐる、もしくは向はうとしてゐる個人主義は、ただに人間界の組織上に於ける一主義ばかりではなく、天然界をも透徹して、宇宙觀にまで自我獨存を體現する自我主義である。それには、社會主義の樣な中途半端な立脚地を取らず、また虛無主義の樣な人生否定の愚を演じてゐない。無理想、無解決とは、思索力の足りない議論家等が考へてゐる樣な、人生の否定ではない。却つて渠等よりももツと立派に人生を肯定するものである。

金子筑水氏は、近頃、しきりに肯定的人生と云ふことを云ひ出した。無論、外國の思想家を借りて來てからのことらしい。然し人生の肯定を、わが國において強く主張したのは、渠よりも、僕の方がずツと早い。僕が理想を排し、解決をしりぞけ、現在の刹那、悲痛の極致まで人生を現實化して、充

實し切つた肯定を發表してゐるあひだには、筑水氏は、ほんの、俗習的な理想論者であつた。今でもなほ、不充實な理想論者のおもかげがある。決して實際の肯定論者ではない。刹那主義の自我に到達しなければ、決して實際の肯定は出來ない。よしんば、出來ても、中途半端な、不充實をまぬかれない。

文章世界のＢＪ生は・安倍能成氏の自然主義論に『全然同意』して、無解決とは自由意志の否定、機械的並に物質的人生觀だと思つてゐる。そして、『自己の活動の眞相』を『最も完全に』見ることが出來ると云つてゐる。如何に工場の職工でも、自己その物から動いてゐないなら・決して完全に自己は見えないのである。そして自己その物から動く以上は、決して機械的ではない。

相馬御風氏の『懷疑と徹底』(文章世界)は、『結局、吾々の心を支配するものは、統一のない疑惑である、灰色の世界である』と云ふ文句をわざ〳〵云ひたかつた樣な透きのある論文だ。あれだけ書いたのには感服するが、僕等が既に通り抜けてしまつた懷疑思想を、まだありがたがつてゐる樣なところが見える。僕等の云ふ悲痛は懷疑から來るのではない。自我肯定的生活の自然の狀態である。悲痛がなければ、生きてゐられないのだ。そこに『全存在を擧げて從ふべき程な主觀の燃燒』がある。それが一刹那の問題であるに違ひない。然し人はその刹那の充實を感得するよりほかに、最も意義ある、味ひある道はない。『理智の壓迫』がある爲めに、それが出來ないと云ふ氏の考へは、刹那を離れるから、理智に獨立した働きを持たす樣な餘地を與へて、心熱的に行けなくなるからである。そして『悶

えながら、刻一刻に弱められ壓へられて行く』のが、もし心熱的にであるなら、當り前のことだ。どうせ人間は死んで行くものだ。たゞ死んで行くにも、心熱全人的生活をしながらと云ふのが僕等の要求だ。虛無主義はそれを裏から見て、死の終極（それは生活者の問題とする價値がない）を重大なことの樣に思ひ違ひ、心熱的なるべき所以を忘れた主義である。

いつか田山花袋氏に對して、平面描寫の弊は過去や未來の深刻な背景（壓迫と云つてもいゝ）の添はない瑣末な事を細叙してゐるにあると、直接に話したことがある。その反對らしいのが六月の早稻田文學に出てゐる。『平凡を厭ふは即ち現實を厭ふのだ』には違ひない。然し其平凡でつゞく現實は、藤村氏の作物すべてや、花袋氏の作物の三分の二に描寫されてゐる樣に、粘着力に乏しい、深刻な背景の添はない、心理的聯絡に鈍い物ではない。必らず人生の特殊的肯定が伴つてゐるものだ。自然主義派の作家では、淺見者流から虛無主義者と見られた正宗白鳥氏が却つてこの點に於て比較的に最も僕等の注意を引くのぞが、自然主義派以外では、藤村、花袋の二氏までも行つてゐないものばかりだ。花袋氏の『平凡でも好い、瑣末な事でも好い』が、『それが深く人生を窺はせるに足りる一つの扉、一つの鍵である』には、肯定力に乏しい同氏等のやつてゐる平面描寫の結果の樣では、決してよく行つてゐないのだ。

官能的、刺戟的と云ふ事を、徒らに小い主觀か這入ることだと思つたら、違ふ。主觀の大小深淺は作家その人の人物並に經驗の大小深淺によつて違つて來る。現今の客觀的描寫並にその議論には、自

然主義によつて覺めた嚴肅な個人主義的發展の態度のほかに、また紅葉時代の遊戯分子が這入つてゐる。『詩や小説を書かうと思ふと、理窟ツぽい書物はあたまを荒ます』と云つた樣な舊弊な考への餘波がある。さう云ふ無素養の手合には、その人等の生活と創作との生命たるべき思索力がない。思索力の乏しいものが如何に立派な經驗を積まうが、それが立派には感得されない。背景のある平凡はつかめない。そして、鳥渡理智的に傾くと、直ぐ小主觀が出るのは渠等の弱點だ。それを排斥するのはいいが、自然主義がそんな初歩の程度にいつまでも止つてはゐられない。花袋氏が『人間を自然物(泡鳴曰く、天然物の意)の樣に見る』と云ふのも、まだ眞劍の度が足りない證據だ。藝術家の仕事は『自然の再現』ではない。自然（天然にあらず）その物を自己の幻影に現實化するにある。自己以外に天然はなくなるからである。かうなると、實行的藝術は決して『樂な』ものではない。悲痛な人生の肯定である。緊急な態度上の問題である。出來あがつた外形的藝術の如きは、自己の分泌物たる糞や小便に過ぎない。たとへそこまで行けないでも、比較的にそれに近いのでも一時滿足されよう。然しそれさへ、今の文藝界には、餘り發見されない。つまり、思索力の深大な人物が乏しいのだ。

イプセンやアンドレフは大作家であると同時に大思索家であつた。渠等に對抗すべきわが國の作家は今日以後に出るのだらう。今日では自然主義の效力によつて、從來の不眞面目な態度を改めて、思索的方面に注意するものは出來た。然しあでもない、かうでもないと考へるばかりで、定見が出來たらしい人々でも、まだその思索力を從來の俗習哲理や、俗習教理にまかして置く利口者流の程度を

越えてゐない。文藝にも、身を以て自己の思索を實行的に追行する素養のあるものは殆んど無い。兎に角、そこに達してゐたと云つていいイブセンやアンドレフは、花袋氏の云ふ樣な『夢見る人』ではない。そして、もし夢を見てゐるとすれば、その夢は空想ではなく、僕の云ふ現實的幻影である。一方にはまた渠等の樣な深刻な材料が、わが國には、日本人の調和的、希臘的國民性から考へても、發見することが出來ないと云ふ人がある。然しそれも、さういふ論者の頭腦と經驗とがまだ至つてゐないのを表するに過ぎない。全人的大思索家が出でさへすれば、必ず容易に發見することが出來ると、僕は信じて豫言して置く。

朝日文藝では、そこに出る諸家の說によつて、自然主義を反對的態度で物質的人生觀に決定してしまつた。そして、僕等が默してゐる間に、他の自然主義論者等も亦さう思つてしまつたらしい。そして、また、朝日文藝の諸家は自然主義を壓服してしまつたかの樣な得意の色が見える。滑稽にも程があらう。渠等が攻擊したのは自然主義派全體ではなく、ただ島村抱月氏を中心とする早稻田派に止つてゐた。そして、朝日新聞には、その文藝欄で攻擊する自然主義の描寫法に多少傾いて來た夏目漱石氏の『門』を、恬然として掲載してゐた。僕等には、たとへ主義に於て同じいところがあつても、なほ黨派などにする氣はなかつた。然し若し文界に主義によらない黨派の樣なものがありとすれば、渠等の行爲は文藝革新會に次で、それに類してゐるだらう。現代に於て、最も不賢明な逸話だ。

自然主義には、初めから三派があつた。これは昨年北海道旅行中に北海タイムス記者に話したこと

だが、その一は島村氏等の一派で、餘り定見はなかつた。文藝上には初步の程度の客觀說——昔の逍遙氏の沒理想論——を取り、もしそれを人生觀上に押しつめられると、宗敎もしくば宗敎臭いものに逃げ込む樣な傾向があつた。抱月氏が『默の一字あるのみ』と云つたのは、その弱點を渠自身の一派に先んじて發表したものだ。そして天絃氏や御風氏が、それと同じ傾向を有しながら、この頃は、たゞこと更らに灰色の世界と云ふことに未練を持たしてゐる樣な議論を吐いてゐる。次ぎの一つは花袋氏の說である。さすが創作の實驗から出て來た議論であるから、文藝の方面に關することでは、抱月氏等の樣な抽象的もしくは空疎な物でない。氏の『露骨なる描寫』から來た『平面的描寫』の外形もしくは結果は、矢張り初步の自然主義の程度に止つてゐる樣だが、『田舍』を作し得た人だけに、多少深い根底に觸れたところがある。その態度も亦、前者の樣な逃げ路を設けないだけ、嚴肅である。然し、つまり、人生觀を別にした、乃ち、人生觀までは充實させることの出來ない單純な文藝論に過ぎない。『離れる』とか『離れない』とか云ふことも單に技巧論に過ぎない。藤村氏はこの派に屬さしてよからう。そして、天溪氏はこの派と抱月一派との間を彷徨してゐた。以上二派が若し自然主義の範圍で人生觀を立てたら、必ず物質的、機械的人生觀を立てるわけだらう。然しそのまた次ぎの一つは泡鳴自身の刹那主義である。これには、文藝觀と人生觀との區別がない。渠は自然主義によつて肉靈合致の人生觀を立てたのだ。それがまた直ちに文藝觀であつた。抱月氏の如くその主義の特色から逃げようとはせず、また花袋氏の如く自然主義を文藝ばかりに區別して置かない。その代り、問題と價値とはその

人の態度の上に於て決まるのであるから、藝術的人生と實行的人生との區別が撤せられた程に透明である。實生活をことさらに傍觀しないでも、破壞的主觀の生活が乃ち假定なしの現實もしくは現實描寫になる。白鳥氏は、その議論に於てはこれと反對の樣な言もあるが、その創作の特色ある流動融和性に於ては、この說を實行した結果に接近してゐる。斷つて置くが、花袋氏が肉靈の合致は『女には いと易いことであらう』など云つてゐる間は、まだ强者の深刻な合致の意が解されてゐないのである。

下

事實と想像と云ふことが、近頃、鳥渡問題になつたやうだ。そこにも人生の肯定し工合が自然主義者間の別派を見せてゐる。田山花袋氏は『想像は駄目だ……想像で書いた作品に、權威のある、心から人を動かすやうな力を持つてゐるものは一つもなかつた』と云つた。それに對して、正宗白鳥氏は『事實などはどこまで突きつめて行つたつて描けるものでない……だから、事實ばかりを書いてゐないで、自分のあり得ると思つた範圍で想像を加へて書てもさしつかへない』と云つた。また、この問題を『餘り判り切つた事』として、『事實を書くと想像を書くとは、作者が描寫する上の便宜に過ぎないから、何れを執るも作者の自由だ……も少し深く立入つて考へて見れば、想像が事實なしには成立たぬ如く、事實も想像を交へずには決して成立つものではない』と云つたのは、朝日文藝の耆甁氏である。

蒼瓶氏のは自然主義以前からあつた解釋で、僕等には餘り無造作だと考へられる。僕等には、事實と云ふ以上は、想像の餘地を存じないほどに這入り込んだ事實でなければならない。また、想像と云ふ以上は、事實が全く内容的に消化された想像でなければならない。前者はトルストイの如く冷刻的となり、後者はドストイエフスキの如く熱刻的となる。いづれも破壞的主觀を以つて徹底することが出來る。要は決して蒼瓶氏の所謂『便宜』ではなく、徹底力の如何にある。この見解から云つて田山氏はまだ事實に徹底しないと同樣、正宗氏はまだ想像に徹底しないのである。

田山氏が心の藝術、感情の藝術を排斥して、『眼から頭腦に這入つて行つた藝術』を主張するのはいい。然し、渠の實際の行き方を見ると、『妻』でも『緣』でも、眼だけの藝術であつて、まだ頭腦には這入つてゐない。『三十年前』の如きは、殊にさうである。渠が『描かれたるものは、描かれたる事象その物の持つてゐる價値である』と云ふのも、その價値が實際權威を有するほどに發揮されてゐないのを僕等は遺憾とする。それに拘らず、若し、渠が大して權威ありとも思はれない程度の事實を、なほ且多大の權威ある如く見做してゐるなら、それは最早描寫上の問題ではなく、渠の人生觀が餘り唯物的であるを證するわけにならう。

轉じて、正宗氏の場合を考へて見給へ。『事實の裏に事實があり、正確の外に正確がある』と云つても、その懷疑的描寫論を直ちに『讀者を迷はし、歎く度合の大きければ大きい程名作』だと思ふ程度にとゞめるのは、矢張り徹底的ではない。事實が實際分らないものだと云ふなら、分らない通りに描

寫すればいゝ。何も、わざ〳〵、分つた事實らしく想像させるには及ばない。そこまで行けば、作者の想像は乃ち實際の事實と融合するのである。渠の描寫論に於ても、渠の思索不足な人生觀が禍ひしてゐる。と云ふのは、渠には、『人生觀などはどうでもいゝ』と云ふやうな人生觀が附きまとつてゐる。今一歩進めて考へて見給へ。渠は『もし人生觀がそんなに重ずべきものならば、人生觀だけ露骨に書いた方が小說など書くよりも多く人を感動させる筈だ』と云つたが、『さうは行かぬ』のを以つて直ちに描寫と人生觀との無關係を證明したと思つたら違ふ。人生觀を露骨に書くから感動は少いので、それを具體的に書いたのが立派な、僕等の要求する小說なのである。

事實と想像とを口にする前に、先づ以上のことを考へて見給へ。描寫に權威があればあるほど、作者とその人生觀とは分離出來なくなる筈だ。同時にまたその不分離の徹底如何を反省して見なければならない。然しさう云ふ思索力もしくは素養に疎いのが現代作家等の通弊である。一般批評家等も亦そんなことは殆ど思ひ至らない。創作家の創作論並に批評家の批評が、實際當てにならないのはそれが爲めである。渠等、作家並に評家等は先づ創作に現はれた田山氏の物質的人生觀、正宗氏の懷疑的人生觀などのどこまで根據あるかを批判して見る必要がある。(明治四十三年六月)

近刊「耽溺」の序

花袋君よ、君に僕の最初の小說集『耽溺』を献じたい。

そのついでに、少し僕の心持ちを云つて見たいのだ。君は、センチメンタルな紀行文、その他の作者としては、つとに廣く知られてゐたが、小說作者として群を拔いたのは近頃のことだ。君は硯友社一流の娛樂文學や赤門派並に早稻田派の形式的文藝論やの跋扈を長らく忍んで來た。その間の消息は丁度僕が新體詩に於て認められるまでの消息と殆ど同じであつたらう。僕を以つて君を推せば君も亦隱れた苦悶、慨歎、不平等を經て來たに相違ない。然しそれだけ君は現代小說界の最初の具眼者であつたのだ。

君によつて新傾向に就いたものは、故獨步氏もさうだらう。藤村氏もさうだらう。僕もその一人たるを否まないのである。君は年齡に於て僕の長たると同時に、新らしい學識に於て僕の兄である。君の『露骨なる描寫』(太陽掲載)は、僕の『神秘的半獸主義』(單行)に先立つこと二三年この間に僕は君を知つた。して、『半獸主義』は僕に取つてその由來甚だ遠しとは云へ、その新文藝に關する所說に至つては、君と相知つてから初めて抱合された點が少くない。して、この論著が進んでまた『新自然主義』(單行)となつたのだ。

不幸にして君と僕とは文藝の實行的性質に就て意見を同じくすることが出來ないが、君とても、主觀の力を全沒して昔の淺薄な沒理想論の程度にとどまるつもりではなからうし、また如何に傍觀的態度を主張しても、實行に添ふその人としての眞摯が文藝創作の上にもあるのを拒まぬだけは僕と違は

ないだらう。して、君の所謂傍觀的若しくは客觀的態度なるものを忠實に追行しようとすることも、亦、主觀が僕の所謂文藝家即人間としての努力をするのではないか？　此疑問に然りと答へるなら、僕の文藝實行論になる。僕は、乃ち、新文藝家が全人的文藝をやるのは、人間その物としての努力であると云ふのだから、別に文藝家といふ人格が人間といふもの丶部分的一區別として存在するを許さない。詰り、文藝家が文藝を行ふ場合に於ては、夫に全心全力を注ぐ可き者で有て、他種の人格を豫想す可き者では無いと云のだ。夫で僕は戰爭に打死する軍人の實行と文藝の創作とは同一の態度だと說くのだ。秋江氏は僕の心熱の說の如きは既に既にヲルタアペイタアが『ルネサンス』で說いてゐると云つたが、心熱全人的を刹那主義まで突ツ込んであるのは僕一個の見解であるのに氣が付いてゐない所以だ。して、それが分れば、人生觀も哲學的考察もすべてこの文藝論と同一に氷解される。問題は簡單明瞭であるのだが、區別的文藝の羈絆を脫し切れない諸家には受け取れないかして、文藝實行とは文藝の上に現はれた表面事實を實行することだと誤解されてゐる。淺慮も亦甚しいではないか？　そんな淺薄な考へを持つてゐるから、餘裕文學や遊戲文學の不眞面目な分子が這入つて來る。現代の戲作者を以つて滿足するものなら知らず、僕等は少しでも戲作者的態度の見えるのを心よしとしないのだ。抱月氏の議論では、この不眞面目を許してゐるのだが、君のは氏のによりも僕のに近いと僕は信じてゐる。

僕は以上の考へで『悲戀悲歌』以後の詩を作つたが、自然主義的表象劇『焰の舌』（三十九年、新小說

掲載）も亦この考へを體現する最初の長篇と云つてもいゝ。惜しいことには、發賣禁止の恐れがあるので、こゝに編入することが出來ない。それから、『日の出前』『戰話』『老婆』『榮吉』を經て、『耽溺』に至り、計らずも君の『蒲團』と等しい第二の戀を取り扱つたことになり。君も僕の小說に於ける態度を認めて呉れたが、『篠原先生』を君はどう見るか、僕はそれを知りたいのだ。短篇ながら、『耽溺』だけのことは書けてゐると思ふ。

兎に角、小說が今日拵らへ物でなくなつた以上、僕等は箸を執ると同じ心持で筆を執つてゐたい。飯を喰ふと同じ態度で作をしたい。うまい時もあらう、まづい時もあらう。然し誇張や手段の爲に平常の態度を狂はせたくない。作さへ――無論、眞摯な作さへ――してゐれば自己の生命はあるのだ。

僕は今樺太行きの途中にある。出發前、種々心を混亂する事情のあつた爲め、編入小說の一たび掲載された諸雜誌記者へ編入許可を依賴する手紙を忘れたが、それは事後承諾を乞へばよからうと思ふ。校正も自分でしたかつたのだが止むを得ず、他の人々に依賴した。

北海道は氣候が東京とは大分違ふ。樺太はなほ更らだらう。僕は不斷好まないシャツを着て行くつもりだ。

君よ、達者にゐ給へ。僕は秋になつたら歸京する。

小樽にて船出を待ちながら

明治四十二年六月二十三日

泡　鳴　拜

主義と國民性

度々云つたことだが、まだ、藝術上の主義といふものを黨派的もしくは團體的な制裁であるかの如く解してゐるものがある。『も一度二の道に就て』(白樺八月號)に於ける有島武郎氏も、その一人である。その言葉に『人生を如實に觀じて是れで具象すべき藝術を、主義の名の下に狹めゆがめるのは果して何の意であらう』と。『自ら識らざるの責』は、却つてさう云ふ樣な人にあるのをまだ知らないのであらうか？　試みに尋ねたいが、藝術上に人生を如實に觀ずる素養はぽツと出の田舍者や坊ちやんに出來ると思つてゐるのだらうか？　否、否。必らず見識と修練とが必要だ。且、その見識と修練とが藝術家の獨創的人格と一致した時に於て、最も多く意味あるものとなるのである。僕等の主義と云ふのは、それである。眞正の意味に於ける主義のないものは、藝術家としては、最も下等な職人である。無獨創だから、つまり、死人も同樣である。これは無論極端なところを云つたのであるが、有主義のものでも、また、その主義と人格とがよく一致してゐないのがある。それは本統の主義者ではない。たとへば、藝術を單に手さきの技巧でやつてゐる樣なものは單純な技巧主義者とは云へやうが、人格的獨創を發揮することは出來ない。そんな無生命の主義は僕等の云ふ活主義とは同一階級に於て論じ合ふほどの價値はない。それにしても、そんな技巧主義者も、兎に角、主義で動いてゐる間は、

動いてゐない時よりもいいのである。

ところが、また單純な技巧主義者ではないが、矢張り手さきが器用なので、または器用でなくても手さきに賴つて多くの技巧的摸倣もしくは同化をやつて、その人がその人自身の經驗もしくは情想を多少でも出してゐるとする。そして、それ以上の事は出來ないものであらば、低い程度ではあるが、藝術家として、その技巧と人格とが一致してゐると云へる。つまり、低い程度に於て活きてゐる藝術家だ。この種の人々はざらにある。そして、無自覺時代に於ては、大家連もすべてこの種に屬する。この種の大小藝術家の實例は最も多いので、そしてそれを最上の模範視してゐる連中も亦最も多い。さういふ連中に限つて、藝術家に主義は無用だと云つてゐる。外國にも、そんな無自覺者は稀れでない。表象派とは云へど、アングロサキソン根性を脫し切れないシモンズその人にさへ笑はれた初期のユイスマンも、無主義をいいことにして、から氣焰の根據にした。が、わが國の如く玄關番や職人から成り上つた素養不足の藝術家の多いところでは、殊にそれが多い。そして、森鷗外氏の如きは、學問があるだけに、その派の隊長である。然し渠等はすべて獨創に乏しく、標準を外國もしくは他の藝術家に取るから、その作物が如何によく出來てゐても、模倣勝ちな古典的傾向を脫することが出來ない。身づから知らずに、古典主義を奉じてゐるのである。無見識も亦甚しいのだ。

この七月、上野で開かれた南薰造、有島壬生馬兩氏の『歐滯紀念繪畫展覽會』を見た。南氏の弱弱しい、有島氏の大膽な畫風は、いづれも可なり特色は認められたが、兩方の畫室を見てまはつた跡に殘

つた僕の感じは、どちらの畫にも、その底に明瞭なところがあつて、定限されてゐると云ふことだ。僕はこの感じを兩氏の面前でも述べた。考へて見ると、それは古典的であるからであつた。有島氏の態度は、色の使ひ方などにも煩悶の跡は見えないでもないが、それは技巧の上のことであつて、氏の態度に於ては矢ツ張り古典的な態度を越えてゐない。この兩氏も亦普通の古典主義者である。氏等は思索的にはまだ皮切りが出來てゐないらしい。若し兩氏にしてこれを知らず、武郎氏のやうに自づから何の主義者でもないと云つたら、それは自づから知らざる罪である。無自覺を表白してゐるのである。自づから無自覺な平凡な主義を有しながら、人の自覺した主義主張を無用視するものは、耳を押さへて鈴を盜むと同じだ。このことは、僕が新體詩論を以つて評論の筆を執り出したそも〳〵に於て、既に角田浩々氏や故藤岡博士に當つて置いたことであるし、その後も亦鷗外氏の主義無用談反駁の時にも云つて置いたことだ。

有島武郎氏が主義を『作品の規矩』視するの誤謬は、以上の理由で分つたらうと思ふ。主義は藝術家の人格と生命とである。そして、人格と生命とがない藝術は、たとへあつても、さう立派なものではない。技巧主義でも、ボドレルやオスカワイルドに於ける樣な場合には、それが、もう、その人と離れられない人生觀になつてゐるのである。ところで、主義も低い程度で活きることがある。漱石氏の低徊趣味の如き、鷗外氏の『あそび』主義の如き。僕等がこれらを排斥するのは、規矩を以つて人を强ふる意味ではない。一等藝術の見地から見て、たゞ第二流以下だと云ふに過ぎない。第二流以下が第

二流以下として存在してゐるのまでも拒むわけでは決してない。どうせ勢力を用ゐるのだから、藝術家として最上のものを擇ぶ方がいゝではないか？　彫刻よりは繪畫、繪畫よりは音樂、音樂よりは自覺的詩歌小説だと云ふことは、僕がショペンハウエルの音樂最上說を打破した時に論じて置いた。音樂以下の藝術では、古典主義より羅曼的主義、羅曼的主義より概念的表象主義までは行けるが、僕等の刹那的自然主義には這入れないのである。それに這入れるのは新らしい詩と小說であるから、その詩と小說に於て、折角のこと、最も上位に立てる刹那主義に自覺せよと、僕等は唱へてゐるのだ。

『この道』の論者には、また根柢に於て誤解、寧ろ思索不足の點がある。そして、それが渠の論文の趣意になつてゐるのだ。現代に於て、哲學や形式宗教の無權威なのは、僕等も早くから論じたことであるが、氏は『人間は相對界に彷徨するものであつて、絕對と云ふが如きは永久に窺ひ知る事の出來ぬ境界である』と云ひながら、まだ絕對その物の觀念を消してしまうことは出來ないらしい。舊哲學の思考法に據つてゐるからだ。分らないものは攫めない、攫めないものは無だ。無なる物に相對界の考へを出入させる必要はないではないか？　舊哲學の誤謬はいつもそこから來るのだ。それから、また、相對界を矛盾的程度で見てゐるのも舊哲學の見方で、これを文藝史上の例にすれば、よく行つても、近松やシエキスピヤの感傷的な態度を越えてはゐない。かのハムレットやフアウストの煩悶が如何に深いと云はれても、心靈と物質と、內界と外界との矛盾を感じてゐるだけであつて、心物、內外の燃燒合致的刹那の悲痛（このことは僕が屢々說いてあるから、こゝでは云はない）に生きるといふ樣な

優强的、積極的方面は夢想だもしてゐなかつた。この合致は絕對的ではなく、刹那の事實である。僕等は、これを攫み得てから、最上の現代的生活を肯定する樣になつたのである。僕等の獨創的主義もそこに立つてゐるのである。

中澤臨川氏の『自然主義汎論』(早稻田文學九月號)は比較的に少い頁數を以つて佛蘭西並に露西亞の同主義の起原・經過、並に特色を詳しく說明してある。然しその起原や經過に就ては、これまでに人人が既に云つたことゝ大差はないから、別に異論はない。たゞ注意すべきは、モパサンの幻影說とボギユーエの佛蘭西に於ける露西亞文學紹介とであらう。

思想と幻影とが即ち現實であるべきことは、僕も度々論じたことで、モパサンが區別的藝術、從つて主義に無自覺な傾向の盛んな佛蘭西に在つて、なほ且僕等を引きつける所以である。然しわが國の自然主義者のうちには、藤村氏もしくは花袋氏の樣に、平面描寫といふ樣なことをいゝとして、モパサンよりは寧ろゾラの徒らに煩瑣的な態度を取つてゐるものがある。これは、藝術といふものをあたまから買ひ被つて、態度が肝心なのを忘れ、藝術品(らしく)さへなればいゝとする考へから來てゐるのではあるまいかと思はれる。

さうであるとすれば、臨川氏も佛蘭西風の(乃ち、區別的)藝術が根柢になつてゐるのだ。わが國にも、それを打破するボギユーエの樣な人が必要だ。必らずしも渠の如く外交官であるには及ばない。また、露國へ行つた經驗があるに及ばない。實人生と藝術とを充分密接に考へるものでありさへすれ

ばいゝ、現今では。僕の實行藝術觀以外に於て、さう云ふ方面を實際に主張維持してゐるものは殆どない樣に思はれる。區別的藝術觀の徒ばかりが多い。今更らの如く思ひ出されるのは故二葉亭で、渠れにしてもしもツと藝術に執着心があつたら、疾くにその點を看破してゐたであらうに。

今一つ云ひたいのは、現實主義の二特色に就てゞある。臨川氏はその一つとして『藝術の平民化』を擧げたが、貴族主義に對する平民だけならいゝとしても、平民は平凡と無自覺との狀態にとゞまつてゐるもので――平民化など云ふから、徒らに煩瑣的な平面描寫も出て來るのだ。これは、藝術の個人主義化と云はなければなるまい。それでこそ、今一つの『人間感覺の進化』も、一層深い理由を有し得られやう。

自然主義に於て重大視すべきは感覺までも解放する自我發展主義である。僕等はわが國民性も亦さうであるを信じてゐる。僕等に云はすれば、アングロサクソンの形式的常識でもなく、佛蘭西流の區別觀でもなく、どちらかと云へば、露西亞の人生即藝術の方だ。そこに日本國民としての發展性も有るのである。

で、主義と國民性とは、洞察すれば、生命に於て同一である。男か女でない人間はないと同樣、主義と國民性とを離れた藝術は、故鄉と性別とのない人間のやうに、空想でなければ最も下らないものだ。（明治四十二年九月）

實行文藝とデカダン論

島村抱月氏の『實行的人生と藝術的人生』（新潮三月號）は暗に僕等の藝術實行論に當つてゐる。氏が藝術と見做すものは、舊來の美學が取り扱つて來た藝術であつて、僕等の新標準によつて成り立つべきそれに比べては、一段下つた　惡い意味の餘裕がある物だ。舊人が藝術と人生とを違つた兩物として對立させたのよりは少しましかも知れないが、まだ藝術と實行とを（如何に人生を背景にするにせよ）違つた物だと初めから速斷してかゝつてゐるから、氏の議論は、一般の美學者流のと同樣、徒らに明了な條理が附いたに過ぎない。要するに、空理屈だ。

僕等は實感の藝術を主張する。そして實驗は實行によつて最も痛切に得られる。そしてまた、實行には、手段的もしくは玩弄的餘裕がない。そこに達してこそ、人生の味ひが充實して實際に感じられる。然し抱月氏は、『實行界では出て來ない、出て來る暇がない』といふ隱居じみた味ひをわざ〳〵藝術の特別主旨だと見做す。『議論になつてゐない』とか、『愚な話』とかいふことは、寧ろ氏の方で受くべきではないか？　僕等は刹那の充實する新文藝を旨としてゐるのに、氏はさうでない第二流以下の餘裕文藝の標準を以つて僕等を揣摩しようとする。適切な辯解にはなつてゐない。

氏は『藝術は實行的人生を境目にして二つに分けても好い』と云つて、その境目を手前から想望する

のと、そこを通り越して振り返るのと、この兩態度があるとした。然し兩方とも、僕等の要求する新藝術としては、まだ不足な點がある。そして、この兩態度の、どちらでもが實行の境目に一致すると、氏の所謂『藝術は滅びてしまう』さうだが、僕等の要求するのは乃ち氏の藝術などが滅ぶ所に起る藝術である。氏は僕等が實行と藝術と『二つのものが一つになつたのだ』など云つてゐる樣に思つてゐる樣だが、氏の考へる樣な區別ある二者が一つになるのではなく、初めから一つなのだ。僕等の態度で藝術に從事するのは、軍人が軍略を行ひ、實業家が實業に從ふのと同一であると云ふのだ。作品が主でなく、態度を以つて云ふのだから、その生活がその藝術だ。

人生を味はふこと(氏等に一言で云はせば、人生の翫賞であらう)は、僕等の人生觀では、當然、實行の內部的事件であつて、決して實行以外に置いて考へるべきことではない。その味はひの出ると出ないとは、實行家と文藝家との職業上に於ける異同高下(抱月氏一流の美學論者は、兎角さう考へ易いが)によるのではなく、兩者に通じて、その人間の根本的自覺があるか、ないかを證するのだ。此自覺のない態度なら、それが實行として現はれても、文藝として出ても、第二流以下の作品である。人生に最とも直接とは云へまい。抱月氏等はかういふ種類の、乃ち、實行から離れた無氣力、無內容の表面的翫賞ばかりを以つて藝術は成立すると思つてゐる。それでは痛切な文藝は得られない。僕等が新文藝觀を呼號すると同時に、音樂繪畫等が、新自然主義の詩歌や小說と同樣な第一流の藝術にはなれまいと公言したのは之が爲だ。僕等がマラルメの一方面を冷笑して、音樂より以上に進み得べき

心理詩を以つて單にワグネルの道（よく行つて羅曼的な）を追つた愚を指摘したことがあるのは、乃ち之が爲めだ。

抱月氏は『知れ切つた個條』として、近代藝術が（一）『實人生の爲めに存在し』（二）『實人生を內容にし』（三）『なるべく實人生そのまゝに接近したものを取り扱はうとし』てゐることを擧げ、之を否定しないと云つたが、併し之を否定しないことが直ちに僕等の最上文藝と同等な文藝を辯解してゐるわけにはまだならない。この三個條は、人生と藝術とを、舊思想通り、別な物だとしても、それに當て塡る樣な單純な槪念に過ぎないではないか？　現代人は少くとも三個の解釋に出會つてゐる。從來一般の古典家や羅曼的家の考へる通り、人生と藝術とは別物だといふのが一。オスカワイルドが藝術至上主義の絕頂から叫んだ通り、人生は全く藝術に歸するといふのが二。僕等の主張する通り、人生と藝術とは實行上に於て同一だといふのが三。抱月氏は、僕等の第三解釋と實行的文藝の意とを夢にも知らず、徒づらに第一、第二の解釋に彷徨して、在來の音樂を最上とする劣等藝術（これまでの小說や詩歌をも含む）を標準にしてゐる。

そして、實行的文藝は、抱月氏や花袋氏の考へる樣な、單に描寫上の自然主義ではなく、實に初めから態度上の問題である。態度、情調、氣分はいつも個性を離れない。一般に是認されてゐる自然主義には、個性を沒して、たゞ團體的もしくば流派的性質にとゞまるものもあるか知れないが、僕等の新自然主義は、冷靜なると熱烈なるとを問はず、深刻な個性的態度の上にうち建てられたものだ。こ

れが最も根本的な、最も進步した、眞の自然主義である。然るに、新潮記者の『自然主義の効果と文壇の未來』(三月號)に於ては、この主義に對して別に『個性の文藝』なる物を思ひ付き、將來はこの種の文藝が起るだらうと云つてある。それが乃ち本統に進んだ自然主義の文藝その物に外ならないのではないか?(明治四十二年二月)

熱烈と冷靜とは、破壞的主觀の心熱的遂行に於ては、その効果が違つてゐない。僕が白鳥氏の作の傾向が比較的に僕の考へに最も近いと云つたのに對し、同氏はその『隨感錄』に於て、『有難からぬことで、たま〳〵予の作品の未熟なるを證する』と云つた。氏は僕の所謂心熱をおろかにも情熱の意に解してゐるらしい。『人生の驚くべきこと、悲むべきこと、さま〴〵の事象に面を向けて、毫も臆することなく』云々の件は、うはツつらな冷靜に於てよりも、心熱の體現に於て最も充分に實行される。そこに初めて作物の熟未熟が本統に論ぜられる。創作の態度が熱烈または冷靜なのは、たゞ個人的特性に過ぎない。要するに、深刻に出られれば最もいゝのだ。この傾向を氏が他の自然主義者と見做されるる人々よりも割合ひに多く持つてゐるのは事實だ。然し氏にして若し、世人のあやぶむ通り、あれ以上の發展が出來ない時がありとすれば、熱烈に傾くからと云ふわけではなく、こと更らにその冷靜が氏の思索力不足の結果、單に表面的にとどまらうとするところにあらう。(明治四十二年二月)

長谷川天溪氏の『自己分裂と靜觀』(太陽二月號)では、花袋氏と僕との作風を比較してある。自己の發展が勢ひ自己の分裂になつたと云ふのは、其分裂と云ふことを僕の『悲痛の哲理』(文章世界一月號)

で解釋した通り自己の活動と見さへすれば、異存は無い。然し分裂なる活動を文藝上自己告白と自己靜觀とに區別(するのはいゝが、誤解)して、自意識もしくは二重自意識の有無を以てするのは、飽き足らないところがある。氏の言の如く、花袋氏は自己靜觀的で、僕が自己告白的であるか、ないかは別として自己を非我的に靜觀するのと自己を破壞主觀的に告白するのと、どちらが深强な態度になれよう？　僕の創作の出來榮えがどうであるかはこゝでどちらでもいゝが、非我的と云ふことより破壞主觀まで進んで來た方が一層深刻に、一層强烈になるのは實際だらう。まして、花袋氏のは自我の時間的分裂であつて、まだ『空間的に、即ち現在のまゝにて分裂せしめることが出來ぬ』と云つてあるではないか？

現代の要求は强烈な自意識にある。そして、天溪氏の所謂靜觀的によりも、氏の所謂告白的に寧ろ一層强烈な自意識態度が現ずるのだ。自己告白も、破壞主觀的であれば、『現實と牴觸』しても、決して『行き詰つてしまう』ことはない。舊羅曼的主義と相違してゐるのは、文藝的にはこの點が大切で、必らずしも『舊時代の宗教的、理想的空想を排して、靈肉歸一を主張する方面』ばかりではない。二重自意識を割り出したのは、まだ區別的藝術觀を離れないからで——『自己を棄てゝ而も自己を立てゝゐる』などは、非常に手段的な程度だらう。如何に『沈靜なる狀態』(古典派でなければ、必らずしも必要はないが)をいゝとしても、『文藝の確實なる基礎』たる自意識と自我分裂とが、まだ實質的に强烈であるとは云へまい。(明治四十三年三月)

生田長江氏の『文壇最近の傾向を論ず』（新潮四月號）並に『文壇の現在及び將來』（新文林）は、同じ論文を多少書きかへたのだから、新潮に出た方をもとにして、少し考へて見よう。『今の一流の小説家と云はれる人に、歌一つよめないとは情け無い』とか、誰れの詩を讀んで見ても。『殆ど同じ樣な印象しか受けない』とか、『下らない人の印象的批評は有害ならざる迄も無益である』とか、『近頃の批評家は餘りに創作的興味をもつて作の批評に隨つてゐる』とか、『小説の批評と韻文の批評とを兼てやつてゐる人は殆どない』とか、一般的には承認していゝことを云つてあるが、それが餘り一般的で、餘り概括的であつて、たゞ氏自身の意氣込みに捲き込まれてゐるに過ぎない點が多い。それもそれだけの理由と抱負とを備へてゐればいゝが、さうでもないらしいのは遺憾だ。

デカダンといふことは『文字通りに云へば、墮落であるけれども、『身を持ち崩した人間が必らずしもデカダンではない』』くらゐのことは、氏を待たないでも知つてゐるものが少くはない。現在、僕の小説『耽溺』を見ても、それ位のことは直きに看取されさうなものだ。且、僕等はそれが『法律と共に道德と共に古いもの』でないとは云はない。また『堯舜の時代……神武天皇以來のもの』でないとは云はない。僕は曾てデカダンの資格を以つてわが國神代の心熱的思想を現代に紹介したことさへある。（僕の著『新自然主義』の卷頭に收めた論を參照し給へ。）平清盛や僧日蓮はすべてデカダンの親玉株だ。僕はこれまでの公刊物に於て豐太閤を以つてデカダンの最大代表者と見做して來た。

長江氏はまたデカダンの『性格に先づ二つの矛盾がなければならぬ』と云つて、眞面目と不眞面目と

のからみ合ひを擧げたが、眞面目なのは一身を賭しての自己發見であるからで、不眞面目に見えるのは自己の爲に非我を認めない傾向があるからだ。そして僕等は全く非我を認めないから、デカダンの意味は氏等よりもが層切迫したところにある。眞面目並に不眞面目のからみ合ひ位の程度ではない。自我獨存の努力、苦痛、並に孤寂な生命を發想してゐることだ。これが乃ち耽溺の狀態ではないか？宙外、龍峽、その他文藝革新會の諸氏は之を知らない。徒らに外形または材料に拘泥して、龍峽氏の如きは、その『文藝上の超人主義』（秀才文壇）に於て、外面的に現代を超越することを說き、奮鬪努力は耽溺の内部生命であるのを忘れてゐる。これ凡人の見である。僕等を凡人主義と見做すものが、却つて實際の凡人見に止まつてゐるのだ。

そして長江氏も龍峽氏等に多少おまけをつけた位の標準でデカダンを說いてゐる。餘りに一般的、概括的だと僕が云ふのはそこだ。氏の持つてゐる理論が實際には當て塡つてゐない。今の自然主義が賤民的傾向に失してゐるといふのも、氏の解釋または標準が餘り平俗、乃ち、賤民的であるからだらう。氏はデカダンを批評するに當り、僕の『耽溺』の主人公を以つて、淸盛、日蓮、豐公等と同列に置くことは出來まい。若し出來れば、デカダンの内部生命をもツと適切に摘發し得たであらう。いつも云ふ通り、氏にはまだ舊式な美學根性がつき纏つてゐる。氏がデカダンを『ざツくばらん』、不整頓と云つて罵倒し得たつもりらしいが、古典的傾向の人々からさう云はれるのは何等の手ごたへにもならない。と云ふのは、デカダンとはバヾリズム乃ち破格主義から出來てゐるからである。そしてこの破

格は人格全部の無餘裕燃燒から來てゐる。そこを氏は美學根性の爲めに見分け得ない。若し得たら、僕のデカダン詩などは疾くの昔から認めてゐた筈だ。小說家で歌の讀めるものはないとか、小說批評と韻文批評とを兼ねる人は殆どないとか憤慨する氏にして、なほ且そんな狀態では仕樣がないではないか？

氏の所謂『人格の全部に於てデカダンと云はる可き人』は、『指折り數へる程もない』にしたところで、水野葉舟氏よりも正宗白鳥氏の方がまだしもそれに近い。それに、長江氏は『非詩人的人物の努力』を餘り心よしとしない考へから、白鳥氏の缺點を補ふものは葉舟氏の情緖小說であるかの樣に論じた。然し論者が今の文學に情緖の缺乏を叫ぶのは、デカダン傾向を引き返して古いセンチメンタリズム、乃ち感傷主義にしようとする聲である。一方に全部人格のデカダンを求めながら、そのまた一方に人格全部の燃燒合致を妨げる情緖主義に贊同する——そんなのが、氏の議論の特色だらうが、惡い特色だ。葉舟氏でもその幼稚な狀態を脫して行くに從つて、情緖專門的な惡癖が取れるだらうと思はれる傾きは見えてゐる。情緖主義家の如く、俗に『詩人らしい』詩や小說を呼ぶ間は、長江氏がデカダンを論ずる資格はない。デカダンは非詩人的詩人、非詩的詩歌に現ずるのである。『藝術家は……一種のはにかみ屋でなくてはならぬ。處女の嬌羞を死ぬまで保存し得る人でなければならぬ』など云ふに至つては、テニスン時代の美學、藤村氏の幼稚な詩篇に返る所以である。

それから、また、氏は僕等の罵倒する『天才』の代りに、『天分』といふ語を以つて來て、藝術が多少

貴族的性質を有するものである以上、『今少しく天分の問題に重きを置きたい』と云つたが、若しデカダン藝術家に貴族的な分子が必要だとすれば、それは空想的な若しくは偶然的な持ち前ではなく、他の人よりも勝れて懸命な努力と奮闘とにある。また、氏が「フランスの誰とかの詩』と云つたのは、カチュルマンデの『追想』といふ詩（僕は二三度引照したことがある）だが、それは決して氏の考へた如き印象的な詩ではない。たゞ言語の音樂的要素によつて、ほんの徒らに、作者の色女を思ひ出さうとした物に過ぎない。

今一つ滑稽なのは、長江氏が詩人としての泡鳴を論ずるに當り、『比較的に思想上獨自一個の特性を有つてゐるに違ひない』が、『此人の官能は……大部分借り物である』と云つた．その『借り物』といふのが旣に借り物である。シモンズの書で、佛蘭西表象派の先驅者の一人を論ずる件に、さういふ論じ方があると僕はおぼえてゐる。それはそれとして、泡鳴自身は、『半獸主義』に於て官能即思想の說を唱へると同時に、そのデカダン詩は初めから自覺的に思想官能合致の風を備へて來た。それを長江氏は例の美學癖の爲めに認め得なかつたし、又得ないのだらうが、若し借り物といふことが、シモンズの考へ通りに、官能鋭敏の程度が低いと云ふ意なら、他日、必らずこの風を追ふて、更らに鋭敏な官能的思想の大詩人が出るのを望まざるを得ないのだ。また、僕等を踏み臺として、出て來るものがあるに定つてゐるのだ。

文藝革新會のことに烏渡云ひ及んだついでに、後藤宙外氏に注意して置きたい。今月の新小說を見

ると、氏のそれに對する意氣込みが述べてあるが、同會の相手と見爲すのは現代文界の末派連である らしい。末派連と云つても氏等より後進であるものを指すのではなく、全く文界に立脚地のなくなつ た、またはいまだ立脚地を得ない――つまり、現代文界に殆ど關係がない――ものらを指してゐるら しい。さういふものらを糾合して餓鬼大將になつたところが、何の役に立つのだらう。考へて見給へ 『徑なき大森林の闇に灯火を失つた』樣なもの、『蕩天の波に漂ふ舵なき船とも云ふべき』もの、そん なものは新派のおもな數名の間には發見されないし、それから數等落ちたものでも『何の據るところ 無くして徒らに喧囂を極めるもの』『應援や利益の交換を事としてゐる』もの、などは何も文界の人 數に計へ入れる必要がないではないか?

そんなものらを相手に、同會主張の新理想、新技巧、新價値などを叱呼するのは、秀才文壇や女子 文壇の讀者ぐらゐを一般文界と見做してゐるのだらう。おとな氣ないことではないか? もしさうで ないとすれば、『一般の文士終に適從する所を知らぬ樣である』とは、現在の事實を僞つてゐることに なる。多少文界に立脚地を占めたものなら、現今では、僕等の自然主義に依つて、その態度が定まつ て來た。僕等を默過し、僕等に反對するものでも、其態度は僕等の爲めに醒めて來たものが少くはな い。そして、宙外氏もその一人だらう。『終に適從する所を知らぬ』とは、氏等發起人其人等の狀態で、 あつたのではなからうか? それが單純な羅曼的作物を喜ぶところから、美學根性のあるところから 宗教かたぎの點から、複雜な破格的現實の威力を知らないから、または何も直接には分らないところ

から、たゞ徒らに剛健とか、新理想とかいふ主張の名に賛同して、署名してゐるのではあるまいか？

現代の文界に對して同會の最も直接な責任者または頭領とも見らるべきは、宙外氏を置いて他にないが、氏は文藝界のことを以つて政界に於ける黨派の樣なやり方でやつて行けるものと思つてゐるらしい。多數決で解決出來ることなら知らぬこと、前項で僕が指摘した樣な、コンマ以下またはでくの坊的な『同志を求め』たとて、文界の大勢に對して何の爲すところがあり得よう？　よしんば、それが孤城を死守する意氣であつたにしろ、文界現在の事實を曲解して、正當な根據が定つて來た自然主義を、どこかで氏が語つた如く、既に消滅したかの樣に見做すのは、私情である。氏は曾て自然主義者等の意見が個々別々であるのを得意げに指摘したことがあるが、それは却つて僕等が、傾向をこそ同じくすれ、黨派的な私情はなく、眞面目に個人的な發展の道にあるのを證する所以だ。氏は僕等が黨派的に運動したと思ひ、それに對して革新會を起すのかも知れないが、僕等の運動はたま〳〵個人的に傾向を同じくしたに過ぎない。個人的な發展を主とする文藝界に於て、黨派的、團體的な手段または情實を使用しようとするのは、僕が氏の爲めに取らないところだ。

文藝革新會の人々はすべて空理空想の徒であらう。『新理想の建設』とか、『人生の新價値』とか云つても、無理想の人生に到着しなければ、眞の生存價値が活現しないものだ。それが分らないで、新時代の、新技巧のと主張したところで根據は空虛だ、實行的藝術と藝術的人生との區別もそこから分る。

抱月氏は、『二潮交錯』（早稻田文學四月號）に於て、『今日の自然主義排理想說は二十年前の沒理想說

であることを忘れてはならぬ』と云つたが、之は曾て僕が指摘して、そんな考だからいけないと注意したことがある。排理想又は沒理想では、藝術にこそさうだが、人生又は實行問題に來ては、別に理想を確立攝取してもいゝことになる。藝術に於る人生(藝術的人生)と藝術外に於る人生觀とが違ふのを許すことになる。新自然主義の實行的藝術では、僕等がそれを許さない。排理想または沒理想と無理想とは意味が丸で違ふ。僕等は、理想を設ければ人生の實行的方面がそれだけ切實痛烈でなくなると云ふのだから、その無理想的人生觀が直ちに藝術にも、手段または申しわけなしに、採用出來るのだ。無餘裕實行文藝とは乃ちそれだ。抱月氏は『道德的地盤に立つ所の自己覺醒運動と藝術的地盤に立つ所の自然主義運動』、この二大潮流を『混同するのは』、『傍から之を觀察し論明せんとするもの』の『許すべからざる誤謬』だと云つて、暗に僕の說に當つてゐるが、この兩者を混同したのではなく、合致させたデカダンの實行文藝が出來ればそれに對する別な正當觀察、論明、または理論を與へるのが批評家、殊に氏の如き批評專門家の任務ではないか?『この兩面を一つに綯ひ交ぜようとすると否とはその人の自由である』などゝ逃げてしまうべきものではない。

長谷川天溪氏の『自然及び人界の野性』(太陽四月號)を讃美した主意は、僕も度々讃美辯明したのと同じだ。野性とは歸するところ生存慾である。野性が生存慾として無理想的に現はれると、獨存自我が最も酷烈に發揮され、非我なる自然乃ち天然などは認めない。氏がエリス氏の議論を眞面目に引用するのを見ると、まだ野性の根本に思ひ到つてゐないらしい。『個人主義者にして初めて大自然を愛

す』など云へるのは、ニイチエの個人主義が絶頂であらう。僕等の個人主義に進んでは、獨存自我の外に自然はないのである。（明治四十二年四月）

新潮九月號を讀んで、指摘したいことが二つある。一つは、德田秋江氏のことで、氏は馬琴を辯護してゐる。然し『西鶴と近松との取り扱ひたる題材を以つて戲作者或は幇間の爲すに適當なる事業なりとし、馬琴の取扱ひたる題材を以つて、士人學者の爲すに適當なる事業なりと信ぜんと欲す』るとは、意味を爲さない。西鶴や近松の材料が幇間向きであつたとしても、その描寫の態度には士人らしいところもある。また、馬琴の材料は士人學者向きかも知れないが、その描寫の態度には幇間的なところがある。

今一つは、文藝問答中にある說明のことだが、耽溺といふ語を酒色に深く身を沒することに解したのは間違ひであらう。この意味なら、支那人もしくは漢學者は沈溺とか、惑溺とか云つてしまう。耽溺とは僕等の造語であつて、デカダンのことだ。新潮記者の解釋は、風葉氏の小說の『耽溺』には當るかも知れないが、決して泡鳴の小說の『耽溺』には適當ではない。

耽溺派の光榮を僕は一昨年の雜誌趣味で落日の光に譬へたことがある。それを讀んだのか、どうか知らないが、竹越與三郎氏は落日派の名を與へたらいゝと云つたことが、どこかの雜誌に載つてゐた。兎に角、デカダン派の文藝を、秋江氏の樣な表面的論法で云へば、矢張り、士人學者的でないのだらう。然し、神經までも衰弱疲勞してしまうほど眞劍なデカダン派には、却つて、形式的士人學者より

も一層立派な努力があるのを忘れてはならない。(明治四十二年九月)

『インキ壺』と『新片町』

評論も亦創作の一種であるとは、僕のいつも云つてゐることだ。現代の如く鋭敏靈活な思索が必要になつた時代には、論理の重箱詰めが如何に甘く行つたとて、そんなことは問題にならない。今、言論に於ける田山花袋氏と島崎藤村氏とを比較して見るに當つても、その標準は創作的評論として、どんな相違または類似があるかを見るにあるのだ。

先づ、この兩氏が發表した創作その物を比べて見給へ。一般の批評者等からは花袋氏は實力以下に見られ、藤村は實力以上に見られてゐる。作風に於て、前者は正直でせッかちで粗笨の質がある爲めに、その美點をそこなつてしまう時があり、後者は、謙遜で、謹愼で、卑怯な持ち前の爲めに、その缺點を却つて見せないことがある。然し前者の筆端には多少でも強い力と實質とが働くに反して、後者の描寫には不熟な思想と狐疑との影が潜んでゐる。最近の過去に於て、『生』よりも『春』の方が評判よかつたかの如き傾きがあつたのも、年の若い多數評者間に、前者に現れた樣な比較的強い、深い實世間的經驗を解するほどのものが少かつた爲めだ。現に、『春』の如きは、無論感傷的な作ではなかろうが、感傷的な人物を多く取り扱つたせいで、青年間では、自分等相當の經驗に照り合はして、實際

以上の推讃を呈してゐたに過ぎない。

兩者の長短を償つて、別に一個の作風を維持してゐるのは、正宗白鳥氏である。然し今は氏のことに云ひ及ぶ暇がない。『インキ壺』と『新片町より』とを讀んで見ても、亦、その著者花袋、藤村兩氏の特色は直ぐ認められる。前者には、積極的に自己の考へと研究とを披瀝し、且、それを讀者に推薦して、左顧右視の餘裕を與へないところがあるに反して、後者には、その人身づからが既に狐疑的であるので、その要領は僅かに云ひまはしの巧みな中に納つてゐる様な、多少ゆるんだ點が見える。ゆるんだ水準には直接の誤謬を浮べる様な恐れはなからう。然し『インキ壺』の如き新らしいものをどしどし受け入れさせる様な力に乏しい。

花袋氏は西鶴を論じてモパサンに擬する勇氣があるが、藤村氏は江戸趣味の墮落を說いて田舍趣味の必要に及ぶのが闘の山だ。前者に『徒勞の作者』、『新聞の批評家』など、推薦的方面が這入つてゐるが、後者には『放浪者』の如き他人に對する觀察よりほかはない。前者の『歌集一卷』は鳥渡異様だがなほ面白い追憶であるに反して、後者の『女子と修養』に至つては殆ど編入の必要がない。花袋氏は『フランスでは自然主義が藝術上の主張として始めて顯はれただけであつて、總て學問的である』と云つたが、藤村氏は『佛蘭西の小說を一概に藝術的と評し去ることは出來ない』と云つたのは一見識だ。然し淸少納言の感覺主義をあゝ重く語るには、藤村氏は先づその先鞭をつけた蒲原有明氏の『春鳥集』序文に鳥渡でも聲をかける必要があらう。藤村氏は人の說、人の消息、人の事件を多く書いた

に反して、花袋氏のは殆んど全く氏自身の物である。花袋氏は一個の見識を備へた評論家の資格がある。藤村氏はただ注意周到な隨筆家である。之を兩氏の小說に照らして見ても、前者は獨創に向はうとする作風がある代りに、屢々その短所をも顯はし易いが、後者の作物は人物の性格を技巧的に書き入れて長くなつた隨筆だ。

『自然主義を奉ずる作者は自然の傾向として偶存特徵を書いた。』――『作者の心持ちから無論今の文藝は出立してゐる。』――『事實であれば、どんな偏僻な奇怪な人物でも事件でも考へなければならない。』――『近松の心中物ではまだ知ることの出來ない當時の人心の機微を知り得るのは西鶴の書である。』から云ふ發想には、『インキ壺』著者の力强い確信が現はれてゐる。若し之れを、故意でないまでも、多少技巧的もしくは餘裕的に發想すれば、金言的素質は持つだらうが、いや味でなければ無氣力な物になつてしまう。そして、『新片町』の著者には其傾きが見える。『靑年は老人の書を閉て、先づ靑年の書を讀むべきである。』――『硏究と云ふことを忘れた時でなければ、眞の好い寫生は出來ない。』――『今は一面甚だ暴進的で。一面甚だ保守的な時代である。』――『言葉は思想である、行ひである、又符牒である。』――『淚は悲哀を癒し、汗は煩悶を和げる。』すべてから云ふ文句が、技巧によつて出た事が見透れると、殆ど無意義な物になつてしまう。『吾儕は常に單純なる心を持ちたい。そして複雜なこの世を味ひ知りたい』の如きは、單複對照の妙味があるらしく見えるに過ぎない空想であつて、實質的に複雜な實世間もしくは藝術境に於て、複雜な實質以外で、單純が複雜を、複雜が單純を了解

し得られるものではない。ゲーテの所謂『シムプレストコムプレキシチ』(最も單純な複雜)の如きは、現代思想に於ては、全く夢中の寢言だ。愛に對する說明に於ても、新しきに觸れた樣で而も元のまゝな樣な質がある。

人生自然に對する驚異驚嘆といふことは、兩氏とも云つて居る樣で、これは故國木田獨步の言が影響してゐるのだらうが、僕が曾て獨步の思想を評した時云つた通り、人生もしくは自然を外存的に觀ずるから、獨步の所謂『大自然』、藤村氏の所謂『自然といふ大きなもの』、花袋氏の所謂『自然力』もしくは『主觀を背景にした行き方』などが出る。そのうち、獨步のは自然を全く俗見的に客觀した意味だが、藤村氏のもそれに多少技巧的顧慮を加へたに過ぎないらしい。花袋氏の發想には、主觀と客觀との苦鬪が見えるだけ、僕の所謂『破壞的主觀』即自然の域に進んで來ることも出來ようかと思はれるところがある。然し氏もまだ破壞的主觀の自然を直把してゐるわけでないから、實行と藝術との問題に至ると、僕の說を否定もしくは折衷して、利害と不關心との程度に於て區別的解釋に安んじて、いまだ全人心熱的態度に這入つてゐない。藝術家が冷酷殘忍なのは、矢張りその人の實行的努力である。この僕の注意は、こゝで說明するまでもなく、僕の他の論文を見れば分るだらう。『人間は自然の一部でありながら、自然の姿をその儘實現することが出來ぬとは情けない』と云ふが如きは、自己の努力以外になほ自然があると思ふ空想から來たのだ。氏が身づから嫌ふ藝術の爲めの藝術家視されるのはこの點から來るのだらう。

要するに、花袋氏の創作並評論には比較的に確乎たる實質があるに反して、藤村氏のそれらには、技巧と左顧右視とを除いては、殆どその立ち場が怪しくなりさうなところがある。前者の作にくだくだしい說明があつても生きてゐ、後者にそんなところがあると殆ど全くトリヰアリチ、平俗無意味に落ちる嫌ひがあるのは、乃ち、それが爲めだ。花袋氏に『「一夜」は「壁」、「收獲」などと連續して、作者の近時の傾向を窺ふことが出來る』と云はれたその三短編は、無見識な雜評界では所謂表象的創作の實例に見爲されてゐるが、僕等から見れば、無理に淺薄な技巧を以つて平凡なる平凡を意味ありげに見せようとした企てに過ぎない。そんな傾向を藤村氏が見せたのは、彼の情想中にあやしい、酷に云へば、不眞面目な手段をくッつけてゐるからである。(明治四十三年一月)

僕の用語例

蒼瓶氏の『近時の傾向』(東京朝日)に、鳥渡情調と云ふことを論じてある。然し僕等の用語例とは違ふ樣だ。僕等はヅルレンや新思想の詩などを論ずる時、英語のムード(mood)に適當な譯語がないので、それを情調と譯した。俗語では、氣分または態度のことだ。その後、早稻田の白松南山氏がリプスの美學に據つて、『現存せる心的生活の全般の態度樣式』を以つて情調(南山氏は調情)とした。乃ち全我の存在狀態を云ふのである。その當時、この語を單に感情上の問題として取り扱つてゐたのは、

鈍骨の遠藤博士であつた。ところが、蒼瓶氏はまたこの度これを解して、たゞ『感情と云ふ迄に判明せぬインデフイニトな情緒』として、それが鏡花氏や荷風氏の樣な、舊派もしくは舊派的傾向のある小說にあつて、自然主義派の小說には『跡を絕つた』と云つてゐる。然し僕等の所謂情調（全我的、心熱的、乃ち、智情意合致的態度）は、わが國の自然主義が一段の覺醒を來たしてから、初めて一部の少數作家中に見えて來たのだ。

思想と感情との實際に燃燒流和したところに眞の情調はある。蒼瓶氏の所謂『シチユエシヨンの壓迫』も、そこに至つて初めて全い力を現じて來る。氏はスバルや三田文學を調べて、それがなかつたと云ふのは尤もだが、なぜ白鳥氏の小說に及ばないのであらう？　花袋氏や藤村氏の作には、どうもそれがよく出てゐない。然し花袋氏の『胡瓜』には低い程度ではあるが、それが珍らしくも出てゐる。あの作が評判よかつたのは、その爲めだらう。然しまたあんな簡易な作ばかり見せて貰つてゐては、わが國の小說界はいつまでも物足りないでゐなければならない。然しまた漱石氏の『文藝とヒロイク』（朝日文藝欄）も、アングロサクソン的に、餘り分りが良過ぎる。佐久間艇長の遺書を讀んで、本能と義務心とを區別して考へたのは、また思索力が不足なのを證してゐる。僕等日本人の義務心が全く本能化してゐる事實までつツ込んで解釋し給へ。それが決して僕等の主義主張以外の材料ではない。蒼瓶氏が漱石氏と同樣な舊派的感傷主義（だらう）から思想と感情との流和する限界を餘り低いところに置いてゐるのは僕の贊成しないところだが、『平凡なことをその儘ゑがくものが』、手易く『成功する

とは違つてゐる』深刻な部面のあるのを注意したのはいゝ。（明治四十三年七月）

僕の創作的態度を明かにす

○○君よ。

御手紙拜見した。長々と御意見、感謝に堪へず。然し僕も、さう云はれては、默つてゐることは出來ないところがある。『放浪』の作者を『蒲團』の作者（が、センチメンタリストだと云はれた）よりもセンチメンタリストだと云ふのは、君が僕の態度を一般の自己告白、乃ち、懺悔であると見たからであらう。花袋氏がセンチメンタリストと見られたのは、氏の主人公がもう少しつッ込んで女に向ふべきを、さうしないで、自己の心でばかりやきもきし、女の行つた跡で其蒲團のにほひをただ嗅いで見たと云ふのに、充分つッ込んだ意味があると信じてゐるらしく思はれたからである。然し僕のにはさうしたところはないと思ふ。告白的態度がもしもあつたとしても、僕の方が花袋氏よりも懷疑的であらう。自己の考へを信じて主人公にくッつける程度は、僕よりも氏の方がひどい樣だ。僕は僕自身の立てた哲理を人生の實際として信ずることは決して他人に劣らないと思ふが、作中の主人公の行動に對しては、決してあまく同情してゐない。信も置いてゐない。たとへ、僕がその主人公であつたとしても、その場にだけ實際であつた通りを出してあるので――それを必らずしもいつまでも作者として主

張してゐる樣な風には書いてないつもりだ。

次ぎに、君が僕の作中に出した哲理に贊成するところがあると云ふのは、天台の現象即實在論的方面であらう。君も近頃、僕の昔と同樣、比叡山に籠つた經驗に於て、この點の類似を感ずるのかも知れない。然し僕はそれを今一層深刻にして、かの天台の空想に流れるのを、僕は刹那的に現實の方面に持つて來てゐる。そこが僕自身の特色になつて來たところで、君が却つて狹隘だといふ所以だ。永遠的に深刻を求めるのは愚だ。寧ろ刹那的に實際の深刻を求め、且、それを指摘する方が、たとへ狹隘かも知れないが確實である。空想的に廣いよりは、狹隘でも實際の深刻を握る方がましでないか？

次ぎに、君が作中の人物がぼんやりしてゐると云ふのも、僕の考へでは、主人公は勿論、氷峰も可なり現はれてゐると思ふ。君が却つて北劍ばかりがよく出てゐると云ふのは、鳥渡一部分に敗北者としての外面的特色があるからのことであらう。僕はそれには贊成しない。

次ぎに、書き方の線が太いと云ふに對して、君は線が纎弱だと云ふのは、僕には意外だ。僕もよく考へて見なければならない。君が花袋氏の『蒲團』時代の方が太いと云ふ意味が、僕も纎細な描寫が出來ると云ふのなら、僕はその方にも望を持つことが出來る。然しこれが描寫問題でなく、僕の思想が弱いのだと云ふ意なら、君に再考して貰ひたい。

次ぎに、僕のうぬぼれ氣味は無邪氣過ぎて考へ物だと云ふのに、君の提言は評論と作物との二方面に分れてゐる。先づ評論で云へば、僕が僕の云つたことを跡で是認する樣なことがあるのは決してう

ぬぼれではない。却つて僕が僕の主張を一層明らかにする所以だ。その證據には、僕は僕の主張に對する世の反駁を再駁するだけの土臺を持つてゐる。初めから、反駁されて泣き寢入りする樣な考へをうぬぼれるのなら、眞のうぬぼれでもあらうが、僕はそんなへツぽこではない。君が藤村氏や花袋氏を評する樣な（どこまで當つてゐるかは別問題としての）『いやに大人ツぽくかまへる』ことは、君も云ふ通り、僕にはないだらう。然し僕は相當の土臺を持つて相當の主張をしてゐるのである。『權威がある』とか、『ない』とか云ふ問題も、歸するところ、君の云ふ通り氣取りでない以上は、僕の主張が僕として成立してゐるか、ゐないかの點にある。そして、主張が僕として成立してゐれば、それで僕の評論並に主義は先づ當分僕の獨特であらう。まして、僕の『放浪』の主人公には僕が批判を加へてある。僕の主義をうぬぼれ的に出してないのは、なほ更ら事實である。

次ぎに、『四十以上の人』は主人公に『同情するだけ』で、敬意を拂ふまいと云ふのも、君の見方が違つてゐる。苟も世の形式にばかり捕はれて、子孫の敎訓に自分が實行してゐない（また實際に出來ない）ことを强ひてゐる中年者でない以上は、必らず『放浪』の主人公に對し同情以上の感想を持つべき問題がある。それは主人公の經驗しつゝある中年の戀だ。二十代の靑年がいく度自分に相應した女に接しても、決してまた中年者が十五も二十も年が違ふ若い女に對する樣な感じは味はは れ な い ものだ。悲痛如何の問題もそこから割出して見れば、決して君の云ふ樣な『遊戲』にはなつてゐないつもりだ。まして、主人公が特別な哲理に據つて立たうとして、而も屢々破綻する中年者であるから、その

邊のことが讀める頭腦を持つてゐる中年者に於ては、必らずたゞ同情するだけの感じにはとゞまるまいと思はれる。

次ぎに、主人公を作者が『むやみに可愛がつてゐる』といふ攻擊だが、僕は決して可愛がつてゐない。充分に批判を與へてあると思ふ。主人公(僕その物ではないのを注意して置いて貰ひたい)の內容的主義が時にたゞ外表的に成立したりするところがある。たとへば、歸京費がなくなつて、その費用の出來るのを待つのも亦一種の悲痛だと强ひて考へる樣なところがある。之を見ても、その主張が事情と境遇との爲めに破綻することを書いてあるのだと見て貰はなければ困る。主人公としては、君の云ふ通り、『經文やバイブルを排斥など出來る筈はない』かも知れないが、作者の僕としては、その批判を與へた點に於て、經文をもバイブルをも排斥するだけの價値は出してあらう。

次ぎに、君は『淺薄なる君の哲理』と云ふが、それは君が作の主人公と僕とを一緖にしてゐるから起る感想で――前項で云つた通り、主人公と僕とが決して同一でない以上は、僕には君のこの攻擊を逃れる餘地がある。事業に『失敗して女郞にほれるのは遊戲ぢや無論ない』のは分り切つたことだ。そして『然し失敗して女郞に惚るのを遊戲でないといふ哲理を立てる』のは、作中の主人公が內容的主張を外面的に成立させようとした弱みを示したのである。僕自身がそんな外面的理窟をつけて遊戲してゐるのではない。この點に於ても、僕は充分に批判を與へてあると思ふ。僕が破壞的主觀の描寫を主張するのも、そこに成り立つのである(文章世界に僕の『現代小說の描寫法』といふのが出る。讀ん

で呉れ給へ。僕自身の哲理はこの批判のうちにあるので、君の見當は當つてゐない。ひとり君ばかりに限らない。『放浪』を評した人々の多くは、當つてゐなかつた。一種の哲理の主張者を主人公にした様な特別の小說であるから、大抵の評家はそんな作の批評に慣れてゐないので、混亂を來したのであらう。

そこで、君が昔の『ソフオクレスがうそ八百を並べて深刻となり、今の人々が自分自身の本當を書いて淺薄となる』と云ふ意は、君が僕を批評する形式では、まだ確實になつてゐない。然し君が君のその形式で『いくら書かうと思つても……駄目だと思ふ』のは、君が一層深刻になつて創作界に出ようとする豫言であるから、僕は君の爲めに刮目して待つてゐよう――君は、今の作家連には滿足しないので、創作の筆を中止してゐる人であるから。

以上で分る通り、僕は僕の作中の主人公に對して少しも辯護する態度を取つてゐない。(然し多少說明的に流れた文句が僕としては辯護ではないが、讀者にはさう見えたところもあらう。)然し僕自身の哲理に對しては、『放浪』の主人公を批判してある點に於ても、別に主張を曲げてゐないのである。

○○君よ、僕は今回每日電報に於いて『斷橋』といふ作を連載する。これは君の批評して呉れた『放浪』の後部である。ついでだから、それをも讀んで貰ひたい。それから、また、この手紙は公けにさせて貰ひたい。別に君を煩はすことはないと同時に、僕には僕の態度を明かにする所以であるから。

(明治四十三年十二月)

王陽明とエマソン

白耳義現存の神秘詩人メタリンクを僕が初めて研究した時、その云ふところが意外にエマソンから來てゐるのを發見して、更らに調べて見た上、『メタリンクと僕とは思想上の足弟分であるのが分つた』ことは、拙著『半獸主義』でメタリンクを批評したところに云つて置いた。僕も亦、メタリンクと殆ど同じ年代に於て、エマソンに啓發された點が多いのだ。

僕がエマソンをよく研究し、よく感化を受けたのは十數年前のことで、その當時、德富蘇峰・山路愛山、故北村透谷の諸氏も亦それを研究してゐたらしかつた。當時、僕がふと澡のぎごちない暗示的な言葉のうちから左の句を特に注意した。

"Other men are lenses through which we read our own minds."

（他人はレンズであつて、それに由つてわれ〳〵はわれ〳〵の心を讀む。）

これは神道黑住敎の開祖黑住宗忠の和歌、

『立ち向ふ人の心は鏡なり、
おのが姿を寫してや見む。』

と云ふのに全く同致である。もとから外國嫌ひで、而も日本主義なる僕は、この同致を見て、非常に

心丈夫になり、わが國にも、コンコルドの賢者と匹敵するものがあるに違ひないと考へて、調べ當てたのが近江聖人中江藤樹である。

藤樹が十九世紀のアメリカに生れたら、プラトーン、モンテイン、スヰデンボルグ、ゲーテなどの英譯をも讀んで、必ずエマソンの廣い識見を體現したであらう。また、エマソンがわが國の德川時代の初期に生れたら、儒教と佛教との狹い智識に限られて、たゞ實質のみは等しい藤樹になつたであらう。兩者の相違は、實質にあると云ふよりも寧ろたゞ時代と生國との相違に過ぎない。ところで、エマソンを熟讀してゐると、おのづから支那の王陽明の學風を思ひ出さないではゐられなくなると同時に、また、藤樹はその陽明を祖述したものであることがます〳〵忘れられなくなつた。

こんな關係で、その時から、僕はエマソンと王陽明とをいつも聯想する樣になつた。陽明の一性論はエマソンの汎神論である。陽明の誠心發展說はエマソンの自然內存說である。陽明の所謂『虛靈』並に『良知』はエマソンの所謂『スピリト』並に自己心內の『羅針盤』である。陽明は陸象山の『六經、われを著はし、われ、六經を著はす』と云つたのを敷衍して、

『心はわが天に得たる理である。天人に間なく、古今に分つことがない。苟もわが心を盡くして以て求めれば、則ち中らずと雖も遠からず。』

とあるは、エマソンの

『人は自然の中心。』

『人は廢頽物中の神である。』

『もし理性がもつと正直な視力に高められると、輪廓と表面とが透明になる。』

『歷史の事實はすべて心に理法として前存する。』

『自然（理法）と調和した生活、愛德と愛眞理とは人目を清めてその本文を理解させる。』

と云ふのと、同じ道筋ではないか？寧ろ後者の方が具體的によく發想されてゐる。

陽明が道德の成長を草木の發生順序に直喩し、先づ抽芽、次ぎに發幹、次ぎに生枝、生葉があると云つたのは、エマソンの

『人は相對物の一束ね、諸根の一結びである、その花と果實とは世界だ。』

とある隱喩に比べて、發想法の巧拙は違ふが、殆ど全く同じ意味である。また、陽明が

『人の良知は乃ち是れ草木瓦石の良知……禽獸、草木、山川、土石、人と元たゞ一體。故に五穀禽獸の類、みな以つて人を養ふべく、藥石の類、みな以つて疾を療すべし。』

と云つたのに對しては、エマソンは『人は步む木である』と云つたり、蛇が直立すれば人間だと云つたり、また、人は獸を食ひ、獸は草木に養はれ、草木はまた鑛物を吸收して發達する事實を擧げて、根柢はすべて一なるを證したりした。また、稀代の教育家たる陽明が『それ物理はわが心に外ならず』と云つたのは、思索家エマソンが『教育は自己を開放するのである』と云つたのと、表裏同一の言である。いづれも、すべて、汎神論、萬有神敎から來た論法である。

陽明の哲理を概括すれば、第一『心即理』、第二『知行合一』、第三『致良知』の三ケ條につゞまる。第一の心即理は唯心論的宇宙觀であつて、――エマソンも亦事物を辨證するに最も便利な立脚地でもあると稱して唯心論に立脚し、宇宙は一大精神、一大靈魂の發現であると主張した。して、それが人間とかけ離れた物でないとするに於て、耶蘇教正統派の神話的な人格的有神說の樣なものに落ちず、寧ろ東洋固有の高遠な汎神論的態度を守つてゐた。然し、いづれも、精神その物を餘り理論的に考へてしまつた爲め、朱子派の『理』や物的汎神論などゝ同樣、結論が抽象的になつたのが缺點である。

第二の知行合一は、僕の肉靈合致を最も低い程度において行つた樣な人生觀であつて――エマソンには、

『行ふは思想の完成と公表とである。』

と云つた風な說はあるが、特別に知と行とは合一してゐなければならないと主張したところはない樣だ。然し、渠の說を追窮して行けば、陸象山や陽明の說と同樣、心は乃ち人間であるから、心の知ることは人間が既に行つてゐることでなければならない。それが一層具體的になれば、僕の思想即實生活、藝術即實行の妙域にも達すべきであつたのだ。ところが、エマソンも陽明の徒も、人生觀に大切なこの要點を寧ろたゞ社會的道德觀の方にばかり對つて行つた。もつと熱烈な程度に進み得た機會をそれが爲めに、二人とも逸してしまつたのである。

第三の致良知は良心に關する道德說である。良知とは自己心內の羅針盤である。心はそれによつ

て草木の如く、內部から外部に發育する。その發育するや、正意誠心を持つてする。から、毫も他人の干渉を許さない。

『善念の存ずる時は、即ちこれ天理である。』

と、エマソンの『自信論』も亦、同じ態度に於て、そんな權威を要求してゐる。然しエマソンの內部發展的人生觀並に道德觀では、それだけしつかりした信念ある自己が、知らず識らず、最も非我的な運命や輪廻にまでも延び行き、全く單に抽象的理論での統一しかなくなつて、遂にかの『圓環論』の樣なその作者としては最も光明的で、僕等から見ると最も乾死枯滅的を演じ出した。それと同樣、陽明も亦もし萬有が一性、一性が萬有なら、天理も差別もあつたものではないではないかと云はれる程度にとゞまつてゐる。

これは普通の汎神論者の必らず遭遇する行きどまりであつて――その解決をつけるには、もしくはその解決をつけることが出來ないと正當に承認させるには、同じ唯心的汎神論の傾向でも、僕の所謂無解決が解決になる肉靈合致の自我的刹那主義を持つて來なければならない。陽明は或人に『人みなこの心がある。心は即ち理である。何を以つて善あり、不善ありとなすか』と糺され、

『惡人の心はその本體を失ふ。』

と云ふ、餘程窮したらしい返事をした。唯心論に得意な逃路ではあるが、ありもしない抽象善を提出するから、そんな寓言を發するの止むなきに至るのだ。もし僕の刹那主義に於ける優强者の哲理によ

り、『惡人を』『弱劣者』とすれば、致良知の本義は勿論、知行合一並に心即理も亦もつと具體的に、もつと事實的に、而ももつと深刻に發想することが出來るのである。乃ち、エマソンの所謂『最も抽象的な理論は最も實際である』の實現が出來るのである。

以上は、コンコルドの賢者を介して、餘姚學派の本尊の根本哲理を略評したのであるが、更に王陽明とエマソンとの時代を考へて見たい。エマソンの時代は、進化論の唱道者ダーキンの勢力があつて、科學萬能に傾いてゐる時代だ。して、世界の思想界には、エマソンの所謂『傳說の哲學と詩歌』、『歷史上の宗敎』ばかりで、『洞察の哲學』、『啓示の宗敎』がなかつた。そこへ、大西洋兩岸の英語國に、東西呼應して自由思想家が出た。カライルは英國に於て反科學派の煽動家となり、エマソンは米國に於て超絕哲學の唱道者となつた。陽明の時代には、また、かの窮屈な、窮理的な、且、徒らに外面的に流れ易い朱子學が大明朝廷採用の官學となつて、殆ど思想の自由を束縛するほどな壓迫を加へてゐた。陸象山以來、殆ど朱子學に反抗するものはなかつたが、陽明は象山の系統を引いて、『山中の賊を破るは易い、心中の賊を破るは六ケしい』といふ勢ひを以つて、盛んにその自由思想家たる職分を發揮した。して、エマソンが頑冥な耶蘇正統派に排斥されながらも、その影響は今に種々の形を以つて現はれる如く、陽明も亦餘り几帳面な儒者連からは遠ざけられながら、その感化はわが國にいつも絕えることがない。

瞑想的傾向の人や自由思想家には、兎角、耽溺性のものが多い。エマソンは一たび厭世の極に沈ん

だ。その反動として、また、非常な樂天に耽る樣になつた。『行狀記』を見ると、陽明にも亦『五溺』がある。『初めに任俠に溺れ、再び騎射に溺れ、三たび詞章に溺れ、四たび神仙に溺れ、五たび佛氏に溺れ、正德丙寅に始めて正に聖賢の學に歸す』と。この『歸す』も亦、前者の反動樂天に於けるが如く、溺れた意味に取つた方がよからう。それでこそ、致良知が徒らに學者机上の研究ではなく、渠の自由な人格と一致する所以になるのである。然しエマソンは、どちらかと云ふと、陽明よりも單純な生活を送つた。大學を出てから、鳥渡牧師になり、女學校の敎師になつたくらゐで、跡はコンコルドに退いて、安樂平穩に著作を爲し、また諸方からの講演の依賴に應じてゐた。陽明は然らずで、戰士となり、爲政家となり、抗疏して流謫に會ひ、放たれてまた巡撫を命ぜられ、偉名と讒誣こも〴〵至り、良知を悟つたのは既に五十歲の時であつた。

いづれも、唯心說を建てただけあつて、意志は堅固であつた。エマソンは肺患を癒すに藥を以つてせず、自己の身心鍛錬を以つてした。陽明も亦肺を病んだが石槨を造り、端坐して自ら誓つて曰く、『われたゞ命を俟たんのみ』と。さうして、忽ち廓然大悟した。奇矯も亦かう云ふ種類の人には免れ難い。或人が主人を『ゐるか』と訪ねて來た時、室にゐながら、『エマソンはゐない』――『さう云ふのがコンコルドの賢者ではないか』と云ふと、『渠の心は今或ことを考へてゐて、渠は見えるところにはゐないのだ』と答へた。それに似た樣な逸事は、陽明學派の間にもある。陽明自身も亦妻を娶る合巹の日に於て、鐵柱宮に道者に就て養生の術を聞きながら、歸るを忘れたことがある。陽明は、また、

『閨中のことをも人に云ふに憚からない』と云つた。卑怯な而も僞善勝ちな儒者等は、これを以つて陽明の德が人間以上に優れたところがあつたかの樣に解釋するが、それは間違ひで、閨中のことは人間の當り前のことだから何の憚るところもないと云ふわけである。かう云ふ意味に解釋しなければ、かう云ふ肌合の大膽にして公明な學者の人物は出て來ないのである。

また、エマソンが『異敎者』と罵られた如く、陽明は陸象山と同じく『陽儒陰佛』の譏りを受けた。『佛敎變じて禪學となり、禪學變じて陽明學となる』と。然し、渠の返答とも見るべきは左の如くである。

『佛氏の本來面目と云ふものは、卽ち、所謂良知である。格物致知の功は、卽ち、佛氏の常惺々である。體段工夫、大略は相似てゐる。たゞ佛氏は箇の自私自利の心がある。同じくない所以だ。』

佛說も唯心的傾向を帶びてゐるものではあるが、如何にも、自己を全くするに消極的な行き方を取てゐる。人間を僕が人生の活動に無關係とする解脫と死滅とに導いて行くに過ぎない。それが陽明の所謂『明德を明かにするを說いて、親民を說かない』ところであらう。陽明の抽象的唯心論が僅かに積極的生命があつて、解脫傾向を免れてゐる所以は、渠の大膽な人格と、それから治國平天下に應用される部分とである。親民的要求は儒敎並に日本人、支那人の一特色で、丁度、エマソンの乾枯な超絕哲學に於て、アングロサキソン人種常套の常識が案外に光彩と活氣とを添へてゐる樣なものだ。

ところで、陽明も、エマソンも、自分の建てた學理には死んでゐることを忘れてはならない。渠等の反對の傾向あるカントや朱子などの行き方には、なほ更ら無論、始めから一點の生氣も認めにくい

のである。陽明が『一性』と云ひ、エマソンがグレートソール（大靈魂）と云ふは、殆ど現實から離れた統一になつてゐる。つまり、カントの『絶對』、朱子の『理』と同樣、具體的論者から見れば、形式だけで、實際の統一力がなくなつてゐるのだ。統一したと見爲される事物、心身、肉靈は、その說の建たないときと同樣、がらくたの如く散亂したまゝである。濂等が一元論者として提出する性に對する人欲、天理に對する善惡、靈魂に對する肉體、すべてから云ふものをどこに收めて吳れる？　濂等も他の哲學者等と等しく、たゞ形式的な、乃ち、非現實的な說明を附するより仕方がないと云ふ狀態にある。これ日本に於ける陽明の追從者間に、事業にあせつて失敗しないものは、徒らに高遠を氣取つて、枯禪に終るものが多い原因だ。陽明の實踐的傾向、エマソンの常識的光彩も、今一層の現實的自覺に進む餘地がある。この點に至つては、僕の自我獨存の刹那主義的肉靈合致說が、最も正當な、而も全く積極的な道として、現代に存してゐるのを、讀者に注意する必要がある。僕のこの說は、おもにエマソンや王陽明を讀んだので出來たとは云へ、わが國古代神道の本源と現代の新思潮とを洞察して、初めて確立したものである。

僕は中江藤樹の學說が、陽明に據らないで、全くわが國人の獨創であつて吳れたらよかつたにと思つた。然しエマソンにも亦、その系統を遡れば、ヘーゲルあり、スキデンボルグあり、プラトーンあるを思ひ、わが國の藤樹や大鹽中齋や山田方谷などが外國から來た陽明學派たるをも、たゞ僅かの遺憾を以つて迎へる樣になつた。

小說家としての島崎藤村氏

花袋氏が描寫の態度に於て藤村氏を追つてゐることは、僕の『現代小說の描寫法』で指摘して置いたところだ。そして、今回、藤村氏の『犧牲』を讀んで、藤村氏が材料の取り方に於て花袋氏の『生』や『幼兒』の跡を追つた事實を發見することが出來た。

『生』は、花袋氏の物のうちでは、構想も宏大で、且、それ以後の如き平面描寫の惡弊にはまだ落ち切つてゐず、比較的に勝れた作である。『幼兒』に至つては、氏の惡弊にからめられて、殆ど全く內容を逸して一凡作に過ぎない。あれを讚めたものがあるのは、まだ感傷的な程度に於て育兒といふことに興味を持つてゐるところから、ただわけもなく、表面上の書き現はし方が可なりうまいのに迷はされたのである。然し、この兩作は、たとへ作の長短と材料範圍の廣狹とは違へ、いづれも人の老衰と兒の發育とを、乃ち、老者若者の新陳代謝を題材にした物だ。藤村氏の『犧牲』も亦同じ題材である。

老若の新陳代謝は人生表面上の姿である。表面上から見れば、人生はこの代謝より外に何物もない。どの時代、どの場所を見ても、人生を形式として見れば、それ以外にはない。その代り、それだけのことが如何によく描寫されたからと云つても、作家としては、何等の特色も出ない。『不如歸』や『わが輩は猫である』の如く、初めから低級の小說として出たものは別だが、苟もわが國現代の而も新派

の作であるとして、こんな物を外國へ紹介したら、どうだと思ふ？　單にわが國の習慣風俗志に異ならない。たとへば、砂を拾つて砂に返すと同樣、作家の眞の努力を認めることは出來ない。努力のないところには、特色もない。

から考へて、ふと、僕は妙な試みをやつて見た。『犧牲』中の文句を取つて、花袋氏の『幼兒』や『生』や『妻』（これも、題材は前二者と同じ取り方と云てもいゝ）の中に當てはめて見ると、手法こそ違へ、形式的意味ではよく落ちつくではないか？　讀者はこれが何事を表示してゐると思ふ？　餘り平凡で、特色がないことを書いてゐるからである。僕は失望しないではゐられなかつた。

自然主義が作家としての正當な自覺を促したのはよかつた。然しこの自覺は、たゞ、舊派から新派の區別される旗幟である。旗幟を持つたゞけで、それ以上の努力もなく、人生の形式ばかりを描いて滿足してゐるのでは、徒らにつッ立つたまゝ空を眺めてゐるのと同樣だ。平面描寫より外出來ない人人、もしくは、平面描寫を主張する人々の態度は、乃ち、それではなからうか？　試みに、『犧牲』から左の文句を讀んで見給へ。

しばらく二人は、夕日を眺めて、默つて相對してゐた。

『正太さん、君なり、僕なり、俊なりは……言はゞ、まあ、舊い家から出た芽のやうなものさネ。皆な芽だ。お互ひに思ひ〳〵の新しい家を作つて行くんだネ。』

『どうかすると、橋本の家は私でおしまひになるかも知れないぞ。』正太は考へ深い眼付をした。

右はこの小說が、『家』から續いて有する構想上、甚だ大切な記事である。全體の結論と同樣に見爲してもいゝところだ。然し、之を讀むものには、如何にもさういふ筋で書いて來たのだと頷づかれるにとゞまつてゐて――この大切な記事から生ずる筈の味も力もない。丸で砂を嚙む樣だ。つまり、白鳥氏の作で往々感じられる樣な、ひツたりと人に迫る趣きがない。これは、その場に伴ふべき背景もしくは回想が、たとへあるとしても、緩漫に描かれてゐるからである。換言すれば、描寫が充實してゐないからである。

全體、藤村氏のどの小說を論じても、その深刻であるか、不深刻であるかを云ふのは、まだ氏を買ひ被り過ぎてゐると、僕は思ふのである。そんなことは先づいつのことか分らないとして、兎に角、描寫の充實、不充實を問ひさへすればいゝ。然しそれも、氏の作に於ては、一篇としても、またその一篇の一部分としても、描寫法はいつも不充實である樣に思はれる。今引用した件りに於ても、本筋から來る充實の不足は勿論のこと、『夕日を眺めて』云々の一句も、單に文章上に鳥渡あぢをつけて見ただけであつて、それが少しも背景になつて來ない。『正太は考へ深い眼付をした』も、亦、反射力に乏しい。つまり、殆どあつても無くてもいゝ樣な形容だ。

この最後の句の如きは、殊に、作者は突然そこで與へた斷定であつて、殆ど全く具體的になつてゐない。かういふ句は、『家』に於てよりも、『犧牲』に一層多い樣に思はれる。そして、をかしいことには、眼付きの說明（或人の數へたのによれば、何々の眼付と云ふ個處が四十いくつかある）に最も多

い。一例を擧げると、『苦しむ獸のやうな眼付をして』を以て、作者は三吉がその姪に對して私かに有する性慾をも暗示してゐるつもりらしいが、實際は、ほんの、作者の說明——而も不完全な——に過ぎない。且、その慾その物もいつもたゞ作者の御挨拶だけで通り過ぎてゐるのであるから、內容的披瀝はどこにもない。『不思議な力は、ふと、姪の手を執らせた』とあるのが極點で、跡は、かの狡猾な俳優が泣きの場で他の下役に働かして置いて、自分は後ろ向きになつて、そらどぼけてゐると同樣な書き振りだ。これを非常な面白味のある樣に感服する作家もしくは評家があるならば、その人は餘ほど洞察力に乏しい人だ。從つて、たとへ三吉自身の心持ちとして『おそろしい』とか、『耻辱』とか、『いやだ、いやだ』とか反省する個處がところ〲あつても、僕等はそこに讀み至る度每に、與へられてない內容を無理に推察しろと强ひられてゐるやうな氣がする。

之をうぶにも、また正直にも、暗示的意味があると受け取るのは、餘り早く兒持ちになつたばかりの讀者や、一生感傷的な程度にとゞまる質の讀者が、花袋氏の『幼兒』に感服すると同樣である。作中に含んでゐない物、もしくはありさうな風に見せて逃げを張つた物に對して、それを意味ありげに推察させようとする樣な書き振りを以つて決して暗示的とは云ふことが出來ない。暗示は披瀝された內容の充實である。作その物、もしくは句その物の中に充實力がなければ、その作もしくはその句に意味も亦ない筈だ。暗示を必要とする新派の所謂意味は、形式的推察に由つて得られる樣な空しい、または淺薄な物ではない。

然るに、平面描寫の弊に落ちた作家は、花袋氏にせよ、藤村氏にせよ、描寫上、形式と內容とを二元的に區別し、先づ形式を整へて、跡は讀者の御推察に委すると云ふ風であるから、いつも內容を逸してゐる。花袋氏はこれを四十前後になつた作家でなければ分らない味はひだとやうに解釋してゐるが、僕も四十前後だが、さうは思はない。もし年齡と云ふものを勘定に入れる必要がありとすれば、餘り變化と特色とのない經驗に年齡を過し來た作家評家の觀察としか思はれない。その觀察もしくは描寫に新時代の要求する內容が、たとへ出てゐたにしろ、甚だ稀薄だ。この弊は殊に長篇に於て著しい。一句、一節、一段落の運び振りには、何か出て來さうに見えるが、つひに形式以上には何物も出ずに終る。その空疎な點に於ては、舊派の無自覺小說に於ける成心と大した逕庭がないではないか？

僕等の求めるのは、人生の形式や筋書きではなく、握られた內容、乃ち、破壞的主觀に映ずる氣分である。藤村氏等はそれを逃げてゐる。一層具體的に證明すれば、『犧牲』の作者は、本來感傷的作家であつて、お俊に對する三吉の感情を取り扱ふにも、餘り咏嘆し過ぎて誇張したものとしか見えない。『犬のやうに震へた』とか、『おそろしいところへ引摺り込まれて行くやうな』とか云ふ尤もらしい句が、すべてたゞ獨り合點だ。

つツ込み方が足りないばかりではない、作者の觀察と經驗とが不充分であるからである。逃げを張るのを自己靜觀などゝ思ひ違つては困る。各國民を日本人が觀察するに譬へて見給へ。その日本人が、自國の風俗習慣と違つて、忠孝の觀念がないから、英國も獨逸も駄目だと見るのは、客觀力が足りな

いのである。さうかと云つて、全く英人や獨人になつてしまつて、忠孝と反對性を有する個人觀念ばかりを見て來たと云ふなら、客觀力を誤用して、日本人の特性をまで失つてしまつたことになる。第一の場合は小主觀的である。第二の場合には、小主觀を避けそこなつて、觀察者の特色を滅ぼしたわけだ。フロベルが行きつまつたのは、それが爲めで――花袋氏や藤村氏が渠と同じやうな考へを持たうとしてゐても、而もその創作には第一の場合が多いのである。破壞的主觀は小主觀を指すのではない。また、無特色の客觀を云ふのでもない。これは別に第三の場合であつて、日本人の忠孝と英獨人の個人觀念とを同じ根柢から出た特殊の幻影を見るのである。ありふれた常識を少しでもはづれた事件もしくは人物を描けば、直ぐ想像であるとか、非現實であるとか云ふのは、此種の主觀までつッ込んで考へないからである。フロベルにせよ、どうせ作家の個性を離れて藝術はない。たゞその個性に伴ふ主觀が破壞的でなければならない。然し感傷家等には、兎角、破壞主觀が現じない。從つて、渠等の努めて避けようとする小主觀なる物――つまり、その人の不明と經驗不足とから來る結果――が附き纏つてゐる。花袋氏には　それが、自分が見聞しさへしたことなら、考慮を用ゐず、何でも確かな事實だといふ信仰となつて顯はれてゐる。淺慮な點は滑稽でもあるが、正直で、まだしも積極的なところがある。藤村氏に至つては、然し、それが、尤もらしく、自分の不明と無經驗とを隱すつもりの――然も、その實、それを看破せられ易い――斷定となつてゐる。不正直で、而も空疎の消極的過ぎる。前項までに引用した句もそれだが、三吉が正太と飲んでゐる席に出た中年增の藝者を『自信の

ない眼付をして、盃を所望した。世に後れても、それを知らずにゐるやうな人で』と書いたのも、日記もしくは記事文の一節としては、結構うなづかれるだらうが、三吉や正太の心持ちから出た描寫の一端としては、前後の關係上、餘りに作者の利口ぶつた早合點に落ちてゐる。

今、改めて、『犧牲』一篇の筋から調べて見よう。第一段には、房子の病死を中心として三吉の家庭。第二段、第三段は、妻の里歸りの留守に、三吉の寂しみが手傳ひに來てゐるお俊に向つて燃えること。第四段は、正太が相場師の端くれになること、並にお俊の父が苦しい事情で滿洲へ稼ぎに出ること。第五段は、三吉が親戚に對する責任が重くなること、正太が一廉えらくなつたつもりで遊び出すこと、並にお俊の妹の死に對する親戚各々の態度。かういふことは單にくど〳〵しい筋書きとしては、よく分つてゐる。然し筋書きだけであつて、內容もしくは氣分と云つては、實に、氣の毒なほど貧弱だ。

零細な事件もしくは會話を、たゞ零細な事件もしくは會話として、如何に上手に且精密に列ねたとて、暗示もなく、背景も散漫、批判もたゞ感傷的な物では、通り一遍の世間話と何等選ぶところがない。作者としての努力は、單に成るべく詳しい世間話をしようとするにとゞまつてゐて――その態度は、實に調子の低いヒョツトコ踊りと變らない。ヒョツトコ踊りや、七五句をうはすべりさせた調子も、見聞してゐて面白くないことはないが、それをいつまで面白がつて見聞してゐても、嚴肅な意味は出て來ない。藤村氏の作は必ずしも嚴肅でないとは云はない。然しその嚴肅は虛僞の嚴肅である。渠の技巧を艷消しの技巧と人は賞讃するが、それはほんの表面上に迷はされてゐるからである。渠は

實際には俗調に過ぎないものを煩瑣な技巧によつて、俗調でない樣に見せかけてゐるのだ。三吉を作者自身と見て、あんな野暮臭い、作者自身の所謂『臆病な』男でも、姪の手を握つて見たのが面白いと云ふ樣な、作以外の興味を持つ讀者もしくは評家があるのは別問題として――この作中で一番、ご世間並みよりつツ込んである三吉がお俊に對する意味ありげの感想でさへ、前項で云つて來た通りの曖昧だ。洞察力が少しでもあるものなら、直ぐその無努力を看破してしまうに相違ない。僕の議論をもツと確かに證明する爲め、作中に出てゐる人物について考へて見よう。主人公は跡まわしとして、先づ、雪子、お延、豐世、榊、實、森彥などは殆んど全くでくの坊である。『叔父さん、なぜ私が墓場が好きですか、それを話しませうか』などから出て來るお俊は、主人公に重い影響を及ぼしただけに、ちらりほらりと出るのだが、割合によく活躍してゐる。然し最もよく活躍してゐるのは、やうやく相場師の玉子ほどになつたのを、餘程えらくなつた樣に思つて、人並みの遊びをしかけた正太である。

然しまた考へて見給へ。あのお俊も井戸端會議のうわさほどにしか現はれてゐない。三吉に元の樣な『世々しさは見られなかつた』のを、

『何故、叔父さんは斯うだらう……』と、お俊は自分で自分に言つて見て、宗蔵の世話料を受取つた。

とあるくらゐが關の山だ。正太にしても、榊との話で、

『どうだい、君、今日の相場は。僕は最早傍觀してゐられなくなつた……』

『ドシンと來たねえ。』

など云ふ答へとか、

『さう言へば、今は實におそろしい時代ですネ』と、正太は思ひ出したやうに、『こないだ、私がお倭ちやんの家へ行つた、「鶴ちやん、お前さんは大きくなつたらどんなところへお嫁に行くネ」と聞きましたら――あんな子供がですよ――軍人さんはお金がないし、お醫者さんはお金があつても忙いし、美い衣物が着られてお金があるから大きな吳服屋さんへお嫁に行きたいですト――それを聞いた時は、私はゾーとしましたネ。おそろしい虛榮心だ。

と云ふ俗話ぐらゐで現はされてゐる。

そんな人間もあるからいゝではないかぐらゐの評言で、わが國の新らしい自然主義派の小說がそツとして置けるものなら、發足點の自覺も何もあつたものではない。世間のうわさ話など以上にどれ程這入つてゐる？　平凡な人間を平凡に寫すのが自然主義だと思ふのは間違ひで、平凡な人間にも非凡な背景はあるのが人生だ。今の自然主義はそこまで進まなければならない。更らに進んで、三吉の性格が曖昧で、正太ほどにも出てゐないのを考へて見給へ。世間並みの觀察以上に這入り込みかけたお倭に對する感想――これが作中での比較的に深みある部分――に逃げを張つたのが、第一に、要領を得ない。よしんば、作者が逃げたことを以つて、直ちにそんな態度が三吉その人の性格であると見たところで、『その臆病な、』おそろしがりの、詰らないことにも大事振る野暮男は、何等の新らしい努力を要しないで、世間話からそツくり口寫しに取つて來ることも出來る。そんな口寫しぐらゐに多大

の意味があると思ふ作者もしくは讀者は、つまり、經驗と觀察とが不足してゐる爲め、その不足を世間並みに補ひ得たことを以つて、直ぐ並み以上に出たかの樣に思ひ揚つてゐるに過ぎない。斷つて置くが、僕は舊思想家の小說論に於けるやうなことを云つてるのではない。凡人を描くから行けないと云つてるのではない。各凡人の特殊性を忘れて、その表面だけを世間話的に語つてゐるのを行けないと云ふのだ。

世間の形式を知つただけで、自覺ある創作が出來るのなら、死んだ櫻痴居士の如きは大作家であつた筈だ。また、現今の小說界では、新派よりも舊派の方に、世間の酸いも甘いも知つてゐる人々が多い。然し櫻痴居士や、露伴や、紅葉や、下つて鏡花や風葉の諸氏が跋扈した時代に、自然主義に覺めた小說が出來ないで、それを僕等がこれから仕あげる責任を背負つた所以は、世の形式を破つて、直ちに內容を捕へなければならないからである。渠等にはそれが出來なかつた。藤村氏はまた渠等舊派の殿將として、風葉氏に繼いで、僕等の時代に接してゐるだけで、新派の系統は故獨步から花袋氏、白鳥氏と來る順序らしい。が、然し、花袋氏も、『妻』や『緣』に於ては、矢ツ張り、世間の形式を何ほども出てゐない。

もツとよく『犧牲』を調べて見よう。

『あゝ、父さんも疲れた』と三吉は子供の側へからだを投げ出すやうにした。『菊ちやんがゐなくなつて、急に家の內が寂しくなつた。ホラ、父さんが仕事をしてる時、机の前に二人並べて置いて、「父さんが好きか、母さんが

好きか」と聞くと、房ちゃんは直ぐ「父さん」と言ふし――菊ちゃんの方は暫時考へてゐて、「父さんと母さんと兩方」だトサ――あれで菊ちゃんも、ナカ〳〵外交家だつたネ。』

『どつちらが外交家だか知れやしない』とお雪は輕く笑つた。

これは、『家』に於て三吉が子供を一號、二號、三號と呼んで見るところと同樣、作者には餘ほど味がある記事らしい。然し、三吉の思ひつきとして、たゞ日記的趣味しか出てゐないではないか？

三吉は直ぐ箸を執らなかつた。例になく、彼は自分で自分を責めるやうなことを言出した。『實に、自分は馬鹿らしい性質だ』とか何だとか、いろ〳〵なことを言つた。

『これから叔父さんも、もつとどうかいふ人間に成ります。』

斯う三吉はすこし改つた調子で言つて、二人の姪の前にあたまを下げた。

お俊やお延は笑つた。そして、叔父の方へ向いて、意味もなくお辭儀をした。

この件りは、三吉が『死んだお房のかはりに抱くとしては、お俊なぞは大き過ぎた』と云ふ寂しみから、前夜ふと、かの女の手を執つた後悔を示めす『狼狽てた容子』である。手を執りながら『こんな風にして歩いちや可笑しいだらうか』と云つたに對して、お俊はどこまでも賴りにするといふ風で、『叔父さんのことですもの』ぐらゐで濟んでしまつた。『臆病』の男の樣子としては、可なり活躍してるが、これも世間話を日記に控へたほどのことに過ぎないではないか？『實は、あの三吉はお俊と肉交までしたのであつた』と云ふ作者の後日談が、餘ほど評判になつたと同時に、あの作の深みを増し

たやうに考へられてゐるが、それはほんの偶像崇拜的評價であつて、實際の作その物には、そんな充實的氣分も内容も現はれてゐない。

三吉が

『あゝいふ新らしい畫を描く人でも、方角なぞを氣にするかナア』

と云ふと、お雪は

『あなたのやうに關はなくても困る』

と答へる。これを注意して見給へ。正太を意見せよと森彦に云はれて、『私に言はせると、なぜそんなに遊ぶと責めるよりか、なぜもツと儲けないと責めた方がいゝ』と答へ、却つて正太に『水天宮の護り符』をミズ除けにしろといふ謎で贈つた三吉は、森彦や實の樣な老人に對しては、或は、新らしい人間かも知れない。然し、そんなことは、作者の思ひつきや頓智だけで以つて書き入れて置くことも出來よう。三吉の性格としては、叔父として姪の無邪氣に魅せられたり、正太と共に飲みに行つたりすると云ふ形に、若い、從つて新らしいところが推察出來るだけであつて――内容からして新らしい人間といふ樣な點は見えない。從つて、畫家と方角とに關する夫婦の談話も、けふは天氣がいいとか、惡いとか云ひかはすと同樣、ほんの、一夕の俗話に落ちてゐる。大した背景もなく、僕等の云ふ意味もない。

僕等の云ふ意味は記事の充實から來るおのづからの暗示である。そりやア、無意味なことでも印象

は殘ることがある。たとへば、初めて會つた人が聲高な笑ひ方をしたとか、陰欝な調子の話振りであつたとか、神經質の青筋を立てたとか、そんな上ツつらの觀察しか、花袋氏にも藤村氏にも現はれてゐない。官能的描寫は、印象を深くするに於て、近代小說にはなか〳〵必要なことになつてゐる。冷酷なトルストイは、初めて舞踏會に臨む娘を、たツた一つ、その鼻のさきに何かくツついてゐたと云ふことを記して赤裸々にしてしまつた。また、遠足に出て、姦通して來た女の全部的心持ちを、歸途、停車場に迎へに來てゐた實夫の顏つきが正直さうだが、馬鹿の樣に見えたといふ一言で最もよく現はした。こんな銳敏な而も深刻な描寫は、花袋氏にも、藤村氏にも、藥にしたくとも發見することが出來ない。わが國の小說家は、白鳥氏を除き、まだ〳〵神經が遲鈍過ぎる。と云ふのは、平面描寫とか、人生の一角とか云ふ偏見に滿足して、背景と內容の全部がその場に活躍するほど充實した觀察をしてゐないからである。

外國語に飜譯されても、わが國の新智識連が眞に恥辱を感じない樣な作は、殆ど絕無ではないか？藤村氏にも、官能描寫に氣がついてゐるところが見えないでもない。渠は『破戒』以來、頻りに、茶のかをりとか、味噌汁のにほひとかを出して來る。然しそれが餘り効能がなく、每日、たゞ習慣的に番茶や汁を味はつてゐる人々の氣分しか受け取れない。遲鈍な世間並みの描寫が流行してゐる結果、

お雪は白足袋の洗濯したのを幾足か取出して見て、

『一二度そとへ行つて來ると、もうそれは穿かないんですから、幾足あつたつてたまりませんよ』

斯樣なことを言つて笑ひ乍ら、中でも好ささうなのを擇つて夫に渡した。三吉は無雜作に綴合せた糸を切つて、縮んだ足袋を無理に自分の足に塡めた。

こんな記事は、用意さへあれば、充分に三吉の性格をも活躍させることが出來るところだが、その用意が作者にないから、日常のことをたゞ忠實に細かく書いてあると云ふだけにとゞまつてゐる。三吉は頻りに仕事、仕事と云つてゐるが、その仕事の內容については、始ど全く觸れてゐない。作家ではあらうが、たゞ原稿紙に向ふとか、長い勞作をしたとか、またするとか云つてゐるだけだ。これがまた渠を曖昧に終らせる一原因である。

子を失つた悲しみを忘れる爲めに、更に長い仕事を始めやうと思ひ立つた。

と云ふのも、單に索然たる說明である。『金！　金！』と叫ぶ正太や榊と飮んでゐて、三吉が『どうしても醉へなかつた』とあるところも、さういふ人間もあるといふ輪廓だけであつて――その醉へないのが尤もだと頷かせるまでになつてゐない。前者が、職業から云つても、割合に自然に行つてゐるに對して、後者の職業が充分な對照となつて出てゐないからである。榊が

『ねえ、橋本君、先づわれ〳〵の商賣は、女で言ふと丁度藝者のやうなものだネ。お客大明神と崇め奉つて、ぺコぺコお辭儀をして、それでまあ玉を付けて貰ふんだ。そこへ行くと、先生は詩人とか何とか言つて、乙に構へてもゐられる……大した相違のものだネ。』

と云ふと、

三吉は『また始まつた』といふ眼付をした。

とある。作者は自分を三吉のモデルにしたのは實際であるから、さきに詩人であつて、今は小說家になつてゐると云ふ歷史をほのめかしたつもりだらうが、現代に於て、詩人が如何に長篇を書いたとて森彥に向つて、

『一體、われ〳〵が斯うして殆ど一生かゝつて――身內のものを助けてゐるのは、それが果して好い事か惡い事か、私には解らなくなつて來ました。』

と云へるほど收入のあらう筈はない。さりとて、また、小說家――なら、その位のことは出來る――としての意味も明かでない。

それから、また、三吉が

『僕は自分を改革しやうとかゝつたんです。研究、研究でネ。これがそも〳〵人を苦しめたり自分でも苦しんだりする原因なんです……しかし、君、人間は一度おそろしい目に逢着して見給へ、いろ〳〵なことを考へるやうに成るよ。子供が死んでから、僕は研究なんてこともさう重きを置かなくなつた。』

といつてゐる。暗に、モデル問題で作者が友人等を惱ましたことを辯解してゐるのか知れないが、作中の人物としては、『家』から通讀して來ても、三吉の自己改革とか研究とか見える努力があつたとは頷かれない。作者の常癖として、推察させようとした說明に過ぎない。子の死によつて研究をも疎んずる樣になつたと云ふ後の事實だけは三吉の心持ちとして、實際だらう。その代り、感傷的な性格を

脱しない。だから、悲しい事實に遭遇すると、進んでその事實の心核を究めようとする現代的人物にはならないで、直ぐ形式的な、乃ち、世人一般の云ひ古した淺薄な悲觀に走つて、

お繁は死に、お菊は死に、お房は死んだ。三吉は、何の爲めに妻子を連れてこの郊外へ引移つて來たか、それを思はずにゐられなかつた。つくぐ彼は努力の爲すなきを感じた。事業の空しきを感じた。

これでは、『不如歸』の浪子の心持ちと同樣、程度の低い同情文學の圈内に列ねられる題材であつて――敢て自然主義の自覺を待たない。實際に於て批判もなく、靜觀もなく、從つて、眞の內容も亦出てゐない。要するに、これは作中の主人公にばかり關する非難ではなく、作者自身がまた感傷家の程度に止つてゐる證據ではないかと思はれる。感傷家は事實を深刻に見ないばかりではない――事實を、兎角、容易く變造する。その一例として思ひ及んだことだが、『犧牲』中に鳥渡出る大島先生、乃ち三吉夫婦に『媒酌人をして呉れた先生』の本物は、僕も知つてゐるが、『酒の香にすべての悲しみを忘れようとするやうな寂しい、孤獨な人』として作者が說明する樣な、そんなしほらしい人ではない。變造が必らずしも惡いのではないが、作者の都合のいゝ樣に造り變へて行つた道筋を考へて見ると、靜觀もしくは熱刻を主とする自然主義者の態度ではない。

さらに零細な叙述に就いて調べて見よう。氣候、景色、もしくは場所の叙述にさう痛切でないのが多い。

郊外の夜に比べると、數へきれないほどの町々の灯がお雪の眼にあつた。紅――青――黃――と一口に言つて

しまふことの出來ない、強い弱い種々な灯の色が、そこにも、ここにも都會の夜を照らしてゐた。お雪と姪とは、互に明るく映る顔を見合せた。二人は手を引き合つて歩いた。戻りかけに、町中を流れる暗い靜かな水を見た。

詩的に云ひ現はすつもりであつたらうが、讀者は却つて殆ど煩瑣に堪へないばかりだ。最後の句の如きは、何の謎とも分らない。

秋の蜻蛉が盛に町の空を飛んだ。鹽瀬の店では一日の玉高の計算を終つた。後場は疾うに散けた。幹部を始め、その他の店員はいづれも歸りを急ぎつゝあつた。電話口へ馳付ける者、飲仲間を誘ふもの、いろ〳〵あつた。

『正太が……榊の待つてゐる店の方へ行つた……二人は三吉の家をさして出掛けた』と云ふのに、この記事が何程の關係を持たう? また、料理屋へ正太が三吉を案内するのに、

電車で、ある停留場まで乘つて、正太は更らに車を二臺命じた。車は大きな橋をわたつて、また小さな橋を渡つた。

とある。實に、愚な無駄書きだ。

臺所の方には女達が働いてゐた。豐世の他に、たすき掛けの細君が腰を曲めて、しきりに何か洗つてゐた。その細君が三吉の方へ向いた。お雪であつた。

これは、餘りに遊んでゐる書き振りではないか?

家具といふ家具は動き始めた。寢る道具から物を喰ふ道具まで互に重なり合つて、門の前にある荷車の上に積まれた。

これは移轉のことだが、もッと眞面目な書き方がありさうなものだ。全篇に渡つて、煩瑣な、不眞面目な、不充實な、もしくは内容に乏しいことを、意味ありげにくど〳〵と技巧化した記事が、

長い勞作の後で、三吉も疲れてゐた。

『とう〳〵房もいけなかつたかい。』

お雪は夫や正夫と一緒に旅立の茶を飮んだ。

お倭の眼からは涙が流れた。

兩國橋の混雜を思はせる夕方が來た。

『さうかナア。』

三吉はお倭と不思議な顏を合せた。

お雪は手拭を冠つたり、脫つたりした。

三吉はもう早や響の中にゐた。

『お愛ちやん、學校の方の屆は』と三吉が聞いた。

赤い寂しい百日紅の花は、まだお倭の眼にあつた。

お倭のことが浮んだり、失くなつたりした。

近く漕いで通る船は丁度彼の心のやうに動搖した。

と云ふ風に續いて行くのである。もし面白味があるとすれば、讀者はたゞその續いて行く具合に何か

意味がありそうに釣られてゐるだけであつて、その實、どん詰りまで、世間並みの親子、兄弟、親戚などの情ばかりであつて、それ以上の特色――それが自覺作家の努力――などは、殆んど絶無である。丁度俗受けを主とする活動寫眞の樣なもので、――普通の寫眞でないのがまだしもましだが、――よくも、まア、あんな下らないことを、――『不如歸』が下らないと云ふ意味で――こま〳〵と、一千尺も二千尺も寫せたものだと云ふ感じがする。

然し活動寫眞を見に行つた以上、それが動いてゐる間は、兎に角、人は見てゐるものだ。さて、濟んだ跡での印象はどんな物かと考へて見給へ――全體としても、部分々々としても極うはツつらの感じしか殘らない。『家』と『犧牲』とを通讀して殘るのも、それだ。部分を部分としてばかり取り扱ふ書き方(これが平面描寫の名のよつて來たるところだらう)は、砂の一粒々々を拾つて居ればいつか濱全體が出來ようと云ふ樣な散漫で迂濶な考へである。活きた人生は、その一粒、その部分、もしくは一角に、全體が背負はれてゐるものだ。內容の充實には、敢てくだ〳〵しい材料を並べるに及ばない、作者その人が洞察的態度如何を待つて決せられる。この事は、僕のさきに唱道した自然主義的表象詩を解してゐる人々には直ぐ分ることだが、七五調の俗律を標準にして來た詩人や、戲作者趣味を少しでも脫し切れない小說家等には、餘りに六ケしい注文であらう。僕は今詩を作らなくなつたが、小說を書く心持ちは、さきに自然主義的表象詩を作つてゐた時と同じで行ける。そこが第一に花袋氏や藤村氏と出が違つてゐるところである。そして、新派と見られてゐるうちで最も俗律的、最も戲作

者的なのは藤村氏だ。渠の態度は實に散漫迂濶である。よく云つても、渠の注意深く見える筆は、充實的方面に向はないで、骨董家が下らない道具を尤もらしく賞鑑すると同樣、世間並みの事實をたゞ意味ありげに取り扱つてゐるに過ぎない。

小主觀を排すると云ふことは、平面描寫を主張するもの等の殊に努めてゐることではないか？　然し洞察力のない作家は、自己の形式を破壞して人生の內容そのまゝの主觀を建てることが出來ない。從つて、その經驗に於ても、觀察に於ても身づから排斥してゐる小主觀ばかりが材料となつてゐる。つまり、作家としての人物が小弱なのに歸する。藤村氏もその小弱作家の一人である。イプセンやゴルキやアンドレフを呼んで來るまでもなく、わが白鳥氏よりもずツと小い作家だ。花袋氏の行き方に元の咏嘆紀行文家的な惡癖がついてまわつてゐると同樣、藤村氏は小說作家としても、『若菜集』時代の淺薄な態度そのまゝで、たゞ年齡と共に古色を帶びて來たのが違つてゐるだけだ。渠を以つて『冷靜な觀察者』と見爲す如きは、骨董的古色を帶びてゐる態度を買ひ被つて、嚴肅なものと見る淺見である。渠は、どうしても、一種の感傷家に過ぎない。

この語は、然し、現今、洞察力の乏しい評家連に亂用されてゐる。僕は今それを正して置かなければ、折角、こゝまで論じて來た勞力を容易に誤解されてしまう恐れがある。一例として擧げるが、ＡＢＣ氏の『現文壇の平面圖』に於て、泡鳴の『放浪』が『案外にセンチメンタルな分子の多かつた』と云ふことがある。それは、然し、材料の表面ばかり見ての早合點だと思はれる。作者の破壞的主觀

から來る批判と暗示とが作つてゐるのが見えなかつたのである。その證據には、『作者自身の所謂悲痛の哲理の案外につまらないものである』といふ言がある。作者は決して自身の哲理を作中に理想したのではない。田村義雄なるものが――無論作者と同じ様な――悲痛の哲理家で、その哲理を懐抱しながら、自己の活動と失敗とに苦しむところを描寫したのである。

或人は、『全く虻蜂取らずの大失敗者の様』になつた義雄が、歸京したいのが山々でありながら。

『然し、旅費の來るのを待つのも一種の事業だらう、若し自分がそれに心身全體を投じてゐれば』と、まだ剛情らしい人生觀は離れたくない。

と思ふのを見て、作者自身の内容哲學が、その實、外面的になつてゐるかの様な評を下した。然しこれは作者が自身の哲學を辯解してゐるのではない。作中の主人公がそんなみじめな狀態になつたのを描いたのである。無論、作者もそんな狀態を經驗したことはあるが、ここでは、義雄なる者に對して冷靜な批判をした。また義雄が敷島に會ひに行つたところで、涙をこぼしたのを直ちに感傷的だと冷笑し、そこにまたどんな暗示があるかを見なかつた評者がある。(この點は、『某氏に答へて、僕の創作的態度を明かにす』に於て詳しく論じてある。) 感傷的な作家には、殆ど全く批判と暗示とがない――もしあるとしても、頗る緩漫なものだ。そして、僕等は充實した批判と暗示とを以て、新派小説の内容と見爲さなければならないのである。前田木城氏は僕の意見を以つて自然主義ではないと云つたが、それは花袋氏等の云ふ自然主義でないのは、初めから僕は僕のに『新』の字をかぶせてあるので

分らう――たゞ僕は僕の新自然主義を以つてこの論文をも書いたのだ。

作家必らずしも正當な批判を自己もしくは他に下すとは思へない。且、速斷を專らとする今の多くの評家等も、決して當を得ることは出來ない。僕は現代の文界をいつ迄もそんな速斷や曖昧な駄評に委せて置くのを憂へる一人である。で、僕は、今、嚴格な批評家として、『犧牲』を讀んだついでに、島崎藤村氏を捕へ、渠の小說家としての正當な地位を調べて見たのだが、渠の如き小作家を讃める評家の多いのを僕は不思議でならないのである。今や、わが國に於て、人生觀や藝術觀に、ハルトマンやフオルケルトや、オイケンや、それらを祖述する帝國大學の哲學硏究者等が理解するのとは違つた、新らしい自然主義が根據を据ゑられるやうになつた。人生觀に於ては、僕が無論その先鋒だらうが、小說といふ範圍では、その開祖は決して藤村氏ではない。獨步や花袋氏も亦橋渡しの作家である。新自然主義の正確な祖は、今の處、白鳥氏である。そして、これに續くのが泡鳴である。前者は冷刻、後者は熱刻の違ひこそあれ、人生の全的暗示者、新派の描寫家として既にその道にのぼつてゐる。

以上は、『現代小說の描寫法』と合せて讀んで貰へば、一層明了な理解を得られるだらう。

（四十四年二月）

新進作家等の劇と小說

自然主義に對する漠然たる反動の聲が廣がつたのに乘じて、悲痛慘憺に平氣で耐へるこの主義を逃げたやうな傾向の作物が、この頃澤山出て來た。そしてそれが各方面に於ける新進作家連に多い。且、渠等はまだ〳〵年が若いのに、既に、下だり坂になつた老人の有する遊戲分子を多量に含んでゐるやうだ。生々した氣力のなくなつた老人連が僕等の自然主義の嚴正酷烈に耐へ切れないのは止むを得ない運命としても、これからしツかりやり出さうとする青年が當然有すべき主義の嚴酷を逃げてしまふやうでは、第一に、僕等は末長い見込みを渠等に屬することは出來ないのである。これは決して僕の空想的に云つてるのでない證據をこれから少し擧げて見やう。

僕等が詩界に無解決の苦悶と內容の充實とを叫んだのは、もう、數年前のことだ。然しそれが爲めに、泣菫、有明諸氏の空技巧派は亡んでしまつた。その亡んだのは、決してまた別な空技巧派を迎へる準備ではなかつた。然し僕が作詩を斷つて以來、どんな內容派が出てゐる? 外形から見れば、散文詩の無形律にまでもぶつかつてゐるやうだが、露風氏のにせよ、白秋氏のにせよ、柳虹氏のにせよ、內容をゼロとは敢へて云はないが、まだ〳〵充實の度が不足してゐて、而も安閑たる餘裕が多過ぎる。

僕等はまた詩に對する筆法を劇界や小說界に轉じて、同じやうな叫びを擧げた。それが爲にこの方面にも僕等の自然主義が兎に角殆ど全體の作家連の注意を引いた。ところが、現今の狀態はどうか? 二三の作家がそれを比較的嚴密に追行して、比較的にいゝ作物を發表してゐるを除いては、すべて跡戾りをした。なぜだらう? 嚴酷な主義を追行するだけの素養と力量とがないからである。その弱み

をねらつて、功を急ぐ新進作家連があはれにも一層その弱みを誇張してうち出るのは、最も容易な手段を取る爲めかも知れないが、餘り感服した道ではない。よしんば、主義の嚴酷は耐へ切れないことにしても、そこに素養も付き、力量も出る所以が存在してゐるのであるから、青年として、逃げ出すのにはまだ早いのだ。それを既に逃げてゐるのであるから、渠等の作物が殆ど全くたわいのない物であるのは、如何に、强辯しても、當然のことだ。

外國の例を見ても、初めは詩歌から出た小說家もしくは劇作者の方が直ちに小說や劇に從事したものより成績はいゝが、渠等の文學的生活を詩歌で初めた所以は、青年時代の出世には、それが一番容易であるからだ。詩歌には、老年者の作にでも、どこか子供の小便臭いところがあるものだ。青年がそれを知つてか、知らないでか、一步を進めて、直ちに劇もしくは小說を取らうとする勇氣は賞讃に價ひするが、その詩歌的稚氣をいゝ氣になつて劇もしくは小說に振りまはしてゐるのは大いに反省して貰ひたいものだ。

お白粉や香水のやうな技巧にばかりなづんだ現今の詩歌は僕等の要求するところでないと同樣、技巧的作爲にばかりぐらつく小說もしくは劇は僕等の歡迎するところでない。然し今の新進作家達の作には、それ以上の意氣込みは見えないやうだ。僕は今年の諸文學雜誌に出た青年作家等の劇に就いて殊にかういふ考へを持つたのである。

『私の涙はお父樣の屍を大海へ押し流すほどござります』とは、國枝史郞氏の劇『胡弓の絃の咽び泣

き』（劇と詩第八號）の娘が云ふ言葉だが、作者が如何にもわざと氣取つて云はせてゐるやうに聽える。ところが、かう云ふ發表の仕方は、今の新進作家の作劇にはざらにあるではないか？　それが何を意味するかと云ふと、浪漫的技巧――敢へて内容とは云はない――を弄してゐるのである。曾て興行された吉井氏の『夢介と僧』が多くの人に冷笑されたのは、自由劇場へ多少手ごたへある物を豫期して行つたものが、殆ど無内容の技巧を無造作に見せられたからである。僕は新作家の試作を批評するに、かの知つたか振りで直く舞臺上の効果を云々するやうな速成評家連の口吻は眞似ないつもりだ。舞臺上の効果などは少くとも或劇場の座附作者に進歩（今の時代では退歩）してから云々されゝばいゝ。然し如何に試作だと云つても、内容を樂にうは撫でして通るやうな物は、青年の意氣込みとして出さない方がましだ。

現代の青年作家等にして、苟も小便臭い歌や詩に滿足しないで劇に向つたものが、まだ自然主義の洗禮も受けないうちに、なぜさう早く老年者のやうに樂な方へ逃げるのだらう？　吉井氏の『嚢の女』もさうだ。長谷川虎太郎氏の『人魚の船』もさうだ。和辻哲郎氏の『首級』もさうだ。空想的な材料を求め、空想的な仕組みを作り、空想的なせりふを驅り、それでどこにかの詩歌の作者以上に誇るべきところがあると思ふのだ？　詩歌の作者にはあたまのないものが多いからこゝでは相手にする必要はない。然し新作劇家達の多くがメテルリンクを高尙がつて、自然主義に立しない神秘主義などをいいことにしてゐるやうに見える。さう云ふ逃げを張つたので著るしい『マレン女王』や『タンタジル』

などはメテルリンクの作中最も劣等なのを知らないのであらうか？

僕の『魔の夢』が青年の一般には解せられないとしても、その作者と同じやうな經驗をして來た中年者には分るやうに書けてゐる。然しメテルリンクの最も神秘くさい作に至つては、單に空想的にうまくその場をつくろつてあるだけだから、眞面目な考へを以つては全く解釋する必要がないほどだ。それをまた眞似たに過ぎないやうな新作家等の雜誌劇になつては、殆ど一顧の價さへないのではないかとまで思はれる。そのうち、まだしも多少の手堪へがあるらしいのは、秋田雨雀氏の『市のマホメト』と長田幹彥氏の『濃霧』と國枝史郞氏の『胡弓の絃の咽び泣き』とである。まだ不分明とあやふやな點とがあるが、そんなことは古くから文界に立つてゐる島村抱月氏の新作劇『運命の丘』にも認められる缺點だから止むを得ないとしよう。然し矢張り容易な逃げ道をそれ〴〵持つてゐるのは、利口なやり方かも知れないが、前三者のまだ若い人々たるに對して僕の取らないところである。

『咽び泣き』が最も長くもあるし、また最も注意すべき作であらう。然しその苦心は仕組みと技巧とにあつて、內容には殆ど達してゐない。それが不自然の第一だ。また、北國の或る居酒屋へ集まる人人が、彫刻家にせよ、その意中の人であつた藝術好きな婦人にせよ、元牧師であつた老人にせよ、胡弓彈きの老婆にせよ、青年の旅人、A、B、Cの男等にせよ、すべて同じ智識と同じ用語例と同じ經驗とを持つてゐるらしい。それが不自然の第二だ。また、どんな便利である北の都會かは知らないが、そこへ南から來た一人の女を豫定なしに落ち合つた放浪者どもがすべて知つてゐるといふのがをかし

い上に、彫刻家とその元の愛人とを突き合はせた工合が無理だ。それが不自然の第三第四だ。また、さきに摘出したやうな落ちつきのないせりふをざらに出し、おまけに『戸外にて落ち葉の音』とか、『自己の頸を冷き手もて後方に引きもどされしが如き恐怖と驚愕の表情を以つて振り返る』とか云ふ、たとへば、出來そこなひの狂言作者が昔の思入れを指定するやうな六ケしいト書きをさし挿んである。せりふに上せて出さなければ分る筈がない。それが不自然の第五だ。

この作者が純粹の獨白を使はなかつたのはまだしも感心だが、根本に於てから不自然だらけでは、あたら長篇も浪漫的過ぎて滑稽になつてしまふ。思索の缺乏、經驗の不十分等から來る缺點は、年若い新作家に對しては、まだしも我慢しようが、然しから云ふ新作家達がすべてから云ふ風に土臺のあぶなつかしい浪漫的技巧を以つてその場だけは勿論のこと、その前途をも、調子に乘つて胡麻化して行くつもりなら、僕等はその不埒と不眞面目とを今に於て叱咤する方が、寧ろ渠等の爲めに將來の利益を保護する所以であらうと思ふのである。メテルリンクも、さすがその佳作に於ては、乃ち『アグラヱンとセリセタ』、『インテリオル』、『イントリユダ』等の如く、材料に胡麻化しはしなかつた。平平凡々たる普通事件中に、渠の神秘主義を伺つたのである。自然主義の轉化した神秘主義はまだしも同じ主義の範圍內に於ける相違であると、僕等が曾て云つたのはそこだ。

然しメテルリンクの神秘主義も遂に水を離れた魚のやうな物になつた。それもまだ地上に跳ねてゐる間は生命があつた。然し渠の流儀を模倣するに過ぎない今のわが新作劇家達のは、初めから水にゐ

なかつた魚の譏りを免がれないのである。僕は誠意を以つて多望なる渠等に忠告したい、他日の雄飛を樂しんで、今の輕はづみをさし控へ、實際に僕等の嚴酷な自然主義の洗禮を受けて、青年の若々しい血を永久にせよと。さらに短言すれば、一時の苦痛を忍び切れない爲めに滑稽な若年寄になるやうなことはすなと。（明治四十四年十二月）

若い人々の文章

近頃の若い人々、と云つても相當に名のある人々の文章を批評して見て吳れと文章世界記者の註文であるが、さて、どう云ふ人々を指すのかと考へると、スバルや白樺の連中であらう。然し白樺は僕の手に來たことがないから滅多に讀んだこともない。スバルはいつも屆いてゐて、面白さうなのがあると讀むことにしてゐる。吉井勇氏の脚本を初め、平出、長田等の諸氏の小說にも多少興味を引くのがある。

そのうちで、近來、僕の注意を最も多く引いたのは谷崎潤一郎氏の『幇間』だ。一讀して、僕はそれを材料もよくこなれてゐて、非常に面白い物だと思つた。然しその一ケ月後に森鷗外氏の『百物語』を讀み、これはかれを見てからの思ひ付きに相違ないと感づかれたと同時に、かれの筆法も亦これの常套を脫してゐないと云ふことが考へられた。詰り、その狙ふところは講談もしくは落語的面白味で

あつて、發想法も亦これに伴ふ說明にばかり落ちてゐる。もし特色として擧げるものがありとすれば、その說明が鷗外氏のやうに物識り振らず、花袋氏のやうな下手な解剖じみず、如何にも垢拔けがしていや味がない點に過ぎない。

新らしい小說として取扱ふには『幇間』は餘りに物足りなさ過ぎる。が、この小論文は文章上の意見を徵せられてゐるのであつて、一作品としての議論はすべて禁じられてゐる事を注意して置いて貰ひたい。然し僕には文章と內容とを離して考へることは出來ない。內容の貧弱な物に不相當な意味ありげの文句をくツ付けたほど見にくいことはない。これは僕が新潮十二月號に於て新進作劇家等の缺點を指摘した時にも云つたことだが、たとへば、國枝史郎氏の劇にある『戶外にて落ち葉の音』とか、『自己の頸を冷たき手もて後方に引きもどされしが如き恐怖と驚愕の表情を以つて振り返る』とか云ふ句は、句それ自身には意見もあらうが、その場にそれが當てはまるだけの素地が盛れてゐないから、單に美句の玩弄に終つてゐる。殊に、吉井氏の『獸醫の死』に於ける『舞臺悲しげに嗟歎す』のくり返しに至つては、場面上の進行と初めから殆ど全く無關係も同前の句で、作者のから氣取りを表してゐる外はなかつた。

若い人々の文章には兎角さう云ふ滑稽を意識してゐないことがすくなくないのだが、谷崎氏の『幇間』には感心にもそれが全く見えてゐなかつた。材料その物が既に珍奇なので、說明的程度に滿足し、それ以上の野心をさし挿まなかつたのも一つの理由であらうが、兎に角、その文章は、老練な落語家

の落語を聽く時のやうに、氣持ちよく讀めた。

『蒲團のやうな手觸りがするかと思はれる柔かい水』は多少具體的な說明だが、『まさに道樂の眞髓に徹したもので、さながら歡樂の權化かと思はれます』は全く抽象的に取つて附けた物だ。『忽ち舳へ異形なろくろ首の變裝人物が現はれ、三味線に連れて滑稽極まる道化踊を始めました』もその踊りの姿までを浮ばせてないから、正當な小說的發想の範圍に這入つてゐない。然し話しとして讀んで行くと、その筋に伴ふ事件の印象がはつきりと浮き出すやうな書き方がある。たとへば、

ろくろ首の自身は、あり〳〵と空中に描き出され、泣いてゐるやうな、笑つてゐるやうな、眠つてゐるやうな、何とも云へぬ飄逸な表情に見物人は又可笑しさを誘はれます。兎角するうち、船が橋の蔭へ入ると、首は水嵩の增した水面から、見物人の顏近くする〳〵と欄干に輕く擦れて、そのまま船に曳かれて折かがまり、橋桁の底をなよ〳〵と這つて、今度は向う側の靑空へふわりと浮び上りました。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

『よう御苦勞、御苦勞。』

と、一行の旦那や藝者達に取り卷かれ、拍手喝采のうちに、ろくろ首の男は、すつぽり紙袋を脫いで、燃え立つやうな紅い半襟の際から淺黑い坊主頭の愛嬌たつぷりの顏を始めて現はしました。

この櫻井と云ふ男が株屋から幇間になり、旦那に好きな藝者の催眠術にかかつた眞似をするまで、作者の話し振りには垢拔けしたところがある。櫻井が子供の時から話し家にあこがれたと云ふやうな

事が書いてあるが、作者も同じ者にあこがれてゐるやうな態度が見える。要するに、鷗外氏の作物と同じく、話し家の話しを書いてゐるので、眞正の小説ではないと云ふのが『葉間』の文章に對する僕の感想だ。

僕は同じ作者の『少年』は見おとしたが、中央公論の『秘密』は讀んだ。三人稱的が一人稱的になつただけで、話し家的態度には變りがない。筋を運ぶ說明には前作と同じやうな印象的發想があつて、それが明白な印象を殘す點を長所と云へば云へよう。

天氣の好い日、きら〳〵とした眞晝の光線が一杯に障子へあたる時の室内は、眼の醒めるやうな壯觀を呈した。絢爛な色彩の古畫の諸佛、比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷、象、獅子、麒麟などが四壁の紙幅の内から、ゆたかな光の中に泳ぎ出す。疊の上に投げ出された無數の書物からは、慘殺、痲醉、魔藥、妖女、宗敎――種々數多の傀儡が、香の煙に溶け込んで、朦々と立ち罩める中に、二疊ばかりの緋の毛氈を敷き、どんよりとした蠻人のやうな瞳を据ゑて、寢ころんだ儘、私は每日〳〵幻覺を胸に描いた。

* * * * * *

甘皮を一枚張つたやうに、ばさ〳〵（御白粉を塗つた爲め）乾いてゐる顏の上を、夜風が冷やかに撫でて行く。口邊を覆うてゐる（お高僧）頭巾の布が、息の爲めに熱く濕つて、歩く度に長い縮緬の腰卷の裾は、ぢやれるやうに縺れる。みぞおちからあばら骨の邊を堅く緊めつけてゐる厚板の丸帶と、骨盤の上を括つてゐる扱帶の加減で、私の體の血管には自然と女のやうな血が流れ始め、男らしい氣分や姿勢はだん〳〵と失つて行くやうであつた。

から云ふ氣分と變裝との男が淺草の活動寫眞で、昔關係した女に出會ひ、それから再び出來合ふのだが、男が奇な上に、女も亦餘りに奇に包まれて、兩方とも性格が出てゐないのは、前作の幇間（にも具體的性格は少い）や旦那や藝者の場合と同じだ。兩作を一讀して面白いと思つたのは事件が奇怪であるからで、生々してゐるのはまた人物その物ではなく、說明の文句に光彩があるに過ぎなかつた。

たとへば、

インキの痕をすかして見ると、玉甲斐絹のやうに光つてゐる。

觸るるものに紅の血が濁染むかと疑はれた唇云々

闇中にシヤキ〳〵軋みながら眼まぐるしく開展して行く映畫の光線のグリ〳〵と瞳を刺す、云々。

から云ふのがさきに擧げた印象的文句と共に非常に得意な云ひ現はしらしいが、詰り、落語家が話す美人局が相手の本性を見せ出す時、立て膝になつてタンカを切ると、膝の間に『さわればしやりりと音がしさうな白縮緬が出ました』と云はれるのと同樣、すべて手に入つた卒がない說明的興味の目的は外部的、部分的である。話しをしてゐるのなら、それでもいい。が、苟も內容的作品と見做されようとならば、如何に印象的でも、外部的、部分的な文句の連續では困る。云ひ換へれば、物をうまく暗示するのでなく、ただうまく云ひ切つてしまうやうな文章では眞に內容ある小說は書けないのである。藤村氏の文章の不得要領なのは、暗示と云ひ切りとの間にまごついてゐるところから生じてゐる。

僕が詩界に活動してゐた時は、世間も詩人は暗示的態度でなければならない、バルナシャン派のやうな美辭の云ひ切りでは駄目だと云ふことが大分理解されたやうであつたが、健忘性の詩界はそれを今日ではおぼえてゐないし、劇界や小說界ではそれを初めから考へて見たこともないものがざらにある。表象的自然主義の洗禮はどうしても一度受けなければならないと、僕が云つたのはそれが爲めだ。

◎谷崎氏の場合は、奇異や怪異の事件を以つて云ひ切りを避けたつもりかも知らないが、奇怪な事件と平凡な現實とは飽くまで別々になつてゐる。『人間の瞳を欺き、電燈の光を欺いて、濃艶な脂粉とちりめんの衣裳の下に自分を潜ませながら、「秘密」の帷を一枚隔てゝ眺める爲めに、恐らく平凡な現實が夢のやうな不思議な彩色を施されるのであらう』と、作中の文句でわざ〳〵斷つてある通り、ろくろ首の幇間でも、女裝の男子でも、僞りの彩色と云ふことが發想上に云ひ切つてあつて、現實その物がそこまで動いたやうには書いてない。この態度は決して深く進む所以でない。

如何に艶が附いても、探偵小說や冒險小說中の戀物語りと何等選ぶところがない。平凡なことですが、奇怪な色をつけて面白く御覽に入れますと云つて、作者も書き、讀者も待ち受ける種類に屬する。然しゴルキイやアンドレーフ以後の新進作家のでも、露國の小說には深く打たれるところがある。これは、平凡な現實を特殊異常な場合に全く置き更へて見せるからである。人生は平凡だが、平凡の事實にはそれ〴〵特殊異常の意味があつて、それが全人生を活かしてゐる。自然主義の小說は花袋氏のやうな平凡なことを書いてゐればいいと思ふのは間違ひで、人生の眞相、乃ち、異常特殊の意味を捉

へなければならない。まだ人生旅行の發途にある作者にこんなことを強いてゐるのは無理かも知れないが、兎に角、あんな無内容な文章で新らしい小說を書かうと思ふのは、文章に印象的色彩があるだけ、容易に邪道もしくは不進の道に落ち入ると云ふことを注意して置きたい。

一人のことを餘り長く云つたが、――然しその人に取つて、さう不名譽でもあるまいと思ふ――次ぎに、久保田萬太郎氏の『花火』に移らう。この作は　谷崎氏の作のやうに材料が奇拔でもなく、また同氏のやうに文章が明了な印象的にも行つてゐない代り、興味中心の說明ではなく、その發想法が多少描寫的になつてゐる。『相場師の政次郎』が、

　夕刊を買つて後場景氣を一通り見てゐると、今度はばつたり電車が來なくなつてしまつた。

*　　*　　*　　*　　*　　*

　自分のやうな人間でもいつか一度は宗敎といふやうなものを信じるやうな場合があるのだらうと考へた。

などゝあるのが、知つたか振りの書き方でないから、決して取つて付けたやうには見えない。

花火を見に出かけて見ず、藝者を集めて飲み、店員を呼び寄せて飲ませ、座にゐない女を思ひ起す。それが、『世間に出て世間を知つたつもりでも、世間を知らない昔のやうに氣が弱い、臆病な自分だ』と思ふ政次郎を、可なり自然に平坦な地面へ現はしてゐる代り、その文章は別にきは立つた印象も與へない。且、

『おつかさん、さしあげましよ。』と、やがてコップをお金にさすと、『ありがと』と受け取りながら、『おつかさん

は酷うござんすよ。せめて叔母さん位なところにして置いて下さいな。』

に至つては、餘りに月並み式の發想で、また、藝者の言葉も成つてゐない。

次ぎに、長田幹彦氏の『澪』だが、これは作品として谷崎氏のなどよりもずつといゝ。なぜ世間では
これをよく見てやらないのか、雜評家の批評などは實に當てにはならないものだ。まだ二回だけ出て
未完だがその場〳〵に可なり充實した内容が而も描寫的に現はれてゐる。旅役者の色事――と云へば、
小山内氏の畑の物のやうだが、同氏なら皮肉に上ツつらを渡つてしまいさうなところを、もつと深い
觀察もしくは同情を以つて貫いてゐる。若い田之助の女が二人も出來て苦しんでゐるのに對し、

年寄りに一杯まかなつて罪亡ぼしをして置かねえと跡で祟るぜ。

田之さん、何だつてそんなとこで見得を切つてゐるんだな。

など云ふ扇昇の人物もよく出來てゐる。

『どうしたい、色男、行かねえのかい。』扇昇はふと話の腰をきつて問ひかけた。

『まだ時間があるから。』と力なげに呟いた。

『早く行つてやんな。餘り待せるもんぢやねえぜ。』と扇昇は眞顏で云つた。そして何と思つたか、いきなり田之
助の肩へ手をかけて、さびた中音でついぞ出したことのない唄を唄ひはじめた。それは今から二十年も三十年も
昔に流行した小唄の一つで、低く沈んでゆく節まはしはまるで聲を忍んで噓唏してゐるやうに聞きなされた。

この文中には、萬斛の涙をしぼり出したよりも悲しい深い事實が暗示されてゐる。

田之助がてツきり小樽から追ツかけて來たお勝だと思つて、おづ〳〵樂屋口へ出たが、

『おや、小絲姐さんですか。私は又誰方かと思つた。さアお入んなさい。そこぢや雨がかかります。』と、彼はやつと安心の吐息をつきながら、いつものやうに愛想よく女を迎へた。

とある。その『愛想よく』もきは立つた說明に落ちないで、前後の關係にぴツたり添つてゐる。

『今夜都合はどう?。』

『え、ありがとう、別段差支へはないんですけれど――。』

『いやに浮かないのねえ。體でも惡くつて?。』

『いいえ、そんなわけぢやアないんですけど――。』

と田之助は口の中で呟いた。

これも、男に別な女があるのを知らない小絲の浮つき方が說明されずによく見えてゐる。左の一節の如きもなか〳〵活きてゐる――

まづ舞臺で芝居をしてゐるやうな氣持ちになりながら、

『それぢやこれが永のお別れになるんですねえ。』と、しみ〴〵云つた。

それを聽くと、お勝さんは叉眼を濕せて、

『私逢ふまではその心算でゐたんだけど、かうして逢つて見ると何だがお前さんを手離すのがいやになつた。』と、云つて、じつと田之助の思ひ入つたやうな美しい顏を見詰めてゐたが　やがて狂氣のやうに彼の側へすり寄り、

突如その膝の上へ身をなげながら、
『ねえ、お前さん。お前さんも私と一緒に東京へ行つてお呉れな。』
田之助は吃驚して身をひかうとした。次の瞬間に嘘唏いてゐるやうな女の肩の顫へが胸の底に滲んでいくと、彼はふと叉反抗することの出來ない權威に壓しつけられたやうな氣がして唯寂しく笑ひながら、何とも答へることが出來なかつた。

次に、早稻田文學十二月號のを調べて見よう。鈴木悅氏の『解放』を讀んで見た。いやな學校生活を終へた男が職業を求めに行く途中、

種々な風采の男女が、ぞろ〳〵と行き交ふてゐる。而して何れも〳〵『他人樣の事なぞ言つとられるものか。』と云ふやうな顏をしてお互ひに見向きもせずに行過ぎる。何だか世間の調子が變つたやうだ。

と云ふやうに、筆は達者に運ばれてゐるが、內容があんな日記かスケツチか分らない物（無論發想の形式を云ふのではない）を初めから新進作家として發表するのは、其無奮發に餘り賛成が出來ない。文章も、小說中の物として取り扱ふほどにはまだ微細にかみ砕けてゐない。

江馬修氏の『照江』は藝妓あがりで淫賣をもする細君の生活が手に入つてる工合が、長田氏の旅役者が手に入つてるのと等しい。大した誇張もなく、さうかと云つて凡倉な筆にはなつてゐない。

『獸、起きろ掃除するんだ。』
搔卷を不意に引き捲られて、照江は寢卷の前を合せながら慌てゝぱつと跳ね起きた。

若しから云ふ文章の出來榮えで進行すると、その作品全體も暗示的表象化を實現し得られるやうにならう。迷子か何かになつてしまつたと思つた連れ子が歸つて來たのを喜んだ時、

『ねえ、あなた。』照江は急に燥いできた。パッと日の照るやうな浮き〳〵した氣分になつた。『おてふが今夜知れなかつたら、私まアどうしたでせうね。ねえ、あなたッてば……。』

『何だ、うるさい。』弟と歌舞伎座の話をしてゐた滕彌は怒りッぽい顏を振り向けた。

『まア、恐い。』と大仰に後ろへ反り返つたが、無暗に嬉しくて堪らなくて聲をあげて笑ひ出した。そして、そッと、机の上から筆に墨を含ませてきて、不意に夫の片頰へベッタリと塗つた。

この書き方にも、だらしない女の神經質的な發作が十分具體的に現はれてゐる。

實は、もツと多くの人に就き特別な場合を論じて見たいのだが、もうやがて許された紙數が盡きるので、ここに新進作家連の大體に關することを云ひ添へて終りとしやう。所謂新派の大家連中には、既に型にはまりかけたり、又藤村氏のやうに餘りに大家じみて、その文章のくすみ方までが內容論者から見れば胡麻化しに落ちて來た時に當り、青年の作家中に、たとへば、谷崎氏の外面的、長田、江馬兩氏は內部的、特色を元氣ある筆で發揮し出したのは賴母しいことだ。今、僕は成るべく簡單な個條書きをして、渠等の落ち入り易い缺點を注意して置かうと思ふ。新潮の『斷片語』で僕が指摘した新進作家等の缺點も、詰り、こゝにあるのである。

第一、深刻な素養と洞察力とがない爲め、まだ乳臭を脫し切れない程度にとゞまりながら、それに

氣が付かないで、餘ほど穿ち得たつもりでゐること。それが文章上に現はれて、吉井氏の『舞臺悲しげに嗟歎す』底の、無內容の滑稽ながら氣取りに終はるのが多い。

第二、模倣癖だ。本人が餘ほど努力したつもりの作が外國物の燒き直しであつたり、同じ仲間のを眞似したのであつたりする。或作物から緒口を引き出すくらゐのことはあり勝ちとしても、想もメタリンクなら、筋も場面もメタリンクになつた模倣神秘家があるなどは、當座の胡廝化しにも程があると云はざるを得ない。讀書の範圍が狹い青年には一時受けられるか知れないが、識者にはその淺薄を笑はれるばかりだ。谷崎氏の『秘密』を僕が推薦しかけてやめたのも、その印象的色彩が說明文句の上にとゞまつたばかりではない――目隱しをして連れて行かれることも、女に變裝して見ることも、さういふ事の間に現はれた單純膚淺な感じも、皆、外國物や劣等な娛樂小說などにあり振れてゐるからであつた。かう云ふ點に於ては、若い人々にはまだ元の卑劣な投書家根性が脫し切れないやうだ。

第三、たゞさへ表象的藝術が要求されてゐる時代に拘はらず、發想法を表象化に必要な暗示的、隱喩的に集中させないで、淺薄な直示法(Indicative mood)の直喩に流れる傾向がある。これは大家連にも氣の毒なほど多いのであるが、曾て水野葉舟氏の『密室』(新潮六月號)を讀んだ時、最も甚しく直喩的筆法の連發に閉口させられた。『何かの影が付いたやうに』『鞭でびしりと身體を打たれたやうに』『病人の側に坐わつてゐるやうな』『聞き取れないやうな聲』『しばりあけられたやうな氣』『疲れたやうな顏』『襟がみをぐつとつかまれさうな』『無頓着さうに』等、用ゐなくてもいゝところにまで、而も用

ゐる爲めに却つて內容が稀薄になるところにまでも、直喩の接續的副詞もしくは形容詞が出てゐた。その後も注意して見ると、これは水野氏の癖でもあるやうだが、一頁の間に七つも八つも出るに至つてはあたら現はさうとした氣分も臺なしになつて、間接の又間接にしか響かなくなる。描寫が隱喩を以つて暗示的になるほど內容に直接だが、直示法は直喩を用ゐるだけそれだけ內容もしくは氣分を間接にしてしまう物だ。新作家がさう云ふ缺點までも眞似てゐる傾きがあつて、その人を別々に指摘するまでもなく、『やうに』『やうな』『さうに』『さうな』『如く』『如き』等を連發して、たとへば、『窓は病人の目のやうに艶が失せて』などゝ、得意がつてゐるのは、十分に反省すべきことだ。

　第四、地の文句に田舍言葉が出ることだ。田舍人描寫の對話中に出るのなら當り前だが、またその作家が詩人バーンスの如く田舍人を標榜してゐるのならいざ知らず、都の作家としては餘り名譽なことでない。元は、後藤宙外氏や小杉天外氏などがこれが爲めに冷笑されたが、花袋氏の『ほろつて步く』、『雨がざんざ降つた』などの不純、白鳥氏の『濃いい』のなまり、『來たんか』『見たんだ』の一天張りなども餘りよいことではない。長田氏の『眉の濃いい』、鈴木氏の『ほこりまぶけ』など、今の東京で使つても田舍からの輸入語もしくは云ひなまりであるのは、新進作家として努めて避くべきことだ。同時に、また、口語に耳遠い言葉も使はないがいい。花袋氏は『妻』に於てよく『いとゞ』と云ふ雅語的副詞を使つた。森田草平氏のには『ゆふされば』があつた。今回調べた新作家にも『いと切めて』など云ふのを發見した。それから、又、文章の驅使に反省が不足の爲め『あの子を纖兒扱ひして憎まれのは

嬉しい』と言ふやうな曖昧な句が出來る。繼兒扱ひをもせず、憎みもせぬの意だが、その扱ひはしても憎まぬとも取れる。これも注意すべきことだ。

第五、知つたか振りで外國語を外國字で挿入することは愚劣なことだ。これは鷗外氏が下らない例を示し出したのが惡いのだが――あの學者は、昔、外國の名詞を外國字で載せるのに、活字をすべてキヤピタルで組ませることを初め、それを他の氣取つた人々が眞似出したのを見て喜んだほど、稚氣を脱しない人だ。そんな人を標準にするのが旣に間違つてゐる。殊に、『うるさく入り組んだ』と云へば、町の樣子はもう分つてゐるところへ、谷崎氏は重複的にも Obscure と云ふ外國語を而も外國字で添加してある。また、『稼業的な』とか、『職業的な』とかすればいゝところへわざ〳〵 Professional など入れてある。これは單に氣取りとしか取れないではないか？　また、『肉的』並に『神經質の』と云ふ方が却つて現代國人に適當な落ち付きを與へるのに、江馬氏はこと更にセンシユアル並にヒステリツクと云ふ語を使つた。こんなことは、決して文章を眞面目にする所以ではない。若しそれ外國字もしくは外國語そのまゝでなければ適當の發想が出來ない場合だからと云ふやうなものがありとすれば、ほんの野暮な氣取りに過ぎないか、然らざれば、小說作家としての發想的努力が足りないのを證明してゐるに過ぎない。

最後に烏渡附け加へて置きたいのは、スバル十二月號の卷頭に於ける宣言に關してゞある。『羅曼派にあらず、古典派にあらず、寫實派にあらず、所謂自然派にもあらず』と、がん張つたやうなことを

云つてるそばから、滑稽にも『藝術は天の成すところにあり』などと云ふ極古い迷信を主張してゐる。渠等にして若しから威張りでなく、果してその通り信仰してゐるものとすれば、それを達觀者から見ると、新派どころか、一種あり振れた羅曼派である。かう云ふ見識不足の點も若い人々にはあり勝ちだから、よく自已を反省して見る必要があると思ふ。（明治四十四年十二月）

大阪の言語と思想

大阪へ來るちツと前、東京の帝國劇場を見物しに行つた。指定されてあつた席が目の前に柱をひかへてゐる爲め見にくいので、それを放棄した代りに、別に椅子を一つ出して貰つた。同日、大阪からの總見物があつた。その仲間に一婦人があつて、頻りに物を食ひ、頻りにおしやべりをしてゐたが、或幕合に、それが一つ前の席にゐる人のそばへ行かうとして無禮な態度で僕の椅子と定席の端との間を押し割らうとする。僕はこの贅六女めと思つたから、僕の椅子を勝手に右へまわれと命じた。すると、かの女は『道だツせ』と返答した。この『だツせ』が僕をして昔なつかしい感じを起させたと同時に、また大阪言葉の間に生活する初めであつた。

大阪へ來て間もなく、友人と天王寺を逍遙したついでに、そこの境内で繪ハガキを買つたが、上から目かくしの障子を垂れた店の中で、價段を教へて吳れる人を女とばかり思つてゐたのに、つりを貰

ふ時ふとのぞくと二十五六の男であつた。その時　僕は大阪言葉の口調まで一體に優しいのを忘れてゐるに氣が付いた。そんなことから忘れたことを思ひ出し、また曾て聽き慣れた口調に接するに從つて、僕は大阪語が或點に於いて東京語よりも進步してゐることを知つた。前者は後者よりも練れてゐる、雅致がある、而してまた簡結だ。たとへば、東京の『ですよ』が『だッせ』、『ますよ』が『まッせ』『あるぢやアないか』が『おまンがな』となる。

然しその簡結や、東京語の如きりんとした響きを生じないで、どことなく弛んだやうな、濁つたやうな調子があるを免れない。これは大阪人の神經が東京人よりも遲鈍なところから來るらしい。この相違は生活上のあらゆる方面で見ることが出來る。言葉も亦その一つだ。大阪人は全體おしやべり過ぎる。おしやべりに慣れるのが早口にもなる所以だが、その早口の爲めにまた要領を逸して、うはツつらの言葉ばかりで用を達し合ふ傾きが見える。それがどこかに弛みがあつて、引き締つてゐない理由であらう。

これ〳〵『だから』をこれ〳〵『やさかい』、『行きましよう』かを『行きまほか』、『ありません』が『おまへん』、『馬鹿らしい』を『阿呆らしい』、『あツたかい』を『ぬくい』、『本當に』を『ほんまに』、『大相』を『仰山』、『そば』を『ねき』、『おいら』を『わてい』と云ふのだから、堪つたものではない。生粹の江戸ツ子にはあたまから意久地のない奴のやうに見える。然し大阪ではそれが通用語だから仕やうがない。

以上の外になほ大阪の特色語を擧げて見ると、東京のおかみさんが『お家はん』、御新造が『御寮人』

(「ごれんはん」と略す)、お孃さんが『糸はん』、坊やが『ぼんち』、びツこが『ちんば』、目ツかちが『かんち』、いたづらが『惡さ』、お灸が『やいと』、徒らするが『ほたへる』、意久地がないが『かい性ない』、飛んだことをが『滅相な』、經節が『かツつオぶし』、自烈たいが『辛氣臭い』、尻はしよりが『尻からげ』つねるが『捻る』、弔ひが『葬禮』、道樂を『極道』、汁粉を『ぜんざい』、うなぎまぶしが『まむし』、あひるが『ひる』と、まア、こんな風だ。

明治十六年に出版された『皇都午睡』といふ書に據ると、大阪にも諸國の言葉が寄り集つてゐて、『安治川邊のものは四國、九州、中國の詞に馴れ、上町玉造のものは大和、伊賀、伊勢の詞に移り、堺のものは紀州、和泉路の詞に通じ、天滿のものは丹波、丹後の言葉も交るべし』とあれど、今はそんなけぢめはなからう。たゞ船場方面で、御新造を『ごれんはん』と云はせてゐる家に最も純粋な大阪言葉が殘つてゐるさうだ。然し現代は標準語を東京に取り、小學校教科書が既に東京語で記されてゐるのだから大阪語は段々變化して行くことが早からう。今の多少教育を受けた若紳士が、不斷『さうやさかい』とか、『おまへんがな』とか、『わてい』とか云つてゐても、少し改まると、口調までが多少東京的になり、『さうですから』とか、『ありませんね』とか、『わたくし』とか云ふのは、東京人と電話に相向ふ時によく分ることだ。

發音上の相違から云へば、大阪人はサ行をハ行に變へてしまう。姉さんが『姉はん』になり、七が『ひち』になり、おますが『おまふ』になり、何々しまんが『しまへん』になり、左樣が『ほう』になる。第

二に、東京人がヒをシにしてしまうと反對に、大阪人はシをヒにする。七が『ひち』、質屋が『ひちや』舌もしくは下が『ひた』、質朴が『ひつぼく』、してが『ひて』、至當が『ひとう』になる。これはタ行の上に來た時に限る。第三に、キをケと發音する。狐が『けつね』、北村が『けたむら』、大きにが『おほけに』、出來るが『でける』だ。

第四に、單音名詞の母韻を長くする癖がある。かうして後置詞の『を』を略することにもなるのだ。名を『なア』、四を『しイ』、九を『くウ』、繪を『ゑエ』、兒を『こオ』、頰を『ほオ』。また氣を付けるを『きイつける』といふ。第五に、單音語に限らずオの母韻を含む音節を長くする、露地を『ろオぢ』、英語を『えいごオ』、江戸ツ子を『えどツこオ』と云ふ。第六に、副詞の終りの『く』を『う』にしてしまう。厚くを『あつう』、甘くを『あまう』、溫くを『ぬるう』、弱くを『よわう』とする。第七に動詞の變化のヒがイに響く處は東京で詰音になつてしまうのが、大阪ではウに變る。追ツて行くが『追ふて行く』、云ツてやるが『云ふてやる』、會ツて來るが『會ふて來る』になる。從つて、買ふと借るとに發音が顚倒する。東京の『買ツて來る』は大阪の『買ふて來る』、東京の『借りて來る』は『大阪の借ツて來る』である。

第八に、同じ言葉でも發音その物が違ふ。義太夫の節は上方で出來たのだから、東京へ來てもそのまゝに語られる。然し普通一般の談話に於ては、强聲の置きどころに相違がある。(强聲のあるところへちよぼ圈點を付けて見せようが)東京人ならハマデラと云ふのを大阪人はハマデラと云ふ。またタバコイレがタバコイレ、テンマがテンマ、ハトがハトになる。箸は東京ではハシだが、大阪ではハシ

と云ひ、橋は東京でハシだが、大阪ではハシ、物の端は東京でハジと濁るのが、大阪ではハシとなる。そして强聲の湛へ方が東京では英語のやうに明確だが、大阪では佛蘭西語のやうに弱い。第九に、東京人は『ゐる』、『ゐない』と云ふが、大阪人は『をる』、『をらん』と云ふ。東京で『をる』を用ゐるのは文章語であつて、口語には必ず『ゐる』である。然し大阪では現今『をる』の代りに『ゐる』を混用するものが多くなつて來たのは事實だ。

要するに東京言葉は意氣と敏活とを以つて勝る。大阪言葉は前者よりも雅馴だが、之を用ゐる人の遲鈍を代表してはゐはしなからうか？　一般に大阪人は音便の効力を利用しない傾きがある。東京人が『くわ』を一音に發音することが出來ないのに對して、大阪人はそれを正當にするかどうか、はつきりは分らないが、兎に角、前者は觀音をくわんおんとは云はないで『かんのん』と云ふ。そして後者はン音がオ音を吸收してのを成立させる便法を用ゐない。かういふ不利益は單に言葉の上ばかりでなく、生活上のあらゆる方面にありながら、大阪人はまだそれに氣がつかないところがあるのだ。大阪言葉が僕をして昔を思ひ出させてなつかしいだけに、こんなことも云つて見たくなるのである。

どこを步いても、出會ふ大阪婦人に上品とか、崇高とか云ふ感じを起させる顏はない。美人であつても位が乏しい。愛嬌はあつても品を缺いてゐる。唯に顏の形ばかりではない。表情に於ても、姿勢に於いても、衣物の好み、着こなしに於ても、言語に於ても一體に町人的、平民的だ。たゞに婦人ばかりが平民的だと云ふのではない。男子も亦有名な紳士に至るまで凡て平民的なのである。大阪人の長

所もそこにあれば、缺點も亦そこにある。

天下の町人を以つて任じてゐた大阪人の意氣込みは、今でも、株式の取引に於ても、又各種事業の計畫に於ても、わが國中を一般に風靡してゐる。泰西諸國の壓迫に對抗するに必要な物質慾に於ては我國中で大阪人ほど切實に自覺してゐるものはない。然しその大欲が前にも指摘した通り金錢と云ふ無内容物に固着してしまつた傾きがある。平民は必ずしも野卑なものとは決つてゐないが、大阪人はまだ昔の町人根性を脱し切れないところから、平民として餘り野卑な點がある。

大阪人に比較すれば、東京人は多少貴族的である。男女ともべた〳〵したところがなく、金錢に淡白で、義を重んじ、外面よりは寧ろ精神の高潔を尙ぶ性質を以つてゐる。然し大阪人の平民性が野卑に傾いてゐると同樣、東京人の貴族性は生存と云ふことを輕んじ過ぎる短所がある。人の生存は自己獨力、乃ち、實力の發展でなければ正確な價値も勢力も附いてゐないのだ。それを知らないで、東京の實業家などには直ちに他の情實にすがつた御用商人などで滿足してゐるのが多い。人の褌を掘つてゐる分際で、高潔な義も俠もあつたものではない。

國家の發展は執着强い生存と高潔な實力とにある。大阪人の缺點を東京人が補ひ、東京人の短所を大阪人が足して行けば、滿足な發展が出來るに違ひない。然しさう甘く行くものではないとすれば、大阪人はその平民的な物質欲をもツと精神化して見なければならない。殊に東京の官憲萬能主義がや

がて分産しようとする現代に於ては、平民的に大阪人の實力はやがてまた萬事の中心となつて來るに違ひない。思想問題も亦この大阪に於て解決すべき機運に向つてゐるのである。その時になれば、今の大阪人には解せられてゐない文學の如きも、亦、西鶴が平民の爲めに大氣焰を吐いた時代と同樣・大阪に於て獨得なものが發達するだらう。

文學は思想問題である。物質欲はこの思想問題と同時に發展するやうにならなければ、重大な意義を以つて來ないのである。今の大阪の文界には俳句があるばかりだ。それも平民的な物であるから殘つてゐるだけで、多くは遊戲的にこき使はれてゐるに過ぎない。平民が眞面目な自覺に入る時、この國家發展時代に、そんなたわいのないことで滿足してゐられないのは今から分り切つてゐるではないか?

大阪は、貿易に於てはわが國の中心になつてゐるし、企業界でも東京などより進んでゐるし、社會の狀態から云ても後者よりは緊縮した趣がある。それにも拘らず、思想の上に於ては何等の取柄もないやうに云はれてゐるのはをかしい。

鳥渡考へても分る通り、東京は帝都でもあり、中央政府の所在地でもあり、おもな高等學府の集まつてゐるところもあるから、どうしても貴族的である。官權主義的である。空想的である。之に反し、大阪は・昨年三男爵が出來たのさへ特色を破つたと云ふ非難があつた位、平民的である。政府などの指圖や報告を待たないで、どし〳〵自己の利益に就くのは、自我的である。空想を避けて、大膽に直

進するところは實行的である。

兩都の特色を見ると、東京よりも大阪の方が却つて現代的色彩が現はれてゐる。一言にして云へば、唯だ貴族的と平民的とで兩者の思想をも區別することが出來るが、それがどう逕庭があるかを考へて見る必要があらう。東京人は貴族的な弊として人を待ち、人の說に動かされるのに多忙だ。從つて、新しい思想や流行などを受けるのは早い。大阪の思想界を駄目だと云ふのは、さう云ふ方面ばかりを見て云ふことに過ぎない。

わが國のやうな官權中心の時代では、思想の貴族的なことは乃ち標準的なといふ意である。然しその新しい標準が往々他から――乃ち、外國や地方から――徒に受け繼いで來たもので、餘り土臺のないやうなことがある。そこへ行くと、大阪人の思想は獨自一個で渠等の生活の長い歷史と共に發達して來たもので、土臺がしツかりしてゐるらしい。

新らしい方へ推移するには鈍いかも知れないが、その代り、新しい物を受けても、たとへば外國的なのでも、そのまゝ生かじりではなく、自分の方へ比較的によく消化してしまう。大阪に於ける色んな事業上の施設や經營法を見ても、たゞ平民的だと見えるばかりではなく、同時に日本的だと受取れる氣味があるのは、大阪人に特有の思想がある證據だ。

必ずしも平民的なるが日本的で、貴族的なのが外國的だといふやうな偏見からいふのではない。東京の新しい貴族的文明に日本人的消化の度合が足りないと思つてゐる僕が、大阪へ來てすべての新し

い平民的施設や事業を見ると、それに似た施設や事業が東京にあつたにも拘はらず、初めて、成るほど、外國の事物などを日本化するにはかうしなければならないのかといふやうな感じが起つた。

そこが大阪人に潜んでゐる思想の取り柄だ。渠等が反對に貴族的であつて、東京人が却つて平民的であつたとしても、日本人化の度合は必ず大阪に於て多いだらう。して見ると、東京人の今の貴族的は付け燒き刄が多く、大阪人の平民的には深い根がある。思想とか實際的眞理とかいふものを、書物の中や口さきや讀書や十露盤上に現はれるものだとばかり思つては違ふ。實生活、事業と相伴なつてこそ、初めて活きた思想と云へるのである。

然し惜しいことには、現在、大阪人の平民的思想が新時代の表面に充分に抽出させるやうになつてゐない。そして大阪人も亦思想上の問題が直ちに活事業に伴ふ所以を知つてゐない。

これは渠等があながち保守的だからではない。特有の思想を直ちに實行する事業ばかりがあつて、その他の機關が備はつてゐないからである。その理由としては、最高學府がないのが一つ。研究者を奬勵しないのが二。大阪人を代表する大文學者がないのが三。

企業と貿易と金力とに於ては、大阪は既にわが國の生命を握つてゐる。この上、若し大阪に教育の思想的學府が出來、大阪の特色を發揮する平民的學者も多く出るとなつたら、大阪は東京と精神界に於ても優劣を爭ふことが出來よう。中央政府を大阪に設けてないことなどは少しも憂ふるに足りない。今の大阪の發展狀態から行けば、やがて帝都は大阪若しくはその附近に移されるかも知れない。

が、それもどッちでもかまうまい。帝都がある爲めに東京人が享有する官權主義のやうな時代後れの思想は、もう、やがて沒落してしまうに相違ない。さうなれば、その結果として、第二の近松や西鶴が新たに現はれて來て、東京人に對して、大阪人の特有思想を深刻に確立發揮させるだらう。(明治四十五年)

藤村氏と白鳥氏

今日の批評界ほど勝手氣儘な、無標準の雜輩連が跋扈してゐるところはあるまい。毎月發表せられる多くの創作に餘り手ごたへのあるのがなかつたので、僕等はおもに人生觀的問題を論じてゐると、雜輩連は抽象的に走ると云ふ。また、いつまでも創作や描寫問題をほうり放しにして置くのも、評論家として不親切だと思ふから、近頃その方の問題に觸れて行くと、今度はそんな表面的ばかりで根本の人生問題を忘れてゐると云ふ。結局、批評界が文藝にも人生問題にも不親切で而も方針を定めるだけの努力など有してゐないことを證明してゐるのである。

從つて、創作その物を描寫論的に云爲するに當つて、多くは要領を逸してゐても何等の反省もしないし、また反省を與へるものもない。そんな社會を充分に覺醒させる爲めに、今、島崎藤村氏の『出發』(新潮十一月號掲載)を取り、描寫論から來たる適切な批評とはどんな物かと云ふことを簡單に示

めして見よう。この間、同窓だとか、友人だとか、また同氏の家庭の現狀が氣の毒だとか云ふ、そんなよく行はれてゐる情實は寸毫もさし挿んではならないのである。

藤村氏の小說は大抵規模若しくはプロトが大きい。が、その大きいのが必らずしもいゝわけではない。充實大ではなく、稀薄大であるからである。『出發』も亦それに漏れない。三年前に二兒を殘して妻に死なれた『叔父さん』なる者の家、それを世話するお節、お榮の娘二人の狀態、お節の結婚と新夫の來訪、こんな關係が幾重にも複雜してゐながら、恰も手ぎはのいゝ程度に於て羅列せられてゐるばかりで、全篇を緊張させる力が若しありとすれば、氏の作の他に於けると同樣、甚だ緩漫な筋の上の聯絡と、何か握つてるらしく推測させることゝである。

この作を分解して見ると、八角時計と八ツ手の木とが意味ありげな基調であるとして、この基調の上に最も密接に發現する叔父さんには、『三年も獨りで考へてゐる二階』がある。この二階から持ち來たされる實質物はたゞ叔父さんの、姪や母なし兒に關する滑稽じみた唐突な警句ばかりだと云つてもいゝ。『お嫁に行く前の娘と云ふものは半分病人のやうなものですね』は、作爲の跡が見え透いてゐながらも跡になつて『お前達には時々吃驚させせられるぜ』の事件で先づ具體的に解釋せられてゐるが、新夫婦の出入に關して『まるで叔父さんのとこはお前達の家みたやうなものだ』とか、『人一人送り出すといふのは却々容易ぢやありません』などは筋から云へば分り切つてる上のくどい說明で、內容から見るとまた上ツつらな攫み方だ。つまり、二階の內容、乃ち、二階と下との聯絡が、根底にまで結

び付いてゐない。作者のうはべは重々しい態度から見ると、それが付いてゐるつもりらしいが、實際は『家』に於ける三吉が勞作〳〵と云はれながら、その勞作の方面が忘れられてゐると同樣なので、ただちよツと世間慣れて來た叔父さんとしての概念しか出てゐないのである。舟に行くことなどは、作者がこの無意識(だらう)の缺點を補ふつもりであつたらうが、要するに、一小挿話に過ぎない。

次ぎに、お節だ。結婚日の近づくに從ひ、世話する兒等をうるさがり、妹までも忘れて、自分自身にばかり氣が張りつめて行く順序には書いてあるやうだが、それが例の世間話的にだから、人間としての特殊化がどこにも見えてゐない。薔薇の花を買つて來た時、妹と共に『海を越えてやつて來る』お婿さんを思ふところも、パルナシヤン流の云ひ切りなら、『變な紅い色の裏地』をさしつけられて逃出すところも、作者が頓智の說明で流してしまつてゐる。それに、かの女の妹が『血肥りのした娘らしい手で自分の乳房の邊を着物の上から押へて』まだ見ぬ姉婿を想像すると云ふところも、作者がたツぷり持たせたつもりの肉的意味は、全く具體化されてゐないのは勿論、丸で見當ちがひだ。と云ふのは、まだ男も知らず、子に乳を飮ませた經驗もない女が、ちよツとでもそんな意味で自分の乳を耻かしがつたり、懷しがつたりするとは事實として受け取れないからである。女は乳さへいじくつてやれば容易に服從するとトルストイがゑぐつた、その心持ちを上品らしい行き方で模倣したのかも知れないがトルストィのは子を育てた經驗ある女のことで、この場合には決して當てはまつてゐない。氏の最初の長篇『破戒』がドストイエフスキの『罪と罰』とをわが信州の世界に燒き直したのだと云はれたの

も、そんな模倣的見當ちがひがあつたからであらう。

『親が先づ惚れて、自分の娘を呉れやうと云ふ人物』と云はれる鈴木は、重要な人物でもないから、洋食は式が却つて面倒だとか、『旅からまた旅』とか云ふやうなことで、その性格をほのめかしただけでもよからうとしても、作者がそれに對して『叔父さんとお婿さんの間には十年も附合つてゐる人達のやうな話が始つた』とか、『內地にばかり引込んでゐる若者と違つて』云々とか、物々しく付け加へてあるのは、無理押しに付けた說明としての外、何の用をも爲してゐない。

それに用語上で少し突ツ込んで置きたいこともある。『お節はそツと文ちやんの側を離れた』で分るところに、わざ〳〵『眼を覺まさないやうに』の冗語が付けてある。『最早やお婿さんでも無かつた、旦那さんでもよかつた』は弄文だ。『伯母さんの調子には幾多の經驗があるらしく聞えた』も空疎な語だし、『利那に來る恐怖は叔父さんの心をも捉へた』は獨り合點でなければ、內容は添はない語だ。

で、槪してその描寫が說明に落ちる傾向がある上へ持つて來て、また說明的な主觀句（主觀句でも說明的でないのがあるに）が出る。もツと特別に云へば、かの處女の乳に對する說明のやうな、作者主觀の不透明と不徹底とから來る獨斷もしくはおツかぶせの筆法だらけのこの作に於て、比較的に印象を與へるのは、長ちやんがお節にキスしようとして『生意氣』と云はれるところだ。が、要するに、それも作者が頓智的挿話や警句の一つに過ぎない。部分々々には、可なり面白い觀察や思ひ付きはありながら、全篇としての血が通つてゐないのが、この篇に限らず、藤村氏の作の最大缺點である。槪

念と概念・說明と說明、これがよしんば表面的な緩漫な聯絡を以つて並らべられても、いつも云ふ通り、活動寫眞的面白味しかない。

以上の『出發』に比べて、正宗白鳥氏の『お今』(同誌同號掲載)を評して見ろのはいゝ對照であらう。前者が大きく且多くを慾張つて、つひに何物をもしツかり攫み得なかつたに反し、後者はたツた一人の女を捕へて、而もよくその周圍までも現はしてゐる。この作者も近頃餘り實の這入つたものを見せて吳れない。『汐風』の如き、專ら感傷主義を土臺として、而もそれ以上に出ようとする努力など少しも見えない作があるのは、藤村氏に『岩石の間』の如きがあるのと大した違ひがなくなつた。苦もなく書いて行くことが上手になつたのは事實だらうが、それだけ氏の特色であつた眞面目な油が乘つてゐない。この『お今』もその傾きがあるのは明白だ。が、『出發』に比べて、人間の捕へ方は、まだしも、印象的に深いところがある。

表面的に云ふ小規模の點は相變らず止むを得まいとして、お今を、藤村氏なら外部から獨斷的な觀察をおツかぶせようとするに反し、內面からその村料を生かして來るのが取り柄だ。鼠があばれたのを泥棒かと思ひ急いでかの滿洲でためて來た金の數をあらためて見ることや。下の主婦が自分の懷ろを見込んで、いゝやうにしようと思つてるのではないかと疑ふことや。津岐に關係した話が冷かされないで聞いて貰へるだけでも嬉しかつたといふことや。津岐の居所の探偵費を持つて行つた時包みを開放しで飛出してたのであつたことや。すべて、內部からの事實としてよく受け取れる。そして『氣

樂に思つてゐた獨り寢を今夜は染み〴〵と侘しく感じた』とか、『その望みを描いてゐると、お今の心は冴えた』とか云ふ、外形から見れば主觀的な說明句が、さきの藤村氏に於ける如き突發的でもなければ、既に分つてることの念押しでもなく、これあるが爲めにこれだけの特別な意味若しくは印象を加へて行く。

さうした工合で、所謂『惡意』ある人の手から手へ渡る淺薄な女の運命がくツきりと讀者のあたまから胸にまで這入つて來るのである。が、氏も却々上手になつて來たと云はれるのが、近頃のやうな上ツすべりのいゝこと――花袋氏などもそれだ――で終るのなら、僕等は餘り贊成はしない。白鳥氏には小說の文章を書くことも一つの努力であつた。が、それが努力でなくなつたと同時に、內容的努力もなくなるやうでは、氏も亦心細い作家の一人だと注意して置かなければならない。それに、ちよツとしたことだが、『手强く云ひ切つた』とか、『言葉に力を籠めた』とか云ふ文句が、會話中の適切なところへ落ちないので、氣拔けになつてゐるやうなのがあつた。また、『お今の紅味を帶びた目には異樣に光つた』の『には』は、『出發』中に姉さんが『叔父さん』となつてるのが一ケ所あると同樣、作者の粗漏であつて、決して誤植ではないやうに思はれた。（大正元年十一月）

批評の省察

文明批評でなければならないとか、いや、單に創作批評でもいゝとか云ふ議論は六ケしくすればいくらでも六ケしく出來るし、簡單にやれば簡單に濟んでしまふものだ。文明の批評も結局生活批評であるし、創作批評もつまり生活批評である。

僕はこの論文で六ケしいことを云ふつもりではない。餘り自由に出來るやうになつたが爲めに、批評と云ふものが墮落して來た今日、一般の文藝愛翫者や初步の文藝家等に向つて、可なり平凡な然し間違ひのない省察を與へたいのである。

創作が實生活その物若しくは實生活の再現である以上、それを批評することも亦無論實生活その物若しくは再現が要領である。が、實生活その物であると再現であるとは、創作家の意見に由つて違ふと同樣、批評家の意見に由つても亦違ふ。再現のを藝術派的とすれば、生活その物にするは人生派的だ。そして人生派と藝術派とが向ひ合ふと云ふやうな場合に、——そんな場合ばかりではないが、すべて情實や世間的關係を絕した本氣の意見衝突の場合に、——初めて最も自覺ある批評的爭論が成立する。

が、そんな堂々たる爭論は、現今のわが文界のやうな無事ばかりを願ふところには、まだ十分に行はれてゐない。創作家と批評家、また批評家と批評家との間に、つまり、火と火とがぶつかり合ふ前に處世的遠慮や情實や相互の無意識的妥協が出來てゐて、不正直な、煮え切れないことが、多少事情

に通じてゐるものには、直ぐ見え透かされてしまふやうなのが多い。

駄作駄評をなら知らず、苟も確信のある創作若しくは批評を發表して、それに反對があつたなら、なぜ正面に出て臆面なく反駁しない？　蔭へまはつて憤慨したり、惡口を云つたり默殺をやつたり、甚しきはそのかたきを取る爲めに敵のやつたことのあげ足取りをやつたりする。それも出來ない優柔不斷な奴は、全く他の話をして圓滑に復讐をする。たとへば、自己の飜譯に誤譯があるのを指摘などせられて、君等は人の誤譯など指摘する暇はあつても、日本の古文學が碌に讀めるかと、內田魯庵氏が云つたさうだ。これは新聞紙に出た記事だから嘘かも知れないし、また事實であつても、返り見て他を云ふだけで、無邪氣な方だが、十分惡意を含めたやり方がないでもない。この風がこれまでの人々にも多くあつたし、今の若い人々にも少くはないやうだ。かう云ふことは、世の批評を省察するに當つて、豫め看破して置く必要がある。

故尾崎紅葉が世の批評に一言も答へなかつたと云ふのを美談の如く思つてる人もあるが、その實、批評をまともに受けて見るだけの勇氣がなかつたのだ。あの時代にでも、批評界に相當の權威があつた。それを渠は多くの弟子の情實にからめて、蔭からもみ消してゐただけで、殆ど全く反省をしなかつた。晩年になつて、それでも多少の反省をして『金色夜叉』を書いたのだが、その時は、もう、遲かつた。わが國の文界の推移は、紅葉の覺醒程度よりも以上に進んでゐた。そして紅葉時代に壓迫せられてゐた國木田獨步の作風が認められるやうになつた。世間では獨步が急に飛躍することが出來たの

を、その友人等の持ち上げに由ると思つてるが、決してさうではない。非紅葉の――やがては、自然主義になつた――潮流の然らしめたところで、つまりは、その流れを導いた批評の力である。

その時からして、たとへば田山花袋氏の如き、創作家にして批評家を兼た人が出るやうになつた。そして創作界も批評界も活氣を帶びるやうになつた。文藝界の活氣は、どうしても、しつかりした批評が多くあつて初めて十分に出て來るものだ。これは獨り文藝界に限らない。政治界にも隨分批評の爲めに覺醒せられることが多いが、政界には上から特別な權威をふりかざして、壓迫が出來る組織になつてるだけ、まだ十分の効力を批評に與へてゐない。が、實業的方面に於ては、株主なるものが利害的關係からその會社の取締役や社長のやり振りを適切に監視し、批評し、まかり間違へば、直ぐ社長までを首にするから、どうしても、會社の進歩を適切に促すことが早い。そして最も進歩的なるべき新聞社の人々が却つて比較的にうぶであつたり、時勢後れの考へを持つてゐたりするのは、社會からこは持てがして正面の批評を受けないからである。

が、文藝界に今日の如く意志發表の機關が自由になつて見ると、どんなことでも活字の印刷にのぼると同時に、批評も亦亂雜になつて、何等の省察もないのが時を得がほに發表せられるやうになつた。そして再び紅葉時代が跡戻りして來たやうに、情實で自作を胡麻化して置かうとしたり、何でも賛めてやれば徒らに喜び、非難すればただ怒るといふやうな作家若しくは論文家が生存出來るやうになつた。

つまり、批評の權威がなくなつて來たのだ。同時に、批評に省察がなくなつて來たのだ。

で、僕は今創作批評の標準もしくは根據を區別して、通俗的に一々說明して見たいと思ふのである。第一に、

材料その物

を中心にしての批評である。書いてゐることが修身教科書の如き露骨な教訓的でないからよくないと云ふやうな考へは、官吏や形式的教育家なら知らず、苟も今日の文學を多少でも知つてるものは、もう云はなくなつた。が、詮じ詰めれば矢張りそれと大した違ひのないことを考へてゐるものがまだ少くはない。この頃の小說は餘り平凡なことばかりを書くか、さうでなければ文藝家の生活ばかりで面白くないと云ふ不平は、方々から聽かせられてゐる。さう云ふ人々の心には、大抵、平凡と云ふことを外面的に見たばかりで、平凡中にも非凡な分子が這入つてゐて、それが作の生命になるのを見落してゐる。

平凡なことを平凡に書いた——乃ち、下らない——のが澤山ないではない。それが殊に花袋氏のや島崎藤村氏の作に多い。そしてその多くは氣分を描きそこなつたり、表象を出しそこねたりした物だ。から云ふのは一概に平凡と見てしまふ前に、先づ、その技巧の不足や觀察の不熟を指摘して見なければならない。そして若し觀察も可なり熟してゐ、技巧も可なり十分であるとすれば、その作は必らずどとかに特殊な點を可なり備へてゐるので、それを平凡の平凡としてしまふのは無理だ。が、感傷的

分子で多少の生命をつなぐ藤村氏等の技巧の如きを以つて、すべて材料を特殊化してゐると云つてるのではない。これは段々僕の議論にのぼつて來るから、そのつもりでゐて貰ひたい。

で、材料が平凡だと云ふのには、二階段ある。一は、平凡中の非凡若しくは特殊を描からとして描きそこなつた物。二は、全く平凡を描いてそれで滿足してゐる物。一には多少の態度的努力の跡が見られようが、二には殆ど同情すべき餘地もない。この後者のやうな作物か誤解ある平面描寫論に由つて随分澤山出てゐる。が、それと混同して、第一の方の平凡やその平凡を特殊化するに成功したのやをも同一程度に見爲した批評が、新聞雜誌の雜評などには最も多く見受けられる。

僕は一番分り易い爲め僕自身の作に關した例を引くが、あの『巡査日記』を本間久雄氏は平凡なことを平凡に書いたと云つた。詳しい說はなかつたから、その理由はまだ分らないが、果してそれが事實であるとしても、花袋氏の或作に於けるやうな初めからの平凡材料の平凡描寫ではない。巡査のやうなあり振れた生活を客觀すれば、表面はどうしても平凡に違ひない。それをあれだけ十分に客觀して投げ出してゐれば、先づその點は出來たと見て貰はなければならない。そしてそこにその巡査の聽きかじり學問や、それ相當の不平や欲求や、野蠻性が入りまじつてその人の生活になつてゐれば、――そこが是非の批評の最も受けどころだが――もう、その平凡が特殊な體を備へたことになる。

聰明な本間氏のことであるから、そこまで考へた上の非難であつたかも知れないが、世間にはそんな考へに至らないで、非凡の標準を歷史的人物の傳記に於けるが如く高潔とか、大量とか、偉大とか

に置くものがまだ〳〵多い。今は跡方もなくなつたやうだが、後藤宙外氏が主唱者であつた、文藝革新會に名を列ねた人々などの考へは全くさうであつた。材料を外面的に判定してしまふのは、すべてから云ふ傾向の人々だ。そして渠等に限り、一作者の有する材料の範圍の狹少をかれこれ云ふ。が、材料範圍の廣狹の如きは、眞の文藝に於ては殆ど空虛な問題である。メテルリンクは平常茶飯の間にも神秘があり、靜止の中にも普通のより以上の動作があると考へたが、それと同じ理由で平凡中にも特殊、乃ち、非凡が發見せられる。作家はそれを握りさへすればいゝ。

そこで、今の作家は自己若しくは自己の周圍ばかりを材料にしてゐると云ふ非難を考へて見なければならない。今の作家中には、自己若しくは自己の周圍しか書けない――正宗白鳥氏の如きは殊にさうだ――のやうな人もある。また、花袋氏の如く、先づ自己に近い材料から初めて、段々他へ及ぼさうとしてゐる人もある。文藝家が先づ文藝家を材料にするのは、恥づべきことではないのみならず、また材料に忠實な所以だ。と云ふのは、自己に遠くて分り難いことを分つた如く描寫するよりも、分つた通りに表現する方が正當な選擇であり、且、正確に特殊化することが出來る可能性が多いからである。材料に空虛な理想的選擇を好む批評家に限り、作家は自己の周圍ばかりを取らないで、實業家、政治家、若しくは或偉人の生活をも描寫するやうにしろと忠告する。さうする必要もないではないが、渠等は偉人、その他のえらい生活も形式を去れば案外平凡なもので、その眞の非凡は凡人の特殊化と同じところにあるを知らない。つまり、理想的傾向のものにある批評家は、偉らい實業家、政治

家或は軍人も、理想的批評家連が平凡と見る文藝家、その他と同樣、人間であるのを忘れて、外形的にこれらの相違ある點を餘り重んじ過ぎてゐるのだ。が、生活上の外形の相違は、老若に從ひ衣物が相違してゐるほどの意味しかない。衣物も年齡も相應の意味はあらうが、それが爲めに人物なり、氣分なりを生かせる力は乏しい。紅葉一派がよくそんな乏しい叙述に力を入れてゐたので、却つて滅亡的狀態に落ち入つたのである。で、次ぎは、

材料の取り扱ひ方

の批判である。平凡な事を平凡のまま出したり、特殊化して出したりするのは、そこに先づ取り扱ひ方の相違がある。特殊化は材料を具體的に組みあげる所以であつて、平凡的平凡は材料の散漫な陳列を意味する。內容のない散漫な陳列でも、かの博覽會や博物館に於ける如く、鳥渡目さきが變つたり、表面的な聯絡が取れてゐたりすると、雜評家連は直ぐそんな初步の技巧に瞞着せられて、うまい物だと贊成してしまふ。藤村氏や花袋氏の作物には、そのやうにして名を得たのが隨分ある。前者の『壁』といひ、『死の床』と云ひ、後者の『死』と云ひ、『別るゝ迄』と云ひ、そんな類は皆それだ。この種の作を賞贊したものは、ゆつくり再讀して考へて見給へ。『客觀的』と云ふことが作者を去勢したこと、『離れた』と云ふことが生命の締めくくりがないこと、『觸れる』と云ふことが生活の事實を骨にして拾ひ集めたことであつて、たま〳〵それに艶が着いたり、うるほひを帶びたりしてゐるのは、單に一般的な感傷性のお蔭であつたことが分らう。そして內容からの力があるのでもなく、內容の豐富があるので

もないのが分らう。

生活的要求の內容――これが上つらな客觀描寫に對して起つた主觀的な聲である。客觀も、事實の特殊化が出來てゐるまで進んだのなら當然のことだが、そこまで至つてないのが流行するので、僕等は初めから不滿でゐたのだ。この主觀的要求の內容は事實の特殊化で滿たされるものだ。が、滿たされた內容が必らずしも力もあり、豐富でもあるとは限らない。力があつても、豐富でないのもあり、豐富であつても力のないのもある。この相違は作者の生活狀態から由來するのであるから、そこらがしツかりした創作に對する批評家の最も注意してゐるべきところだ。が、內容が豐富であつても力がないとか、力があつても豐富でないとか云ふことを以つて、直ちに例の平凡に落して見ては行けない。僕等が藤村、花袋氏等よりも白鳥、秋聲氏等に比較的に加擔するのを見て、世間では、後者等の力や豐富の一方が足りないのを指摘し、直ぐ前者等の作の平凡的平凡程度まで下してしまふものがあるのは、特殊化と云ふ取り扱ひを中に入れて見ないからの謬見だ。

この一足飛びの下落に對して、また一足飛びの騰貴と云つたやうな謬見が批評界にある。それは特殊化、乃ち、平凡の非凡と云ふことを空想的な非凡に持つて行つて、理想的な批判を與へてしまふことだ。そして、作者が材料に對して正當な特殊化的取り扱ひを守つてゐるにも拘らず、それ以上に何か大非凡、若しくは非凡が神的でなければならないやうに考へることだ。丸で小說その物を知らない敎育家が作中に露骨な敎訓を要求しようとするのと大して違ひのないことで、これは批評家が理想派

の虚構を固持して、作者の態度を分らないから起る。森田草平氏は近頃盛んに自作の辯護をしたが、僕自身にも同じ感じがすることはこれ迄引き續いてあつた。そしてその度毎に成る程と思はせられたのは初歩的な技巧に於てが多く、態度の上に反省を促がせられたことなどは少い。一般の批評家が大抵間違つた客觀說から外形上の技巧の缺點を擧げるでなければ、作家に對して空想的な非凡若しくはそれに似た物を要求するからである。

安部能成氏の『發展』評は、やつて貰つたに對しては感謝して置かなければならないが、所論中には見當違ひがあると云はなければならない。と云ふのは、氏が此の空想的要求をしてゐるからである。相馬御風氏があの作を『全體として何等深き人生の意義を暗示するものではない』とか、『局外者たる吾々にすら明らかに想像出來るやうな事實を、當局たる作者自身が見のがしてゐるやうな所がいくらもある』とか云つたには、僕は大抵こんなところを見落して論じてゐるのだらうと想像出來るところもないことはないが、實例を擧げてないから、辯解すまい。が、安部氏のには捕へどころがある。『主觀の內容の不足』と云ふのが非難的方面の要領で、それが同氏の空想もしくは不完全主觀から來た人間以上の非凡を作中の主人公に要求してゐるのだ。孤獨の哲理家だとて、人間以上ではない。哲理は宰相の官服、軍人の軍服、商人の前垂れと大した違ひのないものだ。それに伴ふ生活を實行上に實現するのが、執政、戰爭、商賣と同樣、それによつて人間の價値を見せる緣が出來るのである。で、主人公の哲理が懷疑的でないのを認める以上、その實行が懷疑的でないのも當然に認められなければな

らない。それから、あの主人公は事々物々に自己の全力を以つて當るから、理論上に懷疑的方面の煩悶は出ないやうになつてゐるが、全力を注ぐことその事に懷疑以上の生か死かと云ふ苦悶をしつづけてゐる。人が懷疑に由つて反省苦悶するところを、全人全力的實行に由つて反省苦悶してゐる。評者は空想的、抽象的に苦悶の形式を發見しようとするからそれが見えないのであつて、あんな哲理の衣を着た一平凡人があんな哲理を抱いて平凡な人や事件に直接すると云ふ風に、材料を取り扱つたところに、特殊化せられた人生が出て來る筈だ。評家に(相馬氏のもそれだらうが)そこまでの深い省察が足りないから、滑稽に見えたり、獨り合點に見えたりするだけで、評家に主人公の自任、得意、若しくは自惚れと見える如きは、その實行的苦悶の一方面に過ぎないのだ。權威は理論その物になく、理論を全人的にその場の實行に取りまとめるところにある。たとへば、主人公が自己の自覺を、了解もない妻の前で喋々する、そのことは客觀的に滑稽であらうが、渠の主觀では、さうするところに初めて自覺の實際を呼び起すもがきがある。そこが渠の人間としての心事を特殊にする所以だ。かう云ふ風に材料を取り扱つたのは、内的傾向に進んだ客觀的描寫であるから、散漫な外的客觀論では持て餘ますに決つてる。安部氏等は悲劇と喜劇とを形式的に區別しようとする傾向を示してゐるのだが、如何に嚴格なカントやオイケンでも、人間として描寫せられると、滑稽な點や獨り合點の方面があるに決つてる。と同時に、渠等が特殊化せられたからつて、あたまから足まで全然他の人間と違つてるわけのものではない。そこが巡査を描寫するのも、哲理家を表現するのも、同じ態度で行かれるわけだ。

ついでに、斷つて置くが『發展』や『放浪』や『斷橋』は僕の哲理その物を發表したのではない。が、僕の哲理が時々刻々にぶち毀れるのを、時々刻々に建設する實生活を取り扱つたのだ。

そこで、

作のねらひ所

の問題だ。批評は、どうしても創作を多少抽象して見なければならなくなるものだと云ふことを許して置く必要がある。有る事物・事件もしくは人物に就いて描敍した創作の、かう云ふ個處が實際的だとか、あゝ云ふ部分が興味あつたとか云ふだけなら――それも場合に依つては必要だが――單に、廣いもしくは狹い意味、劣等の若しくは高級の意味、の技巧を論じてゐるに過ぎない。それでは批評の完成にはならない。必らず事件の中心、人物の性格、もしくは作者の描寫氣分に立ち入ることになると、どうしても、作の向ふところ、作者のねらひ所を抽出して見なければならない。が、そこまで批評家が見當違ひのことをやつて、そのまゝ物々しい間違ひの批評をつづけることがある。物々しいだけ、そこだけの理路は立つてゐるから、それを讀めば尤もだと見えるが、作の實際に當つて見ると、理論の方向が反れてゐる。創作中の實際を描出したのでなく、ただ評家自身の拵らへた抽象的理論を語つてゐるからである。

安部氏が『發展』の主人公の生活を『お手輕な自惚れに行き止つて』としたのは、氏が自惚れと見たことその事に却つて多くの實行的苦悶が伴つてるのを見落したのである。さうした心持ちが作者のねら

つた所であるのに、評家はそのねらひを外して、作者の與へた内容を無にした議論を立てた。水野葉舟氏の『羊』が少女の色氣付く徑路を書いたのに對して、本間氏が戀の經過を探らうとして失敗したと云ふやうな評言を下だしたのは、作者自身が辯護した通り、餘ほど間違つたことだ。それ位のことなら、今の無反省な批評界にはまだしも寬恕することが出來ようが、或雜評家の如きは、『巡査日記』がわざ〳〵巡査なる上方者の故鄕の言葉で書いてあり、且それがねらひの一方面であるにも拘らず、『作者は自覺してゐないか知れぬが』と云ふやうな前置きをして、ちよく〳〵上方言葉が這入つてゐるのが却つて釣り合つてゐると云つた。こんな單純なことを間違ふやうでは、全く省察を缺いてるのみならず。殆ど全く批評家の資格がない。こんな種類の雜評が跋扈するから、批評の權威が一般に落ちて行くのである。

ゴルキの『どん底』の如きは、そのねらひ所が定め難い。甲はサチンの對話で作者の哲理を見せたものだと云ふ。乙は變な人生觀を有する巡禮が作者その人だと云ふ。丙はまたこの作には中心がない、單に一篇の氣分劇だと云ふ。僕は最後の說を取つて、無宿者の集りにみなぎる氣分がねらひ所だと思ふが、どの說でも立てれば立つと云ふ場合には、物々しい見當違ひがない爲めに、三說中の一つを取りながらも、他の二說を說服出來るだけの省察的用意をしてゐなければならない。更らに又沙翁の場合を考へて見給へ。渠の諸作は純客觀的性格劇と云はれてゐて、感傷的思想の流行した時代にはこの作者は『萬人の心を持つ』とまで賞贊せられたものだ。が、感傷的思想を脫却して來た現代になつて見

ると、その作中には出してないと云はれた小主觀や、傾向が明確に研究せられ、作中諸人物の性格中に作者の凡俗な人生觀や形式的思想が露骨に指摘せられるやうになつた。そして近世では沙翁の哲學があるとまで見爲されるやうになつたが、『ハムレット』で云つても、僕等は哲學上の用語を發見するだけで、その當時のハイカラ青年が無反省な感傷性に齒の浮くやうな不釣合な人生觀をくつ付けようとしたやうな主人公に過ぎない。そして又沙翁の態度と技巧とが餘りに隔絶散漫してゐることが分つた。主客兩觀の融合とか、氣分情調の徹底とかを要求するやうになつた僕等には、作中人物の性格をねらつただけでは滿足出來なくなつた。さうかと云つて、その作中の人生觀が作と融合もせず、而もその正體が凡俗であつて見ると、作者が無意識にもそんな物をねらつたとするには餘り馬鹿〳〵しい考へにならう。そこが現代に沙翁の價値がなくなつた所以だ。このやうな批評界の推移的權威は、現代に於て見のがすべからざるものだ。で、

作者の態度

に移らなければならない。材料の選擇が正當で、その取り扱ひ方が實際的で、ねらひ所が分つたとすれば、もう、批評家は作の内容を研究する道が開けようと思ふ。が、その前に、作者の態度を云ふ必要がある。長大でも空虛を免れない敍事詩などよりも、簡結で意味ある叙情詩を取ると同樣、沙翁張りに外形的莊重を備へた性格劇もしくは性格專門小說よりも、片々たる一幕物若しくは短篇小說の內的充實を僕等は要求する。少しでも直接な內容に觸れたいからである。所で事件でも性格でも、その

まゝの材料としては、ごろ〳〵した石と同樣、內容はない。ただ石ころを集めた石屋のやうなのが、平面描寫論者並にそれに近い者等の意識的に落ち入つてる態度である。石屋でも石の取り扱ひ上にねらひを付けてゐないことはない――これは墓石に、あれは庭石に、また据わりがよくツて圓高く、上が平べツたいのは腰かけ石にと。然しそれだけではその物に獨斷的、概念的、抽象的、もしくは理想的內容を付けたばかりで、まだ物の具體的妙諦を得させてゐない。之に反し、石が、高級の庭造りの手に這入ると、庭の適當なところに置かれて、特殊の生命を帶びて來る。之は技巧の上から云へば取り扱ひ方の相違だが、內容的に見れば取り扱ひ人の態度が違ふわけだ。

石屋的作家の作は內容を逸して、全く散漫な技巧に終り、高級の庭造り的作家のは又、よく技巧を沒するほどに內容を披瀝するが、玆に石屋の頭腦しか持たないで庭造りをやつたやうな創作が澤山ある。具體的內容がないのに、あるらしく見えた爲めに、一般の批評家等が全く具體的な創作であるかのやうに歡迎したのを云ふのである。石屋的庭造りも一種の態度かも知れない。が、さう云ふ作家の有する內容（と、假りに云つて置くの）は表面的技巧に行き止まつた概念に過ぎない。石屋的なのが花袋氏に少くはないとすれば、石屋で下手な庭造り的なのが藤村氏に多くないとは云へない。後者の作で、古くは『壁』、近くは『死の床』、または題を忘れたが、博士が段々細君と親しみを增して行く經路を書いた概念的作物などの如きは、凡俗の感傷主義が加味せられてゐて、それが作の艶として一般的批評家連の氣に入つただけで、省察ある眼から見れば、てんから生きてゐられない。

で、如何に材料の取り扱ひ方が注意してあつても、またそのねらひ所がよかつても、それだけではまだ作の生命、乃ち、內容が出て來ない。批評家を以つて任ずるものでも、たゞ或作家もしくはその一作の材料の扱ひ方が分つたとて喜悅し、たゞ作のねらひ所を發見したのに抃舞し、それだけで立派な批評が出來たと思つてるものがある。そしてその作者が高級な庭造りでなく、石屋的頭腦の庭造りであつたり、石屋その者であつたりするには思ひ至らないものがある。つまり、內容的批評を忘れてゐるのだ。現代人が創作に要求する內容は理想的や、その他すべて概念に停止するものやではない。從つて概念より外處分することが出來ない態度では、高級作家として見爲すべきものでない。作家の態度が材料と具體的、特殊的に融合して、初めてその作品が石ころも生きるやうに生命が湧き出るのであるさう云ふ作家の態度が具體的態度だが、さうあるかどうかと云ふことを調べるのが批評の一要點だ。

それに就いて思ひ出すのは、態度は眞面目だが、作品は不眞面目だと云ふやうな批評がよくあることだ。前諸項に云つて來たので自然に分る通り、そんな不思議があるものではない。簡結に云へば、作家の態度は乃ち作品ではないか？　この兩者は別になるわけがない。態度が概念的なら、作品も概念的だ。具體的態度の作品は乃ち具體的だと同樣、眞面目な態度の不眞面目な作品があつたとすれば、奇蹟と云はなければならない。が、下のやうな省察が出來ないことはない。作者がその選んだ材料に執着し、その扱ひ方やら、ねらひ所やら、筋の運びやら、部分的技巧やらに一心不亂、浮き身をやつした跡が見えるのを、普通一般の勞働として見れば、熱心と云ふ意味で眞面目とは云へよう。が、そ

こに自覺が伴はなかつたら、どうだ？　有爲の專門家は、實業家にせよ、軍人にせよ、その道を他人の跡から附いて行くのでなく、自覺的に身づから通じてゐなければならない。文藝家が特殊化的技巧に頓着なく、正當なる態度を窮めたこともなく、ただ我無しやらの熱心に筋を立て、說明をして、書きさへすればいゝでは、如何に熱心でも、滑稽ではないか？　さう云ふのは、文藝家として眞面目を許せない。

曾て僕が批評した高安月郊氏の小說『魔の曲』がそれであつた。世人も作としては滑稽なのを認めながら、而も無考へにもその態度は眞面目だと云つた。それから見ると、長塚節氏の『土』は滑稽の度がすくない。それだけその作者の態度も眞面目な方に傾いてるが、なほあれを讃めた人々の言葉中にあるやうな眞面目な態度とは思へない。と云ふのは、表現上の自覺が乏しい爲め、ただ事實を正直に書いてるだけで、描寫と說明とを甚しく混同してゐるからである。作者の態度として高安氏のは筋を勝手に拵らへて行つたのが不眞面目なのだが、長塚氏のは事實を欲しい儘に說明してゐるのが滑稽なのだ。

沙翁流の客觀になづんで、主觀と云へば何でも小主觀のやうに思ふ平面描寫論者等は、石屋の石たる事實以外に存ずる

　　　　內容とは何ぞや

と審しがる。が、態度の虛實や眞面目、不眞面目が作品の虛實や眞面目不眞面目になる以上、作品の

内容は作者の態度が全然占領してゐなければならない。人生の事實、乃ち、材料はどんなのでも拾つて來られる。それが纒まるやうに扱ふには、ねらひを付けさへすればいゝ。そのねらひが筋にあらうが、性格にあらうが、或はまた氣分にあらうが、作者の態度が虛構であれば、虛構な氣分、性格、若しくは筋しかない。虛構物は如何に理窟を付けても、また如何に段付けをしても、ごろ〳〵したその石の材料物に過ぎない。强ひてその違ひを云へば、いづれも空虛な材料だが、事件を運ぶ筋は聯絡の付いた材料、性格は一般心理的材料、氣分は特別狀態的材料だ。作者の不實的、非特殊化的態度に成つた作物は、名義は氣分劇でも、實際は性格劇だ。然らざれば、まだ、積りは性格小說でも、本體はプロト中心の物語りだ。

で、あの作の內容は筋の面白味にあるとか、性格の書き別けにあるとか、氣分の表現にあるとか云ふのは、嚴格な批評眼を有するものには、ごろツちやらした事實を散漫に寄せ集めたのに對すると同樣、全く意味を成さないのである。今の新進作家の氣分劇とか氣分詩とか云ふ物が、名は進步した新文藝にちなみながら、少しも眞の氣分に生きてゐないのが多いのは、氣分、性格、事件、若しくは材料——すべての人生の事實だ——を根柢から生かせる作者の態度が備つてゐないからである。花袋氏の如きも事實以外に內容がないと稱してゐる人だ。この人の說若しくはその通りに出來た作——これは氏自身のばかりでない、新進の氣分主張者等の作も實際多くさうだ——を物にするには、事實は作者の態度を作つてゐるものとしなければならない。と云ふのは、例の石屋の石では意味が這入つてゐ

ないからである。

態度的事實若しくは事實的態度になつてこそ、初めてそこに作の內容は成立する。が、舊式の物質的に、乃ち、氏の所謂『離れた』態度で內容とは何ぞやと反問する花袋氏の考へでは、非凡を理想的、抽象的に求めようとするのと同樣、わざ〳〵物の充實味を逸したわけになる。理想家と違ふ所以は、ただ、人間にあるべからざる非凡的非凡に逸する代りに人間の生活にまだ關係の付かない平凡的平凡に墮した點だ。事實をトルストイの傾向に於ける原素にまで解剖しようとするのも決して構はない。がその殘酷と寂寞と空疎とを補ふ爲めに、わが國の物質的作家等が徒らに感傷的分子を加味しただけでは內容として大いに物足りない。そんなのも一種の態度ではある。態度が內容である以上、無關係な石を無關係な石として扱つた態度も內容だ。作者を離れた事實以外に內容がないと云ふ花袋氏の內容は、乃ち、そこに結着が付くわけだ。が、そんな貧弱な若しくは空疎な態度に於ける作品の內容は、矢ツ張り、貧弱若しくは空疎である。氏等は作品の內容を外存的若しくは固定的に考へて置かうとするからそんな結論に落ち入るのである。

僕等は作者と作品と、態度と內容とを離して考へることが出來ない。が、どんな態度がどんな內容を體現するかと云ふ考察は出來る。花袋氏も事實の特殊化と云ふやうなことは云ひながら、初步の客觀說に禍ひせられて、その意味を誤解し、事實そのまゝ、材料そのまゝに羅列すれば特殊化が出來ると思つてるのだ。この貧弱な內容觀を『ありのまゝ』描寫として、世人はそれに可なり長く騙されてゐ

た。が、近頃大分覺醒して來て、僕等が以前から主張してゐた主觀的深味を要求する聲が盛んになつた。主觀的と云つても、沙翁の俗惡な客觀に對する俗惡な主觀ではない。また、事實を空疎に離れさせようとするやうな、平面描寫論者等の主觀ではない。作中の氣分、性格、事件、材料、乃ち、事實と共に眞に特殊化せられて生きようとする作者の態度である。これが最新文藝の要求する內容だ。

離れては、如何に嚴格冷酷らしくしても、そこに感傷主義が這入つて來る。これが這入ると、取り扱つた事實と內容とが、藤村氏や花袋氏等が知らず〳〵落ち入つてるやうに、間接になる。間接的態度はその創作を直喩的にするが、特殊化に依つた直接的な態度はその作物を隱喩的若しくは表象的にする。さうなつてこそ、初めてその內容の豐富や强力を正當に云爲することが出來るのである。

そこで、これから段々跡戾りをして行くやうだが、ついでにちよつと、

技巧問題

に說き及ばなければならない。高級な批評に於ては、作家の態度が即ち技巧である。從つて、技巧は直ちに內容だ。圓熟した技巧は圓熟した內容、纎弱的技巧は纎弱的內容だ。が、一般批評家は技巧に對する圓熟、粗强、纎弱等の術語を、餘りに固定的に使用してゐる。藤村氏の場合に於ける如く、內容が、圓熟しない概念ばかりであつても、それが外面的によく纒つてると、批評家から圓熟だと云はれる。僕の作に於ける如く、技巧が粗强なのは內容の本來である場合にも、內容に釣り合はないかのやうに云はれる。またスバルから出た新作家等に於けるが如く、纎弱が技巧と內容とに釣り合つた場

合にも、材料その物の好惡からそれを排斥せられる。から云ふのは、すべて省察のない用語例であつて、眞の批評家の云ふべきことでない。文藝家にはそれ〴〵特色がある。一方の特色を以つて他方に責めるのは無省察の批評だ。が、初步の技巧的評論にはよくこんな頓珍漢があるものだ。

然し技巧を作家の態度上から批評する時は、そんな參酌は無用だ。非特殊化的な作家は特殊化的評家より見て——その理由は云つた通りだ——反對なのだから、評家がその理由を世間に開陳するのは公明正大なことだ。また、態度に於て人生派の評家が態度に於て藝術派の作家を攻擊するのは、またそのあべこべなのは、いづれも正當な生存上の必要である。が、こんな場合にも、たとへ省察は行き屆いてゐても、情實の爲めに遠慮勝ちになつた例は少くはない。から云ふ風潮は、殊に技巧を云爲する方面に於て著しいが、わが文藝界の爲めにはどし〳〵脫却して行かなければならない。たとへば、僕は僕の主張に由つて分る通り人生派だ。藝術を人生技巧的再現としないで、人生の特殊化的實現、即ち、人生その物とする。だから、藝術派の作者若しくは作品を折さへあれば排斥する。人生派的の方が內容に力があり、豐富があるからである。そして僕が作家を兼ると否とには關しない。が、忘れてならないことが身づから藝術派、もつと狹めて云へば技巧派と稱し、またはさう稱せられる人々にも實際は人生派的なのがあることだ。

ボドレルの如きは特別に世の所謂病的な技巧に生きてゐた。これを佛蘭西から英國に受け繼いだオスカワイルドもそれに近い。藝術にしか人生はないと云ふほどに思ひ詰めたのであるから、その所有

する技巧が即ちその人の生活だ。この人生派的藝術派は多く享樂主義的に——僕は分れて享苦主義的になつたが——人生を觀じた。さうなると、藝術上に全部的技巧を專らにすることもなかなか馬鹿にならない。が、わが國でこの派の一人に計へられる谷崎潤一郎氏の如きは、まだまだその技巧と內容とに多大の間隙がある。從つて技巧に、もつと狹く云つて用語に光彩はあるが、それだけの光彩ある內容が伴はないとも云へる。で、態度的技巧としては、平面描寫派のごろごろした材料雜列と同樣、貧弱を免れない。谷崎氏を初め、長田幹彥、田中介二等の諸氏が、例へ技巧派としても藤村氏などより新らしい而もいい物が書けさうでゐながら、兎角、まだ鍍さきのけち臭い技巧に生きようようとする傾きがあるのは、僕等の遺憾とするところである。

片々たる部分的技巧をいくら澤山重ねても、その扱つた材料を內容的に成佛させることは出來ない。矢つ張り、特殊化的態度を以つて部分的技巧を浸潑するやうにならなければ、人生の活事實をねらつた內容の力も豐富も流出しないのである。で、さう云ふことまでは、知つてゐても、實際批評をする時に考察に入れない雜評家の雜評の如きは、高級な意味からは問題にするが物はないと云ふ人もあるか知れないが、僕のこの論文は成るべく通俗を主としたのであるから、一言云ひ及ばなければなるまい。と云ふのは、一言するにしても、既にここまでにほのめかして來たことを簡單に總括すればいいことであるからだ。時々目にとまつた雜評を見ると、多くは初歩若しくは低級の技巧を云爲してゐる。ただ材料の選擇や扱ひ方や、扱つた事實のねらひ所や、更らに立ち入つても、性格や氣分や、そ

んなことは――特殊化的態度が添はないでは――偏狹な技巧專一の問題に過ぎない。新作の筋を紹介したり、その作中の何と云ふ人物がありくと描けてゐると語つたり、斯うくと云ふ氣分がよく出てゐると賞讃したりするのは、皆それだ。然し其代　正の批評家が要求するところは、そんな技巧一遍に屬するものではない。眞正の技巧的要求は、作者の態度がその作に據つて如何に特殊化せられた事實、即ち、人生を實現してゐるかにある。技巧が乃ち內容たる所以はそこにある。

で、技巧と共に、また

作者の生活狀態

を考へる必要が起つて來る。蒲原有明氏が作物批評には作者その物の體質や氣分を參考せよと云つたのは、確かに一理ある。ボドレルの魔的詩作が技巧の力に由つた享樂的詩派を呼び起した所以は、ボドレルの體質が廢頽して、アブサントやアシシユの刺戟劑に依らなければ筆が執れなかつた狀態を知らなければ、實際に理解することが出來ない。モパサンの小說の厭世的、絕望的色調は、モパサンが梅毒を病みて、それが遂に死因となつた事實に思ひ及ばなければ、到底、適切の意味は分らない。わが國の例を引いて見ても、作者の體質、氣分ばかりでなく、育ちや經歷や現在の社會的地位も決して看過してゐられない。秋聲氏の作がくすんで沈み勝ちなのは、氏の身體の或部分が普通人のよりも故障があるに由る。花袋氏や藤村氏のが無事で通俗的なのは、兩氏の身體や神經が餘り健全であるからである。白鳥氏のがどことなくだらけて皮肉なのは、氏がいつも胃病になやませられてゐたからであ

る。が、近頃、その皮肉的傾向が薄らいだのは、以前の如き繼子扱ひにせられなくなつて、順潮が向いて來たからである。水野葉舟氏のがこじれたとこが少く、魔的に進まうとしても進めず、殘酷に入らうとしても入れず、いつも似たやうな婦人やその關係者を離れないのは、氏が比較的にすらりと育つて來たからである。森鷗外氏を初め、永井荷風、谷崎潤一郎、長田幹彥等の諸氏のがどうも遊戲的傾向を脱し切れないのは、金持ち若しくは部屋住みであるからである。最後の渠等に依つて金持ち文學・部屋住み文學の代表者は得られようが、徹底した享樂主義などはまだ〳〵演繹も歸納も出來ない。

然しから云ふ生活的問題の考察に有明氏が特に體質的氣分を選んだのは、育ちや閱歷や地位等は現在の體質と氣分とに代表せられてゐるか、若しくは一層深く喰ひ入られてゐるかしてゐるからの事であらう。それにしても氣分が人か、人が氣分か分らないほど、圓熟した人生觀や社會觀を有するものが現代には多いの事實を閑却してはならない。が、有明氏は知識と肉體とを區別し、――それが普通一般の考へ方だらうが、――『作物と肉體の關係』は、『人生觀とか、社會觀とか云ふものよりも……もつと重大なものである』とした。僕等はそれで滿足することが出來ない。現代人の神經は一般心理學で取り扱ふそれよりも直接的・銳敏的になつてゐる。心理學的神經は感覺を傳へる役目ばかりで、知識を形作るまでには知覺　認識等の階段を經なければならない。形式的には無論さう說明せられる知識も、僕等の實際生活では、僕等現代人が銳敏なだけ、直接に神經と聯絡してゐる。感覺が乃ち知覺、乃ち認識、乃ち知識で、知識はまた神經系統中の作用と云つた狀態にまで密接同化する。

――ナポレオンの手は頭腦に付いてゐたと云はれたと同樣、僕等の智識は事物の概念もしくは關係を直ちに神經に傳へなければならなくなつてゐる。現代の激甚な生存競爭が僕等にさうさせるやうになつた。で、この現代的傾向を最もよく代表するのは文藝家で、渠はその人生觀や社會觀に對して、他の人々に於けるよりも、殊に鋭敏なリセプチビチ、受容性を持つてゐる。同時に、その受容形成せられた智識は一般的關係に停止しないで、直ちにその人の神經に同化する要求を具體してゐる。之を神經的方面から云へば、いろんな刺戟を一々全く受け外さないので、それに依つて人よりも充實した、立ち入つた、若しくは特殊化した智識を所有することになる。そしてその神經が人生觀や社會觀か、その智識が神經か、いづれとも區別が附かないほどになるものだ。で、一概に智識的生活を輕んじるわけには行かない。さう云ふ特殊な智識になると、その智識から作家の神經や體質的氣分を探らなければならない場合もある。これ、一般道德上の健全不健全と文藝家の健全不健全とが、現代的に意味の轉倒、價値變換を來たすことがある所以だ。

適例は乃ちヱルレン一派のデカダン傾向にある。渠等の把握した內容は、一般道德的に健全とは云へないが、詩歌としては正當であり、適切であり、またその時代に於て一步を拔んでてゐたが、そこに達するには、どうしても所謂不健全の狀態に於てしなければならなかつた。區別せられた智識で云へば、その社會觀、人生觀、藝術觀、技巧觀は、すべて健全でなかつた。然しそれだからそんな智識よりも病的體質、病的氣質の方が大切だとは云へない。この場合、病的は體質や氣分にばかり冠すべ

き形容詞ではなく、技巧觀並にその上に列記したすべての智識の上にもさうなのだ。區別的に云へば智識と體質とに輕重はない。內容的に云へば、凡等の智識が體質、體質が智識である。そして病的と云ふことはこの智識と體質とを融合させた生活狀態だ。

して見ると、一作家の人生觀、氣分、並に體質が輕重なく融合してその人の現代的實生活を成立させる。そしてその生活狀態が直ちに態度となつて作物の內容を充實させると云ふ風に、眞正の批評家は創作の觀察をして行かなければならない。ゾルレンやモパサンの場合は、その人生觀からも來た不健全病的な生活狀態が却つてその詩や小說の內容を豐富にし、强力にしたのだ。

餘錄

與へられた紙面が盡きかけるから、なほ云ひ殘したらしく思はれることを、簡單に述べて、この論文を終りたい。

僕は、こゝに批評家として物を云ひながら、その間に僕の創作の批評に對する辯駁もした。これは僕が兩方を兼てゐるのだ、止むを得ないことだ。

德田秋江氏などは、創作家として立つなら、他作家の批評もしくは自家の辯解はしない方がいゝと云ふ說だ。然しそれはその人に由つて決すべき問題である。花袋氏や僕のやうに兩者を兼ねるに於ては、他人のかれこれ口ばしを入れる限りではない。が、秋江氏の意は憎まれるからと云ふにあつたやうだ。これは正直な言で且實際にある事だ。現に、僕の如きは、思ひ通りの批評をする爲めに、數名

の人々から僕の創作を故意に惡評せられたり、默殺せられたりしてゐる。公明正大にその人名を指摘する機會が來るまではその人々をかばつて置かうが、同じやうな場合が僕以外にも澤山あるのは事實だ。そんな故意者に限り、おのれの便利を得られる方面には巧言令色的な批評を呈してゐるのだ。

之に反し、僕等が創作をしつゝ批評もやるのは、僕等の創作の上には批評もしくは意見發表をしてゐないよりも、一層適切な利益を得られることがある。つまり、創作家としての態度、その他を公表することも出來るので、他の批評がこの公表と作の實際とを十分に比較研究して吳れる。そしてその研究の結果が眞摯且正當なものであつたら、こちらに反省を與へることが一層多いからである。また若し眞摯でも正當でもなければ、直ちに反駁出來るからである。然し創作家が自己駁論を反駁する必要だけなら、その時だけ批評家に變じても出來ることは勿論だ。

現今では、創作兼業者以外に標準的批評家があつても少いのを僕等は遺憾としてゐる。そして創作家兼批評家の批評の標的が、誰れでも、その創作の實際程度よりも進歩してゐるのが事實だ。そして又專門批評家の批評が前者のを一番頼りにしてゐるのも事實だ。が、批評的思潮に於ては、今のわが文界は世界中で一番進歩してゐると云つて大した誇張ではあるまい。世界先進諸國の思潮を吸收して、おもな創作家等があゝでもない、かうでもないと考へ拔いたあげくの意見が――それにたゞ雷同する雜評のやうな、低級のも多いのは別として――出るやうになつて來たからである。然し、その割合に、世界に誇つてもいゝほどの創作がまだ少い。

と云ふのは、創作家の向けた批評は、作家同士には商賣がたきと云ふやうな厭ふべき聯想があつて、專門の標準的批評家が向けたのほどに堪へないのではあるまいか？　花袋氏が高濱虛子氏の『お丁と』を評して、事實を勝手に拵らへてゐると云つたのに對し、――この評言は僕等から見ても適當だと思はれたのに――虛子氏は太平樂をきめ込んで、『花袋氏は惡人だ』などゝ冗談に云つて退けてしまつた。

最後に擧げて置きたいのは、葉舟氏の『花袋氏の藝術に現はれたる人物』である。渠は自作の辯解の外に批評めいた物を書いたのは餘りないやうだが、この評論は隨分親切で周到で、而も具體的に『妻』の作家その人までも躍如させてゐる。僕等がやがて現はれなければならないと期待してゐた批評的態度の一先驅だらうと思ふ。（大正元年九月）

胃病所產の藝術

（正宗白鳥短篇論）

一

正宗白鳥氏の藝術を推薦し出したのは、僕がその最初の人でないとしても、最初の數名中の一人だと或人が云つた。その辯、同氏に對するまとまつた批評を、藤村氏や花袋氏に對したやうには、自由にする機會がなかつたのは、僕が氏に餘りに接近してゐたからである。あのむツつりした顏で、あの

どことなく控へ目に自己を守りながら、云ひたいことの半分は、きよと〳〵したと云つてもいいやうな目付きにとどめてしまふ態度に度々接してゐると、遲鈍なのを面倒臭さうに机に向つてゐる渠の姿がいつも目の前にちらついて、僕にはもろい物に對する時のやうに、今少しそツとして眺めてゐたいと思はれた。

ところが、この一二年は僕が東京にゐなかつたので相會ふ機會が殆どなかつた。渠も亦生活狀態に變更があつたりして、その作風に固定的な薄皮が出來て來たやうだ。丁度今をいい傍觀的場合として、今回、新潮社の白鳥論依頼に應じて見たのである。

渠に議論上の物を云はせると、平凡に過ぎて、（これは藤村氏や花袋氏も同じことだが）餘り大したとも云へないが、渠の創作には初めから特色があつた。それが僕等の目に觸れたのであらうが、さて、どんなことを標準にしたのか今更らその當時の僕等の言葉を一々調べて見るにも及ぶまい。それよりも、かたツ端から渠の著書を讀んで見た。

二

渠の第一著は『紅塵』だが、どうも期待しただけの內容が發見せられない。一體に、作者の小主觀的な斷定、說明、若しくは觀察が多く、その得意な皮肉もまだ標準が餘りに一般的、常識的だ。敍事の技倆が幼稚で性格の描寫に不確かなところがあつて、人物の點出と離合とにわざとらしい點が少くはない。誠一が『まだ世間知らずのあどけない心に一方ならず驚いて』云々などは、云はないでもいい說

明ではないか？　また、『南圓堂の御詠歌の假聲を使ふ氣で』とは、小主觀の皮肉的觀察を脫してゐない。お時を『この女にも苦勞はあるのだらう』と見たのも、下宿屋住ひの世間知らずな男の觀察となつてゐれば不思議はないが、そこに作者の物云ひが附いてるやうになつてゐちやア、その常識以下の判斷に興ざめざるを得ない。

お仙は不審さうに出たが、誠一を見て、一方ならず驚き、「誠さんよく」と云つた切り、思ひがけぬのやら、嬉しいのやらで、淚をさへ浮べた。

の如きは、叙事としても拙いが、充實した描寫には省いてしまつてる、決してさし支へのない部分である。

それに、お時とその姉婿の人物や、仙吉とお新の性格なども、作者が計劃した輪廓だけにとどまつてゐて內部には全く這入つてゐない。誰れでも書き初めの頃は注意を外面的だけで滿足させ易いものはものだが、幕間では仙吉の『いはれなき寂しい思ひ』がもツと深く若しくは充實して出てゐなければ、新らしい短篇小說として面白くない。が、作者はただ渠の外面的周圍若しくは相對的關係を觀察したまでであつて、肉靈合致的氣分若しくは內容に立ち入つてない。そこが讀む者をして何だか根底がないやうに思はせる所以だ。舊友が篇中での最長篇で、また一番よく小說に成つてるのだが、矢張り、無駄な記事が多い。

無駄な記事とは外面だけに終つてしまふ記事だ。宮島や奈良の紀行めいたことがあつても、それは

かまはない――美術談や宗敎論に似たとろが出ても決して惡くはない――それらが人物その物の生活に伴つてゐるのなら。作者は、然し、さう云ふ生活に必要な道具を並らべたが、生活その物に觸れるところが少なかつた。東京と奈良、耶蘇敎と大佛――作者は一たび信仰の經驗があつたればこそ、戀の爲めに却つて身を滅ぼして行く天才的人物と宗敎の廢滅して行くあり樣とを、奈良を背景としてうまく搗きまぜて見ようとも思へたのだらう。花袋氏なら知らないでゐよう、藤村氏なら、通がつた智識でお茶を濁してしまふだらう。たとへ道具建てだけでも、あすこまで出來たのは正宗氏が、當時、他二者と違つた一特色を見せたところだ。

けれども、惜しいことには、事件に於ても、人物の性格に於ても、はた又出さうとした氣分その物に於ても、表面的に終つてゐる。『お仙は眼を潤ませて、感情が昂奮して、手が震へてゐるやうだ』とあつても、實際にさうなる情感の含蓄がない。稻村が『忘てた昔の音が遠方から響いて來るやうだ』と云ふのも、表面から押し付けただけの記事だ。從つて、渠が精神的墮落の原因を愛妻から受けた『只侮辱には堪へられなんだ』とあつても、前後が餘り說明的にそこへ向つてゐるので作者の期待するだけの力がない。內部的に描寫せられてゐないからである。この著全部を通じて、文章に、ほんのうはツ面の調子が附いてるところが著しく目に立つ。『誠一も詮方なく褒めそやせば、僧侶はほく〳〵して』とか、仙吉が『微塵も邪氣がなく職務にも忠實であれば、友人にも好かれれば長官にも嫌はれない』とか、『やがてお時は大儀さうに下りて行つて、姉の邪慳の口にかかつてゐたが、もはやよくは

聞き取れなかつた』とか。から云ふ書き方が一層この著に於ける白鳥氏の描寫を外面的に走らせてゐる。

そしてをかしいのは二階の窓からの觀察が二つあることだ。一つは、その題で呼ばれてゐるが、窓からでは分りさうもないことが根底のないやうな空想で現はされてゐる。他の一つは、舊友中の誠一が二階の西洋室からお仙の照吉に對する艶話を立ち聽いたことだが、これも事實を捕へたとしては疑はしい。が、作者當時の觀察範圍が二階の窓のやうに狹かつたことを白狀してゐるものと見れば、面白いではないか? この位の標準で、先づ出來がよく且てきぱき行つてると云へるのは、塵埃や久さん等であらう。

で、この集の横斷的觀察をして見ると、一方に、『この藤椅子の綱が尻がすり切れるまで、渦卷く編輯局の塵埃を吸はねばならぬと天命の定つてゐるとすれば、未練はない、今日此處で舌を嚙んで死んで見せる』とか、『心だけは天地の間の大王として威張つてをれ』とか云ふ希望的部面がある。他の一方には、『自分には明年の卒業を待つてる者は天下におれ一人だ』とか、『父なく母なく神もなく』とか云ふ悲觀的方面がある。前者が描寫上常識に停止した希望であると同時に、後者は兎角感傷的程度を出ない。これは二十代の一般青年の境地ではないか? 『紅塵』が作者の物として比較的に賣れたのもこの原因であらう——無論最初の集と云ふのも與つて力があつただらうが。

それでは、然し、餘りあり難いことではなかつた。常識的、感傷的は兎角小主觀に落ち易い。二階

からの傍觀者と云ひ、小野老人の相手と云ひ、批評家と云ひ、竹さんと云ひ、すべて作者が一定の立ち場らしい。たゞ控へ目に書く爲めに相當な記者が下つて校正掛りとなり、自己の思ふやうな活動が出來なかつたのが病氣の爲めに半歲の旅行をしたとなり、又、妻のないのが父母のないことになつてゐるのだ。ほんの、これだけのことが渠をして多少の皮肉を云ふ餘地を得しめたのであらう。

渠はその當時まで、無論、獨身者として、世間並みに不平の地位にあつた。讀賣の日曜附錄を擔任してゐても、人の爲めに緣の下の力持ちであつた。そして渠の友人のうちには、兎も角も、相當の名を出し、相當の家庭を有するものがあつた。渠の如き心の弱い人物はその獨身と不平とがひがみとなり、そのひがみが、また、多少でも社會に物を云ふと、どうしても皮肉に落ちざるを得ない。そして渠がとう〳〵猛然として短篇小說家として打つて出るまでには、渠の持病とも云つてよかつた胃病の惰力にうち勝つ苦心もあつた。

渠のむツつりした顏付きも、煮え切れない態度も皆此病氣のせいであつた。渠は僕等と遊びに行つても、殆ど酒は飮まないで、菓子を喰つた。その獨身時代には、机の引き出しにはいつも何かの菓子袋を入れてあつた。からだに惡いと知りつゝもそれをやつてるのは、同じ病氣の久さんが『飯がまづいと情けなくなるよ』と云ひながらも、矢ツ張り、寄席や良藥よりも、羊羹を撰ぶやうな物だ。そして氣六かしくなつて、まづい物に向ふと不愉快になる久さんが、『膳に向つて溜め息をつき、これぢや生きてゝもつまらないと、浮世がつく〴〵厭になる』氣持ちは、乃ち、作者自身の厭世觀であつた。

世人が白鳥氏の特色を皮肉のやうに思つた時期もあるが、皮肉は渠の人物には臨時的で、渠の創作には部分的で、而も邪魔になつてゐたのだ。批評家の批評的態度若しくは標準が如何にも低い。作者の素養全體がまだ不足であつたのに由るが、あれは世間を批評してゐる人物ではなく卑怯の爲めにお若に對する戀にも大事を取り過ぎたのである。作者の觀察もその程度しか達してゐない。その證據には、『耳の後ろに大きな痣があるのが目について、急に厭氣がさした』と云ふやうな、用ゐ方によつては非常に印象を深める材料を、たゞ『麻布にゐた時も、ね、宿の評判娘に口說かれて』云々の短い例として出したばかりだ。久さんに何だか底が見えてゐるやうなのは、さう云ふ程度の皮肉を出したがつてゐるからである。

寧ろ皮肉と同じく胃病から來た『どうでもいゝ』主義の厭世觀の方が白鳥氏には根本的に發展するわけであつたのだらう、無論、その胃病の結果としての短所も含めてからのことだ。小野老人の相手の『私などは酒がそんなにまづいつていふ譯ぢやないんだが、獨り身で、外にたのしみもないから、仕方なしに呑むんです』。久さんの『樂にしてゝ資本を拵へる法は有ますまいか?』殊に安心中に、牧師の病中に於ける亂らならうは言を聽いて、『私一人地獄へ行くのではない』と言ふ人まかせの慰藉に安んずること。こんな消極的方面が、皮肉を伴つて、後日の作物に段々あらはれて行つたやうだが、この集では、その主義も皮肉も觀察の淺い爲めに甚だ表面的で終つた。

三

そんなら、第二集の『何處へ』でどう云ふ風になつてゐるかに調査を移して見よう。空想家に於ても『槇田君ぢやないか――葛原君ですか、久しぶりだねえ』など云ふやうな空疎な會話がまゝ這入つてゐるところへ持つて來て、この兩人並に細野の性格が成心を以つて書き分けられてゐると思はれる缺點がある。たゞ葛原をして、お多津に關して、『女に向つて趣味の高下を論ずるなんか野暮の極だ、レデーでもエンジエルでもお薩を喜んで召上るんだもの』など云ふ、一方面の警句が僅かにいのちである。六號記事では、『廣い海に蒼い波が動いてるのを見ると、自分もその中へ吸ひ込まれさうで』と『よく腑に落ちるやうに知らせてやつて、あれ(子息)が私の事を夢にでも見るやうにさせたいんです』とが、斷片的思想として二ケ所に突出しただけであつて――釣好きの木板屋の、老病にかゝつた父その物の心持ちには、作者の立ち入り方が鋭敏でないと云ふよりも、寧ろ常識に過ぎた。

玉突屋で思ひ出すのは、白鳥氏が僕とよく玉突をやつた時の態度だ。渠の控へ目な而も興味中心の氣分は殆ど全くと云つてもいゝほどに、僕とでなければ玉を突かせなかつた。下手な突方を以つて他の人と點數を爭ふ氣が、寧ろ勇氣が出なかつたのだらう。僕もそれを知つて多少の手加減をしてゐた。が、そんな氣分で渠が觀察した結果がこの短篇になつたのである。玉突のことに關する用語には、いろんな間違ひがあるが、作者が純粹な傍觀的態度を取つた描寫は恐らくこれが初めだらう、傍觀が既に皮肉に傾いてるのは渠の持ち前であつたとして。否、あれは皮肉と云ふべきものではない。あゝ云ふボーイを純粹に傍觀すれば、材料その物に皮肉が伴つてるのであつて、それを發見したのが白鳥氏

の持ち前から來た効だ。

五月幟は弱い者に同情しての描寫だ。これが渠をしてやうやく一部の特色を發揮せしめた。吉松が強いものらが死んでくれゝばいゝと思ふこと。蟹を捕へて、ふとそれを上手に寫生して見たが、直ぐその紙で鼻をかんでしまふこと。おのれの筆になつた五月幟がいくつも〳〵村中にひるがへつてるのを見て、寂しい心も景氣づくこと。こんなことがまとまつて、村の素人畫師の、弱いまゝに戀を知つた人物が可なりよく浮んでゐる。そして、花袋氏などには看過せられ易い或物が前著中の安心や舊友のよりも明かに、僕等の胸に響いて來る。或物とは弱いものにも弱いまゝに魂があることで、これが人生には限りない範圍の福音を傳へる。

何處へは集中の最長篇だが、文句に調子が附いたばかりでなく、主人公の健次その人がまた調子附き過ぎてゐる。『毒だつていゝ、さ、僕は阿片を吸つて見たくてならん。』『こんな下らない人間(健次自身)を手頼りにしてゐる家族の寢息が忍びやかに聞えると、急に憐れに心細く、果ては萎れてしまう。』『主義に醉えず、酒に醉えず、女に醉えず』云々。こんな中に渠のどうでもいゝ主義を出さうとしてゐるもがきは見えるが、まだ醇化して來ない。たゞ露骨な部分的文句に二三度出たり、箕浦をして『君は故意に不眞面目なことを云ふ』と云はせたりしただけだ。作者の面影としては、健次は少し強過ぎよう。必らずしも作者の乘り移りでなくても、小説の主人公はそれでいゝのが當然だが、それにしては又がたツぴしゝて、後日の渠の作物に見えるやうな統一した敏感が見られない。肝心な健次

がそれだから、その相手たる織田に對する作者の皮肉的觀察も亦上辷がしてゐる。

世間並に至つては、前作に次いでの長篇だが、特色のない範圍内での皮肉がりが餘りに露骨に出た。且、第一集から發展して來るだらうと思はれた重要な主義が、一種の感傷主義の型に這入つたやうだ。この集では、玉突屋と五月幟とが先づいゝ方である。作者が外面的周圍をよく取りまとめて行く手際は隨分巧みになつたが、それでも、なほ平凡と表面的なのを免れない。どうも作者と描寫との間にまだ入らない餘裕がある。これがまだ〳〵渠の獨特を十分に現はせない所以であつたらう。それに、渠は硯友社時代の說明文句を平氣で澤山使つてゐる。たとへば、何處へに於て『その聲は他を嘲つた自尊心から出たのであらうが、絕望の調も交つてゐる』とは、ほんの、作者自身の不精な註解ではないか？　こんな大事なことをなぜ描寫の中へ入れてしまはないのか？

こゝにも、僕は渠が胃病家であつたことを注意したい。胃病家は根氣が弱い。と同時に、一方に悲觀を、他方に皮肉を、呼び起し易い。もツと這入り込みたいもがきはあつても、この病氣の爲めに妨げられることが多い。渠の感傷主義が女にぞツこん參つてしまはせないやうな行き方で表面では破れたやうだが、それは最も普通一般的なのが破れただけで、その根の弱い悲觀や皮肉には、また別な感傷主義がつきまとつた。

四

次ぎの短篇集は『白鳥集』(この前に長篇の『二家族』があるから、第四著)である。そのうち、强者は

さう自稱した男の單純な事件を手紙と日記とにうまくまとめたと云ふだけのことで、强者と自稱する弱者を描寫した意味も、氣分も存じてゐない。新藥師寺はほんの紀行文であつて、花袋氏の紀行文と違ふ點はその感傷が『また別な』種類たるだけのこと。頻りに疲勞々々と佛蘭西表象派の常套語は使つてるが、附け景氣のやうな物で、槪念的にしか出てゐない。涎は塚野を皮肉に描寫しようとしてお話に終つてるし、未見の人は常識的判斷を破つて見ようとして、破れなかつた作で、最後の『犬の眞似をしたと云ふ武部が道化た男とも、意氣地のないつまらぬ男とも思はれず、何となくえらい、場合によつてどんな事でもしかねぬ男の樣に思はれてならぬ』を云ひたかつたに過ぎない。『道化』を『えらい』こと〻別な物に思つたのが旣に淺薄な觀察若しくは一般的な材料だ。道化その物が、表象家ラフオルグに於ける如く、そのま〻えらいことになつたやうな場合にも持つて行けば行けるのだ。この三四篇の如きは、白鳥氏の作としては、殆どレベル以下であらう。

然しそれと同時に注意すべき作もある、命の綱に於ける宗谷は、作者の『どうでも』主義が最も露骨に而も具體的に顯はれた最初であらう。宗谷が會社をなまけて寢てゐるので、母親が手を合はせて出社を賴むと『毛布から頭を出して吹き出し、拜んだ丈では駄目だよ、お賽錢も投げて吳れにや、お神酒も供へて吳れるとい〻、ね。』父は『しまひにや刀を出して斬ると怒鳴るから、僕も神妙に手を合せて念佛を唱へて、さア斬つて下さいと首を突き出すと、母が泣くやら妹が留るやら、そりや滑稽だつたよ。』生眞面目な藤村氏や花袋氏にはとてもこ〻まで行けなからう。もう、皮肉などは通り越して、讀

者にも手に終へないほどの根底若しくば强みがある。けれども『世の中はかの老父母の思つてるやうに、宗谷一家と荒木との爲めに造られてゐるのではなし』とは、如何に荒木の考へる事に持つて行つたところで、入らない說明ではないか？　そしてから云ふ說明がある爲めに、却つて作者も無努力に加擔してゐることが、（思想的と云ふよりも、）槪念的に現はれた。無努力の人から見れば、努力の生に對してどんな皮肉でも云へる。が、その皮肉は殆ど全く無意味だ。この點に關する作者の思想は、餘りに區別的で、決して自覺したものとは云へない。

明日は、白鳥氏として、別あつらひのやうな材料を提供した。これが發表せられて間もなく、或雜誌からわが國の小說や芝居中で印象を止めた女を質問しに來たので、僕はお慶をその一人に數へたのをおぼえてゐるが、今讀み直して見ると、その殘つた印象は材料にあつて描寫その物にではない。酒に中毒した老腰辨を亭主にして、あくせくと日々の臺所仕事にばかり一生を暮してゐた女が、『武士の娘だ』と云ふ自信から內職の觀世緡りを『人の足音がする度に我知らず……膝の下に匿すやうに』なり。おのれの娘が電話局で少し持てるのを『世界がお淸を中心にして運轉してるやうに感ぜられ。』その見合の爲めに芝居を案內せられて歸つた夜から、『幾年來の慣例を破つて……却つて神經に異狀を呈し』初め。娘の嫁入り後やけばんで私かに『酒を飮むやうになり。』つひに姑の小紋羽織を盜み出して質入れするに至るまで、作者の撰んだ材料若しくは計劃としては、如何にも深さうで面白いのだが、それが只順序を敍してゐるのであつて、多くは槪念的云ひ切りで終つてしまつてゐる。かの女がお淸

の媒介者で尋常の俗物らしい稲村に酒を呑ませて、亭主の醉ひ倒れた後で、不平を云ふときの心持ちや、娘の姙娠を知つてくすぶつた夫婦も『久振りで睦じく將來の話』をするところなど、もツと〳〵内部的描寫に進むべきだ。

白鳥氏が名を出すまでは、わが國に眞に特色ある短篇作家と云へるものがなかつたと云つてもい い。一般には、短篇でも舊來の長篇を書くと等しく首尾がきツぱり付いてゐなければならない樣に思はれてゐた。ところが、渠は首尾ある一事件の斷片をもぎ取り、それだけにいのちを與へようとした書きぶりが、短篇作家としては、大體に、新らしくよかつた爲め、一時に渠にばかりこの方の注意が注がれた。けれども、その短篇が若し外部に延びる傾向を澤山持つてゐるとすれば、そのねらひどころが如何によかつても、描寫としてはまだ新らしい方に數へ入れることが出來ない。この明日がその缺點の適例である。無意味に調子づいた文句は少くなつたとしても、同時に會話上の描寫も驚く程少く、殆ど全體に渡つて說明の云ひ切に賴つた。形の上から痛言すれば、ト書きにばかり賴つた下手な脚本の樣な惡弊を帶びてゐる。最初から渠の作風には近代的叙情脈よりも叙事脈が勝つてゐたが、この篇の如きは、形式上、殆ど全く舊來の叙事詩で終つた。

地獄も亦、明日と同樣、地の文句が說明に落ちてるが、知らず識らず、そのまゝでも描寫——この場合、說明的描寫だ——になつてるところも少くはない。女小使と米松とは表面的觀察に過ぎないが、乙吉は、その氣違ひになつて行く順序がお慶の段々燒けになるのと同じ順序を適用してあるにして

も、作者が初めて自己の主觀を——大主觀、小主觀の區別などはさし置いて——作その物に一致せしめた趣きがある。氣違ひは作者としてたゞ胃病からのイリュジョンであらうが、その幻影が作中に融和してゐるのが取り柄だ。花袋氏なら、融和工合の如何に拘はらず、その淺薄な平面的物質論的描寫觀を以つて、乙吉を氣違ひにまでさせなくつてもいゝ。それ丈が實際事實以上のおまけだらう。などと云ふに決つてるが、それは肉靈合致の意味から來る物の精神化、幻影化を知らないからの獨斷だ。

若し白鳥氏が、第四著までに於て、既に鋭感な特長を發揮してゐたとすれば、この幻影化に於てゞある。この點に於ては、渠の足もとへも寄り付き得られるものは、德田秋聲氏が特色を出して渠を乘り越す勢ひを示すまで、一人もなかつた。程度では、勿論、まだ低い物であつて、僕等の云ふ平凡中の非凡的事實を十分に握つてゐるに至らないが、これは渠の素質の足りないところから來てゐるので、仕方がなかつたらう。渠は自然主議論の盛んになつた時期に於ても、その初步的なのと進んだ肉靈合致との間に迷つて、自然主義者であるやうな、ないやうな、極曖昧な態度を取つた。云ひ換へれば、『どうでもいゝ』主義を不鮮明な旗幟の元にも取つた。が、地獄や悪緣を書いた時には、内心では、隨分考へ込んだのである。そしておのれの名聲も段々あがつて來たのに張り合が出來ると共に、わざとらしい皮肉を浚して、その胃病的神經が、感傷的にせよ、尖つて行く傾向になつた。描寫の上で、胃病に壓迫せられた神經の尖りが自然主義の內部に向つたのである。

悪緣に於ては、それが一層著じるしい。そして作と作者とがぴツたり合し初めて來た。作者が一定

の女を取り扱ひ出したのも、その作風の一轉化を知るには忘れられないことだ。その頃、渠の作は規模が狹少で、材料範圍が廣くないと云ふ定評が聽かれた。狹い觀察で、下宿屋住ひの周圍しか書けないと。これは一面の事實であつたには相違ないが、わざ〳〵實際には知らない範圍のことを無やみな想像ででツち上げてゐた舊派に比べては、知つてることを忠實に書く方が自然主義の人生に對する一條件に叶ふので、新派の誰れでもがこの方を取つたのである。それから狹くても深い方が廣くて淺いのよりも眞の事實、乃ち、具體化された根本思想には能觸れる事が出來る。此點では、同じ新派でも、白鳥氏は藤村、花袋一派の諸氏に比べて大體に於て一歩を進めてゐた。

それが果して皮肉であつたからだとすれば、他のフラウベルやゴンクルを讀み違へて、結局ゾラの物的說明若しくは描寫に落ちた人々に毛の生えた位で終つただらう。が、前にも云つた通り、渠の皮肉は一時の處世的不平の現象で、たとへそれが渠の作風の一異彩であつたとしても、他の諸作家の物的無內容を乘り越えようとした一時の手段であつたらしい。この手段が目に立つほどいやなマナリズムになつて、『どうでも』主義と共に、惡縁で代表せられる如き『所在なさ』、『不甲斐なさ』、『物足らぬ思』『不快な念』、『いや氣』、『胃病』、『どうでもいゝ』などの連發をしてゐるうちに、何事にも倦み易い渠は、創作上、ふと、新らしい刺戟物に出會した。これが、乃ち、作風から云へば、比較的に敏感な深入りで、材料から云へば、『土州橋』にちなみあるやうな女である。たゞさへ概念的傾向があつたところへ持つて來て、渠の取り扱ふ女どもはすべて一番概念的、架空的で、拙かつた。そしてそのうちで

先づ活躍してゐると云はれるのは、『疊の上に腹匍ひになつて手紙を書いてゐた』守屋と云ふ男の樣な女だ。渠等は大抵狹い型を追ふことが出來る。幕間のお新が舊友のお仙となり、何處への博士夫人が惡緣の杉田夫人となつた。お新はまだ無邪氣な方だが、段々家庭の主婦たる年月が古くなるだけ、その寂寥を他の何物かに求めようとしてゐる。最後の二人に對しては、同じやうな男に同じやうな場合まであつて、而も健次または訓一の『酒臭い息は細君の顏を』(文句まで同じで)無遠慮に撫でたり、正面に打つたりさせてある。それを女がいやがらなかつたあの刹那を、身分を落して無學にすれば、そツくりお慶の燒け酒である。そして引ツ張るものさへあらば、なびきもしさうだ。

作者の婦人觀がさう云ふ方へとがつて行つたものであらうが、さうでないとすれば、さうありたいと思つてたものだらう。かう云ふ婦人等のかたはらに、また、油斷のない男子どもの系統がある。二階の窓の自分、安心の吉川、何處への健次、惡緣の訓一。この順序に從つて、作者の皮肉は段々沒して行つて、『どうでも』主義の孤獨が銳敏に人生とまじり合つて來る。渠等を乙吉にしたのは作者の奮發した。そして玉突のボーイや久さんや宗谷にしたのはその反對の無奮發な傍觀描寫たるに過ぎない。渠等はすべて、訓一がその中心的代表だが、廣い意味の愛、若しくは狹い意味の肉情か肉情の思ひ出かゞなければ、一時も生きてゐられない人間だ。その癖、女に『會ふ每に懷しげのなくなる』し、『けふに限つて、枕の汚れ目の小氣味惡く』あれども、離れてゐれば、『電車に乘つても、道を步いても、女の姿が見さかひもなく目につく。』

これは訓一に關する作者の說明だが、から云ふ人物の系統はすべて女をあまく見過ぎてゐる。さきに擧げた婦人の列が所天以外のものに靡き落ちさうになつてゐるのも、實は、それが爲めである。女は必らずしもさうしたものばかりではない。が、なか〳〵落ちなかつたと云ふ方面などがどの篇にもなかつたと云ふやうな問題が出た時こそ、初めて、作者の見聞若しくは材料の範圍が偏狹だと立派に云へる。が、そんな問題は是迄に誰れも出さなかつた。今きツと一度は落ちる女と云へば、獨り者の社會へ行かなければならない。この方の系統を採つて見ると、空想家のお多津と世間並のお樂との落ちるに決つてたのを初めとして、世間並のお靜、惡緣のおとよだ。殊に、最後の二名が大分面白くなつて來たのだが、お靜ではまだ內面描寫の見合をちよツとした位のことだ。おとよに至つて、作者の銳い目が多少暗黑世界の中に開かれたと云へよう。かの女はまだ渠が後になつて取り扱ふ女まで內面化せられてゐないが、かの女で渠のぐらついてゐた作風のキイノト(基音)が決つたのだ。訓一に半ばおもちやに、半ば耽愛せられながらも、守屋の周旋で判事の世話になつてるのが分つても、平氣で『あの人は私が困つてるから可愛想だつて、身の定るまでお金を貸してやると云つてるだけだ、わ、と、空呆けてゐる。』

訓一が『少し(は入らない副詞だらう)口元を震はせて吃る樣に』云つた通り、『そんな馬鹿なことがあるものか!』この女に至つて、もう、全く賤業婦と大した違ひはなくなつた。が、賤業婦じみた女を捕へることになつて、かの訓一の系統中の男はやうやくその周圍との融和が出來るやうになつた。

從つて、作者の描寫も物の內面に兩足を踏み込んだ。そして近代文藝に通有ないらくした而も憂欝な氣分を落ちついた筆で書き出すやうになつた。つまり、白鳥氏胃病的思想もしくは人生觀が——まだ淺いにせよ、狹いにせよ——適當な材料を得て、具體化することをおぼえたのである。この時期には、渠の世間的ひねくれ性はいゝ名聲の爲めに大分ゆるんでゐたが、胃病はなほ渠の持病であつた。それから出た憂欝の心持ちが却つて渠には根本的な便利になつて、その神經をさう云ふ材料の方にとがらせて行つたのである。

惡緣を見ると、材料が氣に入つたからであらうが、それまでの他の諸篇に比して作者を開放してある。そして訓一をして『早く歸るつもりで……いざとなると、この部屋に未練氣が起つて、直ぐには立ち去れない。』『思ひ亂れて、その晩は机に凭れて、目を瞑り、浮かぬ色をして、一夜を泣き明かさんばかりであつた。』などゝ、說明的にだが、云はせた。地の文句も十分に具體化せられると、描寫の一部になるのだが、さうでないと。折角の內面的傾向をたゞ云ひ切りに終らせてしまふ。そしてそこに渠の作風に於ける感傷主義が、矢張り、あたまをもたげて來て面白くない。

五

白鳥氏の第三者と第五著『落日』とは各々一個の長篇小說である。が、渠の長篇は後で一まとめにして檢閱して見ることにしよう。

僕等は、今、渠の『微光』とその第六著『白鳥小品』とを一緒にして調べて見たい。この兩集に收めた

短篇中には、渠の早い時期に屬するものもあると同時に、いゝと思はれるのは大方惡緣の女の性質もしくは氣分を發達させて行つたものである。この兩著に含まれてゐる物までの諸短篇を通じて、微光は恐らく最良の出來榮えであらう。作者が難みに難み、考へに考へ拔いてゐたところの物が、作者として、遺憾なく發表せられた觀がある。恐らく、この後の作を調べても、これだけの物はあるまい。女に對して、『お薩』の皮肉などを書いて滿足してゐた時代とは雲泥の差がある。

微光には、男の描寫は作者としてもう月並みだし、前後に出る河津と朝川とは何等の相違もないし、事件としては二部に分れるのが當前のやうだしするが、說明的な云ひ切りが殆ど全く跡を絕つて、お國と云ふ女が他の作とは全く違つて內面描寫をされてゐる。作中のどの部分を切り取つても、かの女のいのちが活躍してほとばしりさうだ。無論、おとよの系統を繼いでる女で、或は、これが最もまとまつた代表者かも知れない。事件として二部に分れるべきとは、河津に關係する部分と朝川に關係する部分とである。この兩部は必ずしも一緒にする必要はなかつた。まして作者はこの女を口入宿、波の音、お芝居、名殘、一夜等に於ても切り賣りしてゐるに於いてをやだ。

然し、河津と共に汽車の旅をする時、『私も呑みたいと甘えるやうに云つて、口呑みにした』サイダの罎を『幾度が振つたが、お國は氣遲れがして、窓から投げ棄て得なかつた』態度は、乃ち、かの女がいろんな男に接したそれである。『よく泣きたがる人だ、ね、剛情ッ張りの癖に、』『そして哀れッぽい話を要求して、たまには折に臨んで、』『珠數を爪繰つて看經をしてゐた母の姿を懷かし』み、『いつ

そ尼さんにでもなれんものか知ら』とも空想する。『誰れも忘れられたくない。どの男にも惡く思はれたくない』と云ふ優しい然しうち委せた野心もしくは情愛から、勝太のやうな子供にまで『さう、一緒に死んで呉れて』と嬉しがらせや嬉しがりを云ふ。そして、そんな子供と、『人間は情けないもの、ね』と云ふやうな、ゐても立つても溜らないやるせない心持ちで、『ろくに話もしないで、二人は日暮頃までそこにごろ〱してゐた。』

かう云ふ方面を見ると、朝川に對して『どうせこの人とも今日限りの緣だと自棄に思ひ詰めた』のは不自然のやうだが、『私、ちよツとしたことで直ぐ世の中に生きてられんやうな氣になつてしまうの』と云ふ白狀を聽けば、尤もだと思はれて來る。と同時に、『私、これで秘密の多い女ですから、ね。』『戀した時には、早く二人で思ひ切つて心中でもした方がいゝと思つてよ。』『世話致すとか、氣の毒に思ふとか云ふ言葉(朝川の手紙の)は、お國の胸を躍らすだけの力がない。』『いつそ身を賣つちまはうか知ら。私は操を立てる男がこの世界に一人だつてあるんぢやなし、好きでもない男一人に喰付いてるのも、もう懲々したし。』など、あるのも女の內面がよく伺はれる。

そして口入宿らしいよしやのかみさんが、『この人は好きな男さへ側にゐれば、外の事にや頓着しないんだから』とか、『お前さんは直ぐにやけを起すからよくない』とか云ふのも、實際に女のおもかげを躍り出さしめるではないか？　で、朝川が『おもちやにされたと思はないで、おもちやにしたと思へばいゝ』と云ふに答へて、『そんな輕薄なこと、私、思つてもいやだ、わ』が、一種の新らしい女の

やうに、『昔の芝居はどれも時代おくれのやうで、見たいとは思はなかつた』と云ひながらも、實錄千代萩の政岡飯焚きの場を三日つゞけて泣きに行つたのも、外面からの描寫とは思へない。この女が飲めもしない酒に醉つて、『あなた、私を棄てない』と目を据ゑたり、『おかみさん、察して下さい。あなただつて苦勞してるんでせうと云ひながら、神さんの方へにぢり寄つて、その足にからまつた』りしたのだ。それが『あなた限りもう外の男には會ひたくない』と云ふ目當ての朝川が、現に、『歸りかけては腰を下して……鳥でも燒いて食べるにいゝ時候になつた、ね』と云ふ言葉の足もとから・『白粉や臙脂をつけ』てよしやからの再びの呼び出しに、妾か何かの口をきめに行くそのかき亂れた心持ちは、何とも云へないほど具體化の効果が現はれてゐる。作者の『どうでも』主義が、こんな材料を得て實際に敏感的に生きたと云はなければならない。

地獄での說明的描寫は、こゝでは描寫的說明の跡をも沒して、殆ど完全な描寫的描寫に進んでゐるのではないかと思はれる。また、惡緣では、女の描寫がまだ輪廓で安んじる傾向があつたにも拘はらず、ここでは內容と外的說明とを混同する手合などゝは違ひ、內部の心持ちが却つて輪廓と見えるほど明確に出てゐる。こゝで初めて物の內容とか、精神とか、幻影とか、肉靈合致とか云ふことが、物心の區別を撤した眞の現實たる根底を有するに至るのではないか？　そして作者が抱いてる人生觀が、このお國に、表象となつて實現せられようとしたのではないか？　然しその表象的實現が最上の程度に進んでゐるか、どうかは、この場合、まだ受け合はれないのである。

呪は相變はらず鈍い叙事脈のもので・取り柄と云へば、周圍の外的事物が、そのまゝにだか、うまく收容せられてゐるだけのことだ。『取りとめのない考へに累はされながら』の藤吉の頭上には、『高く輪を描いて飛んでゐる鳶の黑い姿が、空に一際鮮かに見えた』とか。男を濱まで見送つたお品が・『櫓の音の聞えなくなるまで、闇の中を見つめながら立つてゐる』と、『海のあなたに黑いかたまりとなつて横つてゐる自分の村を、さながら千里も隔てゝゐるやうに感じた』とか。風景と人物とが南畫的にはよく調和せられてゐる。が、いくつも出る人物について考へて見ると、すべて、たゞ風景の一部であつて、山もあります、川もあります、人もゐますとそれを見せただけで、外面的傾向は免れてゐない。それに、『氣の利かない』老母と『薄ぼんやり』の妹とは、作として同じやうな田舍的材料を使つた五月織の神寄せ老母と馬鹿の初野とに、既に最初の型がある。又およしは後の『泥人形』の女に化してるやうだ。

徒勞もさう大した物ではない。壯吉の母のわさ〳〵した樣子は、氣違ひの言葉を眞に受けて、『どんな人だい、それは。女かい男かい』など云ふに、少しは出てゐるやうだが、弟や妹はただ渠の氣が違つてるのを示す出しに使はれた。そして壯吉その人を描寫しようとしたところは、甚だ空疎で――渠の父が渠を産み育てたのを徒勞と思ふやうな心持ちは、作その物に對する讀者にもある。『黑い海松のパイプを差出して、これは田舍の宣教師に貰つたんだが、僕にや無用だから君に進呈しよう……そこに置いてある書物も……どれでも持つて行きたまへ。』『私は僅かな金ぐらゐ念頭にありません。大事

業がそろ〳〵始まりさうなんだから。』こんな事を云つて、新聞配達を大目的の初まりと見ただけで使はれてゐた壯吉が、少しも統一せられてない。

無論、狂人が統一した思想を持つてるわけがないが、そんな者に多くの意味を持たせようとした作者の當て込みは、ストリンドベルヒの『父』に於ける如く、淺薄であつたと云はなければならない。同じ狂人描寫でも、それから見ると、地獄の乙吉の方がずツと現實に觸れてゐる。作としても、徒勞はその標準若しくは中心があちらこちらに移つて行つて、それが爲めに雜駁になり、全體が何となくがたツぴししてゐる。父母が壯吉を產み育てた思ひ出や後悔もよく出てゐないので、徒勞と感ずるそのことも、ほんの、うはツ面に終つた。

六

『白鳥小品』に移つて、口入宿は大した印象も與へず、草乳香や危險人物は例の皮肉がりの癖が出てゐるのみだ。涙では、『深く考へ込めば込むほど僕は涙や血に緣が遠くなる』と云つて、作者の内心强がつた而も弱々しい皮肉や『どうでも』主義を眞の冷酷性から來てゐるやうに是認したが、それぢやアどうして一種の感傷主義が凖の作若しくは思想に伴つてるのかと反問したくなる。浴醫の家はこの集中の長篇だが、材料がよく使へばよかつたのにと思はせるだけだ。浴醫その他は壯吉よりも實際に一層出鱈目だ。お德はその夫人として壯吉の母のやうにわさ〳〵してはゐないが、その型は何處への博士夫人などに屬してゐる。ちよツと注意を引くのは、その子伊之吉が父のどうせ死ぬべきを見、母の

經濟的におのれの身内ばかりに偏頗で呑氣なのを悟り、『父の家が……半年でも一年でも母の手で自由にされるのが、不快に感ぜられた』ことだ。人が死にかけると、俄かに各々が利己性のあたまをもち上げさせるのは、普通の人情である。

この集で一脈の絲を引き合つてるのは、つぎの四短篇である。その女主人公はいづれも微光のお國へ渡りがつく者である。然し波の音は女の墮落して行く一端を書いた物で、『私、これから思ひ切つて男といふ者を欺して意地めてやらうと思つてよ』といふやうな心から、人にだまされて、兼て『高い波』を見たいと思つた銚子へ行つたが、酌婦を要する家ではなくツて、女郎屋であつた。一緒に行つた女の方は前以つて心得てゐたのだが、さうはうち明けてなかつた。この邊の工合は作者がもツと詳しく描寫すべきであつた。そして一體にまだ渠の初期の筆法が殘つてゐる。材料を得たのに安心した體だ。一夜も、別れた男女の燒けツぼ杭に再び火が付きかけたのを、男は女の血を吐いたのを見て、度々つばきをする氣持ちに變じた。それがどうも輪郭しか出てゐない。そして指輪を質に置くことが、微光に於けると等しく、こゝにも出てゐる。

お芝居のお鶴は意地づくになつて、『馬鹿にしてもしなくても、死にさへしたらいゝんだらう』とまで云ひながら、仲裁人等をはづして貞一に會つた時は、『だつて、迂濶に會つちや、お前さんにどんな目に會はされるかも知れんと思つた』と白狀した。かういふことがこの篇の内面描寫として互ひに照應してゐるだけだ。名殘は微光のと同じく天理教信者の二階だが、お房は『あなたは好きな人と結婚

して世帶が持てるんだから……私、處女になりたいと……吃逆泣きをした』が、慧星が見えるとなつて、『今まで泣いてゐた樣子など更に見えない』で、『見に入らツしやいと笑顏で蓮葉な素振をして迎へた。』この泣きと笑顏とがどこまで一致してゐるかに就いては、作者は微光にあづけてありますと云つた風に通り過ぎ、平氣で渠の感傷主義を見せた。

お國にせよ、お房にせよ、お鶴にせよ、一夜の女にせよ、すべて、男に『今一度會つて呉れ』と云つてやつたり男の爲めに指輪を質に入れて呉れたりする女だ。作者の感傷主義には注文通りではないか？否、渠の理想らしく見えるではないか？　そしてそれに對する男はと云ふと、朝川にせよ、貞吉にせよ、貞一にせよ、一夜の男にせよ、女をばかりあまく見て、名殘に於ける如く、『ふところ手で戶外を見た』り、『まづい飯もこれで食ひじまひだ、ね』と云つて見たりする男だ。飯は『どこへ行つたつておれの口にやまづい』にしろ、まづいのは胃病の爲めで、感傷主義から見れば、うまく出來た取り合はせではないか？　まだ淺薄だよなど云ふのは、評論としても、もう、入らない說明だ。

かう論じて來ると、白鳥氏の婦人觀を初めて偏狹だと確言する權利があらう。同時に渠の男子觀もあまいものである。男女ともあはれで、脆く、單純だけの單純で、表面の憎々しいのにも實は毒と云ふ毒がない。胃ぶくろから出た血が、その場で、また胃ぶくろに歸りさへすればいゝと云ふのが、渠の人生觀だ。そして渠の弱い者に對する同情は、お國やお鶴のやうな土州橋組に最も多くそそがれた。けれども、渠も亦さう云ふあまいことに對して反省のないことはないのは、貞一に於けると同樣、『ふ

と一抔喰はされたやうな氣』になるので分る。否、この感じを以つて作者は人生を見つゞけようと努めてゐるので、その『どうでも』主義もこゝに歸してゐるのである。

僕は作と作者とが敏感的にひツたり合してゐる部分を賛めて來たが、白鳥氏の敏感は胃病の氣六ケしさと同一レベルにあるのを繰り返して云つて置く。從つて渠の創作と人生觀も、この病氣の樣子と共に標準や程度が昇降してゐる。これ、渠が他の健全で鈍的な一二の新派大家連よりも特色ある空氣を呼吸してゐる所以だ。が、渠の『どうでも』主義に、ニヒリズムの傾向が見えたとは云へるが、多くの評家が云つたやうに直ちにそれが深刻な虛無主義だと云ふのは、渠の病氣を餘りに買ひかぶつたわけになるのである。

七

前回で、白鳥氏の爛熟期――それから退歩するか、轉化するかは後の問題として殘して置くが――に至るまでの諸短篇を通じて、渠の人生觀なり、描寫法なりを觀察したのであるが、これから渠の長篇を調べて見よう。

渠には大體に於て長篇と短篇との區別がない。形式を避けるのが一特長なる新文藝としては、そんな區別を立てる必要は勿論ないのである。が、事件を主とした舊派の小說に於ては、短篇にでも、必らず或事件若しくは筋の上の結末が付いてゐなければならないやうに考へられてゐた。小杉天外氏や後藤宙外氏が自然主義勃興以後に於て、新派に負けてゐないつもりで書いた短篇が、どうしても失敗

に終つたのは、この束縛を脱し切れなかつたのが筆法上での原因であつた。同時に、小栗風葉氏や眞山青果氏が、器用にも、一時、新派の仲間入りすることを得たのは、この束縛を離れる道が分つたからである。

長篇では、わざ〳〵プロト乃ち筋を設けてかからないでも、長く書いて行くうちにはおのづからそれが成立するものだ。この意味での筋なら、短篇にあつても舊臭いとは云へない。たとへば、白鳥氏の最も傑出した短篇『微光』にも存じてゐる。たゞそれが舊派のと違ふのは、その筋が外形的成立でない點、成心で以つて豫定してかかつたものでない點にある。作の興味若しくは主點が淺薄な筋――筋は、如何に深く這入つても、概念しか表示しないから淺薄だ――にないとすれば、何にあるだらう？花袋氏などは作者の確實に握る事實にあると信じた。が、同氏の事實と云ふのは、區別的物質論の範圍で云ふのだから、在來の唯物觀上の事實しか握らない。

たとへば、僕の『ぼんち』に見給へ。あの大阪青年が電車の柱にあたまをぶツつけたので、初めて接しようとする女に執着しながらも、腦味噌で出てゐるのだと想像するのは、單に想像であつて、事實は果してさうだとは作者も書いてないが、あの青年には非常に大きな事實上の幻影である。然し精神の作用を區別してしまつた唯物的描寫論から見れば、乃ち、花袋氏の考へから見れば、あの幻影その物も事實でなく、不自然若しくは事實の誇張と見えよう。同氏があの作に就いて、あんなにまで誇張しなくツてもよからうにと批評したさうだが、氏の誇張と云ふには、僕があの青年をあの結果で死ん

だとしてあると思つた氏の速斷ばかりでなく、氏が物的、乃ち、表面的事實ばかりに拘泥した見解――筋その物と等しく淺薄だ――が、おもに、つきまとつてゐるのだ。

で、筋でもなく、また物的事實でもないとすれば、何がある？　既に讀者も推察出來る通り、人間の幻影も大なる內面化の事實だと云ふ上に立つた自然主義的氣分である。白鳥氏は、談話や議論の上に於ては、この正見に確信がなかつた。そしてこの確信がなかつただけ、まだそれだけのはツきりした穴がその創作にも明いてゐた。渠は花袋氏の『事實』と僕の『事實上の幻影』との間に、乃ち、自然主義の二派の間に迷つて、或時『僕は事實ばかりではなく、想像をも盛んに取り入れる』と云ふやうなへまなことを發表したことがある。それでも、舊派のやうな筋まで勝手な想像に走らず、また花袋氏のやうな物的概念の事實觀に固定しないで、神經の燃燒流和に多少でも內面的事實、乃ち、內容を披瀝し得たのは、新自然主義に近い氣分描寫を採用したからである。渠の作中にも、無論、既に指摘した通り、氣分描寫に行つてない下作もしくは駄作が少くはない。が、『微光』並にその方に向つた諸作はすべてこれを持つて許してもよからう。そして渠の短篇がわが文藝界に一時期を劃したのも、この點に由るのである。

ところが、渠の長篇も亦、その最初の物からして、同じ傾向一天張りで行かうとした。これは長篇作者としては、殊に根氣の弱い渠の最初の試みとしては、無類にありがたかつた努力と云はなければならない。新派と云はれる人々のでも、長篇となれば、たとへば、藤村氏の『春』や『家』に於ける如く、

單に隱さうとしただけの筋か、活動寫眞的にざッと現はれる事實の連續かに安んじ易いものだ。それをどこまでも線の見えない氣分で行かうとしたのだから、かのゴルキが一幕物の性質なる『どん底』を五幕に書いた努力に對すると同樣、僕等は餘ほど期待してゐたのだ。が、その『二家族』は失敗に終つた。よく見ても、短篇の『五月幟』か、『呪』かの種類にとゞまつた。

八

氏の初期時代に屬するやうな說明的なところも少いし、また叙事脈に生命を托しようとする弱點もないやうだが、現はれた氣分のとどまりどころが淺い。それも、その當時から出來た或靑年の一派の、氣分劇と稱して、わざとらしい概念のこね上げで氣分が現はれるものだと得意がつたやうなのに比べては、まだましであつたかも知れない。が、兎に角、氣分描寫の長篇小說としては、『二家族』はまだまだ淺薄な物であつたし、且また氣分を現はして行く道に於て中心が二つに分れた。

一方に喜助が中心となつてゐるのに、他方には又猛雄が全篇のまとまりをつけて行くものらしくなつてゐる。『例の義太夫を唸つてゐた』貞一に、

ふと竹緣の前の岸の上にうづくまつて海を眺めてゐる人影が見えた。今時分誰だらうと怪しんで、

「おい、身投げでもするんかい」と、あたり憚らぬ聲で嚇して、側へ寄つて見ると、それは父であつた。

「お父さん、何をしてるんです」と聲をかけると、父は今氣がついたやうに振返つたが、月光を浴びたその顏は、貞一の目にも凄く見えた。

この場だけにでも、一篇を披瀝する內容もしくは氣分を——父なる喜助、若しくは貞一、若しくは作者自身のを——與へれば與へられたのだが、ほんの、單純な傍觀記事として看過し、ただ喜助が穢多村の人に度々失敗した事業費を借りる概念的伏線——こんなことは舊派の喜んですることだ——にしか使つてゐない。

渠は思ふことか一つも成つたためしもないのに、無責任な演說つかひを宿らせて、それに自己の一村に對する經綸を語り、『どうも村の者が一致せんから困ります』と訴たへたり。金の工合が出來さうもないのに、枯草の入札に行つて、村長候補の野心を起して見たり。お六と云ふ乞食同樣な女の爲めに裸まゐりの眞似をして見たり。そして何かの被訴人となつて裁判所へ呼び出された時も、石邊金吉のやうな本家の淸吉をつれて行つて、呑氣にも一緖に岡山の女郎屋でゐつづけした。筋の上の發展から云へば、渠の性格までよく出てゐるやうだが、ただ通り一遍に書かれた淸吉に對しての所現が同じ通り一遍にうなづかれるだけだ。ゐつづけの件などは、もつと內的意味を拋出してゐなければうそだのに、そんな動きは少しも取れてゐない。なぜかと云へば、渠に對して作者が單純に、もつと今の文藝界に接近させて云へば、物的に傍觀的態度を取つたからだ。傍觀的態度にも氣分まで攝取する行き方がある。が、作者がこの喜助に對する場合は、殆ど無意味に外面の事實を並べさへすりやア、多少でも性格が出るからいゝと云ふやうな傍觀である。こんな態度に保證を與へてゐるのは、花袋氏並にその一派ばかりだ。

次ぎに、美文的感想などを書いて見るやうになつた猛雄から見える人生は、多少、物的傍觀よりは進んでゐる。村の老人株も、青年連も、ばくちや女の爲めに穢れて行つて、自分の父ばかりは、然しと思つたのも、喜助に誘はれて岡山で女郎買ひをやつたのを知つて、いよ〳〵村中がいやになる。でも、話し相手が誰れもないところから、今までは段々遠ざかつて行つた貞一が、『僕が働いて金を儲けて、猛さんはその金で學問してえらくなりやええぢやないか』と云つたのを懷かしんだり。自己の父よりも喜助の方が獨りでもがいてゐるだけ面白いと同情して、ませた口で『僕は伯父さんの考へてなさる事にも、幾度えらい所があると思ふだが、なア』と云つたり。そこに、渠の『歸るに家なく、行衛も知らぬ旅をしてゐる者のやうな寂しさ』(これが作者の感傷主義的常套文句だ)も、おのづから浮んで來ないことはない。筋や物的事實としてでなく、感傷的だが、十四五歳の少年の氣分としてである。そして同時に作者自身の氣分も多少添つてゐるが。惜しいことには、まだそれが熟してゐなかつた。

たとへ少年を材料にしても、三十歳、四十歳、若しくは老人の作者たる氣分がそつくり具體化せられてこそ、その作は最もうなづかれるのだ。が、ここでは、白鳥氏の『どうでもいい』主義の厭世的氣分が、『他郷はいつも懷しく、この村はいつも厭はしい』と云ふやうな底の見える場合に應用せられたので、『いつそ激しい雨風で村全體の押し流され、醜い生物の亡ぼされたらばと思つた』と云ふ序曲の感じも、少しも發展しないで、極幼稚な猛夫その人の感じと共に終つてしまつた。ちよツと云つて置

くが、一般に云ふ『說明』でないとしても、『云ひ切り』的傾向のある發想は、新らしい短篇には勿論、長篇にも注意して避くべきである。寂しい感じを現はさうとして『寂しい』と云つてしまへば、もう十分に概念に達したので、それツ切りのことだ。心細さを示めさうとして、『心細い』と云つても同じだ。心細いと云つてその底に寂しさがあり、寂しいと云つてその奧にまた何か抛出するものがなければ、具體化は出來てゐない。そこが實人生の大きな、深い、とがつたいのちで、自然主義的表象主義の意味がある所以だが、白鳥氏も、かう云ふことに十分な理解が足りないから、この篇並に渠の短篇に於て、描寫的に行くつもりで說明に落ちたところが少くはない。かの平面描寫論者などが、材料に於ても、筆法に於ても、云ひ切りばかりをしてゐながら、而も具體化を要求するが如きは、愚かな出來ない相談である。

で、『二家族』は二箇の違つた筆法が混じた上、その描かうとした氣分も云ひ切りになつたから、それを描寫だとしても、描寫的說明だ。そしてその說明は山水畫的にまとまつただけだ。喜助と猛夫とが二方面に突出した岩若しくは山で、他のものは――淸吉でも貞一でも、兩家の細君やその他でも、――この兩物を連續して、平面的若しくは縱斷的畫面を補充する道具に使はれたばかりだ。だから、全篇は殆ど全く、決して立體的、具體的描寫にはなつてゐなかつた。（大正二年）

生と同一な藝術

英語の life と云ふ名詞には、スタンダード字書を見ても、十四個の意味がある。それになほ三個を加へて、十七個にしてあるのもある。そのうちでわが國人が譯して間違ひ易いのは、『生涯』と『人間』その物と『生活』との差別である。ロンリライヴズ（寂しき人々）の lives を生涯と誤譯したものがあるアロングアンドユスフルライフ（長い有用な生涯）の life を生活と譯するのは、一般的には、確かによくない。

けれども、哲學的に若しくは綜合的に云へば、渠即ち渠の生涯で、渠の生涯即ち渠の生活だ。僕等は人生と云ふのもくどいと思ふ時は、單に生と稱するが、この生が即ち創造であるから、生を創造すると云ふことは、創造を創造することなので嚴密に云へば、語を成さない。

それから、藝術が發見であると云ふ說と、いや、創造であると云ふ論との關係を考へて見ると、前者は物質的區別論者間に行なはれ、後者は唯心的傾向の人々に多く懷かれてゐる。ところで、藝術の對象たる生が既に創造である以上は、唯心的傾向の創造論は成立しないし、又、生なる創造はその刹那、刹那に出來るのだから、それを外れては、發見論者の發見をするやうな實質はない筈だ。

そこで僕等は發見、創造などの議論を撤して、藝術は生その物だと云ふ直接論を主張するのである。

一つの創造體がありとしてそれを見てゐる間は、藝術家の態度はまだ生と間接な關係にある。從つて充實した藝術が出來てゐない。生に飛び込んでこそ、乃ち、生と共に同じ創造にたづさはつてこそ、乃ち、生と藝術とが同一になつてこそ藝術家の本來面目があらはれるのである。（大正二年十月）

表象派の所提

英語のシンボリスト、佛蘭西語のサンボリスト、また長谷川天溪氏や僕等が譯して表象派と云ひ馴して來た派の文學運動の影響は、わが國の一般文學界に於ては、もと、詩界ばかりの問題であつたかのやうに思はれて、小說界では、自然主義によつて呼び醒された後になつても、僕が詩界から轉じて小說界に自然主義的表象派なるものを說いたり、實例を創作に示めしたりした以外には、殆ど全く問題になつてゐなかつた。小川未明氏が曾てシンボリストと云つたやうな團體を拵らへて雜誌をも起さうとしたことがあるさうだが、それは、同氏が自然主義を通過する資質がないので、ほんの、何か別派の名目を以て立たうとあせつた、一時の手段に過ぎなかつたと聽いてゐる。

然し今や、表象主義は、もう、詩界ばかりの問題でなくなつた。イブセンやメテルリンクが可なり廣く讀まれ、たまにはその作劇も演じられた今日では、たとへ表面に出ないまでも、旣に劇界の問題にはなつてゐる筈である。小說界に於ても、やがて、深いか淺いかの意味に於て、必らずこの問題が引

き起つて來るに相違ない。僕等が表象主義の長所や短所を盛んに論じた頃は、まだ時代が早過ぎたので、素養の整つてゐなかつた小說界には直ちに影響を與へることがなかつた。專ら筆さきや材料を新らしくしようとばかりあせつてゐた一般小說家等には、まだ、內容に立ち入つて表象主義を參考にしたりするほどの餘裕があるものが殆どなかつたのだらう。

が、この表象主義なるものがわが文學全般の問題になる時も、もはや遠くないであらう。

僕は昨年末に於てアサシモンズの原著『表象派の文學運動』を譯了した。その餘勢を以つて、再び表象主義の批判をして見たくなつた。同主義に對する批判は、既に已に僕の著書や論文で――一時代前にと云へようか――發表してあるのだが、シモンズの著を譯するに當つて、また新らしい感じが出ないでもなかつたからである。と同時に、表象派の正當な批判を繰り返して置くのは、今の讀書社會並に新進作家連の注意に價ひすることがあらうと思ふからである。『白樺』の同人に對して『人生と表現』の同人が答へてゐる文を讀んで見ても、前者は今更らの如くメテルリンクに感服し、メテルリンクを了解するものはわが文界に少なからうなど〻云つてるやうだ。が、メテルリンクはおろかなこと、その先進若しくは刺戟者であつたヹルレンやマラルメまでも、僕等は既に一たび讀んだ上での明確な批判を施した跡であるのである。

表象派の運動は佛蘭西文藝界の一小部分に於て始まつたのであるが、それが何ほどの間も置かないで、世界中と云つていゝほど廣く發展した。シモンズがその著の序文に代へてヱッに献じた文中にも

鳥渡書いてある通り、獨逸、和蘭陀、露西亞、英國等にその大影響が及び、那威の大作劇家イブセンや伊太利の有名な小說家ダヌンチオは勿論、葡萄牙のユジエニオドカストロ、西班牙の老詩人カンパモルまでを動かした。また、米國では、僕が曾て指摘した通り、かの概念的な牧師詩人ヴンダイクまでがこの感化をその詩句の上に現はしてゐる。

英國では、スヰンバンやオスカワイルドの如きは、寧ろ正當な意味の表象派の以前、乃ち、ボドレルなどの惡魔主義から直接に佛人の感化を得たとしても、ヱッ並にシモンズ等のアイルランド文學運動には、表象主義は本質的關係を有してゐた。ヱッは劇に、詩に、評論に、シモンズは詩に、評論にいづれもアイルランド人の特色を帶びた表象主義を發想して、かの舊い通俗なところではまだテニスンの餘勢が殘つてゐる、そして新らしいところではスヰンバンの支配下にある、全英の文學界に頭角を現はしたのである。

左にシモンズの詩『フインヴラの森にて』を擧げて見よう。（これは僕が渠の詩集『イメジスオヴグドアンドイヴル』から譯して、曾て早稻田文學に載せたうちの物である。）

倦みぬ　憂ひと　人の　涙、
生は　夜ゆめぞ、一の　おそれ、
素肌落ちうど　槍の　あらし。

倦みぬ　狂悅、愛の　願ひ、
愛は　火の胸、その火　燃えて
風火げむりに　魂を　啗む。

みどりやは潮　塵を　洗へ、
海と　海間　の　妖の森　に、
浪の　みどりの　うまし孤獨。

妖の　森なる　海と　海間、
木なる　妖鳥　歌ふ　聽けば、
世なき　平和の　われに　飛び來。

これなども、さう佳作でもないか知れないが、矢張り、明らかに、渠の表象派たることを示してゐる。すべて言葉の意味が言葉の表面だけの意味に終つてゐない。さうかと云つて、その暗示するところは言外にかけ離れた理想や概念でもない。言葉に即しないで而も言葉を離れない内容をいのちとしてゐる。これが表象主義の發想の特色であつて、僕等はこれを小說にも主張して來たのである。

佛蘭西表象派の詩をわが國に初めて飜譯若しくは摸倣（初めはさう云ふより外の讃辭は與へられな

かつた）したのは、上田敏氏と蒲原有明氏とである。それから僕の詩に至つて、少くとも、日本人的な特色を表象詩に與へたが、僕は佛蘭西表象派が空想的な音樂や理想の宗教に去勢せられた傾向あるを看做し、この點に飽き足らない故を以つて、別に渠等でも、その一生命なる生の幻影、乃ち、寧ろ生その物の肉靈合致相と云つた方がいゝ物を、もつと確實に發想實現出來るとして、僕の刹那主義から來たる自然主義的表象詩を主張し、僕はこれを應用して人生觀的發想を行ひ、また小說の方に出て行つた。が、わが小說界では、まだ表象派的な態度を採つてゐるものは、外に殆どないのである。僕と雖も、劇や小說に於て、決して佛蘭西風の觀念的表象派にはなりたくないのである。

わが國で、また。初めて『表象主義の文學』（氏の著『自然主義』に編入してある）を紹介したのは、太陽（明治三十八年十二月號以下三回）に於ける天溪氏である。これに對して角田浩々氏は、表象詩を詩經の所謂比興詩であると云ふ速斷を下した。且、天溪氏にも、表象と代表との兩性質を混同したやうな議論があつた。降つて、明治四十年の二月から、僕が新小說に『佛蘭西の表象派』、早稻田文學に『日本古代思想より近代の表象主義を論ず』（共に僕の著『新自然主義』に編入してある）を發表し、前者に於ては、シモンズの『文學運動』（これはその當時天溪氏その他にも一つの種本であつた）中にある諸表象家のことを、この書以外から得た事實と參照して詳說且批評し、後者に於ては、この表象派に取るべき心髓をわが國固有の生活と思想とに照り合はせて僕自身の、廣く云へば、わが國人の、發展して行くべき自然主義的表象觀を述べた。殊にこの派の最も概念的なメテルリンクに對する僕の紹介と批

評とは、その以前、僕の著『半獸主義』(明治三十九年六月)に於て既に發表した。

僕の議論を讀んだものは、兎に角、表象派の長所と共に缺點をも理解したゞらうし、また、その缺點をわが國で充實する道はわが古事記の新解釋にあることも分つたゞらう。相馬御風氏が古事記のことを書いたのも、僕のさうした新らしい日本主義から來てゐたことは明白だ。ところが、僕等の思潮を知らず、若しくは僕等の思潮の影響を受けないもので、出しぬけに外國表象派に接し、矢鱈にわけもなくこの派の表面的事實に感服した結果、この派の弱點を最も多く持つて神秘主義に逃げたメテルリンクを得意さうに摸倣してゐるものが、近來、相馬氏等よりも一層年若な青年に多くなつた。そして渠等はおもに劇にばかり向いてゐるらしい。

僕等は今の詩界の遊惰と無努力とを見て、それを度すべからずだと思つてるから、詩界に向つて再び表象主義の長所や缺點を說明してやる氣持になれない。が、劇界若しくは小說界にこれから表象派が生ずるものとして、またさう云ふ派が生ずるのは單調を破る爲めに歡迎すべきだとして、それが新進青年間に芽を吹いてゐるのだとすれば、これを助長してやる必要があらう。現代作家のおもなものは大抵自然主義の初步的程度か淺薄な享樂主義かに滿足してゐて、かのユイスマンが表面的、科學的ゾラ宗から轉化して表象主義家となつたやうな準備や努力があらうとも見えない。(僕の指摘に奮慨して立てば知らず。)多くは、自然主義の初步に行きついたのがやツとのことであり、若しくは、僅かにそれに對抗するだけの程度の享樂主義にあり付いたのが殆どいのち懸けである樣子だからである。し

て見ると、起るべき表象派は必らず今後の青年作家連から出來るのであらう。で、僕等が渠等に對して、先づそのお手本を讀み違へたり、見違へたりすることのないやうに注意するのも、決して無益なことではなからうと思ふのである。

表象派の洗禮を受けた若しくは一たびそれを通過した近代思想を知るに便なる書物を擧げて見ると、各作家の創作は勿論のことだが、他に英語で云へば、

Arthur Symons' Symbolist Movement in Literature.

Vance Thompson's French Portraits.

George Mocre's Impressions and Opinions.

Eduond Gosse's Questions at Issue.

〃 〃 Critical Kit-Kats.

Tolstoi's What is Art?

Max Nordau's Degeneratior.

その他にも、いろ／＼あるが、僕は、少くとも、以上の諸書は讀んでから表象派の批評に取りかゝつた。が、そのうち、佛蘭西表象派を最もまとまつて紹介し、而も十分の同情を以つてしたのは、シモンズの『文學運動』であると思ふ。書中に論じてあるのは、すべて詩人若しくは小說家だが、著書が自白してゐる通り、問題は文學的よりも寧ろ新哲學、新人生觀に向つてゐる。この書を讀んだものにし

ておのれの人生觀、處世觀、若しくは常識觀を一新し得ないものがあるなら、その人は無神經でなければ愚鈍、愚鈍でなければ實際の白痴であらう。

ところで、注意して置くべきことがある。外でもない――シモンズは西洋人で、耶蘇教社會に生れた人で、而もアイルランド人とは云ひながら、最も常識的なアングロサキソンの勢力範圍内に育つた人だ。そこが、表象派の缺點、たとへば、殆ど何等の反省もなく空想的な音樂に馳せ參じたり、理想的な宗教に這入つたりして行くところを、却つて高尙らしく、幽玄らしく見做しで通過する所以である。『外國文學の研究』と云ふ書に於ても、その著者ヴジニアエス。クラウフオドと云ふ人が、デカダン傾向から生じた文學に同情した理由を、最も淺薄な宗教觀の上に置いた。僕等の洞察に於て、これほど表面的に、また滑稽的に、見えることはないのである。

『文學運動』などの如き書を讀み、またそこに紹介せられた諸作家の創作を讀むに臨み、日本人として注意すべき件々のおもな物を個條書きにして見よう。

一、宗教。而も中世紀の宗教だが、この時代には、信仰は旣定の事實として取り扱はれ、何等の疑問も反省もなかつた。そしてたゞ莊嚴な儀式を以つて維持せられた。そんな信仰に歸依してからの內容問題には殆ど全く觸れてない。そして少しでも觸れたところは、日本固有の大思想――僕等が主張した――のから見ると、丸で滑稽としか見えないほどの貧弱な物である。

二、靈魂。これが全く肉體と區別せられて、特殊に存在性を有する物であるが如く用ゐられた傾き

があるので、僕等の主張たる肉靈合致には勿論、かのホイトマンの肉體即靈魂、メレジコウスキの、『人間神』までにも發達してゐないところがある。そして時々靈魂と云ふことをたゞ文字上の粧飾また は思想上の表面的威力としてばかり用ゐたやうな傾向もある。

三、敏感。これは人の五感交叉問題に必要なことで、たとへば、音樂を見、色を聽き、音の味を舌で味はうと云ふやうなことだが、シモンズ等の如きはこれにあたまから餘り感服してしまつた結果、わが國の平安朝時代の敏感、乃ち、香を聽きわけると云ふやうな、ほんの表面的、若しくはほんの形容語的位の敏感程度に滿足して停止した傾きがある。シモンズの『文學運動』の卷末に近づくに從ひ、乃ち、渠がユイスマンやメテルリンクを論ずるに至ると、一層この淺薄な傾きが見える。そこが、儀式的宗敎を大した意味に取つて、その儀式の莊嚴さ――それには、香の煙や音樂が隨分多くの役目を爲す――に無反省な所以の一つである。

四、音樂。これを宗敎その物の如くにありがたがる傾向は、まア、ショペンハウエルから初まつたと云つてもいゝだらう。そしてこの種の音樂論の誤謬は僕が『半獸主義』で詳論した。が、この謬想を受けたニイチエやワグネルの勢力が絕頂に達してゐた時代であつたから、マラルメなどが詩を暗示にすると云ふことを、直ちに音樂にしてしまうのだとし、これを最上の努力と思つたのである。そして詩は音樂よりも深刻に暗示的なる所以を知らなかつた。音樂は實質を離れた空想しか攫めないのに反して、自然主義的表象を生命とする詩もしくは小說は、空想を分離させないほどに實質を握ることが

出來る。音樂の暗示は事物の內容以外にあるものに向ふのだが、詩もしくは小說の暗示（無論、これのないやうな作は問題にならないのだが）は、事物その物の內容中にあるものを披瀝する。この相違を知らないでは困るが、知れば必らず、音樂に盲從する、またしようとし易い表象家や神秘家は、十分に考へ直す餘地がある筈だ。

五、生と死。表象派を論ずるものが、ヹルレンに對して生の絕對執着を認めるのはいゝが、生に對して死にも同じく意味があるとして、メテルリンクの運命觀を深刻だなどゝ見なすのは、その論者もしくはそれをいゝとする作家等があり振れた常識に依つて表象派以前に跡戾りする所以である。死や無言に深刻な意味を探らうとするのは、槪念に停止して實質上の無意義をありがたがる禪宗坊主の態度と同じで、思索上の遊戲でなければ、ぬらりくらりの胡麻化しに過ぎない。から云ふ傾向は、生を最も執着する表象派本部から分離したことにならう。別に神秘主義なる名目が文藝上に出來たのはそれが爲めであるが、この主義の病根も亦表象派のと共通である。

以上の作々はシモンズその他の表象派論者の缺點でもあるが、また、佛蘭西の表象派の實際に於ても、知らず識らず落ち入つてゐた缺點である。然しそれが爲めに表象派の長所を忘れてはならない。生に對する强烈な執着は、わが國神代の神々のそれを近代化してゐること。人の生命なる發想は、云ひ切り、云ひ盡しでなく、暗示にあること。（乃ち、槪念、理論、外存的理想、若しくは宗敎化せられた神を握るのでなく、內容、物その物になること。これを一種の實行的發想と云ふ。）五感の交換、知

情意の燃燒融和によつて、事物の表面と外形とをぶち毀わし、直接に內容に突進して、而もその內容が事物のもとの表面、外形までも活かしてゐること。肉靈合致の指示。發想者以外に事物の實際存在がない傾向．など。

すべてから云ふことの一つでも了解したら、わが國民の頭腦と心情とを如何に强大に、如何に深刻に進め得られるかゞ分らう。また、わが國民固有の眞實な精神とエネルギとを如何に新らしくせしめることが出來るかを觧し得よう。が、今、ちよつと、ここで、特に文學の方面ばかりを云つて見ると、表象派の所謂『暗示』の一個條だけでも熟知してゐたとすれば、どう云ふ觀察が出來ると思ふ？藤村氏の小說にはよく暗示があつていゝと云はれてゐるが、僕がいつも注意する通り、あれは暗示、乃ち、サジェスチョンでなく、推測させるだけのことだ。そしてその推測の結果が若し物その物に觸れてゐれば、まだしも多少の深みはあるが、さうでなく、たゞ通俗な知識、感情、道德心などを與へるに過ぎないのを如何にせんだ！たまに多少味はひのありさうな場合でも、盲從しないで考へれば、單にそれが遠方から概念的な筋乃ち、プロトを示めしてゐる面白味だけだ。花袋氏のになると、また、渠の所謂『人生の一角に觸れる』と云ふことが、實際は、人生の斷片を概念化したことである。推測の餘地さへもなく、平べたく云ひ切つてしまう場合が多い。これは表象派で最も淺薄だとするところの物である。

云ひ切りと云ふことは、今の小說界に於ける大小作家等の殆どすべてがいゝ氣にやつてることであ

る。一種の表象主義を主張して來た僕はその主張上多少の考へもあつたので、若し僕の小說に云ひ切りがあれば僕の拙劣か不注意かから來たのだが、他の殆どすべての作家等は丸でそんなことに無考へでゐたと見える。花袋氏が、『活動寫眞』(文章世界一月號)のやうな作に於て、平面描寫を氣分で活かさうとして失敗してゐるのも、それが爲めである。同じ凡俗な水平をあゝでもない、かうでもないと唯循環してゐるのを考へ深いと云ふのなら、この面白くない意味での考へ深い藤村氏が推測式を以つて云ひ切りを避けようとするのは、多少の努力と云はなければならないが、あれはよく云つても、まだ漢文家連の所謂『含蓄』を見込んだくらゐの程度であつて、表象家の自覺した暗示とはまだ〳〵ずツと逕庭がある。比興詩と表象詩と違ふ程に、推測式と暗示的とは違つてゐる。僕の兩氏に對する批評を殘酷だとか、同情がないとか云ふのは、僕がかう云ふ違つた立ち場に立つてゐるのを知らないからのことである。

かの鈴木三重吉氏のやうな新進家でもこゝまで進まうとする努力などは少しも見えない。渠が『ガヂ〳〵』とか、『いら〳〵しい』とか、「小寒い』とか、『小なつかしい』とか云ふ特別な形容詞を連發して、流露する感情若しくは氣分をどこまでも詳しく發表しようとしてゐるのも、要するに、云ひ切りを主にしてゐるのであつて、いゝ意味の暗示的傾向などは殆ど無いのである。谷崎潤一郎氏もさうで――渠の作に人生の藝術化的傾向があるとか、渠はヂアボリスト、惡魔主義者だと云ふやうな批評は、ほんの、外面的觀察であつて、發想の根柢には、鈴木氏と同樣、修辭派としか見えないところがある。

云ひ切りとは、必らずしも、無形容、無含蓄の斷定を以つて、云ひ現はしたいことを表面的に云ひ現はすのを指すばかりではない。一作に含めようとする筋、感情、氣分、若しくは具體的思想を、如何に修飾しても、如何に詳しく描き出しても、また如何に奥ゆかしさうに包んでも、結局、根こそぎにして發想したことを云ふのである。如何に面白さうに、如何に趣味あるらしく、如何に氣分が横溢してゐるらしく、如何に思想が深いやうに見えても、つまり、高が知れてゐる――根が拔けてゐるので、たとへば切り花の如く、甚しいのは造花の如く、實生活の水分を吸收する道が絶えてゐるからである。

この傾向の絶頂に達したのはルコントドリル等のパルナス派（或人は譯して高踏派と云ふ）であつた。我國の自然主義小說と云はれたもの丶殆ど全部は、ゾラやゴンクルまでも行けなかつたと同時に、さう云ふ諸作家も亦他の作風に從ふ新進諸作家と同樣、初めも今も、一番よく云つて、パルナス派の範圍を脫してゐない。內容や具體思想（さう云はれると、內容などは氣分に過ぎないと逃げるものもあるが、氣分もそこに這入つてゐるべき）を調べて見れば、高が知れてゐて、ヸクトルユゴの修辭法を絶頂に達せしめたに過ぎない。ところが、表象派の文學運動なるものは、一面に於て、もと、このパルナス派の傾向に反對して起つたものである。實生活に根を廣げた思想並に氣分は、人生とても、一般の言語を以つては――如何に飾つても、如何に詳しくしても――云ひ切れないものだ。と云つてメテルリンクや禪宗の、實は槪念に停止する態度に於ける如く、『默』の一字や以心傳心など云ふことに逃げるのは、實質ある表象家等の耻ぢるところである。で、渠等は表象的發想を以つて物その物に

現はれた人生を捕へることを工風した。人生の一部を盛る事物を採つて來て、それを云ひ切り性の言語に現はすのではなく、言語の性質を擴張して、暗示力までもそれに攝取し、そこに物その物の人生を實現するのである。そして暗示的表象として現はれた發想以外に人生はないわけだが、それが云ひ切りでない所以は、言語にパルナス派の滿足したやうな狹い制限性がなく、從つて人生の全部をそこに探れるからである。

から云ふ發想法の發頭人等が、とても、理論や常識や感情の上に健全狀態の人々でなかつたのは尤もなことだ。シモンズの書中に活動する人々のうち、(ユイスマンやメテルリンクは寧ろ表象派でない、あるとしても最も概念的なのだから別として、)客を招くに、來いと云ふのか、來るなと云ふのか、どつちも分らないやうな朦朧詩的な招待狀を書いたマラルメが、それでも、一番健全な人で、その他はすべて常識と心の中心を失つたものばかりだ。實際に氣違ひであつて狂人日記を書いた者や、一度ならず入獄せしめられた者もある。然し狂人(ジエラル)が最も正氣なことを云つたり、母親をぶんのめし若しくは美少年騷ぎをして入獄もした者(ヹルレン)が最も眞實な發想をしたのなどは、この派の弱點と云ふよりも、寧ろその時代のおのづから然らしめた勢ひである。僕等は、渠等の實蹟を冷靜に研究し得られる今日、最も敏感な而も健全な神經を以つても、佛蘭西當時のよりも一層進んだ神經の微動を要する新表象派の眞理を攫める。が、もとの表象派活動の當時は、渠等を不健全にするほどの努力を要し、また不健全であつたればこそ却つてそんな特殊の人生的發想を爲し得たのである。

カフェが必要であつた。强酒アブサントや放浪生活が必要であつた。そして初めはヒドロパスと云ふ無意義な造語を以つて相呼んでゐたが、やがて世間から受けた非難の語デカダンを以つてそのまゝ身づから稱した。そしてサンボリスト（表象派）が確立したのは一八八五年であつた。ジエラルが一八二六年に『ナポレオンと好戰佛蘭西』なる國民挽歌集を出してから、ヹルレンが一八九六年に、マラルメが同じく九八年に死ぬまでを數へると、隨分長い間のことだが、實際の表象派が佛蘭西に勢力を得たのは、表象派の名が確立した前後からである。そしてその後、數年にして全歐洲は勿論、米國にまでもその影響が廣まつた。それがわが國へも傳はり出したのは、明治三十八、九年頃だ。

自然主義がわが國に根據を置き初めた時にも、外國事情に少しでも通じた傍觀者連中は、知つたか振りで、自然主義などはもう舊いなどゝ云つたものだから、渠等と同じやうな傍觀者等は僕が今再び表象派の提供するところを世に注意するを見れば、また舊いとか、もう分つてゐるとか云つてしまはないとも限らない。然しわが國では、自然主義でも當然の轉化時期に熟達してゐないやうなあり樣である。まして、表象主義に至つては、まだ、小說界には殆ど全くの新來者であると云つてもいゝのである。わが文界には、表象派本部から分離して、その缺點の方ばかりを寄せ集めたメテルリンクの概念的な神秘主義の方が、却つて早く、青年の劇作者連に摸倣せられた。これは餘り結構でなかつた。

與へられた紙面が既に盡きたから、簡單にこの論文を結んでしまはなければならないが――僕は以上の如く、表象派の提供するところを世に再び注意する必要があると感じたが、僕自身は單純に表象

派の一人を以つて任ずるものではない。と云ふのは、この派につき纏つてゐる諸缺點は、この論文の中頃に示めした通りで、それを避ける爲めに、僕は相變らず自然主義的表象主義に執し、主張としては勿論のこと、創作に於てもさうした氣分や具體思想を現はしてゐるつもりであるからである。表象派本部若しくは自然主義的表象派の小說と云ふべき物は、歐洲に於ても實際は無いかも知れない。ユイスマンの『大伽藍』の如きは、表象的小說の隨一と云はれながらも、ほんの、部分的表象の寄せ集めである。劇に至つては、イブセンもハウプトマンも隨分表象的發想をしながら、その各作の一部が表象的に現はされてゐるに過ぎない。メテルリンクの劇に至つては、全部表象の發想に氣が付いたと云ふばかりで、あたら、その發想をそツくり概念の鍬にかけてしまつた。渠の神秘主義は全く概念停止の表象主義だ。

古典主義は一面に於て情緒主義である。僕等がそれを排斥すると、直ぐ一足飛びに運命とか大自然と云つて概念的な世界にばかり飛んで行く。そしてまた概念と抽象とを否定すると、今度はまた氣分とか情調とかを誤解して、情緒的や感傷的に逆もどりする。僕等がまた物質主義を攻擊すると、忽ち宗敎の形式まで引き出して、心靈の天地とかをありがたいものにする。そしてまた心靈の空想なのを說明すれば、いつのまにか再び物質的に安んじてしまう。ゾラでなければメテルリンク、物質主義でなければ心靈主義——そして殆ど全く物心合致の境地などは本統に考へたこともない。こんな兩端に於ける概念と空想としか知らない。今の文界は、僕が疾くに指摘した通り、深大現實の思索力の缺乏

した結果である。然しそんなみじめなわが文界ではあるが、その天の一方に、若しくは地の底に、表象主義本部と氣脈を一にする合致的人生觀や描寫論實行の機が特別に熟しかゝつてゐるのだ。
わが國に於て、若し全部的表象の完全な發想をする小說が出來たら、なか〱舊いどころか、世界に於て恐らく最も新らしい物であらう。（大正二年三月）

殘存藝術の理想的觀察

古來の藝術でおもに東京と大阪とに殘存してゐるものに對する觀察をして見よう。
團菊死去以來、雁次郎は第一に忘れてはならないもので、渠が大阪人の歷史的趣味と歷史的生活とを代表する鄕土藝術は、東京人には輕蔑と冷笑とを買ひ易いに反し、大阪人を理解して見れば見るほど、その面白味が增して行くのである。が、ここでは普通の劇場に殘存する舞臺藝術に關する議論まではする餘地がない。
で、先づ、最も低級と云へば云へる藝術なる大阪の舞ひから初めて見るが——東京で舞踊と云へば直ちに大きな芝居の舞臺を想像して習ふのであるから、その態度も從つて大きく、その描く線も亦大きく强いのに反し、大阪や京都のは坐敷的、四疊半的であるので、その描線の直角的なのが少く、如何にも婉曲に纎弱だ。そしてこれを不斷見ることが出來るのは宴會の席だ。僕が最近に向ふへ行つてた

時は、八千代並に春蝶と云ふ藝者が一番上手だと云はれてゐた。前者は後者より美人であつたが、その顔は表情力に乏しく、惡く云ば、上方にあり勝なのツぺら棒だ。後者は、骨ツぽい顔で、おまけに眉毛が少し八の字に下つてはゐたが、筋肉の活動が比較的に自由だから、豐富な表情を見せることが出來た。そしてこの長短は最も多く兩人の舞ひに於いて現はれた。

外國のダンスは調子ばかりで、それにつれて足の活動が主になつてゐる。足がうまく頭の上までも上るのを上手だと見なす。わが國の舞踊は意味ある容姿を標準にしてある。現今、米國の或女優がこの兩者を折衷した物を考へ出して、それが多少評判にはなつてゐるが、而もなほ今の歌右衛門の親が藻に踊りを稽古させる時、股と股との間に一枚の半紙を挿ませて、それが落ちないやうに足取りを注意させた如きことは、外人の夢にも思ひ及ばないことだらう。外國のとわが國のとの相違ほどには、無論、わが東西の舞踊が違つてはゐないが、右兩名の舞ひを當時大阪で『二人道成寺』をやつた市川翠扇と旭梅との踊りに比べて、僕はこれほど感じが違ふものかと驚いたのである。

團十郎の遺子等がやつた道成寺は僕が東京で見たと同じ、頗る手に入つたものであつた。然しそれを上方で見ると、まだ〳〵微細でないことが目に附いた。その上、あの爺ゆづりの長い顔には目と口との表情が足りない。『とても女は蓮葉なものぢやえ』といふところで、横に足を投げて、出した顔を三段に動かす時でも、また『うそか誠か』と半信半疑の樣子をする時でも、その意味をたゞ首と身體とで解釋するばかりで、目は動いても殆んど全く死んでゐた。振り附けの習慣がそれ以上の考へを出さ

せるやうにしないからであらう。舞臺をばかり目的にばかりしたらあれでもいいのかも知れない、乃ち、誇張した曲線や足踏みを以つてばかりでも外形美をいい方に胡麻化して置くことも出來ようから。
然し大阪に於けるやうに徴細を主とする間にあつては、上ツつらに流れた行き方は直ちに下手に見えるのである。そして僕がその下手の方に見た八千代のでも、翠扇旭梅のに比べては、もツと內部的に立ち入つてゐた。つまり、上方の舞ひは一體に規模が狹少なので、少しでもうま味を出さうと工風するものには、勢ひ、內部的に向ふより仕方がない。春蝶は、意識的にか無意識的にか分らないが、おのづからさう云ふ工風をやつてゐた。かの女がその競爭者よりも可なり多く活き〳〵した意味を出し得たのは、乃ち、それが爲めだ。
かの女の目は勿論、口と手と足と身體全體とに一樣に、舞ひの手に伴つた光と活動とがあつた。かの女が『山姫』を舞ふのを見た時、『名殘り惜しげに』のところでも僕等を他に比較が取れないほど內部的に引き入れた。そして『行くゑも知らずなりにけり』の切りも、開いた扇の兩端を左右の手に持ち、それを更らに右へ持つて行つて肩並みに突き出し、口をへの字に結んで、目を遠方にやる工合が、さながらかの女その物を持つて行くやうであつた。
ところが、かう云ふところまで進める舞ひが齋邊踊りや浪花踊り（京都の都踊りをも含めて）の舞臺にのぼり、左右の兩花道から、チリチン、チチチン、チリチチチンの鐘につれて、各々十數名の踊り子を出し、舞臺で一列若しくは二列に並んで見られる時は、たとへ春蝶のやうな舞ひ手ばかりが揃つ

たとしても、その特色は沒却せられるにきまつてゐる。と云ふのは、大きな性質でない舞ひを、ただ外形的な賑やかしに、大きなやうに見せるのであるから。『淸き渚に御車を』と來れば、皆が扇を以つてそれに擬するだけで、お負けに踊り子の手が揃はないことが多い。そして『一天かをる春の風』とあれば、ただ皆の袖をひら〳〵させて見たり。『いづれの鄕も山水の』とあれば、開いた銀扇を揃へて見たり。纖弱な舞ひは、四疊半的には內部の生命を多少でも發揮する餘地があるが、どうも舞臺には向かない、希臘人の所謂均齊ばかりが主になるからである。

次ぎに、人形芝居の淨瑠璃である。新らしい考へを以て考へて見れば、人形芝居の存立する餘地はない。然し、舊劇として『戾り橋』、『紅葉狩』、『關の戶』等の所作事は殘して置きたいと同じ理由で、人形芝居も保存して置きたいものだ。人形芝居は今や本場なる淡路の源之丞が衰微して、その餘勢が大阪に移つてゐるのだが、それにも變遷が多かつた。

初め近松派の竹本座があつた。それに對して出來たのが紀海音派の豐竹座である。竹本が崩れて文樂座が生れ、豐竹の派に緣故あるものがまた彥六座を組織した。破格な語り出しの『壺坂』を節附けした團平はもとの越路(乃ち、大椽)と喧嘩をした結果、この座によつてゐた。それが一度倒れてから堀江座が起つた。然し人形芝居と云へば、一般には、堀江座と大隅太夫とを忘れても、文樂座と攝津大椽とは大切な物になつてゐた。

新曲が跡を絕つてから、最も主要な作曲家たるべきものは單に三味線彈きに過ぎなくなつてしまつ

た。そしてその三味線彈きは一興行(三十日から四十日)にたツた一圓取れば立派な地位であつたことがある。次ぎに重んじられる筈の人形使ひも、源之丞一派のやうな昔の獨立性を失ひ、故紋十郎のやうな名人があつても、ただ與へられた文句の筋を再現するだけなる語り手の前にあたまが上らなかつた。

名優團十郎が出て劇作者の權威と舞臺とを踏み付けてしまつた如く、語り手の名人攝津大椽があつて三味線彈きも人形使ひも全くその勢力を奪はれてしまつた。曾て文樂一座が東京へ五日間一万圓で買はれて來た時も、九千九百圓までは大椽の懷中へ這入つた。不斷でも、一座が取るものは殆ど九分九厘まで椽のものであつた。それでも椽の座中の人々は文樂に出ると云ふのを看板で、別に生活費は儲かるから、默つてゐたのだ。

今の近松座に轉ずるまで堀江座に據つてゐた大隅太夫は、その敵者大椽ほどの勢力がなかつた。然し後者が單に淨瑠璃界の感傷主義に終始したに反し、前者は、わが國に自然主義などが唱へられないずツと、ずツと以前から、この主義に叶ふ語り振りを以つて立つてゐた。

攝津大椽は如何に名人であつても、その語り振りから云ふと、あり振れた舊式太夫連の代表者に過ぎない。椽は不自然になるのも構はず、ただ節と技巧とを上手に弄して、平俗な感傷家連の人氣に投じてゐたのだ。故團平は三味線の方からこの淺薄な藝風を嫌ひ、もツと自然に語つて貰はうとして大椽と衝突して袂を分つてしまつた。この團平の感化を大隅太夫は非常に受けたのである。

今の越路太夫でさへ、一時よそつてゐた大椽的藝風を離れて、自分の得意な堅い物をやるやうになつたが、自然主義的な自覺は殆どない、且、聲の自由なのといいのとにまかせて、矢ツ張り、主とするところは節と艷とにある。大隅に至つては、殆ど全く艷消しの藝術をやつてゐた。それを舊式淨瑠璃に慣れた耳で聽くと、芝居に於て女優が持ち前の聲を出すのが却つて女形の不自然な聲よりも不自然に聽えると同樣、また却つて下手のやうに、無造作のやうに、且はまた殊更めいたやうに聽えるのである。聲のいいものは、たとへば大椽や伊達太夫のやうに節ばかりでも立つて行けようが、それではいつまでも俗人を喜ばせるばかりで、實際の中實をえぐり出すことは出來ないで濟んでしまうのだ。

僕が曾て久し振りで、從つて殆ど初めてであるかのやうに注意して大隅を聽いたのは、『佐倉の曙』宗五郎子別れの段であつた。『梨のつぶての音づれも』が間が拔けたやうに、『それが不愍さ悲しさゆゑ』が何等の苦心もないやうに、『直訴の外思案なしただその外に子供がこと頼む——とばかり』が瓢輕に、それ〳〵聽えたのだ。然しずツとつづけて聽いてゐると、そこに却つて全體としての統一と實質とが感じられて來た。大椽は人を聲に醉はしめて、詩に於ける七五調の如く、ただ一般的に通り過ぎてしまうが、大隅は僕等をしてその個所〳〵に考へさせて行くのである。從つて、後者最近の訃に臨んで、渠の弟子や專門家等が新聞紙上で渠の語りぶりを單に寂しいとか、淡白とか、地味だとか評したのは、眞に、渠を評し得た所以ではない。

大隅太夫は淨瑠璃界に於ける自然主義の率先者であつた、然しまた同時にその殿將で終つたのか知

れない。人氣は俗人から立つものだ、そして俗人は一般的な艶と節とをしか解することが出來ない。且、大隅のやうな自然主義的な語り振りは餘ほど腹が分つてゐないと、全くの無造作に墮してしまふものだ。渠の藝風にかぶれただけのものには、既にさう云ふ弊害をばかり出してゐるのがある。大椽は眞似易いが、大隅は模倣し難い。然し今や前者は隱退し、後者は臺灣の旅路で死んでしまつた。(大隅太夫は僕が渠を淨瑠璃界の自然主義者と云つたのを迷惑さうに死ぬまでさうでないと辨解してゐたさうだ。專門以外に何事をも學ばうとはしないわが國の藝人に、新聞紙の俗化的智識しきやなかつたのは止むを得ないとしても、この通り、自己の語り振りを自覺的に發想し得なかつたほどだから、これを渠の弟子等に本統に傳へ得なかつたことも想像せられるではないか？僕が渠を渠等の社會に於ける自然主義の率先者でまた同時に同主義の殿將と惜しむのは、その理由はこの事實を見ても證明せられようと思ふ。)

一體、人形と三味線と語り手とがぴツたり合つた時は、この種の芝居も何とも云はれない妙味を感じさせる。が、素淨瑠璃を聽き慣れた東京人には人形が却つて邪魔になる。そして東京人が呂昇の義太夫を歡迎するなどは、大阪一般の通人から見れば、二重の退歩である。乃ち、メテルリンクの脚本中の諸人物がすべて人形であると云ふ意味と同じやうな人形を以つて、淨瑠璃脚本に應用したところの妙味を知らないことが一つ。それから、その淨瑠璃脚本の語り方に於て、男の大隅や女の長廣やの自然な、然し中實ある藝風を知らないで、大椽や呂昇の感傷的な艶語りばかりに隨喜する考へなさの

俗臭が二だ。

大椽や呂昇の俗受け藝風には、木やり音頭や『無慘なるかな、稚きものは』などばかりが最も適してゐるだらう。大阪では、文樂へ大椽のそんな物を喜んで聽きに行つたものは多くは『おのぼりさん』だが、東京の有樂座へは、呂昇を『赤毛布』の代りに紳士社會の人々が得意になつて隨喜しに行くのだ。渠等の喜ぶところはきツと泣き方とか、笑ひ方とか、特別な節まわしかにある。そんなことは、音樂的藝術の再現(曾て創作せられた曲を再び現はすのに過ぎないから)としては、ほんの、うはツつらのことだ。と云ふのは、その通りやるやうに作曲の時にきまつたことであるから。

百年と云ふ歷史を持つて來た劇評にでも、まだ作意と技藝とを混同してゐることがあると同樣、義太夫音樂に於ても、作曲者とその再現家、乃ち、語り手との範圍が、語り手にも、また聽き手にも、混同せられてゐることが多い。そこではあゝ云ふ風に笑ふ、こゝではかう云ふ工合に泣く、節まわしはかうだ、あゝだと云ふことまで、すべてその作者と作に曲をつけた人とが既に決て具れてあるのである。それをその通り語り手が語つたからツて――それを一般では語り手の手がらとして讃めるのだが――何もそれが特色でも、長所でもない筈だ。語り手の手がらとは、その人自身修得の長所へ作意をも、曲意をも、また聽衆をも引きつける工合にあるだけだ。たとへば、呂昇が突然『金がかたきの』と歌ひ出したところで、これは曲の上から既に〳〵決つてることであるが、それをかの女の氣が利いた思ひ付きか、勝手にその場でつけた節かであるかのやうに聽き爲すのは一般人の間違つてるところ

だ。語り手としては、人をその場の氣持ちに引ツ張り込むかどうかが問題だ。

西洋音樂の演奏を聽いて分らないと云ふ人のうちで、分らないでもいゝことを分らうとしてゐるのが少くはない。その辯、その人々にして日本音樂で素養が多少でもついてゐるのなら、ワグネルの六ケしい曲の再現を聽いてゐて、きツと引き付けられるだらう。そこが音樂に限らず、すべての再現藝術の妙味に觸れる所以だ。義太夫でも、この點が肝心だ。一般の人々が分ると思つてるのには、滑稽にも、筋と曲との上で初めから分り切つてることが多い。

から云ふ意味で、呂昇は大橡に準じて艷と技巧とで持つて來た太夫だ。然しかの女の病氣全快後初めての有樂座で、僕がかの女の『柳』を聽いた時は、考へ直したのではないか知らんと思へたほどに技巧ばかりには落ちなかつた。『そも岩代の結び松』あたりから、もう、人を引き込み初めて、『やなぎがもとに待ち受けてなどで、僕等の身內はぞく〳〵浮き立つて來た。そして『必らず草木成佛と回向を賴む』も、思つたほど惡い意味の技巧を弄しなかつた。朦朧ながら飽くまで輕妙に、艷ツぽく、小意氣に進行するのが、赤い房のついた靑貝入りの見臺と共に呂昇その物を圓く可愛いものに見せてしまつた。盜人の四郎が出てからは、大きなところもある筈だが、どうもそこに實際の大きさが感得せられないのは、然し、かの女の持ち前に缺けてゐるところだから、止むを得なかつただらう。それにしてもかの女の聲の艷があつていいのは、非感傷主義のものでも亦忘れることが出來なからう。且、日本人の明確に發音し難いラ行音を、たとへば、『むざんなるかな』や、『木やり音頭は父が役』や、

『佛果につれし緣なれば』の時に於ける如く、圓ツこく而も强い力を流して聽かせるのはいい氣持ちだ。ついでに、かの女のラ行發音に徵しても、わが音のラ、リ、ル、レ、ロの流音的父音はRでなく、Lであるのが分らうと思ふ。一般の羅馬綴りに於て、Rに五母韻を配したのは間違ひだ。

最後に、能樂である。僕は藝術としての能に對して考へてゐることは、丁度、舊劇のうちで最も固まつた、從つて動かせない型として賞翫せられる物――たとへば、從來の振事劇、さなくば、『助六』等の普通劇――に對して考へてゐるのと同じだ。あれ以上に發達させることも出來なければ、あれ以下にすることも出來ない。云つて見れば、名人がやりさへすれば、かツきりと古色を顯はす骨董の味ひである。

僕はまだ外國へ行つて立派なオペラを觀聽したことがないが、專門家の說明や音樂的實演上の比較をして貰つたのに據ると、能にも、義太夫に於けると同樣、かのワグネルのオペラ中の物に勝るとも劣らないところがあるやうだ。それに、僕は芝の能樂堂以來能を觀聽したことは少くはないが、一番深く記憶に殘つたのは故觀世淸康の『土蜘蛛』であつた。最近では、雜誌『ほととぎす』記念催能に就いて、また新らしい親しみを得た。丁度、その會の少し前に、或ところで能の話が出たら、そのうちの一人が云ふには、或人が曾て左陣氏の出を寫眞に幾枚も取つて見たが、どれにもその姿は寫らなかつた。橋掛りをあんなにゆツくり、進むとも退くとも分らないほどに足を運びながら、そこに一分のスキもなかつたと見える。それから四五年の後、このことを左陣氏に直接に會つた時語つたら、今では

もう、年を取り過ぎて、二度とさう云ふ緊張した藝はやれまいと答へたさうだ。そんな話がまだあたまに殘つてゐたので、隨分注意して見た。

『八島』に莊麗な勇氣の、『是界』に不思議な力の、『羽衣』に優妙な美の、それ〴〵特色ある表現を感得して、僕は久し振りの興味をおぼえた。殊に『羽衣』は僕も殆ど暗誦してゐるだけに、本も見ないでゐて、櫻間金太郎氏のシテの一擧手一投足が、謠ひの文句や節と共に、さながら天女の悲しみや喜びを十分に見せてくれた。ちよツと足を運べば女の優しみがその裾のひだに現はれ、ちよツと平手をあげるとその場の悲しみが十分に見える。あのこなしや樂曲に於ける簡潔な而も多くのことを含む發想法は、俳句か、一部の新體詩か、然らざれば、佛蘭西表象派の詩に於てのみ發見せられるのである。

どうしてあゝ云ふ發想法がわが國に出來たかと云ふやうな民族心理的研究は別として、僕はただ能樂その物の過去並に將來に就いて簡單に云つて見ると、あゝした立派な藝術が想の上から殆ど全く因緣物語の俘となつてしまつたことと、趣味の上から餘りに貴族的に偏したことゝ、組織の上から敍事を専らにしたとの爲めに、發達若しくば轉化を中止し、淨瑠璃や芝居にその跡を壟斷せられてしまつた。

ところが、その淨瑠璃劇や芝居の能がかつた物、云ひ換へれば、オペラがかつた物は、矢張り、今日では、多少趣味上の相違はあるにせよ、能と同じやうな運命になつてゐる。かう云ふ方面の藝術は――三味線樂もすべてさうだが、――そのまゝ保存して行くか、その内容だけを別な形若しくは使用

に換へるより外に將來の道はなからうと思ふ。と云つて、保存には限りがある。骨董物その物とは違ひ、人を待つてその都度演じるのだから、時代が經過するほど名人が少くなり、終には一人もゐなくなるだらう。その時には、保存しようとしても出來るものではない。能の生產者たる作曲家は、もう數百年來、絕無ではないか？演者ばかりに如何に上手があつても心細いのに、その演者の名人も今日では老衰若しくは絕滅して行くばかりだ。あの無獨創の、模倣ばかりの文句だけが殘つたとて何等の榮えにもならない。

それに、時代は能とか淨瑠璃劇とか云ふ區別をしてゐる必要がなくなつた。常盤津と長唄、淸元と新內とは、大觀すれば、同じ音樂のうちのほんの小い分れで、その商賈的な家元爭ひさへのぞけば、メンデルズゾンとショパンとの如く個人的相違に過ぎない。そして能樂と淨瑠璃劇とは、大分緩慢な意味でだが、同じオペラ、乃ち、樂劇の傾向中に收容して考へられないことはない。して見ると、能としては、振事劇としてと同樣、行き詰つてゐても、他日出來るにきまつてる新樂劇の材料若しくは參考としては、能なる物は振事劇と同樣僕等の看過してはならないものである、その樂曲に於て、またその音樂的、身振り的發想法に於て。

行き詰つたのは、組織の上だけで云へば、餘りに外向的な叙事に偏して、內部的な對話並に獨吟の方面をおろそかにしたからだ。歐洲のオペラにも、もとはそんな缺點が少くはなかつたが、近代のオペラの生命は對話と獨吟とにある。能、その他わが國の舊樂劇では、この肝心な要素なる對話を殆ど

全く平言葉にして、作曲を避けてある。たまには、能に獨吟、淨瑠璃にさわりと云ふ場合はあるが、それさへ意味から云ふと、外向的なのが多い。僕が坪内博士の所謂新樂劇、乃ち、舊い振事劇と殆ど違ひがなかつた物に贊成出來なかつたのは、この外向的傾向を行き詰つたまゝ用ゐてゐたのが愚と見えたからである。

で、僕は能樂を能樂として珍重するのは、他のわが舊樂劇をそれとして見るのと同じく、他の人々に劣らないつもりだが、能樂家や他の舊樂劇家から今後の新樂劇は望めないと思ふ。第一に、さう云ふ社會には作曲家がゐない。第二に、固定した演出から轉化の出來る見込みはない。

あらゆる種類の內外音樂をあたまに入れた音樂家、と云つてその主なる作曲家が新たに出て――今の貧しいありさまで云へば、北村季晴氏をして或程度のワグネルを行かせる外仕方がないが――新樂劇を作り初めるには、然し、能樂と淨瑠璃と他の三味線樂とは共に最も多く考慮中に入れられるものであるに相違あるまい。そして身振りの點に於ては、能の簡單にして要領を得たのが殊に參考になるにきまつてゐる。兎に角わが國の現今に、北村氏を除いては、作曲家たる資格を備へた人が殆どゐないのだから、まだ〳〵新樂劇などのことを云ふだけでも心細い。（大正二年七月）

內外兩面の誤轉

わが國の近頃の思想界並に文藝界にどうして斯う机上の空論ばかり多いのだらう。自然主義に對して人道主義が出たとか、現實主義に對して新理想主義が現はれたとか云つて、それに頻りに說明をつけるもの(たとへば、稻毛詛風氏の如き)がある。が、その實際の事情はどうだと思ふ？　自然主義をも理想主義をも碌に解釋し得てゐないのではないか？

人道主義者と目されたもの等――而もまだ微力な――の內には、自分からさうでないとか、さう確かな態度を以つてるのではないとか云ふ告白をしたのがあるし。また、澄まして表面は人道主義に立つらしい創作をして見せるが、それがまたまことに貧弱な感傷に落ちたのがある(たとへば、武者小路氏のそれ)。

そんな弱い創作、そんなたわいのない批評でかの自然主義確立當時のそれらに當ることが出來るとは思はれない。かの當時にも自然主義に對抗しようとして大した効果もなかつた主張に、森田草平氏等が東京朝日の文藝欄に據つて發表した新理想主義があつた。自然主義若しくは現實主義を單に物質的なものと見做して、人生には物質的以外に理想的方面があるのを唱へた。ところで、今日の人道主義と見做されるもの、若しくは新理想主義を唱へるもの等の云つてることも、森田氏等のと相違はない。稻毛氏が『新理想主義とは何ぞや』(新公論)に於いてくど〳〵云つてるのも、要するにそれで、『人性を內面から……考察すること』は自然主義若しくは現實主義になかつたかのやうだ。

僕等はさきに森田氏等に對してさへ自然主義を通過せよと要求した。その時から旣に自然主義前派

なるものがあつたのだ。渠等の出發點に於ける偏見や誤謬は、七八年前のも今日のも、自然若しくは現實なる物をあたまから物質的に見てゐるに在る。無論、田山花袋氏の如き偏物質的自然主義者等も——そしてそれに對して別方面に偏した理想主義者が立つのは、中入り前の相撲としてはいい取組であつた。が、進んだ自然主義者等は自然を內觀し、幻影も亦現實であると云ふ立ち場に立つてゐた。そしてこの立ち場を今日まで守つて來たのには、少くとも、僕がある。

で、僕から見れば、自然主義の問題は生田長江氏の考へる如き『否定』のそれではなく、また自然主義前派とは否定を通過しないことではない。現實を物的ばかりに見るか、物心合致的にするかの問題である。僕の所謂現實主義は物心合致だ。從つて理想を現實以外に求めない。これに反して理想主義者等は——新舊を問はず——現實をわざ〳〵狹い物にして、外的に理想若しくは人道を求める。內外の誤謬である。そこに渠等が一種の自然主義前派なるあざけりを被むる正當な理由があるのだ。

（大正六年二月）

事實と幻影

「毒藥を飲む女」に就て

諸作家がお互に評し合つてるのは決して惡いことではない。が、其評言があまり見當が違つたり、

また違つた立ち場に立つ他人のを先づその立ち場から評してかからないで、單におのが獨り合點の結論だけを容易に下して濟ましてゐたりするなどは、あまりいゝ傾向ではないのみならず、人の名譽を毒する所以にもならないとは云へぬ。然し今の諸作家の多くは、有名な人々に至るまで、一般の新聞評と同じやうに、そんなことを平氣で云つてゐる。

斷つて置くが、僕は、少くとも僕だけはこれまでに多くの人々の作を批評殊に酷評したが、たとへば藤村氏に對しても、花袋氏に對しても、また秋聲、白鳥、その他の諸氏に對しても、酷評と思はれれば思はれるだけ、先其人の立場から批評して、僕の酷評の責任ある論理的根據を示めして來たのである。だから、僕のが如何に酷烈であつても、若しその評を受けた者が論理上その違つた立ち場を明答すれば、その人の程度としての申しわけは立つだけの餘地を立派に殘してある。

ところが、僕の度々發表した藤村論を見て、藤村氏は――一つの例だが、――正面に向つて僕に答辯しやうともせず、（しないのはその人の勝手だが）かげに於て、いや味ツたらしく僕にも間接に聽えるやうに、何やかや（而も僕には見當違ひであるから、あらぬ不利益な）反駁をしてゐた。花袋氏はそれほど隱忍な人ではない筈だが、答辯若くは批評の發表し方に於てまだ、どうも、いや味な形がある。氏としては或は無意識に出るのかも知れない。一例を擧げると、某は僕の作に對して、今月の時事文藝欄に於て、『相變らず自己肯定にすぎぬ作……氏は樂天家だと思ひました』と云つた。そしてその論據は簡單にでも云つてはない。それでは漫罵も同樣であらう。その理由を示してゐないでは、答

辯しやうと思つても實に氣持ちが悪いほど出來にくい。渠は常識的にその意味を判斷すればいいと云ふかも知れないが、僕等は初めからそんな淺薄な標準の常識は破つてかかつてゐるのだ。過去の實例で云へば、ヹルレンが夫で、渠はああも悲痛な生活を經驗しながら、人生を愛着する點に於ては何人よりも樂天家であつた。そして僕の人生觀もそんな意味での悲觀的樂天主義であるのは、これ迄でに發表した通りだ。

然し僕の云ひたいのは、おもに、僕の作『毒藥を飲む女』(中央公論掲載)に對する德田秋聲氏と森田草平氏との批評に就いてである。僕はかの藤村氏や花袋氏に對しても社會的な惡意は持つてゐないほどだから、この兩氏があれだけの勞を取られたのに對しては、一層好意で迎へるのは事實だ。が、渠等の思ひ違ひと僕の立ち場とは、僕の生存の必要上、十分に云つて置かなければならない。また、さうするのが、今の似たり寄つたりの考へしか無い作家並に評家等が僕以外の者をも云爲する時の注意を、最もよく促すことにならうからである。今の創作界を見渡したところ、僕の作家としての態度は獨り一番違つてゐる。これは、人にはそれぞれ特色のあるものだと云ふやうな極單純な意味で云ふのでは無い。一主義の自覺とその生活とからして顯はれた姿の上で云ふので――ここへ來なければ、若しくはこれと同等の資格で反對に出た態度で無ければ、外國の一流作家等と對抗は出來ないと思ふのだが、そんな誇り迄をこゝで述べる積りでも無い。

ただ、先づ注意して置きたいのは、僕の所謂破壞的主觀で行けば氣にしないで通れる小主觀をばか

り氣にしてゐる人々は、僕の諸作を悪い意味で最も主觀的だと云ふに反して、少しでも破壞的主觀を知つたのは同じ僕の諸作を今のどの作家よりも客觀的だと云つてることだ。この點簡明に説明すると、悲觀的樂觀と同樣、客觀的主觀の態度の一面だけを見た評言だ。僕が平面描寫を否定するのも、主客兩觀の立方的融合に根據がある。

で、白鳥氏は僕を以て『評論と創作とがよく一致してゐる』と云つたが、秋聲氏は僕が平面描寫を否定してゐながらこの種の描寫をやつてゐると注意した。これに反して、森田氏は僕も平面描寫家であるかの如く云つてゐる。その意を推測するに、秋聲氏の『悔恨の苦痛の少しも伴はない』とか、森田氏の『最少し深酷な倫理的葛藤の起るべき筈』とか云ふ、道念上の不足であるらしい。

現に、後者の如きは、田村俊子の『炮烙の刑』を評した時、不道徳な事件を描く時は殊に一層の鋭い道德的批判をしてゐなければならぬと論じた。道德觀、而も平凡なのを脱してゐない俊子氏のあの作には、さう云ふのも一つの促進かも知れないが、全く考への違ふ僕のに、そんなことは無用である。悔恨とか葛藤とかを道念上に置けば滿足であつた時代は、世界の詩界に於ては、ボドレルを最後とするだらう。最近世界の詩の發達には通じてゐないわが國の一般小説家等の爲めに、この悪魔主義の一大詩人を例にして説明して見よう。

渠は巴里の一隅に在つて世界の文學に一大轉期を與へたほどの詩人である。詩界では、ヱルレン、マラルメ、スヰンバン、オスカワイルド、その他の先驅となり、またフラウベルの無感覺主義やゴン

クルの印象的技巧等も、渠が無ければ出なかつただらう。然るに表象派のおもな詩人等が現はれてから渠が左ほどの價うちも無くなつたのは何故だと思ふ？　要するに、渠を裸にして見ると、なほ淺い底ある道德家の形跡があつたからである。あらゆる羈絆を脫し、あらゆる人情を人工に冷却したと見せながら、中途半端な道念のかな網の上で踊つてたのが分つたからである。之が後に技巧なら技巧ばかりを、氣分なら氣分ばかりを、事實なら事實ばかりを生命とする派が出來た所以だ。之だけ語つても、倫理若しくは道念上の悔恨や葛藤が伴ふ必要があるのは、其作家が道德的かな網にかこまれるのを安んじてゐる場合か、若しくは作家は道德家で無くて道德家たる人物を描寫する場合に限ることが分るだらう。

僕の作の主人公貞夫は、自づから標榜してゐる通り、道德家では無い。否、人の着せる道德には反抗するばかりで無く、自己の要求以外に心を引かれない男である。否、生に執着する現在の苦樂がその儘で宗教だから、その生活から別に宗教を建てたり、宗教を引き出したりするには及ばないとまで考へたほどだ。秋聲氏が『徹底しない』とか、森田氏が『餘りに無雜作』とか云つたのは、先人の道德見に煩はされたからであつて、僕の主人公としては却つて幸ひにも、其反對な所以を凡等に證明して貰つたわけだ。ずる〳〵と引きずれらて行くほどに生に醉つて、その中で生を味はつたことに、道念以外の深い苦樂があつた。(或新聞に『耽溺文士の生活が遺憾なく現はれてゐる』とあつたが、そんな單純な物では無い。)森川氏が『餘計な事』と見た諸條の如きは、この生を味はふ氣分を、その場に、そして

また全體に渡つて、引き起す爲めにはすべて必要なことになつてゐる。同時に、渠が書くべきことを省略したと云つた點には、僕から見ればその省略で十分に氣分が出てゐるのだ。そして其れ以上の細述を望むのは凡俗の好奇心に過ぎない。

それから、新藝術として脫すべき道德の羈絆を脫却すれば、その藝術は一たび技巧を專らにするか、事實に就くかしなければならない。そして僕が先づ後者に就いたのは、秋聲氏も森田氏も十分に認めた。然し事實描寫を以て直ちに平面描寫と見て貰つては、折角の僕の苦心も仇になつてしまう。花袋氏等の所謂平面描寫には、事實と云つても、道德的に云へば常識的、藝術的に云へば感傷的、若しくは哲學的に云へば純物質的なのばかりに滿足しようとするところがある。渠等はフラウベルの人生觀的技巧から來た無感覺主義を誤解して、單に藝術上の區別的問題と思ひ取つたところから、事實と云へば、立方積の無い物と考へてゐる。渠等は思想的生活の事實、心理的事實等を殆ど度外視し、これ等の事實が如何に感覺的に表現出來る道があつても、外面だけから、若しくは偏見から、直ちに不自然だと見爲すのだ。

そしてイブセンの劇中に出る最も突き詰めた思想的人物や事件の發展などを直ぐ拵へ物だと云ふ。ところが、何ぞ知らん、平面描寫論者等が、頭腦の單純と生活の貧弱との爲めに、避けようとしても避け切れない小主觀で見ればこそ不自然だらうが、破壞的主觀から調査すれば、斯く極端に突き詰めた生活若しくは破滅もあり得べき事實だ。そして僕は、少くとも、かの僕の五部作に於て、かかる傾

向ある事實を藝術化したのである。

次ぎに、白鳥氏が『生地のまゝで醜い事件が語られてゐる』と云つたのは、必ずしも非難の聲ではないとも取れる。が、若し僕等が惡魔的無感覺主義にもなれたし、又從來の狹い美學を根柢から改造して、美醜の價値轉換も出來たしする、新思想の藝術家である以上は、さう容易に醜とか美とかを區別出來るものだらうか？　森田氏の『大變詩的な、ロマンチクな表題だが、その實、大分汚ならしい作である』と云ふに至つて、一層獨り合點の自問自答である。僕から見て、夏目氏、森田氏一派の最も舊式だと思はれる點は、實生活その物に於て既に藝術の材料になる物とならないものがあるかのやうに定めてかかつてることだ。そして同材料にならない物は、植木屋が松の枝を繩で結はへるやうに、無理にもひん曲げて形を作り上げねばならぬやうに考へてることだ。然しそれはボドレルが出る以前の修辭派の藝術觀である。

修辭派の絕頂では、藝術を單に『#ジュアライズする』物だとしたらうが、僕等は藝術を實生活に引下ろして、兩者を氣分若しくは態度で同化する。視覺化はその結果の一部で、他になほ味覺化、臭覺化、聽覺化、觸覺化等があつて、つまり、肉靈合致の働きをさせるのだ。視覺化だけで、而もそこに單純な醜美を區別したやうな偏狹な遊び藝術、低徊趣味は僕等には許されないのだ。從つて、貞夫とお島と加能との間のいきさつを親切にも訂正してくれたことも、僕にはありがたく受けることが出來ない。氏等の趣味に合はないからとて、直ぐそれを『三面種』とは餘りに速斷だ。

次ぎに、森田氏は『結構上に顚倒したり、重複したり』するところがあると云つた。白鳥氏の『ごたごたしてゐて』とか、秋聲氏の『粗雜』とか云つたのにも、多少は同じ意味があつたらうが、實生活の進行は必ずしも單純な事實の出來順序と一致してゐないものだ。さきにあつたことがその場では大したことでは無く、後になつて眞の生活に這入ることもある。重複の箇所は僕の作にさう無い筈だが、若しあつたとしても、それが顚倒と同じ意味なこともあらう。森田氏が『餘計なこと』と見たところにも、この意見の相違があるやうだ。氏はまだ『お話し風の所がある』と云つて、『今の平野屋』の一句を擧げたのは僕も削らうかとした位で尤もだと思ふが、さう云ふ箇所は殆どあすこ限りだらう。今一箇所を氏が擧げてるが、あれは作者が讀者に云つてるのでは無く、主人公の思ひ出しになつてるのだ。

秋聲氏が僕の『主觀なり思想なりが時々間に挾まれてゐる』と見たのも、間違ひで、若し僕自身の思想が出てゐるとすれば、時々どころか全體に渡つてゐるのだが、それが決して作者としては出してない。すべて主人公の主觀なり、思想なりにしてだ。平面描寫等はこんな描寫を誤つて小主觀とか、說明とか云つてしまうのである。森田氏も貞夫が鑵詰事業に熱中してゐるそのわけさへ分らないなどと云つたが、あの場合は、何でも一つ事業をしようとしてゐることとさへ分ればいいではないか？

周圍が緊張してゐるので、貞夫がいつも緊張してゐるのは止むを得ない。從つて、森田氏が明言した通り、壽美子がわれ知らず交番の方へ寄つて行つたところを、果して氏の自覺から『眼に見る樣』だとしたのなら、貞夫がかの女を溝に投げ込まうとしたのも別に『唐突』とは氏に見えない筈だらう。が

氏の云つた通り、いつも緊張を續けてゐるから、肝心なところの緊張が『日に立たぬ』とは僕も或程度まで如何にもと思はせられた。(が、氏に、僕がお島に於て新らしい女を提供したかのやうな口ぶりが一ケ所あたつのは間違ひだ)

兎に角、僕は今回のに於て僕の計畫の五部作を完成したのである。これだけを完成すれば、もう、長篇の材料は自分に無いかも知れぬと一時は思つたほどにより拔きの材料であつた。そして五部のうち『耽溺』と『發展』とこの『毒藥を飲む女』とでは、全く主人公なる義雄若しくは貞夫はその內生活までもさらけ出してゐるが、他の諸人物は主人公の感覺若しくは生活に觸れた點だけを書いてある。それが、偶々お島若しくはお鳥、壽美子若しくは千代子の觀察などに於て、諸氏の證明する通り、鋭敏に行つてるとすれば、それだけ主人公が鋭敏であつた所以になるのである。

ところが、短篇『女中の戀』(文章世界)では、女中が內生活まで描かれてるが、それに對する其家の旦那(並に細君)は女中に映じただけの範圍しか書いてない。それを花袋氏は旦那の方から見てゐると思つたので、最も見當違ひにも、自己肯定とか、樂天的とか云つたのではないかとも想像される。こんな讀みこなし方は苟も創作の經驗あるものには、恐らく無い筈だと思ふ。が、秋聲氏も矢張り多少はさう云ふやうな見方をした。と云ふのは、『この心理を逆さまにしてみると下女の方からも同じやうな事が言へるやうで面白い』と。僕は、然し、作者として、この場合、女中の方からもさう云へるやうにはしてない。旦那はただ女中の心に映つた範圍しか書いてないからである。若しまたあんな風に

須磨か舞ひ子の濱かを『西洋』だと思つたりするほどの無智な女などあるものか、作者がほんの興に乘つて書いたに過ぎないと云ふやうな非難であるとすれば、人生の見方に關する淺薄な樂天者は僕では無く、寧ろ花袋氏のやうな輕斷的非難をするその人である。

須磨を西洋と思ふほどの無智者のあるを信じない人は、やがて、イブセンの諸人物のやうな突き詰めた生活を不自然と見爲す常識家で、その人が人生に深く沒入した特殊經驗を有しないことを自證してゐるに過ぎない。たとへば、本年七十五にしてなほ小學讀本を日課にしてゐる老人や、特別な或事情の爲めに、みづから自分の眼玉をくり拔く者があつても、そこに至る事情と生活とが備つてゐれば、決して不自然とも拵へ物とも云へない。否、淺い底を拔いた描寫は、かう云ふ材料を左右するから、平凡中の非凡、乃ち、概念を脫した事實的幻影が取り扱へるのである。

平面論者、乃ち、凡々論者は、これを理想的だとか、從つて一種の感傷的だとか云ふ。が、それは眞に人生の實際を知らないところから、實際には事實と幻影との融合が人生であるのに、純物質的傾向に行つて、この兩者をこと更に區別し、事實から幻影分子を全く取り去つたところに人生の實際があると思ひ込んだ謬見だ。この謬見を取り去らなければ、眞に立派な創作はわが國に出ない。そして僕は、他の殆どすべての作家、評家等から離れて、この說を僕自身の生活としてまでも主張してゐるのであることを、僕は諸君に最も注意して置きたいのだ。(大正三年六月)

星湖氏の作に就て

七月中の雜誌中で、太陽に出た『製絲場の裏』を評せよとの、時事文藝記者の依賴であつたので、僕はこの一つだけを讀んで見た。

この作や中村星湖氏に對する僕の異議は、僕が田山氏のに對するのと殆ど同樣であるし、また星湖氏との間に僕が曾て直接に論爭したこともあるし、今回も亦詳しく云出せば、おなじことを繰返すことになるわけだから、こゝでは簡單に述べて見よう。

一作者が外面の事實を外面の事實として、云ひ換へれば、平凡な事實を平凡な事實として、書現はしたと云ふだけでは作家たる職分は盡せてゐないからである。事實を描寫しさへすればいゝと云ふには、事實的幻影若しくは内外不二の實質を有してゐる事實その物でなければならぬ。

然るに、星湖氏の今回の作を讀んで見ても、相變らず實質の伴つて居ない外面上だけの事實を列べてあるに過ぎない。僕は渠が單に中學生を材料にしたのが幼稚だとか、單純過ぎるとか云つてるのではない。白鳥氏のもとの諸作には隨分書生時代の材を取つたのが多かつたが、それでも僕等が或程度まで賞讃したのは、書生時代を材料にしながらも、そこに特殊な人間としての描寫を見せる傾きがあつたからである。

星湖氏の『製紙場の裏』には、然し、單に外面的な中學生生活しか現はれてゐない。これが若し中學の同窓會雜誌などで發表される素人小說であつたら、何も云ふことは無いが、堂々たる作家として發表した物とすれば、餘りに幼稚なのを指摘しないではゐられないのだ。的場なる主人公のお淸に對する觀察と云ひ、渠の貸費生志願と細田との關係と云ひ、遺精の爲めなどで卒業成績が比較的に惡かつたことゝ云ひ、中學生の一般無特色の外形を報告したに過ぎないではないか？　事實描寫と云ふことがこゝまで誤解されたに至つては、僕は寧ろ氏の爲めに憫然を感じないではゐられない。

僕は星湖氏その人がこゝまで幼稚な人ではなからうと思つてるが、描寫問題上の誤解と單純さとが渠をして斯くも幼稚な作を出ださしめてゐるのだらう。この點を渠にもツと反省して貰ひたい。

戰爭即文藝

文藝は何の爲めに存在するか？　自己生存の爲めである。戰爭は何の爲めに起るか？　國家生存の爲めである。然し國家生存の爲めも自己生存の爲めと、結局、歸を一にしてゐるのだと云ふことは、僕の年來云つて來たことである。從つて、國と國とが戰爭をするにも、また戰爭を避けるにも、國民各個の思想や生活を互ひによく理解し合つてゐればゐるほど、その結果は適切に行くのである。

から云ふ考へで、故長谷川二葉亭も、僕等と同樣、いやな熟語なる文士などゝ云はれるのを嫌ひながら、露國の眞ツただ中に飛び込んで行き、わが國人の思想や文學を努めて紹介しようとしたのだ。渠は不幸にして虛弱と死亡との爲めに、その考へを實行することが出來なかつた。また、近頃、渠のと同じ考へを以つて『僕の毒藥を飲む女』を露譯してゐる人がある。

さう云ふ眞面目な紹介とか、飜譯とか、實質ある文藝とか云ふ物が、今回のさし迫つた歐洲の、そして東洋にも重大な影響がある動亂に臨んで、或一派の人々が考へるやうな呑氣な仕事であるか、どうか？　無論深い意味の生活と生存との上から云ふのだが、僕等はこれを少しも呑氣な仕事でなく、これあるが爲めに戰爭も實質を增すのだと答へるのである。

海上のことにまだ幼稚な考へしか無かつた時代には、世界は海軍の大戰爭などは夢にも思ひ附かなかつた。然し『アルマダ』の全滅となり、トラフアルガルの勝利となり、わが海軍の露國バルチク艦隊撲滅となるに至つて、何人も海戰の必要で而も甚だ怖るべきものであるを疑ふものは無い。エマソンが初めて第二十世紀の戰爭は空中に於て行はれるだらうと豫言した時、それはまだこの米國哲人の夢想に過ぎないと思はれたところが、今回は、もう、現に、獨逸の飛行器が白耳義の都市に爆烈彈を投下した。そして巴里でもそんなことを防ぐ爲めに、終夜、探暗燈をさかしまに向けて、諸天の警戒をしてゐると云ふ。

歐洲の大動亂はナポレオン以來のことで、殆ど百年目である。ネルソンなどが用ゐた戰艦などは今

から見れば、小い帆船も同様であつたのが、今ではドレドノート式以上の大戰鬪艦も澤山出來てゐる。その上に、初めて空中戰の實驗が演じられるのである。物質論者等はこれを單に科學の進歩だと云ふ。が、然し、僕等は科學を以つて僕等の思想と云ふ內部要求を適用した物に過ぎないと見做なすのである。

空中の戰爭をエマソンなどは――多少、もう、外部的になつてたが、――その預言に於て實見してゐた。そしてそのずツと以前に、レオナルドダヸンチの如きは、空中飛行をその精神的生活に於て實現してゐた。これを科學的精神だと云ふなら、その科學はもう、一般科學者等の云ふ外的意味に於てでは無い。僕等はこれを思想上の實生活だと云ふ。そしてそれが、乃ち、眼前の戰爭と同樣、現生活的な努力であつた。

つまりは是れ、思想的文藝の要領になるでは無いか？　そしてから云ふ文藝を僕等は實質ある文藝と云ふ。そしてまた、この第二十世紀に、この意味に於て僕等は既に今回の歐洲動亂とその戰備戰術とに對する實質を握つてゐたのである。

現時表面の事情に於て、わが國を中心として考へれば、日英同盟の條件から見ても、遼東還附の恨みから見ても、或はまた貿易上、わが製品を支那に賣り込む競爭から見ても、獨逸は立派な敵者である。然したとへこの動亂が治つても、國家の存立上、敵者たることは矢ツ張り同じことだ。同時に、また、今、臨時に聯合の味方たる英、佛、露の三國だツて、わが國には矢ツ張り同じ意味での敵者は

敵者である。して見ると、戰爭が同時に如何に世界的に廣がつても、その價値は武裝的平和の價値と違ひは無い。戰爭にも平和にも共通して、而も戰爭のやうな不安と警戒と努力とをしてゐるものは、乃ち、國家の存立苦悶である。そしてそれが自己生存の苦悶に歸する以上は、この苦悶に據つて立つ無遊戲、無餘裕の思想並に文藝は、戰爭その者よりももツと根柢のある戰爭であると云はねばならない。

この意味に於ける文藝を僕等は主張する。そしてこの意味に於て文藝を理解しないものは、臨時の戰爭に於ける軍人、政治家、出費者、並に農工商業者等を、ほんの、でくのぼう視してゐることになるのである。（大正三年八月）

評家數名の批評

戰爭と云ふ物は、無い時には人が馬鹿にしてゐるが、さていよ〳〵あるとなると、人心を一生懸命にならせる。わが國史に於て、戰國時代が國民一般の神經を最も緊張させてゐた爲めに、その結果がとう〳〵信長、秀吉、並に家康の如き偉大な彫刻品を續出創造するに至つた。

僕一個の經驗で云つても、かの日露戰爭は僕をして自分の進路を定めしめたのである。同戰爭のとツ初めに、僕はこの讀賣新聞に於て『豐太閤戰勝の祈り』と云ふ詩を發表したことがある。今から見て

も、あれは僕の內部的帝國主義の發足として決して無價値の作ではなかつた。それから、僕の評論的發表は常に人生觀に於て新自然主義と自分は命じてゐたが、一般からは僕としては不本意にも、たゞの自然主義と同樣に見做されてゐた。

然し僕の一般自然主義者流と最も似てゐたのはおもに破壞的方面ばかりであつて――僕の內部的帝國主義並に自然主義(乃ち、刹那哲學)の人生觀から來た建設の方面に於ては殆どこれに近づき得るものが無かつたと云つてもいゝだらう。自我問題を中心として、實生活の上の革命であつたからである。ところが、近頃ではどうだ? 根柢から眞面目な生活を望む靑年、並に遊戲分子を排斥する文藝家等の間には、僕のやうな傾向が段々理解されて來た。僕は斷言出來るだらうと思ふが、今回の世界的戰爭は一大動機となつて、きつと渠等にこの傾向を攝取確定せしめるだらう。

そこで、今日の批評家數名を選んで、渠等がかゝる傾向に對してどう云ふ立ち場に在るかを、ちよつと調べて見るのも無用ではあるまい。かう考へると、僕はこゝに妙な對立を帝大出と早稻田出との間に發見するのである。乃ち生田長江氏と長谷川天溪氏、阿部次郎氏と相馬御風氏、三井甲之氏と吉江孤雁氏等だ。

長谷川氏の態度は、自分の主張があつてそれを必要上發表して行くと云ふやうな切迫したものではないらしい。自然主義の一唱道者であつた時代にもさうであつたが、渠が洋行後の言論を見ると、一層さうした風が見える。云つて見れば、一記者業家としての態度で、いい思ひ付きからの注意または

出た問題の常識的判斷を與へるのを以て滿足してゐるやうだ。從つて、渠の主張と見えるやうなことがあつても、それをさう深く信じて共に手を執り合ふ氣にまではなれないところがある。

生田氏が餘り自分の主張をしない人である點に於ては、長谷川氏と似たり寄つたりである。また物を云ふに自分以外の典據を主としてかゝる點も同じやうだ。然し前者が少しでも自分の主張を見せると、後者よりも責任の感じが多く出る。そしてちよつと見ると、重々しくも賴母しいが、よく見ると、その重みは帝大流に研究された固定的知識が多過ぎることであつたに過ぎない。渠も亦高等記者業家であつて、その特色は意地が惡いと見られるほどの皮肉的觀察である。

以上の二氏に比べると、阿部氏並に相馬氏はもツと現代的である。獨逸と戰爭したら日本の思想の源泉が枯渴すると云つた桑木博士のやうな馬鹿敎授のもとから、阿部氏のやうな銳利の批評眼ある人が出たのは珍らしい。自我主義は現代の勢ひであるに臨み、渠は銳利に自己の解剖的發想をするのを得意としてゐる。然し僕が渠の書いた物を讀んだ範圍並に渠と時々坐談をまじへた範圍に於て判斷すると、渠は第二の大西祝に過ぎない。大西は銳い批評眼を以て誰れの意見をでも破つて行けたが、自分を建てることが出來ないのをもがき出し、最後は悶死したのだとも云はれた。阿部氏の自己解剖もまだ外的な物であつて、輪廓の內に輪廓を發見してゐるだけだ。あれではいつまでも自己その物には達しられまい。

相馬氏も、自己を問題とする熱心に於ては、阿部氏に劣るまいが、餘りにあせつて自我を把握しよ

うとする行き方に於て、却つて自我その物を逸したやうなところがある。僕も年來主張して來たかの表現即實行の意味を解かうとして、先づ物は斯うだと獨斷してかかる必要があると云つたこと――僕も避けて來た抽象的傾向を同じく避ける爲めだと云つて、自我の爲めに囚はれた自我生活はいけないと論じたこと――この二つは當前の内容に於て矛盾してゐるではないか？ それに、自我生活を自我の爲めに囚へられないやうにしろとは、一應うなづかれるが、抽象の反對なる具體化と云ふ（内容ではなく）概念に囚はれて、概念的説明をしたゞけのことになつてる。つまり、阿部氏の傾向と大した相違はない。兩人ともまだ思想と經驗とに豐富若しくは深刻でないことを示してゐるわけだ。が、相馬氏は――わが神代の神々の生活肯定に於て、强烈な自我生活の主張に於て、表現即實行の言説に於て、抽象傾向の排斥に於て等――多くは、僕年來の意見の（内容は知らず）概念を、他の何人よりもより以上に熟知してゐることは事實と見える。（この點は、思ひ違ひを重ねない爲めに、讀者にして中外日報と云ふ思想新聞を取つてる人は、それに出る僕の『宗敎か反宗敎か』を參照して呉れ給へ。）

三井氏と吉江氏との人生觀的言論の知られて來たのは、まだ比較的に新しいことなので、僕はこゝに簡潔に兩者を云ひ現はす用意と親しみとがない。が、僕等と共鳴してゐるのは疑ひもないことだ。三井氏が目に立つて歷史を根據としてゐるに對して、吉江氏にはその年來觀察して來た自然（と云ふより、もツと狹い意味の天然）が背景になつてゐる。歷史も天然も解釋の仕かたによつては、決して自我主義の邪魔にはならないが、渠等兩人にはまだ邪魔になるほどの古典的若しくは羅曼的な名殘が

あるやうに見受けられる。

この上に加へたいのは、中澤臨川氏のことだが、これは十月の中央公論に論じて見たから、こゝには省く。（大正三年九月）

谷崎氏の『お才と巳之介』

中央公論に出た谷崎潤一郎氏の長篇小說『お才と巳之介』を讀んで見た。なか〳〵の長篇であるに面じて敬意を表して讀み初めたのではあつたが、四五頁を進んで見たら、もう――また例の――藝術家としては大讓步をした講談物かと云ふ氣が起つて、筋に對する興味と運筆に對する非難とを續ける外はなかつた。谷崎氏に若し正當な意味の藝術家たる野心若しくは僭越心が無く、極素直に、若しくは墮落的皮肉を以つて、一種の講談師たるを滿足してゐる心があるなら、僕には渠がかかる種類の小說を作ることに抗議を申し込む權利さへもない。講談師があり振れた筋をあり振れた云ひまわしで講演するに、はたから抗議が申し込めないと同樣の意味に於てだ。

然し僕等は批評家として、もツと高い標準から、あり振れた講談には斯う〳〵云ふ缺點があると指摘することが出來る。この權利を講談その物に僕等が利用しないのは、僕等が講談師なるものを――どうせ最も低級な生活者連として――見くびつてゐるからだ。そして渠等はまだ僕等に見くびられて

もいい氣でゐる。現今の小說界に於ける長田幹彥氏・德田秋江氏を初め、谷崎氏も亦、かかる傾向に在る人々だと僕等は聽いてゐる。その本人どもがその低級や墮落を――稿料にさへなればと云ふやうな弱い厭味を云つて申しわけ附きにしながら――滿足してゐるのは、本人同志ではそれでもよからうが、それが小說の一般讀者に小說と講談とを混同させて、高級な努力と低級な趣味とを判別せしめない恐れが出來る場合には、批評家たるものは默つてゐることが出來ぬ。この意味で、かの秋江氏が恐らく聞きかじりの材料を――多少色づけはしても――槪念的に羅列したに過ぎぬ『再婚』も非難すべきである。が、ここには『お才と巳之介』だけを取つて、かかる傾向の批判を與へて置きたい。

上州屋と云ふ吳服屋をかきまぜたのは、番頭の卯三郞と女中のお才である。そしてこの二人の色仕掛けの犧牲になつたのは同家の兄妹なる巳之介とお露とだ。巳之介はお才をかの女が番頭とくツ付いてゐるのを知つてからも思ひ切れず、お露は番頭を渠が女中と關係あるを感づいてからも思ひ續けた。この間に奸人二名はあり來たりの快樂と惡計とを行なつてゐた。事件の聯絡は如何にも面白い。がその面白味はただ講談的なのに過ぎぬ。運筆は輕浮で、觀察は表面的で、すべて描寫に行かないで說明にばかり落ちてゐる。

第一、作者の態度がぐら付いてゐる。作者の態度には二樣あつて、その一は一人物を中心として他の人物を皆この一人の見聞と經驗とに於て理解若しくは判斷が出來るだけにとどめて置く。乃ち、中心人物以外の諸人物の登場は・中心人物をしてその性格若しくは經驗から渠等を如何に見てゐるかと云

ふことを表せしめる爲めになる。僕の『發展』や『毒薬を飲む女』は嚴密にこの描寫法を追行した。が、今一つの作劇的態度——形の劇であると小說であるとを問はず、出て來る人物をすべて互ひに中心として、それが衝突やら一致やら描出する。谷崎氏の今回の長篇はこの部に屬する。この場合最も注意すべきは作者の主觀がどの人物にもよく透徹してゐるかどうかと云ふことだ。が、渠にはそんな用意があつたとも見えず、渠自身の不純な氣分や單純な趣味を以つて各人物を左右したあとが至るところに見られる。透徹を要する作者の態度が確立してゐなかつた證據だ。たとへば卯三郎のことを巳之介には事件の最初に於て『あまりと云へば現金な男である』と考へさせ、お露には事件の終り頃になつて『口が上手で、心の底は案外つめたい』と思はせてある。作者の捉へたこの意味は前後とも同じ概念であるだけ、前後を聯絡する事件が——內部的には——何等の發展もしなかつたことになつてゐる。從つて、現金だと云ひ、口が上手だと云ひ、また別に作者自身の言として『いなせ肌だ』と云ふのも、卯三郎に取つては、概念だけ定つた實は出鱈目の性格說明としか見えない。斯る出鱈目の運筆は輕浮と云はないで何と云へよう？

第二に、事物に對して相當な觀察を與へてゐるとは思はれない。概念を以つて、若しくは出鱈目な斷定を以つて性格や事件を取り扱つてれば、觀察がしんみりして來ないのは無論だ。今、篇中に現はれた人物の各々に就いて調べて見給へ。善玉惡玉があまりにかツきりときまつて、惡玉の方では、卯三郎はお才を男にした者、お才は卯三郎を女にした者に過ぎず。善玉若しくは世間見ずの氣儘者の表

本としては、お露は巳之介を女にした、巳之介はお露を男にしただけの者だ。そしてそれ等が外部的事件の發展につれて多少の相違を來たしてゐるのは、單に男と女との一般的事情でなければ、徒らに使用人と主人筋との役目が違つてるだけのことだ。『お露は何故か此の頃馬鹿に化粧を凝らすやうになつて』と、『巳之介はぱツたりと惡所通ひをやめにして……その癖……少しも一つ所に落ち着いてゐない』とは、ただ色氣づいた男女概念上の相違だけではないか？　お才が女中として『憎い程濟まし込んでゐる』のと、かの女が『おツ母ア何をしてるんだな……と、いつもに似合はず傳法な言葉づかひ』とは、主人の家にゐる時と自分の家に來た時との相違をただ概念的に示めしただけてはないか？　卯三郎が『一と角の忠勤を抽んでて來たやうに、取引先の報告を』するのと、渠が店拂ひを喰つた日に巳之介の外出を待ち受けて『內懷で兩掌を重ねて物を頂く眞似をした』のとは、また、ただ概念上位置の相違だけを見せたに過ぎぬではないか？　こんな事ばかりの連續では、觀察はいつもうわすべりばかりしてゐるわけだ。

第三に、果して第二項の通り、觀察がうわすべりをして、概念的相違ばかりの連續を以つて事件が組織されてゐるとすれば、自覺的小說の要件なる特殊的性格描寫などを求めるにすべも無くなるばかりで無く、また、事件――これが谷崎氏に殘る唯一の生命――その物さへも散漫な物になつてしまう。『お才と巳之介』とは現にそれだ。事件の移り變りが概念で以つて概念を運ぶばかりで、而もその上にその道筋には作者の氣まぐれな斷定や、物好きな知識や、通がつた言葉やがあまり必要でもないのに

當座の說明として加へられてゐる。『實際巳之介は女に好かれさうもない人柄である』とか、『何となく垢拔けのした卯三郎のいなせ姿』とか、『おオのめじりには千萬無量の媚びと色氣がこぼれて見えた』とか、『寢耳に水の驚きとはこの事である』とか——こんな事々は作者から云はないでも、作者としては、おのづからさう分るやうに本人どものする事云ふ事が內部から具體的に溢れてゐればいいのだ。谷崎氏のには、殆ど全篇を通じて此用意が見えぬ。

小川未明氏の缺點として、珍らしくもやツと具體的に表現が出來た個所があるかと思ふと、その次ぎにはわざ〳〵この具體的事實を作者の感情や思想を以つてへたに說明する爲めにぶち毀わしてしまうことが往々にしてある。渠はぶち毀わすにしてもその前に一度提出する事實若しくは性格に多少の描寫氣味があつただけがまだしも取り柄だ。が、谷崎氏のに至つては至るところ描寫を外れた說明——而も當然の說明——だらけだ。『胸に一物ある巳之介』と云はうが、『金に不自由のない』善兵衛夫婦と書かうが、作者の獨り合點を讀者に押し賣りしてゐるだけのことであつて、內部描寫から云へば空疎な說明に過ぎぬ。そして渠の作全篇がかかる空疎な說明ばかりで長くなつてゐるのだ。如何に込み入つてゐるとしても、昔の小說にあり振れたかかる事件は——事件だけをなら——あの三分の一の長さででも書き盡せよう。そして他の三分の二はその場當座の空疎嬉しがらせの說明を以つてふさがれてゐる。僕が講談的な小說に過ぎぬと云ふのは乃ちそこだ。作者がわざ〳〵顏を出して『つぎは明晩のお樂しみ』と云出し相な低級な氣分が各ページに現はれてるのでいやになる。

その上、この作者が世間に出初めの時に持つてゐた文章上の色彩さへも今日では見ることが出來ぬ。これは作の部分にも、全體にも、氣分の緊張を缺いてるからのことだらうと思はれる。ただ惡度胸を据ゑて萬事を勝手に——もツと痛切に云へば。出鱈目に——說明してゐるばかりが目に付く。

最後に、谷崎氏のこれまでにも取り扱つた事がある材料の一特色とも云ふべきことが、巳之介とお露とにも多少現はれてることだ。前者はお才に、後者は卯三郞に、種々裏切られたり、苦しめられたりしながらも、それぞれの異性に對して無際限に屈從しようとする冀望があつた。惡番頭がこちらへいい加減な嬉しがらせを云ひながら、お才ともくツ付き合ひ、巧み合ひをしてゐたことを知つても、お露はそれを戀しがつて、『たとへ私は欺されるに極まつてゐても、どうせ家出をしなければ』と云つてかけ落ちし、その儘宿場の女郞に賣られた。また、お才の手さきになつたもとの番頭に自分は泥川へつき落され、自分の妹は宿場へ運ばれたのを悟りながらも、巳之介はなほその場でお才の傍へ『にた〳〵笑つて迫つて行つた。』いづれもこれを病的にまで持つて行けば、例のマゾヒズムだが、この小說ではそこまで深くは這入つてゐない——作者の用意が不足であつた爲めか、材料を有り振れた型で結末をつけようとした爲めであらう。（大正四年九月）

『妻を買ふ經驗』

生見寧氏の作はこれまでまだ讀んだことがなかつたが、今回氏の『妻を買ふ經驗』を一つ見たところでは、作者が餘りおしやべりで、空虛な文字があり過ぎる。たとへば、昌造の赤面のことを說明するあたり、また『豫算がなかつたら、勘定に不足は生じないわけだから』と結んだ一節などは、話し家が與に乘じて徒らに蛇足を加へるやうなことにしか取れない。また『所謂痛快と云ふほどの安値な快感』と云ふことが云つてあるが、それをさへ『味へさうにもなく』と說明されてる昌造の人物が、その前後に於いて、否、全篇に渡つて、痛快を安値だと考へるほどのしツかりした性格とはなつてゐない。

第二に、作者の觀察點がいつもぐらぐらしてゐる。昌造のことを書いてる時は容易に昌造の心を忖度し、內藤のことになるとまた容易に內藤のつもりになり、甚だしいに至つては、ちよツとばかり出る富久屋の女將のつもりにも容易になつてゐる。そしてそれがかの複雜を十分に統一する用意ある脚本作者等の如き深い用意を以つてゞはないから作者の――それこそ『安値な』――人物取り扱ひ振りが、僕等から見れば滑稽にさへも感じられた。

次ぎに、以上のやうに作中に蛇足が多く、また觀察點が容易にぐらついてる缺點があるとしても、なほその他に何かいゝところがあるかを考へて見た。內藤が同じやうな事の經驗家たるを以て自任してゐながら、思ふやうにやれなかつた事、昌造が意久地なくもなほ自分の愛婦に執着し愛子の死んだのを自分の事にして考へてる事などは、すべて取り扱はれた材料としては面白い筈だ。が、作として

はもツと立ち入つて觀察描寫してこそ作者の腕も信じられて來るのだが、そこまでは達しないで、ただうはツつらをすべつて行つてしまつた。

最後に、この作に對する一批評のことを擧げるが、赤木桁平氏が時事新報に於いてこの作に『技巧の面白さ』があると云つたり、またそれ以外に、『感動を强ゆるに足る丈の力强い所がある』と云つたりしたのは、つまり、何を標準として云ふのかと質問したくなる。否、赤木氏等のかゝる批評にしツかりした標準があるかどうかを疑ひたくなる。但し、たゞ低級な技巧や感動を——無學と無經驗との爲めに——高級の物としての答辭は聽かないでもいゝ。（大正六年二月）

文壇現狀論

時事新報に文壇の現狀に就いて島村抱月氏と和辻哲郎氏とが相反した意見を述べてゐる。今、それに對して僕も少し云ひたいことがある。

島村氏が自然主義を個人主義から發したとし、その個人主義を單に利己主義と解し、その利己主義も單に英米流のミルやスペンサ的な解釋を取つたのは、渠自身の狹い固まつた智識から生じた得手勝手の說明である。が、和辻氏が自然主義を單に因襲道德の破壞、虛僞生活の摘發に過ぎぬとし、人道主義などがそれに同等、否、同等以上を以て相反するものゝ如く云つたのも、また渠のあり來りの理

想論者たることを示したゞけのものだ。

島村氏は、さきの自然主義派の一人としても決して主張者ではなく、傍觀的に研究して見る人であつた。それが今日同主義を利己主義と見爲すのには、利己主義に僕等の云ふやうな純化があることを知らないのであるから、今の非自然的傾向を自然主義から『より寛大』になつた妥協的推移としたのも、さう主張的責任を感じない渠としては珍らしくない。また、和辻氏は自然主義と人道とを別つべからざるところで別ち、徒に區別的概念の投影に應じて吠えてるのだ。こゝでは、專ら後者に就いて云はうが、――

渠は自然主義の缺點的特徴として、第一に、『自己を高めようとする要求の缺如』を擧げた。が、自己を空疎にして人生から離れることが決して高尙ではない。僕等は飽くまで人生に執着して而も人生の虛僞な點を摘發して行く。そこに概念的な區別を許さぬ人間(人情若しくは人道)が顯はれる。これが『ありのまゝ』と云ふ言葉で云ひ現はされて來たが、この『ありのまゝ』にも程度があつて、摘發が深くなるほど『分散』どころか、主觀的、內部的に緊張して行くのである。如何に理想的傾向あるドストエフスキのでも、いゝところはこゝに在るのだ。

ところが、僕のかゝる創作だけに對して受けた新傾向と自稱してゐる人々の批評に依つて見ても、『たゞそれだけであつて、それ以外に何もない』と云ふやうなことが落ちだ。それを渠等の『あらねばならぬ』物の要求として見ると、概念を求めてゐるのである。否、敎訓を求めてゐるのである。そ

れでは生きた創作に對する自然主義や人道主義やの問題ではなく、創作家を死んだ教師にすべきか否かの問題だ。そして概念を示めして滿足する創作家は如何に人道主義の諸概念を示めしても作家としては死人同樣なことを豫め承知すべきである。トルストイでもドストエフスキでも概念的教訓家ではなかつた。

第二に、『自然を淺く見ること』が缺點だとある。然し自然を內部的に洞察するもの等（かゝる自然主義者もあつて來たのだ）には、幻影も心理もすべて現實である。そして、この見解を以て自己を描からが、他人の生活を描からが、決して『辯護』ではない。之を單純な淺薄な辯護と見るものこそこちらの洞察を洞察出來ない事である。然し爰までの見解に進まないで平面描寫を唱へた人々のでも、——例へば、田山花袋氏のでも、——今の概念的に人道主義をほのめかした作（例へば、武者小路氏の）などに比べては、見方が淺いどころか、まだ〳〵深みがある。和辻氏の『質』と云ふのは抽象した概念に過ぎぬやうだから、それに對する『分量ばかり多くて』は却て實質の堆積であることもあるを思へ。

斯う論駁して來ると、渠の二要點は實際的研究に疎い學者が、空疎を實質と取り違へる理想論者か、のから威張的駄辯である。殊に、第三の『內的必然性なくして仕事する』など云ふ條目に至つては、なほ更ら問題外のことだ。どんな時代にだツて雷同者どもがゐて『文學の製造』をやる。それが今の新進家どもだけにないかの如く云ふのは、渠の偏癖に過ぎぬ。また、自然主義の大家連の作をすべて製造的と云はうとするのなら、なほ更らのことだ。

渠はなほ進んで机上の空論的に島村氏に提出してゐる問題は、これを二つにつゞめることが出來る。その一つは、『自然主義は根本に於て現代の社會を肯定してゐる』だけで、その社會の假面をはぎ取つたとて、たゞ『露骨になるだけではないのか』と云ふこと。然しこの露骨とは渠の所謂分散的な『ありのまゝ』であつて、僕等の云つて來た内部的『ありのまゝ』でないことは前以て述べた通りだ。

して見ると、この質問の當つてる範圍は一般には自然主義者等のたまに失敗した作。それから少し嚴密に云つても、田山氏並に殊に島崎藤村氏の平面描寫の諸作に限られる。それ等の諸作に見える作家が『根本的に社會と戰ふ必要をも感じてはゐない』としても、自然主義者全般に渡つての評言にはならぬ。また、同じ平面描寫でも、島崎氏のよりは田山氏の方に社會に對する戰鬪的精神がいつも現はれてゐる。そしてそこに積極的情熱的人格の片影も見える。それが然しただ材料的露骨であつても概念的露骨でないだけだ。材料は露骨になるだけ深く這入れるが、概念は露骨になるだけ淺薄になる。和辻氏は材料と概念とを混同し、概念で材料が奇麗に包めると思ふばかりでなく、今の新進作家等の如く概念の淺薄に露骨なのを却つて人格が情熱的だとか、深刻的だとか見たのだらう。

その二では、渠は『人格の尊嚴』ある個人を描いたのは『たゞ新らしい作家だけではないか』と云ひ、渠等には『猛烈な道義的癇癪が燃え立つてゐる』と。僕は渠の口調を借りて『新機運を造りつゝある人々(多分武者小路氏や里見氏等を云ふのだらうが)のうちの誰れが……(さう)してゐるか』と反駁したい。概念的に尊嚴ある人格者を描けと云ふのなら、創作の材料を狹い範圍に限つて、作家を專門的

に形式ばるべき教師にするわけである。

所謂新らしい作家等の間に作家としてそんな不見識に落ちるものがあるならあるで勝手だが、評家から見れば少なくとも『八犬傳』のやうな物ばかり作れと云ふのと同樣だ。これでは自然主義旺盛の當時にこれに反對を唱へた後藤宙外氏や登張竹風氏等の考へとあまり違ひはない。それに作中に『自己の辯護』を氣にした渠としては、これほど矛盾なことはないわけになるのだが、そこはここに許言しまい。僕等は如何に乞食や無賴漢のやうな凡人や不人格者を描いても、人間の根本性を發揮すれば、そこに具體的な(即ち、概念的だけではないところの)人性なり人道なりを現してゐるのだ。そしてそこにまた作家としての人格もあり、材料となつた人間の尊嚴もある。外形的に如何に猛烈に道念を燃え立たせた(そしてそんな人はゐるかも知れぬ)からとて、具體化を得ないことを書いてれば、創作としては何等の價値もない。

渠がこんなことを『時事問題として』來たのが一層片腹痛い。渠等の所謂人道主義(飜譯的だ)が時事問題として淺薄であり、不成立であることは別に日本評論並に日本主義の四月號で述べることにするが――。一體、和辻氏も哲學の研究家に似合はず、阿部次郎氏等と同樣、實際的な問題になると、兎角議論を感情的にしてしまふやうだ。大學出であり、故夏目漱石の弟子であることが、實際は卑劣な人物をも恰も高尙にした如く阿部氏等が思つてると同じやうに、和辻は。また、口に人道主義を唱へたり、作中の人物にそれらしいことを見せたりしてあれば、直ちにそれが情熱に見え、而も猛烈な情

熱に見えるらしい。創作に關する事實上の觀察力のないにも程があらう？　それでは机上の理屈だけは知つてるが、いよ〳〵實物の美術品に接すると、見當違ひの判斷を下したり、何等の應用的鑑賞も出來ないそんぢよそこらの美學者等と同じではないか？

渠が里見氏の作を讃めたその讃め方の法外で滑稽であつたことは、既に他にこれを指摘した人がある。が、僕も、僅かのぼやを見て大火事の如く吹聽する人に――その人が如何に確信ある如き口吻があつても――信用は置けないのである。僕はあながち島村氏の方を辯護するのではない。渠が今の文壇現狀を自然主義からの妥協的推移と見たのには、あまりに呑氣で速斷的な尤もらしさがあるを免れない。この點では人道主義的傾向は推移でなく別出であるとした和辻氏の方が當つてる。進んで云へば、自然主義以前からあつた形式的傾向（乃ち、生田長江氏の所謂自然主義前派）が文壇の枝流として享樂派（スバルや三田文學派）と理想派（白樺）とに別れて存してゐたのだが、そのうちの後者が本流の少し勢ひをゆるめたに乘じて、淺薄な非戰主義的傾向の人道論を取り入れて、時節がら多少の注意を引き出したに過ぎぬと見た方がなほ當つてる。

然し渠等の如き飜譯的人道主義派はその勢力に於いても自然主義に據つて地步を占めて來た人々のよりも貧弱だし、またその創作に於いても自然主義が前存の形式文藝をうち破つた時のほどの深い根據を持つてゐないのだから、現今でもまた文壇の本流とは云へないのである。そして渠等があんな概念的滿足をしてゐるのでは、恐らく、將來も本流にはなれまいと思はれる。（大正六年三月）

人の主義

『時事新報』文藝欄に於いて、一匿名子が云つた、『主義は藝術の一方面だ。藝術の根本は人である、主義ではない』と。藝術の何たるかを實際には知らず、たゞ徒らに中途半端な理論を弄するものは別として、苟くも實際に藝術家たる以上は、こんな頓馬なことを考へてゐられるだらうか？

今、假に藝術を取り除いた自餘の社會要素、乃ち、分業を調べて見給へ。政治に於いても、教育に於いても、將又宗敎に於いても、それがその分業者に體現されて價値あり生命ある所以は、主義である。そして此主義は生命であり、生命は乃ちその人である。乃ち、その根本に於いて人と主義とを別別に考へることができないのを常とする。然るに、ひとり藝術に於てのみこれを區別できるやうなことがあり得ようか？　主義を外部からの束縛と見て、これを有しないのを自由の生活などと思つてるものには、自由その物も外的條件になつてるのである。

この問題に就てはここ十數年來僕が直接に攻撃のまとになつたり、また間接に受け身になつたりして屢〻戰つたのである。僕の記憶によると、この問題に於ける僕の反對の相手は河井醉茗氏や森鷗外氏であつたこともある。早稻田派の坪內逍遙氏一派であつたこともある。また、帝國大學派のうちなる夏目派の人々であつたこともある。最近には、また武者小路氏、廣津和郎氏、加能作次郎氏であつ

た。所が今回また本欄に於ける匿名氏が現はれたので、此に一應僕の年來の主張を簡單に披瀝して置く必要があると思はれる。

所で、玆には何故に誤つて主義なる物を排斥したり、然らずとも第二義に落して置いたりするものがあるのかと云ふ一般的理由を箇條書にして見るのが手ツ取り早いだらう。

（一）無主義だからであらう。自分に一つの主義が立つてゐない者は、人の熱心な主義呼ばはりを理解するだけの素地もないのである。こんな人は政治に於いても藝術に於いてもぐら〳〵と臨機應變など云つて唯偉がつてるより外に仕方がなからう。そして自分では既にできあがつてる樣に思つても、主義の人から見ると、丸で中途半端に浮はついてるのだ。現今政治家等の多くはそれだ。

（二）雷同者であつたからだ。自分が無主義では困るとまでは思ひ及んだが、自分のまだ碌々握りも得ないところの主義運動に雷同的に參加してゐたりするものがある。そして自分に體得がない罪とは知らないで、その責めを主義その物に負はしてしまう。つまり、イブセンが流行するからと云つてイブセン主義に、今更ら自然主義でもないだらうツて曖昧な人道主義に馳せ參して行くやうな、やツと投書家上りの程度などは、皆、此手合ひだ。渠等はすべてイズムと云ふことを外的に自分に與へられるものと解し去つて當然の如く考へてゐる。

（三）批判あつて信念なし。この種類の排主義者どもは全くの無主義者でないかも知れぬが、自分から湧き出る主義をまだ充分に自得してゐない爲めに、イズムを矢ツ張り雷同者同樣に解釋してゐる。

雷同者どもと違つた點はたゞ、外的に與へられるものなら受けるに及ばぬと考へて、それを離れようとする所に在るだけだ。けれども、然らば自分自身はどうするかと云ふ場合になると、善政さへ行へばいいとか、好い作さへできればいゝとか云つてるに過ぎない。そして善政や好い作には本人の主義から生ずる誠實な信念が伴はねばならぬことを知らない。匿名子もそれだらう『勝れた藝術的價値のあるものはすべて好い藝術だ』などと云つて、その好い所以は其人の信念、否、主義に在るを忘れて居る。

(四)必然の反撥時代に在る場合。一主義を誠實に立してゐた人でも、必ずしもそれを一生つづけるとは限らない。或内的必要から別な主義に轉化若しくは轉進することもある。所で、此一轉機にゆるみを生じ、不斷の思想力が不足であつた爲め、若しくは、棄てた前主義に對する感情的反撥の爲めに、第三種類のと同じやうに『好い物さへ』を云ふことがある。かのホイスマンがゾラの科學的寫實主義に熱心であつた夢のさめた時がそれであつた。渠は然しそんな時に實際にはいゝ物は作れなかつた。渠に『カテドラル』の如き名作のできたのは、渠が新なる力を以て表象主義に進入したからであつた。

以上のたツた四ケ條の道理を考へて見ても分る通り、主義を離れて人がないのは勿論、又藝術も藝術的生活もないのである。そして其人としては匿名子の言葉を用ゐれば、『一本の國道』より外にないが他の人にはまた『も一つの本通り』の方許りであるのを妨げとしない。

けれども、これが匿名子の云ふやうに主義を第二義若しくは藝術の一面に落す所以にはならぬ。た

だ色々の主義が色々の人にその人全體として生きて行くのである。また、その人の藝術全體としてだ。
主義は其人には第一義だが、異つた人異つた主義には高下のあることをも考へて見ねばならぬ。少くとも、その程度に於いて十分緊張したものと緊張不足なのとがあることを。藝術として緊張の不足してゐるのは、それだけ根本實質上に於いて低級なのである。ここに於いて主義は形式上に無主義を淘汰して行く傾向があるばかりでなく、實質上で低級の主義を征服するのである。藝術家として此處まで自覺してゐない人でも、――例へば容易に一般民衆に讓歩して通俗的傾向の藝術を作るを主義としても――その人とその主義とは決して離れてゐない。ただ讓歩の爲めに緊張を失するだけのことだ。それを淘汰征服しようとするのは、高級藝術家若しくは批評家なる僕等の自然の立場であつて、之に反對するものは辯護すべからざるものを辯護してゐたのだ。
そこで僕等には主義乃ち藝術の上に於ても第一流、第二流、第三流等の區別を實質の上からする見識が生じて來る。お伽噺や敎育譚を、またスチブンソン物やコンラツド物を、その形の上ばかりで第二流若しくは第三流等に落すのは無理な場合もあるか知れないが、その實質から云へば、何うしても第一流の藝術にすることは出來ない。匿名子が夫等を僕等の云ふ高級藝術と同等に取扱はせようとしたのは確かに一つの間違ひである。
文壇として、また一個の藝術家として、『多角なる表現』があるのは構はないだらう。が、高級藝術程には何うしても緊張しない性質のお伽噺などを加へて文壇が多角になるのは唯賑はしを得ると云へ

る丈で、決して實質の豐富になる所以ではない。これは一藝術家としての場合に於いても同じことだ。

乃ち、匿名子の所謂『多角』を望むのは、つまり、第一流ばかりの藝術でなく、第二流、第三流、第四流等のも出てゐると云ふわけになるのだ。そしてこれには僕等も決して反對しない。

が、第二流以下の實質しかないものが、――たとへば、まだいゝ方では故夏目漱石や最近の長田幹彦氏の如き、もツと下がつたところでは菊地幽芳氏や碧瑠璃園氏の如きが、――その讓步若しくは弛緩した實質の爲めに却つて分り易く、一般世間には最高級藝術家よりも以上に歡迎されると云ふ故を以て、高級第一流のと同等な資格を要求して來るのは僭越であると僕等は注意して置く必要がある。

だから、イズムなど云ふやかましいものはいやだと第二流以下のもの等が訴へるかも知れぬが、渠等もそれ相當な低級の主義は持つてるのである。玆に至つて、いつも主義の淘汰や征服が續き、高級な主義を維持するもの等のみが人として內的勝利を占めて行くのである。そしてこの內的勝利者等が文壇に多くなるほど、その文壇は實質上の豐富を增すのである。そして又其他の理由による賑はひは、如何に多角方面でも、すべて皮相の變化に過ぎない。（大正七年五月）

僕のイズム觀を述べて諸家のイズム觀を評す

この表題は新潮記者が僕に持つて來たのである、同記者によると、同誌五月號に於ける諸家のイズ

ム考察は僕の時事新報に出した『人の主義』がもとになつたのださうだから、責任上ここに記者の依頼を承諾して一應論じて見ることにする。

その前にちよツと云つて置きたいのは、僕の『人の主義』で述べた要點の一部である。僕は主義と云ふ物はその人であるとした。そしてその人なるところの主義を人々が排斥したり、第二義に落したりする所以を、(一)、無主義だから。(二)、雷同者であつたから。(三)、批判あつて信念がないから、若しくは、(四)、必然の反撥時代に在るから。この四ケ條に實例まで擧げてつゞめて置いた。ところが、時事新報記者は新潮のイズム考察號を紹介して、『長與、芥川、江馬、廣津、森田、豐島の諸氏も皆、結局は人があつてのイズムである、自分の思想なり、感情なりの傾向の全部がそれで蔽はれる筈のものでないと云ふに一致してゐる。……元來、これが根本になつた岩野氏の所謂イズムは有り觸れたイズムと云ふよりも、もツと廣い意味の言葉で説明されるべき性質のものであつた』と云つた。僕の所謂主義を廣い意味で云つたら人その物である。否、その人の思想なり感情なりの緊張してゐるところ全體だ。そして不緊張な部分までも蔽ふ廣さは要しない。

蓋し人として不緊要な時は、藝術家にも、その他の人にも休養であつて、積極的な考察にはのぼすべき部分でない。が、無制限の論理や無省察の獨斷をいゝことにしてゐるものは、兎角、そんな部分をも抱括しなければ自由な考へかたでないかの如く思ひ易い。たとへば、有島武郎氏は無省察にも、さきに新潮二月號に於いて、『本質的にいふと藝術家を造るものはその所謂實生活ではない、その愛の

强さ深さ高さだ』と云つた。けれども、渠の考へかたに從つて云つても、强い、深い、若しくは高い愛のほかに人たる藝術家の問題とすべき實生活があらうか？　乃ち、渠の所謂愛は藝術家の緊張した實生活であるべきだ。今、この訂正された愛を主義なる語に置き換へて見給へ。そこに第一義的な主義がよく省察されよう。乃ち、藝術家の生活緊張を云ふのである。そしてこれは外部から與へられるものではなく、內部から生ずるのであることは再び云ふを待たない。

この意味で主義は芥川氏の所謂『自分の內部活動の全傾向』である。長與氏が物ごとを目的と手段とに分けて考へたよし惡しは別として、渠が兎に角『生きる目的があるから』、『人は主義を持つ』と云つたのもそれである。そして主義とは豐島氏の考へたやうに『作品の後からついて行くべき』ではなく、渠の所謂『人生を底から動かす』ものが直ちにそれだ。從つて森田氏の『イズムあつての作家でなく、作家があつてのイズム』も、渠が『あらゆる作家に取つてイズムは必要である』と云つてる以上はなほ更ら、『作家あつてのイズムでなく、イズムあつての作家』とも云ひ換へることができる。主義的緊張のないところには、實際の創作も作家もないからである。かう云へば、以上の諸氏も恐らく異議はなからうと思ふ。が、なほ主義と云ふことにいろいろ躊躇したり、侮蔑を加へたりするのは、僕の擧げた四ケ條の一つに該當しながら、主義といふことを第二義的に解するからである。

これには、解釋の仕かたに入らざらぬ讓步や根本的間違ひがあるので——こゝにはまた別な個條書きを初めて見よう。

（一）　主義は作家が宣言してかゝるべきものであるかの如き考へ　これには廣津氏が小心翼々として否定を申し立てたのは尤もだ。『藝術家がみづから標榜してその藝術作品の上に表さうとつとめた主義よりも、その人が別段そんなに明確に表さうなどゝ努めなかつた點に、却つてその人の生命がよりよく表はれて來る』ことがあると。けれども、渠は人の生命なる主義があることを否定したのではない。

（二）　主義を抽象的、概念的な主張と思ふこと　廣津氏が主義の宣言とか標榜とかを氣にしたのにも、この思ひ誤りがあつたやうだが、芥川氏も『又もう一つイズムと云ふ語を或思想上の主張と飜譯すれば』云々と考へて見た。豐島氏に至つては、『此場合主義といふものは必ずや何等かの哲學的背景もしくは倫理的背景を有すべきです。だから人道主義といふやうな言葉は何かの意味を有しますが、新技巧主義などといふ言葉は無意味なものです』と云つた。けれども、是は違つてる。主義的緊張が却つて創作家をして渠の所謂『常に赤裸であり、常に獨りで』あらしめるのであつて、それに作家が內部から技巧なり描寫なりに緊張してゐれば、それもその人の意味ある生活、乃ち、主義と云へる。これに反して、若しまた作家の哲學觀や倫理觀が背景としてもたゞ概念的に出てゐるだけなら、それを眞の主義とは云へない。

（三）　主義を外部からの拘束と見ること　森田氏は『但し必要だからと云つて、他からこれを押附けべきものではない』と注意した。豐島氏は又『イズムに囚はれる時、作家は或意味で衰退する』と

云つた。江馬氏は『或主義にこだわるよりも先に、その本質に於いて既に立派な藝術家』、長與氏は『囚はれる事なく、公平に自由に』などゝ。けれども、それらはすべて主義を第二義的に見たからであつて、――僕の云ふやうに生活の緊張が主義なら、これに拘束されても內部的であつて、外部的ではない。まして自己の緊張に就くのは、制限ある自由と云ふものだ。そして無制限の自由は散漫の意味だから、主義にもならず、藝術家の生活にもならぬ。

（四）人と主義とを別つこと　これも主義を外部的に見たところから生ずる謬見だが、長與氏は『イズムなどゝ云ふ一面の名でくゝるにしては彼等（諸天才）は餘りに大きく、餘りに人間で、且餘りに全體である』など云つた。が、藝術に現はれた天才が人間であり全體であるからこそ、その人に主義が見られるのではない。そりやア、たとへば、レオナドダヸンチの如き、その人物なり、その藝術なりには、古典主義の外に浪漫主義もあり、現實主義もあり、感傷主義もあつた。が、それらの諸主義を古典主義が統一してゐたところに渠の眞の主義が讀まれる。そしてこの主義は渠よりも小くもなく、また大きくもなかつた。若し古典主義と浪漫主義、若しくは理想主義と現實主義が、一人の天才若しくは藝術家に、長與氏の所謂『公平に』若しくは『自由に』採用されてることが實際にありとすれば、その人は恐らくまだ雜駁未熟であつて、眞の天才ではなからう。それから、一人に諸主義が發見されるとは反對に、各人各個がそれぐ\別な主義を持ち得るからツて、主義を第二義に落すものが少くはない。が、其人が其人の內部から生ずる主義は他と違つてればこそ、却つてそれが尊くもあり、又意味

あるとも見られるのである。

（五）藝術を特別に神聖視すること『昔から……或主義の下に偉大な藝術が生れたことがあるか』と云ふ江馬氏の否定的疑問ほど、高慢ちきにして空疎な言は恐らくなからうと思ふ。藝術並に藝術家を舊式な藝術家的俗見によつて特別扱ひにしようとするに過ぎない。實際的に答へても、ホメロスやシエキスピアには主義的自覺はなかつたらうが、――從つてその藝術を偉大と云ふには舊い意味でに過ぎないが、――ヹルレンやホイスマンズになると、もう、この自覺があつて初めて偉大な藝術ができたのだ。ホイスマンズが僕の前出四ケ條のうちの第四に當る時代に主義など入らないと云つてた時は、その所謂『いゝ物』は空想に過ぎないで、實際にはできなかつた。藝術は決して人間離れのした物ではない。殊に近代人のそれでは、主義的自覺がなくてどうして『眞正な藝術』と然らざるとの見分けがつかう？　また、自覺なくてどうして『本質に於いて既に立派な』ことができよう？　江馬氏は『主義の價値はそれが眞か僞かによつて極まるのであつて、決して新らしいか舊いかによつて極まるのではない』と云つたが、その眞僞の見分けも近代では藝術家の自覺によつてきまるのである。それがなくて、乃ち、主義的自覺がなくて眞正な藝術を産み出さうとする渠の所謂『藝術主義』を主義と云へるものとして見ても、矢ツ張り、新らしいものではなく舊い物である。

（六）人間の目的を安値にきめてかゝること　長與氏が目的を主義だとしたに就いて、僕はそのよし惡しを判斷しないで殘して置いたが、こゝにそれを論及する場合となつた。渠の目的とは人間の

『幸福』であり、『完全』である。そしてそれを『善い目的』だとして、『人間が眞に善ければ其人は必らず善い目的(乃ち、善い主義だ)を持つ』と云つた。こんなに安値な、樂天的な論法がまたとあらうか？僕等は人間として幸福や完全を永久に得られるものでないとしてゐる。だから、そんな目的は安値家には第一義であらうが、僕等には第二義、第三義のことである。僕等は藝術家として生活の緊張と不緊張とは直ぐ判別できるが、その善惡や幸不幸はこれを容易に云へないし、又云ふ必要もない。新解釋の藝術はそれから目的や理想が分離してゐないので最も緊張するのである。然るに、こゝに『先づ目標を正せよ、然る後に道を論じるがいゝ』などと云ふのは、如何にも呑氣過ぎた。僕等に直接に分つてるのは道だけである。乃ち、藝術家としての緊張充實の道だ。これを歩むこと、この實生活だけが僕等に現實でもあり、幻影でもある。これ以外若くは以上に渡るのは僭越であり、且、無用である。

（七）永續を求めることの間違ひ　長與氏はまた『主義は一時代だけのものであるが、美は常に若く新らしい』と云つた。これに比べると、森田氏の方はまだしも分つたことを云つてる。曰く、『或る時代に流行する文學は其時代の要求する文學である……其時代の要求するやうな藝術がその時代には持囃される。』この流行とか持囃されるとか云ふ言葉を決して卑しい意味に取つてはならぬ。僕がさきに青年文壇で書いた通り、流行の外に不易はない。流行の中にたゝへられた不易以外の不易は、あつても固定の概念に過ぎぬ。藝術の主義も一時代若しくは一場所限りのものであるが當り前だ。否、一人に取つても、たとへばユゴウやホイスマンズに於ける如く、或時期と他の時期とで主義は變はつて

もかまはない。その時、その場に緊張の生命であつたら、その主義はその人に全部であつたのだ。美その物だツても、そのやうに考へられないのでは、固定美の概念をいゝことにするわけにならう。如何にシェキスピアがえらかつたと云つても、——そしてそのえらさに美も伴ふのだが——現代には殊に現代のわが國に於いては、さう昔のやうに共鳴を受けるものでない。ゲイテだツて、トルストイだツて、またイブセンだツて、皆さうだ。第一義的な主義は人であるから、人と共に變遷推移するのは却つて自然である。

（八）主義の實質的征服作用を知らぬこと　何々主義と云へば、その名義に於いてもその內容に於いても全然客觀的な區別があると見て、その理由や說明を形而上學的な概念や獨斷にまでも持つて行くことの間違ひな事は、既に第七條に於いて暗示されてると思ふ。同じ古典主義の傾向でも、レオナドのはいつまでも未成品なる人生の爲めの藝術となつた文藝復興の先驅をしたが、ラフアエルのになると、不自然なほど完成を求めた藝術の爲めの藝術として技巧の方面に緊張した。ベクリンの畫を思想や構圖から見るとどうしても浪漫主義だが、その技巧から云へばどうも古典主義を脫してゐない。森田氏はさきに新理想主義若しくは自然主義的理想主義を唱へ、トルストイの作が或ところまでは自然主義だが、それ以上理想主義になつてるやうに云つた。が、僕の見るところでは、森田氏のは自然主義を踏みつけにして理想主義を行かうとしたに過ぎず。トルストイはこれに反して、森田氏を理想主義がなければ物足りないと思はせたほどに、人生を極端な自然主義的に見てゐたのだ。脚本家として

のイブセンは却つて理想主義者として緊張したが、小說家としてのトルストイは寧ろ自然主義者として充實した。から云ふ意味の古典主義、技巧主義、若しくは自然主義は客觀的若しくは形而上學的に與へられた名義ではなく、その人の生活を統一した內部的原理であつた。既に原理の統一力、緊張力を認めた以上は、その力がその人のうちなる他の諸主義を征服したものであることも認められよう。そしてその自己內の諸主義を征服した原理、乃ち、眞の主義の餘力は、また自己外に向つても征服作用をつゞけるものだ。この場合、甲の人の主義が乙の人のそれを排斥、嫌忌、若しくは否定することは、ただに當前のことゝして許されるばかりでなく、さうなければ主義の內部生命を失ふことになるのだ。從つて、宣言的にも又不言實行的にも、主義的爭ひをするのを大抵の諸家の如く下だらない事のやうに思ひ爲すのは、若しくはそれに超然的態度でゐるのをえらいやうに思つてるのは、いづれもその本人の緊張がまだそこ迄に立ち至つてない事を證據立てゝるのも同前だ。

（九）　批評を卑しむ弊　藝術家としてまだ緊張が足りないでゐながら、既に足りてるやうな顏をしてゐるもの等に限つて、批評を受けると直ぐ惡口と思つたり、うるさがつたりするのが常だ。そして江馬氏の如く『批評家や末流達がそれにどんな主義や名目を與へようと、それは彼（藝術家）の知つたことではない』などゝえらがつてる。けれども、批評家に末流がある如く、藝術家にもそれがある。僕等は末流同士のことなどを問題にするには及ばない。森田氏は割り合に一應はよく分つた事を云つた、『イズムは作に臨んだ後、その作の中に發見すべきものである』と。無論、一應はさうであるが、

批評家は他人の作中に主義、乃ち、生活的緊張を發見するばかりではすまない場合がある。作家同士でも——少くとも不言實行的に——主義の征服仕合ひはやつてるのであるから、評家だけがその仕合ひに仲間入りできない筈はない。苟も評家の生活が緊張してゐれば、それを以つて直ちに作家の主義にぶつかることが許される。この場合、森田氏が『評家だらんものは決して豫め或特定のイズムを持つて或作に臨んでは成らない』と云つたのは、餘りに狹い了見で、餘りに批評を馬鹿にしたことにならう。評家がはから如何に讓歩して見ても、他人の作中に主義を發見するのも一種の批評であるが、自己の主義を以つて直接に作家の主義にぶつかるのも亦別種のそれである。そしてこの直接批評から高級藝術と低級藝術との區別づけもできるし、無主義も同前な『藝術主義』など云ふ江馬氏よりは、『個人個人の問題ですから客觀的の斷定はしない方が適當だと思ひます』と云ふ廣津氏の方がまだまだ多少でも實質ある藝術家だと云へるし、また夏目漱石の如き半ば通俗的な藝術家には第二流若しくはそれ以下の位づけを與へることもできるのだ。

この評論は僕の『人の主義』と合はせて讀んで貰へば、一層明了にならうと思ふ。（大正七年五月）

眞實の生活

今は故人の元良博士が初めて米國から歸朝し、耶蘇教を脱して東京帝國大學の教授になつた當座の

ことだと思ふが、渠は自分の考へをくど〳〵しい文章などではなく、簡單な圖を以つて說明する道があつたら結構だがと云ふやうなことを頻りに訴へた。

僕がそれをその時聽いて思つたところでは、渠がさう云ふやうなことを考へたには、渠に於いて二つの缺點があつた。乃ち、その一つは國語の發想はその國人の思想若しくは生活の內容その物であつて、內容の說明ではないのを渠が知らなかつたこと。其二には、數學に於ける如く形式上の說明ばかりしてゐれば哲學者の能事は終はると思つたのが間違ひだ。若し人の――哲學者をも含めての――發想が形式的說明で終はるものなら、幾千年の硏究を積んでその言ひまはしをおぼえても、人間の實際的利益にはならぬ。たとへば、一の位よりは十の位、百の位よりは千の位が多いのだから、何千、何萬、何億兆になるまで增加させればいゝと分つても、何の增加であるかを云つてないやうなものだ。

つまり、數學の上では物の內容が示めせぬ如く、形式的說明では――如何に簡明な圖解であつても――人生や宇宙の內觀洞察は出來ぬのである。內觀洞察には、どうしても詩的、否、表象的、否、內容即技巧の發想(乃ち文章)が必要になるのだ。だから、文章を自分の思想や生活の形式的說明にのみするものは、既に文章を玩弄してゐるのである。ましてそれをやるに誇大の形容や虛僞の感情をつけ加へてゐるに於てをやだ。文章家の生活若しくは人格は內容そのまゝが殆ど無說明で現はれるやうな文章、乃ち、發想のうちに在る。その代り、さうなると、所謂つきの文章家ではなく、それが直ちに哲人であり、宗敎家であり、また詩人である。

からなるには、但し、幾多の條件が備はらなければならぬ。そのうちの二三を述べて見ると、

（第一）　舊式な對立觀念を離るべきこと

たとへば、肉若しくは物質と云ふことが云はれてゐると、直ぐそれに對して靈若くは精神と云ふことが持ち出される。が、人間を中心として考へて見れば、肉なり靈なりが決して別々に存してゐるものではない。若し肉ばかりであれば、人間が死んでから腐つてしまふまでの間のものだ。また若し人間が靈ばかりになる時がありとすれば、それは有神論者には神と同樣であり、無神論者には無存在と同じである。いづれにしても人間その物の實際ではない。個人と國家との問題にしても亦さうであつて——若し國家を離れても成り立つやうな個人主義で取り扱はれる人間若しくは人類は、中途半端な出來そこなひの浮浪人同樣の存在者であるし、また國家が個人を全く超越した要素で成り立つものとすれば、個人に對する威壓や制限の理由の出て來るところがなくならう。

たゞそればかりではない。肉と靈若しくは個人と國家をそれが爲めに都合よく關聯させようとして、調和論を持つて來るとしても、その論據に別存的觀念の對立を撤廢してゐるところがあらば、矢ッ張り、別存論に於けると同樣、肉なる靈であり、國家なる個人であるところの人間界の實際には當つて來ないのである。そして實際を僞はるか疎んじるかした思想や生活は、現代には時代後れでもあり、不必要でもあることを思へ。

（第二）　善惡の先入見を去るべきこと

今こゝに、家庭に於いては新夫人をなめる程に可愛がつてる一紳士があるとする。そして、その紳士が若し今までのわが一般國風に從つてる人なら、きつと、その可愛がりの狀態を殆ど全く友人にさへ露ほども見せまいとしてゐるだらう。またこゝに、一商人があつて、殖利には熱心でもあり、上手でもあるとする。渠は、然し、人間として改まつた時には必らず、利殖問題などのことはそらとぼけたやうに、他のもツと高尚な(と思ふ)ことを語つてるだらう。たとへば、戰爭だとか、飛行機だとか、心靈問題だとかを。それは、然し、女は肉的なものだとか、商賣は宗敎などに比べると物質的な仕事だとか云ふ遠慮若しくは迷信がある爲めだ。そしてかゝる遠慮若しくは迷信が俗人どもには尤もらしくも善惡を區別する標準になつてゐる。

が、正當な意味で物質的とは、物を全人的に取り扱はぬことである。自分を部分的に働かしてゐるに過ぎぬ時のことだ。目的は別にあるが手段の爲めにやつてるとか、理想としては不本意だがまゝならぬ浮世だから止むを得ぬとか云つて、やつてる仕事のことだ。これは耻づべきことであらう、たとへば、私かに錢勘定をばかりしてゐることのやうに。然しかう云ふ意味で耻づべきものは肉を離れて靈ばかり考へてるもの等の仕事でも同じである。蓋し全人的でない點は前者も後者も同じことで、後者を實際上の物質的とすれば、前者は空想上の物質的である。

乃ち、靈界と物界とを區別して、そこに善惡尊卑のけぢめを附けるのは、間違つた舊式愚俗の先入見であつて、新式賢明のもの等の見識ではないことが分らう。

（第三）　虚僞を去つて眞實に就くべきこと

前二ケ條の陳述によつて分る通り、人間の生活を肉（物質）と靈（精神）とに別けて考へることは僞りであり。また前者を善と尊び、後者を惡と卑しむことは無標準である。乃ち、一般人並に一般人に迎合する哲人等が物質と思考するのも精神的であり、渠等が精神と區別するのも物質的であることがある。たとへて云へば、國家の發展に應じて軍備を擴張するのは精神的である。否、今一歩進んで、物心の區別撤廢論の立ち場から云へば、國家として全人的である。が、その必要を超越した軍備擴張は――他日何かの爲めになるだらうと思つてすることに過ぎないから――全人的ではなく、單に手段に墮してゐる。そして國家でも個人でもこの手段的に墮した生活は虚僞である。從つて、ほんとの意味の善ではない。

今一つ卑近な例で云へば、商人も人間であるのに、その商買を手段としてやつてるのでは耻づべきである。手段であれば、また別に目的がある爲めに、手段の方を精神的には輕んじて、自然にかけ引きもやれば、うそをつくやうにもなる。かゝる不緊張な心持ちに安んずることが人間を部分的、物質的にするのは當り前だ。が、うそやかけ引きは萬一を僥倖するに過ぎないことを知つてる商人なら、もツと商賣に緊張の度を加へる。そしてそれは、商人としての人間生活の緊張になる。かうなると、金儲けをすることは、國家の發展に添ふ軍備の如く、その人の全人格の顯はれである。決して耻づべきことでも卑しむべきことでもない所以は、丁度、女をおもちやにはしないで眞に可愛がる時には、

少くともその瞬間だけは、肉と靈との區別などはなくなつてる所以と同じだ。

そこで虚僞と眞實との判別はどう云ふ風にすべきかと云ふに、決して物的と心的と云ふやうな區別ではなく、人格が部分的に働くか、全人的に働くかに依つてすべきである。これを肉的と靈的とでするのは舊式で、少くとも最も曖昧な判別だ。そして部分的は虚僞であり、全人的は眞實である。眞實の生活は苦しいものだが、苦しいだけその人は人生の實相、乃ち、現實の權威を體現し、そこに人は如何なる仕事をしてゐても、いつも生々現世主義の詩人たるべき必要がある。

こゝに僕はこの論文を結ぶが、現實から理想や目的を分離させる人の生活は――それだけ不緊張、非全人的になつてるのだから――眞實には行かぬ。眞實は理想や目的をも分離させぬほど充實してる現實の謂ひである。そしてこれは形式的說明では無論十分に現はせぬことだが、實行的發想としてはいつも生活の緊張に伴つてる。（大正六年三月）

田山氏の『一兵卒』に於ける描寫上の缺點

田山花袋氏が近頃單行本として春陽堂から公けにした『一兵卒の銃殺』は、――その筋が若しすべて具體的發想に包まれてゐるのと假定したら、――なか〳〵面白いものであり、またなか〳〵力强いものであつたらう。

生みの親の愛情をさう受けないで育つたり、早くから女遊びをおぼえて、家の金を盗んだりしたことが嵩じて、土地の人々には排斥され、兵隊に行つてから、少し性質がよくなつたが、歸營の時刻に後れたのがもとで脫走し、料理店の金を盜んだり宿屋に火をつけたりする一人物の心持ちと周圍とを描かうとした作である。そして作者の狙ひどころは、ちよツとした動機がもとになつて、世にもおそろしいことをするやうになつた運命を、主人公の性格に添へて表現しようとするところに在つた。しかし遺憾なことには、かれの運命も作者の概念にとどまり、渠の性格も作者の概念的說明に終つてゐる。

或人々の如きは創作上の描寫問題などは、既に過ぎてしまつたとやうに思ひ做してゐるが、それは人の存在を證明するものは發想の外にないことを知らないのである。そして創作家の發想である以上、その描寫の具體化と否とは常に渠の存在を問ふことになる所以だ。ところで、描寫が概念をたよりとした說明に終れば、その作には具體化が全く無いか乏しいかになる。

描寫に說明的と具體化的との二樣があつて、僕等が自然主義以來やかましく注意して來たのは後者である。田山氏自身の平面描寫論も、その起りを云はゞ、それが爲めであるが、渠は自然主義をあまりに感覺の表面にばかり解釋した故を以つて深刻な心理的具體化をしない傾向があつた。そこへ持つて來て、渠の作風がますます後轉して行くと云ふ評判が出てからは、心理の深刻な具體化がないばかりでなく、感覺の表面描寫も概念上の說明に安んずるやうになつて來た。そして今回の作には殊にそ

れが甚だしい。

地の文句に多大の力を入れて事件をぐん〳〵運んで行くのは、必らずしも咎め立てをするには及ばぬ、たとへ一創作全體が無對話の地の文句であつたとしても、概念的に物を云つてなければ、十分成功の見込みはある。現今の新聞雜評家や新進作家等に、この區別を知らないのが多いやうに見えるのは、經驗や熟考の足りない爲めだから止むを得まいとしても、田山氏までがさうなつてゐるのは、實に心細い次第だ。

『感情に强いかれ、意地に强いかれ』とか、『眼は鋭く光を放ち、態度にも落附かぬところがあり』とか、『妥協的な低級道德の世間では、障礙になるにはなつても』とか、『不安が、ゆふべからの不健康の行爲が、氣がねと心配と尖つた神經が』とか、『お雪はかよわい自由にならない女の身の悲哀をしみじみと感じた』とか、より出せば殆どいたるところにあつて、かかる文句の箇所（さう云はないで分るやうにするのが具體化の仕事だが）は、すべて露骨に作者自身の概念を附け加へてゐると見える。決して作中人物の心持ちから直接に滲み出て來るものとは受け取れない。云ひ換へれば、要太郎でもお雪でも學者でもないのに學者のやうな感じを以つて發想されてゐる。これ、渠等の生活が具體化されてない證據である。

ところが、さう云ふ傾向が遂に作者をしてあまりに樂に物を云はせた、乃ち弄文的に。たとへば、『烈しいアルコール性の刺戟が忽ち全身に熱く漲つて』と云つても、實は女が『波々と正宗をついで持

つて來た』コツプを（如何に大コツプであつたにせよ）たツた三杯傾けたあとのことではないか？　また『この世が盡きてしまつたかと思はれるやうな大きな悲哀』とあるが、高が母親から『この子は兒ばかりか、親にまで手向ひする』と叱られて『オイ〳〵聲を擧げて』泣くやうな小兒の心に、そんな形容に價ひする悲哀が浮ばうか？　『泣いて泣いて泣き明す』と云ふやうなことを連發するのもさうだし、二九一頁の『主人は深く深く考へに沈んだ』もさうだ。

それから田山氏の作がたとへ一篇を通じて概念的を脫してゐたとしても、なほ云ふべきことは描寫の中心のぐら付きである。眞面目くさつて要太郎の心持にばかり這入つてるつもりかと思ふと、突然お雪やその他のになつてしまつたりする。また、宿屋の主人や客のに變つたり。さう云ふ行きかたも無論——たとへば、劇曲に於けるが如く——許されないことはない、十分にその用意ある或一點（高いところか若しくは深いところ）からすればだ。然し田山氏のはそれほどの用意をしてない。渠は飽くまで一つの人物に就いて行くつもりだが、說明の便宜ばかりで早變りをしてゐるのだ。

第十七頁の『兵士がそこにゐるなどとは氣がつかずに、そのまゝ通つて行つた』に於いて、そこに隱れてゐる兵士を中心として云へば、土手の上を通る提燈の人々は氣づいてゝもそのまゝ通つたかも知れぬ。但しこれはどツちにも取れるからかまはないとして——。第二三〇頁の『要太郎の姿は午後の日影の明るい中にくつきりと見えてゐた』は、描寫上の無標準若しくは無人格だ。また、第九五頁の『かみさんは大きな金は用簞笥にしまつたが』云々は、かみさん自身には分つてるが、要太郎には分つて

ゐない。それを渠の心持ちの中にでも既に這入つてるやうにしたのはよくない、無駄なことだ。と云ふのは、渠には金が手に盜まれさへすればそれでいい場合であつた。

この標準から見て最も甚しいのを云ふと、たとへば、要太郎が桶屋のたがを拵らへてるのをうッとり見入つた心持ちは面白いが、渠が去つたあとでの桶屋中の對話（一一九、一三〇）などは——要太郎には聽えもしなかつたのだから——蛇足だ。また、渠が火つけをして宿屋を火事にした時、その横の線上を通つた列車の窓で客どもが火事を見て對話する一節（一六四、一六五）なども、書き入れただけ滑稽になつてゐる。要太郎の心事に何等の關係もない。これを若し間接にでも關係があると思つたのなら、概念上の說明に過ぎぬ。そしてかゝる概念的說明は、田山氏の筆には殊に渠の得意らしい然し僕等から見れば缺點なる紀行文的若しくは叙景的な箇所に、最も無反省に出て來る。

以上は今の有望だが未熟な新進家連にもつきまとつてる缺點だから、僕はこゝに田山氏の作を緣にして云ひ及んだのである。田山氏の作が兎角感傷的だと嘲けられてるのは、描寫的反省と心理上の熟考とをおろそかにしてゐる爲めだ。が、その上にも今回の如く概念に停止するやうでは困る。或人が僕のところへ來て、『一兵卒はあまり粗笨に書いてある』と云つたのは、大體に於いて當つてゐる。同じ粗笨でも材料その物から出てゐる粗笨はそのまゝ生きてるが、書きかたに於けるそれはいゝ材料をも殺すものだ。概念で人間の運命とは斯うしたものだと云つてるのでは創作になつてない。

但し、部分的にはなか〳〵いゝところもないではない。要太郎が脫營後酒にひたる徑路や、いよい

よ火をつけると決心するところなどは、一氣に讀ませる。それに、桶屋のたがを見てゐることや『小石をうつて』子供を驚かすことなどはちよつとしたことだが、なか〳〵大きな功果を奏してゐる。その代り、『山王の祭りか何か』とか『ジゴマか何か』とかあるのは無責任な書きかたではないか？　本人がその場に行つたのだからちやんと分つてたやうに書き現はすのが當然であらう。（大正六年四月）

獨存孤立の偉大

稻毛詛風氏の生眞面目なのはただ啓蒙的論理上のことに過ぎぬ。が、今回渠から僕の說に當つて來たのだから、一應は答へて置かねばならぬ。

僕は一般に分り易くする爲めに先づ一つの譬へを以つてしたい。一商店の小僧と云ふ者は自分も早く出世して獨自の店を持ちたいと云つて弱者的な努力をする。が、一つの店を持つ主人の努力には初めから主人的若しくは强者的氣品が備つてゐる。小僧の到着地が主人の出發點だ。そして兎角、物を形に於いて區別する稻毛氏に對して僕は斯う尋ねることが出來る、君が日本評論で云つてるのは人生を小僧のつもりで考へるのか、但しは主人のつもりでかと。

答辯を待つまでもなく、渠は無論小僧若しくは苦學生若しくは食客のつもりで人生を考へてるのである。如何に『理想を外的には求めてゐない』と辯解しても、渠は現實に所謂理想を入れてないではな

いか？　如何に『現實を重んずる』と云つても渠の理想は現實その物とは別な物ではないか？　現在を小僧の狀態に於いて考へるから、主人なる理想を求めることになるが、初めから主人であらば、生きた現實の外に何の實があらうぞ？

僕等は人生の主人若しくは强者として現實を時時刻刻に創造しつつあるのであつて決して『改造』してゐるものではない。改造とか進歩とか云ふことを考へさせる餘地のまだある間の生活は弱者のそれである。主人的に充實緊張した創造生活は進歩や向上を尤もらしく感じる必要も餘地もないほどになつてゐる。自己が絶頂に在るので一分のゆるみをも生じせしめないやうにするのがやツとのことだ。つまり、絶頂を現實に維持し、維持がまた創造であるほどの最上な努力は外にない。これ、如何に『嚴密な用語』を以つてしても最も深い自然主義（現實主義）である。そして同時に最も具體的な表象主義である。

人生は創造的過程だ。この過程の主たる優强自我が自身以上若しくは以外を（即ち、理想や向上を）求めるなら、それだけ自我の範圍、否、自我その物を小くし卑しくする所以ではないか？　この點を小僧生活から見ては分らないのも尤もだ。稻毛氏が僕を以つて『自然主義から理想主義に轉じた』とするのは渠の憶惻であるし、渠がまた僕を以つて僕『自身の主義提唱を未だ正確に理解してゐないか、但しは理想主義乃至理想の意義を誤解してゐる』とするのは渠の僭越も亦甚しい渠の俗見である。

全體渠はまだ一つの目的を立ててそこに達しようとしてゐる途中者ではないか？　少くともその論

理がさうだ。が、僕は人間の達すべき絕頂に在つて、これ以上に目的もなく理想もなく然しこの充實と緊張とを逸しないやうにと云ふ行きかたをしてゐるのだ。僕が生活とその論理とに於いて無理想無目的說を取るのは、弱者なる途中者どもの理想や目的を奪ふやうな慘酷を云つてるのではない。全く立ち場が違ふのだ。渠等の到着地が僕等の出發點になつてるのだ。たとへば、文藝は渠等の宗敎に至る踏み石たるに過ぎぬ恐れがあるが、僕等には宗敎も文藝も旣に內部に抱括された生活である。

渠等は弱者として何かへ歸依して行くのだが僕等は歸依を受けて弱者を吸收こそすれ、自分から歸依して行くべき當てもないほどに內部生活の多忙と充實とに獨存し孤立するの偉大を感じてゐる。これが主人たり帝王たるの生活であり、道德である。これに反して、稻毛氏の如きあり振れた理想論者どものは弱者たり小僧たるの奴隷道德を說いてるのだ。渠等は弱者たることに甘んじてゐられるものらしい。弱者に甘んじるものが弱者を指導若しくは敎育することは目くらが目くらを手引きするやうなものだ。

否、甘んじないから理想を立てて努力するのだと、或はかう答へるかも知れぬ。が、理想を立てることが旣に自分で弱者たることを自覺してゐるわけであらう。こんな態度でたとへ十年を辛抱しようが、二十年を努力しようが、ますます弱劣者的下劣性を自己にこびり付かせるだけのことであつて、少しも優强者の偉大性を生じさせる素質を養ひ得ないのだ。

そこで、弱劣者どもにも現實的に最も必要な偉大性を分有させるには、單純な啓蒙的論理では——

目くらの手引きであるから——何等の効果も奏しないのである。先づ優强者に吸收征服されるやうにせよ。吸收征服をさせられて、そこに弱者も優强者の內部生命を汲み取ることが出來る。實は前者が後者に依つて生活するのであるが、その生活は後者と共にであるから偉大も共同である。へたに弱者の理想などを立てるから、いつまでも却つて小僧若しくは奴隷の狀態を離れないのだ。（大正六年六月）

創作と主義との關係

主義なんか持つものは窮屈だ、そんなことはどうでもかまはない、いゝものさへどしどし作ればと云ふやうな俗論は、いづれの時代にも無經驗者若しくは經驗不足者等に唱へられてゐるものだ。

如何なる職業に限らず、その專門にまだ經驗がなく、若しくはまだ經驗に乏しいものは一定の見識が備つてゐない。一定の進路が通じてゐない。否、進路がいくつでもあつたッて、それをえらび進むに全人的努力を以つてするほどの覺悟若しくは自信がない。かゝる人々は必ず他人の進んだ路をいろいろ參考にして、自分等も假りに進んで見ると云ふ狀態に在るに相違ない。

この時にまだ主義が立つてゐないのは當り前である。それから少し經驗がつき、少し見識が出ると、他人の主義を眞似してゐたことが馬鹿々々しくなる。そんな眞似をしないで、否、そんな人の主義に拘束されない、曲り成りにも自分等の考へでやつて見る決心が生ずる。この狀態に於いて人はよく『主

義なんか詰らないものだ』と叫び易い。が、こゝで主義と云はれる物は他人の進路、方針、全人的努力、内容、若しくは生命であつた物で、本人の內部から生じて來た物ではなかつた。それが詰らないと分つたのは、自己の經驗に內容が出て來た證據にはなるけれども、正當な意味に於ける主義までも否定したわけのものではない。

人に主義を見て、自己にそれが出ない間は、通俗者乃ち俗人の狀態にあるのである。俗人はどこへでも融通の利く代りには自己の特色がない。ところで、いゝ物はすべてその人の特色と共に存するのである。これを考へに入れないで、徒らにいゝ創作さへすればいゝのだと云つてる俗人的文藝家（これが隨分多い）があるとして見たら、その人はきッと思ひ違ひも甚だしいことには創作はたゞ筆のさきばかりで書けると見做してゐるのである。

『これからの文壇は質や量が重じられる。今迄のやうに主義でおどかすことは出來ない』とは、曾て武者小路氏が『新潮』で書いた事だ。然し主義は乃ち直接の質や量の關係になるではないか？『主義や黨派によつて物を見てはいけない』とは、さきに廣津和郞氏が讀賣で述べたことだ。が、主義は人の內容であつて、その內容に共鳴して集つたのが黨派である。黨派にはえこひいきの弊が出來ることもあらうが、それが爲めに主義その物をいけないと云ふのは、食傷の恐れがあるから食物を斷然よせと云ふのと同じへまだ。

俗人的狀態でへたに老成じみたことを云ひたがると、兎角そんなへまな結論に達し易い。かの猛烈

な表象主義家になつたユイスマンズでも、その初めは『主義に拘泥すべきでない』と云つたが、その時の作物にはまださういゝ物がなかつた。そしてその言は單にゾラの寫實主義の摸倣を脱しかけた意氣込みの發表に過ぎぬと見えた。森鷗外氏が曾て『作家に主義なんかどうでもいゝ』と云つたのは、また、その自己の作の殆ど無主義、無内容なのを辯護しようとしたに過ぎなかつた。

俗人的狀態を脱し得た文藝家の創作には必ずその人相當の生きた特色が見える。この特色は摸倣によつて生ずるのではなく、渠自身の内部生活の披瀝である。ところで、内部生活の披瀝が——冷靜にでも、熱烈にでも——いよ〳〵緊張してゐるところには、自分で自分の緊張を自覺してゐる。そしてこゝに主義があり、生命がある。乃ち、主義とは自己緊張の自覺であり、緊張はまた自己の生命である。從つて、主義は乃ち生命である。

然しこゝに今一つ考へて置かねばならぬことには、如何に自己の主義に立つとは云つても、その人が現代に生活しながら現代離れをし過ぎて、その主義が餘りに僕等を滿足させないやうな場合には、僕等はこれに反對するだけの權利がある。また、僕等に反對された方が僕等の想像したほど呑氣無努力の狀態になく、現代的に十分相爭ふだけの準備があつたとすれば、渠も亦僕等に反駁を與へる正當な權利がある。こゝに主義と主義との熱烈な爭ひが生ずる。この場合、主義なんかどうでもいゝと云ふ態度に出るものがあらば、それは敗殘の徒でなければ無生命の傍觀的代筆家や弄文者に過ぎぬのである。

から論じて來れば、もう文藝上の主義に少くとも二大方面があることに云ひ及んでもよからうと思ふ。第一は描寫上の主義、第二は人生觀上の主義である。文藝家のうちには、この兩者を一つにしてゐるもの（たとへば、僕の如き）もあるし、また區別的に取り扱つてゐるもの（たとへは、田山氏の如き）もある。そのよしあしは先づこゝに云はないとして、

（第一）　描寫上の主義　リアリズム、乃ち、寫實主義とアイヂアリズム、乃ち、理想主義とは、いつも相反した方向を取つて文藝上の描寫問題に現はれる。一般通俗の理論から云へば、前者は物質的後者は心靈的であると云ふことになつてゐる。が、僕等はそんな單純で原始的な解釋にとゞまつてはならぬ。科學者の所謂物質的が必ずしも純然たる物質的ではなく、宗教家の云ふ心靈的が必ずしも物質から全く離れた心靈的であつてはならぬのだ。世の見て物質と云ふ物を十分に捉へたことが、洞察の上からは心靈を捉へたことになる場合もあるし、初めから肉と靈との區別を撤してかゝる行きかたもあるしするから、物心兩面の區別などを以つて寫實主義と理想主義とを判別しようとするのは舊式過ぎてる。

してみると、どんな標準を以つて判別したらいゝのか？　僕は斯う解釋する、寫實主義では作中の事件の進程若しくは人物の行動に作者の生活、經驗、若しくは見識の根本內容なる人生若しくは人情（人間性）を見せて行くのは理想主義と大して相違がないが、それを概念化して外部に向はせる傾きがない。これに反して、理想主義には兎角人生若しくは人間性の概念化があつて、人間が斯う云ふ狀態

では困るから、そこを脱して何とかしなければと云ふやうな注文、乃ち、教訓が這入る。

寫實主義では勝利者を描いても皆がさう成れと云ふやうには書かず、敗殘者を出してもその迷つたり苦しんだりする狀態を深く書いて行きさへすればいゝ。同主義が批評を受ける要點は、その描寫が具體的に深刻か否かのところにある。たとへば、社會にのんだくれが多くなつたとする。寫實主義の作家はこの社會狀態をそのまゝ描寫して、成るべく深刻にこんなところにも人生の眞相が見えるやうにする。が、その中に社會改良の意見などは入れない。若し又或社會改良家を材料としてこの狀態に臨ませても、その主人公の改良意見や方法に作者の人格や態度が現はれるのではなく、主人公たる改良家の意見や方法が社會に對して行はれたり、行はれなかつたりする根本の原因やさうした人生やを主眼にする。

然し理想主義者なら、こんな場合、自分の作中に自分の社會改良の意見や感じを入れないでは滿足しない。たとへば、バナドショウのに於ける如く、またトルストイのに於ける如く、それを入れてもいいが、それはほんの概念的な附けたりであつて、必ずしも作の大を成す所以ではないことを知らねばならぬ。して見ると、描寫に於ける理想の要求は――今の新作家並に新評家等にはよく云はれてゐるやうだが、――さう重大な問題ではないのである。如何にこんな理想主義に叶つた創作でも、その根本には寫實主義と共通の根柢があるところに眞の生命を持つてゐなければならぬのだ。今日の如く寫實主義がその內容に於いて進歩した時代に於いて、これを排斥して理想主義を唱へるのは具體性を

主とする創作に概念化を求めるの愚である。

　自然主義はもとの寫實主義の轉化である。そしてユイズマンズが靈的自然主義を云つたのは、表象主義に轉ずる階段であつた。然し渠の表象主義でも、自然主義の根柢を守るところだけに十分の體現があるのであつて、これを離れたところは死んでゐる。で、僕は自然主義的表象主義を唱へて來たが。その根本の立ち場は矢ッ張り寫實主義であつて、其重複した新名稱は寫實主義若しくは自然主義が單に物質的に解釋される時代の過ぎたことを示したのだ。森田草平氏にしても、若しこの點をよく理解した上で、『理想主義的自然主義』（文章世界四月號掲載）を唱へてるのなら、問題はその動機次第であつて、唱へるのが必ずしも惡いことはない。たゞゴオゴリに現はれた奴隷の解放とか、トルストイ、ドストエフスキ等に見える人間の向上とかを、單純理想主義者の如く外部から概念的に創作を求めようとすることをしなければいゝのだ。

　（第二）人生觀上の主義　人生觀の上ではリアリズムは現實主義である。これでは、寫實主義を以つて描寫問題に臨むところを人生問題に移して見れば分る。描寫上に理想を見ようとするのが兎角外部的觀察に流れる如く、人生の現實以外に理想を求めることは現實その物の內容を半減したり、四半減したりする恐れがある。そして理想主義者はこの恐れを知らない者である。ところが、現實主義者の進歩したのは俗人どもの想像する如き理想主義者になるのではなく、理想主義の分離を許さぬほど現實を內容的に捉み得るのである。この點はもう長く述べる餘白がないが、人生觀上に理想主義的傾

向のある者が描寫上に純然たる實寫主義を取つてゐれば、たとへば田山氏のに於ける如く生活と創作とが區別的になつてしまう。これと反對に、又、現實主義の人生觀を有しながら、描寫上に理想主義を標榜することも出來ぬ。

から云ふ意味からしても、文藝上の主義を自己以外から與へられるものとして排斥するもの等の淺見は證明されるではないか?

この論を結ぶ爲めに云ふが、主義は自己の內部から生ずるものだ。然し自己にして無經驗か不洗練かである爲めに生ずる無經驗的、不洗練的な主義は、無論、中途半端な主義であるから自分自身で反省して見ねばならぬ。(大正六年五月)

坪內博士の『星月夜』

坪內逍遙氏の近作『名殘の星月夜』に就いてこれを讃める點では渠のお弟子の一人なる中村孤月氏が既に東京日々新聞(六月二十五日)で十分に盡してある。乃ち、渠の『人生觀は極めて明かになつて』ゐること。『よい詩境によつて凡てが成つて』ゐること。並に、人物描寫の點で『思ひ切つた取捨は非常に良い』こと。

ところで、僕が一個の批評家としてこれを見る時は、中村氏の讃めた點はすべてこの脚本の缺點で

ある。第一に、作者の人生觀が如何にも明かに出てゐることは事實だが、餘りに明白で淺薄になつてゐる。實朝の弱々しいが爲めに同感すべきも、公曉の强過ぎて思慮不足なのも、共に殆ど背景を持たぬ畫の如く、餘り直說法的に――從つて、淺薄に――描かれてゐる。たとへば、實朝がちよツと入水を仕かけるのにも、さう云ふ氣持ちを生ずるだけの、十分の內容を用意してなくて、突然にその場で示して、而もまたその場で容易に思ひとまつてしまう。また、公曉が實朝を殺した時に義時を逸したのも、逸したと云ふことだけが示されてゐて、その前後はたゞ脚本以外の史實的想像にまかせてしまつた。

第二に、この脚本がいゝ詩境によつて表現されてゐるとすれば、――作者の他の作よりはいゝかも知れぬが――その詩境は如何にも通俗な詩境である。詩に必要な緊張の度が少く、充實の氣分に乏しく、しどろもどろにやツと作り上げたそれである。これは何故かと云ふに、前項で僕が注意した十分な背景を以つて內容を迫らせて來なかつた爲めだ。外形的に電光をひらめかしたり、海岸の月夜を出したりするのは、最も緩漫な新派劇にもありがちなことではないか。作者としては若い狂女が度々出る事を以つて十分に詩的な用意をしたと思つてるだらうが、これもまことに淺薄過ぎた俗謠の調であつて、渠のお弟子でさへ『狂女を除いても』かまはないだらうと云つてゐる。

第三に、凡ての人物や事件を思ひ切つて取捨した件だが――この取捨は決して程よく有効に行はれてゐない。おもな兩人物に次いで必要な尼公と深見とでさへたゞ昔の芝居通り他を說明する爲めにの

み殆ど死んだ道具として出てゐる事は云はずもがなにして置いても、肝腎の實朝や公曉でも道具に過ぎぬと云ひたいが、少し味をつけても、ほんの人形ぐらゐにしかなつてゐない。公曉で云へば、亂暴で腕力があること將軍に成らうとする野心が子供の時からあつたこと、思慮の足らぬ爲めに深見と義時とに最後に一杯喰はされたこと等は、その場限りの直說法で、餘韻もなければ、あり餘るほどの充實氣分も備へてゐない。實朝のでも同じで『正氣でゐられぬ』とかなか〳〵『醉ゑぬ』とか、ほんの說明的に云つてる場面はあるが、內容の充實から滲み出て來るやうな趣きのところは少しもない。そして兩者とも尼公に對しては泣くのが落ちになつてゐる。尼公にしても兩者を泣かせる爲めに二度出て來るだけのことだ。から云ふ不充實の場面若しくは說明をばかり採用するのは、近代的劇論の見地からすれば、無論、取捨を得たものではない。おまけに、それが爲めに單に淺薄な人生觀を示す道具になつてしまつた。

僕は元來この作者に渠自身の思想なり技巧なりがあるかどうか疑つてる者である。多少技巧力があつたとしても、最も舊式なので、而も摸倣七分の鹽梅若しくは思ひ付きに過ぎぬやうだ。さきの『女魔神』にはハウプトマンの『沈鐘』から取つた思ひ付きがあるさうだが、今回の狂女は實朝の前に死んで浮ぶことまでにシエキスピアのオフエリヤがあり〳〵と見えてゐる。

また實朝自身の入水は大西鄕の入水の形をそツくり取つたやうだ。渠はさう云ふ摸倣的思ひ付きの技巧に史實を僅かに聯絡させたものとしか內容劇論者等からは見えないのである。

イプセンのそれの如き近代内容劇の標準から云へば、渠の作に於ける如き粗漫な場面の取りかたはすべきでない。近松やシエキスピア時代で云つても、諸人物の現はれが斯うおづおづした作者の說明ばかりに終らず、もツと自由に活きてゐなければならぬ。けれども劇の研究者であつて、作者としては努力の純化（俗に、天分）に乏しい、而も時代思想に後れた坪內博士に、以上のやうなことを望むのが無理かも知れぬ。僕はこゝに渠に敬意を表する爲めに、今回の作は渠自身の從前の諸作に比べては多少優れてゐると云ふことだけは云へる。或は近代劇を書いたのではなく、從來の歌舞伎劇をシエキスピアの標準で整理したのだと云ふ辯解が出ないでもなからうから、今一つ云つて置くが――今回の『星月夜』がその筋（だけ）の緩漫ながら通つてゐる點に於いては、默阿彌の多くの駄作に勝り、その少數の佳作に同等ほどにはなつてゐると。（大正六年八月）

有島武郎氏の愛と藝術論

愛は征服であつて、征服心の緊張してゐないところに愛を說くのは空想であると云ふことは僕が僕の主幹する雜誌『日本主義』に於いて屢々論じて來たことである。この福音的要領はわが日本國家の世界的發展の理由にもなり、わが國外交の特殊な立脚地にもなり、日支親善の正直に立つ根據にもなるが、また藝術の世界に來て、その根本問題や描寫論にも必要なことだ。

有島武郎氏は。この僕等の日本主義に觸れてから氣が付いたのか否かは問ふところでないが兎に角、僕等の主張に同じて愛は結局征服力であることをさきに新潮誌上で述べ、これをまた雜誌新東洋が新日本の思想として英譯して紹介したのは僕等に取つてもいいことだと思へた。が、次にまた渠が『藝術を生む胎』(新潮十月號)が『愛のみ』であると云ふ場合、その愛と眞とを對立させて考へたのは、理想主義若しくは人道主義と自然主義とを暗に區別して、ほんの、あり來りの概念論で以つて前者を取り、後者の捨てるべきを主張した所以であらう。愛と眞とは果してさうはツきりと別存してゐるものであるか? また、人道主義と自然主義とは果してかく區別して置けるものであるか? 無論さう云ふ別存や區別を容易に承認して、何の疑問も起らないもの等が我國にも多からう。けれども、之は例の單純な外國人的標準の概括論であつて、斯る概括には內容が乏しいのを遺憾に思ふ。

わが國の自然主義派の間にも、眞理を置き据ゑな物と見て取り扱つたものが無論多かつたのは事實だ。が、僕は――少くとも、僕は――自然主義の一派として眞理は人生の他のあらゆる方面と同樣動的、過程的、刹那的であると云ふ哲理を創造してゐた。この態度は今でも同じである。生田長江氏が『民族も一の過程である、國家も一の過程である』と云ふことを得意がつて發表したが、あれは單に民主若しくは個人に至つてそこに固定の然し空想の眞理を認めた論法に過ぎなかつた。僕は然し眞理その物をも固定でないとする現實論者だから、それに據つて立つところの個人も國家も民族も共に過程であるのを當然とする。たゞこの過程を絕えず充實緊張させてゐる努力を人間としての最も必要な

生活だとする。かかる生活は燃えてる火のやうな物で、他物を吸收することが唯一の生命だ。この生命を有島氏は眞と云ふのか？　愛と云ふのか？　人を動かして自分が動かぬ愛もなければ、人が動かして他を置き据ゑにする眞理もない筈ではないか？　從つて、『愛は人を動かす力で、眞は人が動かす力だ』と云ふやうな區別的假定は說明として舊式とも無駄とも云へる。

今一つ渠を惑はしてゐるのは、藝術專門家たる人間が他のすべての人間よりも高尙だと思つてることである。これは和辻哲郎氏も同じのやうで、氏が『藝術家の內には普通人に於けるよりも遙に多くの人間が住んでゐる』と云ふ言葉のうちなる普通人を專門的藝術家でないものゝすべてに當てはめて見たところで分る。乃ち、藝術專門家でないものにも、普通人以上の『豐富な生活の所有者』はあるのだ。有島氏はそれを知つてるか、どうか？

米國で渠を知つてた者から聽くところによると、渠はまだあちらに放浪してゐた時、藝術家に成ることをやめようかどうかに餘ほど迷つたことがあるが、矢ツ張り初一念を通して、とう〳〵藝術の世界へ相當の覺醒を以て這入つて來たのだ。然しこれは決して渠が直ちに藝術家以外の人々よりもえらく若しくは高尙になつたわけではない。ただ普通人たるに止まる藝術家、實業家、軍人、宗教家、教育家等よりもえらい若しくは高尙な生活を有する藝術家、實業家、政治家、其他の仲間に這入れて來たことに過ぎない。蓋し有島氏の言を借りて云へば、『愛の過剩』、僕の製造して從來用ひて來た言葉では『燃燒』を衝動として、藝術家が藝術を選んだ如く、又革命に行き、實業に行き、戰爭、宗教若し

くは教育に行くもの等もあるからである。そして若し渠等をも衝動を同じくするために廣い意味の藝術家と見做すと云ふのなら、渠は又單に用語上の遊戯を獨りでよがつてるに過ぎないのだ。

最後に、渠が『藝術はその窮極に於てます〳〵人類的となつて行かねばならぬ』と云ふのが、『郷土、人種、風俗などの桎梏から逃れ出で』る事であるに於いて、他の――たとへば、姉崎正治、生田長江、野上豐一郎、阿部次郎の諸氏等の如き――外國模倣的な自覺者若しくば無自覺者等と同樣、人類若しくは人間の端的現實の立脚地を知つてゐない。この點は別に詳しいことを僕の『日本主義』十一月號に發表した『傳統と日本主義』で見て貰ひたいのだが、こゝでもちよツと云つて見ると、人類的とは渠のも個人や個人性を解放することだらう。が、現今の露國人が自由を誤解して掠奪や强盜をいいことにしてゐる如く、わが國の自覺したと稱する無自覺者どもは、個性の解放を直ちに國家自然の內的制限外に持つて行けるものと空想してゐるのである。そして個性ある人類若しくは人間は全く無國籍になつても存在できると考へ込んでる。

けれども、個性を研め深めて行けば行くほどその人間はその持つて生れた傳統を實生活的に離れられぬことが分るのである。これを桎梏と稱するが如きは、だから、空想でなければ無自覺だ。ところで、渠はその作『迷路』の主人公と全く氣持ちを同じくしてゐるものとすれば、全く社會主義者であるか、少くともそれにかぶれた者だ。さうすると、渠が無自覺の連中に加へられるのをいやなら、今一度考へ直す必要があると思ふ。但し、これは僕の立ち場から云ふのであつて、漫罵でないことを承知

して置いて貰ひたい。思ふに、渠はかかる問題をあり來たりの區別觀で考へるより外、氣の毒だが、恐らく知つてゐないのだらう。若し知つてたらもツと新らしく違つた方向へ渠自身の創作の長所や缺點をも反省して行くに至るだらう。

僕は以上で渠の發表した議論に當つたのだがなほ、ついでに、渠の創作に就いてちよツと云はせて貰ふと、最近の『迷路』には事件や感じの具體的統一があり、書かうとしたことに力強く打つ脈搏があり、またちよツと違つた大きな背景もあつて、へたな愛論や藝術論を超脫してゐるところに敬意を表したい。が、『凱旋』の方は老將軍、書記、若くは御者を中心にして各々別々な小說に書いてもいいのを、如何にも不用意にお粗末な劇曲化をしてしまつたところが、その作を失敗に終らせたと思ふ。そのために作意も前者ほどの具體力に乏しく、作者の藝術論が露骨に概念として現はれ、遂にへたな技巧化に過ぎなくなつてる。これを技巧がうまいと云つた人の如きは批評家の資格がないのである。

（以上大正六年十一月廿一日國民新聞揭載）

二

以上、僕の所論に對して有島氏が同じ國民新聞文學欄（大正六年十二月二十六日）に於いて答へをしたのを見ると、その要點は多少僕の要點を外れてゐるところもあるが三つに分れてゐる。

（第一）、渠は僕が說明としては舊式若しくは無駄だと注意したことを少しも反省してゐない、そして相變らず『愛は實在であり、眞は假象』であつて『愛から藝術を通して眞が生れるのだ』から、果

實と味覺とに於ける如く一つの物の延長であると云つた。けれども渠は眞理が止むを得ず動的であるから、これを『標準として藝術を生み出さうとすると直ぐ自己矛盾が生じて來る』と云ふのではないか？　その論の出發點に既に假定的別存觀を持つてゐる。渠の所謂實在なる愛も、僕等はこれを動的に解釋しないでは內容的に受け取ることができないものである。ところで、渠は愛だけが動的でないと云つてるわけだ。蓋し愛も動的であれば、渠の所謂藝術は自己矛盾を生ずるといふからである。これ、立派な不自然的別存觀で、舊式でなければ間違つた理論ではないか？

道理で、渠は變なことを云つた。『眞理の內容が絕えて變化しては、眞理はその存在の價値をその瞬間に失つてしまひます』と。僕等の眞理は決して內容の外形ではない。僕等は內容その物を眞理といふのである。そして愛も內容である。ところで、かかる內容を渠は實在と云つてるなら、その實在は愛即眞理として、人生が刹那に於いて動的な如くこれも絕えず動的だ。そして動的でない藝術がありとすれば、固定的なもので、愛からも眞理からも生れてゐないのだ。この點の考へが渠にまだ通じなかつた。

（第二）、渠は藝術專門家を以つて他の人間よりも高尙だとは思つてないと辯解した。それならそれでいゝ。僕は渠以外の人々の感傷的誇張論をも勘定に入れて、渠もその連中であつては困るがと考へたのであつた。けれども、必要もない場合に藝術家と藝術專門家とを區別して、人間らしい人間なら皆藝術家だなどゝ云ふのは矢ツ張り、用語上の遊戲ではなからうか？　渠の所謂藝術家に相當する軍

人、實業家・若しくは政治家を直ちに藝術家などゝ云はないでも・藝術的軍人、實業家・若しくは政治家と云へば分る。僕等の用語からでも、それでかまはない。この位のことは渠の請求通り何も『藝術といふものゝ内容なり定義なりを明確に提供』してかゝらないでも、から意張りを廢して尋常に考へれば、分ることだらう。

（第三）、渠は人間の端的立脚地を渠に示めしたに於いて『あなたは人間の向上的欲求を全く無視してゐます』と云つた。けれども、僕の立脚地は渠の獨斷で想像してゐるやうなものでない。渠は『現狀を緊張して生活する』以外に『それを突破して更らに一歩を進む』る餘地若しくは餘裕を置いてある。かゝる餘地ある緊張は僕の云ふ緊張ではないから、『滿足を得られない』のは當前だ。從つて、あり來りの餘裕家・乃・理想家として突破とか向上などをいひ出す。が、僕の云ふ緊張若しくは燃燒は、僕がいろ〳〵な場合に說明して來た通り、そんな餘裕もないほどの充實生活である。向上的欲求を無視してゐるのではなく、そんな必要もないだけに充實してゐる場合を云ふのだ。思想若しくは生活としては舊い理想家どものよりも一層新らしく且つ内容的なのである。

この見地から云ふと、國家若しくは民族の傳統とは動的自我の現實個性に生きてるものであつて、決して『固定した形』ではない。刹那々々にそのからを打ち破りつゝ生れるのだが、そこに國家若しくは民族の內的、自發的な制限があると云ふのである。そしてこの制限は人間若しくは人類の本質に備はつてるものだから、これとかの一般獨斷的國家論者等の外的制限とは同一でない。有島氏はこの區

別を混同してゐるらしい。然らざれば、渠が最近露國の革命を解釋するのに、固定した形の傳統（乃ち、僕の云ふ傳統とは違ふ）に反對したところの『萬人に共通』とか云ふ『根柢的な力』を以つて來る筈がなかつた。露國の革命は――これを正當に穩健に解釋すると――國家若しくは政府の外的、獨斷的、並に部分的制限からの解放に落ちつくべきものである。決して國家の內的制限から解放されるのではない。今の露國の俗衆はこの區別をよくわきまへてないのだが、有島氏も亦果してこれを混同してゐるのでは露國俗衆の程度に在ると云はれても止むを得まい。

自由自在に万人に共通な物などは寧ろそれだけその實質が概念化したものである。有島氏の言葉で云へば、實在よりも假象になつて行く物だ。僕から云へば、概念化は根抵的と反對であるが、それを渠はあべこべに考へたらうへにも、なほ一つの矛盾がある。假象若しくは假象的傾向は、渠には、愛その物ではなく、眞若しくは眞に近い物ではないか？　ところで、渠はこの場合に『その力を愛と名づける』と云つてるのだから、それが生む藝術とは眞若しくは眞的傾向からであつて、實在の愛からでなくなるわけだ。此の點でも渠の議論に今一層考へをめぐらして見るべきところがあらう。』

僕の云ふ愛、否、征服愛は外延的、概念的に人類の共通點を求めて行くのではなく、內部的實質的にこちらへ全人類が共通して來るやうに吸收する力である。國家の本質もこれなら、藝術のそれもこれだ。

その他のことは第二義的なもので、云はないでも云ひやうだが、事のついでに――

（一）、藝術家的軍人、藝術的政治家等の言葉を用ゐることを拒むやうな人は、兎角、藝術家を除りにもろい物のやうに考へ易い。が、『がさ〲した手で觸れた』ために毀われるやうな藝術品は駄目な場合もある。たとへば、ホイトマンの如きは詩そのものまでが『がさ〲』してゐるが、それでも藝術たる價値をもろい藝術家などが考へるよりも以上に有してゐる。

（二）、有島氏は僕を『鑑賞力が粗笨』としたが、それは渠の作『凱旋』に對する僕の見解が違つてるだけのことを憤慨的に云つたに過ぎぬ。渠はあの作では『一匹の老馬が主題になつてゐる』と辯じたが、書かれた實際では馬や書記や御者や老將軍などがかたみがはりに轉換しつゝ、僕若しくは他の讀者を云ひくるめることのできないほど明らかに、主題になつてるのである。そこを僕はお粗末の劇曲化だと云つた。これをあべこべに僕の粗笨に歸しようとするのは無理だ。

（三）、渠は僕が曾てホイトマンの詩を譯した時、ライラクを百合としたのを餘り勝手過ぎると云つて、こゝにも神經の粗笨と云ふ言葉を與へた。が、あれは僕の神經の粗笨でも勝手でもなかつた。僕があの英語並にそれに相當する樹を知らなかつたので、兩上田博士の名で編纂された英和字書（富山房發行）を引いて見ると、『百合の一種』とあつたのである。これに關してはちよツと僕が感想を有するので二月の新小說に出た『文藝雜話』に書いたのを見て貰ひたい。

（四）、渠は議論をするよりも會つて意見の交換をした方がいゝと云つてるが、公けの問題は二人で話し合つたところでそれだけでは終るまいと思ふ。無論、折があれば、ゆつくり話しもして見たいが

——。（大正七年一月）

最近の新進作家

三津木貞子の『鏈』

婦人作家が隨分あるうちで、田村俊子氏がその絕頂を下り坂になつてしまつて以來、さう目ぼしいものがなかつた。彗星の如く現はれたものがあつても、まだ本人の自由意志通り書いてるのかどうか疑問であつたり、長く文壇にたづさはりながら一向進步がなかつたりするものばかりであつた。

この時に當つて、三津木貞子氏の『鏈』はちよツと注意すべき作であつた。もツと早く出るべくして出なかつた人であるから、年齡も相當に行つてるだけ、先づそれからして賴母しい。作の筋を簡單に云へば、順子と云ふ女が兼てKと云ふ男とSと云ふ男とを同じやうに親しみ愛してゐたが、女の病氣や其の他の都合上結婚する方がいゝとなつて、同病のSを撰ぶことになつた。そしてSには身をまかせるつもりになつてゐながら、なほKに今一度最後の別れを述べに行く。

『選ばれたものは禍ひである。順子は病人のSが病女の魂を抱きしめて艱難の前に湧躍する姿を思つて淚を流した』が、一緒に西洋料理屋へ登つて『Sはスリツパを脫いで向側にゐる順子の足の甲を上から柔かに押へた。順子はぽつとなりながら、輕くそれを踏み返した。』斯うしたところまではかの

女とSとのことがよく書けてるが、そこで殆んどぷツつりとSに關する事は區別された。そして次ぎからはKのことになつてしまつた。これが一の缺點である。

結婚のきまつたことを知つて尋問に來たKに、かの女は『結婚をしたつて眞實のお友達の心に變りはないと思ひます』と語りながらも、『女を專有するのでなければ友ともなり得ない男達の心を憤らずにはゐられなかつた。』Kは『弱かつたんですね』とばかり女のことを云つた。そして歸宅後『われは人妻を戀する身となり……死すべきにや生くべきにや』と云ふやうな感傷的手紙をよこしたので、かの女が心配して行つて見ると、『杞憂が少し馬鹿々々しかつた。』當り前の笑顏を以つて迎へた男にキスの馳走を受け、女は『紫の被布をさら〳〵と脱いで』その裏に『お歌を書いて頂戴な、片身に。どうせ私の方がお先きに逝くには逝くのですけれど』と云ひ、『Kに對してこれまでついぞ感じたこともない女らしい感情の身うちに湧いて來るのが微かに感じられた。』そして女は『私の死ぬ時來てくれますか……かたみに何を上けませうね……命は上げそこなつたのだから』など云ふ。

よく書けてるやうだが、男も女も共に半ば遊んでる氣味が作者の筆にもツと自覺的に現はるべきだと思ふのだが、それが十分でなく、作者としては女の方を生まじめに行かせ過ぎてる。それが爲めに、かの女が渠に送つた物がすべて這入つてる『宮の蓋が、鍵なくしてゝぽんと命あるものゝやうに跳ね上つた』のを『何と云ふ皮肉であつたらう』と感ずる落ちが、かの女ばかりの蟲がよ過ぎる觀察となつてしまつた。それればかりではない。作の全體に渡つて、順子を作者自身と思はれるのを豫期してまだ

うち輪にかばひ過ぎたところが見える。『自分には節操がない』とまで云はせながら、而も作のしよツぱなには『大勢の交友に對して餘りに無頓着である順子の態度が、己惚れの強い男達の一人一人から些細な言葉尻を約束と思ひ違へられて、その結果恐ろしい淫奔な女と同じやうに思ひなされはしないか』と云ふ豫防線を張つた。が、作の實際では、順子は少くとも精神的には淫奔な女だから、もツと突ツ放してさう書くべきであつた。

野村氏の初見參

新作家として最近に初めて眞面目な文壇に現はれて來た野村愛正氏の『麥の若芽』(中央公論)を讀んで見たところによると　有島武郎氏の『迷路』や『既闇』に於けると同樣、作者特有の材料と背景とに於いて既に一つの尊敬を受けるだけの資格があると見えた。そして有島氏のは外國に於ける日本人の生活やその周圍に關する智識に於いてだが、野村氏のはわが國の田園と農業と鄉土的親しみとに人の摸倣を許さない點があるに於いてだ。主人公がいよ〳〵決心して歸國し、新らしい氣もちを以つて自家の山林や荒地に臨むところや、いろ〳〵心に蹉跌がありながらも段々と土と云ふ物に親しんで行く順序などに於いて、殊に然りである。

けれども、よく考へて見ると、有島氏のと等しく、そこに見えてる豐富は作の材料若しくは經驗的智識の豐富に過ぎない。背景や材料は作に必らず必要ではあるが、そればかりが如何にあり餘つても、作その物にはならない。進んで云へば、その材料の取り扱ひかた、乃ち、描寫の態度がよくツてこそ

その作を活かすのである。ところで、有島氏の力ある創作的態度には、惜しいことには、作者の淺墓な個人的覇氣までも這入つてるのが不純である。野村氏のにはかゝる意味の不純はあつても少いやうだが、他の一面に於いて事件若しくは心的作用を尤もらしくする爲めに、わざ〳〵取つて附けたやうな考へをさし入れた。そしてその考へがすべて作者に取つては大切な要素でありながら、主人公なる雪松の性格から出た考へになつてゐない。あの雪松なら、もツと自由な若しくは新らしい內容で動いても差しつかへないところを、作者はそれを不自由に若しくば舊式に動かしてゐる。

たとへば、雪松が、さきに自分を戀しながら後に自分の父の妾になり、また他にかたづいて氣違ひになつたもとの女中に對して、絕えず有する憤滿や責任苦は、渠の性格や實生活から出てゐないで、寧ろ作者自身の持つてる主義(それの深淺と自覺の有無とは別にして)の勝手な說明になつてる。作者の一生懸命になつてるのはこの說明の爲めで、そこに如何に力ある筆を用ゐても、作の重大要件なる具體化は行はれないのである。而もその具體化しない說明が——若し果して具體的に出たとしても——主人公をたゞあり振れた因襲の表面的倫理家若しくは道念家にしてしまうに過ぎぬやうな行きかたに至つては、——有島氏にもこの傾向があるが——作家自身の迎合的若しくは獨自的な主義が如何にも舊式で新味に乏しいと云はなければならぬ。

主義が創作中に現はれるのは少しもかまはないが、創作として現はれるには主人公若しくはその他の作中人物の性格やその結果なる言行としてゞなければならぬ。作者の抽象によつて取つて附けたの

では困るのであるが、野村氏等のにはそれがあり〳〵と見えすいてゐる。そこに渠等が豐富に見えても、その豐富は内容的でない所以が分らう。かかる態度を僕等は創作上の理想主義として卑しめる。而も舊式な理想主義たるに於いてをやだ。一般の批評家どもはさきに有島氏に對してその理想主義が現實的な立脚地に在る點を贊成した。が、渠の現實的に見えるのは、その有する材料のことであつて、渠の描寫的態度その物は決して現實主義になつてゐない。野村氏もそれであるところから、雪松にいろ〳〵苦悶や自暴自棄を見せた上、『もう何か生れて來てもいゝ頃だ』などゝ云はせる頃になると、直ぐ作者のから繰り箱から『萠え出た愛の若芽があるばかり』になり、『過去の事實が自分を生長させたことに氣が附く日が來るだらう』の安ッぽい解決になつた。

僕は最後にまた部分的な缺陷をも少し數へて見たい。母親の愛する女中が學校へ行けなくなつて、『まんじりともせずに泣き明した。母親はそれを見て更らに貰ひ泣きをした』(八三頁)は、中心なる雪松には直接に分らぬ心理狀態である。『猪之吉は悲しく思つたが、非難はしなかつた』(一一四頁)の悲しみも雪松には分らう筈はない。『蛇のやうな嫉妬が眼を輝やかしてゐたことには彼は氣が附かなかつた』(九九頁)や『見る〳〵顏がひん歪つて一生涯治らなかつた』(九七頁)も、これは特に雪松自身のことでありながら、作者の外的說明に過ぎぬ。全編が可なりうまく雪松の氣ぶんや心理を中心で行つてながら、かゝる點でその中心がぐらつくのは書きなぐりの無考への弊であつて、訂正すべきだ。『ついニ尺とも離れてゐない(橋の)親柱にも摑ることができなかつた』(一八〇頁)は最も空虛な說明であ

らう。醉ひの爲めに目が見えなかつたのなら、柱の距離は分らない筈だし、あとの說明通り『空では星が瞬いたり飛んだりしてゐた』（一八一頁）のなら、そばの物もぼんやりとは分るのだ。『生れた家へ歸つて來た幸福が肌膚の毛孔の一つ〳〵から滲み込むやうに思はれた』（一二〇）は、說明としてちよツと氣持ちのいい文句だが『內心に燃えてゐるより好く生きたいと願ふ本能的な欲望は、ぱつたり行詰ると何時でも或る水準點までは連れて歸るのであつた』（一八三頁）の如きは、そこを具體的に書くのが創作だのに、斯う云つてしまつては、もう何も書くに及ばぬのである。

『風は薄笑ひを洩して何處かへ消え行つた』（八九頁）の如きには、餘り通俗的に日本語を取り扱ふ作者の經薄が伺はれる。『曾ては（宗敎を）信じたこともあつたが、どうしても思ひ切つて墻を一つ躍り越えて內部に入ることができなかつた』（一八五頁）の云ひかたに於いては、作者が宗敎に對する考へのまだ固定的で且舊式なのを僕は承知できた。道理で、渠が主人公を說明的に拵らへ上げた結論の『愛の若芽』とか『倒れたと思ひ起き上つたと思ふ生活』とかには、作者自身の舊い思想で固定化した內容しか汲み取れなかつた。現在の現實的苦悶を離れて固定化したやうな內容若しくは信仰などに却つて宗敎の新味はないことを知つてないやうだ。

要するに、野村氏初見參の長編作は初めの部分が可なり緊張してゐるが、終りに近づくほど虛構が多くなり、通俗的になり、緩漫になつてる。これは新進の作者として大いに考へ直すべきことだらうと思ふ。

倉田百三氏とはどんな人かよく知らないが、恐らく、病人でなければ結局竹林の七賢的に歸着する阿部次郎氏一派の人であらう。渠の『文壇への非難』を讀んで見ると、病人の氣まゝからわれ獨り澄めり的な不平を云つたに過ぎない。

僕は曾て、故綱島梁川が病中のうなされ同樣の狀態で精神的飛躍など云ふことを述べて暗に僕等に向つてえらがつた時、瀕死の一病人が如何に精神的にでも僕等健全者の全人的努力に及ぶほどの飛躍ができよう筈がないことを注意してやつた。殘酷のやうだが、眞理でもあり、事實であるから仕かたがなかつた。病人にも體驗があるとしても、健全者の全人的努力に於けるそれよりも不健全であり、薄弱であり、氣まぐれであるを承知すべきだ。が、倉田氏はそんなことを棚にあげて、よわ〳〵しい病人として都合のよいことばかりを以つて(暗におのれを)迎へて貰ひたいやうなことを述べた。『もツと心情が濡れねばならない』とか。『出來る限り……他人の胸をどき〳〵させないやうな方法を撰』べとか。『受け身の德』を持てとか。皮肉な態度を示めされると『腹が立つ』とか。性慾を『自らに許してはならない』とか。

これすべて不具者か病人かに好都合の事ばかりではないか？　渠にして若したゞしほらしく、自分は斯うしてゐると云つたゞけなら、――それが世間に同情を求める意味であつたにせよ、またはおのれを廣告するのであつたにせよ、――少しも僕等を怒らせはしなかつたらう。が、渠はこれを以つて、

而もをこがましくも僕等の如く健全な人間が多くゐる文壇を非難したのである。で、僕等は責任上多少の反駁を試みる氣になつた。

一、『もつと自分の體驗でものを考へ』よと云ふが、僕等が『魂の內に不幸を持つてゐない』のは罪人や病人でないからである。僕等は僕等の信ずる新宗教に於いては罪や不幸を感ずるほど消極的になつてゐない。從つて僕等の體驗は積極的で、生の緊張と充實とに在る。

二、別れのことやあの世のことが『まるで問題にならない』のは、僕等が現在健全であるばかりでなく、たとへ危篤な病人になつても、なほ且健全な現世生々主義の哲理と宗敎心とを確保するつもりであるからである。生々主義では死後は問題でない。生きてる間の努力に全部の宗敎的體驗がある。

三、『成熟した男子に性慾のある』のは、たゞに『止むを得ない』のみならず、また『惡しき慾望』でもない。否、却つてこれに依つて人生の努力も充實もその實質を全くするのである。たとへ純潔を一つの德としても、多くの宗敎家、哲學者、若しくは詩人の純潔はほんの傳說的か偶然かの德に過ぎない。耶蘇の童貞を傳說でないとして見ても、マルタ・マリヤの若々しいかをりに觸れて、一種の滿足を得てゐたに相違ない。またダンテの未婚を事實としたところで、何かの方法で（必ずしも偏物的ではなく）滿足をしてゐられる實感が想像されよう。肉を卑しむ手合は成るべく偏靈的に高尙がりを云ひ易いが、僕等は肉なる靈しかないと云ふのだから、偏靈的純潔などは最も下だらぬことゝしてゐる。

四、『たとへ實行できなくても高い〳〵處に向つて大願を立てたい』と云ふが如きも、偏靈的僞善で

ある。實行ができないと知りつゝそこに願を向けてるのは既にその當面に於いて自己を僞はつてるのだ。實行できる願にも大きなのがある。そして出來ないと知れた願は如何に大きくても夢で何等の高尙でもない。

五、『百萬人の人民を助けるためには、十人の人間を犧牲にしてもいゝと云ふ法はない』とあるが、僕等は十人の爲めに百萬人を殺す場合があるのをも許す。たとへば、わが國人がたツた十人になつた時、これが皆一騎當千であらば少くとも一萬の敵を殺さしめねばならぬ。すべて殺生と惡の觀念とは固定的に定つてるのではない。『かゝる思想は道德でなくして經濟である』と云ふのも舊式な考へかただ。僕等には道德でない經濟もなく、經濟でない道德もない。殊に、僕の個人主義的國家主義に於てはだ。

六、たとへ戰爭に於いて人を殺すのが惡いとしても、この『惡には必らず報いがある』ことは決して恐るべきことではない。弱ければ負け、强ければ勝つだけのことではないか？　そして勝つたのが惡ければ、他の强い者が出てまた征服すればいゝのだ。これに徒らに報い呼ばりをするのは弱劣者の泣きごとに過ぎない。そして弱劣者は新らしい道德をも宗敎をも建てる權利さへないのである。

七、以上僕に否定された思想を渠自身は『センチメンタルでない、理知的』だと云つたが、その實センチメンタルで埋まつてるのである。そして僕のまだこゝに擧げない箇條に於いても病人的泣きごとが多かつたことを云ひ添へて置く。

なほ別に三つのことに就いて云ひ添へたいが、渠は『文壇で氣持ちのいゝ論爭を見たことは殆どない』と云つた。文壇の爭ひが必らずしも氣持ちよくあらねばならぬわけはない。が、渠のこゝに望んだのは渠自身の氣まぐれを容れるやうな論爭と云ふに過ぎないのだから、なほ更らそんな必要はない。僕等の論爭はいつも思想の徹底を主とするのであつて、勝敗を眼中に置いてるのではない。だから、倉田氏の初めから逃け腰のやうな非難こそ却つて氣持ちが惡いものである。渠には血を吐いても泣き事は云はない方が氣持ちよからうと思はれる。

次ぎに又、渠は『裁判所に訴訟を起すといふことは藝術家としてはそれ自身恥辱である』と云ひ、その理由として『自分等の平常輕蔑してゐる法官に裁いて貰ふ』のだからと附け加へた。が、僕等は決して法官を不斷に輕蔑してゐない――少くとも、感傷的な泣きごとを云ふ自稱藝術家に對するほどには。それから法廷が僕等の機關である以上は、僕等の事件をこれに持ち出すのは恥辱でもなく、僕等の當然の權利である。こゝに藝術家と然らざる者との區別はない。

最後に、渠は『文壇に……多くの告白的作品』があるやうに云つたが、僕等の見るところでは告白小說などは意志の薄弱な作家ばかりにあつて、それも稀れである。少くとも、僕の作『離婚まで』を告白と見た人々の如きは間違つてゐた。僕はまだ自分のやつたことを懺悔するほどには落ちぶれてゐない。それから、かゝる原稿を書いて『衣食するは恥辱』のやうに渠は云つたが、渠が『世襲財產で生活してゐる』よりは、又僧侶が僞善の說教で俸給を取つてるよりは、ずツと恥辱ではない筈である。

用語に無反省な蘇峰氏と井上博士

（大正七年五月）

德富蘇峰氏が、國民新聞に連載の『大正の青年と帝國の前途』に於いて『現在の社會に於いては國家を除外して人類の有力なる團體なき也』と云つてるやうな點はいいが、また甚だしく無反省な机上の空論をやつてゐる。

その一二例だけをここに指摘するのだが、たとへば現代の靑年は『時代と無關係也、國家と沒交涉也。而して彼等一切の靑年を統すべき中心信條なく、糾合すべき中樞心系なく』。つまり、『一大根本主義』がないとある。こんなことはいつの時代にでもえらがつた老人が新時代の人々に向つて放つ空論である。時代はさう渠の思ふやうにきてろ面に劃一されるものでない。また國家はさう表面的な活動ばかりで生きてるものでない、寧ろ渠の所謂『耽溺靑年』とか、『無色靑年』とかあたまから卑しんでるもの等の間に、他の徒らに天下國家を叫び、若しくは無氣力に社會の因襲道德に從ふ大老や中老どもよりも、ずツと立派な生々發展を遂げつつあるのが實際である。

それから、また、渠は『彼等の哲學を一言にして約言すれば、所謂る刹那主義のみ』と云つた。そしてそれをどう解釋してゐるかと云ふと、『人生幾許ぞ、譬へば朝露の如し』と。何と云ふ無反省！

現代に何たる無智！　渠の得意さうに引用した刹那主義、刹那哲學なるものを、渠は果して少しでも事實に就いて考へて見たことがあるか？　この名を用ゐ初めたのも僕だ。この主義、この哲學の內容を主張し出したのも僕だ。從つてこれは僕が責任を以つて論駁して置く必要を感じたのだが、この主義と哲學とは、理想と云ふ虛榮ある甘言に人間の誠實な努力を少しでも遊ばせて置かぬほど、人間の內容を緊張させ、充實させる生活を確立し、從つてそれが日本國家の最も發展力になるものだ。古今東西を通じて初めて僕がうち立てたものだ。まして夢にも、渠が想像した如き昔の支那詩人流の呑氣な悲哀觀や諦らめではない。曾て黑岩淚香氏が『半獸主義』と云ふことに同じやうな無責任、無反省な評を下だしたことがあつて、僕が直ちに注意したが、忠實なる研究もしないで名の文字だけを見て、机上の斷定をして澄まし得られるなら、黑い猫も黑いから鴉だと云ふやうなものだ。

次ぎに、博士井上哲次郎氏の丁酉倫理會に於ける講演が中外日報に出たのを見ると、孔子の教は『功利主義ではない……人格主義の教であつた』とある。孔子がこの二主義のどちらであつたかと云ふ如きことは、今ここでは問はない。が、功利主義と人格主義とを相反したものに見たのでは、井上氏にもう新時代に於ける學者的立ち場がないではないか？　前者が後者と相容れなかつた時代もあつたらう。が、現代に於いてこの用語例を（特別な歷史的叙述にではなく）使ふ以上もツと反省してかからねばならぬ。たとへミルの功利主義でもその人の人格を下劣にしなかつた。まして僕等の解するやうな純全功利主義になれば、かの空虛な若しくは偏癖な人格主義を立派に補足充實した人格主義に進化せ

しめるのである。（大正七年五月）

僕の見たトルストイ

僕が小説の手法に關して、十年前に、深刻並に熱刻と云ふ熟語を發明したのは、トルストイとドストイエフスキとを對照する爲めであつた。乃ち、僕の著『新自然主義』中に於いて曰く『トルストイもドストイエフスキも共に刻薄な所があるらしいが、前者のは深刻で、後者のは熱刻である。』また、『メレジコウスキの人間神を組織するには、トルストイの肉的冷刻とドストイエフスキの靈的熱刻との好材料があつた。』

これが新熟語であつたので、印刷所や校正者に於いてわざわざ深刻や冷刻の刻を酷にしたり、熱刻の熱を熟にしたりしたものだ。ところで、僕には肉的冷刻のことは乃ち矢張り深刻の意味であつた。

トルストイには二重人格が備はつてたと云ふよりも、寧ろ二時代の區別があつた。藝術家であつた時代と、藝術を否定した時代とだ。渠の小説に現はれた渠は官能の人、肉の人、苦痛の人、自然の人である。初めて舞踏會に臨まうとする娘をもその立派な化粧や服裝を通して殆ど眞ツぱだかのやうにして見せた。また、停車場へ迎へに來た亭主に對するちよつとした毛嫌ひの感じを以つて、その女のやつて來た他の男との密會の狀景を殆ど全部想像させた。かう云ふことは、その作者に於いて、すべ

て人間の內部に對して或意味の體驗的洞察が伴つてゐなければできないことである。乃ち、人間の獸性を描寫するには、その作者も——少くとも、一度は——獸であつたものでなければならぬ。自分も獸であつてこそ、獸なる物を初めてその內部まで洞察することができるのだ。

ところで、僕がさきに半獸主義を以つて出發した時、トルストイを崇敬してゐるやうな人々までが、不思議にも、僕をこの主義の名稱だけを聽いて反對した。その時、僕はトルストイを見よと云つてやりたかつたのだが、外國人の應援を賴むのも癪だからとそのまゝ僕自身として主張を貫徹して來た。それからまた、僕は僕に向つて、その時、私かに人は半獸どころか、全獸だと述懷したもの等にも賴らなかつた。渠等はかげではそんな景氣づけを云ひながら、おもて向きになると矢ツ張りけろりと口をぬぐつたことを云つてた。そして僕のは、實は、——命名の仕かたが惡かつたので、——半獸でも全獸でもなく、肉靈合致主義と云ふことで、肉と靈との區別は人間にないぞと云ふのであつた。この立ち場からトルストイの小說に於ける行きかたを評すると、肉に通じるのは乃ち靈に通じるのであるから、その上にまた特別な靈的はからひは入らない。

肉の束縛を脫しようとか、苦痛を脫却しようとかするのは、靈的に高尙のやうだが、その實、淺薄な一般人の考へである。然らざれば、一般人の心理に妥協した、これも淺薄な宗敎家、哲學者等のはからひである。肉を脫することは結局人間の死であることを思へば、人間は肉のまゝ、苦痛のまゝ生きることが自然である。シエキスピア流の悲劇なる物が寧ろ喜劇である所以はそこだ。ドストイエフ

スキにはまだこの俗悪な悲劇的、僕から云へば乃ち喜劇的、解脫を求めたところがあるが、トルストイにはそれがなかつた。渠は自覺ある獸人として苦痛を苦痛として描き通した。苦痛をただ機械的に受けてるのでは、まだ自覺なき卑しむべき獸性だらうが、これを自覺して有機的に體現するのは所謂悲劇家の態度よりもまじめであり、所謂宗救家の生活よりも眞實である。若し人間內に靈性を求めれば、自覺ある獸性より外にない。そして人間外のことになれば、もう、僕等の生活問題にはならぬ。

トルストイがその小說に於いて自己の體驗した獸性を暴露して行つたのは正しいことであつた。ところで、僕等の見るところでは、獸性暴露にも二つの道がある。一は、それによつて眞の人間を生かすこと、建設することで、他はそれの爲めに人間を殺すこと、破壞することだ。僕等は日本人の持前として深刻になればなるほど根本的建設に進む方だが、トルストイは露西亞人として、否、虛無主義的思想の橫溢する近代露西亞人として、進めば進むほど人間を破壞した。渠が神の姿を獸の姿に引きすり下したと云はれるのはまだ〳〵いゝ。渠は實際に人間の獸性を木や石に、否、元素にまでも分解した。これは一種の偉大な力でないことはない。そしてソログブはこれをシエキスピアは太陽の光で人間を見たが、トルストイはそこにレントゲンの光線を用ゐたと云つた。

人間の生活には幻影も亦現實の一部であり、全部であることがあつて、そこに生きた個性も現はれるのだが、渠の描寫した人間には寧ろ個性が分解されて、直ちに感覺につらなる根本の意志若しくは生命しかない。けれども、これが獸性を離れては存じないところに、渠の愛生的傾向が伺はれた。か

かゝる態度が一般宗教的な形式家どもに、否、思想の根本から革新されない人人に、何の關係があらうぞ？　渠等がかゝるトルストイをかついだほど滑稽なことが世にまたとあらうか？　そしてトルストイよりも建設的な僕の肉靈合致說に反對したとは？

けれども、以上は小說家としての正直なトルストイである。虛僞が加はつたと云ふのに語弊があらば、思想上に無理をし出したと云へるところの、トルストイではない。やがて渠には自己の作品をもすべて否定する時代が來た。藝術なんかつまらないと云ふ實行的氣ぶんに勝たれたのだ。渠にはこれが宗教その物であつた。そして渠の書くものは渠の概念に過ぎぬ世界主義・博愛主義・無抵抗主義、勞働主義・菜食主義等の奴隷になつてしまつて、さきに示したやうな深刻で自由な表現がなくなつた。渠の作はあつても寓意や敎訓ばなしに墮した。生活を以つて生活を知らねばならぬ、充實生活を意識するには無力な理性ではなく、生活その物を以つてしなければならぬと考へた渠の立ち場から云へば、僕が屢々主張した如く、藝術も飽くまで實行的なものであるが、渠はこれを十分に理解してゐなかつた。

かのツルゲネフが渠に眞實を以つて手紙を送り、再び得意の藝術に立ち返つて吳れと勸めた意味には、僕の云ふやうな實行藝術の氣ぶんを包めてゐたかどうかは知らないが、（否、多分そこまでは考へてなかつたやうだから、トルストイに反省を與へるだけの力がなかつたのだらうが、）兎に角、一國もの、渠はこの忠告を鼻であしらひ、たゞさへ疎隔してゐた友情をます／＼疎隔させてしまつた。僕は

このことを以つてレオナドダヸンチがその偉大な孤獨性の爲めに社會から段々葬られて行つたのに比し、さきにこれを古今の藝術界に於ける大悲慘事の一つだとした。それでも、レオナドの偉大な未成品としての生涯は飽くまで實行的藝術の要求に動き通したが、容易に宗敎的なものに轉じたトルストイには、敎訓は實行であつても藝術はその氣ぶんでこれを行ふことができなかつた。これが渠の深刻な藝術にとどまることに滿足できなかつた所以で、渠としては相當の理由を有してゐたのだが、僕等を以つて見れば、渠にまだ反省が足りなかつたし、今一層徹底すべき維持力と自由な洞察力とを渠は缺いてゐた。

渠がずツとあとになつてシエキスピア反對論を書いたのは、太陽の光を以つて、否、常識を以つての平凡な性格劇の作者であつたところの者を、エキス光線を以つての深刻な分解者が攻擊した物とすれば、當然のことだらう。が、渠の『藝術論』は決してエキス光線にかゝた物ではない。矢ツ張り、常識的判斷に過ぎない。常識的命名狂なるノルダウに疑問狂と云はれたトルストイはまだ〳〵よかつたのだが、渠も亦デカダン藝術に向つてはノルダウと同樣の常識狂であつた。曾て僕が批評した通り、渠が第一に、宗敎的題材の空乏を指摘したも、それは外形的、常識的なことであつて、デカタン派が快樂追窮の奧には却つて絕大の苦痛を表白してゐたことを渠は知らなかつた。第二に、同派に形美の虛飾朦朧があると云つても、それは從來の語法を以つては新思想、新痛感を發表しにくいところから來た結果であるのを渠は察し得なかつた。第三に、人工的不自然を非難しても、在來の形式が破れゝ

ば、自家天眞の發露にも自家の工夫が加はらねばならなくなる所以に、渠は思ひ至らなかつたのだ。

斯くて身づから天眞の發露者であり、新思想家であり、絕大の苦痛であつた者が、その身づからの藝術をも——デカタンと傾向を同じくする所以を以つて——否定しなければならぬやうになつてしまつた。そしてこの第二の時代になつてから、また突然に『復活』を書いたのはほんの氣まぐれであつたらう。渠はこれを書きながら自分で『僕の從前の文體で書かれる』から『惡藝術』だと云つた。そしてかたツぱしから訂正して行つた。その結果はどうであつたかと云ふに、ほんのたゞ敎訓小說であつて、もとの深刻も冷刻もなく、少しひどく云へば、わが國の菊池幽芳氏等の通俗小說と大して相違のないものになつた。藝術家としては一大墮落ではないか？

メレジコウスキの『人並に藝術家としてのトルストイ』は大體に於いて渠トルストイの藝術その物だけを土臺としてゐて、そこにまだ足りないと見えたところをドストイエフスキで以つて補はうとしたのだ。簡單に云へば、深刻であつても變化がない、そして靈化の力はドストイエフスキにある、と。これは然し、肉靈合致說から見れば、まだ舊式な考へかたであつた。ソログブなどの見かたは、また、餘りにトルストイを完成した者に見過ぎて、渠の前後に於ける轉化若しくは變化を無視して了つた。渠の文學的勞作がその全範圍に渡つてはそれ自身一個の有機的全體であるとか、渠が唯一つの靈の宗敎なる物を示めしてゐたとか云ふのは、餘りに都合がよ過ぎはしなかつたらうか？

で、今も一昔以前の通り、僕は、わが國でトルストイをかついでる人々に向つて先づ聽きたい——

君等は渠のどの時代に感服するのかと。渠を偉大な全體として理解するには渠だけの素養と實質とを要する。渠は矛盾だらけであるから。そしてこの矛盾を矛盾のまゝに生かすのは、渠だけの偉大を有するものでなければできぬ。その他はすべて渠に盲從するものであらう。だから、一般人にはせめても渠の前後二時代を區別して渠を考へて見る必要があると思はれる。初めの時代には渠は新藝術の創造者であつたが、後の時代では新藝術が分らぬ人であつた。渠の實驗と知識とが狹かつたこと、中流市民の生活や都會人の貧困を知らなかつたことなども一原因ではあらうが、渠が中途から概念的に動き出したこと、寧ろ概念に固定して行つたことがこの變化の重大原因であつた。

僕等が生活を以つて生活しなければならぬことが渠の勞働主義であつたのはいいが、それがどうして直ちに百姓の勞働でなければならぬのか？ 百姓は原始的な生活をするからと云つて原始的生活のみを眞實だとしたのなら、それは勞働主義ではなく、單に現代生活否定主義である。そこには僕等の要求する藝術や宗教もなければ、人間その物もなくならう。生活を信じなければならぬ、生活に含まれてる眞實を信じなければならぬと云つても、そこからまたどうして無抵抗主義が生じるか？ 僕等の生活の眞實は惡戰苦鬪に在る。これはトルストイが安値に斷定するやうな人爲的條件ではない。人間に具備してゐる事實である。そしてこの事實を分析して見ると、無抵抗どころか、却つて自他對抗の意志だ。對抗によつて僕等の生活の眞實は保たれてるのだ。國と國ともそれだが、渠の無抵抗主義から來た非戰論は、露國の政治的實情に應じて生じたと云ふよりも、寧ろ固定概念上に絶對的な性質

を帶びてるに於いて、それだけ國家的制限、乃ち、對抗意志の撤廢論になつてゐる。

渠のかゝる主義や議論を——たゞ研究して見ると云ふのでなく——直ちに謳歌し、これによつて渠を崇拜するものがわが國人中にあらば、それは日本人としての立ち場を忘れた雷同であつて、その生活はわが國に於いて實際にはできないものである。斬殺されるか、國外に放逐されるかしなければならぬ。日本人でなくなるからである。トルストイ自身がその國の國教會を破門されたのは僞善の思想や行爲の多い敎會員どもよりも一層正直であつた爲めだ。けれども、國外に放逐されなかつたのは、その國に渠の如き破壞思想が——現大戰の結果で分る通り——横溢してゐて、渠ばかりが破壞家、夢想的破壞家であるわけでもなかつたからである。渠の如きはわが國のやうな統一あつて發展する國がらには出る筈がないが、その代り若し出れば直ちに斬殺か放逐である。そしてこの豫想される所置は決して壓制でも無謀でもない。渠は無責任の自由を一種の思想に於いて主張したのであつて、對抗的存立の國家や人間の實生活を世界主義、博愛主義の美しい空名のもとに亂暴にも破壞しようとした者で、云ひ換へれば、初めから自分も死を恐れつゝだが死を求めてゐたのだ。死を恐れるにはまだ生存上の責任感が添つてるが、死を求めるも同樣の人間破壞には自由があると云つても無責任の自由だ。そして無責任は、もう、愛生ではない。そこにも渠の實生活と概念的思想とに大矛盾があつた。

虛無主義や世界主義や社會主義が唱へられてもほうつて置かれるやうな諸外國に於いて、トルストイの謳歌者どもが多いからツても、僕等はこれに雷同することはできないのである。僕等には僕等が

日本人なる人間としての立ち場がある。たとへ人間を元素にまで分析しても、そこから別に生命や新天地が初まるのではなく、そこに至るまでにいつも生き／＼した生命と新天地とが備はつてるとする。そして元素に歸つた時は死若しくは虚無で、もう、人間外のことだから問題としない。肉を全然うち滅ぼしてから初めて靈が全くなると云ふやうな空想的概念がトルストイに形づくられてから、渠がいよ／＼藝術をばかりでなく、現代の社會をも國家をも否定したのだが、かゝる偏物質的並に偏心靈的傾向は僕等日本人の傳統と實生活とにはない。僕等はいつも合致主義の自然で通して來た。云ひ換へれば、破壞的でなく、根本から建設的である。古事記に於ける神話的熱烈もこれなら、現代に於いて對抗意志を以つて世界に對する發展の勢ひもそれだ。

で、トルストイが如何に偉大であつても、僕等は渠の多くの矛盾を見のがしてはならぬ。同時にまた、渠の世界主義的傾向にも、世界の人類としてのではなくて、露西亞人としての特性が加はつてるのを忘れてはならぬ。その方が無論渠としてはさうあるべき自然で——渠の藝術に於ける人間個性の破壞は、渠の宗教家的主張に於ける國家破壞と相待つて、近代露西亞人としては、必らずしも矛盾してゐないのである。メレジコウスキが渠とドストイエフスキとをつきまぜて、世界的宗教を形づくらうとしたのも、露西亞的世界教のことであつて、直ちにこれをわが國には採用できない。日本的世界教が別にわが國にはあつて、それは僕等の主張する征服愛の福音でなければならぬ。

かゝる事を知らず、また日本人としての自覺も反省もない、かの德富蘆花氏や武者小路實篤氏の如

き淺薄な雷同者どもがあつて、試みに國家の内部必然的制限をも脫して、非戰論、無抵抗主義で世界主義的社會を形作り、そこへその本尊なるトルストイを指導者として入れて見給へ。渠は必らず渠等の豫想と反して、露西亞人的横暴と氣まぐれとを實行するだらう。そして渠等はまた自分どもの豫想の空想であつた事を悟るに違ひない。

トルストイは露西亞に生れたからこそ偉大になれたが、若し日本に出たとすれば、大鹽平八郎よりも物にならなかつたらう。わが國民性を離れて一足飛びに外國の事物や人物を謳歌するほど危險にして而も愚かなことはない。（大正七年六月）

トルストイ論補遺

ライフと云ふ雜誌に於いて森本氏が僕のトルストイ論（トルストイ研究掲載）に對してした非難を讀んで見ると、その態度と内容とに於いて非難者がおのづから渠自身の非難の根據を危うくしてしまつてるので、僕としては別に答へないでも、渠の貧弱な、たゞから意張りの價値などは讀んだ人には初めから分つてる筈だが、名を出されたに面じて、僕はこゝに一應の答へをして置きたい。

（一）　僕は二十年も以前、日清戰爭の頃にはまだ耶蘇教思想を脫し切れなかつたので、そして難者のやうな空疎な理想主義者であつたから、トルストイの非戰論などにも感服したが、その後は一變し

てしまつた。渠に取るところはその藝術に於ける深刻な自然主義的描寫力であつて、渠の宗教的傾向に於ける無國家的、世界主義的人道觀念などには反對である。然しこれは僕の變化であり、進歩であるから難者が月並みに想像したやうな『雷同附加』ではない。

（二）　難者はトルストイに二時代の區別を否定したが、渠がツルゲネフに今一度小說に立ち歸れと忠告されて聽かばこそ、却つてます／＼交際が疎遠になつて行つた事實は、渠の生涯に於ける大變化をおのづからによく證明してゐる一事件ではないか？　渠には確かに自己の藝術を否定する時代がでぎた。そして渠はかの『復活』を、『自分の以前の文體で書いた』ものだから、惡藝術の部類に敎へた。その癖、それが書かれたのは渠の後期に於いてである。これをしも――如何に確かなモデルがあつたツて――氣まぐれでないとは云へまい。尤も、渠は一旦書いたのをあとでまた段々書き直して後期の氣ぶんを滿足させるやうにしたさうだ。そしてその結果は、今日行はれてる『復活』だが、隨分あまい理想主義に勝たれてしまつた。ところが、難者はこんなところを靈の勝利などゝ考へてるのだからお話にならぬ。

（三）　あまい理想主義は、一般の讀者や、小說の外形若しくは筋にまで都合のいゝことを要求する形式的道德論者やには喜ばれるものだ。僕はこの點で『復活』を一種の通俗小說に過ぎないとした。決して『稀に存在するものを非現實的だとする』爲めではない。あの作の主人公に現はれた思想や感情は稀れどころか、あべこべにあり振れた種類の物だ。そして藝術の價値は、『手法の正確さ』の外に、

たゞ『内容の高潔さ』をばかり條件としてゐる者ではない。若し高潔だけが左ほど重大なものなら現代の詩もホイトマンやヱルレンやブレイキを去つて、今更らミルトンにでも立ち歸つたがよからうか？まして難者の辯明してゐるやうな程度の高潔は、僕等の昔、しやぶり盡した理想主義の出殘りの味しかないのだから――。

（四）古神道以來僕等の精神なる『肉靈合致』の狀態を難者は『本能の命ずる通りに行動すればよい』ことゝ受け取つた。この場合、本能とは肉靈合致の現實力をさしてゐるのなら、さうだと答へていゝ。が、渠は本能に對して別に靈の力があるやうに云つてる。それでは、本能を分離した肉と見てゐるのだ。して見ると渠が如何に靈化とか靈の勝利とか西洋的な、印度的な、また舊式な言葉をふり舞はしても、僕等はかゝる理想主義を貧弱であり、空疎であるものとする。僕等は肉にも又靈にも分離して人間が偏存するのを現實と見ない。人間の本來面目は肉なる靈、肉體ある靈體である。そしてそれが現實その物であるから、僕等はそこを離れる理想主義を排斥し、そこに執するところの現實主義を生命とする。トルストイの前期に於ける、乃ち、渠が自然主義の行きかたを採用してゐた時代の、藝術にもそこまでの綜合力はなかつた。蓋し渠は飽くまで自然主義若しくは現實主義を徹底させてゐたと云はれるけれども、その深刻程度は最後に肉から分離した靈へのものであつた。これ、人間の分解若しくは破壞に過ぎない外には何であらう？　決して建設的ではなかつた。これに反して僕は古神道の精神を内觀して、自然主義としては内部的であり、現實主義としては合致的であるところの、非理想

主義に人間神の建設を行ひつゝある。

（五） ところで、人間神、平たく云へば、人間生活のありのまま、あるべきやう、かんながらは、民族や國家の力を内部から自然の制限として受ける。乃ち、日本人は日本の民族性並びに國家的制限を自覺してこそ初めて日本人なる人間としての自由、獨立、解放を得るのである。これは決して牢獄や外皮ではない。そしてそれ以外に渡る自由、獨立、解放(乃ち、無制限、空想的な)を要求するのは、人間を破滅に導く所以だ。蓋し日本人には日本人として生活する外に人間たる道はない。そこに他人に向ひ、他國に向つての對抗意志が重大で豐富な意味を有するのだがトルストイは輕浮な世界主義的社會主義者として、また貧弱な無抵抗主義者として、これを覺ることができなかつた。だから過激派の無方針無責任な政府が短い間でも出現するやうな露國では、渠も偉大に見られようが、責任なり方針なりの内部から確立するわが國では、渠は大鹽平八郎の反逆以上には出られないと云つたのだ。トルストイを偉大にせぬのは難者の考へた通り制度の爲めだとすれば、その生きた制度がトルストイよりも偉大な爲めである。そしてその偉大を分有するわが國人は乃ちまた渠よりも一層の偉大性を生れながらに帶びてるのだ。トルストイの如き空想家を出現させぬのは、わが國の寧ろ誇るべきところであつて、決して恥辱ではない。

（六） 最後に難者がトルストイの『復活』を例に取つて僕の小說『放浪』に向けた非難の見當違ひを指摘するが、――第一、渠は、僕が作中の主人公に刹那主義の實行哲理家と添へ書きしてあるので、そ

れは作者そツくりの『自己描寫』だと思ひ取つたらしい。けれども、よしんば作者自身であつたとしても、一刹那前の作者は一刹那後のそれではない。そこには既に客觀的批判や反省を加へる餘地ができたものだ。まして僕があれを書いた時の態度はたゞ僕と同じやうな主張若しくは傾向を持つてる別人物を構成して初めからこれを客觀的に觀察して行つたのであるからこれを直ちに僕その物と見るのは間違ひである。それから、第二に、また進んで、渠がトルストイの『復活』を賞めて、僕の『放浪』をおとしめた根據は、たゞ一般的な寫實主義に對する一般的な理想主義の立ち場に過ぎない。云ひ換へれば、前者は作者直接の理想を語つてるが、後者はそれがないと云ふだけのことだ。けれども最近文壇の一大問題となつた僕の一元描寫論で述べた通り、それがないのはあるべきとしながら出せなかつたのではなく、あべこべに寫實主義が理想主義を排斥する努力の爲めである。寫實主義が深刻を要求すればするほど、ます〳〵作者直接の概念や理想などを避けて、作中人物がその場合その性質でどう云ふ特殊な人情若しくは人間性を發揮するかを見せるものだ。そしてかゝる人間性は作中の生まじめな道德家からもまた畜生のやうな人物からも、同じやうに受け取れるもので、道德家を描いたから高尙だが、野蠻人を扱つたから野卑だと云ふやうなうはツすべりのことはない。そこに立てるべからざる區別を立てゝ『復活』に於ける靈の勝利(乃ち、人間生活の空想化)を謳歌した難者こそ、淺薄な理想主義の概念や牢獄に捕はれてるのである。まして僕の『放浪』に描いた主人公は難者が見たやうな肉の別存を主張してゐるのではなく、肉なる靈のもがき(乃ち、人間神の生活)をやつてるのであるに於いて

おやだ！

（七）今一つ附け加へることができるなら、僕は難者森本氏の非社會的なから意張りを指摘して置く。僕が詩人としてわが詩壇に多少の効驗を與へたのは過去の事實かも知れない。が、小說家としての僕は十數年前から現今に至つてます〳〵實現してゐる。また、思索家としては、現今でも詩や小說に哲理的根據を與へるに努力しつゝあるのみならず、同時にまた日本主義の運動に於いて、政治から宗敎に渡るまでの戰線に立つて、世界を相手にする覺悟でゐる。この覺悟が成功するか不成功に終はるか、そんなことは僕自身にも分らない。が、兎に角、さう云ふ活動を僕がやつてる事實は、現今、少くとも森本氏の仲間よりもずツと大きな範圍の間に認められてゐると思ふ。で、『今の文壇ではもう彼の存在なんか忘れられてゐる』と云ふやうなことを僕に就いて渠が云ふのは、渠の世間見ずと精神的吝嗇でなければ、下宿屋の二階に於けるから氣焰に過ぎないぞと注意するだけの權利は僕に許されてゐるのである。

要するに、渠がトルストイを十分に研究するのは勝手だらうが、その研究が日本と日本人とを忘れて行くやうな事大主義的傾向は僕等として許して置けないのである。渠としては、また、もツと內部的現實主義を味はつて渠自身の空疎な理想主義的論法にもツと反省を加へる必要があらう。

（大正七年七月）

內部的寫實主義の立脚地

もう、何度も僕としては云ひ古し、答へ古したやうに思はれることだが、日本評論（七月號）で金子洋文氏が僕に對して云つたことを調べて見たい。

渠の如き未だ概念的に小說の要點を引き出して見やうとする人には、先づ渠が小說をどう讀むべきかのことから初めねばならぬ。渠は初めに僕の『冷たい月』を概括してたツた二百字ばかりにして出したが、これを僕の作の梗概若しくは外形だけの筋と見たのか、それとも內容と見たのか？　若し筋と見たのなら、不本意ながら僕もそれでかまはない代りに、渠が此『創作に於て何を表現せうとしたのか』と質問する用意にはならない。若しまた小說は筋に在るとして內容も乃ちそれだとしたのなら、創作の具體性を全く度外視した門外漢的な云ひぶりであらう。

若い女が承知してか若しくは承知しないでか（そこは作者が斷定してない）事情をもとにして兎に角危險な關係や場所に這入り込んで行くこと。中年の男がこれに野心を包み切れず、さうかと云つて、亂暴にも出ず、若い男女の親しみ（關係があつたかどうかは分らない）を羨み、嫉み、苦しむこと。あの作に於ける最後の誘惑に失敗しても思ひ返して見ればなほ冷たい月の光にもあたゝか味をおぼえた程の寂しい希望の殘つてゐること。かう云ふことが人間生活の實際であり、同時に、やさしく云へば

人情、六ケしく云へば人道(英語ではいづれも一つのヒウマニチ)の實際問題ではないか? 僕としてはこの問題が考へてなかつた時に初めて『一體……何を表現しようとしたのか』の疑問を渠から提出されても止むを得ないことになるのである。

第二に、渠は相容れざる理想主義と寫實主義との立ち場を見分けてゐないやうだ。兩主義は人間生活の實際問題を考へるところまでは相提携することができるけれども、提出した問題に作者の解決をも書き入れやうとして理想主義に馳せてしまうのである。人生の實相、乃ち、現在の活動を無理想、無解決と見做すものには、理想的解決を與へるのは高尚でも深遠でもなく、却つてそれだけ一時的、淺薄的になる所以だ。で、無解決を忘れずに人生を考へるのは寫實主義の最も深刻なのでなければできぬ。そして僕はそこに立つて創作をしてゐる。斯くて實際問題を最も實際的に、また最も深刻に提出してあるのに、それから『暗示も教示も與へ』られないと云ふ渠は、そこに何か不理解があるのでなければ恐らくあたまに何か缺陷があるのだらう。

渠がその教示若しくは暗示と云ふには、或は有解決的な理想若しくは目的を要求してゐるのだとすれば、淺薄なのは僕の考へではなく、却つて渠の理想主義にある。渠は無理想無目的の偉大な人生を隘小な倫理觀で左右できるとするわけだからである。人間の向上とか進歩とかは隘小な倫理觀に於ける取扱ひであつて、それに左右されないところに僕等の主義の獨立性が存してゐる。前田晁氏も時事新報に於いて、僕の同じ作に『出て來る人間は……どれを見ても價値のありさうな者は一人もありま

せん。少くとも友達にしてつき合へさうな者は一人もありません』と云ふやうなことを云つた。が、そんなけち臭い觀察は批評として三文の價もない。寫實主義の創作は倫理や交際の道具になるには餘りに偉大だ。前田氏は僕を以つて『人間の獸性を暴露する』ものとしたが、この暴露は人間直接の覺醒ではないか？　そしてこの覺醒は因襲的生活の革命であり、新生活の創造である。そしてこれは理想上のことではなく、實際的事實だ。金子氏よ、これが『何で不自然』だ、何で『安價な興味』だ？

第三に、僕の創作は『發展』並に『毒藥を飲む女』以來は全く寫實主義を深めたものである上に、今一つすべて作中の主人公が殆ど第一人稱で物を云つてる程に渠を中心として書いてある。從つて、渠がその場合にゐて見聞しなかつたり、報告を受けなかつたりしたことは、作者がたとへその事を知つてゐても、若しくは書けば書けても割愛してある。（短篇に於いても、長篇に於いてもだ。）田山花袋氏が曾てずツと以前に僕の或作（男の方が中心であつた）に對して、今少し女の心持ちを描寫したらいゝのに、それができてゐないとやうの評を與へたことがある。が、これは僕のこの主人公中心の心理描寫的態度を知らない爲めの駄評であつた。今少し女の心持ちが書けてないのは、作者が書けなかつたのでなく、乃ち主人公なる男が性格上それだけまだ女を解し得ないところがあるわけになつてたのだ。

僕は作者として、劇に於いての外は、一作中であの人物になつたりこの人物になつたりすることを斷然避けてゐる。中心轉換のことは德田秋聲氏の佳作を除いては、大抵の人にあるが、そしてこれが爲めにその態度を不眞面目、滑稽若しくは無反省にしてゐるが——僕には斷じてこのことはない。そ

してこれが却て度々誤られて、作者が主人公と同一であるかのやうに思ひ見做された。金子氏もこの見當違ひに落ちて、『作者自身の精神が創作全面に渡つて醜惡の興味にひかれ、それを是認してゐる傾向がある』と云つたのだらう。まだ人生觀察の力が不足してゐながら、えらさうな議論をして見たがるもの等にはよくある云ひぶんだ。前田氏が『岩野氏の(作中)人物は作者と一緒に踊つてゐます』と云つたのも、これではくさゝれたにしても、讃められたにしても、僕には當つてゐないのだ。前項に於ける『今少し女の心持ちを』と云ふ難者の言と變りがないではないか?

第四に、作に現はれる作者の精神は、愛の精神であらうが、憎みの精神であらうが、これは孰れでもかまはない。(また厭世的でも樂天的でもだ。)金子氏のやうに愛の精神でなければならぬと云ふのは、飜譯的人道主義者等の口吻に過ぎぬ。それから、また、その作者精神の現はれ方にもだ、或作者は作中諸人物中の一人を自分の理想の人として(これは最も拙いやり方だが)その言語や行爲に自分の精神を現はす。また他の作者は作中事件の經過を自分の斯うあらせたいと思ふところへ持つて行く。(以上は理想派や享樂派に共通だ。)然し或作者は自分と創作とを區別して主觀を離れた客觀描寫ができると思ふ。(物質的自然主義だ。)また他の作者には主觀とは無理想無目的の活人生を實現する態度であつて、そこに作の材料が客觀的存在を有するとする。(全部的自然主義、若しくは内部的寫實主義。)

僕のはこの最後の場合のとして現はれてゐなければならぬ。作者の主觀は流行や小思索の爲めに生ずる中途半端なものではなく、人生の絕頂若しくは最根本に緊張しつゝあつて、それが人生のどの部

分に偏れても、そこを直ぐ材料として全部的に活かすやうにする。向上とか進步とか、愛とか憎みとか云つてる間は、まだ中途半端であり、部分的である。部分に全存の(乃ち、表象的な)ヒウマニチ、これが內的寫實の現實であつて、理想に分派せぬ實際の緊張である。作者の精神はこゝに現はれる。『多くの批評家はそれを知らない』とは、寧ろ僕から金子氏等に提出すべき命題であらう。

渠等の有する如き淺い概念からの要求に革命を施し、新しい立ち場を與へるのが僕等の寫實主義である。なほ云ひ足りぬところは日本評論七月號の『有主義で無理想』並に本紙前號の『獨存孤立の偉大』に照らして貰ひたい。(大正六年)

雜纂

樂劇漫語

外國の所謂オペラ――これを音樂の方面から云へば、樂劇と譯するのがよからうし、歌辭の方面から見れば、歌劇といふ方が至當らしい。然しその歌辭が聲樂に由り、器樂と相待つて進行するのであるから、僕は樂劇といふ語を以つて通じさせたいのである。それで、社會が樂劇なるものに注意を呼び起すにつれて、その形式と成否とは別問題として、兎に角、一たび舞臺に登つたものを云つて見ると、渡邊、近藤諸氏が主となつて奔走したグリユツク作の『オルフオイス』、北村季晴氏の叙事唱歌を舊俳優が無理に普通のせりふを入れさせて擧行した『露營の夢』、並に小松玉巖氏の作で謠曲を燒き直した『羽衣』である。第一者は音樂學校の奏樂堂でやつたが、歌辭は飜譯であつて、どれだけ原作の出意に合つて居たか知らないが、曲は近世樂劇の開祖とも云ふべき人のであつた。第二者は、歌舞伎座でやつたが、樂劇などいふ野心のなかつたものを、俳優達がそれに似たものをやつて見たいといふので出來上つたに過ぎない。第三者は、大膽にも歌曲を創作して、それを靑年會館で聽かせたので、演技と云ひ、作曲と云ひ、その不整頓を笑つて居たものが多かつたが、あまり日本かぶれをしなかつたのが却つて一つの取り柄だと云つた人がある。

以上の三者は、不完全ながらも、兎に角、多少の實例を示したのであるが、さて、西洋樂劇の本體

はどういふものかといふに、器樂と聲樂とが主であることは云ふまでもない。その組織が對話的に出來て居て、他の文句、乃ち、わが淨瑠璃などにあるチョボの樣なものはない代りに、その對話的のせりふは皆役者が歌ふのである。尤も、その間に、ウーベルチュール（序曲）の樣に、器樂のみを聽かすところもあるし、また、バレットの樣に、器樂につれて、無言で、一時間も二時間も役者が踊るところもある。わが國で之に類するものを擧げると、先づ能と振事劇とである。然し、兩者とも、對話的なところは素言葉で、曲節がついて居ない、これはそこを主として居ないで、却つて說明的な地謠ひに重きを置いてあるからである。能では、まだ、立ち衆と云ふ、舞臺に出て居る役者一同が、歌ふところがあつて、これは樂劇のコーラス（合唱）になつて居るが、振事劇には、そんな點もない。振事劇は殆ど人形芝居と同じで、たゞ違ふところは時々普通のせりふが使へるばかりである。その歌は、役者以外に樂座の設けがあつて、それが歌ふにつれてしぐさをするのである。樂座の唄――これは、希臘樂にもあつて、それをコーラスとも云つて居るが――これにつれて踊る樣なところは近世の樂劇にはない。また、バレットの樣な點は、能にはあるが、振事劇には合の手の外にはないのである。

それで、『露營の夢』を樂劇の本體から見ると、普通のせりふが澤山這入つて居る上に、樂座の歌をあしらつたところが多過ぎるのは面白くなかつた。僕の敍事小曲『脫營兵』は、この體を少し改めて書いて見た正本である。また、『羽衣』では、普通のせりふがないのはよかつたが、矢張り樂座の合唱が地となつて居たのである。坪內博士が『新樂劇論』に據つて試みられた正本『浦島』は、振事劇を本位と

してあるが、その後に發表された『かぐや姫』は能を主體としてある。それで、また、田中博士の意見に據ると、その『歌劇談』(白百合掲載)で、樂劇の形式は『第一人稱的表情、即ち、對話』を以つて貫かなければならない。『我國の淨瑠璃では、いづれの種類にも、多くは對話のところに節が附いて居ない。』『わが國の音樂が叙事的に發達して、對話の節つけを怠つたの』で、『畢竟、わが國では、叙事のうちに對話が這入つて居るので、西洋のは、對話のうちに叙事が含まれて居ることがある。』成る程、叙事詩よりも叙情詩、小說よりも劇をよしとする考へから云へば、樂劇の形式として、最も叙情的な純對話式がいゝのであらう。然かし、そこは、種々の事情と楷段とがあるので、純叙事式から純叙情式までの諸形式が出てゝもよからうが、第一、樂劇々々と云ふ人々が、この點に關して、どんな意見を持つて居るのであらうか？

古くは森、近くは姉崎、谷本、上田、島村などの諸氏も、樂劇に就て、種々の議論はあつた。僕も數年前、雜誌『白百合』を他の二者と經營して居た時、これが議論と紹介とを時々やつたことがある。然し、音樂家でないものが、樂劇をかれこれ云つたところで、どんなに結構な作が出來る？　そりやア、正本位を書いて奥れいと云つたら、書いてやることは出來よう。然し、それに滿足してハイと作曲を試みる專門家があるとすれば、その人はほんの物好きか小野心のある音樂家で、到底、物になりさうには思はれない。ワグネルを云はないまでも、少くとも、自分が自分で作歌作曲をして見ようと奮發する專門家が出て來なければならない。實は、樂劇の歌辭の如きは、碌なものはないので――こ

れは、ワグネルでも、ベートーヹンでも、さうであらうが――門附けをする女でも、若しそれが天才なら、歌辭はそれにつけさして置いてもいゝのである。文字が詩的であらうが、なからうが、そんなことは、云ふだけ野暮臭い。八六五だとか、四三二だとか、それを與へて曲節が附くものでもなければ、さういふ節があつてから辭の附けられるものでもない。そこらあたりの作曲家が一篇を二圓や三圓で頼まれる駄唱歌なら知らず、苟も樂劇と名の付くものを拵へやうとするのに、專門家がその專門を分擔させやうとするのは、もう、その人の死を意味するのである。樂劇作者はヘツぽこ詩人で、而も大音樂家である人のやる仕事ではなからうか?

それで、どうであらう? 幸田姉妹の樣な人は、外人の作つた曲を再現したり、また生徒に敎へたりして、音樂學校では日本一――否、現今では、日本も世界に頭を上げたのであるから、世界一――とも威張つて居られるであらうが、作曲といふものは出來ないお方々で、まだ門附けをする勇氣もなければ、ヘツぽこ詩人の資格もない。また、同じ學校に關係のあつた小山、山田などいふ諸先輩はどうかといふに、あまり後輩を敎へ過ぎたのが因果となつて、平凡普通な西洋樂に頭が固まつてしまつて、よしんば作曲はやられても、文部省が喜んで高等女學校の敎科書中に採用する位の程度であらう。よし又、返り見て、わが國在來の民樂界で注意を引くものを引き出して來ても、淸元の梅吉はどうだ? 長唄の六左衞門兄弟はどうだ? 作曲をやらせばやる點は、幸田姉妹の洋樂に於けるよりか融通がきくかも知れないが、明治以前の慣習を以つて、新社會の要求に應ずるものが出來るか、どう

か？　坪内博士が長唄連を使はうと思はれたのは、却つて博士と渠等との考へが相鬪せず焉といふ好都合になつて居るからではなからうか？　こゝに一人、わが國の音樂と西洋樂とを兼修しつゝある北村氏が居る。氏は充分に野心のある人で、『露營の夢』の如きぬえ樂を以つて滿足して居るのではない。獨吟の外は、技術の上で氏にあまり感服して居るものが少い樣だが、他日作曲家として立たうとする志は持つて居るらしい。たゞ賴むのは、もツと奮發して修養して貰ひたいのである。氏はあまり社會の表面に出ることを勉めない樣だが、これが處世に上手なところだと、皮肉を云はれて居るらしい。門外漢は、もう、今のところ、樂劇などいふことは絕望してしまうべきものだらうか？

兎に角、樂劇（廣い意味）の中心に、一度なつたり、または現在もなつて居るのは、文字の側からは坪内博士の一派で、樂論の上からは田中博士の一派である。前者は先づ正本を作つて之を不備不用意の音樂界に强い、後者は研究の態度を取つて、進步した文學界に輕擧をするなといましめて居る。現今の文界と樂界とを比べると、前者は富士山なら、後者はまだ筑波山にも及ばない、若し一人でも天才が出て來て吳れるまでは、外部にあつて、坪内博士の樣に上から刺擊するのもいゝし、田中博士の樣に下から進めて行くのもよからうが、兩氏が局に當る人々ではなからう。坪内博士を例のへツぽこ詩人にするのは、あまり才華があり過ぎて可愛相でもあるし、田中博士に一度門附けをせいと注文したつて、まじめな首を振つて研究をつゞけるだらう。

どうせ、今のところ、樂劇創作の局に當る天才はないとして、さて、どうするかも亦疑問である。

音樂學校の設立はあつても、戀といふ字を歌に入れてはいけないといふ樣な方針で教育するから、年頃を過ぎても獨身で居なければならん、生眞面目な技術の神さまには氣にも入らうし、また袴を穿いて大臣の訓令を頂戴する佛さまには安心であらうが、それではいつまでも女學校や中學校の教師ばかりを出す結果に終るではないか？　それも、ごろ〳〵出て來るに從つて、止むを得ず個人教授などをやる。生存競爭が烈しいので、とても修養などは出來て行かう筈がない。そんな中から、餘裕のある叙情劇たる樂劇を再現する技術家も出て來まい、まして之を作曲する天才などが望まれようか？　さればとて、田中博士の所謂『音樂上の普通教育』がない、在來の民樂家が淸元や、長唄や、常盤津やを別々に持ち出したところで、それが何の役に立つと思ふ？　能の如きは、もう、發達の絕頂に達して居るので、たゞ古代の藝術として保存をして置くより道はないと云はれて居るではないか？

それでは、もう、樂劇の準備とも云ふべき研究は、無駄だと云つてやめさせてしまはうか？　この問題は、たゞ、自由競爭の波にたゞよはせて置くべきものだと、冷笑してしまはうか？　實は、僕、公平に見て、二三ケ處から發表された不完全な見本を、或程度まで讃めて置くのがいゝのか、また、斷然、そんな耻づべきものは排斥して置く方が後の爲めになるのか、一向に分らんのである。然し、一たび社會に持ち上つて來た問題でもあるし、また、特にオペラ役者になりたいといふ婦人などがあるのを所々で耳にする位の有樣であるから、正當なやり方で、樂劇の出現を促すのは、僕等の贊成するところである。ところで、それが日本の社會に供給する者であるから、よしんば西洋樂を充分に採

用するとしても、わが國在來の音樂趣味を度外視することは出來なからう。それには、西洋樂をどれだけ研究し、邦樂をどこまで引き出して來なければならんのであるか？　この度合に關して、まだ識者の意見が發表されたことはない。且、かういふことは誰れが研究して與れるのであるか？　若しこれが國としても必要なものとすれば、政府が先づ委員を設けてやらすべきものではなからうか？　明治十何年頃であつたか、伊澤氏などが音樂取調べを命ぜられて、それが今の音樂學校となつた。今日はその頃よりか進歩して居るから、氏などよりか進歩した考へを以つて居る人々を撰らんで、研究をさせて置けば、それが他日樂劇學校（？）の基礎ともなるまいものではない。

劇的音樂は、詩や繪畫とは違つて、複雜な道具立てが入る。詩人や畫家ならば、たゞ初步の絲ぐちを與へてやりさへすれば、あとは自分で自分の物を作つて居ればいゝのである。たとへ一般の讀者にシムボリズムが分らず、新語法が解し難いとわめくもの等があつても、或程度までは、渠等も之を讀んだり、見たりすることが出來よう。然し、音樂界の狀態と來ては、可愛相に、殆ど何の根據もない。邦樂は、古くあるだけ、引き手は何の考へもなくやつて居ても、まだ之を聽いて喜ぶ通がりが多いが西洋流の音樂になると、私には分つて居ますと乙に澄まして、而もその內容の說明が出來ない人々の外には、殆ど普通の聽力を持つて居るものが少いのである。かういふ寢ぼけた社會に、よしんば一躍して、ワグネルが出ようが、バツハが現はれようが、喇叭節を歌つて途上を貰ひ行く墮落書生と比べて、どちらが有用な人物か分らないのである。よしまた、こんな社會で、幸ひにも、天才拔きの研究

結果が一つの樂劇見本を出したとして、それを演ずる役者――これは、普通の俳優とは違つた素養と經歷とを要するものだのに――それも出來ては居ない。またそれ等も天才拔きとして、急仕立てのあり合せものを使ふと定まつて、さて、之を賞鑑するものは誰れであらう？　きツと、お役目上、止むを得ず招集されるので、あくびをかみ締めてちんとかしこまつて居る貴顯紳士とその夫人との社會ではあるまいか？

さういふ開化した人々には、樂劇といふかしら付きのお膳を供するよりか、そのうちの一部を滿して居るおひらとか、口取りとかに當る獨吟、云はゞ、簡單な敍情歌をのみ聽かせてやれば、さはりでも聽いて居る氣になつて、隨分喜んで呉れるだらうが、それでは、やがて、自分達もやつて見たいなどいふ野心を起して、下手な樂譜讀みをお屋敷や別莊に引き入れ、自分達の下等な道樂根性から、をかしな調子をうなり出すお座敷藝になつて、一中節や園八流の運命を分たなければならなくなりはすまいか？　樂劇全體の正體を觀聽さしてやる前に、その一部を示めすのも一つの準備ではあらうが、そこはまた識者の考へ物ではあるまいか？

田中博士の『我邦音樂の發達に就て』を見ると、『目下の處、演奏者並に敎師共に缺乏を告げ、所謂音樂發達の機關が一向に備つて居らぬ』と云つてあつて、これは現今の音樂學校などでは滿足が出來ない意味であらうが、この點は僕等の樣な門外漢でもその通りであるのだ。また、かういふことが云つてある、『堂々たる官立音樂學校に於て、洋琴を專修するものが、復習するに、樂器を購ふことが出來

ず、云はゞ商買道具すら買ふ事が出來ぬ向きもある』と。ピヤノが毀はれてしまつたのに、お父さんがもう買つて吳れないので、止むを得ずヴヰオリンに移つたところが、六ケしくツて、もう、やめようかと思つて居るといふのを訴へた婦人には、僕も逢遇したことがあるが、こんなあはれな社會では、眞の音樂家のジャームもなか〳〵出まい樣にも思はれる。音樂と云へば、在來の習慣を聯想して、何んでも演奏者ばかりが音樂家だといふ夢の、まだ醒めない社會である。氏の所謂三拍子『作曲者と演奏者と素養ある公衆』とは、いつの世に備はるのであらうか？

詩人や畫家は、社會的關係が少いので、いくら冷遇されようが、いくら貧乏をして居ようが、平氣で自分の個性を發展して行く剛情者もある。自由競爭の結果、途中で變心したり、往生したりしてしまう樣なものはあつても、そんな意氣地なしは運命の爲すがまゝにまかして置いてもいゝのである。然し、音樂者となると、矢張り自分が好きでなつたにしろ、社會の狀態と相待つことが多いだけ、古寺舊院の寶物同樣保護をしてやる必要はなからうか？　渠等を自由競爭の波にたゞよはせて置けば、酒色に溺れて、貴顯紳士の袖に隱れて、幇間同樣の役目を演ずるに終り易いのではなからうか？　渠等のうちには、早熟の天才も多い樣だが、また薄志弱行、つひに爲すなきに終る徒も少くない。どうせ、教師などで滿足して居るものは、その技術が如何に巧妙であらうが、見込みのないものであるから、うツちやつて置いてもよからうが、苟も多少の抱負ある青年樂家——作曲向き、演奏向きの——を養成しようとするには、寺院の寶物同前、政府又はその他の有力の團體があつて、之を保護してや

るべきものではなからうか？

近頃、外國人に對する大ホテル、大劇場などの建設問題が起つて居るが、そんなことは社會が思ふ程に大問題ではなからう。そんな外形的裝飾運動——而も、それが直きに下火になる樣なもの——に熱中するだけの餘裕があるなら、世の識者と富豪とは、その勢力をもツと內部的問題に向けて見たらよからうではないか？　僕は決して、渠等に、詩人や哲學者の胸底へ這入つて來いとは云はない。そんな向ふ見ずの要求はしない。然し、單純な八々や、玉突きよりも、もツと趣味の深い男女の交際や創作の批評や、藝術問題をどうしようと思ふのだ？　また、今日の劇界が、確定した新思想と新藝風とを得ないで、五里霧中に彷徨して居るのをどうする？　渠等劇界の問題は大小劇場の不足ではないではないか？　また、特に僕の呈出したきは、この文中に連出した諸疑問である。僕は詩人で、音樂界には關係がない、然かし、樂界のあはれむべき狀態と不進步とを見ると、自分の範圍內を忘れて、かういふことも云ひたくなるのだ。詩と音樂とは、いづれも藝術のうちであるから、行き方も似て居るので、詩界にこれまで僕等が仕して來た經驗によつて、——樂界を決して馬鹿にするわけではない——如何にも樂界の不進步を同情に堪へられんからいふのである。世の識者と富豪諸君は、くだらん皮相の問題をやかましく云ふ暇があるなら、かういふ着實なる方面をも少し考へて見たらよからうと思ふのである。（明治三十九年七月）

男女間の趣味

男子と女子とを聯想すると、多少に拘らず、どこかそこに一種肉感上の刺撃が生ずるのは、普通、頭の黑い物の自然である。肉感挑發の誘因は、世間至るところに存在して居る。神經の鋭い普通人は、黑板塀に見越しの松を見れば、直ぐ變な氣を起すに違ひない。英米の紳士が、他人の私行を知つてもわが國人の樣に口に出して攻擊しないのは、表面にその神經を殺して居るからで――そんなことを云つたつて、その人は社會から何の利益をも得ないのみか、却つて自分の品性を下げるわけであるから寧ろ知らない振りをして居る方が高尙に見える。ところが、文藝上のことになると、作者の考に依つては、自然主義といふのがあつて、――僕等はこの主義の作物でなければ、到底、人生の深處に達することが出來ないと思つてるが――自然を自然的に描寫する技巧上の道筋には、隨分肉感を挑發する樣なところも出て來るものだ。

それが露骨な事實として出て來ると、春畫と同樣、風俗壞亂と見做され、また理窟としてあらはれて居ると、無道德として道學者の攻擊を受ける。然し、小說『サツフオー』中の螺旋階のところや、劇『モンナワンナ』の最後の氣焰などがなくては、いづれも氣拔けがした樣なもので、人生の深い趣味を感じさせることが出來なくならう。社會の平面的自然を描くだけなら、劇も小說も不必要であつて、

たゞ普通のお話をして居るものがあればいゝのだが、文藝家はその平面的自然を一步も二步も切り込んで行くところに、威嚴が出て來るのである。だから、この威嚴を以つて自然を描けば描く程、肉感の挑發は靈化されてしまうものだ。尤も肉感挑發が文藝の目的ではない、一藝術品の部分に於て、自然にそんなところもあることがあるので、それはどんな立派な人でも或部分を缺くと片輪になると同じわけだ。

そこで自然主義の傑作を讀むものは、人生裏面の深處に思ひ當つて、日々の生活にも興味をおぼえるのが當前だが、無學文盲とは行かないまでも、趣味と素養とのない讀者は、たゞその一部分に誘引されてしまう。かういふ手合ひは、廣い世界を悠々然として飛んで居るつがひとんぼを見ても、下等な情を動かすばかりだらう。これには、習慣といふものも與つて力があるので——嚴格な家庭に育つた青年が、少し自由な社會に出ると、直ぐ墮落する。外國人の旅行者が、わが國の市街を通行して、婦人の白い脛が裾から出るのを見ると、顏を赤くする。僕等は慣れて居るから何のこともないのであつて、今日三十歲以上の人なら、地方に居た子供時代には、男女共通の錢湯に這入つた經驗さへあるのだ。

男女間の趣味は、丁度、藝術上の趣味と同じであつて、人の素養と習慣とで違つて居るものだ。此間、新聞に出て居た樣に、米國で、或人が裸體が人間の最も自然な生活だと云つて、裸體生活を宣傳することが廣まつたら、僕の說かうとする男女間の趣味は、一層率直に說けるわけだが、殘念なこと

には、社會はそこまで悟つて居ない。出版物には發行禁止があるし、交際界にはしかつめらしい禮儀がある。僕等は、今日のところ、不自然から自然の趣味を辿つて行かなければならない境遇にあるのだ。正直に云へば男女の最も接近して居る刹那が、この男女問題の本位だ。種族の繼續、子孫の繁榮などは、趣味以外の實際問題であつて、たゞ金錢の勘定をするのと大した違ひはない。人間に生れて來た以上は、そんなこともあらうが、もつと餘裕のある生涯を送りたいではないか？

如何に男女の接近が面白いとしても、年中、一緒になつて居られるものではない。第一、衣服を着て居るだけでも、既に充分の隔てが出來て居る。この隔て、これが男子の事業をする時間で、一方から見れば、壯快な時間、また一方から云へば、苦痛な時間である。男子の白髮は、この間に發生するのが多いのだ。手に觸れても、目で見ても、實に女ほど氣持ちのいゝものはない。百花園や妙華園の草花に接するやうで、而もそれが愛想を云つたり、にこついたり、白い顏や手には、熱い血が循環して居る。小兒を見るよりも、女性が女性の本色を發揮して居る方が、無邪氣で、愉快で、これに接する間は、何の苦勞もなくなる。マホメツトの天國を夢見るまでもなく、女らしい女が居れば、現世は一面に極樂と見て通れるのである。

婦人に理窟を聽かせたり、道德を說いたりするのは、野暮の至りで——釋迦や孔子は、女に對する方針を誤つて居たから、『度すべからず』とか、『敎へ難し』とか云つたので。若し女に學問をさせるなら、音樂が最高目的で、貞操を敎へるなら、亭主の生きて居る間は、他の男子に身體は許すな位にと

めて置くがいゝ。柄にないことを勉強しろとか、自分以外の美男を思つてはいけないとか命ずるのは、人心の自然に反して居る。夫婦にして、死ぬまでも相互に滿足して居られるなら、その人々は幸福であらう、然しその幸福は、兩者が別れた方が、もツと發展して居たかも知れない場合のあるのを思はなければならない。人間の精神には、向上心が備はつて居る。おのれ又はおのれの配偶者よりも更らに立派な美貌、美德を追ふのはその人として奮勵して居るので、喜ぶべく、尊ぶべきことである。

僕はプラトーンの様に婦人共有說は說かない、然し、男女精神の自由を說明する爲めに、瑞典の神秘家スヰデンボルグの愛論を云つて見ようが――渠に據ると、男女の地位は定つて居ない。品性上、あゝ、あの人はえらいと思ふ者があると、その思ふ者が女で、思はれた者が男である。その男がまた自分よりえらい者を見付けて、それに精神をうち込むと、うち込むのが女になつて、うち込まれたのが男である。かう云ふ風に、僕等の心靈は男女相轉換して進歩するのだ。今、この說を實際に應用して見ると、餘程面白い現象を想像することが出來る。女性がどんなに奮勵しても、その形體が男性に變ずることは出來ないものとすれば、年中、その形のまゝ、價値の多い男子を見付けるに從つて、それに戀慕して行く。さうなると、跡から、跡から女性に棄てられる男子が多くなつて、それらは皆醜男と不德者であると證明されたも同前だから、慚愧のあまり、首でもくゝつて死んでしまうより外はない。若いものから老人に至るまでが、棄てられる度每に、女から恥辱と反省とを與へられるのであるから、今日のハイカラ先生輩が、婦人を訪問する前に、懷中鏡を出して自分の鼻付きや目付きをつ

くらふ様なことではまだまだ足りない――毎日、毎晩、自分の胸中をかへりみて、女に愛想をつかされる原因である無學と不正との影が、心の鏡に映つて居はしないかと心配する様になるだらう。この大心配が男子全體の精神を益々向上さすから、醜男と不德家とは、自然に、社會に跡を絶つに至るだらうに。

殘念なことには、今の女にそれだけの勇氣もなければ、それだけの能力もない。獨逸の早熟哲人ワイニンゲルは、婦人に靈魂はないとまで云つた。（尤もこれは男子には靈魂があると見てだ。）然し、それもあんまり可愛相だが、女性は矢ツ張り女性で、詩人メタリンクが云つた様に、女を見るのは草花を見るのと同じで、無邪氣と可愛いのとを特色――寧ろ生命――としてやらなければならない。女もそのつもりで居なければ、この生存競爭の烈しい現世に處して行くことは出來ない。生物學で云ふとあの比目魚といふ魚は、赤鯛や黑鯛の樣に、もとは竪に泳いで居たものだが、身體が華奢に出來て居たところから、浪の動搖に堪へないで、平らに泳ぐやうになつた。すると、片目では不便なので、下に隱れて居る目を頻りに使へる樣にもがいた。その習慣が段々子々孫々に傳はつて、つひに兩方とも上手の正面に据わる樣になつた。それで、あの可愛い姿になつたのである。

男子に對抗しようとする獨身女や後家さんは、もう、女性ともつかず、男性ともつかず、強いて云へば　中性的お化けである。オールドミス（老孃）と云へば、外國でも、交際社會の厄介物になつて居るのだ。比目魚の樣にしなやかに、花の樣に麗はしくあつてこそ、またあらうと努めてこそ、初めて

女の精神は男子の歡迎するところとなるのである。今日の女子教育界に、無趣味不自然の賢母良妻主義が跋扈して居るのを見ると、僕等は全く恐縮するのだ。女の淺墓な知力に訴たへる教育が何程の効果があらう？ 渠等の所謂賢母良妻は他日の愚母惡妻を養成する意味である。子供の三味線やオルガンを稽古してやることも出來ねば、來客に對してもヒステリィ面をして、之を愛想よく持て爲すことも出來ず、夜會に出ても、手腕が足りないから、露骨で、少し美男らしい人と舞踏でもすれば、直ぐ燒き餅燒きの亭主をおこらしてしまう。男女間の趣味がよく分つて居ないで、家庭問題をやかましく云つたつて、僕等は何の興味も感じないのである。

耶蘇教の傳說に據ると、アダムとイブが罪惡を犯してから、神といふお父さんに對して恥かしくなつたので、先づイブが木の葉を腰に纏ふやうになつたとある。然し、これは罪惡からではなからう、男女間の趣味の絕頂なる戀愛を感得してから、女の心が奧床しくなつたのを示めすのである。また、之と同時に、男は事業をする餘裕が出來た證據である。不斷に接して居る自分の女房よりも、人の細君の方が何となく奧床しく見えるのは、このイブの心の轉機を考へて見ると、必らず明白にその理由が浮んで來るだらう。衣服の制度は、普通人の考へて居るよりも、一層深い意味を持つて居る。これも禮儀の一つだと云つてしまへば、それ迄であるが、人間といふ一つの存在を假りに肉と靈とに分つものは衣服である。太陽の白光に對して三稜鏡を置けば、奇麗な七色が分光される。婦人が衣服を着れば奧床しい二元的性質を帶びて來る。この時、婦人は家庭の一員であるよりも、社會の常員となつ

て居るので――男には、剛健な本性を發揮させて、その任務の事業に當らしめ、自分はその靈性を解放して、自由の精神を養ふのである。この時こそは、廣く世間の男子の心を受け入れるだけの自由がある。この自由は乃ちどこで滿足さすことが出來るかと云ふに、交際社會である。

女が社會の常員として自由になつて居る時は、危險と云へば危險だが、その氣力を養ふのもこの時である。肉情を押さへて、男子と靈の交通をやつて居る間は、その亭主も何の故障をも云ふ權利はないのである。航海は板子一枚を以つて生死を分つが、男女の交際は絹布一枚に依つて、向上と墮落とを隔てゝ居る。然し、わが國の女が早く老い込み易いのは、男子がその精神までも束縛して、あんまり家にばかりくさ〴〵さして置くからで――多くの男子に接して、談話の出來る女は、いつまでも若やいで居るものだ。僕等は、たとへ五六拾歲を越える樣になつても、仕事から歸つて來ると、生き生きした女房の迎へに出るのを望むのである。徒らに死んだ道德や貞節を說いたところで、櫻の花を鹽漬けにすると同然、血の通つて居る女が乾枯びてしまつたら、つまらないではないか？　女房や娘を家にばかり押し込めて置いて、ヒステリイや子宮病に取りつかせ、たま〳〵夜會や園遊會へ出すと、さながら出山釋迦の樣に瘦つこけた風來者では、お話しにならないではないか？

衣食住の問題にばかりかじり付いて居るものは取り除けとして、苟も人間らしい人間生活をやつて居るものには、その胸中に、綽々とまでは行かないとも、餘裕が出來て來る。この餘裕を滿たさうとする傾向が、人間の生命を持續して行く根底である。今一層深い言葉を以つて云へば、この傾向は、

人間が人間の根本生命の持續を渴仰する努力である。文藝を有しない國民は野蠻の域を免れないが、文明の最高發現たる文藝のすべては、この渴仰努力があつて、初めて根底を得るのである。シルレルは之を遊戲性を以つて解釋したのだ。人生に缺くべからざる趣味と生命とは、一に以つてこの性に係つて居るといふのだ。ところが、今、婦人の地位を考へて見るに、この遊戲性(を眞正の解釋法と見れば)の對象たるべき資格を備へて居る。だから、或意味に於て、女は矢張り一個のおもちやである。

然し、僕、實は、藝術の世界を以つて遊戲的不嚴肅の假現世界とする、哲學者流の見解には、無條件で贊成することが出來ないのであるから、文藝なるものが人間精神に及ぼす大切な影響を渠等よりも一層切實に見て居ると同時に、女に對しても、肉靈融合の間に、一種云ふべからざる微妙な味ひを味はうことが出來ようと思ふ。上品とか、優美とか、高潔とか、熱誠とか、奮發とか云ふ態度は、この趣味があつてこそ、初めて眞正に受け取れるのである。純粹な文藝を味はうことが出來ないものには、婦人存在の眞意を悟ることもなからう。女は造化が最も卑近に、また、最も解し易く創作した藝術品である。之を賞し、之に親しみ、之が性質を分有するのは、造化の餘裕ある懷にいだかれた氣持ちになる樣でなければならない。之を爲し得ない唐變木は、人生の愉快を過半取り損ふ奴で、天の與へた幸福を有し得ないのは、不幸中の最も不幸なものだ。

それでは、結婚といふものが單へにこの幸福を全うする所以であるかといふに、あながちさうは受け合はれない。その上、結婚の爲めに、前にも云つてある通り、得らるべき幸福の範圍を固定してし

まう恐れがある。エマソンの様な着實な議論をする哲學者でも、原理としてはスヰデンボルグの說を贊成して居る程で、たゞ之を實際にすれば、現今の結婚制度を破壞してしまうからと云ふ常見から、矢ツ張り、現世では、男はあばた面、女はお多福でも、互ひに勵まし合つて、たとへ相互にその缺點を發見しても、直ぐ他の一層慕はしい人にくツつく樣なことはしないで、夫婦相呼應して、精神上智力上の修養に、向上的手段を取るがいゝと云つたに過ぎない。この論文は無限微妙な趣味を問題として居るのであるから、手段の樣に狹小粗雜な權道に立ち入るには及ぶまい。一言にして云へば、男女間の趣味は戀愛であつて、戀愛は抱擁を以つてその絕頂に達する。然し、物の絕頂に達した趣味は、もう個人的になつてしまつて、それは、個人その物の刹那的生存には、空腹に對する食物や、猛火に投ずる焚き木の樣に必要なものであるが、社會としての問題にはならない。だから、社會として一般に感じられる男女間の趣味は、戀愛が抱擁に至るまでの道筋である。結婚といふことを拔きにして考へれば、女はどんなお多福でもどこかに愛嬌のあるものだ。女は、實に、多忙で苦痛の多い男子の慰藉者である。だから、男女交際の上に於て、僕等が正當に感じていゝ極度の趣味は、夫婦の情愛を絹布一重の隔てを以つて相傳へ得るところまでである。それ以上に行くと、問題は別になるわけだ。この心持ちをくづさないで男女の交際がある間は、自由と愉快と若氣とは、危險に落ち入らないで、靄然春の霞の樣に社會の空に棚引くのである。

社會はどうせ弱肉强食である。逆焔を云つたゞけでは駄目だ。實力の强いものが上に立つのである。

男女同權などは、とても實行されるものではない。外國では、女をうはべだけでも尊敬しなければ、自分も尊敬されない。わが國では、裏面にあつて、女を重寶がらねば、一家は治まらない。内外表裏の違ひこそあれ、女子はどうしても男子の奴隷である。かう云ふ風に弱いものにされても、尚、女子が社會に立ち場のあるのは、將來は尚更らのこと、この苦痛と悲哀との多い世にあつて、一般男子の慰藉者たるべき資格を備へて居るからではないか？　女は、だから、交際社會の花でなければならない。

その交際範圍の狹少と貴賤とは、その人の境遇に從つて生ずるのだ。交際する爲めに墮落するやうなものは、交際しないでも、矢ツ張り墮落して居るのである。その間にあつて、獨身者が自分の配偶を求め、配偶者が氣の合つた人々と親しむのは、何も惡く云ふべきではない。寧ろ、人間自然の行動である。更らに人間の心を若やがす精神の自由である。外國などでは、あれ程交際が盛んに行はれて居ても、墮落者の見えないのは、墮落するものゝないではない、さう云ふ弱蟲、意氣地なしは社會全體から齒牙に掛けて居ないのであるのだ。

然し、それにはその習慣――詳しく云へば、素養と練修――が必要である。たま〳〵男女交際會を開いても、某會であつた樣に、男は男、女は女、席に隔てをつけて會食したからとて、何の役にも立たない。これは、青年男女は勿論、小兒の時から始めてかゝらなければならない。わが國では、小兒でも、男女の遊んで居るのを見ては、之を笑ふものが多い。ところが、外國の兒童などは、男兒も女兒も一緒になつて、木のぼりをしたり、野遊びをするのが普通である。或時、外國の男兒が、一緒に

遊んで居た女兒の帽子が風に飛んだのを追つかけて、堀端まで走つて行き、身を以てその上に倒れて漸くそれの水中に落ちるのを助けたのを、僕は見たことがある。わが國の男兒なら、そんな場合に、たゞあざ笑つて見て居るのが多からうと思はれる。わが國では、男子がラブレター（戀文）を平氣で書く習慣もないし、また、女子の方でも、外國婦人の樣に、何回も何回も、男の意を拒絶して、その眞意を見極めた上で、適當な返事をするまでの餘裕もない。外國人なら、その生徒が作文の時間にラブレターの稽古をしても、紀行文や論文と同じ樣に取り扱つて呉れるのである。これ程さばけて來れば、社會は一層活氣を帶びて賑かになるだらうし、又、家庭に於ても、メランコリヤの束髮や丸髷がごろついて居なくなるだらうに。

婦人問題には必らず家庭といふ觀念が入り込んで來て、それを獅子や虎の穴の樣に大切視するのが、男女に拘らず、餘程えらい樣に見做される傾向が出來て來た。然し、家庭問題は、ふかしパンの廣告ではないが、馬鹿か仙人の云爲すべきことであつて、苟も天下に一事業をしようといふものには、之を口にするのも恥づべき程けちな問題である。何も、外國人がホームホームといふからとて、僕等もこれに附いて家庭々々といふには及ばない。スヰートホームなどいふことは、スヰートポテトーのほこほこ燒けて居る間のことで――その熱がいつまでも續くものだと思ふのは空想に過ぎない。僕等の家庭は、獸性とお三どんと子守りとの三位一體的コンヹンションと見て置いたらよからう。この形式に滿足して居る生活は、餘裕も何もない狀態であつて、そこに安心を得るものは、事業の失敗者か、世間

知らずの迂濶者であらう。多少世上の辛酸を嘗めて而もなほ野心のあるものには、正直なところ、子供の笑つて呉れるよりは、女房の笑つて呉れる方がいゝ。否、女房として女性が近づいて來るよりも社會の一員として婦人が接近して來る方が面白い。

夫婦の關係は、特別な目的を有する家庭に於てこそ、たとへば國家に於ける君臣と同樣、破るべからざる約束ではあるが、社會の常員として見れば、男女の關係は左程獨占的性質を帶びて居るものではない。家庭と社會とは、或程度を越えれば、必らず衝突するだらう。この時に當つて、敗軍の將は前者の柵内に退縮するもよからう、然し、活氣をいだいて尙發展しようとするものは、いつまでも後者の範圍内にとゞまつて居たいではないか? この多忙で而も奮勵を要する日本の現代に於ては、僕等は成るべく餘計な重荷を負ひたくない。家庭問題の如きは、たゞ物質上の維持ぐらゐにとゞめて置いて、社會の男女として、廣くその趣味と精神とを交通させたいではないか? 過渡時代には、犧牲者を出だすことが多いのは當前である。たゞ誰れしも自分の女房や娘を犧牲に供したくないから、ぐづ付いて居るのである。然し、犧牲が多くなればなる程、男女の趣味が精練されるのが早くなるわけであるから、僕は遠慮と虚僞とを退けて、交際の自由と男女間の趣味とをありのまゝに說明したのである。(明治三十九年十一月)

藝者美

玩具になる處が好い――大白滿を引いて滿腔の欝抑を遣るには――一切が無形式――彼等もシヤアシヤアすれば此方もヅウヅウしくする――惚れて見たいのも居るが――美醜を撰ばず！――藝者の長所――着こなしの妙――其の表情

藝者美？　別に美と云ふべきものは無い。一言に云つて了へば、男の玩具になるところが面白いのだ。どうせ藝者と云ふ以上、『失禮だわね、妾不見轉では無いことよ。』と柳眉一轉、嬌瞋を發したところで、之を要するに玩具たるに過ぎない。向ふも勿論商買柄とあつて、玩具にされる積りで居るのだし、此方も頭から玩具にする積りで遊ぶのだ。從つて藝者を相手の遊びは、其の面白味が他とは大分異ふ。

朝から晩まで營々として、生活に追はれてくすぼり返つて居る嬶アの面を、今更らしく見たところで、不愉快の癒る氣遣ひはないし、止むなくんば、知合の女――細君でも可ければ娘さんでも可い――の處へ話しに行く。すると向ふも平生から、此方の氣象や境遇を理會(のみこ)んで居るから、不平も聞いて吳れるし相應の同情も寄せて吳れる。併し幾ら同情して吳れるにしたところで、相手が堅氣の女丈けに、其處に制限がある。到底我々を厭足らしむるまで求める譯には往かん。第一杯を擧げて滿腔の欝

抑を遣るなど云ふことは到底望むべからざることだ。勢ひ之を藝者に求めるより外なくなる。此の意味に於いて藝者を相手に遊ぶのが面白いのだ。

藝者となると、一切が無形式だ。自分の思ふことは何でもやれる。區々たる世の中の禮儀や習慣の外に出て、不羈放縱、飽まで仕度い三昧のことが出來る。此の間の趣味は恐らく天下何物を以つてしても、此すべきものは有るまい。

昔はよく藝者を舉げて、泣言を云つたこともあるが、中には相應に自分の泣言に同情して吳れた女も居たが、今では無暗に强がつて居る方だ。氣が合へば何度も行くし、氣が合はなければ、一度限りだ。

兎に角藝者商賣をして居る女は、普通の女で多少の意氣込のあるものに比べると、萬事が自墮落で意氣込もなく、到底其を救ひ上げて、如何斯うすると云ふ料物ではない。矢張あのまゝにして置いて、玩具としてかゝるより外はない。

勿論對方もキヤア〳〵して來るし、此方もヅウ〳〵しくやる。云ひ度いことを云ひ、爲度いことをする。酒を飮むで其の儘分れるにせよ、若しくは其以上に進むにせよ、其の間に云ふべからざる一種の趣がある。

中には愛嬌もあり、氣立も好く、少しは落込むで見たいのも居ないではないが、那麼女には幾らも他に相手がある。つまり其の相手を巧い具合に綾なして往くところに彼等の手腕があるのだから、到

底那麼のは吾々の手に合はん料物だ。歸するところ一時の氣晴しで滿足するより外ない。また其丈けで自分は結構だ。

美人で藝が出來る、其れに越すことはないが、苟も女と名の付く以上、先づ大抵の女は、何處にか一所位長處があるものだ。自分はいつも其の點を買つてやる。或る友人が、君のは美醜を撰ばずと云ふのだから恐入ると冷かしたが、醜いから嫌だと云つて了へば只其までのことだが、併し何處にか必ず長所はある。自分は寧ろ其の點に於いて同情者の側に立つものだ。美貌と云ふことを頭に於いてかかれば、天下の女悉く駄目だ、到底吾々の理想を滿すものは無い。女と云ふ以上、如何なる女にも、何處かに女らしい脈の打つて居る處がある。自分は其の點を買つて滿足することが出來るのだ。

此は獨り藝者に對してのみならず、一切の女に對して然う云ふ意見を持つて居るのである。

思ふに藝者の長所は其のヅウ〳〵しい點にあるだらう。が、其の短所も其處にある。素人では、幾ら世故に長けた、經驗のある女でも、あれ程思切つた態度に出ることは出來ない。何處かに愼謹かな處がある。其處が素人の財產だが、其の代りに、衣服の着こなしにせよ、其の他の粉飾にせよ、如何に素人の上手なものでも、商賣人の脚下にも寄付けん位である。脚の大きな無格好な、所謂百姓脚でも一度衣裳を着て、すツと立つと、すらりとして全然見異へるやうになる。肩から胸、胸から腰へかけて、しなやかに下る曲線の美は、實に何とも云へん趣きがある。衣粧を以つて醜を覆ひ隱すと云ふ點にかけては、素人の跣足になつても及ばん處だ。

表情を云へば、第一に眼の据り方、動き方が素人とは全く異ふ。一目見れば直ぐ其れと判斷が出來る。其と前に云つた衣服の着こなしが異ふ。男と向つて話すときに、眼を男に向けて話すことは、餘程しつかりした女でなくては迚も出來んことである。素人ならば充分經驗のあるものだが、此は必ずしも所謂秋波と云ふべきものではない。

全體に何だか生々した表情に乏しいやうに思はれるのは、彼等の境遇から來る生活狀態、及び其の健康上の影響から來たものであらう。其も酒三行にして興熟すれば、一種の生彩を帶びて來る。

藝者美とは先づ斯んなものだらう。(明治四十一年六月)

大阪の婦人

内では梅干とお粥とを喰つてゐても、外出の衣服は和かいのを着ようと云ふのは、大阪流の男子もさうだが、大阪の婦人は殊にさうだ。見えるところばかりを立派にして、鳥渡裏手へまわるとひどい汚れが見えるのも厭はない、そこへ行くと、東京ツ兒は上方連中に笑はれるが、見えないところを絹物にして裙などをわざ〳〵木綿同樣の物で出すことがある。一枚々々脫いでゆくに從つてい丶物が出ると云ふ樣な意氣は大阪では見られないのである。

東京で束髮もしくは廂髮が少くなつて來たのは近頃のことだが、大阪で少いのは初めからである。

十中の八九までが島田、銀杏返し、丸髷で——すべて根が下りすぎてゐる。從つて丸髷などは一が引けて根がけは下からのぞいて見なければ見えないほどだ。一體に髷形もよくないのだらう。花菱形などはまだしもいゝ方だが、東京の雲井形ほどにはならない。然し藝者どもでもこの頃は髷の根があるやうに望んでゐるらしいが、前髮の幅を廣く取り過ぎる上にその出し方が短いので、たゞさへ長い顏が多いところへ持つてきて、おでこなどがそツくり現はれてをかしいものだ。且前髮を幅廣く取つた結果鬢の幅がないので、如何に上鬢に梳いてもふツくりとは行かない。髱も出てゐるのもないではないが、充分とはいへない。

然もその髱で衣物の後ろ襟がよごれるのを恐れて、町家のかみさんなどには、ハンケチもしくは手拭で以て襟を卷いてゐるのが、汽車や芝居の中で隨分見受けられる。それに髮を洗ふのに無性かして、縮れ毛もしくは癖毛の女が多い。たゞに髮ばかりではない、立派なお召を着てゐても、その襟が——揮發でゝもふきとればいゝのに——よごれたまゝになつてゐる。また襟の合せ方でも、脫き衣紋は、東京には藝者社會にも殆ど全くなくなつたが大阪にはまだ澤山見受けられる。よしんば、きツちり合はせてゐるらしいのも、東京の殆ど一文字になるやうではなく、逆さ三角に開いて胸の上部は見えてゐる。

帶は、六つや七つの女の子にまで廣い堅い帶をさせて苦しさうだが、一體に帶あげが高く飛び出してゐるので、大きな急須ぐらゐは乘せられさうだ。おたいこに結んだ輪が短いので、帶どめが帶幅の

――東京なら三分の二ほど下にいくのが――三分の二だけ上に行つてゐる。それにまた結んだ輪の舌が長過るほど出てゐるので、歩く時、大きなお尻と共に左右にひよつこりひよつこり動く、それが様子を如何にもをかしく見せてしまう。或藝者が『おいどの動かんやうに歩きとおまツさ』と云つたのに對して僕はそれはおはしよりをもツと上にして、しごき、乃ち腰帶をもつと上に締めるやうにしろと敎へてやつた。さうすれば、丈も自然に高いやうに見えるのである。

一體に大阪婦人は衣服の着こなしが下手だ。その上何かと云ふと、裾をまくつて長襦袢もしくは腰卷を膝以上に出す。汽車の上や公園でそれを見ても『またか』と思ふと、美でもなければ挑發でもなくなる。渠等には、襟に手拭を卷くと同樣、衣物をいたはる心がけだらうが、あまり裙をまくり過ぎて、胴裏の穢い絳綱や紅木綿が見えても平氣でゐるのは色消しの極だ。東京ツ子は裾まはしは木綿でも胴裏には絹物を使ふ。而もそれが意氣がる程赤ではなく白羽二重などである。裾まはしも白いのが東京では上品だといつて流行してる。本願寺の式能を見にいつた時、同寺に關係ある貴婦人はすべて白裏であつたが、大阪では殆ど全く見られない。

以上のやうな風俗で衣物を裾短かに着、駒下駄も早くへるのを恐れて野暮なほど高いのを穿き、『お辨』といふ物を持つて、一年に二三回、外出嫌ひの大阪婦人連は、天王寺とか、濱寺とか、箕面公園とかへ遊びに行くのである。而も急用が迫ると立ち小便もする。そして口數多くおしやべりするのであるから、いやになつてしまう。

大阪の婦人はまた一體に色彩の觀念が乏しいやうだ。色と云へば、赤、紫、藍と云ふやうな濃い原色ばかりを選ぶ。衣物の柄の好みになると、東京などでぼかした色の調和をおもんずるのとは違ひ、色その物を目的にする。從つて色としては派手のやうだが、そのいろんな種類を集めた柄となると、變化に乏しく、こツてりと重くるしく沈んで、ぱツと活々したところがない。

衣物と帶との關係にしても、白ツぽい衣物には黑ツぽい帶を、黑ツぽい衣物には白ツぽい帶を取り合せるのが引き立つ所以だが、そんな考へは殆ど全く持つてゐないらしい。且、夏の盛りになつても、純潔と輕快と凉味との感じを與へる白地を着ない。その故を尋ねると、顏の色が黑く見えるからと云ふ。さうして顏にばかりこツてり白粉を塗ることを熱心にして、髮を洗ふことをしないので、癖毛や縮れ毛になつてゐるのもかまはないし、衣物の襟のよごれてゐるのもかまはないし、帶のくしやくしやになつてるのも平氣だ。

大阪の婦人は物をかまうやうで、而も無智から來る無性を脫してゐない。さうして下らない迷信を澤山持つてゐる。白い衣物を着れば、色が黑く見えると云ふのも、それで若しさういふ心配があるなら、襟の白粉を顏のよりも少し濃くすればいゝことを知らない。髮を洗ふと拔け毛が多くなるとは云ふが、洗つた跡でいゝ油をつければ、そんな恐れがないことに氣がつかない。

から惡口ばかり云つてると限りがないが、一方から見ると、大阪の婦人は日本國中いづれの地方の婦人よりも快濶である。おしやべりなのもそれが爲めで、知り合ひの人々でもゐると、電車の中でも、

芝居の幕合にでも、なか〳〵よく語り、よく笑ふ。默つて人のしやべるのを聽いてゐて、その人のゐないところで、あの人はおしやべりよと蔭口を云ふやうな卑劣な女根性はない。この點は一つの取り柄だ。

大阪が平民的であるだけに、大阪の婦人も亦平民的である、言語に於ても、表情に於ても、衣物の好みや着こなしに於いても、すべてさうだ。どこを歩いてゐても、出會す大阪婦人には上品とか、崇高とか云ふ感じを起させる顏はない。美人であつても位が乏しい、愛嬌があつても品を缺いてゐる。然し平民的で愛嬌があるのが、大阪婦人の特色である。（明治四十四年）

ホイトマンの詩想

第十九世紀の初期に、アメリカに於て、たツた拾年を前後して、奇體な詩人が二人生れた。一はエドガーアランポー、他はワルトホイトマンである。ポーは氣違ひと云はれた程選擧好きで、（これはその家代々の一遺傳のやうであつたが、）或選擧應援の節、どうした拍子か居酒屋で殺された。ホイトマンはまた一種の社會主義を標榜し、身なりも死ぬまで穢い勞働者服で通した。そして前者は、それでも、早く英佛の詩界に知られ、浪曼的な官能詩の先驅者となつたが、後者の詩はその風體と同樣、一見すれば武骨の上に粗雜であつたので、詩をたゞ美辭と空想とで飾るべき物と思ふ一般人には餘り歡

迎せられなかつた。

然し米國に於ても、慧眼の哲人エマソンは、却つてポーの價値を認め得なかつたが、ホイトマンに就いてはその思想の偉大を推賞した。ホイトマンは實に世界の新思想に寄與したところが少くはない詩人である。と云ふには、社會主義を新思想だなど云ふやうな、そんな淺薄な程度のことでは無く、佛蘭西では表象派詩人等の生活を刻み、露國ではメレジコウスキ一派の『人間神』の思想となり、わが國では岩野泡鳴の肉靈合致說となつた惡魔的な、然し深痛な實生活革命の基調に、ホイトマンは豫め、可なりはその肉體即靈魂の情想を以つて觸れてゐたのである。

渠は科學的發明と應用との盛んになりかけた時代に出た詩人だから、頻りに、小兒のやうに無邪氣な熱心を以つて、電話・電車、アスフアルトの大道、機械職工大器樂等を詠み込んだ。それだけの爲めにでも、既に、美辭と空想とばかりを高尙がる一派の、そして多數の詩人並に讀詩家等には、いやな、拙い、そして俗ツぽく見える物であつた。然し渠自身に取つては、却つてそれだけ至るところに詩材と詩境とがあつて、實際の生活が乃ち詩になつてゐたのだ。從つて渠の詩を讀むには、先づ、實際に根ざした渠の眞正生活なる思想その物を見なければならぬ。而もそれが詩と云つても、表面では無韻で無平仄で、並に長短複雜句の排列自在な散文詩の――その當時ではまだ珍らしかつた新發明の――形で現はれてゐながら、誠實にまた莊重に人を壓迫する思想動機で刻まれて行くその特有な音律には、僕等は深痛な生命を感じないではゐられないのである。左の引用句はつれ添ひに死にはぐれた

孤獨の鳥の聲だ、——

ああ、過去！　ああ、幸福な　世！　ああ、歡樂　の　歌！
空に、森に、野の　上に、
戀、戀、戀、戀、戀して　だ！
しかし　わが　つれ添ひは、もう、もう、われと　一緒で　ない。

僕は渠の句をすべてその思想動律に注意して正譯したつもりだ。これまでにも渠の詩が他の人に時時邦譯されたのを見たことがあるが、實生活に遠ざかつた雅文傾向の體裁にか、さなくも、うわツ走つた新體詩語を以つてかであつた。德富蘇峰氏が曾て『大道の歌』(この抄にも出してある)の一部を國民新聞で譯したのなどは、また、丸で型の通り氣焰を吐くやうな漢文口調であつた。いづれも原文の意を得てゐないばかりで無く、讀んで見ると、ホイトマンその人の氣分や本意とは全く違つてゐた。

歩んで　氣輕に　僕は　街道に　出る、
自由で、健全で、僕の　前に　世が　あり、
僕の　前に　長い　鳶色の　路が　あつて、僕の　欲する　所に　導く。

これは街道の歌の初三行だが、これをなまぬるい雅語や『大道坦々長安に通ず』的な漢詩口調で譯して見給へ。渠の氣分は全くなくなつてしまうだらう。

以上、かゝる詩を紹介するとして簡單であるが、ホイトマンには極端にこれを輕蔑する讀者と、そ

の反對にまた最も推賞する讀者とがある所以は分らうと思ふ。ついでに、この抄にも出した『搖り籃から』で歌つてあることは、僕の解するところでは、ポーの傑作詩『おほ鴉』から出てゐる。そして若しそれが確かなら、また引いて英國のロセチの『昇天聖女』となり、泡鳴の『三界獨白』となつたのと同じ系統に屬し、特別に深い戀愛と孤獨とを一緒にして歌つた物だ。然しこゝに一々說明するよりも、讀者諸君はゆツくりと僕の譯に就いて讀み味はつて行く方がよからうと思ふ。

ホイトマンは一八一九年に生れ、一八九二に死んだ。その全詩集の名は Leaves of grass. 乃ち『草の葉』である。僕の目錄に納めた長短七篇もすべてその中から選抄したのだが、各篇としては全譯であつて、梗槪や解說では無い。

ホイトマンの思想と形式

ホイトマンが思想の上に達見を顯はしたといふのは、肉體が靈魂だといふ樣な說に於てゞある。肉體が靈魂だといふのは、耶蘇敎ではいへる思想でない。それを、アメリカの樣な耶蘇敎國で立派にいひ表はしてゐるのである。つまり、僕等からいへば、肉靈合致の思想に接近してゐるのである。傾向からいへば、無論、現實主義であつて、最も實際的な人生觀を有してゐたのだ。實際的といふのはアメリカ人の特徵であるといつてもいゝ。例へば、エマソンの如き、超絕哲學を唱へた人でも、一方に

は、經驗と實際の事實とをよく常識に於て捉へた點に强みがあつた。アメリカ人の實際的とは、つまり、常識的なのを云ふのである。處で、ホイトマンの實際的傾向、若しくは現實主義は、必ずしもアメリカ人の常識的とばかりでは言つて仕舞へない。蓋し、アメリカ人の常識に成つてゐる耶蘇敎思想では、肉と靈とは別物で、調和する事はあるが、結極、靈に偏して行くのが向上で、肉に偏して行くのが墮落となつてゐる。それをホイトマンは、肉の常體が靈であるといふ樣に考へた。これがアメリカ人から反對をうけた渠の一つの特徵であつた。

今一つ、彼がアメリカ人によく了解されなかつた所以は、その詩が散文詩であつたからである。散文詩は、嚴密な意味で云へば他の有形律の詩よりも、作るに難かしく、讀むにも亦難かしい。その上にホイトマンは、一般の詩人が夢にも思ひ到らなかつた材料をもよく捉へてゐる。彼には、どんな物でも手當り次第に詩の材料となつたのである。自分達が歩く大道そのものでも、自分達が乘る汽車そのものでも、電信、電話でも、何でもかでも、直ぐ、そこに、詩人としての感興が浮んだ。殊に、彼の詩の中で目に立つのは、文明を示す文物——その中でも、電氣や機械に關するやうな物は、その當時、また、アメリカ人にも珍らしかつたので尙更のこと——を、得意さうに材料にしてある。それが一寸見ると、彼の詩の調子が雜駁に見えると同じやうに、詩想も雜駁に見えた。ところが、彼の散文詩の律を解剖して見ると、思想動機に依つて嚴密に動いてゐて、此動機に觸れると、讀者は彼の考によく這入り込める。これと同じ樣に、彼の靈肉合致的思想を感じて彼の詩を讀むと、その詩材の雜

ばくに見える樣な處は、すべて雜駁でなく、尤もな處を捉へてゐるのが解かる。

現實主義を徹底して行けば、どうしても、樂天主義になるものだ。樂天主義と云つても、必ずしも淺薄なものでないのがある。我國の現世生々主義の如きもそれで、佛敎的な厭世主義、悲觀主義などに比べては、ずツと痛切、深刻なものである。ホイトマンもさうした風の樂天的傾向があつた。肉が靈だといふのだから、生そのものに執着するのは當然でもあり、必要でもあり、眞理でもあつた。

さうした點が、僕の半獸主義が出發して來た古神道的肉靈合致觀に共鳴する處があつた。それから僕が、音律の研究の結果、有形律と無形律との兩方を對比し、無形律、即ち散文詩に顯はれる律の、なか〳〵疎かにすべからざるを識つた時、ホイトマンの詩を讀んだのであるから、僕が僕自身の散文詩を發表すると同時に、一方の他人の作つた散文詩なるものも、斯う云ふものであるといふ事を識らしめる爲め、ホイトマンの作を大分翻譯して紹介したのであつた。

其後、ホイトマンを譯した人には、德富蘇峰氏の如く、漢文句調で譯したり、さうでなくとも、富田碎花氏の如く、文章語でしたりしたが、あれは皆ホイトマンを紹介するには不適當であつた。だから、今に到つても、僕の屢々譯した口語體の、如何にもホイトマンそツくりの譯が善かつたと云はれてゐる。ホイトマンには、文字の用ひ方に於て、未だ舊式な修辭癖が殘つてゐたが、一般の舊詩人が大事にするやうな單純技巧癖はなかつた。そして、材料は凡て端的に捕捉する事が出來た。そこに力強い發想が實現した。或人はホイトマンには思想は表はれてゐるが感情までに到つて居ないと云ふが、

それは單純な感情派からの反對であるに過ぎぬ。ホイトマンの如き強い詩人には思想までも感情になつてゐたのである。

今の芝居に對する苦情七ケ條

今の芝居に對して興行のがはの方からと芝居の內容の方からとの苦情を僕は持つている。いや、僕に限らず誰れか持つてるのだらうと思はれる。

（一）いゝ役者の出る芝居になればなるだけ時間を短くして貰ひたい。まづ、夜興行として多くても三時間に。今のやうに三四時から行つて十一時までも坐わらせられるのは、とても、忙がしいものには初めから行く氣になれない。やる方でも止むを得ないから、一番目二番目などに分ち、そのあひだやおしまひにもまた中幕や所作事を出す。さう御馳走をして貰はなくてもいゝではないか？　それに一番目が時代物なら、二番は世話、また前が悲劇なら後は喜劇、と云ふ風にどうしても取り合はせがきまつてしまふ。僕等は必らずしも一晩に泣いたり笑つたりしないともいゝのだ。どちらか一方を短い時間でしツかりと見せて貰へばそれでいゝ。少し長い所作事ならそれだけでゝも滿足しないことはない。興行者の方は馳走をこて〳〵盛つて客を引からうとするのだが、それは昔の仕來たりに過ぎない。少し立ち場を改めて考へて見れば、短時間興行の方が現代では恐らく客の入りは多からうと思は

れる。

（二）役者の分業が今少し區別されて行かねばならぬ。それもたゞあの人は立ち働きに向くとか、つや物がいゝとか云ふ程の單純なものではなく、悲劇役者喜劇役者と云ふやうな區別だ。それに、わが國では所作の這入る、這入らないを標準にして傳來物と新作物との役者がもつと專門的に別れてもいゝではないか？　これは役者ばかりの區別ではなく、劇場その物までもそれによつて性質が別れてもいいのだ。たとへば、歌舞伎座は傳來の時代物專門、市村座は新作世話物の專門と云ふやうに。そうすれば、見物に行くものが誰れの出る、どこの劇場とば直ぐにそのやつてるものに見當が付くから、いやなものは行かない代りに、好きなものは十分な豫期を以つて行き、そしてそれだけ十分な滿足を得て歸れるのである。

（三）坐わつてゐるのは困るから、すべてどこにでも腰かけにして貰ひたい。そして食事は別に食堂ですることに。（尤も、この點は帝劇だけは初めからやつてるけれども。）さうでないと、どうも、他の客や男衆どもが僕等の鼻ッさきを通つて行くのが不愉快で堪らない。

（四）それから、劇その物に就いてだが、傳來物は却つて下手な改訂などを加へるとぶち毀はしになるから、傳來通りやつてゐればいゝが、新作物にはもつと進步したものを出すやうにして貰ひたい。喜劇と云へば駄洒落に落ち、悲劇と云へばほんのあまい淚をそゝつて終つてしまふやうな物ばかりでは、いつまでも芝居のよくなりッこがなからう。そこは役者も興行者も少し辛抱して步一步毎に

でも段々と見物の趣味や見識を高めて行く覺悟を持つやうにならねばならぬ。いや、現今でも、そう云ふのを二三回辛抱してやれば、きツと、見物も成る程と滿足するやうにならうと思ふ。

（五）第四の苦情をもつと具體化して云へば、やがては例を外國のに引いて云へば、イブセン物のやうな近代劇をもやるやうになれと云ふことである。近代劇は大抵寂しいだらう。決して矢鱈に花やかであつたり、賑やかであつたりしない。が、その代り、まじめな意味が豐富だ。考へさせることが多い。ところが、人間はほんとうに云へば考へさせられるのを一番本心には喜ぶものだ。それをたゞ芝居と云へば花やかであり賑やかであるを望むのは、從來の芝居がさう努めたと云ふ、ほんの、うはツつらの因襲に過ぎないのである。傳來の舊劇にはその作られた時代としての人情は十分に認められるのが、新作物には――これは作者どもがへッぽこばかりであるからでもあらうが――そして役者にもそれ以上の物を與へればこなし切れぬ爲でもあらうが――今の時代としての人情はほんのたゞ概念としてだけしか出てゐない。もツと碎いて云へば、小學校の生徒に云つて聽かせるやうな程度の內容しか含んでゐない。僕等が近代劇を提供しようと考へてる程度とはまだまだ月とすツぽんとの違ひである。そこを今少し僕等に接近して來るつもりになつて貰はねばならぬ。

（六）子役を亂用することをやめること。また、獨語を不自然に使はせることを廢すること。子役がかた言を云へば、誰れでも涙をもよほすものだ。こんなことで芝居の效果があつたと思ふのは馬鹿でも同樣だ。たとへば、千松が何か云ひ出すと直ぐ見物が泣き出す。これは作のすぢや藝の上手からで

はなく、ほんの、たゞ見物が自分の子供を思ひ出して爲るのである。こんなあまいことに作者も役者も安心してはならぬ。それから、獨語をたゞすぢを運んだり、相手がゐないから相手に云ふ代りに用ゐたりするのは、やめて貰ひたい。これは沙翁でもいゝ氣になつて用ゐた下手な技巧に過ぎない。獨り言を云ふのは普通に氣狂ひだ。さうでなければ正氣な人間は何かの場合にちよつと一と言ぐらゐ云ふものだ。それ以上に安値に使ふのは不自然の極だ。

（七）最後に、作者に對して役者を今日までのやうに意張らせて置くことをやめさせなければならぬ。今日迄は役者あつての作者であつた。然し、現代はもう作者あつての役者でなければならぬ。無論、芝居が近代的要求を滿たして行かうとするにはだ。作者は創造者であつて、役者はその作者の創造を再現するものである。作者その物は見物に直接に現はれないから、今までの見物はそれを忘れて再現者ばかりを見てゐた。が、これからの見物はそんな馬鹿ものばかりではない。新作その物にも注意を向けるから、その作者はかげながら十分に見物と交渉を持つて來る。さうすると、作者は最も重大な資格を有して來るわけだ。僕等はそこまでの改革が芝居道について來なければ手を出すことは面白くないのだ。役者が一つの新作を演じても五千圓や一萬圓を取りながら、その作者はたツた三百圓か五百圓を貰つてぺこ〳〵滿足してゐるやうでは、役者や興行人ばかりの罪ではなく、不見識な作者自身の罪が大いにあづかつてるのである。

以上、七ケ條なり。（大正二年）

蒲原氏へ

『表象派の文學運動』の製本見本が三四部出來上つた日に、野口米次郎氏が英國へ出發するので、この書の原著者シモンズへ一部を持つて行つて貰ふ爲め、僕は野口氏を訪ふた。その時別にまた一部を持つて行つて野口氏の近傍に住んでゐる蒲原有明氏にも進呈した。氏と僕とは表象の意義並に表象の解釋に於て餘ほど意見を異にしてゐるから、却つて僕のこの飜譯に對して僕の爲めにいい忠告を與へて呉れるだらうと思つたのだが、『晦澁』と云ふ故を以つて僕の期待したやうなことは殆ど發表して呉れなかつた。

譯文が難解であると云ふことに就いては、氏以外にも隨分指摘しようとしてゐるものがあるのを知つてゐるが、僕から云へば、矢ツ張り、原文が難解なのであつて、讀めるやうに讀めば決して分らないのではない。云ひ換へれば、原文を讀むだけの忠實さを以つて譯文を讀めば、大した困難は無いのである。日本人が日本文を讀めば、新聞記事のも創作的論文のも同じやうに平易であるべきやうに思ふのは、ほんの俗物の文章觀たるに過ぎない。蒲原氏等をそれほど俗物視するわけでは無いが、多少はまだそんな傾きのある考へを以つてるやうだ。僕は近々別にエマソンの飜譯を出すが矢張り、同じ棒譯で行つたのだが、その方をシモンズの譯ほど難解だと云ふものは恐らく無からうと今から信じて

ゐる。エマソンの原文も外國では有名な難解文だが、なほシモンズの原文ほどに理智と感情、哲想と詩脈とがこんがらかつてゐないのは、單純な理智に傾いてゐるからである。そして性質上、それだけ、原文並に譯文が解し易いのである。

それから、蒲原氏の所謂『誤譯』並に『疎漏』に就いては、實例が擧げてなかつたから、僕は氏を訪問して直接に聽いて見たところ、氏の指摘したうちによると、僕がもつと甘く譯せたのにと云ふやうなところが二三ケ所あつた。これを疎漏と云へば云へないことは無からう。然し誤譯として見られた文句には、氏と僕とに外國文飜譯に對する因襲の有無の問題が先決問題であると僕は見たのである。ここに單純に例へて云へば、a sort of 何々とあるのを何々の一種。unless をにあらざれば。と樣に譯してないと、前後の關係が違ふやうに思ふのは昔の直譯並に意譯かたぎであつて、それ以外に譯すると、正譯をも間違ひではないかと疑ふものが多いが、そして現今の飜譯家並に誤譯指摘者等の間にはこの手合が多いやうだが、それは下らない因襲であつて、外國文と日本文とのぴつたり合ふピントを知らないのである。僕がこの二例を棒譯して、前者を一種の何々、後者を但し何々は別だとやうに譯して行つたが、これが眞に若しくは比較的にピントの合ふところである。但しこれは單純な例に過ぎないが、もつと長い且複雜な實例はこの雜誌の性質上ここに擧げることが出來ないのを遺憾とする。

なほ一つ、蒲原氏に就いて解せないのは、かうした譯を氏は却つて『各節中の相關聯した意義を引

き離して』とか、『渾然たる文義を故らに攪亂する』とか云つたことだ。この點は氏と直接に語り合つて見るのを忘れたが、氏は矢張り因襲的な語學力から原文を誤解若しくは誤讀したのではなからうか？同時に、ピントの合つた棒譯の眞相を知らないのではなからうか？　棒譯では決して殊にそんな『引き離し』や『攪亂』は無い。この點は、氏に限らず、誰れでもそんな實例を擧げて呉れると、直ぐ辯駁が出來ると思ふのである。

ただ原文に拘泥し過ぎたと云はれる點は、甘んじて受けてもいい。と云ふのは、緩漫な（とは氏自身で云はなかつたが、それに相違ない）意譯の方がいゝではないかと云ふ氏に對して、却つて僕の譯が忠實であるを證してゐるわけだからである。

以上は譯文その物に關する話だが、氏は表象派その物並に僕の表象觀に關しても、感想を述べた。シモンズの原著が初めてわが國に來た當時の事情は蒲原氏も多少云つてるが、僕はさきに氏に注意して、同著がわが國自然派の二三のおもな小說家等に一度は渡つてゐながら、それの影響は殆ど全く實際には現はれないでその以前のゾラやゴンクルにとどまつてゐたのは何故かと云ふことを、一つの批判としては、指摘すべきであると云つたが、氏は遠慮してそんなことを云ふのを避けた。然し一言にして云へば、當時の詩人の方が小說家よりも理解力と感受性とが進んでゐたのである。田山氏などは漸く近頃、ユイスマン（無論、氏はその當時から先頭に立つて讀んだ人だが）に依つて、現論文の問題の一角に觸れて來た。

僕が表象的傾向ある詩を作つたのは、蒲原氏より少し後だが、その代り、外國詩人等の模倣を脱してゐた。そして僕が氏の表象詩を以つて模倣の域を脱してゐなかつたと云つたのは、（これは屢々折に觸れて公表したことだが）、詳しく云へば、當時の小說家等には、理解さへおぼつかなかつたが、蒲原氏は理解があつても、その詩作にはまだ附け景氣の表象的語法と用語としか見えなかつたと云ふ意だ。氏は今回これを『上述の事實と私の內心の經驗を餘りに無視した空々しい批判である』と辯駁したけれど、氏の模倣の表象詩と氏の內心の經驗とが果して一致してゐたを信ずるとすれば僕等は却つて氏の經驗の貧弱であつたことの證明を氏自身から受け取るやうになるわけだが、いツそ信じない方が氏の爲めにその後の餘地を殘して置けるだらう。

どうして模倣であつたかと云へば、氏は表象を部分的な物（これは當然僕ばかりの批評ではなかつた）と見て、殆ど修辭上にばかり、外國の同派詩人の用語や句法を輸入したにあつた。僕の表象詩は少くともさうではなかつた。然しその後、僕は評論や小說に專らになり、蒲原氏も餘り詩を發表しなくなつて、佛教書などを頻りに調べてゐた、僕は氏に注意して『君もどうせ詩は作れさうもないから――』と云ふと、氏は『馬鹿を云ひ給へ、これからやるんだ』と答へた。僕が忠告したのは、氏のそんなに讀んでゐる佛教を、佛教家にあり勝ちな先入見や獨りよがりの用語例に由らないでしツかりと新らしい批判にかけて見給へと云ふことであつたのだが、それにも氏は進んで行かないやうだ。今回の所說中にも、無相、本有、觀道、法爾等の如き佛教臭い用語の空氣に這入り込んだ。こんな言葉で

如何に六ケしいことを云つても、要するに、獨特な思想では無い。そして獨特で無い思想を發表するには、一般の思想界にもツと共通な用語例が澤山あるのだ。氏のから云ふ傾向を、表象論へ持つて行くと、矢張り、部分的表象の模倣と通弊とに墮するわけである。

ロセチの崇拜家と自稱する蒲原氏はロセチは表象派に屬してこそゐないが『十分に象徵的根據を有して、その運用に於ても、決して佛國の自覺派に比べて劣つたものではない』と云つた。が、それではヹルレンやマラルメが可哀さうだ。ロセチを佛蘭西表象派に比べてもいゝ點は、短言せば、肉感と舊敎的信仰とを、あらゆる運用の上で云ふのだが、一致せしめようとすることであつた。然しロセチには、肉感と信仰、苦悶と安住とが別々にあちらこちらに重複してゐるだけの場合が多く、乃ち人生を殺して修辭的に、斷片化することが多く、僕がシモンズの譯著に例證として擧げたヹルレンやマラルメの作のやうな、斷片をも合致的に人生として生かす手腕や實質に乏しい。そして僕がこの合致を、僕の肉靈合致說から、佛蘭西表象派のいゝ長所として、力說するのを見て、蒲原氏は僕を以つてただ『淺薄な』概念論をしてゐる者とし、且修辭その他の運用を返り見ない者としたが、それは然しほんの、氏が、思想家であるよりも修辭家たる爲めの杞憂に過ぎない。詩の上で、この合致を實現するには、勿論、『緻密な運用』が無ければはならないのは云ふまでも無いことだ。この運用を氏は實質よりも表面的な修辭へ持つて行く傾向があるから、ロセチとヹルレンとを殆ど同一視するやうなことになつた。

それから、僕の肉靈合致觀はおもに人生觀として主張したのであるから、無論、狹い詩論や文藝論

だけにとどまつてはゐなかつた。從つて、その一部なる詩論に於ては、他の專門の詩論ほど詳しく云つてないかも知れないが、表象詩を『五官の交錯ぐらゐの程度』に終らせたことはない。殘念なことには、氏はまだ僕の議論を批評するまでに達してゐない。その證據には、『岩野氏は現實觀なる肉靈合致相の上で、强いて象徵を添附するもののやうに見える』と云つた。たとへ强いての添附としたところで、五感交錯ぐらゐをばかり條件にしてゐないのは、譯書の序文を見ても分ることではないか。その上、僕は表象派の缺點も指摘したほどで、寧ろ專門的な表象派と云はれるのを避ける爲、別にわざわざ自然主義的表象主義を力說したのである。これに據ると、蒲原氏の解したやうに『この世界は』でなく、この自己が肉靈合致のピントに入る運用をすれば、おのづから人生全部の表象となつてゐると云ふのだ。從つて、氏がマラルメに許すに『特殊な肉身の感覺があつて、それが否定すべからざる彼の根據であつた』と云ふことは、よしんば、氏の議論にも適するか知れないが、僕のには却つて一層よく適したではないか？　氏は僕の『現實觀その物はここで論ずる限りではない』と云つたが、僕の現實觀と表象觀とを別々に離して見られては、それだけでも、僕の說は適當に紹介されてゐないのである。

そして實際に表象なるものをどう解するかと云ふことをわが國で說明する責任は、今までのところでは、經歷上、專らかかつて氏と僕とに在るやうだ。僕はこれを旣に已に人生觀からして說いて來た。そして氏はまた、今回、おもに修辭的問題として說いてゐる。この相違が僕をして以前と變らぬ意見

の上に立つて範圍の廣い小說に行かせたが、氏をしてなほ詩作にとどまらせる所以ではなからうか？いづれにしても、これはもとの詩人と詩人との各自創作の辯護と見て貰ひたくない。詩作家としては、僕は、もう、過去の人だ。そして蒲原氏も、亦、もとの詩に現はれただけの蒲原氏ではない。僕の指摘に對して、氏が模倣ではないと辯ずるのは、氏の今の進步した內生活を云ふのなら、僕も十分に納得すると同時に、これまでの僕の議論には衝突しないのだ。外見から云へば、氏はその造型的傾向ある點に於て、また作の少い點に於て、マラルメによく似てゐる。然しこの頃氏が發表する詩作に就いては、ここで云ふのはやめる。

最後に、僕も蒲原氏と同じく、二人の間に『何等のわだかまりもない』ことを附言して置く。氏がそつと持ち出さねばならぬと云つた例のギヤマンの罎は僕もこの頃また、例のところで買つて來て、簡單だから、徹夜する時などはそばに置いてちびり〳〵やつてるので、いつでも一緒に飮めるのである。（大正三年一月）

自由戀愛の語義

（本間久雄氏に）

大して實生活的思索の經驗も無ささうなあたまでエレンケイを讀んだり、譯したりしたのを以て、

直ちに僕の戀愛論若くは戀愛的生活(それには刹那哲學の背景をしよつてゐる)を十分に批評出來ると思つた、それこそ『馬鹿々々しい』本間久雄氏に對して、僕は多少の言を與へて置きたい。

先づ、

僕は個性の尊重を氏のやうな固定的にでなく、動力學的に押しつめて行くから、その極は優强者の自我になるのである。

固定的專制主義やわが國在來の家長制度やは、僕の所謂優强自我の實現とは結果に於て其威力がずツと違ふ。前者のは後者のよりも威力に乏しい。そしてかかる威力の働きは舊式道德には發見されなかつた。

相互理解とは必ずしも本間氏のやうに解釋すべきものではない。渠は外國人等の置き据え的な個人主義を標準にして物を云つてるのだが、僕の力學的個人主義では、相互の理解はどちらかへの吸收でなくてはならぬ。

以上のことは僕の著書を讀んだものには直ぐ分るのだから、こゝではくど／＼云はぬ。たゞ本間氏が理解とか、個人とか、戀愛の自由とか云つてるその標準は、ほんの、たゞ融通の利かぬ外國人等の死んだ個人主義に在るを云つて置けば足りる。

こゝで最も云ひたいのは、寧ろ渠の反省なき用語例の訂正だ。時事の文藝欄に於ても、また新潮に於ても、渠は『自由戀愛』なる語を單に我儘な、氣まぐれな、放縱な戀愛と解した。渠は日本語で『自

由』と云ふことの意味が分らないのであらうか？　昔の自由黨が破滅したのは自由の意味を知らなかつたからである。その後は政治上に於ても自由には必ず責任の伴ふべきほどのことは誰れでも分つて來た。從つて、僕等が自由戀愛と云つても、そこには必ずかゝる心理若しくは行爲から生ずる結果に對してすべての責任を伴はせてゐる。然るに、渠だけが何故に、かの眞面目な自然主義を肉慾とか放蕩とか云ふ意味にばかり以つて行つた俗衆の眞似をして、また戀愛ばかりに自由を放縱の意にのみ解したのか？　無反省に僕等の完全な用語例を穢すにも程があらうではないか？

渠はエレンケイの『極力排斥してゐる』と云ふ Free love にばかり自由戀愛の語をあてはめたのが、抑々の間違ひだ。否、外國人が用ゐた外國語の新らしい用語例をわけもなく直ぐ信じて採用したのが間違ひだ。（斷つて置くが、僕はケイその人を攻撃するのではない。）英語で Free love （自由戀愛）と云ふのと、Love with freedom （自由ある戀愛）と云ふのと、實は何ほどの相違もないのだ。戀愛に關する自由と云ふ英語の、前者は形容詞である爲めに直ぐ前に行き、後者は名詞の故を以つて前置詞的片句となつてあとに從つたに過ぎぬ。若し自由と云ふ英語の形容詞に放縱の意味があるからと云ふなら、同じく Freedom なる名詞もまた放縱その物を意味することが出來る。この場合、文法上の相違だけで一方に無責任の自由、他方に責任ある自由の意を與へて區別をするのは、――よしんば、英語にそんな下らない歴史的習慣があるとしても、――取るに足らぬ區別だ。まして、そんな曖昧な區別のし方をいゝことにして、そつくりわが國に輸入しようとするが如きは、わが國語の敵でも

ある。

責任を感じもしない自由での戀愛なら、どうせ常軌を逸したのだから、なぜ本間氏はこれをはツきりと、放縱戀愛とか、無責任戀愛とか云つて飜譯しない。不都合ではないか？　まして渠はそんな理解の足りぬ輸入用語を以つて僕の今回の事件をも――僣越なことには――飜譯し返さうとしたのだ！

渠は安成氏の言によると、ダヰンの有名の著書『The Descent of Man』(人間の起原)を――反對な意味にも――『人間の子孫』と譯したほどの頓珍漢であるから、或は、外國人どもの糟粕をいゝことにして嘗めてゐるのも止むを得ないかも知れぬ。が、僕は特に正當な意味の――乃ち、責任感の添つた――自由戀愛を實際的に主張する者であるから、この名詞に對して渠の如き不都合な意味を輸入されるのは最も迷惑である。まして外國語力の鈍さと實際的思索力の鈍さとを一緒に集めて渠の最も無理解な固定觀の上に、僕の主張や行動を評し出ださうとした愚劣をやだ。

なほ、本間氏がこれを讀んで悟るところがあり、その上での辯駁ならば相手をしてもいゝと云つて置く。(大正四年十月)

附言　エレンケイの『極力排斥してゐる』と本間久雄氏が云つた Free love の語は、放縱戀愛若しくは無責任戀愛とでも譯すべきものであつて、決して『自由戀愛』と云ふ國語をあてはめるべきでないことは、僕がさきに新潮に於いて本間氏に注意した通りだ。否、一歩を進めて、ケイ英譯者が放縱若しくは無責任の意味に『自由』と云ふ字を當てたのは、英語國人としても常識ある用語例ではないことを

僕は同時に云つて置いた。若しなほ僕だけの言では、信用を受け難いと云ふものがあらば、ここにプロホの大著『現代の性的生活』の英譯から、左の如き句中の用語例を見せよう、――

『自由戀愛(Free love と譯してある)は、惡意ある反對論者等が主張する如き結婚撤廢でもなく結婚外の肉交を云ふのでもない。……實に、僕が主張しようとするところでは、眞の自由戀愛はそれが勢力を得なければならず又得るに從つて、臨時のそして無規則の結婚外肉交を制限するその範圍は、これまでの無理結婚がこれを制限し得たよりも遙かに廣い。中ん就く自由戀愛は肉交その物を高尙にする。』

米野口氏の發想

詩と詩の考察とに於ては、僕は外國人よりも――少くとも、英米人よりも――ずツと進步してゐる。詩の內察には少しもあづからないで、ただ先入見から詩を高尙がつてる俗物等は、外國にも、わが國にも、あり勝ちなことで、それは論外にして置く。が、英國現代の一論文家アサランソムは、英國の新詩論に於ては、ゴスやアサシモンズ等の後を承け、(從つて、また野口氏よりも後輩だが)、比較的に進んだ判斷や解釋の出來る人だ。この人が野口氏を佛蘭西のヹルレンに比して論じたのを僕が見た時、僕は野口氏に向つてこれは君としては結構な大問題が出來たものだ、日本人にして英詩を以て世界有數の、否、殆ど無比な詩人と比較される者があるわけだぞと注意した。僕等の見解では、ヹルレンは

實に大詩人だ。從つて、これに比せられた野口氏も、――果してそれだけの實質があらば――世界の大詩人であるわけだ。が、惜しいことには、如何に新思想的傾向があつても堅苦しいアングロサクソン人種の血を脫し得られぬランソムであるから、その比較の根底には矢張り、舊い考へが殘つてゐて、シエキスピヤやテニソンと云へば――長篇の有名な詩をも作つたから――大詩人だが、短篇叙情詩ばかり作つたヹルレンは、ただ或狹い範圍に於て、微妙優秀な詩人だと云ふ考へがあつた。それでランソムは、何等の惜しげもなく、實は大して深い考へもなく、野口氏を直ちにヹルレンに比較して悔いることがなかつたのだらう。

野口米次郎氏の詩にヹルレン並にその他の表象派の傾向が段々强くなつて行つたのは事實だ。が、それは渠が外國にゐた結果と云ふよりも、寧ろ渠が歸朝して僕等、表象主義的傾向者若しくは同研究者等の間に住んでからのことだ。その證據には、渠は外國に於て既に直接並に間接に英國の表象派的なシモンズやエーツに接近する機會があつたにも拘らず、その當時製產された渠の詩集『見界不見界』や『東海より』には、かかる傾向は――たとへあつたとしても――極はめて影が薄かつた。そして渠の歸朝後數年にして出來た詩集『巡禮』に於て、始めてヹルレン若しくはシモンズに類する微妙な强烈性が現はれた。そしてかの短篇評論集『鳥居をくぐつて』に至つては、渠の詩その物よりも一層の光彩を以つてこの傾向が見えてゐる。但し斷わつて置くが、僕が斯う云ふ無遠慮な例證を擧げても、僕等日本人の生活の進歩をこそ示めせ、强ち野口氏の耻辱ではない。

僕の考へでは野口氏に僕等の賞嘆するヹルレンの如く微妙から强烈に入る素質が見えてゐないではない。が、日本と云ふ、世界的に歐米とは違つた別種の發展をする文明國の、從つて佛蘭西のヹルレンの如く日本から世界を相手にするヹルレンたるには、氏は自國語を以つて歌つてゐない點に於て多大の根本的間隔がある。それでも、渠の英詩英文に於ける確信と熟練とは、渠をして英米現代の文界に於て稀れに見るところの妙文的發想家たらしめた。何でもないことも渠の英文の發想に觸れると非常な意味があるやうに見える。それが、舊式に云はせれば、詩人の詩人たる所以であらう。が、野口氏が英米の現代文界に特出する立脚地は、――渠自身も譯書の序文に云つた通り『英語と云ふ古い城壁を攻め破る』爲め、――かかる舊式と舊見とを、わが國の俳句的發想、もツと廣く云へば、無言的發想と云ふこぢ付けた原理を以て打破するに在る。然るに、その渠自身がかの調子走つた文才若しくは上手過ぎる修辭法に甘え込んで、多言になり、うわツつらに走つて、自身の原理を裏切つてる事が少くはない。此矛盾は恐らく素養ある日本人等ばかりに分つて、迂遠な外國人等にはまだ分るまい。

今回、氏のロンドン出版なる『日本詩歌の精神』が邦譯されて、可なり立派な書物となつた。この書の主要點も亦その正面の態度と原理とは無言的發想に在る。英詩はどんな場合にでも形式と修辭とにばかり拘泥してしまつて、『言葉、言葉、また言葉』の云ひ切り的完成をばかり追つてるが、詩の實際は云はぬ言葉、發想せぬ發想に在ると云ふのだ。これを野口氏は云ひまわし上手に、而も六ケしさうに說いてるが、一般常識的な英國人を相手にしてゐるからだと思はれる。英米人よりも詩の智識が廣

く又深い僕等から見れば、パルナソス派の行き方では駄目だ。表象主義にならねばと云へば直ぐ分ることとである。そしてこの表象主義を――無論、ヹルレンやマラルメ等に聯絡もさせてだが、――氏身自の英詩界に於ける獨得な立脚地を固める爲め、わが國の禪、俳句、能、茶の湯等の發想から引き出してゐる。この點に於て渠が案外に僕等の主張する日本主義に近いのは、丁度渠の友人若宮卯之助氏がその社會的觀察に於て案外にさうであるのと同樣だ。

けれども、野口氏並にそれと同型の人々は、その根本の親しみが日本人の思想並に生活によりも外國人のそれに多いと云ふ長所若しくは缺點がある爲めに、日本の事物を根本から新解釋若しくは新研究に附することが出來ない。野口氏だけで云へば、乃ち、英米の詩歌や思想に――自分が詩人としての存立上の必要から――日本的な意味を附して新らしい立脚地を得ようとする努力はしてゐるが、その日本的な意味と云ふのが日本では餘りにあり振れた俗見と大して相違がない。從つて、渠は英米人に對しては、渠等の驚いてる實例を僕も知つてるほどに、十分渠自身の地歩を得てゐるが、肝腎の僕等日本人に對してはまだあり振れた發想家若しくはうわツつらの思索家であるに過ぎぬのを僕等は遺憾とする。若しかのランソムの批評に從ひ、野口氏をヹルレンと關聯させて論じなければならぬとすれば、この缺點がある限り、類似の傾向と素質とだけは保證出來ても、まだ同等には行けぬ。

たとへば、渠が日本古代の生活と詩歌とを論ずるところを見よ。表面では、僕の『新自然主義』で提供した新思想（後に詳しく僕の『古神道大義』で說明した）を採用したやうだ。（云つて置くが、渠として

は原文に於て、殊にはその譯書に於いて、僕若しくは僕等の新思想と新研究とを採用したことを一言斷わつて置くのが、著作上の德義ではなかつたらうか？　ましてこの部分だけが他の部分と不調和なほど嶄新であるに於いておや？　増野三良氏はこれを『空氣の所有權を主張するやうなもの』と云つた、（から氣焰の雷同者流に都合のいい論法に過ぎぬ。）が、そのあとから、又そのあとからこぼれる渠の俗見的傾向は、渠の型になつた過剰な修辭癖と共に、どうしても蔽ひ切れぬのである。渠が見界に對して不見界、聲に對して無言、生に對して死を立てる樣子が、思索としてあまりに無雜作である。かの禪學的俗見に適當な實例がある通り、二元論から一元論に達する道が十分に備はつてゐない。云ひ換へれば、何等の熟考もなく一足飛びにかかる界を感傷的に――わざとか、本氣かは別問題として――驚嘆してゐるだけであつて、まだ確保したとは見えぬ。渠はこの非難に對して自分は詩人であつて、哲學者でないからと辯するかも知れぬ。が、僕等の要求する詩人の直覺は現實と幻影とを合致的に確保することであるべきであつて、單に――わが國並に歐米のおつちよこちよいでも眞似の出來るやうな――安直な感傷的驚嘆ではない。が、野口氏はこの缺點を巧妙な修辭で以つて胡麻化してゐるに過ぎぬやうな處が多い。増野氏はまたこの非難を『却つて主智的な舊哲學』と云つたが、淺薄な區別的感傷を排するのは直ちにこちらが主智的な缺點を示めしたわけではない。

　たとへば、芭蕉がその詩と生活とを一致させたところに自然の自發性をも得、無言的若しくは表象的發想をも得たと云ふのはまだしもいい。が、さう云ふことにも生に對する死の意味（實は無意味だ

のに）などを持つて來てはかの殆ど無內容の神秘家メテルリンクの空想（文字通りの）と別に相違がなくなるではないか？　あまり考察もなく單に修辭の爲めに俗見上の對照物をあやつるのは、野口氏自身の眞正面に提供する無言的原理を裏切つてるのである。渠の「文藝上の島國性」の中に、『現實は決して左ほど立派なものでなかつたので、僕等は餘儀なく滿足を求めて夢に入つた』（野口氏の譯文に據らず、別に譯したのである、以下の引用句もすべて然り）と、尤もらしくあるが、現實その物に夢も幻影もある一元的思想ではそんなことを云ふのが既に淺薄になることとさへも參照されてゐない。して見ると、『僕が哲學的である爲めにか？　多分さうだらうが、それを全く知らないで』などあることは、本人がわざとでも夢を作つて滿足しようとする最も舊式な詩歌癖に過ぎぬではないか？

『眞に生きる爲めに死を味はひ、眞に歌ふ爲めに無言であれ』と云ふが如きも、ほんの平凡な遊戲的發想ではないか？　僕等の新らしい考へでこれを云ひ直せば、『死に味はうところが無くなるほど眞に生を充實し、無言までが歌になるほど眞の生活を歌へ』だ。野口氏は後者の發想にも恐らく全然同意が出來るほど、思索上の立ち場が曖昧だ。これは單に云ひ方が消極的と積極的との違ひだけではない。後者は流動的な生ばかりを以つて存在上の自然若しくは宇宙と見做すに反し、前者は無意味の死をまでも置き据ゑにして意味ある存在物若しくは觀念として取り入れてるのである。渠が一元的新思想の仲間に這入れさうもないのはそれが爲めだ。

　僕等の一元的發想よりも野口氏のかかる二元的な對照說明の方が矛盾やちぐはぐをお搆ひなしの俗

人どもにはちよツと分り易い。が、野口氏のそれさへもまだよく呑み込めないほどに、この方面に於ける英米の所謂識者等は低級なのである。その一例を擧げて見よう。渠がロンドンに於ける日本協會で、今回邦譯された書の第一章と同じ物を演說した時、それのあとで慣例の如くある談論に於て、ロングフオドと云ふ一敎授が野口氏の意見を批評して云つた――無言的發想などと云つてると、詩も短篇しか出來なくなる。ミルトンで云へば、その短曲は出來るが、その『失樂園』は出ない。つまり、澤山の小作と小詩人とは出ようが、大作と大詩人とは無くなると。また、オスマンエドワヅと云ふ人もこれに贊成して、日本の詩界に於ける泡鳴のことまでも引き合ひに出し、僕が詩界に始めて打つて出た時の長篇詩で、その後興がさめて三分の二ばかりで發表を中止した『鳴門姫』のことを、土井晚翠氏の外に『また別な詩人泡鳴氏も、一種の日本湖上美人を書いて三千行を下だらなかつた』とある。かかる迂濶な外國批評家若しくは一般的識者等は、米國詩人ポーの敍事詩非詩論をさへ讀まなかつたか、讀んでもあまり分らなかつたかしてゐるのだ。

そんな手合ひがそのつい隣國のヹルレンをさへ看過してゐるのに、何でわが國の眞相などが――從つて、野口氏の日本人としての眞價などが――よく分らうぞ？　渠等は野口氏の、僕等から見ればまだまだ中途半端な日本的傾向若しくは特色を、全く日本的素養だと信じてゐるのだ。そして野口氏もさう渠等に信じさせるのを以つて自分の地步を渠等の間に確かめようとしてゐるのだ。斯る筆法を以つて日本が渠に英米へ紹介されるのは、日本の爲めにはよしあしだけれども、渠自身の爲めには僕等

も多少の斟酌をしてやらねばならぬ。まして渠の作が英詩として又詩的散文として、英米に於ては、一種獨特の妙文であるに於てをやだ。但し今回の飜譯では、原文をくどい程ほぐして譯した爲めに、その妙處を至るところでぶち毀わした箇處が多いのを遺憾とする。つまり、野口氏にはまだ英語を自分の物にしようと云ふ野心ばかりが先きに立つて、日本語を馬鹿にしてゐる結果だ。

最後に、僕は渠の同書中の『日本現代詩歌論』に於て渠が僕を詩人として批評若しくは紹介した箇處に就いて簡單に考へて見よう。大體に於ては、僕は藤村、晩翠、泣菫、有明、その他の諸氏の間に在つて、渠から一番よく價値づけられてゐる。そして渠の文章も僕のところは特に妙文だ。僕の短曲『無言の石』の英譯もなかなかうまい。が、渠が『哲學並に反省の問題は渠その人の畑ではないが、渠の思想と感情とに於ける冥想は人をして屢々驚嘆凝視せしめる』との評言には、矢ツ張り、渠の全篇を通じての二元的修辭癖がある。僕の詩を『情調(ムード)の詩』であるとすれば、情調その者が一元的に新思想であり、新哲學であることは珍らしくない。まして渠は芭蕉に對しても、又僕に對しても、生活若しくは人格が直ちにその人の詩となり、思想となり、哲學(無論、流動的な)となつてることを認めたに於いてはだ。以上。(大正五年)

卓上問答

〇

客『あなたの御作の「その一日」は拜見しました。』

主人『ああ、中央公論に載りました。』

客『あれがですが――』

主『何か異論がありますか？』

客『いや、異論と云つて別にございませんが、あれの梗概を紹介的に書きながら、終りの方で一つ疑問が出たのでした。』

主『疑問とは？』

客『實は、そこに至つて僕はあなたのお考へが分らなくなつたのですが、――終りの方であの主人公が材木にぶつかつて目が覺めたと云ふやうなところがあります、ね――』

主『目が覺めたと云ふやうには書いてないし、またさう云ふ見かたをしてはいけないが、ぶつかるところがあることはある』

客『あれは諷刺の意味をお含めになつたのでしようか？』

主『いや、諷刺などちつとも入れはしなかつた。』

客『でも、僕等を鞭韃するやうな――』

主『どうして？』

客『こんなざまでは駄目だから、もつとしつかりしろと云ふ――？』

主『へえ、君にはそんな風に取れましたか？』

客『いや、疑問になつたのです。どう云ふ意味であゝ云ふことをお書き加へになつたか、若し意味があればさう云ふのではないかと？』

主『君はまだ僕のやうな寫實家の態度並に描寫法を理解してゐないのだ。あれは事實として書いてあるのであつて――作者はあの主人公を取り扱ふ點に於いて初めも終りも態度は同一である。主人公が材木にぶつかつたところで終結してゐるのは豫定の枚數に達したからのことに過ぎぬ。たとへそのあとを書きつゞけたとしても、その描寫の內容燒點に移動はなかつたらう。つまり、作者は飽くまであの主人公のやうな落伍者の心持ちで描寫はつゞいて行くのです。』

客『その、然し、落伍者ですが、――僕にも少し、いや隨分、あの主人公のやうにひねくれてると云ふのですか、それとも意氣地がないと云ふのですか、兎に角、よく似た性質があるのです。今、或雜誌の編輯に多少たづさはつてますが、それをまともに仕事としてやつて行くことも出來ず、さうかと云つて、外に他の努力をやつて見ようと進む氣にもなれず、云はゞ、われから段々と引込み思案になつて、その癖、人のやつてることが羨しくもなり、また皮肉に批評して見たくもなるのです。僕が若しあんな場合に立てば、きつとまたあんなことにぶつかるだらうと思ふと、其鞭韃があなたの御本意ではないかと、さう――』

主『君が一讀者としてさう取れたと云ふのなら、それでもいい――讀者若しくは人生の狹い趣味的、感傷的觀察者にはいろいろあつて、たとへば、僕等の半ば異議を稱へる乃木大將の死を全然正直な犧牲と解するものもあつたり、メテルリンクの如きは運命でもないものをすべて運命として書き拔いたりするやうなこともあるから、ね。』

客『さう承れば、疑念も晴れますが――』

主『こないだの文章世界に加能作次郎が僕のまた別な作「二頭の馬」のことに就いて、皮肉なところはちよつと面白いがと云ふやうなことを述べてあつた。然し作者としてはあの作にも皮肉や諷刺は少しも加へてない。そりやあ、或部分だけを取つて云へば皮肉に見えるところもあり、諷刺に聽える點もあるかも知れぬが、それは一讀者として自己の趣味か狹い理知かに迎合させた觀察であつて、嚴密な批評家たる資格での評言とは云へぬ。君の鞭韃云々の考へ取りはそれと同じやうな間違ひで、而も君自身にもつと引き附けた小主觀であつたらう。』

〇

客『先生の雜誌日本主義に出た先生の「國家主義並に個人主義の區別の撤廢」を讀んで、わたくしはこれまでの先生の立ち場がほんとうにまだ分らなかつたのがよく分るやうになりました。で、その中にも説かれた優强者の生活と云ふことですが、それを若したとへばわたくしなどが創作に於いて實行することになると、よわ〳〵しい落伍者のやうなものは書けなくなるのでは、いや、書いてはいけない

のではありますまいか？』
主『さうすると、君は單純な理想主義者になるつもりか、ね？』
客『いや、さうではありませんが――理論上、弱劣者は優强者に吸收征服されてしまうものとすれば存在もない詰らぬ弱劣者のやうなものを描寫するのは――つまらぬことになりますまいか――？』
主『僕は創作家としては飽くまで寫實主義だよ。ただその寫實を昔の寫實主義者のやうなうはツつらで終らせないと、若しくは終らせまいとしてゐるだけだ。』
客『さうすると――あなたの肝腎な主義と實際とは分離して、一致しないことになりましようが――？』
主「どうして？　そんな單純な疑問を持つて來るものは君ばかりではないが――』
客『然し、たとへ理論上からばかり申しても――』
主『ぢやあ、理論上だけからでも云つて見給へ。』
客『申しますと、――あの、先生の「その一日」ですが、あんな弱劣な落伍者を書いたとて仕かたがないではございますまい？』
主『どう仕かたがない？』
客『第一、つまらぬでしよう？』
主『何が？』

客『その骨を折つてお書きになるだけが――?』

主『さう云ふ君のつもりぢやあ、作その物と材料とを混同してはゐまいか? 弱劣の生活も材料ですよ。』

客『それはさうでございましようが、これまで先生の創作は大抵はその主人公が優强者的で――』

主『いや、そんなことはない。僕が僕自身の緊張した時を觀察して――然し告白ではない――描寫の材料とした場合には、無論、僕の主張する優强者的おもかげがそつくり出ようが、そして出るのは寫實主義から云つても構はないが、僕はそればかりを材料とする必要はない。』

客『然しその材料も優强者の實生活と一致しなければならぬのでは――?』

主『それは――君が今弱劣者に存在がないと見てしまつたやうなことを云つたが、――そんな點から誤解を生じたのではないでしようか?』

客『さう致しますと、征服との關係は――?』

主『實際的に云ふと、優强者と云つても全く絕對的な優强者を人生に發見しようとする如きは、神を求めると同樣の空想である。あらゆる弱劣者を征服し盡し、また自分自身をも喰み盡したほど絕對の優强者はない。ただ征服しつつ優强生活をするものがあるのみであるから、その一身に吸收されつつある弱劣者の存在もそのままの狀態に於ては事實だ。この事實を優强者の生活の過程に生ずることとして認めるのは、僕の人生觀に反くものではない。そして僕が作者としてこの事實、乃ち、弱劣者の

心持ちになつて心理描寫をするのは、矢張り、人生を全寫する寫實主義だと思つてます。』

客『さうなれば分らないことはございませんが、――それから、先生の「毒藥を飲む女」に有樂座で呂昇を聽いてるところがあります。』

主『それが――?』

客『あそこにちよつと先生に似合はぬ筆法が使つてあると思ひますが――?』

主『見臺の赤い房が物を云つて主人公に何か命令すると云ふやうなところでしよう?』

客『はあ、あそこが――どうも――』

主『僕は幻影をも實際の事實だとまで洞察して寫實主義を採つてる者であることを了解して貰へば、そんなことは直ぐ分ります。』

客『成る程、それは簡單に分ります。』

主『ところで、あすこと多少同じやうな筆法を使はうとして、僕が失敗したのは、「人か熊か」に於いて、情慾の俄かに湧いて來たことを雲が湧いたとやうに隱喩的說明に落ちてしまつたところです。帝國文學で當時それを指摘したのも尤もで――あれは丁度、僕が中央公論社に原稿を持つて行つた時、どうもそこだけが檢閲上の危險の恐れがあると云ふので、その場で却つて下手に訂正してしまつたが、あとでその氣が利かなかつたことを知りました。』

○

客『あのモデル問題には一時困りました。』

主『そりやあ、君が原稿を僕の創作の材料として僕に賣り渡した罰でしよう。』

客『それでも、もう、兎に角かたづきましたが――』

主『僕はあれを自分の物にする爲に二日二夜をついやしました。』

客『道理で隨分見ちがへるほどになつてゐました。』

主『然し、もう、僕も人の原稿など買ふまい――たつた一二度しかなかつたことですが、モデル問題など起して氣の毒だから――それと云ふのも、どこまでが過去の事實であつたのかこちらには分らなかつたので、ね、どうせ僕の手で勝手に取捨と變替とをしてしまつたのだけれど。』

客『第一、場所をどこか別な所へ持つて行けばよかつたのです。』

主『さうでしたか？』

客『それから、婦人の方の話では、あの醫者の戀愛事情を話に話したのはおぼえてゐないことはないが、冗談であつたのにと云ふことでした。』

主『どうせどの人物も本名を出したわけでもなし、またその人物通りにもなつてゐないだらうから――』

客『こないだ、婦人を訪ねました時に、そばに別な友人がゐてあれほど立派な女に書かれてゐりやあおこるべきどころか、寧ろ名譽だと云ひ添へてくれました。』

主『どつちにせよ、もう濟んでしまつたことなら――』（大正五年十一月）

愛の本性

一般の人々は愛と云ふことを餘りに表面的に解釋してゐて、絕對に爭ひの分子のない親睦若しくは親切のやうに考へてゐる。が、善意の爭ひをも含んでゐない愛などは人間の世界には恐らく一つもあるまい。他人を愛する場合はあとまはしにして置いて、先づ自己を愛することで云つても、進步した生活をしてゐる者ほど自己の分裂が多方面なので、これを統一することに人一倍の苦しみをしてゐる。この苦しみは何であるかと云ふに、自己の分裂した慾望の一つ〳〵をすべて自己に統一して破綻のないやうにする努力だ。然し分裂した慾望の種類によつてはその本もとに統一されまいとするのがある。乃ち、自己に對してむほんを起すのがある。そしてこれをも自己は征服しないでは置かぬところに自己內で爭ひが生ずる。慾望の一つをそのまゝ發達させようとすれば、他のが反對なり恨みなりをする。これをなだめる樣子が見えると、また一方のが猜疑をやる。

ところで、かゝる面倒が起るのを面倒だとしてうツちやつて置けば、自己の統一が出來ず、自己その物が滅びるのだ。蓋しかゝる面倒若しくは爭ひの生ずるところに親愛の關係が存してゐるのであつて、この爭ひがなければ愛もないことになる。斯くして自己內の慾望同士で相爭ひつゝ相親しむとこ

ろに自己が成立するのだが、欲望のうちで一番優强なのがすべての欲望を結局は征服する。征服と云つても、戰爭を表面だけで見た時のやうな暴力的征服ではなく、あるところの反對や怨恨や猜疑などを同情的に取り纏めつゝ、まかり間違つた時だけに大手術を加へる征服である。これを自己の品性若しくは人格の確立と云ふ。從つて、爭ひであり征服であり人格の確立であるところの愛を人間界に於いては實際的に最上の愛と云ふのである。これ以上の愛をも理想的には、否、空想的にはいくらも考へ得られるだらうが、僕等はそんな空論物を不用とするばかりでなく、却つて實際の愛を充實させる爲めには邪魔物になる物だとする。

この僕の愛に對する實際論はたゞ自己の愛にばかりではなく、またその他の關係にも應用出來るのである。乃ち、次ぎに友人間の愛で云つて見よう。甲と乙との間が一生を通じて親密であつたと云ふやうなことは、たとへば最近の新聞種で云へば、故夏目漱石と中村是公氏とに於ける如く――それが果して事實としても――やつてる仕事が全く別である場合の外は、殆どあり得べきでない。仕事が別であると、利害關係が伴なはないから衝突が少ない。その代り、その親密は極あツさりしてゐるものだ。若し互ひの仕事が同じ方面であると、利害關係が伴つて來るから、同じやうに無邪氣な競爭心だけで努力し合つてゝも、一方ばかりが成功すると他方が喜びながらも――若しくは全く喜ばないで――いやな氣を私かにするやうになつて、何かの場合を動機として分離してしまひ、その間は左程親密でなかつたものとの間よりも一層疎隔する。

これが一般普通のことであつて、――僕等の經驗から云つても、その時代その時代に最も親密であつたものは僕等の生活に一進步がある每に却つて遠ざかつて行つて、相變らず親しみをつゞけてゐるのは仕事の違つてる友人か、然らざれば同じ社會でゞもたまに話し會ふことを樂しみにしてゐるだけの友人である。から云ふあツさりした友情も愛ではあらうが、そして――一般には最も尊ばれる愛であらうが――もツと親密な程度には進めないものだらうか？『理解があらば』と答へる人もあらうが、如何に理解があつても、それは互ひに束縛や征服を仕合ふほど親密若しくは熱烈な愛になるとは限らない。

所謂『プラトンの愛』は理想として利害關係を超越し、理解ばかりの上での親しみを表してゐるのだが、これを以つて云ひ現はされたカライルとエマソンとの間柄はどうであつたか？　兩人は大西洋を隔てゝ第十九世紀に於ける英米の大文豪となつた。カライルはまたエマソンを英國に於いて推賞した。エマソンはカライルの處女論著を感服推薦して米國にも出版させた。二人の間には交通の上で非常に親しい交はりがあつた。けれども、米國の樂天哲學者が晚年に人の同情的寄附金によつて有福になり、最も得意を以つて歐洲旅行を企てた時、英國の悲觀的思索家に二度目の會見をして、人間は至るところに知己があるものだと述べたので、大いに悲觀家の感情を害した。

カライルは別れた後にエマソンのことを人に語つて、あのやうに樂天家ぢやア溜らないと云つたさうだ。渠はその時代にでもなほ天に號泣しながら墮落した社會と戰つてゐたのである。一方に、エマ

ソンは無事に漫遊を終へて本國の港に着くと、その波止場には何かのお祭り騒ぎの如く人民が集つてゐた。自分でも驚いたことには、これが自分の歸國を歡迎する群集であつたので、ます〳〵得意の氣分を増長した。離れてゐると懷かしい友でも、會つて見て直ぐ衝突するのが珍らしくない。この場合、この衝突の原因を理解し合つただけでは、決してその友情が進歩するものでない。

友人間に思想若しくは感情の衝突があつた場合にも、その衝突の原因を互ひに束縛し征服する努力が繼續してこそ初めて眞の、親密な、若しくは熱烈な友愛が成立する。乃ち、反對と論駁と忠告と競爭と征服の仕合ひとの間に友人の愛があるのだ。かう考へて來ると、カライルとエマソンの關係よりも、トルストイとツルゲネフとの間に於ける反撥的友情の方が寧ろ愛としての要領を得てゐる。ツルゲネフは、その一方が小說を卑しんで段々と宗敎家氣分になるのを忠告し、今一度得意な創作家に歸れと云ふ手紙を送つた。トルストイはまた渠、何を云つてると云ふ侮蔑を以つてこれに向つた。そして互ひに衷情からの爭ひは覺悟の前であつた。熱烈な友愛は大抵永續しないが、永續しないのは友愛の價値を下げるよりも寧ろ上げる所以であらう。兄弟姉妹が他人同士よりも却つて喧嘩し易いのは多くはこの道理からである。他の利害までも自分の利害に合はせて征服するなり統一なりをしようとするが爲めだ。

第三に、親子の愛だが——世に最も親密な男女の關係と共に親子の間には爭ひがあるべき筈のものだと云へば、一般の表面論者、形式論者等は必らず僕等の議論を暴論だと笑ふだらう。が、實際には

性質上それが當然であるのだから仕方がない。親子の愛は——親から云つても、子から云つても、——友人や兄弟のよりも親密だと云ふことは、誰しも領くところであらう。否、僕等は親密と同時に熱烈の度も他の間よりも偉大だと云ふのだ。それだけ衝突も早く、爭鬪も直接なのである。

親子の間には利害關係はなかなか共通である。近くて兄弟同士、遠くて友人同士の間では、利害を共にしてもいやな時は分離するだけのことだ。そしてこの分離を許さぬほどの權威としての習慣的、感情的、若しくは思想的な束縛はどこからも與へられぬが、親子にはこの束縛がある。無論、生みつ生まれつした關係からだが、これがある爲めに半ば因襲的に餘り努力もなく子に愛を迫る親もある。また、同じ因襲をうらはらに行つて、わけなく親に愛を求める子もある。が、共にこれ舊式な親子であらう。現代の新生活では、僕等は親自身の獨立性を認めると同時に子としての獨立性も許す。この點は友人同士の間がらと大して變りはないが、一方にまた男女間を除いてはこゝばかりに存する愛の要求權が與へられてゐる。

友人に愛を要求してはいよいよ以つて疎遠になる所以だが、親が子に、子が親に愛を要求するのは直接の血緣上からますます親しみを增すことになる。それだけまた我儘の餘地を生ずる。そして少しでも一方の氣に入らぬと、他方の仕うちや社會的行爲に關する干渉、命令、忠告若しくは哀泣の形に於いて、親は子を憎み、子は親を恨むに至る。が、これを兩者に愛がないからと見做すのは表面的觀察であつて、實は、愛があり過ぎるのである。熱烈過ぎるのである。僕等が多くの家庭を觀察した結

果から云ふと、親子が舊式な習慣で無事に納まつてるところにはその愛があッさりして手頼りないけれども、親子が相爭つて一緒にゐられなくなつたやうな家にこそ却つて本當の愛の形跡がある。

第四に、男女間の戀愛だが――男女の間は友人の關係にはじまつて、あとでは親子よりも一層密接になつて行くものである。初めは好き嫌ひと理解とを遠慮に包んで接近するのだが、のちには露骨に互ひの愛を――無論、權利義務として――要求する。この經過は　自由交際の上で自分達が自分達で撰擇した結婚に於ても、また親や友人の媒介によつた突然の夫婦に於いても、結局同じである。若しその兩方若しくは一方が愛を消極的に受けるばかりで、その積極的要求がない間は、戀愛を中心としての眞の夫婦は成立してゐないのである。かゝる狀態で見すぼらしく終始する結婚もあらう。が、結婚後少くとも一時期は親子の間よりも一層我儘な自己を發揮し、互ひに愛の要求を感じて征服し合つたことがある間でなければ、光彩ある夫婦とは云へぬ。

一國の光彩は戰爭の勝利や敗北の仕かたに在る。戰爭のない國や戰爭を避ける中立國などには眞に立派な歷史は存し得ない。ところで、愛は征服の過程中に實現することを僕の既に述べたところから推察出來る人なら分る通り、男女間の光彩も征服するかさせられるかの戀愛に見えるのである。そしてこれが人間の懷く諸種の愛のうちで最も熱烈であり、最も全人的であるものだ。それだけまた持續の時間が短く、熱のさめるのも早い。然しまた短いから・早いからッて、その價値や實質が下だるものではない、戀愛も過程である。そして國家なる物を初めとして、世界に過程的でない物は一つもな

いのである。

國家も過程であるところに實質を認められるのであるが、一般人はこれを形式化させてそこに永續を空想してゐるのだ。親子は一代、夫婦は三世と云ふのも、愛の熱烈の度合ひを時間的にたとへたものと見れば間違ひはない。けれども結婚なる形が戀愛をさう長く――否、一生だけでも――つゞけるものだと思つては違ふ。僕等の解釋では、戀愛は一時期だけのを本當だとする。その本當の時には戀愛と結婚とが一致してゐる。が、この一致はいつまでも續くものではない。男女間の愛では大抵女の方が征服されてしまうのが常例だ。が、一つの異例として女の方が年したの男を征服してゐる或有名な婦人が、戀愛を以つて結婚は初まらねばならぬことを主張したのはいゝが、戀愛を以つて初つた結婚はいつまでも戀愛を保つてるかの如く澄まし込んでるのは形式化である。

男女の人格に優り劣りがなく、今日までの獨逸側と英佛側とに於ける如く互ひに勝敗がある限りは、いつまでも戀愛的闘爭は續き、その間は熱心の光彩を失はないだらう。が、その一方が初めからあとまでもおもちやの變形であつたり、若しくは途中から征服されたりすると、熱の上る時がなく、若しくは熱のさめる時が來る。そしてその戀愛は子供とか、その他の生活條件を仲に挾んだ間接的なものになつてしまう。この經驗に氣づかないで、自分の昔も今も同じことのやうに思つてゐられる人ならば、その神經は遲鈍である。これでは、丁度、初めから煮え切れない夫婦の情――戀愛とすれば、最も低級の戀愛を――煮え切れない爲めに闘爭もなく無事につづけてゐるおめでたい男女の狀態と大し

て相違がなくならう。

で、結婚と戀愛とを長く一致せしめて置く道はたゞ二つある。戀愛を最も低級な種類のにしておめでたい夫婦になつてるか、それとも、人格も意志も共に同等にすぐれた男女がどちらも負けず劣らず征服の仕合ひになる戀愛的努力をする關係に立つかだ。この二つのうちでなければ、戀愛の熱のさめた時を條件として寧ろ斷然離婚する方がいゝ。けれども、この離婚を決するまでになほ一度試みて見るべきことには、たとへその戀愛が間接的になり、若しくは出しがらになりしても、結婚と云ふ貝殼の中では度々若しくはたまには戀愛の直接感を呼び返すことが出來る機會もある。この間は、まア、如何に勇氣あり決斷心ある人でも辛抱すれば出來ないことはない。そしてこの機會がいよ〳〵乏しくなり、又全くなくなつたと云へば、もう、子供や其母の扶養問題などは別に處分することにして、斷然離婚するのが却つて自分の生活に忠實で眞面目な者の行爲である。

つまり、人間界のことは——男女間の問題のみならず、すべて——鬪爭によつて接近し、鬪爭によつて分離するものである。

から云ふ意見を有する僕の戀愛的實驗談をさせるのが記者の希望であつたらしい。僕の妻を二度まで離婚したのは僕としては決して恥づべきことには思はず、寧ろ自分の生活に忠實であつたと考へてゐるのだから、語るのを憚るにも及ばない。たゞ與へられた頁數が餘り殘つてゐないから、最も簡單に云ふだけのことだ。

僕が第一の妻と別れたのは、僕の精神生活の進歩と共にかの女が餘りに征服甲斐のない女になつて來たからである。近頃の或雜誌に失敬なことには、かの女のことを下宿屋の娘とし、僕がそれをだまして關係したと書いてあつたが、あれは僕の父の家が所謂士族の商賣で下宿屋をしてゐたことを何かの聽きかじりから間違へたのであらう。かの女は相當に敎育あり、耶蘇敎信者であつたが、段々と易に夢中になつた。この離別と子供とに對する負擔として僕は一定の金額と亡父の家とをかの女に渡した。今では、然し、子供はすべて僕の方に引き取つた。

第二の妻は可なり僕に手ごたへがあつた。それは或る男に對する失戀の爲めに入水してたまたまよみ返つたと云ふ點に僕の好奇心も動いたし、いろんな世評があつてもかの女はなほ處女を標榜し、僕もかの女に對する世の惡評を排してかの女を信じたところに生活の緊張があつた。云つて置くが、かの女にして、若し世評通り處女が破れてゐたら、それは出もどりとか再婚とか云ふ單純なことではなく、賣女も同樣の境遇にゐたわけになるのである。初めはその時の氣ぶんとして僕はそれもかまわぬつもりであつたのだが、――蓋し樺太で一生の事業に失敗して失望のゆるみに落ちてた時であつた爲めだが、――かの女が餘りに處女をふりまはすので、ふとそれを信じて心の緊張を恢復したのだ。

然し間もなく僕にかの女の潔白を疑ふ端緖がきざした。そしてその疑ひが全く本當であつたことを僕が十分に確かめ得たのは、僕等が八年後に別居してからのことだ。このあひだに僕はそれとなくかの女を今一度僕の滿足出來るだけの疑ひなき淸淨に引き戾す苦心をしてゐた。中學敎師をしてゐた時

代からさう道德家を以つて任じなかつた僕が、斷然他の女に手を出さなかつたのもそれが爲めである。新らしい婦人連の新運動に一かた入れたのもそれが爲だ。それでもかの女はます〳〵征服甲斐のない者であつた。と云ふのは、かの女は自分が僕に一度信じられたのをいゝことにして、自分の生活を反省することが少しもなく、疑はれてゐることさへ恐らく氣が付かなかつた。さうかと云つて、素直に正直に征服を受ける女でもない。これでは僕をして興ざめて離婚するより外に正當な道がないではないか？

利口で而も弱點なき女なら、別居と同時に離婚の承諾をすべきであつたらうが、それを裁判問題に持ち出し、いよ〳〵離婚の理由となる有力な證據を擧げられてからかの女は示談的に離婚屆に捺印した。それが爲めに、裁判なしで行けばもツと澤山の金も僕から貢がれる筈であつたのが、僅か五百圓ですんでしまつた。

征服してからも熱烈な戀愛は興ざめて優强者の寂しみに返るものだが、征服中にも男女の間が素直ならぬこじれに落ちれば、既に興ざめてゐるのである。

熱あり生命ある男子には二つの任務がある。一には婦人を征服すること、二には男女をえらばず人間を征服すること、これが男子の戀愛ともなり、人道ともなるものであつて、征服の氣ぶんを含まぬ平和や人道は空想でなければ虛僞である。（大正六年五月）

散文詩形の創始者

――泡鳴、柳虹二氏の對話――

（岩）君の記憶をも聞かなければ解らぬが、「短歌雜誌」三月號に三木露風氏が斯う言つてゐる――「私どもは最初自由詩並びに口語詩を主張した」と云ひ、括弧の中に「明治四十年相馬御風氏と私とが早稻田文學誌上二作を發表した。夫が自覺した文學運動の始めである」と。

（川）私もその言葉には異論があります。

（岩）實をいふと、今度四月の「文章世界」に散文詩の動機律を詳しく說明した中に、散文詩といふものは相馬御風氏と僕が始めで、相馬氏は二三篇發表したあとはたゞ議論上以後の詩は口語でなければならぬと主張してゐたのであつたが、僕はその時から大分多くを作つて、その理論の上でも相馬氏とは多少違つた立場でやつてゐた。それが恰度明治四十一年であつた。その頃三木氏はどうしてゐたのであらう？

（川）僕の記憶では相馬及三木氏の口語詩「痩犬」及「暗い扉」が早稻田文學へ出たのは四十一年であつたと思ふ。それで僕はその前年の九月に當時の雜誌「詩人」誌上で言文一致體の詩四篇を發表した。

（岩）君のやつたのも覺えてゐるけれども、あれは僕の云ふ處では口語體の有形律で、まだ散文詩で

はなかつた。

（川）　併し僕の最初のものには口語體の有形律もあつたけれど、第三回目に發表した（四十一年二月「詩人」誌上）「曇日」は以前のものと全く異り、相馬氏が發表したと同じやうな形式の下に創られ、且つもう少し律に細心であつた。これは後から人に聞いたので信用は出來ぬが、相馬氏は僕のあの作からヒントをえて「痩犬」を書いたさうだ。

（岩）　相馬氏の最初の散文詩は確か四十一年の五月に出たと想ふ。といふのは、その時僕が父の看護やら死の世話などの間で作つた最初の散文詩「死」（この中に三篇を含む）を書いてゐたので、これをも「早稻田文學」で載せるだらうと思つて相馬氏におくり、それが一ケ月遲れて六月に發表された。僕はその時君の先例があるを知らなかつた。さうしてみると、兎に角四五ケ月間前後して君なり、相馬氏なり、僕なりが散文詩形を始めたのだ。一寸斷はつておくが、僕のはホイトマンからあの形が出たのであつた。ところで、當時三木氏は何をしてゐた？

（川）　「廢園」にある詩にも見えてゐる通りに、口語體の詩を作ると同時に、文語體の詩を作つてた樣に思ふ。

（岩）　それでは其口語體の詩を作り初めたのは何年か。

（川）　四十一年五月に發表した「暗い扉」が最初です。

（岩）　君の口語詩とは僕のいふ散文詩に當つてゐるか、ね？

(川) 少々違ふやうに思ふ。僕は散文の詩を作らうとしたのではなく、韻律を自由にするために、云はゞ單調な七五調式文語脈から脫して、新しき詩の調律を築くために口語で表現したのです。

(岩) その有形律から脫するのは、口語になると同時に散文詩になつたのが事實ではないのか?

(川) 僕のいふ散文詩の意味とあなたの云はれる散文詩の意味が少しく異つてゐはしないかと思ふ。私は散文詩といふより單に今の言葉でいふ自由詩を作るのが目的であつた。それ故その自由詩があなたの散文詩ならば、あなたの御說通り散文詩になつた事を認めませう。

(岩) 自由詩とは Vers libre のことか?

(川) 左樣。

(岩) 佛蘭西のヹルリブルは散文詩ではなく、やはり有形律ではないか? 唯從來の音脚を四音一脚に變へたのが音律上の要點である。ところが、君らのいふ自由詩は有形律ではなく、無形律を要求した事を見ると、自由詩といふ事が佛蘭西のと同樣な意味ではないぢやアないか?

(川) 四音一脚といふのはたゞ十二綴音詩の形を多少自由にかへたものだ。Vers brise にしてもAlexandrin lidre にしてもまだ本當の自由詩ではない。その自覺的運動は象徵派以後でヴェルハアレンなその自由詩になると、全くホイトマン式で更に有機的になつてゐます。

(岩) さうしてみると、君らのいふ自由詩は僕のいふ散文詩と同じわけになる。そこで曩の問題に立ち還るが、僕の所謂散文詩、君らの所謂自由詩なるものゝ最初の効を三木氏だけが相馬氏と分有しや

うといふ言ひ方はよくないと思ふがどうだらう。

（川）それは同感です。

（岩）實をいふと、僕は三木氏の事、ならびに君の事はよく知らなかつたので、僕と相馬氏とが我國に於ける散文詩の始めをなしたやうにこれ迄書いた。が、これはこの四人がお互にその効を分有すべきであらう。但し、散文詩といふものが思想動機を律として成り立つてゐると云ふ解剖的意見説明はこれ迄何度も簡單には言つておいたが、今回その動機律を皆によくわかるやうに説明したのが「文章世界」の文章なのだ。

（川）では、いづれそれを拜見した上又訊ひませう。（大正七年四月）

對話 政治小說の出ぬ所以

（主人）ぢやア、君は現代の小說は全くつまらないものだと思つてるのですか？

（客）さう云ふ意味でもないのですが、――われ〳〵には單に男女關係などを主にしたものでなく、昔、末廣鐵腸やなんかが書いたやうな政治小說があつて欲しいのです。

（主人）ちよツと云つて措きますが、ね、末廣時代の政治小說と云へば、そのうちのいい物は殆ど皆ヂスレリ侯などの作の飜譯か飜案であつた。

（客）　さうかも知れませんが、――

（主人）　ところで、そのヂスレリ侯の物好きな小說は現代の英國に於いてどれ程價値を持つてると君は思つてるのです？

（客）　それは專門家でないから、わたくしには分りませんが、――

（主人）　いや、それが分らないで徒らに政治小說、政治小說と云ふのでは困りますよ。ヂスレリはその當時の英國政治界にはおほ立て物の一人であつた。それが小說を作ると云へば、わが國では大隈侯か後藤男かが小說發表をしたやうなもので――而もそれが代作ではなかつた。さきに、後藤男が今の內閣に這入らなかつた前に、或書店と約束して、科學的政治小說を書かうとした事實を僕は知つてるが、それは名を貸すだけで、實は或官僚記者が代作することになつてゐた。若し代作でなく、本人がヂスレリの如く創作したものなら、作のよし惡しは別としても、第一に男爵政治家が書いた小說として世間の興味は十分に引いたらう。

（客）　そりや惜しいことをしました、な。

（主人）　いや、僕等から云へば、何も惜しいことではない。代作では、その第一の興味の根本義が無になつてるからである。然しヂスレリにはそれがあつた。世界的外交にはかのビスマクと相對抗し、內政ではグラドストンと共に互ひに內閣を交替した程の者が、自分で又小說を書いたのであるから。

（客）　面白いではありませんか？

（主人）　君は新聞記者として先づ平面上の興味に注意したに過ぎなからうツて。もツとその創作の內容に就いて考へて見給へ。作者が比較的に社會の興味を引く位置に在ると云ふことは必らずしもその作の內容を保證する所以ではない。

（客）　そりや勿論です！

（主人）　だから、さ！　ヂスレリの作だツて、ただ政治小說であつたと云ふことを以つて直ちに面白いとは云へないので。渠の面白がられた他の一面は、その當時の政治家並にその家族を題材にして、當時の政治界や外交界を諷刺したことである。內容としてはただそれだけのことだ。それが面白いと云つても、もツと題材や觀察の廣く又深い諷刺小說家のサカレイや滑稽作家なるヂケンスの純粹創作にはその足もとへも及ばなかつた。君はそれでもなほそんな政治小說を純粹創作よりも以上にいい物と想像してゐるのか？

（客）　…………

（主人）　人情の根本から生ずる諷刺や滑稽は決して下等な物ではない。そのまじめの度に於いては、人情に基づいた政治その物と少しも高下はない筈だが、――？

（客）　そりやさうでしようが――政治だツて、あなたの所謂純粹創作の範圍內に這入らないことはないでしよう。

（主人）　そんなことはまだ〳〵あとで云ふべきことで――その前に、もツと考へて置くべきことがあ

らう。

(客)……………

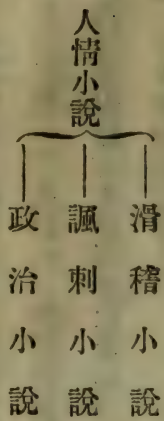
(主人)君等にやア、政治と云へば何でも一番高尚だと云ふ先入見がある、高尚でなくとも、一番面白いと云ふ。

(客)そりや當前でしよう?

(主人)君等にやア當前だから、政治家や新聞記者以外のものには却つて不當前になることもある。極ひらたく云つても、僕等には政治が面白いのは人情の一つの現はれとしてである。ところで、人情は政治の一面にばかり現はれるのではない。否、この議論の立ち場から云へば、政治にばかり人情が出るのではない。

(客)そりや——

(主人)まア、待ち給へ。して見ると、ここにヂスレリ時代の一般思想から表を作つて見給へ。人情小說と云ふのが主目であつて、その部門に滑稽的、諷刺的、並に政治的小說があるわけだ。乃ち、

人情小說
- 滑稽小說
- 諷刺小說
- 政治小說

このうちで、政治小說と云ふのがちよツと曖昧な部類であつて、題材を政治界に取つたと云ふことを

除いては、苟も創作純化があればあるほど、純粹創作となつて、而も諷刺が勝つてれば諷刺小說に、また滑稽が主になつてれば滑稽小說になつてしまうべきものだ。斯くて眞の內容から云へば、特別に政治小說なる部類を殘して置く必要がなくなる。政治上の苦心や政黨のかけ引き問題などの裏面には如何に面白いことがあると云つても、廣いまた深い人情を立ち場として見れば、滑稽や諷刺の材料に過ぎない。この場合、君等が特に政治小說を要求するのは、どう云ふ意味になると思ふ？

（客）つまり、あなたの所謂滑稽になるにせよ、諷刺になるにせよ、それはかまひませんが、結局、今の政治の內幕若しくは政治的思想をその小說の中に現はして貰ひたいのです。

（主人）成るほど。それだけのことなら、やがてさうやれる人ができたらやるだらう——が、今日のところでは、とても六ケしい。第一、わが國で外務大臣の夜會やその他の政治的意味ある宴會へ小說家を招いたりした例がありますか？　小說家を友人にして喜ぶだけの素養ある政治家がありますか？否、今の小說を讀んで理解しようとするほどの餘裕ある大臣や政黨首領がありますか？　また、小說家の方にしても、今日では、まだ渠等と對等の交際するだけの社會的位置を與へられてないのだ。第一に、かかる交際をするだけの金力や餘裕がない。これは然し小說家が惡いのではなく、社會が渠に當然與ふべき待遇をまだ與へることができないのである。

（客）如何にも、その點がありましよう、な。

（主人）そんな狀態に小說家を棄てゝ置きながら、社會の方から勝手に早く政治的小說を作れと要求

したツて、それは婦人に政治結社加入や政治演說を禁じて置きながら、婦人政治家の出ないのを不思議がるやうなものではないか？

（客）それも尤もでしよう、な。然し、どこかに小說家の天才があつて、そんな事情を自分で切り開いて來ることはできましよう？

（主人）そんな虫のいゝことが想像できるものか？　君等は小說と云ふ物を昔の考へに從つてたゞ作り話と思つてるのだ。どんなことでもちよツと聽きかじつたうへで、それをどんなにでも空想でこね上げるものだと見てゐるのだらう。

（客）さうでもありませんが。

（主人）然し、自分の體驗や經驗以外のことを題材にするのは、現代の反省ある小說家としては、實に危險なことであるのだ。第一に、實感が伴ひがたいからである。そして實感の伴つてない作は最高の標準から駄目と見られる。だから、僕等は自分等の知らない華族社會のことをいゝ加減な想像でこね上げた小說よりも、自分等の實驗範圍を確かに材料としたところの下宿屋生活の方を大切だとする。人情の現はれるのは、華族だツて下宿人だツて同じことだから。つまり、華族と書生との相違は題材表面上のことであつて、內容はすべて一樣に人間としての生活になつてれば、それで十分に小說を創作し得たことになるのです。

（客）さうしますと、政治小說なんか結局あなたの問題になりません、な。

（主人）　無論、今の小說家どものうちにその生活がそんな方面にも廣がつたり、關係を持つて來たりするものの出來た上のことだ。が、なほ君には云つて置くことがあるやうです。

（客）　それは——どう云ふことでしよう？

（主人）　話はもとへ歸るが、末廣鐵腸時代のわが淺薄な政治小說に對する僕の批判だ。渠等がヂスレリなどを飜案したツて、根が外國政治界の事情や諷刺であつたから、たゞ政治のことを題材にしてゐると云ふ外には、何等の適切も純化もなかつた。よしんば、大歡迎を受けた東海散士の『佳人の奇遇』の如き當時の創作に於いても、その內容はたゞ淺薄な政治的感傷に過ぎなかつた。あれでは政治のことゝし云へば何の反省もなく直ぐありがたがつた當時の青年には持てたが、すべての事に進步した今日、それを再びその程度で持ち出すべきものではない。淺薄に生まじめ過ぎて、たとへば成り上つた俄か紳士の如く、諷刺や滑稽の餘裕さへもなかつた。

（客）　あなたの所謂小說は、さうして見ますと、諷刺か滑稽かのどちらにかなつてゐなければならぬのでしようか？

（主人）　そこだツて——これから君に僕が云はうとするのは！

（客）　…………

（主人）　小說が作り話でなくなつたことは隨分舊いことだ。サカレイやヂケンスでも、實驗や觀察を重んじたので、さう出たら目にその材料を左右しなかつた。が、小說に現はれる人情が諷刺でなけれ

ば滑稽の形になると思はれたのは、ヂケンスやサカレイを中心とした第十九世紀中葉に於ける英國のことである。小說の殆ど進步なき同國では或は今日でも多くの人々はさう思つてるかも知れない。そしてわが國に影響を及ぼした思想は最初には英國のであつたから、小說でも滑稽諷刺のでなければ、政治小說が眞似られた。

（客）その當時でも、政治小說は然し新らしい物であつたのでしよう。滑稽物になれば、德川時代にも旣に現はれてゐましたから。

（主人）君は無論一九や三馬の物を指して云ふのだらうが、そんなことを云つて來れば、英國十七世紀の宗敎小說『天路歷程』などを作つたバンヤンに對してわが國の理想小說なる『八犬傳』の作者曲亭馬琴があつたし、脚本を考へに入れると、英國にもわが近松に匹敵する大沙翁を持つてゐた。が、わが元祿時代に於いて旣にゾラ以後の自然主義的小說に近い作をしてゐる西鶴に對しては、英國に於いては今日までもその比を僕等に與へ得ないのである。その代り、わが一九や三馬は英國のサカレイやヂケンスに比べて品位が乏しかつた。前二者は戲作者として自分から不まじめになつて人を笑はせたり冷かしたりした傾きが多いのだが、後二者は決してそんなことはなかつた。乃ち、人間として人間の觀察や批判をしたのが、おのづから滑稽や諷刺になつたと云ふ、云はゞ、もツと深いところに立脚地を持つ小說家どもであつた。坪內逍遙氏が小說家春の屋主人として初めて打つて出た時の標準も、恐らく、英語からおぼえたそれであつたのだが、渠はまだ戲作者はだを脫してゐなかつたが爲めに、そ

の方には成功しなかつた。そして他方に於いてまたかの末廣等の政治小説が失敗に終はつたのは、政論家若しくは政治志願者の餘技に過ぎなかつたからである。小説を書くと云ふことに生まじめで、而も實際は不まじめであつた點に於いては、坪内氏も末廣等も同罪に終つたのだ。

（客）さう致しますと、つまり、――

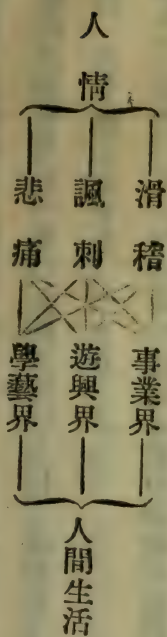
（主人）いや、こんなことでは何も君の要求を直接に攻撃してゐるのではないから、君は心配するにやア及ばない。君に答辯の責任はないから、ね。たゞ渠等が凡才にして君の所謂天才を眞似したのが悪かつたと云ふことさへ分つて呉れたら、それでいゝ。

（客）では、矢ツ張り、天才が出さへすれば、政治小説も立ちどころに成り立つと云ふ御意見でしようか？

（主人）新聞記者は却つて時代若しくは時勢と云ふことが分つてゐないやうだ、ね。今日わざ〳〵政治小説と名乘つて小説を書く必要などが小説家と云ふ小説家にありやうがないではないか？　十九世紀の英國に於いても、前に云つた通り特別に政治小説が書かれたのは、その作者に取つては氣まぐれであり、讀者から云へば小説として興味以外の興味が主であつた。若し氣まぐれにかゝる興味を目的として小説を書く者が今日に於いてあらば、恐らく、政治小説には行かないで、今のヱルス等の如く科學的小説に行つてしまうだらう。今日の青年等は、わが國でも、政治熱がさめて、科學思想に向いてゐるのだ。

（客）それにしても、科學的に政治小說が書けないことはないでしよう?

（主人）そこでだ、今一つ君に注意して置くことがある。昔の英國流の政治小說を書いた心持ちが今日の氣まぐれ者には科學小說に向ふやうになつたと同時に、わが國では、もう、サカレイやヂケンス流の人情小說も時代後れになつた。藝術の上に人間の情の現はれを滑稽でなければ諷刺にしてしまう傾向は、まだ〳〵根本的ではなかつた。この發見には、佛蘭西流の『藝術の爲めの藝術』的小說と露西亞流の實人生的小說とがあづかつて力を添へた。この兩種類の行きかたは專門的にはちやんとして區別はあるが、今こゝで一々說明することはやめて置くことにして、兎に角人情を笑ひや冷かしにとどめて置かないで、それらの依つて來たるところにまで追窮して行く科學的心理的な點は、兩方の種類とも同じである。そしてその根本內容に對する作者の態度がずツと嚴肅になつた。自然主義の洗禮を受けた諸作家は皆それだ。で、今、さきの表を利用しながら第二の新らしい表を示して見ると、

第一段	第二段	第三段	第四段
人情	滑稽	事業界	人間生活
	諷刺	遊興界	
	悲痛	學藝界	

乃ち、第一段は小說の主目、第二段はその姿、第三段はその題材、そして第四段はその根本義であります。

（客）　さうしますと、政治小說としてもそこに人情、乃ち、人間生活を嚴肅に描寫してありさへすれば、第三段の事業界に這入つてしまひます、な。

（主人）　その上、花柳界のことや貧乏畫家のことなどを題材にした小說と共に、君の豫想とは反對で共價値には違ひはありません。嚴肅な觀察力ある作家なら、貧乏人や藝者狂ひのものを題材にして、政治界を題材にしたと同樣の人間性が立派に現はれるものだから。（大正七年）

如何に小說を讀むべきか

小說をどう云ふ風に讀んだらいゝものかと云ふ問題は、六ケしく答へれば、直ちにどう批評したらいゝかと云ふことになる。嚴密な讀者は乃ち批評家でなければならぬわけだ。そして苟くも批評をしやうとする程の者は、自分の狹い趣味や偏見で物を云つてはならぬ。あの作はあまり人間の暗黑面を描いてあるからいやだ、これはまた光明的なところがいゝ、などゝ云ふのは、丁度果物は酸ツぱいからいやだ、ようかんはあまいからいゝと云ふやうなことで、――物の全體を見ての批判若しくは感想ぢやアない。狹い趣味――平たく云へば、單に好き嫌ひ――は兎角さう云ふ風に終はつてる淺薄で感傷的な讀者はそれである。（注意すべき事の一。）

それから、小說の讀者若しくは評者の好き嫌ひが、少しでもまたは多大に、研究的な考察と自覺と

を經た上のものである場合は、その標準が趣味と云ふよりも寧ろ主義と云はるべきである。そこでは理想主義を以つて現實主義の作を呪ひ、現實主義を以つて理想主義のを罵しることも出來る。但し、兩方の主義が價値に於いて同等の時にだ。乃ち、物質的自然主義に對して新理想主義若しくは人道主義はいゝ取り組みだが、物質的に偏せぬ内觀的自然主義、内觀的現實主義から見れば、新理想主義や人道主義はそれ以下の價値しか有し得ないこともある。（注意すべきことの二。）

以上の二ケ條をだけでもよく諸君自身に就いて反省して見たら、諸君が小說を讀み、小說を判斷する態度に餘ほどいゝ影響を與へることを僕は疑はない。特別に批評眼を備へてゐない創作家が他人の創作を批評する言葉の如きは、大低の場合、當てにならぬものである。多くは平俗な讀者と同じやうな偏見的好き嫌ひばかり云つてる。それから、目下の批評界にも――殊に新聞雜誌の月評にも眞の批評を知らぬものが多い。

創作家が批評家を――下手でも何でも――嫌忌するのは、丁度讀者を避けるやうなもので、僕等の取らないところだ。が、批評家たり創作家たる僕が後者としての經驗で云へば、一つ極最近に、『藝術の愛好者は悲しい悲しみをも樂しく悲しみ、貧しい生活をも豊かに暮さうとするやうに、野卑は野卑でもその野卑を野卑でなく心持よく感じたい』と云ふ反對を受けた。これは深刻な現實主義、寫實主義に對する淺薄な理想の『蟷螂の斧』である。また、これも最近の月評にだが、僕の一作に『斯くも細かに描寫し得た觀察の緻かさと精緻』がありながら、『おそろしく幼稚な粗雜な技巧』がまじつてるとあ

つた。が、技巧が粗雜なら初めから鞁かさや精緻のあらう筈がないのだ。評者は淺薄にも技巧を內容的に見ず、ほんの筆ツさきの形式と見倣したのだ。

形式的な技巧觀は初學者等に最もありがちで、これも注意すべきことに數へてもいいが、大した問題ではない。然し段ちがひの立ち場にあるものを、あべこべに、安ツぽく見て得意がる一例の如きは、僕が云ふ注意すべきことの第二に該當してゐるのだ。

今日では、通俗な新聞小說と高級藝術家の作とを同じ水平線に置いて讀み味はうとするやうな分らず屋はゐなくなつた。が、不人情が材料になつても人情が味はへ、弱者の生活を書いてあつても强者に通じてゐることを理解するものはまだ多くない。（大正七年）

流行と不易

一般に無反省に通用してゐる意味から云ふと、流行と云ふ言葉は臨時の、一時的なはやりを云ふのである。たとへば、流行かぜとか、新がらの流行とか、成り金ぶりが流行するとか。そしてこの一時的狀態に違つてると、その人はちよつと時代に後れた者に見える。

どんなことに於てでも、流行が時代に先んずることがあるのは事實だ。が、無理に時代に先んじようとしたのは流行でない。たとへば、かのオスカワイルドは、第十九世紀末葉に於ける、英國の有名

な伊達者であつたが、自分が高尙な藝術家であることを示す爲めに、いつも日まはりの花を手に持つて步いた。この氣取つた風は、いろんな形で一部の靑年に摸倣されたけれども、流行にまでは至らなかつた。そしてただその人の逸事的な奇拔に終つた。

で、奇拔とは新らしいけれども流行の伴はないことを云ふのであらう。一たびそれが伴つて來れば、もう奇拔ではなくなつて、新らしい行きかたの代表である。そしてそれが妥當性を認められるやうになればなるほど、一般の流行になる。たとへば、洋服に高いカラは、その初めにわが國では一番きざないやなことに見えた爲めに、ハイカラなど云ふ卑しんだ語が生じたほどであつたが、段々と多くの人人がこれを着けるやうになつてからは、一旦は、その方が洋服を着る以上皆な氣持ちもよく、趣味にも叶ふことになつた。そしてハイカラと云ふ冷笑語その物も意味が違つて來て、特別にきざな人物に向けて用ゐられる以外では、趣味を重んずる人、敎養のある人のことになつて、つまり、いゝ意味に轉じてしまつた。そしてこれに反對するのは却つて全く時代を知らぬ人か、ちぢむさい老人かであつた。斯くてハイカラであるとないとは、新人舊人のけぢめを示したのであつた。

流行の力は一般が着物のがらや社會生活の表面だけで考へてるやうには決して馬鹿にできないものである。この力が個人や社會の生活に深く喰ひ込めば、時には事物の大革命になつてしまふこともある。乃ち、その生活を一變することがあるけれども、そこまでに至るには、相當の理由若しくは根據がなくてはならぬ。ところで、相當の理由と云ふのでは、まだ外的に與へられないこともない。ハイ

カラがなぜ惡いか、外國人でもやつてるではないか？　そして洋服は外國のを眞似たものだぞ！　と、これでは困るのである。如何に外國から來たものでも、用ゐるのは日本人である以上、日本人に釣り合はなかつたり、日本人の趣味に合はなかつたりするのでは、理由として薄弱なものだ。そこにもッと深い、乃ち、內的な根據があるを必要とする。

僕は前々項に妥當性と云ふ語を用ゐたが、これが內的根據を簡單に云ひ現はしたものとも云へは云へる。外部からの變化を受けるに當つて、その人またはその社會の習慣、風俗、趣味、若しくは敎養があまりに違つてれば、よしんばこれを受けても、決してそれが續かない。奇拔ではまだ不自然であり、そして不自然は必らずその場限りで終る。あれだけ流行した高いカラが、やがては用ゐるものが少くなつてしまつて、今日のハイカラ黨は必ずしもそれを用ゐるに限らない。ただそれを用ゐた時に得たところのいい意味の態度、若しくは內容をだけ續けてる。外國的な素養から這入つた今のわが國の文章家どものうちには、わが國語の語法で十分に云ひ得ることをもそれで云はないで、たとへば、『ことほど左樣に』とか、『より良き』とか云ふ不自然な流行的語法をわざ〳〵使つて、これを得意がつてるのもある。が、僕等は今ではこれに贊成しない。わが松尾芭蕉が三四百年も昔、俳諧に於いてだが、流行を追はず不易に着けと敎へたのも、流行は移り易く、また不自然がちだと見たからであらう。

ところが、ここに別に考へて見ねばならぬことがある。それは流行の力だッて、馬鹿にできないことをだ。芭蕉翁の意味はどうであらうとここには再びこれを追窮しないが、僕等が流行をいけないと

して不易にばかり着いてるとしたら、その狀態はどうだらう？　一般の所謂進步は勿論なく、不易その物が固定と同じ物になるのに滿足してゐなければならぬわけでなからうか？『より良き』を今日でもわが國の語法により良く落ち付けて用ゐることができる文章家がゐないとは云へない。また段々用ゐられるに從つて落ち付いてしまふ場合がないとも限らない。兎に角、流行を否定する理由は一には不自然と云ふこと、二には移り易いと云ふことである。が、何を標準としてさう云はれるか？

第一に不自然とは、一般の語法なり生活なりに調和若しくは融合し難いと云ふことであらう。けれども、一般の語法や生活は永久に置き据ゑられてるものではない。外部から動かされて行くこともあらうし、內部から動き出ることもある。いづれにしても、兎に角、亡國的狀態に置かれてないところの社會は必らず或方向へ變動發展しつゝある。衣食住からしても、思想や政治からしてもそれはかまはない、その最も目に立つ間を流行の狀態と云へる。そしてこれが段々目に立たなくなるには、乃ち流行でなくなるには、――外的なそれでは、殊に――二つの道がある。一はあまりに淺薄若しくは不自然の爲めに中絕してしまふこと、他の一は時を得た故または自然である故を以つて內化してしまふことだ。この外からの內化すべき變化または流行は、初めから內部的なのと共に、僕等もこれを採用しないではゐられない。そしてさうしないと、徒らに時代後れになるわけだ。

次ぎに不易のことであるが、これは空想的に云へば全く流行に動かされない永久不變のことだらう。理想家――この手合ひはすべて淺薄、無反省だ――には最も結構な據りどころだらう。が、そん

な物若しくは力がありとすれば、理論上から云つても、固定的であり、死物である。そんな物は社會にしろ、國家にしろ、人間界では――そして人間界のこと以外は空論であるから――僕等はこれを問題にする必要も義務もない。して見ると、社會心理から云つて有用で而も實際的な不易とは、流行の妥當なのを云ふのである。少くとも、その妥當と認められた流行を不易と云ふのだ。云ひ換へれば、流行の内化したのが不易である。だから、如何に不易と見えたことも、有用な妥當性を失すると、流行と同じやうに移り變つてしまふ。時代の變遷と云ふことを根本的に考へるには、つまり、斯う云ふ風に觀察しなければならぬと思ふ。

そこでちよツと問題を最近にいろんな人々が紹介したり、反駁したりした傳統主義のことに轉じて見たいのだが――僕等の標榜するところの日本主義も、わが日本のそれであるが、傳統主義者等のうちには、この主義を固定的に不易な物と見てゐるものもないことはない。またこれに反對するものも、多くは傳統と云ふことを固定の物としてゐる。僕等から見ると、この兩方とも間違つてる。人生の實際には固定の物はないのだから、傳統の意味若しくは内容も時代と共に動き移りつつ新らしくなつてるのである。（大正七年一月）

生田長江氏への答へ

生田長江氏は僕の一元描寫論を批評する爲めに小說に『二つの種類』があることを說いて吳れた。第一は作者の直接經驗の記述で、第二は空想で書いた作品だと云ふ。この粗雜な分類の爲めに、渠が僕の議論の本意をまと外れにしてしまつた嫌ひがあるから、先づ、この分類には、今一つの種類を加へて見なければならぬことを說きたい。

小說の作者が渠の云ふ通り作者自身の直接經驗を書くこともあるのは事實だらう。けれども、大抵の場合に、この直接經驗とは決して作の筋や事件通りの經驗とは解しられてゐないのである。乃ち、こんな事件にこんな性格所有者が臨めば、自分なら斯う行き斯う感ずると云ふところをさして云つてるのだ。これを體驗とも云ふが、作の表面ではなくその內容に對する作者の體驗である。ところで、日記や、自傳や懺悔錄に類する告白小說には一般にこれだけの內容や餘裕が這入つてゐない。して見ると、生田氏の第一分類には作者の內的體驗を示めす作品は數へ入れられてゐないのだ。前田晁氏もこの點が分らなかつたかして、（文章世界に於いて）僕のこの種の作『空氣銃』を中村星湖氏と同樣告白小說と見てまと外れの議論を吹つかけてゐた。それには特別に答へるまでもないと思ふ。

が、內的體驗小說に於いては、多くは表面の事件や人物は空想で持つて來るのである。作者はその

表面までも體驗してゐるには及ばない。然し斯う云ふ種類の作が生田氏の第二分類に這入れないことも確かであらう。空想によつて作を構成する餘地のあるところは似てゐようが、渠が『色々の異つた場合に直接及び間接に經驗した』と云ふその經驗が空想に馳せて、內的體驗を意味してゐないからである。なぜかと云ふに、この第二類を說明した三條件が作者、乃ち、矢ッ張り人間の體驗できぬ範圍までを平氣で含んでゐる。

第一の條件には、人間若しくは動物の一人、一匹さへも『描き出されない小說』があると云ふのだ。例を出してあつたら、たとへ反駁の爲めにもなるが、惜しいことには例がないから、僕らにはどんな作であるかを想像もできない。僕らは如何に虛構の作でも何かの動物を一つでも出して、そこに作者は體驗の心理若しくは感情を寫せるのでなければ、どんな種類の小說も書けないと思つてゐる。それから、神のやうに一視同仁の態度をもここに許してあつて、これは渠も『完全に取れるか取れないかは別問題』だとしたが、僕らはたとへ不完全にも取れる態度でないとする。この點はここで說明するまでもなく、僕の人生觀まで例にして描寫論で力說してある。蓋し神だッても、惡魔の心理は神自身の色目がねを通してでなければ分らないのだ。まして人間が他の人間を二人なり五人なり平等に視ると云ふことは、ただ概念上のことであつて、體驗ではない。從つて、體驗小說の空想は概念上の虛構と同一の種類にすることはできぬ。

第二の條件で渠が僕の云ふ仲介者(主人公と云ふところに或語弊が伴ふから避けるが)を多元であつ

てもいいとしたが、これは前項で分る通り、概念小說にとどまることである。一步も二步も進んだ體驗小說では、作の對象たる多くの人物の一つを通して、その一つの色で染まつた世界しか實際には書けないのである。

第三條件では、渠はまた仲介者がただ一人である場合にも、これを第一人稱的に取り扱ふべきに限らず、第三人稱的にするのも自由だと云つた。ここでの人稱的區別は、尤も、『私』と『彼』との事ではない。なぜなれば、僕は一元的仲介者をも第三人稱で取り扱つてる。さればとて、生田氏のが一元的と多元的との意味なら、矛盾である。蓋し仲介者なる物はいつも一元的だ。で、假りに仲介者を主人公の語に換へて見ると、仲介者はいつも主人公だが、主人公が必らずしも作中で一番活躍しなければならぬわけではない。乃ち、主人公たる仲介者以外の人物が如何に活躍してもそれが仲介者の色で見た世界のものでありさへすればいいのだ。そしてこの狀態は矢張り體驗的人生であつて、概念に稀薄した虛構ではない。生田氏が主人公はただ一つでもその見た範圍内に描寫の筆を限らねばならぬわけでないと云つたのは、仲介者の意味に於ける主人公と一般に云ふ主人公とを區別できなかつた結果だ。

そこで論者生田氏の分類以外に今一つ別種の小說を加へなければならぬことが分らうと思ふ。空想ぬきのしみツたれた告白小說でもなく、また、虛構若しくは空想が這入つても、概念にとどまらないで實際の人生化した種類である。かう云へば、既に論じて來た内的體驗小說であることが知れよう。虛構同仁小說（假に斯う名づけて置かう）がどうしても概念に終はることは、既にその與へられた三條

件の打破に於いて示めした通りだ。この種類は僕の描寫論に自覺を得れば消えてしまうより仕かたがない。が、自覺ある告白小說なら、僕の新らしい分類に屬する體驗小說の部に入ることができようと思ふ。たゞこれまでに現はれた內外の告白小說には、それだけの資格あるものがあまりないやうだ。（これには誰れか例を出して吳れたら、それに就いて考へて見たい。）

ここに體驗小說と僕が分類して來たのは、云ひ換へれば僕の云ふ內部的寫實主義の作で、どうしても一元描寫にならなければならぬことになるのだ。蓋し一元的描寫以外の小說は概念に停止してゐるのだから、どうしても一段低級の種類に屬する。生田氏はその後、多分渠の駁論を書いた後だらう。僕に會つた時、なぜ多元描寫は概念に落ち、またなぜ概念に落ちるのが低級か、この點が僕の議論で明らかに表視されてないと云つた。けれども、僕の描寫論には隨分この二點を論じてあるが、渠はよく合點しなかつたから、今回のやうな行き違ひの駁論を書いたのだ。

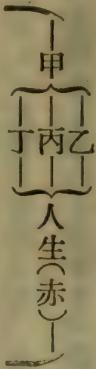
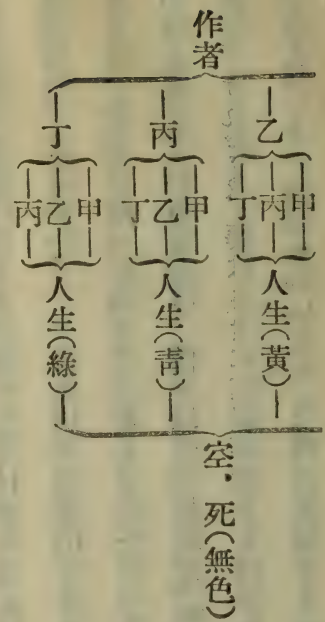
渠は僕が『人間の世界なり人生なりは……渠等がてんでに自分一個の主觀に映じて持つてゐるそれ』だと云つたのを『至極幼稚な……認識論』と駁した。けれども、認識論などは無制限論理で概念を堅めて行くほど幼稚を脫したやうに見えるのである。アカデメヤ派の傾向ある生田氏には無制限論理を借りても幼稚超脫の僞似狀態の方がいいのだらうが、僕らは內的實生活の藝術家として又實人生的思索家として、いつまでも概念を無制限におもちやにしてゐる事は好まない。こて〳〵した概念のかなあみに囚はれない人生が、まだ僕らには殘つてゐる。これを神道で所謂『かんながら』、親鸞の所謂『ある

べきやう』で認識するのは、論理が手傳ふとしても有制限、實際的で、幼稚若しくは原始的だらうが端的な論理である。これによると、人生は一認識者の色めがねを通して見た人生にしかその者の存在はない。そして他の者に見えたのはまた別な人生で――たとへば甲を赤、乙を白とすれば、この赤白の相關係するところを兩方から離れた立ち場に在つて公平に見るものは、神か概念者の外にないのである。そして概念者は公平であるだけ物その物の表面や輪廓しか認め得ない。乃ち、物の内部に在ることができない。これに反して、物その物の當事者は偏頗と執着心とを以つて水が物に滲み込むやうにその内生活を吸收する。その結果はどうかと云ふに、赤なる甲は白なる乙を全體として認め得ないで、自分の赤を邪魔する若しくは薄くするものが現はれたと見る。そこに甲の生活の眞相が出るのだ。乙から云へば、そのまた反對である。

實論理乃ち實人生の眞相はさうであるなら、これを藝術問題に持つて來ると、『作者は自分が自分を分つてるやうには他人を分つてゐないものだ。』生田氏はこの議論を『直ぐ覆されてしまふやうな脆弱』と云つたが、以上の説明を分つた上で、覆せるなら今一度實際にやつて見たらどうだ？　僕はまたこの作者の有制限な人生觀的態度を作中の人物に持つて行つて、仲介者の必要を論じたのだ。新潮に於ける僕の描寫論には、今一つの別な表第四圖を押し入れる必要があつた。それをここに左圖の通り――

甲｛乙・丙・丁｝人生（赤）

作者
- 乙 ｛甲・丙・丁｝ 人生（黄）
- 丙 ｛甲・乙・丁｝ 人生（青）
- 丁 ｛甲・乙・丙｝ 人生（綠）

空、死（無色）

既に繰り返した通り、甲乙丙丁の關係を世界とすれば、――そして作者は人生全體を彙に於いて一ときには書けないから、その部分乃ちたとへばこの四名だけの世界に於いて（表象主義的に）全體を表現するのだが、――この四名は皆同じ世界に在つても人生を別々に認識してゐる。甲の人生は乙のではなく、乙のはまた丙のと違つてる。この事は作者も自分の體驗に於いて初めから承知してゐるのである。自分の目がねを通してでなければ自分の大周圍が內部的に分らない如く、この四名の小世界に於いても、自分は實際に住んでない以上、四名のうちのどれかを通じてでなければ、乃ち、仲介者としなければ、この世界の內部は分らない。そこで甲によると、赤の人生が出る。乙に從へば、黄の人生が現はれる。また丙、丁について行けば青若しくは綠の人生となる。そしてこれがその一々に於いて『あるべきやう』または『ありのまま』を內部的に表現した具體表象である。若しこの一々を混同して、人生には赤もあり綠もあるから、それを作者は平等に表現せねばいけないとなると、第一に高級藝術

に必要な具體表象を外れるので、そこに作者としての特殊的態度がなくなつて、一般的に說明に向ふ。その極點は無色である。そして無色は人生ではない。

この場合、人生は特殊的に色が出るので活きて來るのだのに、その色を無にしたのは生でなく、死であり空である。作者その物だつて結局は空に歸するのだが、空は描寫以外の物で、ただ概念に於いて取り扱へるだけだ。それから、甲その他のうちのどれかが空を特色とするものだとすれば、たとへば虛無主義者のやうなものであらば、それは矢ツ張りその人の生に於ける一種の色であるから、そのままこの表に於ける赤や黃の代りなる色として描寫できる。兎に角、人生に對しておほ袈裟に、大乘的に悟つてしまつた作者は、高尙のやうだが、實際の人生は描寫できないで、概念上のそれを列べるより仕かたがなくなるのである。殊更らに大乘の名を用ゐたければ、特殊的大乘とでも云へばいい。色即是空ではいけない。表中の空に馳せないで、色ある生を攫むのである。

ところで、作者は飽くまで無色で行けると云ふのが、若しくは色の公平な混合で行けると云ふのが、多元描寫論ではないか？　この態度が概念的であり、この概念的が藝術として一段下だつたものであることは、前項で述べた通りだ。そして今一つ、生田氏の行き違ひがある。渠は僕が『本當の藝術の全領域と宣してゐるものは、僕を以つて見れば、本當の藝術の全領域に對する一部分たるに過ぎない』とある。けれども、渠はさきに高級藝術をも認めながら、通俗的傾向の藝術をも本當の藝術の一部に數へた人だ　その意味に於いてなら、僕の主張する一元的描寫の藝術を藝術の一部とするのは何でもな

いことであらう。云ひ換へれば、本當の藝術にも低級のと高級のとがある。そして一元的描寫のは最高級であるに過ぎない。

尤も、渠の所謂通俗藝術には作者直接の道德的評價を要求してあつたと思ふ。この同じ意味からであらうが、渠は僕の『空氣銃』を批評して、耕次の取つた態度を作者に固定した態度と見て、『是認』しないと云つたやうだ。ここにも渠の思ひ違ひがある。僕はこの作では耕次を仲介者に取つたから、耕次にその態度を是認させたのだが、若し別にその相手なる澄子を仲介にしたら、同じ材料の上にも反對の態度をかの女に是認させたであらう。僕としてはどツちにせよこんな場合にこんな人間が現はれると云ふ親しみにもツと根本的な道念若しくは人道を見せてあるのだ。これを見のがして、渠は矢ツ張り概念に固着した標榜を求めようとした。デリカシイのある人間を描寫するときにはデリカシイも出さうが、人間性をさう云ふ方に限つて與れろと云ふものは、批評家としては渠は非具體の理想小說(これをも僕は低級とする)を要求してゐるのである。

要するに、渠は多元描寫を描寫と云ふよりも概念上の說明であるとは知らなかつた。次ぎに、說明では根本から具體化の要素にならぬことを知らなかつた。次ぎに、また、無制限論理で實人生の認識が論じられると思ひ誤つてた。渠はまた小說にも表象主義があるを知らなかつた。その上に、渠はアカデメヤ派と一般理想主義者との弊を脫してゐない。今一つ加へれば、渠は散文家であつて詩人ではない。かかることの爲めに渠は、折角半ばは僕の議論を理解してゐながら、他の半面に於いてへまな

喰ひ違ひを見せたのである。

最後に、これはついでに云ふのだが、『奥なる八疊』とか、『池が廣がつてる』とか、『梅花が咲き散る』とか云ふのを『スタイルの不純や不熟』とは何のことだ？　若し人が云はないことだとすれは、僕獨得の、乃ち、僕には純粹の、文體であらう。生田氏が使はないからと云つて、あながち不熟とは云へない。その上、この位の語法は僕ばかりでなく、他にもあると思ふ。曾て或ところで僕の不純とか不熟とか稱して引ッ張り出した文句に、少しも僕としてはさうではなかつたのがあつた。文法や語法は人が使つて初めて生きるのであるから、生田氏にも似合はぬ野暮は云ふものでなからう。

（大正七年十一月）

對話　細君操縱策

甲　おい、困つたことができたぞ――僕に名ざしで細君操縱策を書けと云つて來た。

乙　べらぼうな、君に妻君操縱策とはおかど違ひだらう――操縱されて來た經驗はあるだらうが――？

甲　さうだ、ね、さう云はれて見ると、僕はさう――人のやうに――女房をうまくあや釣つて來たことはない、ね。

けれども、また、あや釣られてゐたのでもない、ね。

乙　うぬ惚れるなよ。第一、君は二十二才で二十五の女と結婚したぢやアないか?。

甲　あの時ア、僕がませてゐたから、十代の娘ツ子などには興味がなかつた。そのうち一度十七の子が或女學校をでたてに僕の女房になりたいと云つて氣違ひの眞似までしたのをはね付けてしまつた報いで、とう〳〵あんな婆アさんを女とらなければならぬ始末となつたのだ。

乙　と云ふと?

甲　實は、ね、君もあの時のことは立ち會つて知つてる筈だらうが、その前にも僕は約束だけした女があつたが、まだ僕が書生で向ふ十年は結婚しないと出たのに失望して、他の男を拵らへてしまつた。その時の悲觀が僕をして非結婚、獨身主義にまでさせてゐたところへだ、突然、あの十七の女が現はれた。斷わつてしまつたものゝ、この時はもう僕も自活してゐたし、おれに惚れる女もあるかと思へば、少し自重し初めて、寂しい物ごころが附いたのだ。

乙　物ごころはその前から附いてたらう、さ。

甲　無論、第二若しくは第三の物ごころだが、ね、當時の厭世觀が樂天觀に初めて變はつて來たのさ。そして俄かに別なのを物色して、先づ僕の熱心が向いたのは今の君の細君に、さ。これも僕よりは年うへと見てあまへ込んで行つたのだが、それを君に取られてから話し合つて見たら、お互ひに三人とも同年であつた。

乙　まア、そんなことはよせよ。

甲　僕はずツと子供の時にも友人と女を取り合ひした經驗があるよ。別に關係してしまつたわけでもなければ、またわざと爭つたわけでもなかつたが、これも友人の方へ取られかけてたのを、女が丁度よそへ行くことになつたので互ひにそのまゝに終つた。かの女の亭主は今最高官吏の一名として時めいてるが――。

乙　貧乏文士のかゝアにならなくツて仕合せ、さ。

甲　貧乏と云やア、僕が穩田の奧に夫婦と生れたての子供一名とで活した時は、破れ障子の穴を張りつくろつたあとで見ると、そこだけが黑くなつてる。どうしたわけかと考へて見ると、のりが芋がゆであつたのだ。自分自身でやつたことだが、そんなことまでが癪にさわつてよく女房をなぐりのめしたツけ。

乙　その癖、なか〳〵御執心であつたのだが、な。

甲　無論、もらふとなれば、ね、その當座だけは。實は、僕が目をつけたのは君に取られ、君等は僕が別に結婚するまでは二人も結婚しないなどゝ密約したと聽き込んだから、半ば燒けの爲め、半ばは君等の爲めに、僕も相手をきめた。が、年うへのしかその時見つからなかつた。

乙　交際が狹かつたからと云ふのだらうが――隨分君は第一の細君には可愛がられてゐたぞ。

甲　そりやア、がられたとも云へるし、がらせたとも云へる、ね。あの時は耶蘇敎の影響がまだ僕

に消えなかつたので、何でも一夫一婦主義でなければならぬと云ふことを最も氣眞面目に追行したので、それだけ僕は氣六かしかつた。そして僕がやがて一大文學者になるのだと云ふ野心を少しでも踏み付けにされかけると、それを愛があるなしの問題にまで持つて行つた。けれども、その他のことには僕は放任主義であつた。家庭内のことなどは昔からすべて女房にまかせツ切りであつた。

乙　だから、あとになつて細君が金がない〳〵と云ひながら、そのへそくりを銀行にためてたやうなことができたの、さ。

甲　あいつはその罰で銀行と共に預け金を倒されてしまつたのだが、年うへの女に對して放任主義もよくなかつたことがその外にもあるよ。或時、穩田へ妻の舊學友が尋ねて來て、何でもその叔父と一緒に米國へ行つて來たのだが、いよ〳〵幻燈興行をやり出すとか云つてゐたツけ（この時はまだ活動寫眞はなかつた。）この時、妻は僕に子を抱きながら客の菓子を買つて來て吳れろと云つた。僕はそれを承知して六七丁もさきへ買ひに行つたが、若しかの女が浮氣ものでゞもあつたら、僕の留守に何をしたか分らなかつた。僕は客の歸つたあとで妻に人を馬鹿にしたと怒りつけた。

乙　ぼツちやんで、まだあまかつたのだ、な。

甲　然しそんなことは二度とさせなかつたよ。あの、この數年來社會的にも有名になつてる或る同居的夫婦のことが、そのずツと年したの男はずツと年うへの女が夜遲くでも歸つて來ると泣いて訴へたものだ。それが近頃では、もう、男の方から女に少し若々しい風をしろと命令するやうにえらくな

つた。

乙　もう、さう成人したか、ね？

甲　成人とは餘り可哀さうだが――まして、もツとませてゐたおれのことだから――。

乙　その代り、直ぐ逃げ初めたぢやアないか？

甲　いや、それにやア長い順序があつた。妻を妻として自覺させるつもりで、藝者狂ひもしたし、妾も置いて見た。が、男は年の進むと共に思ふ仕事も進むに從つて――殊に――再び精神が若返つて行くものだが、女は――少くともこれまでの舊式な女は――三十五六からは、年不相應に老ひ込むと、若くなれと敎へても、もう、うはツらだけのことで、とても精神は取り返しがつかない。子供さへ育てたり抱いたりしてゐさへすりやア、それで女房の役目はすんでるかのやうに取り澄ます。亭主を持てばその心をいつも引きつけるやうに若々しさを注意してゐなければならぬ。それが出來なかつたから、僕の妻などはとう〳〵最後に僕の心から排斥されてしまつたが、矢ツ張り、もとの耶蘇敎の潔癖が僕の感情のどこかに殘つてて、一種の一夫一婦主義があたまを出すので、甲の女でなければきツぱりと乙のにならなければ承知ができなかつた。

乙　それで君は第二のから第三のにも公けにたましひを轉居したわけだらうが――潔癖と云へば單に消極的な潔癖に過ぎまい。だから、操縱と云ふよりも細君の壓迫から逃げたのだと僕は云ふんだ。

甲　逃げたのぢやアない、見限つたのだ。

乙　考へても見ろよ、第一のには君の親ゆづりのあの家を明け渡し、第二のからは君の好きな女同様に愛してゐた藏書と不斷着一組、外出着一組ぐらゐとを渡されて、のこ〳〵と別居を命ぜられ、折角溜めた貯金がはりの勸業債券や、廿折つてふやした蜜蜂の數群や、男外套や男羽織まで剝ぎ取られてしまつたが、その上にもいよ〳〵正式離婚となると、また、訴訟上向ふの弱みを十分發見したにも拘らず五百圓も手切れ金を出さねばならぬやうなへまに落ちた。そして藏書の半分以上はそれが爲めに賣り飛ばされたぢやアないか？

甲　そりやア、子供がついて行く爲めに多少は讓步してやらなけりやア――。

乙　子供だツて、第一の細君のは三名ともみんな段々と君の手もとへ歸つて來たぢやアないか？第二の細君の子だツて、いつ歸されるか知れやアしない。

甲　無論、子どもにさう云ふ意志が出て來て、父のもとにゐたいとなれば喜んで引き受けてやる、さ。けれども、夫婦の愛が一致しなくなつた仲を子供の故を以つて無理につないで置かせようとする俗見はよくない。『弱いもの』だから、子供を愛のなくなつた家庭に置くのがよくないのだ。命令二途に出づるやうでは子供もどツちへ就いていいか迷つてしまう。別れてからも子供の行き來は子供の爲めにはならぬ。獨自の智慧が出るまでは、どツちか一方へ就けて置かねばならぬ。

乙　それで君は次女が十六才で死んだ時にも見舞ひに行かなかつたのか？

甲　それにはあの婆アさんの常識はづれの愚痴を聽きたくなかつたのも一つの原因であつたが、あ

の時にも僕は獨りで自分に革命的悲痛を感じてゐたよ、とてもこの感じは俗物にはできない藝當だと。

乙　して見れば、まア、愛がなくなれば兎に角金錢づくで別れろと云ふのだ、な。

甲　金錢づく以上のことででもあらばなほ更ら結構だらうが――。

乙　けれども、悲痛を感じたり、金錢づくの義務や責任に終はつたりしないやうにできなかつたものか、なア？

甲　戀愛を中心の結婚ではさうは行かないよ。愛と云ふものは、かの單純な理想家平塚雷鳥の云つたやうな、その第一步に間違ひがなければ一生變化しないと云ふやうな、そんな固定的なものではないから、ね。あまいのがからくなり、からいのが澁くなり、段々とその結婚生活が昔の戀の出しかすや貝がらに變じてしまう。その頃に丁度亭主もやどかりで滿足するほど老い込んで來てゐれば無事なのだが――渠が活動家であればあるほど――ますく氣が若返つて行くから仕やうがない。だから、僕一個の經驗で云つても、女房が變る度にそれの年が若くなつてる。

乙　第三のがまた老い込んだ時にやア、もう、君から義務として與へるものもないほど君も素寒貧ではないか？

甲　止むを得なけりやア、僕も押川則吉のやうに首を縊つて、著書の版權をでもすべて讓與する、さ――おれが死にやアおれの遺書も多少の價段は出ようよ。僕は君も知つてる通り、いやとなつた女

に愛を强いたり强いられたりするのが一番つらい――その代り、物質上で埋め合せがつく範圍では、これまでにも殆ど財產の全部を渡して來て、僕自身はまた新たにはだか一貫でやり直し、さ。

乙　無論、そこがなければ君と云ふものは全く臺なしのものだ――が、第二のやつには君も大分手こずつた、な。

甲　うん、あいつは少し問題が違ふ。僕は不幸にしてまだ處女に接したことがない。最初のは初戀の男が死んだあとのだし、最後のは一旦かたづいたさきを別れて來たのだし。ところで、眞ン中のは處女を標榜しながらその素性に於いて頗る不審が多かつた。それを而も僕は知らないふりをして、そして本人にも、もとの不純を忘れさせる爲め、文學に道引いたり、婦人の新運動に携はらせたりしたが、そんな苦心はすべて無駄であつた。少し名が出て來たかと思ふと、生意氣に調子づいて、おれを踏みつけにかゝつた。

乙　そこが君のへたなところ、さ。

甲　けれども、うまく操縱するだけの價値がなかつたのだ。僕はその前から見切りをつけてゐたんだから。

乙　それがいけないのだよ。かの女の心を外に向けないで、家庭內に引きつけて置けばよかつたんだ。

甲　でも、こちらに愛がなくなつて向ふを引きつけて置く氣になれるかい、案外平凡な女であつた

から？

乙　それもさうだが――。

甲　だから、僕は成るべく續くだけいろ女に對する心持ちになつて、たとへば、誰れかゞ關係しつつ育てた女優が獨り立ちを爲し得るやうになれば勝手にさせてやるやうに、文學なり何なりに獨立ができれば、かの女を解放してやらうとも思つてゐた。この至極あツさりした僕の考へをもかの女は汲み取ることができなかつたほど愚鈍であつた。何だツて、芝居を見に行つて夢中の時は口をあんぐりあけてるのだもの――それを初めて見た時から僕は興ざめて來たのだ。

乙　さうか、なア、なか〳〵しツかり者に見えてゐたが――。

甲　そのしツかりは婆ばアじみてゐたことに過ぎなかつた。それでも、成るべく例もいろ女的にして置かうと思つたから、僕はかの女と一緒であつた八年間を、他の女に手を出したことがなかつた。

乙　では、今のはどうだい？

甲　今日では、子供が五名も集つてるし、さう浮氣ツぽく僕もしてゐられないから、今のを世話女房と見てかゝつてるよ。けれど、僕は決して一夫一婦主義を人にも自分にも強いる者ではない。場合によれば、他にも女を持たないとは限らないが、その時にやア女房や友人にこツそりでなく公然と云つて聽かせるのだ、ね。

乙　成るほど――然し、細君操縦策としては最も下手だが、正直ではあらう。

甲　然し君のやうに不正直にして、あとで細君に嗅ぎつかれるよりやアましだらうッて。

乙　然し君の有名な舊著『〇〇』の中に主人公が東京から送られた金を、先以つて全部、その夢中になつてる田舍藝者に預けて喜ばせて置いて、あとからそれをちび〳〵飲み費用に引き出すことがあるね。あれは細君に對しても面白い行きかたで、女を安心させると同時に、また自分の慾を滿たすと云ふことになつて、二重の効果ある操縱策だよ——女の心理をよくうがつてて、野暮天の君としちやアおほ出來だ。

甲　ぢやア、さう讃められたところで一先づ落ちとしようか？

西洋の女を妻にした男の告白

僕は會社員である、——然し僕が會社員であらうと又總理大臣であらうと、それは僕がこれから語らうとする赤裸な自白と何等の關係が無い。又僕はこの物語から一般の人に反省の材料を與へ暗示的な新問題を提供しやうといふ動機から書くのでも無い。僕の筆は倫理觀念とは全然沒交渉である。

僕の相手は西洋人——本國に居ては數にも入らぬ平凡なものでも東洋の樂園日本（多くの意味で西洋人に對する日本は文字通り蓬萊の島である）へ來ると急に價を百倍も高める西洋人である。西洋人といつても色々あるが、もつと正確に了解されそうで少しも了解されて居らぬ米國の女である。この

女の名前も僕の物語には無くても濟むが、便利の爲め假りにメリーとして置く。

僕の物語の結論をいつて仕舞へば、新聞雜誌の十五六行しか蔽ふに足らない。僕が米國で彼女と結婚して、――嚴格な意味では結婚したので無いが兎に角子を産ました。その子を連れて遙々彼女は日本へ僕を追つて來た。而して表面的からいふと僕は彼女を捨てた。その爲め僕は僕等兩人間の事情の眞實を知らぬ連中（日本位盲目的同情を外國人に寄せて本國人を惡罵する國人は無い）から蔭で非難された、――實際面と向つて僕を攻擊したものは無いが、きつと僕を不德漢とまで思つたであらう。然しこの僕の自白は自分の辯護の爲めに書くので無い、――又辯護としては最早や小十年も後れて居る。更に又その辯護を僕は十年前と同樣に今日必要と思はない。僕がこの文を書く動機は外にある。

…………

僕がメリーと實際に分れたのは最早や十年以上になる、――彼女が表面的に自分の本姓に歸つたのも早や七八年になる。滿三歲にならずに日本へ來た僕等の子供も、僕よりもずつと背が高い位に生長して目下米國中部のある中學校に寄宿して居る。今日の僕は日本人の家內に子供が三人も出來て居る。メリーが產んだ米國の學校へ行つて居る子供に對する養育料の關係で、僕は彼女に年に一度や二度は會つて居る――僕等は理解の上で分れたのだから――少くも僕自身ではそう思つて居る。彼女は僕に對して何等の惡感を持つて居らないと信じて居る――いつも彼女は普通の態度で僕に接して居る。僕がこれまで經驗した範圍で彼女位理解力の勝れた女は無い・――彼女はバザー！大學出身で、大學出の

女にしては不似合な程徹底した理解力の所有者である。僕の今の家内の不理解なことを感ずれば感ずる程彼女の明瞭な理智に向つて僕は尊敬しない譯に行かぬ。然しこのことは去つた女房は戀しいものだといふ世俗な感傷的氣分からいふので無いと思つて貰ひたい、——以前と異つて今日の僕はそう感傷的で無い。僕が彼女と和合することが出來ず、段々離れていつたのも、或は僕が——十年以前の僕が——米國的理智に對する激烈な反抗心に捕はれて居つたからも知れぬ。實際外國から歸朝當時の僕は、感傷的な日本の情調を何んなに甘やかなものと思つたであらう。又何んなに理智的な女を嫌ふべきものと思つたであらう。實にその頃の僕の眼には白粉臭い油ぎつた肉だけの香氣がする女が身振ひする程嬉しく感ぜられたのである。四十代になつた今日の僕ならば當世流行の妥協の美德を振りかざして、何にもメリーを捨てるにも當らず、或は又西洋人を女房に持つたといふ特種な狀態を餌にして社會的地位の昇進を謀らうとする惡黨になつたかも知れぬ、……然しどつこい、僕の三十代はその妥協的で無く又打算的で無かつた。三十代の僕は抒情的であつた。又時には感傷的であつた。又女に對しては何處までも物質的でもあつた。——僕は今日僕に嘗てはそういふ時代があつたことを愉快にも思つて居る。然し時には僕はメリーを憐れな女だと思つて自分の昔取つた態度を責めることもある。要するに僕は抵抗することが出來ない運命——勿論僕は所謂運命論者で無いが——に盲從したのである。その結果として彼女を苦しめ或は泣かしたかも知れぬ。それに對して彼女は寧ろ平然たる態度で亂れた樣子も無く、理智の力で自分を整理した、——その冷やかな態度を僕は憎いとも思つた。彼女

は情の女では無かつた。――が、僕と別居してまだ公然僕と分れて居ない中に、彼女は自分の家に置いてある日本の學生に關係して子を産んで、彼女の賢明な理智はまるでだいなしになつて仕舞つた。然しこの不幸な（彼女自身に對して）事件は決して彼女が情の女であつたから起つたことで無い、――寧ろ彼女が情を解しない女で、たま〳〵劣情の發露する場合にその『適用』を誤つたものと見るべきである。彼女も人間である證據とは見ることが出來るが、彼女をよく知つた僕からいふと情の女だといふ證據にならぬ。理智の女で時々愚にもつかぬ行爲をしてのける例は世間に多い、――彼女もその一例たるに過ぎない。然しこれは他の話でもあり、又僕の物語とは直接そう關係がないから此處迄は餘り書きたくない。又書いて見ても何の益も無い。たゞ僕は女の理智がとまどつて自分の方向を誤つた時位だらしなく氣の毒なものは無いと思ふのである。男でも女でも人間の一生には隨分と色々な事件がある。――然しそれに依つて人間生活の眞實な意味が出て來るのだと思へば、我々は誤つた經驗に對しても感謝こそ持つてをれ、決してそれを呪詛すべき理由は無いと僕は思ふ。僕對メリーの事件にしても（僕自身や彼女自身に對して）其處に澤山の暗示があつて、我々――少くも僕はそれを今日回顧して益々深くなつて行く人間生活を思ふのである。僕もメリーも隨分と高價な支拂をして今日まで生きて來た…………

思つて見るとこのメリーといふ高等教育を受けた女は男から眞實に愛を捧げられた經驗を持たない不幸な女だ。彼女は僕から捨てられた。僕はメリーに二度も三度も『お前は尊敬するが何うしても愛す

ることが出來ない』といつた、――然し女に對して貞操などゝいふ言葉が何の役にたつものか。それを語つた時僕は彼女が僕を了解するであらうと思つたが、彼女は僕に向つてぱつたりと了解の戸を閉ぢて仕舞つて居たであらう。たゞ彼女は無言で運命に服從した。――僕等の關係を深く知らない他人は『あの女は偉い、流石は高等教育を受けた米國の女だけある』といつて、僕の所謂を非常に不品行なものとした。僕からいふと僕が彼女が日本へ着いて以來彼女に拂つた精神上又物質上の犠牲は可なり大なるもので、彼女の希望から自分に引受けた子供に對して僕は今日に至つても依然として相當の扶助料を月々支拂つて居る。彼女が第二に得た子供（彼女が愚な盲目的な行爲から目覺めた時、直に關係した青年を蹴りだして仕舞つて自分に責任を全然背負つて子供をつれてその青年から身を匿した）に對する愛の程度は何んなものかは知らぬが、僕との間に出來た子供へ彼女が捧げて居る愛は非常なもので、實際彼女はあらゆるものをその子供の爲めに犠牲にして居る。僕が仕送る月々の扶助料は巡査一人の月收以上で無いから、子供を米國の學校で教育して居ることに向つて彼女の負擔はなまやさしいもので無い。彼女は今は子供に對する愛だけで生きて居る、――男に對する眞實の戀愛をまるで經驗せずに一足飛びに『子供への愛』といふ境地に入つた不幸な女である。彼女は人生の半分しか味はふことが出來なかつた不幸な女である。

そしてメリーを捨てた僕は果して幸福を得たであらうか。ぱさ〳〵した冷い理智的生活を嫌つて、無智の麗しさと温かさの權化である傳純的な日本の女（今日でこそ僕は算盤はぢいて居る一會社員に

過ぎないが、僕の二十歳から三十歳にかけた時分には僕は詩人を理想として居たものだ）に情調の生活を開拓しやうとしたことに關しては、僕に多くの自信ある返答があるといふことが出來る。然し僕もいつまでも三十代の男で無く、今日四十代、論語に所謂不惑の年齡になつて見ると、全然資格の無い女即ち今日の家内に種々な要求がしたいと思ふ場合もある。又彼女自身も自分の教育が不備であることを明瞭に自覺して漸次に寂しい孤獨的な性質を作りつゝあるやうにも僕に感じられる。僕が十年前以來捧げた彼女に對する愛戀は知らず〳〵に僕等の子供へ〳〵と移つて行きつゝあるのである。このに狀態を見て居る僕の家內――昔と異つて彼女の可憐な無邪氣さが地を拂つて、時には片意地、時は手も附けられぬ程無理解な邪推な性質を自然に築きつゝある――も憂鬱とまで云はないまでも、何となく無意識に人生の寂寞を感ずるやうになつた。又男として僕も彼女に對して時には不滿足の情に驅られ、時には同情心を起さずに寧ろ一種の冷やかな冷笑を感ずることさへある。そして又時には一刀兩斷的所置に出やうかと思ふと、それを急に邪魔する僕の感傷的氣分を意氣地なしとも感じて、僕は自分で自分の個性を疑ふといふ場合さへ無いではない。僕はこれまでの經驗上女に對しては頗る不徹底であつた…………

僕がいつも持つて居ると信ずる同情が官能的な美――多くの意味で僕は物質主義者であると思つて居る――にその根を据ゑて居るので、僕が僕の情緒を誘致しない女に對する態度を見た人は、僕は冷靜な理智の男と思ふかも知れぬ。僕本來の性質は極端から極端へと走る情調の嘆美家たるべきもので

あるが、永年外國に於ける生活から學んだ近代的理智と日本に於ける自分の地位が餘儀なく實行せしめる常識が屢々僕の自由を束縛して、不徹底な行爲(殊に女に對して)を知らず〳〵に是認せしめるに至つた。その點からいふと僕は隨分た臆病者であつた。――僕は今日の家内に對しても又先のメリーに對しても不徹底な夫であつた。然し僕は此處では僕と僕の今日の家内との間に於ける事柄に渡りたくない……此文の目的以外に屬して居る。

僕一生の愛戀史は失敗の物語である。メリーも其點で僕以上の失敗者である。僕とメリーとの關係は曳いて雜婚の可否といふ普通な一般的な問題ともなつて來るといふことが出來る。

小泉八雲は日本の裃袴を着けた極めて糞眞面目な倫理的方面だけに彼の文學的注意――彼の注意の多くの場合は半分だけの眞理にのみ觸れて居るが、不思議にも彼の半分の眞理は事物の眞實を突くことがある――が向けられた時、彼はこういふ言葉を友人への書簡中に書いて居る、『日本では生活の方則が西洋人とは異ふ――人は隣人を犧牲にしてその箇性の開展を努める。然しその爲め一面に大變な損がある。麗しい靈感も深い感激も喜悦も又苦痛も――佛蘭西人のいふ frisson も竦動も日本に無い。故に日本に於ける文學的仕事はひからびて骨ぼく、ぎごち無く死枯したものである。』外面的に四角張つた支那の道德觀念や物質的因果應報を說いた佛敎の影響を受けた、單に道德を形式的に取扱つた日本の半面は八雲氏の言葉のやうに無感激である、又無想像である。又無情緒である。然し其は表向きから覗いた餘所行きの日本である。この冷やかな嚴格極まる半面をひつくり返して裏から見ると、何んた

る放任自由な情調が日本の生活に流れて居るであらう。一面が無暗と角張つた固苦しい替りにその裏が餘りに柔靱不檢束を極めて居る。倫理的半面に對する無倫理の世界がある。僕が十幾年間の外遊――この十幾年間僕は外國人として何うしても西洋の感激的世界に入つて彼等の情調を自分のものとすることが出來なかつた――から急に日本に歸つて、來てすぐ日本の豐饒なロマンチツクな內面的の愛戀界に踏込んだ。而して僕は生れて初めての解放された歡樂を味ふことが出來た結果、何んなに僕は西洋の生活を嫌ふに至つたであらう。西洋の一般的生活を嫌ふと同時に何んなに西洋人全體を嫌ふに至つたであらう、僕は米國を去つた時豫めメリーと別れ話を取極めて置いたのであるが、僕が歸朝して西洋人を嫌ふといふ感情が募つて來るに從つてメリーを他人としか思へないやうな感じを持つに至つた。

パーシバル・ロウエルは "Occult Japan" の中で、日本人の無獨創を論じてその重な理由を物質主義に期して居る。この論に對する贊成者は隨分西洋人間に澤山ある。永年日本に住んで日本研究の權威と自他共に許して居たウオタ―・デニングスなども日本に理想が無く從つて日本の生活は機械的で單調無趣味である、『修養ある西洋人の心は、實際的關係の有無に係らず空想や小說的物語の世界に蠱惑せられるが、一般的日本人はその理由を了解すまい』と書いて居る。然しこの言葉に對していくらも辯解が出來、又その反對論を語ることも容易であるが、僕は日本人は物質主義者と思つて居る、――たゞ西洋人の了解する物質主義と、我々日本人の物質主義とは異つて居るだけで。西洋人の物質主

義は理想主義との對照で、それ以上でもなければ又それ以下でもない。然るに日本人の物質主義、少くも僕自身が了解する物質主義の價値はそれが軈ては理想主義に人を導く伏能性を持つて居る點にある。僕は歸朝すると直ぐ物質主義者となつたといつたが、それは物質を通して日本在來の傳統的情調の甘さに合一しやうとする希望から出たものである。而して僕はその重要な實行を第一に日本の女に經驗したのである……僕は歸朝すると直に日本の女の嘆美者となつた。

米國や日本の新聞雜誌でよく日米雜婚の可否が論ぜられて居る。特種な稀な場合を取除くと、概して失敗に終るべき運命を持つて居ると云はねばなるまい（僕自身の經驗を別にして考へても）。この問題に重大な關係のある經濟的方面が解決されたとしても、此處に日本人と西洋人との肉體の相違がある、——實にこれが大問題である。小泉八雲がチャンバレーンに送つた手紙のなかにこういふ言葉を語つたことがある『性的衝動（哲學的にこの文字を使用する）に對する缺乏は美性では無く寧ろ重大な弱點と云はねばなるまいと判定する。日本人のこの缺乏は彼等の音樂觀念の缺けて居ることゝ抽象的推理に無能力なことに關連して居るに相違無い。』西洋での意味からいふと日本人は音樂觀念にも抽象的推理にも缺けて居る。又性慾の上でも西洋人に劣つて居る。この根本的相違を何うして融和調停しやうとするか。僕は雜婚の可否に對してこう云はうとする『小泉八雲も一時は歸化日本人の完全な模型とさへ云はれたものだ。それは自分の個性を全然無くして日本人の感情性質と合體することを最大な希望とした時分のことだ。彼が晩年になるに從つて漸次西洋の自分の故國を回顧するに至つた、

その時に彼は十五年間も日本に住んだが、遂に日本と日本人を了解することが出來なかつたと白白した。彼の雜婚の總勘定も彼自身は餘り滿足なものと思はなかつたかも知れぬ。キプリングの有名な英詩に『東は東・西は西』といふのがあつて、彼の詩は「然し兩勇者が面接した場合・彼等がよし世界の果から來たとても、東も無ければ西も無い、又種屬出身共に問題にならぬ」と句を續けて居るが、日本人と西洋人との結婚にはこの特種な「然し」がない。勿論妥協的中立地帶を兩者の心に築いて相互に外面的に尊敬し合つて、自分の產れついた箇性の開展を望まない以上・彼等が衝突するのに何等の不思議はあるまい。日本人として西洋人に結婚して傳統的な島國性（肉體的にも精神的にも）を傷付けるのは考へものだ。生活や思想の上で何にも西洋人に妥協して不徹底な狀態を構成するにも當るまい。然し將來日本の生活や思想が段々西洋化して西洋の生活や思想を自分のものとして、其處に何等の不思議が無いやうになつた時には雜婚は問題にならぬ。それを種々な階級の人が實行するに至るであらう。だが今日の所では……僕自身だけの經驗では、十幾年の外國生活も僕を西洋人とならしめるには役に立たなかつた。僕は依然として傳統的な日本人であつた。』

これから更に筆を進めて僕の箇人的自白を書く。赤裸な自白といつても一から十まで洗ひざらし書立てる譯に行かぬ。たゞこの文の題目に關連して居る事件だけに止めて置く。この點を豫め承知して置いて貰ひたい。その範圍で僕は少しも虛飾をせずに正直に書くつもりである。

僕は滿十八歲にならずに渡米の途に就いたが（僕の渡米の目的もこの文とは無關係のことだから語

る必要はあるまい)、其頃東京は銀座の裏通り、藝者の名前が書いてある圓い提燈がぶらさがつて奇麗に磨かれた格子戸と格子戸との間に狹まつた所謂二等煉瓦の家に住んで居た。僕はその家の書生の一人であつた。朋輩の若い書生が裏合せの家の女中に惚れられて小い鏡か何かを貰つたのを知つて、僕は無暗と腹立たしく感じたのを見ても僕の性は激烈に其時分目覺め初めたのを知ることが出來る。今日の言葉を用ゐると僕は不良青年——少くもそれに近い青年の一人であつたに相違ない。然し僕にどこか臆病な所があつて(それでも僕は幼少時代から人に大膽だと評されて來たものだが)、それに書物から得た理智が加はつて、僕をいつも中途半端な不徹底者として居る。勿論僕が極端な墮落から救はれて居るのもそのお蔭だが、僕に眞實偉い人格性が無いのもその爲めだと思つて居る。僕が十七八の頃立派な不良青年になり得無かつたやうに、今日でも僕は熱烈と冷靜、果斷と因循との間を賢明らしい四十面さげて彷徨つて居る。渡米前の僕は全く女性の味を知らなかつた。たか〲銀座の緣日の晩など若い女の後からくつ付いて步き、香水と髮の油とが交つてもやつとした臭氣に醉ふか、或は机の抽出にそつと匿して置いたその頃評判の半玉の寫眞を人知れず眺めて居た位であつた。その頃評判の半玉といへば『ぽん太』と『おゑん』で、僕が朝學校へ出掛ける時など態々廻り路してぽん太の家の前を步いた。而して僕は幾度も彼女が白粉で白びかりした黑繻子の襟が掛つた粗末な着物を付けて、細い手で大きな庭箒を持ち乍ら家の前をせつせと掃除して居る姿を見た、——僕は今でも眼を閉づると彼女の白粉が剝げた首筋の曲線が見へて來る。何にかの新聞で彼女の雇主が慘酷だといふことを讀

んで、何んなに僕は同情の涙を流したであらう。いつであつたか何にかの演奏會で僕は幾十年目で今日肥つて色褪せた彼女を見て、僕は密に今昔の感無きを得無かつた。春になると樹木の眼に見えぬ所から赤い小い葉の芽がむくり上るやうに、僕は目覺めたういしいしい性を携へてはるばる見も知らぬ米國へ渡つたのである。

金錢を持たない日本の青年が生活を桑港で求める方法に二つ無い、——家內勞働あるのみだ。僕も所謂學僕の仕事口を得て、ある猶太人の家に住込んだ。米國——桑港でも又紐育でも何處でも——で言葉も碌に話せない日本人を使ふ家は貧乏人か或は家庭の秘密を持つて居るものと見て間違ひない。僕がこの猶太人の家で初めて男女がちゆうちゆう接吻し合つたり、時には不都合な汚れた品物を洗濯するやう命令されて、僕は米國生活の裏面に漲つて居る油ぎつた人間的情調を感ずるやうに成つた。晩食の給仕をして居る時など兩方の肩から胸へ掛けて眞裸になつて居る若い女を見て如何に挑撥的に僕は感じたであらう。然し挑撥的に感じたといつても痛切な現實的なものでなく、自分と種屬を異にした女性に對する不思議な好奇心が多分に交つて居たのは勿論である。今日でも太平洋岸に於る日本人は米國人（それが獨逸種でも乃至露西亞の猶太人種でも）から隨分みじめな取扱を受けて、てんで相手にされて居らぬが、況んや僕の桑港時代は二十幾年の昔である。——日本は支那の屬國以上に評價されなかつた頃である。桑港市長の改選の時にはヲードンネルといふ藪醫者がその候補に立つて、大きな大八車に "Japs must go."（日本人去つて仕舞へ）と滅法界大きな文字で書いた紙などを張つて市中

を縛つて歩いた時代である。日本人は到底、彼等米國人に人間とは取扱はれて居無かつた。僕は米國生活に流れて居る豊饒な情調をたゞもう垣間見たゞけで、到底その内部に入つて温かい空氣に觸れることは許されなかつた。米國人は日本人を人間以外の人間と思つて、――木の切れか石ころででもあるかのやうに取扱つた。僕の芽出し掛けた情の二葉はこの冷遇にあつて直に畏縮して枯死せざるを得無かつた。一旦春に遇つて陽々たる人生の發育を遂ぐべきものが、この冷たい（日本人に對して）氷點以下の空氣に觸れたが爲めに脅かされた蝸牛のやうに、じつと『自分自身』といふ小さな憐れな殼のなかに穴居生活を營むより外は無かつた。僕が漸次寂寞な悲觀的性質を帶びて來たのも自然である。而して僕は夥しく皮肉に成つた。又時には『日本人は果して下等な人間だらうか』といふ謎のやうな問題に苦しめられた。こういふ場合に僕が慰藉を求めた唯一の場所は書棚にのみあつたのである。彼は非常にこぢくれた心の上での畸形兒と成りつゝあるやうに感じた。

　日本人を人間視しなかつた米國人は我々に放縱極まる暗い半面を無遠慮に見せた。彼等は我々に批評の能力を備へて無いとでも思つたであらう、――背は短く皮膚は茶褐色、その上自由に英語を語つて胸中の意味を語ることが出來ないのであるから、彼等は日本人を無感覺な假面以上で無いとでも思つたであらう。僕は嘗てある名高い詩人の家に働いたことがあつた。詩人は西洋人には珍らしく頬骨の立つた痩せた五十年配の男で、見るからに性慾が萎靡して居ると思はれた。それに反して彼の妻君は肉付きが肥大で艶々した肉感的な身體の態度は、譬へると立派な動物を見るやうであつた。僕が目

見えしてから數日立つとこの妻君（可なり名の知れた音樂家であつた）が公然情人を引込んで亭主の面前で接吻するのを知るに至つた。こういふ時にはこの不幸な詩人はいつもお勝手に接近した小い部屋のなかに靜かに引上げて自分の女房の情人が去る時が來るのを待つのであつた。其後この詩人の詩集を繙すと、その中にこの不埒な女房を嘆美した一篇を發見して、僕は米國人の道德の原理が何處にあるかを疑つた。このことを僕は二三の友人に話した所が、彼等も彼等の異つた經驗から見た米國の男女間に嚴肅な節操が缺けて居る實例を僕に語つた。

今日の桑港は何んなに倫理的かは知らぬが、僕の居た時分の桑港は東京でいふと銀座通りといつたやうな一等道路の眞中に、淺草の六區式な極めて淫猥不善な巢窟がいくつも有つた。僕は一度そのある巢窟に雇はれて酒の賣子になつたことがあつた、——いつか機會があつたら僕が此處で見た印象を赤裸に書いて見たい。こういふ無制限な遊蕩な半面も米國人が我々日本人を人間以外に置いて居ればこそ平氣の平左で我々に見せたのである。それから受けた年の若い日本人の心理狀態は何うであつたか？僕はこの問題を考へる毎に心に深い悲痛な戰慄を感ぜざるを得ない。思つて見給へ、我々大部分は自然の生理機關を具備した青年である。——何うして禁じても禁ずることが出來ない性慾を整理したであらうか、何處でその流出口を發見したであらうか。僕の狹い經驗の範圍でも失戀の結果（重に相手は娼婦であつた）自殺した青年が三人と、又色情的狂者となつたもの二人と、それから過度な愚な行爲をした爲め激烈な神經衰弱に掛つたもの三人を數へることが出來る。是等の即ち色情狂者と神

經衰弱者は日本へ歸つて今日完全な健康を得て居るのを見ても、意志力に缺けて弱い或種の青年を外國の不自然な空氣中に置くのはいかに考へものであるかは容易に推察することが出來る。

僕は精神的禁慾者となつて肉體の破滅を辛うじて避けることが出來た。僕は其頃の文學狂といはれる位讀書家であつた――それも西洋の文學に向はずに寧ろ遠くに見捨てた日本の古文學に親んだ。僕は西行や芭蕉の自然觀乃至人生觀から暗示を得て、米國の大自然と同化して靜寂な特獨な境地を開拓しやうと勉めた。そして僕は其點で少なからぬ效果を納め得たと今日でも信じて居る。僕は米國人に嫌はれても米國の自然から受けた大な祝福に對しては感謝せざるを得無かつた。僕は自然に親しむといふ目的を遂行する爲め、桑港などといふ都會を離れて田舍の住者となつた。僕は年こそ若かつたが、一種老人じみた村夫子型の人間となるに至つた其頃にはこれまで持つて居た僕の皮肉も段々落付いて、僕の田舍生活は極めて平靜なものであつた。僕の一旦目覺めた性慾の行衛は、何うなつたであらう。それは一時跡を拭ふやうに消滅して仕舞つたのである。實にこれも不自然な現象であつたと云はねばならぬ。

僕は其後紐育のある商店に仕事をする一機會を得て加利保爾仁亞を後にした市俄古に着いて（それが何年の何月であつたかを詳細に物語る必要はあるまい）初めて米國生活の溫かい情調の空氣に觸れ、僕も米國人から一人前の人間であるといふ愉快な感じを得る待遇を味つた。加州に居た僕と今イリノイス州に居る僕自身に少しも相違はないが、西部と東部（東部といつても市俄古は米國全體としては

寧ろ西部に屬して居るが)との米國人に大きな相違がある、――特に日本人に對する取扱上非常に相違がある。僕を市俄古の交際社會へ紹介して呉れたある米國人の力に負ふ所が勿論大きいけれども、其當時に於ける市俄古人は日本人をまだ〳〵珍しいと思つて居た。僕に地と時の後援を有利に使用するに足るだけの英語の素養は最早や出來て居る。又自惚ではないが僕の風采はいつも西班牙人か伊太利亞人とならば無難で通過する程度に東洋臭を脱した所もあつた。舞踏會などに招待されても年の若い奇麗な女から一舞踏所望されて、赤裸な豐饒な圓肥りした腕をしかと握る自由と權利さへ與へられて居るやうにも感じた。僕は生れて二十五歳になつて、一度枯死した性の覺醒が再び芽出すに至つた、――自然にのび〳〵した豁達な情調に觸れることが出來た。然し考へて見ると僕と米國人乃至米國生活との間に理解が急に成立したので無く、實際は僕自分に再び漲り初めた性的情調が知らず〳〵に僕を大膽にならしめて、實際の行爲を市俄古でおつ初めたに過ぎなかつたかも知れない。それに相違無い、――僕は米國人を了解しなかつた、又了解する力を缺いて居た、更に又僕は了解しやうとも思はなかつた。僕は利己主義者で何事も自分本位で、經驗から何物をも學ぶことが出來ないやうな頑固執拗な性質を持つて居た。僕は二十五になつて自由に自分の情調を擴張せしめ得るだけの大膽さを得たと見るのが正當であらう、――別に市俄古の米國人から歡待されたが爲めで無く、僕は最早や米國人殊に米國の女に對する不自然な畏敬も無く又何等の恐怖も感じないやうに成つた。今から考へると僕は實に驚く程大膽者になつたのであつた。此處で白状して置きたいことは、僕は女に對する節操の觀

念が其頃極めて鈍かつたことである。

一年餘の市俄古滯在から僕は紐育へ出た。紐育へ着いてから半年も立つと、僕に商賣上の往復書面の誤謬を訂正して呉れる助手の必要が起つた。僕はヘラルド紙上で其旨を廣告して然るべき人間を求めた。この廣告に應じて來たのがメリーであつた。彼女は學校出身であるといへば勿論美人でないことは云ふに及ぶまい。極度の眼鏡を掛けて、タイプライター女に普通であるが隨分見惡い骨太の指をして居た。僕の肉體美に對する鋭敏な感覺は彼女を嫌ふべき女と思つたが少しばかりの談話でも直ぐ知ることが出來る位彼女の理智は可なり尊敬すべきものであつたので、僕はこの女を雇ふことに約束した。彼女は其頃紐育場末のフラットに住んで居た。其處へ行つて見ると室內には裝飾らしいもの一つも無く片隅に置いてあつた書棚に沙翁全集やバナード・ショウの劇や其他雜多な社會主義傳道の薄つぺらな書物が無秩序に投込んであつた。彼女に美を理智では了解する事が出來たけれども、それ熱を情で味ふことが出來なかつたことは僕彼女を知つた最初から明瞭であつた。彼女は愛蘭土の血（愛蘭土人といつても蘇格蘭土に接近してその血も交つて居る所からスコッチ・アイリッシュと一般に云はれて居る人種の一人であつたが）を受けて居るとさへいへば、人は彼女が自由思想家であることは察することが出來やう。彼女は無宗教であつた、――彼女の言葉に依ると幼少の頃バルチモーアの牧師の家庭で一二年間過ごした時不消化物的宗教を餘りに澤山食べさせられたので、彼女は遂に無宗教の氣樂さを愛するやうになつたさうである。僕は一週に三度位彼女に會つて、商賣上の往復文を構成

させたり又自分の英文を修正させた。彼女は米國人として稀に正確な英語の所有者であつた。僕は彼女の仕事に滿足した。僕等の無趣味な問苦しい仕事が終ると彼女は其頃から英文壇に勃興し初めた所謂新文藝の原理を僕に說いて聞かせた。彼女は僕が渡米以來初めて會つた一番勝れた理智の女であつた。僕は彼女は談話の友人として歡迎すべき女と思つたが、彼女から僕の情調的本能がついぞ刺戟されたといふことは全然無かつた。僕は彼女を女と見ずに一種必要な道具として取扱つて居た。僕は一二度位の面識に過ぎぬ女でも、その女が多少蓮葉な所があつて器量でもよいと、僕はぢきに連れ出して晩食を馳走したものであつたが、このメリー――其後關係して子を産ませるに至つたメリーに限つては彼は一所に紐育の街上を散步したり又食事を共にしやうなどゝいふ氣分に成れなかつた。

僕の東部生活は隨分自由な蟠まりの無い情調的生活であつた。僕が紐育へ着くと間も無く商用で華盛頓へ行つた。其處で僕は今假りにアンと名付ける女を知つた、――何ちいふ機會でこの小柄な髮の毛の房々した女を知るに至つたかは語る必要が無い。彼女の小い指の恰好が最初から僕の鋭い感覺を動かした。彼女は華盛頓の一新聞社に働いて居た一記者であつた、――米國でも女記者といふものゝ中には、その操行や意思の奔流したものが多い。アンも僕を外國人と見て取つて巫山戲やうとした無責任な情調の餌となつたのであつたかも知れぬ。實際はそうであつたらうが、僕の方も現實的な本能の命令に盲從して働いて居たのである。僕の華盛頓滯在は愉快であつた。紐育へ歸つてからもアンとは始終手紙を遣取りしていつの間にか互に結婚問題までそのうちに仄かす程度まで進んで行つた。

僕はまた商賣上の用務で一年間ばかり倫敦へ出掛けて紐育から留守したことがあつた。再び紐育へ歸つてメリーをある晩彼女のフラットへ訪問すると、彼女は染々僕の留守の寂しさを語つた。此女僕を愛して居るなと思つて彼女の顏をじつと眺めると、彼女の顳に一本長い白い毛が生えて居るのを發見した。――僕は急に彼女が嫌に感じた。前にいつたやうに其當時(僕は早や二十七歳になつて居た)に於ける僕の女性に對する節操觀は頗る漠然たるものであり、又多くの場合では無責任なものであつた。僕は劣情の流れるまゝに彼女と關係するに至つた、――其時僕は別に誤つた行爲をしたとも感じなかつた。彼女が僕に公然の結婚を迫つた時、僕は彼女に自筆で『僕は何年何月にお前に結婚した』といふ文字を書いて與へた。彼女の自由な思想はその言葉を得たゞけで滿足する程無邪氣であつた、又正直であつた。僕は彼女(今日神戸に居てある英國人の會社に出勤して居るが)のことを思ふと、心に痛い戰慄を感ぜざるを得無い場合がある。

日露戰役は初まつて日本といふ文字が米國の新聞紙上に筆太に書立てられるやうに成つた。僕は永年忘れ果てゝ居た日本といふ故國の觀念がひし〳〵身に迫るやうに感じた。僕の歸心は激烈であつた。僕は斷然意を決して飛鳥の如く米大陸と太平洋を逆に横斷して再び日本の人間となることにして、メリーにこの事を宣言すると、彼女は已に懷姙して居ることを僕に告げた。然し僕はそれに對しても特別重大な責任感を感じたのでも無かつた。今日の僕は、自分の地位や世相人生上に於ける理解力から嚴肅な倫理觀を實行して居ると信じて居る。然し十幾年前の僕の心は何等の束縛を知らなかつた。愛

戀の自由を歌ふ無責任な抒情詩であつた。

紐育を去つて態々歸路を南へ取つてバミングハムへ立寄り、其當時其處に居た女記者のアンに會つて蜜のやうな數日を費やし、日本へ歸つて相當の地位を得た時は彼女を呼寄せるとまで語つた。彼はメリーと彼女の懷姙の事を忘れて居るのではないが、夫が不思議に僕の苦痛にならなかつた。

日本へ歸つてから小一年間に於ける僕の生活は泡鳴君の所謂靈肉一致の歷史であつた。僕が米國で經驗した情調は寧ろ自分だけの情調に對する嘆美であつたに止まつて、決して米國人の實生活に溢れる情調と合一したもので無かつた。十幾年の日本生活を經ても小泉八雲に日本が了解され無かつたやうに、僕の十年以上の米國生活も結局は僕に何物をも教へなかつた。米國に於ける僕の生活は人間として半分の生活であつた。僕と米國人（それが實際的關係を結ぶに至つた女であらうとも又誰れでも）との間に薄いが決して破れ易いもので無い紗の幕みたやうなものが垂らされて居て、僕は或る時は心の不安を感じ又或る時は思想の疑惑に捕はれ、僕の全身を彼等に投げて彼等の心境に心置きなく入りこむ事が出來なかつた。然るに自分の國へ歸つて生活をし初めると、其處に僕と日本の生活とが太鼓に對する鞭の如く共に有機的動作があつた。僕は今日日本の蔭の生活に德川時代の浮世繪情調、――豐麗で自由な物質的感激の世界が依然として存在して居るのを知つた。僕の心は喜悅で戰慄した。

僕が傳統的日本の趣味性に捕へられたものだといふ人があると、其人は間違つて居る。又歸朝以來僕の放縱に見へる行爲も、永年の外國生活から日本生活に復活した青年が判に捺つたやうに繰返へす

所のものに過ぎないといつて退ける人があると、其人も間違つて居る。僕は全人格を作る爲めに日本の物質主義を是非共通過せねばならぬ路と見たのである。日本の物質主義は有機的に流動して居る伏能的な生產力に滿ちて居る。僕が酒色の間に彷徨つたのは畢竟これまで不自然に發育して來た情的本能の實在をその原形にまで直して更にそれを生長せしめたい希望からであつた。僕は藝者にも親しみ又料理屋の火鉢に手を翳した。又遊女屋の空氣にも泥んだ。僕は米國のアンや又僕の子を宿したといふメリーのことが頭念から忘れられたので無かつたが、不思議にも夫は僕の心配の種とは成らなかつた。

僕がある晩歌舞伎座で故攝津大掾の紙治を聞いて、濃厚な抒情詩で頭のなかゞ一杯になつて歸つて來て僕の家の書齋に入ると一通の外國の書簡があつた。手に取るとそれはメリーからのもので、開けて讀むと彼女は男の子を分娩した、ついては多少なりとも送金して貰ひたいと書いてあつた。僕は今更のやうに駭然とした、——特に外國人に對して責任を重んじなければならぬかとも思つて僕は月々なにがし送金することに決した。僕とメリーとの關係は僕には最早や個人的でなく何んとなく日本對米國といつたやうな非個人的なものと見へるやうに感じた。僕が金を送り始めると彼女はせつせと僕に通信するやうになつて、手紙は初から終まで產れた子供の消息で滿ちて居た。そうすると彼女は頻りに生活難を僕に訴へ初めるやうになつた。愛情を與へて彼女を眞實の家內とすることは出來ぬが(その時には僕とアンとの愛戀關係の結末は付いて居なかつた、)さりとて金錢上の責任まで僕は逃避しや

うとする程無慈悲にならなかつた。不徹底な僕の心はいつも常識的責任觀が絡付いて居る。餘りせつせと生活難を訴へて來るので僕はそれでは日本へ來て英語の敎員でもする覺悟さへあれば生活問題は解決せられるであらうが何うだといつて遣つた所、彼女は間も無く僕の提案に贊成して米國を去るといつて來た。

某年某月某日は滿三歲にならぬ男の子を伴つて橫濱の波止場に着いた。僕は彼等を迎へに其處へ行つた。僕は彼女の頰を接吻した。――あゝ何んたる冷たさであつたであらう！　彼女は公然僕の夫人として乘込んだことでもあり又經濟上からいつて僕として彼女を別居せしめる費用に堪へられぬので、僕は彼女が相當に獨立することが出來るやうになるまで、外面的に夫婦として同棲することにした。この爲め僕が築き初めた日本的情調の純な豐饒な生活は痛く傷付けられ破壞せられるに至つた。

僕の米國生活に於けるコスモポリタリズムは日本へ歸つて、殆ど激烈でしかも偏狹な島國主義と變化するに至つた。僕は外國人を嫌つて來るにつれて英語の發音も不快に感じ初めた。僕の洋服は大島の着物に替へられ、日本の昔の煙管を蒐集し初めて古風な煙草入を角帶に挿して步いた。然し僕は直ぐメリーの生活狀態を一度に變化せしめることの不可能を見て取つて、彼女の希望に從つて家の應接間に不細工な日本製の机や椅子を入れねばならなかつた。疊換へしたばかりの淸潔な八疊間（何にが日本生活の愉快といつて新らしい疊位僕に滿足を齎すものは無かつた）に安價な段通が敷かれた。メリーは不恰好な大きな足にスリツパを引掛けてばた〳〵音を立てゝ步き廻つた。彼女は西洋人として

はそう脊の高いのでは無かつたが、それでも彼女の頭は樂々と鴨居に達した、――この不振合を眺めると僕の美に對する感覺が急に傷付けられ破壞せられるやうに感じ、又彼女で代表せられた『西洋共物』が居丈高になつて、花車で脆い日本生活を威嚇するやうにも感じた。毎朝艶布巾を掛けて大事にして居た僕の紫檀の角火鉢を歪みなりに置いて其上へメリーは足を擧げた。又彼女は日本の床といふ觀念が無く外國でのフローア同樣に心得て何んなに見苦しく散らばつて居てもそれを取片付けやうとしなかつた。これまで可なり小綺麗であつた家の下女も次第々々に掃除を怠るやうに成り、塵で蔽はれた床の間の上に文字を書くことが出來又部屋の隅の疊の縁は塵埃で變色して見えた。スリツパで彼女が歩いた爲め家の長廊下は傷だらけになり、尾籠な話だが彼女は便所を汚しても後始末しやうともせず、又便所から出ても手を洗つたことが無かつた。僕が自分の寶物のやうに大切に取扱つた掛物に雪舟の小幅があつた。それを或日應接間の床に掛けて僕が仕事をして居た會社へ出勤した留守中に、彼女が米國から連れて來た子供が床の間へ驅けあがつてその掛物を破つて仕舞つた。女中の談話ではメリーはそれを見て居乍ら何とも云はなかつたそうである。僕は怒つた。實際このメリーといふ理智の女位子供に對する放任主義者はなかつた。又彼女の美に對する盲目は日本の雪舟と米國の三色版との間に何等の區別も知らなかつたのである。最初の間は僕は彼女に日本生活上の美を說きもし、又それに順應する彼女の態度を要求もしたが、彼女は全然柔軟性を缺いて居たので僕は彼女を何うともすることが出來ぬと斷念した。僕は一言葉の助言もせず又彼女の反省も促さずに唯胸中の不平をじつと抑

へて傍觀するのみであつた。僕は午後四時頃每日會社から歸家しても、何んだか自分の家へ戾つたといふ感じはしなかつた。最初から僕は彼女に對する愛を持たない、又彼女が日本へ來てからの同棲も一時の便宜であるといふことは彼女が了解する所であつたが（或は僕が思ふ程明瞭に理解して居なかつたかも知れないが）、僕はこの不自然な同棲は間もなく破れべきものであると漸次に感じ初めた。

特に又僕がその繁雜に堪へぬばかりか、主人の權威を著しく毀損されるやうに感じたことは每朝八百屋の御用聞きから月末一錢二錢の支拂に至るまで悉く僕が立會はねばならなかつた事である。而して僕とメリーと二人連立つて買物などに外出すると僕は商店の番頭などから時々通辯と取扱はれたのも大きな不愉快であつた。ある時などは彼女の買物に對する通辯へのコンミションだといつて番頭がそつと少額の金を僕の袂のなかに投入れたこともあつた、――箆棒めと僕は心で叫んだ。僕と彼女と同棲してから際立つて日本人一般の西洋崇拜の愚さが眼に見へ、それに對する憤慨を僕は一層に烈しく感ぜざるを得なかつた。僕は歸朝以來折々大隈侯を訪問してその知遇を得て居たので、ある日メリーを連れて早稻田へ行つた。所で大隈邸では西洋館の本玄關をずつと開けて我々否なメリーを迎へた、――更に正確にいふと、メリー自身でなく彼女が代表して西洋人といふ概念其物を大隈邸に迎へてそれに向つて敬意を表したであらう。それにしても僕に向つては內玄關だけで、メリーと一所に來ると本玄關が打開かれるといふこの大な相違を實際に見た時は僕は大隈侯否な日本の西洋崇拜を呪詛し曳いてはメリー自身に對してさへ一種の强い反抗を感ぜざるを得無かつた。大隈邸訪問はたゞほんの一

例に過ない。その他種々な場合にそれと同樣な不愉快な實驗を得たのである。僕が次弟々々に西洋嫌ひになつて來ると同時に、メリーの方では時には優秀な人種であるかのやうに意氣揚々たる態度を出し、又時には日本と日本人を批評的に眺めるやうに感ぜられる樣子が僕の眼に見へて來た。僕は不愉快でたまら無かつた。僕は何故にこう不自然な同棲をして如何にも眞實の夫婦である樣に世間に見せ掛けねばならぬかといふ理由を知らなかつた。

メリーが連れて來た僕の子供も僕に馴染まなかつた。僕がメリーに對する愛が無いのであるから子供と僕との間に愛の流通がある譯はない。前にいつたやうにこの子供も大きく今日では生長して米國の學校へ入つて居る。僕は毎月約束の金をメリーに支拂つて居るが、この子供と僕は何等の文通をもしたことが無い。然し僕は彼を忘れない。

メリーが兎に角獨立が出來るやうになつた時、僕は彼女との同棲を止めて今日の家内と結婚した。僕はこれまでの家にある一切の器具悉くを擧げて、——勝手道具から座布團に至るまでメリーに與へ、僕は僕で新しく一軒の家を持つた。

又僕がアンとの關係を何う終結したかは更に別な物語である。此の文とは無關係だからそれは他日に讓る。

重ねていふがメリーは不幸な女、愛戀の失敗者である——僕は彼女に同情を持つて居る。然し僕は我々の運命を何うとも回轉せしめることが出來なかつた。僕もまたメリーと異つた意味で等しく不幸

な男であり、愛戀の失敗者と思つて居る。一般論として僕は日本人と西洋人の雜婚を否定し、又僕自身の經驗は失敗に終つて居る、――然し僕がメリーと共に〳〵一生の開展をすることが出來なかつたのも、僕生來の狹量な片意地と趣味的な島國性と美を物質的に見る感覺性とが助けて居ることはいふまでも無い。

劇に就て

一　外人團の沙翁劇

沙翁劇は各人物の性格をよく書き分けてあると云つたのは、もう、昔のことで――性格の違ひその物が僕等には類型的にしか見へなくなつた。『ハムレト』で云つて見れば、肝心な人物ハムレトと惡役のポロニヤスとだけがちよつと生命があるやうに見えるが、それも僅かに不自然な長獨白や類型的對話によつて、あゝ云ふ人物の概念しか與へて呉れないのが僕等の不滿な點だ。跡の人物に至つては、殆ど全く支離滅裂だ。英米人やわが國の沙翁崇拜家等が何と云つても、から云ふところは、わが國在來のメロドラマたる『助六』や『切られ與三』などと大した逕庭はなからう。

その上、今回帝國劇場で公演した外人團はすべて旅役者で、左程標準になる程の力量を持つたものがないと來てゐたそこへ以つて來て、また僕等は英語は讀めても、且、在日本の英米人とは話が出來ても、英なり米なりの本國へおつぽり出されると半年はつんぼに等しいと云ふのと同格で、俳優の發

音する言葉を、正直なところ、半分以上は聽き取れない。いよ〳〵以つて始末に終へなくなる次第だが、原文の脚本を讀んだ知識と、邦人が演じたのを二度見た記憶と、俳優の態度とによつて、作者の考へてゐただけのことは受け取つた。

ハムレト公子に對する今回のヰルキ氏(外國では、左ほど標準的でもあるまいが)の解釋振りを見ると、曾て邦人が演じたのよりはずつと自然的だ。たとへば土肥春曙氏のはその人物になつてしまはうとして自己を忘れ過ぎたが爲めにそのこなしもつくり聲もすべて附け燒き刄のやうで、場面の變る度毎にハムレトも變つてしまうやうな危なつかしい感じを與へた。そこへ行くと、ヰルキ氏のは終始一貫してゐた。俳優の自己を本位として割出してゐるからで、その主要點は、あのしつかりした地聲を以つてゑぐり出すところにあつた。缺點を云へば、その聲が人物の若さに釣り合はなかつたことだが、或人々の解釋するやうな、わざとらしい佯狂でもなかつたのが却つてよかつた。

澤よりも一層不釣り合な地聲を出してゐたのはヲツ孃のオフエリヤだ。聲を聽くと失戀の爲めに氣狂ひになりさうな若さ、可愛さではないが、それをからだのこなし方に由つて補つてゐた。廊下で坪内博士に逢つたら、かの女は氣狂ひになる徑路を餘り寫實的にやる爲め、作者の本意なるロマンチクな味はひを無くしてゐると云はれたが、それは、この脚本の意味の取り方にあるとして置いて、全體オフエリヤに作中人物としての特殊の性格が現はれてゐると思ふなどは、沙翁を買ひ被つてゐるのである。それでも、キヤアと云ふ氣狂ひじみた聲を二度も擧げたのは、邦人では出來ない良い思ひ切り

であつた。

ゴルドン氏のボロニヤスは適役であつた。どんな座にも、はまり役と云ふのは大抵老人がかつたのにあるもので、氏のもそれらしい。息子の出立の餞けに最もらしい敎訓を與へ、娘の戀にやさしい反對を聽かせるところなど、作意から云つても、俳優の態度から云つても、先づ、概念的には老人として受け取れた。

その他の役は一々區別して云ふまでのことはなからう。が、あの劇を見た人々の爲に注意をして置きたいことがある。他でもないが、外國劇では、たとへ舊式な派でも、わが國人の待ち受けるやうにさう芝居をして見せないことだ。わが國では、今日に至るまでも碌な脚本がなかつたので、俳優がその缺點を藝で補ふ爲め、大きいところはこと更らに大きいやうに、悲しいところは不自然になるまでも悲しいやうにして見せる透き、若しくは、必要があつた。この必要は、作としては勿論、藝としても餘り結構なことではない。

が、習ひ性となつて、我國人は新らしい劇、たとへばイブセン劇のやうなのにも、こんな實は不必要な必要を感じてゐる。それには今回の沙翁劇は覺醒の糸口にならうと思ふ。どちらかと云へば沙翁劇なる物は『助六』其他の我國の在來劇と同樣、碌でもない透きが多いのだが、外人はそんな透きが多い物にでも其臺帳に現はれた意味だけを、その臺帳の文句に添つて、せりふと表情とに現はせばいい事にしてゐる。乃ち、エロキユーシヨン（雄辯的表情術）の上手下手が藝の上手下手であるわけだ。

從來のわざとめいた芝居ばかりをやつてるには、どんなことは矢張り樂にもなるまいが、これからの脚本本位の劇には、これが最も肝要である。そして今回の旅役者團一體に面白くなかつたのも、エロキユーションを稽古じみた工合に、つまり、垢拔けしないで、やつてゐたことである。坪内博士は前日の『ロメオアンドジユリエト』の方がうまく出來たと云つてゐたが、渠等のこの腕前から想像すると、それも何かの迷信からの判斷であつたらう。

二　ショーの喜劇

文藝協會が今もなほ眞面目な演劇研究の團體なら、僕等のそれに故障を申し込みたいやうな惡い傾向が見えて來たのを先づ注意して置くのである。たとへ時代後れでも、沙翁劇をやるのなら、監督坪内博士の體面を重んじて、僕等は默つてゐられるし、またイブセン劇のやうな新劇をやるのなら、僕等は喜んで迎へることをしよう。が、今回の如き出し物を持ち出すに至つては、餘りに商賣氣が出て來たのではないかと疑はれる。

『マグダ』禁止の時でも、既に出來あがつた藝をむざ〳〵葬つてしまうのはと云ふやうな口實で、偏頗な官憲に泣き附き官憲の手で訂正せられた通りをありがたがつて大阪や京都へ持つて行つたのが、文藝の威嚴ある立ち場から見て、僕等には飽き足りなかつた。そのまた今回が半分以上は俗受け專門の物ではないか？喜劇が惡いのではないが、受けさせて見たいと云ふ婆婆ッ氣の見え透いてるのが、いよ〳〵ます〳〵協會の眞面目な態度を疑はしめるのである。

原名 You never can tell（松居氏の譯では『さきのことは分るもんぢや御座いません』）を、たとへ長いので困るからと云つても、『二十世紀』としたのからして、翻譯者の意の輕薄過ぎたのは勿論のことそのつもりでゐる協會の監督者や技藝員等の考へも薄ツぺらだと云はなければならない。作者は決して、來るべき時代があゝだとも、近代式とはかうだとも云つてはゐない。ただ二十世紀論集と云ふ書を著はした一婦人クランドン夫人が、その十八年前に離婚した所天クランプトンに對する怨恨や、それの反動として三人の子女を極端な理性的に育て上げようとした結果など、一家一私人の出來事を扱ひながら、作者の本意は、クランドン側では婦人の理性は當てにならないこと、クランプトン側では壓制的父權のとても成立しないことを歌ひ、同時に身づから『おツちよこちよい』と稱する齒科醫ヴレンタインが『二十世紀の婦人』と一家に仇名せられた姉娘グローリヤに對する戀愛の事件中に、文明を誇るロンドン人に對する作者得意の罵倒をやつたのだ。ただそれだけの爲めにあんなトリビヤリチ乃ち、些細なことが過半を占めて、惡く云へば俗惡な喜怒劇が出來たに過ぎないので、要は作者の思想上の鋭敏な暗示、皮肉、並に警句にある。

土肥氏のヴレンタインは役相應の輕みはあつた。理性的と自任するグローリヤを所謂『科學的』に口說き立てて、知言を以つて千變萬化の妙を盡し、その癖、ぞツ根まゐつてゐるので『女性は太陽である』が、男はその光にばた〳〵する羽虫だと云ふところに、作者は戀に夢中なすべての男子をむき出しにして見せた。さう云ふ方面ばかりが土肥氏にはよく出て、ヴレンタインのむきになつて怒る方

面が餘り頷けなかつた。それに、第二幕の食堂から出て行く時、給仕人の老人に突き當つて抱き付くなどは、何と云つても、遊び過ぎた。

グローリヤは六ケしい役だ。第二幕の終りで、實際の感情を理性的習慣の爲めにぶちまけることが出來ないのをもどかしがり、『お母さんはなぜこんな教育を施して吳れました』と恨むところは、尤もな點だ。それから、母にどうかしてるのぢやないかと思はれるほど狂ほしくなるのだが、道子の肥えて目と共に圓い顏と口を結べば直ぐ出ツ張る頰べたとは、表情の變化に乏しく、爲めに虛飾の理性的方面を一天張りに保つにばかり適した。そして思ふ男と手を取り合つたが、これまでにたらし込んだ數人の女でもと云ひかけられた時、急に嫉妬心を起して男を突き退ける、その突き退け方が何だか力强い相撲取りの投げ方のやうに見えた。と云ふのは、肱の少し下までしかない袖で、腕輪のはまつたむき出しの兩手を肩よりも上にあげ過ぎたからである。

フアガスクランプトンは舊式な辛抱家の、而も頑固な老人だ。第一幕で齒醫者の手術臺にのぼり、痛い齒を辛抱して拔かせるところは、どうも氣合が合はなかつたので、さう見物を笑はせなかつた。齒醫者が齒の浮くやうに感情を發揮するに對し、これはまた頑固一天張りだ。そしてその子供が冷淡なのを泣くにせよ元の妻の家庭的敎育法を怒るにせよ、東儀氏のはどうも誇張に過ぎるやうな氣がした。ただ一つ忘れられないのは、幾幕かであつた、舞臺の中央に來たり、顏を觀客の方にあを向けて怒泣した時、得意のむき出し目に淚を浮べたのが電氣の光で金色に光つたことだ。

須磨子のクランドン夫人は顏も聲も若過ぎた。かの女が俳優として既に一步の先進者だとすれば、後進に道を開くつもりでこのふけ役、而もさう重要な働きをしない役を取つたのは好むべしだ。が、餘り澄ましてゐたのと言葉が手ぬるいのとで、外國の女流著述家で家庭敎育に最も自由な方針を取つた婦人のやうには見受けられなかつた。もツとはき〳〵した態度が取れなかつたものだらうか？仕ぐさも大して多くはなく、目の表情と云つても、元の所天に十八年振りで會つた時や、グローリヤの樣子をじツと窺ふ時や、會食の席を娘にまかせて怒つて出て行く時や、すべて言葉や態度と共に左ほど有効には用ひられなかつた。

全體、この劇は些細なことが表面に出過ぎてゐる。それが横川氏のフイリプ並に房江子のドーリーのやうな茶日式子女の活躍するには便利なわけである。また、森氏の給仕人が『さきのことは分るもんぢや御坐いません』を振りまわすに適するわけだ。西原氏のマツコーマスは殆ど全く怒り役だ。それに、加藤氏のブーンは、たツた最後の幕だけに出るのだが、作者の指定通り太い大きな聲で『さう思つてゐるが、實際は思つてゐない』など云ふやうな辯を弄するのも面白い。が、かう云ふ連中が出る爲めに、賑やかな代りには、この劇を出鱈目にして行つて、作者の得意な、而も缺點な、頓智で押し付けた結末をつけるより外に道がなくなつてしまつた。これは作の上のことだがそれを演出する上では、喜劇だけに、この協會派の兎角舊式に藝をする惡癖が左ほどに目だたなかつたのは、まだしも儲け物であつたらう。

思想上の皮肉や警句を除いては、この劇は一體滅茶苦茶劇だと云つてもいゝ。最後に皆が假裝會の踊りに這入るにつれて澁面づくりのクランプトンも、不徹底な笑ひをする。が、幕明き前に、クランプトンをつとめる東儀氏に廊下で會つたから、どうだと聽いて見たら自分でも實際は何の爲め笑つて引ツ込むのか分らないと云つた。それが本統の告白であらう。且、僕は序幕の明く時、某社會主義者に飴を貰つてしやぶつてゐたが、その味を味はひながら、皮肉な社會主義者の作劇を見に、同主義者の一團が有樂座の一隅を占領してゐるのは當り前のことだと思つたことを附記して置く。

ついでに、ヷレンタインがあの婦人と云ふべきをいつも『あの女』、『あの女』と云つてゐた。苟も婦人の權利と名譽とを主張するクランドン夫人ともあらうものが、この無禮を訂正させないのは不思議だ。且、皆がどの場合にも『結婚』、『結婚』と云つてたが、あの原文は Engage であらう。然らば、約束若しくは婚約とすべきだ。少くとも、最後の幕切りに於ける齒科醫のせりふ『これでも私はもう結婚した人間か、な』に於ては、さうある筈だ。結婚をしたのでなく、その約束をしただけだから。

——大正元年——

屁ツぴり腰の西洋人

諸君よ諸君、先づ諸君に向つて承りますが、屁ツぴり腰の西洋人と云ふものが世界にあるでしよう

か？西洋人は、男子でも婦人でも、概して姿勢がいい。老人と云つても、實際に腰が曲るのは餘ほどの老人でしようが、それと云ふのも、わが國人のやうに座わると云ふことをしないで、落ち付く時でも椅子の上にしか腰をおろさない。そして歩く時は、勿論、姿勢の正しいやうに、正しいやうにと心がけてゐる。

ところが、世界に屁ツぴり腰の西洋人が多いところはたツた一ケ所、乃ち、わが國にです。外國貿易、並にそれに近いことに關係ある人々は不思議に思ふでしよう。神戸へ行つても、横濱にゐても、外人の經營する商館もしくは商會にはそんな者を見たことがない。渠等の家庭へ這入り込んでも、そんな者に出會つたことがない、また、自分等もそんな者に訪問せられたことがない。と云ふでしよう。

それでも、屁ツぴり腰の西洋人が多いのは事實です。

耶蘇敎信者、もしくは曾て耶蘇敎信者であつたものも、亦、怪しむでしよう。自分等はよく、餘り立派でないガラス窓の中へ訪問した。主人の宣敎師は、毛だらけの百姓手を以つて金ぶちの眼鏡を正しながら、訪問者等が生れない前から日本に來てゐることを誇りがに話すを聽いた。女主人はまたその所天よりも單純な頑迷な、傲慢な信仰を以つて、日本人のやうに毎日〳〵から自殺するものが多い人種は、とても、救はれる見込みがないと云ふやうなことを聽かせた。そしてまた一層迷信的なそこの老母やその澤山の幸福さうにうぢや〳〵ゐる孫どもに紹介せられて、同じ食堂で僅かの肉とありあ

まるほどのポテトとを一様に分配せられたこともある。それでも、腰の曲つた人を見たことがないと云ふでしよう。

それでも、諸君、屁ツぴり腰の西洋人がわが國には多いのです。殊にこの頃目に立つやうにふえたのです。

わが外交界の人々も、ちよつと聽くとそれはうそだらうと云ふでしよう。そして內閣總理大臣の宴會や、外務大臣の夜會を思ひ出し、そんな人間を一度でも見たことはないと云ふでしよう。そしてまた息子や娘に相談しかけて、どうだ、此の頃赴任して來た外國の大公使や書記官連のうちで、お前方がつき合つてる家に腰の曲つたおぢイさんかお婆アさんがゐるかと聽いて見るでしよう。

それでも、諸君、諸君の鼻のさきに、屁ツぴり腰の西洋人がふえたのです。

世界に屁ツぴり腰の西洋人はわが日本にしかゐない。そしてわが日本で、それは、わが劇場にしかゐない。劇場と云つても殊に、近代劇の飜譯を見せて呉れる舞臺を指すのであります。

僕の友人なる北村季晴氏は、わが幼稚な西洋音樂界では、頭腦ある人として、今のところ、唯一の人である。作曲と云へる作曲を作り出すことが出來るあたまを持つてゐる點に於て、恐らく、今後若手連のうちから氏に對抗するものが現はれて來るまでは。兎に角、獨步の人である。大して音樂も知らない文學者が外國の眞似をして、オペラと稱する形の文句集を作つて、それを無理に節を附けるやうな、云つて見れば、丸で物の順序を顚倒してゐるところこの實例が、昨年までに二三あつた。けれど

も、氏はオペラの根本問題を握つてゐるだけ、餘りあせりもせず、そんな一足飛びの、見え透いた失敗をしたくないと云ふのが病ひだが、その代り、オペラを初歩の、そのまた初歩から築きあげて行かうと云ふ考へから、先づ、オペレトにも成つてゐないやうなかの叙事唱歌數篇を作つた。それから、近頃、僅かにオペレトの名を附してもいゝお伽オペラ、『どんぶらこ』を發表した。

いや、問題が少しよこへ反れかけた。要は、この叙事唱歌と『どんぶらこ』との間に、北村氏が半劇半オペラの性質を有する作をして、有栖川の宮の御前で初めて試演した。その後二三の會合でも試演した。その中に、正面の書き割りを破つて、洋服の泥棒がぬツと出て來て、主人や細君にピストルを向けるところがある。そこが、筋の上から云へば、如何にも凄いところがあるが、それを受け持ちの技藝員が如何にも脊がひよろ高い上に、姿勢がよくないので、その屁ツぴり腰が如何にも目に立つた。そしてこの役が出て來てピストルを向けると、聽衆はどこでもわツと吹き出してしまうのには、熱心に各自の役をしてゐる北村氏夫婦もよわつてしまつた。

洋服の屁ツぴり腰はどうもをかしいものです。ましてそれが西洋人に扮してゐる時に於てをやでしよう。

屁ツぴり腰の劇的歷史はと云ふと、實際は、自由劇場の左團次一派から初まつてゐます。その以前にも、川上一派の翻案劇や、文藝協會並にその前身の沙翁劇にもあつた事はありましたがまださう、適切にそれを感じさせるまでには至らなかつた。と云ふのは、左ほど重んずべきやり方でもなかつた

からでしよう。おぢイさんと云へば、直ぐ腰を曲げてあたまを前の方につき出し、手を後へまわして齒ぬけ聲を出して『おう〳〵、せがれか、嫁女か、孫か』などゝ、あひるのやうによぼ〳〵と進み出る。こんなまどろつこしい、ぶんのめしてやりたいやうな型は從來の日本人には向かうが、外國劇をやる心持ちではない。若い西洋人に扮するものが兩手を後ろへまわして組んでるのさへ許すべからざるやうな氣がするのではありませんか？まして婦人の足がスカートの中で日本下駄をはいた內輪きざみにちよか〳〵と動くに至つては、ちよん髷を結つて燕尾服の夜會に出席するのと同格だ。近代劇を多少眞面目にやり出してからは、やるものゝ方にもいろんな覺悟が必要になつて來た筈であると同時に觀客の方でも十分な注文を云つてやる必要が出來て來た。そこで、脚本の意味・氣分・指定は一寸も看過させないのみならず、外國劇は外國劇のやうにして見せて貰はないでは、滿足が出來なくなつた。

左團次のボルクマンが話の調子が鈍かつたばかりか、話につれて足を運ぶ時の動き方も亦非常に鈍かつた。僕等が自由劇場最初の顧問等として、第一回の試演に於て何よりもさきにそれを遺憾として注意した。また、その時の莚若のエラレンタイムが腕附き椅子に倚つかゝつて、女の情ある話をする時、股の間に兩手をはさんでゐたので、僕は直ぐそれをやめさせるやうに樂屋へ通じてやつたことがある。瓢簞形の池を掘るのさへ風俗壞亂の一つだと見爲して避ける外國人です。そんなことでは到底劇としての氣分も十分に出せるわけがないではありませんか？近代劇協會で『馬泥棒』をやつた時も

井上の泥棒がテーブルの上につッ立つて演說する腰つきが甚だあぶなかつた。文藝協會に於ける須磨子のノラでも、マグダでも、そんな詰らないことから全體をぶちこわしてゐることが多かつた。

豈たゞ腰つきのみならんやだが、外國人の生活を知らないことを初めとして、外國人その物を知らないこと、話の調子これに伴ふ動き振り、表情の仕方出入りその他の時の步き振り、こんなことが殆ど全く外國人になつてゐないで、外國劇をやらうと云ふのは餘り大膽だとも云へる。『二十世紀』に於ても、『ヘダガブラ』に於ても、このぶちこわしは澤山あつた。外國劇をそのまゝやつて見ようと云ふほどの殊勝な俳優連並にその舞臺監督等のうちで、實際――にたゞ聽きかじりのたゞ見かじりのでなく――實際に、たとへば、燕尾服を着た經驗のあるものがあるか、どうか?實際の夜會に出たことが度々あるものがあるかどうか?こんな點だけでも、今の俳優連――無論、近代劇をやる仲間を云ふので、僕はかの音樂家としての職業上度々燕尾服を着る經驗ある北村氏だけを取りのけるが――の內容は貧弱であるを想像することが出來ようと思ひます。

から云ふ弱點をすべてこゝでは屁つぴり腰と名づけて置きましよう。

わが國では、武術の上からも、舞踊の上からも、股を割ること、腰を落すことの角度如何がすべての問題になつてゐます。外國人は決して股を割つたり、腰を落したりしない、柔道と拳鬪との試合を見給へ。わが柔道家が腰を落して身がまへするに對して、外國の拳鬪家はただその首をつき出し、それを兩手のこぶしでかばつてゐる。が、わが國人が拳鬪をやると、柔道並みに腰を落す。柔道では拳

闘に勝つが、拳闘同志では國人が外人に負け勝ちなのは、啻に不慣れな爲めではなく、その術に相當する態度を守らないからであります。

洋服を着るなら、洋服を着た時の輕い心持ちにならなければ駄目だ。舞臺で外人に扮するにはなほ更らのことでしよう外國の踊りでは、女でも自分の足をあげて頭上の張り子を蹴ます。それには、それ相當の服裝が出來てゐます。これをわが國の婦人服でやつたら、滑稽どころのさわぎではありますまい。と反對に、曾て或外人が今の歌右衛門に逢ひ、わが國の踊りのことを聽いた時、男子として女形の稽古をするに股に半紙をはさんでそれが落ちないやうにして踊つたと答へられ、その外人がびつくりした。とは舊い話だが、これをあべこべに行くことを注意するのが近代劇飜譯俳優には必要だ。國劇の舞臺では、男子がいざと云ふやうな場合には必らず腰を落して身がまへをするが、これは日本服でゐるから何とも思はれないが若しこれを洋服で行れば滑稽な形でしよう。

ところがこの屁ツぴり腰の件々を平氣で何の反省もなく多くの近代劇飜譯俳優がやつてゐるのである。觀客連がまた日常生活でこの屁ツぴり西洋をやつてゐるのであるから、左ほどに注意を受けないかも知れないのです。が、これを純粹の西洋人もしくはそれに準じた國人が見れば丸で成つてゐないのです。殊に最近に演じられた土曜劇場の『傳聞』一幕を見て、如何に喜劇と云ひ條、殆ど全く屁ツぴり腰の共進會であつたのを最も遺憾に思つた。相變らず、顏を前につき出し、兩手を後ろにまわしてそれをぐつと曲つた腰の上に置く老人が、赤ひげの西洋人であるなどが、この喜劇をやるそもそも

からして既に〱間違つた解釋、否、無自覺無努力の解釋であります。そこへ持つて來て、いづれの俳優も――巡邏も、婦人も、百姓も――ちよツと何か表情をすれば直ぐ屁ツぴり、ちよツと驚いたと見せればまた屁ツぴり、泣くとしては屁ツぴり、笑ふとしては屁ツぴり、怒り、意張り、逃げるとしては屁ツぴり――これでは男優女優いづれにも、扮する外人としてばかりではない、舞臺上の人としても藝の上の研究も、努力も、反省もあつたものではないのです。外人のうちでも、アイルランド人はよく屁ツぴり腰をする。またわざと滑稽にして見せることは他の外人にもある。然し自覺のないこの腰つきを絶えずしてゐながら、その無自覺の儘殊にわざ〱屁ツぴり腰をして觀客を笑はせるやうな傾向が、腰の問題ばかりではなく、その他の事に於てもあり、それが而もその一人や二人ばかりでなくすべての人々に見えたのは近代劇の眞面目でおのづから笑はせるやうな喜劇をやるものゝ心得ではない。不埒千萬だと云へましよう。同時に僕はこのみじめな俳優連――若し一人前の俳優として取扱ふことが出來るとすれば――の精神や生活を想像すると、舞臺上の喜劇を見せて貰つてゐるのではなく、渠等自身の貧弱な精神や生活その物の喜劇を見せて貰つたやうな氣がした。

とう〱劇評のやうな物に落ちてしまつたが、實はわが國人中に、外國人の思想と生活、風俗と習慣、長所と短所とを、まだ〱よく知らないで、これに盲從したり、これを喰はず嫌つたりする屁ツぴり紳士、屁ツぴり學者、屁ツぴり記者連の多いのを云ふつもりであつたのです。

劇にして見ると、極端に云へば飜譯物はやれる筈がない。けれども、自由劇場や土曜劇場で二三の

青年作家の貧弱な模倣創作を見せて貰ふよりは、しツかりした外國物を見せて貰ふ方が、本郷座や帝國劇場などの舊劇、新派劇、女優劇、半可通劇を返り見る必要がない僕等には、まだしも辛抱が出來る。それは少くとも、かの屁ツぴり腰だけでも早く直して貰ひたいものです。　——大正六年——

新政論家等の思想程度

この二三年來、わが國の雜誌界に一つの著るしい傾向が現はれた。それは政治を思想的に取り扱ふことである。この傾向を誘致する爲めには僕等の主幹する『日本主義』も微力ながらあづかつて力あつたことを私かに誇りとしてゐる。

政治——廣い意味ので、經濟や外交をも含む——をこれまでに多少でも思想的に取り扱つて來たものがないではなかつた。僕は少くとも二人を數へることができる。一は、政治的方面からの人で、乃ち、德富蘇峰氏である。が、僕が昨年の「新小說」に於いて渠を可なり長く批評した通り、渠には系統立つた思想もなく暗示的に特發する內在の根據もない。渠の若氣に浮かれて唱道した平民主義が結局處世上の手段に終つた如く、渠の帝國主義も亦——これは而も初めから——渠自身の手段であつた。他の一人は、乃ち、學者がはの上杉愼吉氏であるが、これはまた政治哲學者を以つて任じながらも、その言說はいつも全く狹い憲法解釋の範圍を出て來ない。渠は僕等の議論や批評を讀んで、時々その

用語に新らしみを見せたことはあるが、その要領は相變らず獨斷的國家主義から假定した形式的憲法論を一歩も踏み出さない。そしてその足りないところは一般の俗論的忠君愛國の感情に訴へようとしたのである。

一例を取つて說明すると、さきに西園寺侯が勅命を受けても政友會の政府反對意向をなだめることをしなかつた。妥協好きな同會の總裁としては、或は何とかしようと思へばできたかも知れないが、それでも渠は當時妥協をよろしくないと見たのである。渠の退隱は諫言の變形であつた。こんなことも、上杉氏等の所謂大權干犯論などの固定觀から云へば、絕對によくないことになるだらう。僕はすべての勅命が必らずしも憲法規定の大權ではないことを知つてる。上杉氏等はこんな場合を忘れてゐるか、知らないふりかをしてゐる。そして今の政黨者流はまたこれをまだ非立憲でもないのに非立憲だと高潮した實例がある。どつちも實際を得てゐないのだ。そして德富氏はこんなことに思想的な口ばしを容れる資格がなかつた。

かゝる狀態の間に、否、かゝる虛に乘じて、この二三年來突然の如く現はれた政論家どもは、すべて新思想家を以つて任じてゐるやうだ。丁度自然主義の運動が文壇から出て他の社會にも立派な一大影響を及ぼすことになつた如き勢ひを以つて、渠等は單に單純な政論界にばかりでなく、思想界にも乘り出さうとしてゐる。そのおもなものを擧げると、吉野作造氏――若宮卯之助氏――大山郁夫氏――北昤吉氏――植原悅二郎氏――等それからまた、一方では、思想その物を取り扱ふ學者や批評家の

間からも、政治論、經濟產業論などをやり出すものも多くなつた。たとへば、姉崎正治氏――田中王堂氏――生田長江氏――三井甲之氏――それから僕も現にその末席に加はつてゐる。そしてこれらすべての思想的政論を諸方の雜誌が歡迎してゐるのは、確かにジャナリズムに於ける近來の一進歩と云はなければならぬ。

わが國の政治を官僚的や政黨政派のかけ引き的關係を離れて十分に研究すべき時代が來たのだ。否、今までの官僚關係や政黨の立ち場を破壞して、當局者や政黨その物が面目を一新すべき時代に達して來たのだ。けれども、政治の根本的革新は政治の表面的取り扱ひだけでは生じない。條件として、必らず思想上からの解釋を新たにしなければならぬ(その一)。そして今一つの條件としては、その新解釋がその國民的生活の流れに適切でなくてはならぬ(その二)。この二箇の條件から僕は今、さきに擧げた新思想の政論家どものうちから、また數名をえらんで概評して見たいのである。さうすれば現今の政治思想がどこまで進歩し、どこにとゞまつてるかを示すことができようから。

現大戰推移の結果、英でも佛でも米國でも、その代表者どもは皆デモクラシと云ふことを言論上に高潮して來た。これを見たわが國のそゝつかし屋若しくは新らしがり屋どもは、直ちにその思ひをこの方に向け、殊に露國がこれを實行にまで現はしたので、わが國も早晩さうなるべきものと考へて、そしてさう考へないもの等を無氣力の徒であるかのやうに意氣込んでる傾きが見える。けれども、露國の革命は極端な壓制に對する反動であつて、わが國にはかゝる反動を引き起さしめるやうな素因は

なかつた。そんな區別さへ知らないでたゞぼんやりとデモクラシを謳歌するもの等に對しては、吉野作造氏が一昨年此英語を民主主義と民本主義とに分譯すべき場合があると論じたのは一卓見であつた。が、今回又「中央公論」に於ける發表によると、こゝは北氏の評言を借りて云ふが『博士の民本主義は……主權論にも觸れず、又政治の目的論としての民本主義にも觸れず、單に參政權擴張主義の別名に過ぎない。』而も『主權の所在論に對しては極端なる君主々權論者にして、主權の行使に就ては殆ど議會萬能論者たる觀がある。』

この矛盾はどこから來たかと云ふに、恐らく渠が上杉博士の形式的憲法論の鋭鋒を避けつゝ、而も同博士の議會無能論に對して反對の立ち場を得ようとした爲めだらう。今一層突つ込んで云へば、渠の一昨年に於ける議論でも示めしたところの耶蘇教的個人主義の感情的先入見が、渠を日本人として徹底させてゐない爲めである。僕がさきに『吉野氏に至つては殆ど定見ある哲學がない』と云つたのはそこだ。渠の個人主義がほんの感情的なものである上に、渠の見た國家主義も亦感情的な個人主義の對照物に過ぎない。思想としては不徹底に加へて舊式である。渠が眞理を單に『理論上の事』に見て、政治哲學と科學的政治學とを二途に見た如きも、舊式な机上の空論であつた。

次ぎに大山郁夫氏だが、渠も參政權擴張の意味に於いて人民が政治の客體たるのみならず、主體たるべきことを主張してゐる。乃ち人民の爲めの政治ではなく、人民に依つての政治でなくてはならぬことをだ。これがデモクラシの說明であることは無論である。そしてこの說明には渠は吉野氏に於け

る如き民主と民本との二つに意味が分れる餘地を與へてなかつた。吉野氏の眞意は初めからわが國體との衝突を避ける爲めであつたらうが、『人民に依つての政治』と云ふことは僕の洞察的解釋によると必らずしもわが國體と衝突しないのである。して見ると、民主々義と云つても民本主義と云つても、その解釋がわが國に當を得てゐさへすればいゝのだとしなければならぬ。

ところで、吉野氏の矛盾を氏の感情通りに整理させて行くと、その信仰生活上の偏見までが出て來て、『カイザルの物はカイザルに、神の物は神に』と云ふ二元的生活にならう。これは英獨のやうな立君政體には無事に應用できるかも知れぬが、わが國のには衝突する恐れがある。大山氏にはかゝる感情的偏見はないかも知れぬが、その民主々義をわが國にどう調和若しくは解釋すべきかを示めしてゐない。これがない以上は、渠の主張の最後は君主をして虛器を擁せしめるか、人民に大統領を選擧せしめるかの共和政治主義に行くものと見なければならぬ。

渠も左の如きことは云つてゐる。

『近代デモクラシの下に於いては、一般民衆をして國政の樞機に參與せしむることは要求する所でない。只一般民衆の推戴すべき偉人を自ら定むることゝ、斯くして定めた偉人に……政治的機會均等主義を實現若しくは維持せんことを要求するものである。』

けれども、これだけでは、僕がさきに指摘した通り、吉野氏の所謂『少數の賢者が國を指導するのである』と大した相違がない上に、米國の共和政體にでも行はれてゐることではないか？　若宮氏の如

きはその『世界の煩悶』（中央公論一月號）に於いて徹底的に下の如く云つた、『若し世界の所謂民主的傾向が社會進化の必至の順序にして絶對的に成立するものであらば、共和的民國主義は軍國主義に對して絶對優越の地步を漸次に占めんとするの兆候を必らず露呈すべき筈ではないか？　而して現實上共和的民主主義の組織にして、偶發的成立の米國の外、一として世界に雄視するもの丶存ぜざるは、それ果して民國主義の本質をその側面より語るものと謂へぬであらうか？』

吉野氏や大山氏は表面では雄大な政論を發表するが、大抵は中途半端な學究的机上論であつて、世界の大勢と共に進んではゐない。その間に在つて社會學的政論家たる若宮氏のみは大勢の上からわが國の政治を見て、而も比較的實際に日本的な解釋を有してゐる。僕は渠に最も多くの望みを囑する一人だが、渠がまだ思想若しくは哲學に於いて根據の不確なことは、昨年十二月の「中央公論」に於いて論じて置いたから、玆には再び述べまい。兎に角、斯く新政論家側から多少でも思想界に切り込んで來た時代に當つて、初めから思想を取り扱つてたもの等がどう云ふ風に政論家どもに直接間接の應對をしたかを見るのは、一つの研究對照にならうと思はれる。これにも、場所がないから、たつた二人を引き出さうが――

大山氏が『國際道德は個人道德よりも劣等だ』と云つた時、僕はこれを否定して、個人間にも實力的征服が僞りなき愛でもあり道德でもあることを敎へた。姉崎博士は矢張り大山氏と違はない俗見を以つて、國際正義を力に依らないで解決できるかの如き言を爲した。（渠の『戰後の世界』）そして若宮氏

が『その歴史は帝國主義の記錄である』としたところの、米國の現大統領のおもて向きばかり正義人道を云つた演說をそのまゝに信用して、姉崎氏は愚かにも『アメリカの參戰に德義上の判斷、道德的情操が有力の力となつた』と云つた。けれども、渠はその德義とか道德とか云ふのが征服心に力づけられてこそ權威あることを知らなかつた。僕はこれを『日本主義』に於いて指摘したのだが、渠は今回その『人本主義の實行』(中央公論一月號)に於いて暗にこれに答へ、渠の所論を『單に外交政策の事と見た』ものは間違ひだと云つた。が、不敏ながらも僕等は渠から外交政策を聽かうとはしなかつた。國際正義は實力を伴はないで呑氣に主張することができぬと云ふ思想を敎へてやつたのだ。

渠はまた僕のやうなものを渠の『論旨の人本的根據を見ない人』とも云つた。では、渠の人本主義とはどんなものかと云ふに、いろ〳〵下手な云ひまわしをくどくした後に、『即ち、人生の本然に基いた本能の醇化を完成する爲めに、人民は自由を要求し、人格の尊嚴を主張し、個人の無盡藏を發展すべき機會を普く與へる社會組織を案出する』のだと。これをたとへそのまゝ信ずるとしても、戰前と戰後とに於いて何等の變つた刺戟にもならぬことではないか? 渠は無論『聖德太子の政治も此にあつた』とは云つてる。けれども、渠が人生(若しくは人性)の本然とか、本能の醇化とか、人民の自由とか、人格の尊嚴とか、個人の無盡藏とか云ふのは、いろんな主義や思想からの寄せ集めであつて、それ自づからに於いて渠の十分な說明や理會を運んでゐない。若宮氏が渠を以つて『米國の代辯者』と皮肉つたのは、何の爲めにあんなことを渠が云つてるのかも分らないからであらう。渠のあたまが惡い

のか、それとも渠の發想が下手なのか、僕等に分るところでは、渠は精神的方面に於ける物質主義者の一人であることだ。

僕等は戰爭を以つて決して物質的だとは見てゐない。人間の一元的內容の發揮だとする。けれども、渠は『野獸的還元』だと云つた。そこには別に非野獸的、乃ち、精神的向上を立してゐる。これ二元論であつて、渠の精神的と見做す方面をも別に物質化した所以ではないか？　かゝる不緊張な理論若しくは思想を以つて現代の發展的政治や實生活は論じられないのである。田中王堂氏は二元論的に立した精神方面を物質方面と同樣に別な物質的とする一人だ。が、なほ渠にも僕等から見ると不緊張な態度があるのを免れない。僕が若宮氏を渠と比較論評した時にも云つて置いたことだが、渠は表面では思想家としてなかなか堂々の陣を張る。これは吉野氏が法學者としてその論陣に堂々たると似てゐるが、後者に思想の實質が貧弱な如く、前者にも亦內容が實生活的に現はれて來ない。渠等は現代の議論がすべて論者の實生活でなければ權威がないことをも知つてゐない。

この點に至つては、三井氏や僕はたま〳〵政治や經濟や外交の問題に及んでも、自分等の實生活から踏み出すのである。外國にもかう云ふ說があるとか、外國では今かう云ふことになつてるとか云ふことはほんの參考に過ぎぬ。自分等は日本人としてどうすればいゝのだ、日本は日本としてどう云ふ生活をするかを直接の問題にしてゐる。政論家のうちでは若宮氏が大分この方に傾いてゐる。ところで、日本及び日本人の實生活問題としては、立憲君主制は動かすべからざる事實でもあり、主義でも

ある。他の國では君主制は人爲的であり、專斷壓制的であつたから、そこに對する反動的革命も必要であつたけれども、わが國ではこれを必要とする理由もない。

そして僕等の必要とすべきは、この國體と政體とに對して新時代に適合する解釋を與へることである。それには僕の所謂優強者の征服愛的哲理若しくは福音を以つてするのが一番適切であらう。我國民は愛を以つて征服することを個人間の最上道德として來た。わが國家は其表象として特別に世界に存在してゐるのである。從つて、他國に臨むには協同よりも征服的氣ぶんを以つてすべきだ。之が不正義どころではなく、却つてわが國民の使命として徹底した國際道德であり、世界的福音である。然るに、姉崎氏と共にかゝる問題には最低の常識しかない田中氏の『學問上の國民主義』（中央公論一月號を見よ）では『學問の系統は最も國民的のもの具體的のものを中心として國民的、具體的より、國際的普遍的へ』進むから、『他の一面に於いて國際的』だと云つた。こんな國民主義なら、矢張り、一國の內外を同等に對立させて、其內外の『協同』を云つてるにとゞまる。

ところが、僕等の主張と實行では、國の內外を各々獨立したものと見るのはうわつゝらの假定である。しツかりした外交家があつて自國をしよつて他國に臨む時、（但し英語や佛語で育つたわが國の腰ぬけ外交官は論外として）、他國の同等獨立を認めてかゝるのは單に辭禮の上のことであつて、實際には自國の獨立の爲めに他國を成るべく從へるべきものだとする。學問のことだけで云つても、如何に向ふが獨立して有する長所だからツて、それをそツくりこちらへは持つて來られまい。定見ある者で

ありさへすれば、必らず適當にこれを鹽梅しなければならぬ、そしてこの鹽梅は深ければ深いほど自國の爲めに他國を從屬視するものだ。詳しく云へば、他國の價値をその實質以下に見くびることではなく、從つてまた自國をその實價以上に買ひかぶることではなく、他國と自國との實價を突き合はせつゝ而もそれ以上に自國を行かせようとする努力的見地の展開である。

この見地は內外政治上の征服的事實と努力とにも流用されるものである。そしてこれがさきに擧げた二條件を完成するものだ。田中氏も吉野氏も、姉崎氏も大山氏も、こゝまでの實生活的洞察を以つてゐないのを僕は遺憾に思ふ。そしてこれを主張、實行しつゝあるものは僕等の日本主義であることを最後に云ひ添へて置く。（大正七年二月）

充實せぬ新作と俳優今後の努力

苟くも創作家を以つて任ずるものの脚本であるならば、その創作家的脚本（從來の習慣を脫しない座つき作者らのそれとは區別して）たるべき條件には十分の了解と體現とがなければならぬ。が、久米氏今回のを觀ては、渠がまだそこに達する用意も素養もない人であることが分つた。案外にまだ舊式で低級な作家であることがだ。

たとへば、三幕目がおひでの身の上に對して、可成り緊張した注意を引くやうに終はらせてゐなが

らおひでが幕切れの獨語に於いて却つてその折角の緊張を破つてしまつた。たゞ筋を運んで貰つたらいいだけの一般見物にはそれでもよからう。然し、多少の專門的、藝術的な見かたを以つてするものには、あれではよく云つても沙翁時代の舊式技巧の應用に終はつてしまう。近代的藝術が要求する含蓄狀態をわざわざへたに破壞するものである。あすこはおひでが利く方の手で以つてをつとがゐいで行つた羽織りを默つてたゝむだけでいゝのであつた。

次ぎに、たとへば、四幕目でおひでが鐵道往生をしたあとで社長が登場した時、職工長寅治とのあひだに勞働問題のことを云はせる。この云はせるのは決して惡いことはないが、作者の概念として餘りに飛び出してゐて、その兩人の生活その物の板に乘つてゐない恨みがあつた。乃ち、その場に必要な具現的内容の披瀝ではなしに、作者の概念に應じた言葉その物だけが聽かれるばかりであつた。これも作家の作家たる根本的素養を疑はしめる重大問題だ。

それから、おひでの死を筋にたより過ぎて安直に來たらしめた嫌ひがあつたのも、二幕目に於ける滑稽なほど感傷的な結婚約束の運びと共に作家の素養を高級藝術の標準よりニキビ文學の方へ引き下げたわけである。

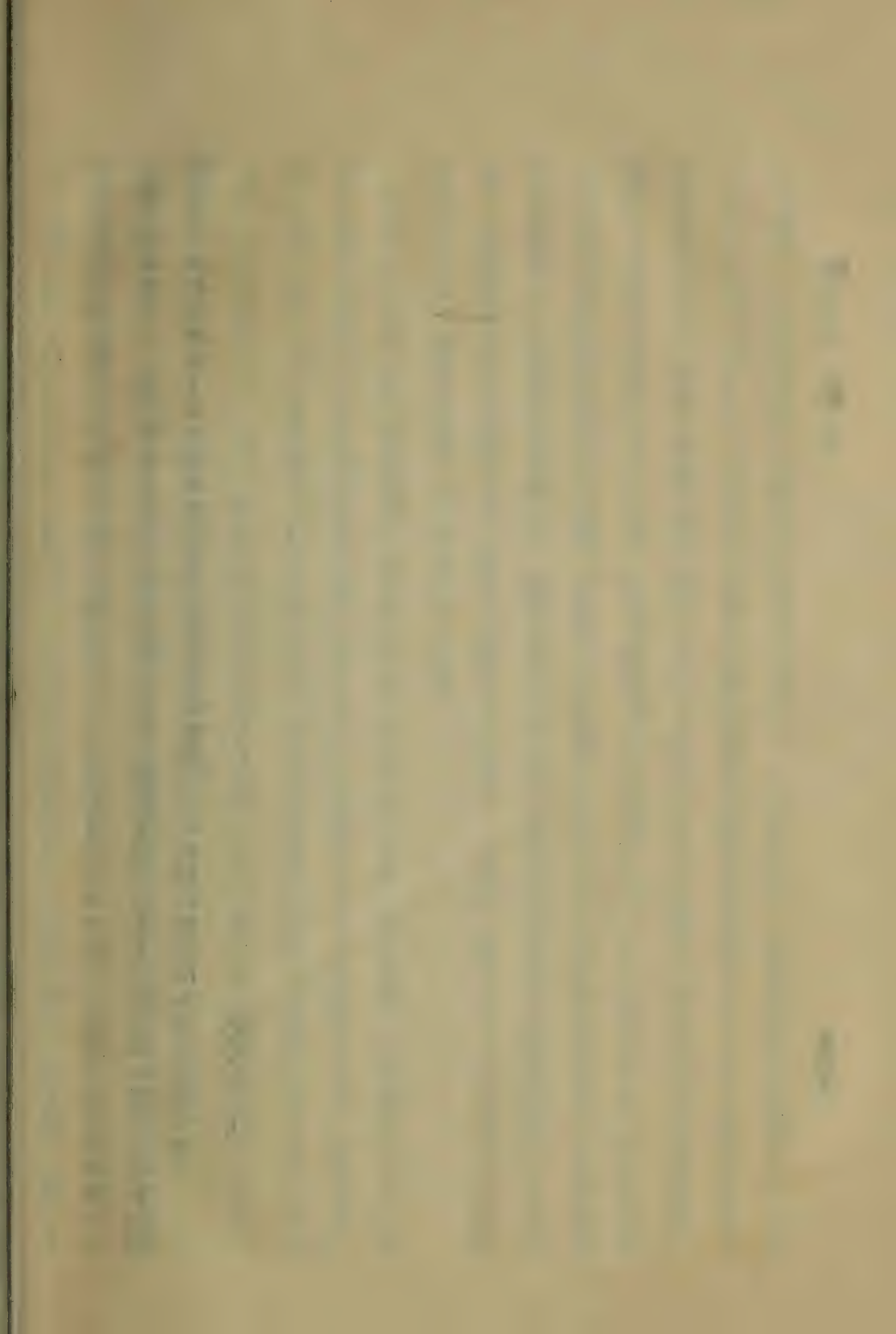
然し、僕らの見かたをもずツと引き下げて云へば、この脚本は相當に舞臺技巧には備はつたところがあつたらう。そして久米氏自身もここに安心してゐるのだらうと思はれる。(あぶない又情けない安心と思はれるが――)

今度は、この作を再現した藝の方から云つて見ると、この作を與へるには氣の毒なほど進んでるありさまであつた。少くとも、幸四郎と勘彌との藝は概念的作家がその云はせようとする言葉だけを具現なしに（云はゞ、言葉の背景不足に）聽かせるやうな程度のものではない。僕らがいろんな新劇團に現はれる俳優どもに感心しないのは、藝が不熟な爲めには相違ないが、その不熟は何から來るかと云へば、概念作家の概念的言葉と同樣、背景なしの表面藝しか見せようと努めない爲めだ。こゝで云ふ藝の背景若しくは背景のある藝とは、舞臺に於いて時々刻々にその持ち役たる人物を忘れないことである。言葉の添ふ時は勿論のこと、添はない時でも、自分の一擧一動、詳しく云へば自分のする呼吸にも、その役の心持ちを現はしてゐることである。

半ば物好きに現はれる新劇俳優には言葉と共にでもそれができにくいのだが、今回國分寅治や三浦淳吉に扮したものらにはそれができてゐた。少くとも、それができるやうに努めてゐた。缺點を云へば、勘彌のはそれがこまか過ぎてわざとめいたが、幸四郎の三幕目におひでと社長の宅に會つた時などは、その出からして、もう、その人物とその位置とを見せてゐた。斯う云ふ俳優どもには、もツと藝術的な作を敎へ強いても望みがあらうと賴母しかつた。

なほついでに云ふと、作者久米氏の餘り感服できない感傷癖は、三幕目に於けるおひでの泣かせと四幕目の勞働問題提出とに最も多分に現はれた。そして後者は理論的感傷で、前者は感情的感傷だと云ふ臨時的區別も附ければ附けられるが、この感情的感傷を作者の注文通り現はすには菊江の藝は丁

度その程度を得てゐたのであらうか？　而もなか〳〵努めたものであつた。二三度もがツくりをつとの膝に顏を落して、肩でいきをしつゝ泣いた。それを二階から見てゐると、後ろ襟の奧までもお白粉をぬつてるのがだらしなく見えて、そのだらしなさが却つてその場の感じにふさはしかつた。

（大正八年二月）

公開狀

教師なる外國宣教師へ（英文省略）

東京、千九百〇六年、五月十日。

親愛なる教授――よ。

お互ひに久しくお目にかゝりません。最近に上野の會でお目にかゝつたのは嬉しくありました。あなたと押川氏とのお話を聽き、まさに涙もこぼれんばかりでしたのは、僕の過去の學校生活が僕に思ひ出されて、十年以上も立つた今日、不思議にあまいゆふだちのやうでしたから。

僕は十年前に東北學院を去つてから、隨分悲慘な生活をして來ました、若し『悲慘』と云ふ語を用ゐることができるなら――身體上並に精神上の經驗に於いてゞす。が、僕はどんな友人にも恩人にも訴へませんでした、否、神にも。蓋し僕のあたまには、もう、形式上の宗教力などは存じてゐませんでした。この心狀は僕があなたのカレヂにゐる間に初まり、その後僕の生活その物になつて前の耶蘇教的信仰をぶツつぶしました。その信仰は僕の少年として泰西學館（大阪）に學んでた時に求め得たのでありましたけれども。僕には今所謂宗教なる物はありません、が、詩に於いて僕は永遠の生命と

慰藉とを呼吸してゐます。この狀態をあなたは一種の內部的、眞生命の信仰と呼んでもかまひません が、この傾向は僕には耶蘇教でも、佛教でも、その他の既成宗教でもありません。僕の以前の宗教的 熱心(僕の以前の野心は新らしい最も現實的な、最も眞摯な宗教を僕自身の洞察によつて建設するに ありました)は、僕の深く掘つたる心に移植されて詩の熱心となりました。かう云ふのを僕に許して 下さい。そして、それが僕を導いてわが國の新らしく發展する國民的、同時に世界的、文學に於ける 一黑影にならせました。

日本では、新宗教が發足する傾向になつてると同時に、わが日本文學がどの外國のそれにも遙かに 勝るところの新らしい國民的組織を得ようとして來ました。シエキスピア、ゲイテ、並にダンテのみ ならず、ブラウニング、ポウ、イブセン、ストリンドベルグ、ダンヌンチオ、メテルリンク、並にハ ウプトマンも、僕等の一部なる文學的範圍では消化されました。そして僕等は、たとへ狹い友人同志 の間にせよ 歐洲文學界の潮流以上を行つてます、あなた、乃ち、僕の以前の教師は、これを知れば 喜ぶでしよう、たとへ手を携へて耶蘇教のことには行けませんが。

或宣教師どもはその教會から會員を多く失ふのを殘念がりますが、失はれたものが皆サタンの手に 落ちるのではありません。その十中の九は新信仰と新立脚地とを得て、實際に僕等の間でわが國の爲 めに働いてゐます。この點に於いて、耶蘇教師どもはその神に感謝すべきであつて、この內部的精神的 事實を看過してはなりません、背教ではありましようが、賢明た外國人どもが屢々考へるやうな墮落

ではありません。蓋し渠等外國人どもは心靈の事に無邪氣な思ひ違ひをしてゐて、形式上の信仰と國民的若しくは個人的生活との間を見分けることができないのです。渠等は世界的過ぎ、形式的過ぎて內部の赤裸々の眞理を考へ切れないのです。日本は三千年の歷史を有し、またすべて外國の物でも善良で合理的なのはこれを消化する力をも持つてゐます。

僕等が精神的であり聰明であることはどんな外國人、殊に外國傳道者等の豫期以上であるのです。僕等が佛敎を信じないのは非宗敎的な爲めではありません。そして僕等が耶蘇敎をその形式的な信仰で受けないのは非文明の爲めではありません。蓋し僕等は僕等自身に於いてもツと國民的な、もツと深い生活を持つてます。僕等の文學に於いても同樣です。僕は記憶に於いて一度耶蘇敎徒であつたことを感謝しますが、今宗敎の事に無頓着なのを後悔しません。僕は一詩人としてわが國の深い胸に呼吸することを願ふ者です。そして若し誰れかゞ僕の詩に一宗敎を發見するなら、それは所謂耶蘇敎や佛敎でなく、僕自身の獨自の信仰です。

僕等が仙臺で相別れましてから、今までに僕が困苦のうちに於いて公けにしたのは五冊の詩集並に脚本です。それから一篇の長い論文で、宗敎、哲學、並に文學に關する『神祕的半獸主義』と云ふのを今月東京で出します。これは特に舊形式の宗敎や哲學を脫した新來の文藝論です。また、一昨年から僕にホメロスをその希臘原文から譯してゐます。

以上はあなたに對する僕の告白と見て貰ひたいのです、いつかは仙臺に行き、あなたや舊學友ども

に、會ふ考へを持つてるのですから。そしてその時には、僕が一部の弱い意志の人々の如く僞つて耶蘇信徒らしく見せたくないから。けれども、僕のあなた並に舊友に對する尊敬は變はつてゐません。あなたが僕を最近の會合でおぼえてゐられたと同樣に。

僕はあの會合の時あなたともツと語りたかつたのですが、ヨネ野口氏――これも御存じの通り詩人です――を訪ねる約束があつたのでした。で、こゝにこの長い手紙をさし上げます。

どうか夫人並に僕の舊友諸君にもよろしく。

岩野美衞

大倉喜八郎氏へ

大倉喜八郎さん

御免を被つて僕は今あなたに一言を呈します。これは或雜誌の計劃として依賴されたもので、然し實はその雜誌の方では僕に文學博士井上哲次郎さんへの公開狀を引き受けて呉れろと云つて來たのです。僕が文藝ばかりで無く、哲學並に思索の方面にも關係があるから、同誌の依賴はそれが適當であつたかも知れません。が、僕には、もう今更ら井上さんのやうな時代後れな學者（と云つても、事情にばかりからんだ官學者です）を相手にしたくなかつたので一言のもとに斷りました。すると、また折り返して、では德富（蘇）、三宅（雄）森（鷗）、坪内（雄）と云ふやうな諸氏にでもいいからと賴んで來ました。それも氣に向かなかつたので、同誌の意志には少し反してゐるかも知れませんが、一つ

あなたを目あてにすることに致しました。ところが、その雜誌は今回の世界的戰爭が初まつた爲めに各方面への公開狀計劃を中止したので、僕の原稿も不用になりました。で、今回、それを單獨でこの雜誌に公表することに致しました。

交際範圍の狹い僕には、名ある實業家でその馬車の上から僕に挨拶した人はあなただけです。それも僕を當代の一思索家若しくは一文藝家としてでは無く、あなたの御自慢の學校の一敎師（であつたこともあるから）としてでした。話せば、あなたも思ひ出せるでしやうが、いつか、その學校の關係者等があなたのお宅に招待された時、男爵の末松さんが、自分は誤つて文學博士にされたが本來は法學博士を貰ふべきであつたと云つた。この時、穗積（陳）博士が横あひから口を出し、お世辭にだらうが、佛蘭西のヂルテイヤが丁度それと反對のことを云つた、自分は政治家だが世間は自分を文學者にしてたゐると、附け加へた。すると、『ヂルテイヤと云ふ人はえらい人で』と、あなたはその尻馬に乘りました、丁度あなたが世界漫遊から歸つたところでしたからでしよう、『私はあの人の墓へも行つて來ました。』

この時僕は盃を手にしながら、ポンチ畫の三幅對を見せられた氣がしました。然しあなたは別に學問をした人でも無いから――これは然し大した失禮の云ひ分ではありますまい――そんな人々からの聽き學問であなたの生活の半分は生きてゐるのでせう。それを思ふと、あなたなどは精神上では、實にあはれな貧しい人の仲間です。人間と云ふものは如何に金や表面上の事業が出來ても徒らに男優な

どを買つていい氣になつてる人ども（あなたのお孃さんがたもさうであつたと云ふ噂だけは聽いてゐますが）などでない以上は、それだけで滿足出來ないのは事實です。何か外に精神上の落ち付き所若しくは慰安を求め出します。そしてそれにも多くの段階と高下とがあります。

あなたは實業上には、實に老いてます〳〵盛んなほど奮鬪的な人です。が、あなたの精神上の貧弱若しくは空虛をあなたは先づ何で埋め合はせをしようとし出したか、少し靜かに考へて御覧なさい。あなたが自分の金で勝手に自分の立派な邸宅を建てるのには、人も何も故障を云ふ權利もゆかりもありません。然しそれがかの男爵を豫期しての用意であつたと云はれるに至つては、そこにも氣の毒な感じを懷くのはこちらの自由です。長らく御用商人を勤めたつてを辿つて、某元老から授爵の奏上をさせたところ、先帝から『出陣軍人の鑵詰に石を入れた者は誰れだ』と云はれたと云ふ話は、恐らく、あなたには大した痛痒にもなつてゐますまい、なほ、『やがては』と云ふやうなあなたの奮鬪心が――安價な奮鬪心だが――そんな場合にも應用されてゐたでしよう。あなたよりも內心はもツと下劣な人でも華族になつてゐるのもありましようから、それも結構な御志望でしよう。

次ぎに、あなたは罪ほろぼしの格で東京、大阪並に京城に商業學校を建てました。如何にあなたがたつて現金を揃へてから設立をしたのでは無い、その目的でわざ〳〵別に金を儲けながら、段々に二十萬も三十萬もの基本金を拵らへたのだからと云つて賞嘆するのは、あなたと同國の友人であなたの提燈持ちなる石黑男爵ばかりでは無いかも知れません。然しそれは別に教育を本統に重んじたからとは

取れません。あなたが若したとへば大倉組の外にまた別な會社を獨力で建てる必要があつたとしても、そして――それが一例にだが――泥棒の目的にだとしても、矢ツ張り、あなたはそれだけの奮發をして金を拵らへるでしよう。精神に不潔な分子があれば、つまり表面はどんなにいいことをしても、決して助かりません。

明治の一時期なる西洋崇拜時代からして、わが國にも公共の爲めの出金が名譽の一つになりましたが、それがもう、その事情に幾變遷かがありました。僕等から見ても最も下だらないと思はれた赤十字や慈善會への大寄附をしてその終身社員になつたり、或はその會の發起人に名を列ねたりして喜んだ時代は、もう、早く過ぎてしまつたでしよう。また、海防のことしか世間の問題にのぼらなかつた時に、多大の海防費を出して勳章と交換して貰つたことも、もう、舊いことです。何か違つたことにと考へて、多少でもその金を教育事業に割り當てた人のうちでは、あなたの思ひ付きが人よりも隨分早かつたのは事實ですが。わが國人が一般に內容の如何もよく知らないでただ教育萬能病に罹つてゐた時代だから、あなたとしては一番よく人の目の付く事を撰んだわけでしたらう。その後、大阪の岩本榮之助とか云ふ人は、あなたの學校よりももツと大阪人の目に付く事をと云つて、百萬圓で公會堂を建てることにしました。そして彼は、その公會堂がまだ出來ないうちから、目的通りの壺にはまつて、大した人物でもない者が殆ど一足飛びに、大阪だけではですが、えらい人の一人になり澄ましてゐます。近頃では、また森村氏と澁澤氏とが三十萬圓を出して、自助會とか云ふものを組織させるさうで

す。どうせ老人どもの行きがけの駄賃に、後生を願ふつもりで、淺薄な意味の道德振興の爲めとか何とか云ふ結構な名義が付くのでしようが、それにしても、あの二氏になると、どこと無く、人物の上ではあなたより上品な思ひ切りがあるやうです。

あなたは御用商人として、政府と人民との間に立ち、隨分いかがはしい無理をやつて來た人です。その罪ほろぼしに教育事業に金を投じたと云ふだけなら、まだしも正直に愛らしいところがあつたと云へませう。また、あなたをいい方に解釋すると、最初は全くそのつもりであつたとも云へましよう。然し天秤棒あがりの無學凡俗なあなたには、やがて、それにも多くの未練が出たやうです。それに依つてかの男爵志望の復活をさせたことが一つ。然しこれは再び駄目になつたが、その代り勳三等の桐花章か何かを貰つた。すべての學校に會社か商會かの如く、自分の名を冠せしめたことが一つ。眞實の寄附若しくは獻金なら、無條件を本質とすべきだ。最近に米國から無名で十萬圓の寄附がわが國の飛行器界に飛んで來たのでも分るだらう。然るに、あなたは全體でたつた七八十萬の金をわざ〳〵三口にも分ち、その教育的應用に一々あなたの名を廣告したばかりで無く、それを鼻にかけて他の似寄つた性質の寄附金を斷はる口實としてゐる。早稻田大學基金の大募集があつた時にも、大隈伯に同じ手を喰はしたので、伯はお前の學校とは規模も性質も違ふと怒つたと云ふ話があります。

それにあなたの學校の所在地、殊に東京にあるのは、公共の爲めと云ふ名義で政府から例外に安く拂ひ渡して貰つた物です。それをあなたは立派な時價を以て利用する爲め、學舍をどこか地面が安い

郊外へ移さうとしてゐると云はれてゐます。若しさうなら、あなたは、前節來の理由をも加へてだが、世間體のいい敎育事業を看板にして、二重にも三重にも、多少商賣離れのした方面に於ても矢ツ張り、商人根性からだけで、うまい取り引きをしてゐるに過ぎない人です。若し金錢上のこと以外に於て、あなたが多少わが國に貢獻したと思つてゐるなら、それは今までのところ、ほんのあなたの無反省から來た僭越なのです。あなたは矢ツ張り、金だけを儲け金だけを適宜に寄附して、その餘暇には、あなたの今でもの事實通りお手習ひでもしてゐたらいいのでしよう。

多少にも高尙がつて、――今の殆ど無學から成り上つた實業的成功者等と同樣、――もツとずツと廣い深い修養や思索から來たるべき要求が必要となつた敎育、道德、思想等の方面に口ばしを入れて見ようとするなら、全くあなたがたの今までの態度を、精神の根本から、一新しなければ駄目です。如何にあなたよりも上品で、あなたよりも社會的には多少價打ちのある澁澤氏や森村氏でも、この方面では御安心なさい、矢ツ張り、あなたと大して違つてゐないのです。表面で澄まし込んでゐる時と裏面でやつてる事とが一致しないなど云ふことは――實は、この言行一致が新時代の人々の深い生活になるのですが――どうせ、あなたがたのやうに末の短い人々には分るだけの特殊經驗がありますまいし、また說明してあげれば多少分るとしても、さう云ふ道に就けと僕等が眞面目にあなたがたを責め立てるにも及ばないと思ひます。その代り、さう云ふ方面では、簡單に云へば、利いた風なことは云ふなとお勸めします。如何に大金を喜捨したからツて、この新時代に旺溢して來た正當な新精神をあ

なたがたの持つてるやうな舊式觀念、過去の形式に跡もどりさせることは出來ないのです。

何だかあなただけに關して云ふべき筈が、横みちへそれたやうですが、まア、今少し聽いて貰ひましよう。金、金とばかり云つてゐた實業界に、近頃では、道德や宗教のことが云はれるやうになつたは事實です。これは不思議でも何でもありません。僕等から見れば、これまでに云はなかつたのが寧ろあなたがたの社會の變則でした。云ひ換へれば、わが國の實業界は變則に、片輪に、發達して來たのです。そしてその片輪の最も模範的代表者はあなたがたです。そしてまたあなたがたは金も出來、年も取り過ぎてゐるので、その片輪は所詮直りません。また、直す必要もないのでしよう。から申しますと、あなたがたは躍起となつて、いや、今でも若いものに負けないやうに奮發して見せると云ふでしよう。が、それは、もう、あたまの遲鈍に固定した奥から出る最上のお世辭に過ぎないのです。どうせ、精神上の痼疾者から、眞の奮發が出よう筈がありません。たとへば、一生を無信仰で過ごした者――凡俗な信仰の要不要は別問題として――が、死期の近づくを覺つて、急に望みが薄らぎ、急に念佛を唱へるやうになつた格です。わが實業界の代表者側には、殊に森村氏や澁澤氏の間に、おかど違ひの宗教などが尤もらしく云はれるのは、僕から見れば、滑稽にも一方にこのお世辭、また一方にはこの念佛たるに過ぎないのです。そんな物を以て、あなたがたが臆面も無く、あなたがたのやうな片輪でもない新時代のいい風潮に臨まうとするのは、――殊にこの風潮に反對じみた言動を見せるのは、――却つて僕等の迷惑とするところです。これは無論僕等新時代者の方があなたがたよりは一

層眞面目で、一層深い思索と實行とをしてゐる立ち場から云ふのです。

態度を一新しなければ、僕が申したことは結局あなたがたには出來ない相談になりましよう。再びあなただけに向ふことにしますが、實例を以て云へば、最も卑近な敎育問題に於ても、あなたはあきらかに時代後れの考へしか無かつたやうです。そしてあなたの周圍の人々には石黑氏や末松、穗積氏を初めとして、そのお考へを注意訂正して見せるだけの勇氣も見識も無かつたやうです。たとへば、あなたはよく、會社などに使はれるものは學問よりも經驗を積ませる方がいいと云ひます。それは、然し、あなた方のやうに天秤棒から、無學な經驗ばかりに賴つて來た人々の下に使はれてゐればこそで、――もツと廣く觀察すると、現代の實業界に於て實際に諸會社、諸商會の內部を切りまわしてゐる若手は、若しくはその望みあるものは、殆どすべて無學な經驗家では無く、寧ろ大倉商業學校程度以上の學歷若しくはそれ以上の自修的素養を持つてゐます。そして渠等は從來の舊式な重役連に對して、その無學と無見識と眞に人を見る眼がないのとを、各會社で、また實業的社會の上で、こぼしてゐます。

學歷若しくは素要ある四十歲前後の人々は、殊に政治界や實業界に於ては、まだ若手に相違ないが、渠等の考へも働きもあなたがたのよりはずツと違つてゐる。また、違はないではゐられないやうに、新時勢が渠等を眞面目にさせるのであります。然しあなたは立派な實業界の大立物の一人でありながら、この實業界の新形勢をさへも分つてゐないのです。つまり、あなたのやうな舊見に贊成してゐるものは、あなたの交際範圍に於て若しくはあなたの相談相手として、あなたのやうな舊見を司じやう

に持つてゐる人々ばかりになつたのを、おろかにも、御存じないのです。

あなた方は本職の實業界に關することにさへ、前節の一例を見ても、もう時代に後れて他の方面に於ける無學と同樣になつてゐるのです。卑近な教育に關しても、學校を持つてると云ふだけです。いや、學校に金を出したと云ふだけです。斯う僕が云つて來たことを、若しあなたが胸に手を當てて、眞實に考へるだけの暇が一時間でもあつたら、とても男爵は得られないか知らんとがツかりしたその時の失望よりも一層重い、一層深い、同時にまた一層眞面目な寂しさを感ずる筈です。人間はこの寂しさに思想上精神上の富を滿たせば滿たすほど、片輪の域を去つて、眞人間に近くなるのです。あなたには、然し、そんな暇がこれまでに可なりあつたとは思へません。そして實業家だからツて、そんな暇があつたもの、また無ければそれを拵らへたものは、外國のことを見れば澤山あります。わが國にも、探せば必らず出て來るだらうと思はれます。兎に角あなただけは、如何にしても、そんな立派なところが無かつた人です。

然しあなたもたまには、自分の精神上の貧弱や心細さを感じて、何とかしたいと思つたこともあると見え、――そこが人間として最も大切な發足點ですが、――時々、殊勝にも、哲學のことを聽きに、井上哲次郎氏などのところへ行つたと云ふことを僕は伺ひました。ところがこれがまたさきの三幅對の滑稽にも勝つた滑稽です。僕が公開狀の相手に井上氏を斷つてあなたを取る方が面白からうと考へたのも、多少それを思ひ出したからです。あなたは大々的な御用商人です。井上博士はまた大々的な

御用學者です。大々的な御用商人と御用學者！　この會見相撲の結果は、考への範圍の狹いあなた御自身には、實際のところがお分りにならなかつたでしよう。が、井上氏は丁度、あなたが時の政府に上手に取り入つたやうに、渠も亦時の政府の政略にお邪魔をするやうな哲學を曾て主張したことも無い無危險な好人物です。僕等は、もう、昔から、渠は賴母しくもない看板學者に過ぎないと見限つてゐました。同じ御用を勤めても、位階や學位や學閥の奴隷になつてる人よりも、多少中實になる金錢を澤山儲けさせて貰つたあなたの方が寧ろえらかつたのです。同時に、たとへあなたと渠とが會見したところで、同志打ちでなければ、また何か卑劣な動機からの妥協しか成り立たない筈ではありませんか？

あなたは大身代になるまでも、またなつた後も、とても眞人間になる素因がなかつたのでしよう。あなたとしての一生の奮鬪目的が、結果から見れば、出來ない相談の男爵であつた如く、あなたが偶に起した眞人間の志望も、たゞ看板を賣るだけの虛僞學者訪問に終つたのであります。その結果を强いて云へば、あなたは、渠の虛僞と手段との學問を以つて、あなたの無學と罪業とを是認して貰つたに過ぎないのです。そして、もう、そのうちには、あなたも——例の片輪、精神的貧乏人として——おめでたくなる時が近づいてゐます。

あなたにして、若しなほ眞實に罪ほろぼしがしたければ、または眞實に何かいい事がしたければ、今のうちなら、まだ間に合はないことは無い。それもあなたの人物その物から變はることは、望んでも、とても駄目でしようから、いのちのある間は身にも就いてる金錢上、並に金錢の勢力が及んでる

上のことで、先づ、あなたの諸學校をもツとよく新時代を理解した人々に渡しておしまひなさい。それから、見かけ倒しの看板學者連の意見などに依らないで、望みある文藝家、政治家、宗教家若しくはその他の個人（いづれも團體ではない）を幾人か選んで貰つて、その保護なり養成なりをして御覽なさい。もう、さう金を取り込むことばかりしなくてもいいでしようから。さう云ふことがいやなら、いい加減に家族以外にも關する遺言狀を認め、その中に無條件であなたの財産の大部分を何かの――然し實業以外の――事業に寄附することを書き入れて置けばいいでしよう。ここに實業をわざと取り除いたのは、あなたがさんぐ＼如何はしいことをした畑を、出來るだけ、聯想させない爲めの注意です。あなたがたの問題は金より外にありません。つまり、誠意ある寄附または喜捨の外に、あなたがたは金の範圍を越える資格はありません。そして罪ほろぼしや善事をするにも、あなたがたは何も出來ない人々です。そしてそれは一の結構なことになりますから。

いろんなことを申しましたが、要領は、森村氏や澁澤氏にも同じく云ひたいことで、――あなたがたは、近頃、全體、專門以外に渡つて、淺薄、狹隘、低級の先入見や聞き學問を以て、姉崎博士を初め、大學の御用學者やその亞流と共になつて、僕等現代人の行かうとする正當な新道を塞ぎ遮ぎる傾向を示して來たが、少くとも、そんな迷惑だけはして吳れるなと云ふのです。と同時に、若し名譽上若しくは念佛を云ひたさに喜捨がしたければ、もツと眼を開いて、もツと有意義にせよと云ふのです。以上　（大正三年）

泡鳴全集第十八卷終

大正十一年七月十五日印刷
大正十一年七月十八日發行

泡鳴全集　第十八卷
（非賣品）

佃製本

著作者　岩野美衞

國民圖書株式會社代表者
發行者　中塚榮次郎
東京市麹町區内幸町一丁目六番地

印刷者　長谷川美鷹
東京市麹町區山元町二丁目十四番地

印刷所　國民圖書株式會社

發行所
東京市麹町區内幸町一丁目六番地
國民圖書株式會社
電話銀座七八三番
振替東京五二二九八番